有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ
蒲船津西ノ内遺跡
蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

２０１２

九州歴史資料館

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ
蒲船津西ノ内遺跡
蒲船津水町遺跡

福岡県柳川市大字矢加部・蒲船津所在遺跡の調査

1．矢加部町屋敷遺跡遠景
（北上空から）

66図8

2．矢加部町屋敷遺跡５次調査
出土手形付摺鉢

49図12　49図17　49図20

49図16　49図21　49図42

3．矢加部町屋敷遺跡５次調査
出土漆器

序

福岡県では、平成14年度から国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所の委託を受けて、有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

本報告書は平成16・18・19年度にかけて行った、福岡県柳川市大字矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡、大字蒲船津に所在する矢加部町蒲船津西ノ内遺跡･蒲船津水町遺跡の記録で、矢加部町屋敷遺跡の調査報告としては４冊目になります。

矢加部町屋敷遺跡は江戸時代の街道である「久留米柳川往還道」沿いに位置しており、本書に報告した調査区では久留米柳川街道の東側溝の南側が発見されました。このほかにも、明治期に排水用の土管が使用されていることや、大正期まで鋳物師が存在していたことが明らかになりました。蒲船津西ノ内遺跡は中世後期の集落跡であり、蒲船津城との関係が想定されます。蒲船津水町遺跡では平安時代前期の多くの墨書土器が発見され、蒲船津地区の重要な場所であったことがわかりました。

今回の調査ではこのように矢加部・蒲船津両集落の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。本書が文化財保護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成に当たりましては、関係諸機関や地元を始めとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

平成24年３月31日

九州歴史資料館
館長　西谷　正

例 言

1．本書は有明海沿岸道路建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県柳川市大字町屋敷に所在する矢加部町屋敷遺跡と、大字蒲船津に所在する蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡の記録で、有明海沿岸道路建設関係埋蔵文化財調査報告では第12集に当る。矢加部町屋敷遺跡調査報告書としては第４冊目であり、本書では５次調査区の遺物と１次調査の遺構・遺物を報告する。

2．本遺跡の発掘調査・整理報告は国土交通省九州整備局福岡国道事務所の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課・九州歴史資料館が実施した。

3．本書所収遺跡は有明海沿岸道路調査地点の第11･16･17地点にあたる。

4．本書に掲載した遺構写真は、矢加部町屋敷遺跡については秦憲二が、蒲船津西ノ内遺跡については進村真之が、蒲船津水町遺跡については小川泰樹が撮影した。なお、空中写真は矢加部町屋敷遺跡・蒲船津西ノ内遺跡については九州航空株式会社に、蒲船津水町遺跡は(株)東亜航空技研に委託した。出土遺物については九州歴史資料館北岡伸一が撮影した。

5．本書に掲載した遺構図は秦・進村・小川が作成し、発掘作業員が補助した。

6．出土遺物の整理作業は、福岡県教育庁総務部文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、濱田信也･新原正典･小池史哲の下に実施した。

7．出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館に保管している。

8．本書に使用した分布図は国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「羽犬塚」を改変したものである。本書に掲載した遺構図の方位は全て日本座標の座標北(G.N.)である。

9．平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改変のため、九州歴史資料館に移管された。

10．Ⅲ－４の自然科学分析は赤色顔料分析については九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤和歳が行い、骨貝種子同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

11．Ｘ線ＣＴスキャンは図版１については九州国立博物館で、図版20については九州歴史資料館で実施した。

12．本書は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－１～３を秦が、Ⅲ－４を九州歴史資料館文化財調査室保存管理班加藤とパリノ・サーヴェイ株式会社佐々木由香・バンダリ　スダルシャン・中村賢太郎が、Ⅲ－５を進村が、Ⅲ－６を小川が執筆し、 編集は各執筆者の協力を得て秦が行った。

目次

序
例言
目次
図版目次
挿図目次

Ⅰ．はじめに…… 1
　1．調査の経過…… 1
　2．調査の組織…… 4
Ⅱ．位置と環境…… 6
Ⅲ．調査の内容…… 9
　1．矢加部町屋敷遺跡５次調査の出土遺物…… 9
　2．矢加部町屋敷遺跡１次調査…… 86
　3．矢加部町屋敷遺跡のまとめ…… 201
　4．矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析…… 217
　5．蒲船津西ノ内遺跡…… 231
　6．蒲船津水町遺跡…… 239

図版目次

巻頭図版１　１．矢加部町屋敷遺跡遠景(北上空から)
　　２．矢加部町屋敷遺跡５次調査出土手形付摺鉢
　　３．矢加部町屋敷遺跡５次調査出土漆器
図版１　５次調査出土土器・陶磁器
図版２　５次調査出土土器・陶磁器・土製品
図版３　５次調査出土瓦・石製品
図版４　５次調査出土金属製品
図版５　５次調査出土金属製品・ガラス製品・木製品
図版６　５次調査出土木製品１
図版７　５次調査出土木製品２
図版８　５次調査出土木製品３
図版９　５次調査出土木製品４
図版10　５次調査出土木製品５
図版11　１．矢加部町屋敷遺跡遠景(西上空から)　２．１次調査区全景(上空から)
図版12　１．１号土坑(北東から)　２．３号土坑(南東から)
　　３．４・33号土坑(北から)　４．４号土坑遺物出土状態(西から)
　　５．６号土坑(東から)　６．７号土坑(南東から)
　　７．８号土坑(西から)　８．９号土坑(北東から)
　　９．11・22号土坑(北から)　10．12号土坑(北東から)
図版13　１．15・19・41号土坑(南から)　２．16号土坑(南西から)
　　３．16・17号土坑(北東から)　４．21号土坑(北東から)

	５．23・25号土坑(南東から)	６．23号土坑遺物出土状態(北西から)
	７．27号土坑(北から)	８．28・35号土坑・１号井戸(西から)
図版14	１．30・39号土坑(北西から)	２．31・36号土坑(西から)
	３．32号土坑(南西から)	４．34号土坑(南から)
	５．41号土坑(南西から)	６．37号土坑(南西から)
	７．２号廃棄土坑(南西から)	８．１号大土坑(北西から)
図版15	１．３号大土坑(北から)	２．４号大土坑(南から)
	３．２号大溝排水管(南西から)	４．同上(西から)
	５．１・2号埋甕(南西から)	６．３号埋甕(南から)
	７．４号埋甕(西から)	８．５号埋甕(北東から)
	９．６号埋甕(西から)	10．７号埋甕(南から)
	11．８号埋甕(南から)	12．９号埋甕(北から)
図版16	１次調査出土土器・陶磁器	
図版17	１次調査出土陶磁器	
図版18	１次調査出土瓦	
図版19	１次調査出土土・金属・鹿角・貝製品	
図版20	１次調査出土石製品・鋳型	
図版21	１次調査出土ガラス・木製品	
図版22	１次調査出土木製品１	
図版23	１次調査出土木製品２	
図版24	１次調査出土木製品３	
図版25	１．蒲船津西ノ内遺跡全景(西から)	２．同上全景(北から)
図版26	１．１号土坑(東から)	２．２号土坑(南から)
	３．灰だまり(南から)	
図版27	１．１号溝状遺構(東から)	２．１号溝状遺構(西から)
	３．２号溝状遺構(南から)	
図版28	１．２号溝状遺構(南から)	２．西壁土層(東から)
	３．西壁土層(東から)	
図版29	１．トレンチ(北東から)	２．トレンチ(南から)
	３．全景(南東から)	
図版30	１号土坑、２号溝状遺構、遺構面出土土器	
図版31	１．蒲船津水町遺跡全景(北上空から)	２．同上全景(上空から)
図版32	１．１号土坑(西から)	２．２号土坑(南から)
	３．３号土坑(南から)	
図版33	１．４号土坑(北から)	２．５号土坑(西から)
	３．６号土坑土層(北西から)	
図版34	１．6号土坑(西から)	２．7号土坑土層(東から)
	３．7号土坑(南から)	
図版35	１．8号土坑土層(南から)	２．８号土坑(東から)
	３．9号土坑土層(南から)	
図版36	１．9号土坑(東から)	２．10号土坑(東から)
	３．11号土坑(南から)	
図版37	１．12号土坑土層(南から)	２．12号土坑(東から)

３．13号土坑土層（南西から）
図版38　１．14号土坑土層（南から）　２．14号土坑（南から）
３．15号土坑土層（南から）
図版39　１．16号土坑（西から）　２．17号土坑（南から）
３．遺物包含層掘削状況（北から）
図版40　出土遺物１
図版41　出土遺物２

挿図目次

第１図　柳川市位置図 …… 1
第２図　有明海沿岸道路調査地点図（1/50,000） …… 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/50,000） …… 7
第４図　矢加部町屋敷遺跡調査範囲図（1/4,000） …… 9
第５図　矢加部町屋敷遺跡５次調査遺構略配置図（1/200） …… 11
第６図　５次調査１号土坑出土陶磁器実測図（10は1/4、他は1/3） …… 12
第７図　５次調査２～４号土坑出土土器・陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3） …… 14
第８図　５次調査４・５号土坑出土陶磁器実測図（１・２・10は1/4、他は1/3） …… 15
第９図　５次調査６～11号土坑出土陶磁器実測図（６は1/4、他は1/3） …… 17
第10図　５次調査12・13号土坑出土陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3） …… 19
第11図　５次調査14号土坑出土陶磁器実測図（11は1/4、他は1/3） …… 20
第12図　５次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図（５～７・13は1/4、他は1/3） …… 21
第13図　５次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図（９～11は1/4、他は1/3） …… 22
第14図　５次調査18～20号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3） …… 24
第15図　５次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図（１・７・８は1/4、他は1/3） …… 26
第16図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図１（1/3） …… 28
第17図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図２（1/3） …… 30
第18図　５次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3） …… 32
第19図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図３（1/3） …… 34
第20図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図４（1/3） …… 36
第21図　５次調査１号大土坑出土磁器実測図（1/3） …… 38
第22図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図５（1/3） …… 40
第23図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図６（1/3） …… 41
第24図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図１（５～８は1/4、他は1/3） …… 43
第25図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図１（1/4） …… 44
第26図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図２（1・2・3は1/4、他は1/3） …… 45
第27図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図３（1/4） …… 46
第28図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図２（７は1/4、他は1/3） …… 48
第29図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図４（１・４～６は1/4、他は1/3） …… 49
第30図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図３（３は1/3、他は1/4） …… 50
第31図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図７（1/3） …… 51
第32図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図８（1/3） …… 52
第33図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図９（1/3） …… 54

第34図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図５(1/4) …… 55
第35図　５次調査１号大土坑出土土器実測図(1/6) …… 56
第36図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図10(1/3) …… 58
第37図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3) …… 60
第38図　５次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図５(1/3) …… 62
第39図　５次調査１・３号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 63
第40図　５次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(２は1/4、他は1/3) …… 64
第41図　５次調査包含層・２号胞衣壺・排土出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 66
第42図　５次調査出土土師質瓦実測図１(1/6) …… 67
第43図　５次調査出土土師質瓦実測図２(1/6) …… 68
第44図　５次調査出土瓦実測図(1/6) …… 69
第45図　５次調査出土土製品実測図(1/3) …… 70
第46図　５次調査出土土・石製品実測図(1/3) …… 72
第47図　５次調査出土金属・鹿角製品実測図(７は1/2、他は1/3) …… 73
第48図　５次調査出土銭実測図(1/2) …… 74
第49図　５次調査出土木製品実測図１(22は1/4、他は1/3) …… 76
第50図　５次調査出土木製品実測図２(1/6) …… 77
第51図　５次調査出土木製品実測図３(1/6) …… 78
第52図　５次調査出土木製品実測図４(1～2は1/2、6・9～11・14・15は1/4、他は1/3) …… 80
第53図　５次調査出土木製品実測図５(16は1/3、他は1/4) …… 81
第54図　５次調査出土木製品実測図６(9～11は1/12、他は1/6) …… 85
第55図　矢加部町屋敷遺跡１次調査遺構配置図(1/200) …… 87－88
第56図　１次調査１・３～９号土坑実測図(1/60) …… 91
第57図　１次調査10～12・14～17号土坑実測図(1/60) …… 93
第58図　１次調査18・19・21～24・26・27号土坑実測図(1/60) …… 95
第59図　１次調査28～37・39号土坑実測図(1/60) …… 97
第60図　１次調査38・40・41号土坑実測図(1/60) …… 99
第61図　１次調査１・３・４号大土坑実測図(1/60) …… 101
第62図　１次調査１・２号廃棄土坑、２号井戸実測図、８号埋甕土層断面図(４は1/30、他は1/60) … 103
第63図　１次調査１号土坑出土陶磁器実測図(1/3) …… 106
第64図　１次調査３号土坑出土土器・陶磁器実測図１(1/3) …… 108
第65図　１次調査３号土坑出土土器・陶磁器実測図２(12は1/6、６～９は1/4、1/3) …… 110
第66図　１次調査４号土坑出土陶磁器実測図(８・９は1/4、他は1/3) …… 111
第67図　１次調査５号土坑出土土器・陶磁器実測図(５・６は1/4、他は1/3) …… 112
第68図　１次調査７・８号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 114
第69図　１次調査10号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 115
第70図　１次調査11・12号土坑出土土器・陶磁器実測図(１・２・５～７は1/4、他は1/3) … 116
第71図　１次調査12号土坑出土陶器実測図(２・３・５は1/4、他は1/3) …… 117
第72図　１次調査14号土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3) …… 118
第73図　１次調査15号土坑出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/6、他は1/3) …… 120
第74図　１次調査16～18号土坑出土土器・陶磁器実測図(６は1/4、他は1/3) …… 122
第75図　１次調査19号土坑出土土器・陶磁器実測図(16・17は1/4、他は1/3) …… 123
第76図　１次調査21・22号土坑出土土器・陶磁器実測図(15は1/4、他は1/3) …… 125

第77図　1次調査23号土坑出土土器・陶磁器実測図(3・5は1/4、8は1/6、他は1/3) …… 126
第78図　1次調査24・26・28号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 127
第79図　1次調査29・33号土坑出土陶磁器実測図(5・9は1/4、他は1/3) …… 129
第80図　1次調査35～37・41号土坑出土土器・陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3) …… 130
第81図　1次調査1号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(8は1/4、2は1/3) …… 131
第82図　1次調査2号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 133
第83図　1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3) …… 134
第84図　1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図2(2～4は1/4、他は1/3) …… 136
第85図　1次調査3号大土坑出土土器・陶磁器実測図(7・8は1/4、他は1/3) …… 138
第86図　1次調査4号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 139
第87図　1次調査1号埋甕実測図(1/12) …… 140
第88図　1次調査2・3号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1は1/6、4は1/4、他は1/3) …… 140
第89図　1次調査4号埋甕出土土器・磁器実測図(1は1/3、2は1/6) …… 142
第90図　1次調査5号埋甕出土土器・磁器実測図(1は1/6、2は1/3) …… 143
第91図　1次調査6号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1・2は1/6、他は1/3) …… 144
第92図　1次調査7号埋甕出土陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3) …… 145
第93図　1次調査8・9号埋甕出土土器・磁器実測図(5は1/4、他は1/3) …… 146
第94図　1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3) …… 146
第95図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図1(1/3) …… 147
第96図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図2(1/3) …… 148
第97図　1次調査2号大溝出土磁器実測図1(1/3) …… 150
第98図　1次調査2号大溝出土磁器実測図2(1/3) …… 152
第99図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図3(1/3) …… 154
第100図　1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図1(1/4) …… 155
第101図　1次調査2号大溝出土陶器実測図(1/4) …… 156
第102図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図4(1/3) …… 157
第103図　1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図2(5は1/4、他は1/3) …… 158
第104図　1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図3(1/3) …… 160
第105図　1次調査2号大溝出土土器実測図(3は1/4、他は1/3) …… 161
第106図　1次調査2号大溝出土土器・陶磁器実測図4(2は1/4、他は1/3) …… 162
第107図　1次調査2・3号大溝出土土器・陶器実測図5(19～21は1/6、22は1/4、他は1/3) 164
第108図　1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3) …… 166
第109図　1次調査2～4・6号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1・7は1/4、他は1/3) … 167
第110図　1次調査7号溝状遺構・南西部クリーク出土土器・磁器実測図(2は1/4、他は1/3) … 169
第111図　1次調査2号井戸、鋳造炉上面出土陶磁器実測図(8・9は1/4、他は1/3) …… 169
第112図　1次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(12・13は1/4、他は1/3) …… 170
第113図　1次調査整地層出土土器・陶磁器実測図(6は1/4、他は1/3) …… 172
第114図　1次調査大正包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3) …… 173
第115図　1次調査撹乱土坑出土陶磁器実測図(5・6は1/4、他は1/3) …… 174
第116図　1次調査出土土師質瓦実測図1(1/6) …… 175
第117図　1次調査出土土師質瓦実測図2(1/6) …… 176
第118図　1次調査出土瓦実測図(1/6) …… 177
第119図　1次調査出土土製品実測図(1/3) …… 179

第120図　１次調査出土土・金属製品実測図(1～5は1/4、他は1/3) …… 181
第121図　１次調査出土るつぼ実測図(1/3) …… 182
第122図　１次調査出土砥石実測図(1/3) …… 184
第123図　１次調査出土石製品実測図(1･9･10は1/2、7･8は1/6、他は1/3) …… 185
第124図　１次調査出土石塔部材実測図(1/3) …… 187
第125図　１次調査出土ガラス・鹿角・貝製品実測図(13は1/2、他は1/3) …… 188
第126図　１次調査出土銭実測図(1/2) …… 190
第127図　１次調査出土木製品実測図１(19は1/4、他は1/3) …… 191
第128図　１次調査出土木製品実測図２(1/3) …… 192
第129図　１次調査出土木製品実測図３(4･17は1/4、他は1/3) …… 193
第130図　１次調査出土木製品実測図４(4・5は1/2、他は1/3) …… 195
第131図　１次調査出土木製品実測図５(1/3) …… 196
第132図　１次調査出土木製品実測図６(1/6) …… 197
第133図　１次調査出土木製品実測図７(1/3) …… 198
第134図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図１(1/800) …… 202
第135図　久留米柳川往還路線と現存する往還道跡 …… 202
第136図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図２(1/800) …… 203
第137図　藩境木位置図と推定復元図 …… 203
第138図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図３(1/800) …… 204
第139図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図４(1/800) …… 205
第140図　桟瓦・軒平瓦瓦当文と刻印の比較図 …… 207
第141図　「クド造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図 …… 210
第142図　矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき炉の例 …… 211
第143図　矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(６・７は1/4、他は1/3) …… 212
第144図　福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2) …… 213
第145図　摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光Ｘ線スペクトル図 …… 218
第146図　蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000) …… 232
第147図　蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200) …… 233
第148図　１・２号土坑・灰だまり実測図(1/30) …… 234
第149図　１・２号溝状遺構土層実測図(1/30) …… 235
第150図　１号土坑・２号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(１～５は1/3、他は1/4) …… 236
第151図　遺構面出土土器・陶磁器実測図(13～16は1/6、他は1/4) …… 237
第152図　蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000) …… 239
第153図　蒲船津水町遺跡遺構配置図(1/300) …… 240
第154図　１～６号土坑実測図(1/30) …… 242
第155図　１～４・６号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 243
第156図　７～10号土坑実測図(1/30) …… 245
第157図　７～10号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 246
第158図　11～17号土坑実測図(1/30) …… 249
第159図　11～15・17号土坑出土遺物実測図(1/3) …… 250
第160図　包含層出土土器実測図(1/4) …… 251

表目次

表１　有明海沿岸道路調査一覧 …… 3
表２　５次調査出土土器・陶磁器観察表１ …… 13
表３　５次調査出土土器・陶磁器観察表２ …… 16
表４　５次調査出土土器・陶磁器観察表３ …… 18
表５　５次調査出土土器・陶磁器観察表４ …… 23
表６　５次調査出土土器・陶磁器観察表５ …… 25
表７　５次調査出土土器・陶磁器観察表６ …… 27
表８　５次調査出土土器・陶磁器観察表７ …… 29
表９　５次調査出土土器・陶磁器観察表８ …… 31
表10　５次調査出土土器・陶磁器観察表９ …… 33
表11　５次調査出土土器・陶磁器観察表10 …… 35
表12　５次調査出土土器・陶磁器観察表11 …… 37
表13　５次調査出土土器・陶磁器観察表12 …… 39
表14　５次調査出土土器・陶磁器観察表13 …… 42
表15　５次調査出土土器・陶磁器観察表14 …… 47
表16　５次調査出土土器・陶磁器観察表15 …… 53
表17　５次調査出土土器・陶磁器観察表16 …… 57
表18　５次調査出土土器・陶磁器観察表17 …… 59
表19　５次調査出土土器・陶磁器観察表18 …… 61
表20　５次調査出土土器・陶磁器観察表19 …… 65
表21　５次調査出土瓦観察表 …… 69
表22　５次調査出土土製品観察表 …… 71
表23　５次調査出土土・石製品観察表 …… 74
表24　５次調査出土金属製品観察表 …… 75
表25　５次調査出土木製品観察表１ …… 79
表26　５次調査出土木製品観察表２ …… 82
表27　５次調査出土木・ガラス製品観察表 …… 84
表28　１次調査出土土器・陶磁器観察表１ …… 107
表29　１次調査出土土器・陶磁器観察表２ …… 109
表30　１次調査出土土器・陶磁器観察表３ …… 113
表31　１次調査出土土器・陶磁器観察表４ …… 117
表32　１次調査出土土器・陶磁器観察表５ …… 118
表33　１次調査出土土器・陶磁器観察表６ …… 119
表34　１次調査出土土器・陶磁器観察表７ …… 121
表35　１次調査出土土器・陶磁器観察表８ …… 124
表36　１次調査出土土器・陶磁器観察表９ …… 125
表37　１次調査出土土器・陶磁器観察表10 …… 127
表38　１次調査出土土器・陶磁器観察表11 …… 128
表39　１次調査出土土器・陶磁器観察表12 …… 132
表40　１次調査出土土器・陶磁器観察表13 …… 135
表41　１次調査出土土器・陶磁器観察表14 …… 137
表42　１次調査出土土器・陶磁器観察表15 …… 141

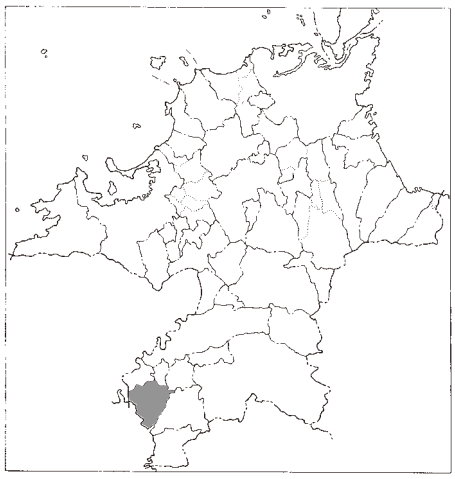
表43　1次調査出土土器・陶磁器観察表16 …… 149
表44　1次調査出土土器・陶磁器観察表17 …… 151
表45　1次調査出土土器・陶磁器観察表18 …… 153
表46　1次調査出土土器・陶磁器観察表19 …… 159
表47　1次調査出土土器・陶磁器観察表20 …… 163
表48　1次調査出土土器・陶磁器観察表21 …… 165
表49　1次調査出土土器・陶磁器観察表22 …… 168
表50　1次調査出土土器・陶磁器観察表23 …… 171
表51　1次調査出土土器・陶磁器観察表24 …… 174
表52　1次調査出土土器・陶磁器観察表25 …… 175
表53　1次調査出土土器・陶磁器観察表26 …… 177
表54　1次調査出土土器・陶磁器観察表27 …… 178
表55　1次調査出土瓦観察表 …… 178
表56　1次調査出土土製品観察表1 …… 180
表57　1次調査出土土製品観察表2 …… 182
表58　1次調査出土金属製品観察表 …… 182
表59　1次調査出土土製品観察表3 …… 183
表60　1次調査出土石製品観察表 …… 186
表61　1次調査出土ガラス・鹿角・貝製品観察表 …… 189
表62　1次調査出土銭観察表 …… 190
表63　1次調査出土木製品観察表1 …… 194
表64　1次調査出土木製品観察表2 …… 199
表65　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体 …… 220
表66　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体種名表 …… 226
表67　矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類 …… 227
表68　矢加部町屋敷遺跡出土の貝類 …… 228

写真目次

写真1　久留米市柳川往還道跡1(北東から) …… 202
写真2　久留米柳川往還道跡2(北東から) …… 202
写真3　土師質瓦使用状況…… 209
写真4　使用変色のある土師質瓦…… 209
写真5　焼塩壺の蓋と見られる小皿と蛍光X線分析試料写真…… 216
写真6　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(1)…… 223
写真7　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(2)…… 224
写真8　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(1)…… 229
写真9　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体(2)…… 230

Ⅰ．はじめに

１．調査の経過



第１図　柳川市位置図

ここに報告する遺跡は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査されたものである。有明海沿岸道路は福岡県大牟田市から柳川市・大川市を経由して、佐賀県鹿島市に至る概略延長55㎞の国道208号のバイパス路線である。高規格道路として整備され、渋滞解消とともに佐賀空港や三池港などの交通拠点と連結するもので、地域間流通の活性化のために早期建設が望まれていた。

平成６(1994)年12月16日に計画路線として指定され、路線は大牟田高田道路・高田大和バイパス・大川バイパスに３区分されている。大川バイパスは柳川市三橋町徳益から大川市大野島までの延長10.0㎞区間であり、平成10(1998)年12月18日に柳川市三橋町徳益から柳川市西蒲池までが整備区間が指定された。

平成12(2000)年10月28日に建設工事が起工され、このうち大牟田市から大川市にいたる区間は暫定供用区間とされたことから、平成20(2008)年３月29日に、大牟田ＩＣから大川中央ＩＣ(23.8㎞)の内、高田ＩＣから大和南ＩＣを除く21.8㎞が暫定開通し、平成21(2009)年３月14日には全区間が暫定供用されている。

文化財調査についてはまず、平成12(2000)年11月16日付で、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所から福岡県教育庁文化財保護課に対し、この区間に係る埋蔵文化財の有無確認の依頼があり、これを受けて同課が平成15(2003)年10月６から８日に試掘調査を実施した。その結果、本調査を要する15遺跡が確認された(表１)。

本書に所収する遺跡の所在する３遺跡のうち、柳川市矢加部地区については平成15(2003)年10月６から８日に試掘調査を実施し、江戸時代の溝や土坑などが確認されたことから本調査が必要と判断された。蒲船津地区については、平成16から18年に試掘調査を実施し、平成18年３月22・23日に字水町で井戸か柱穴と思われる遺構が検出され、うち１基からは12世紀代の土器が出土した。平成18年８月17・22・23日に西ノ内地区で、土坑２基と中世後期の土器・陶磁器が発見され、それぞれ蒲船水町遺跡・蒲船津西ノ内遺跡として本調査の対象に加えられた。

矢加部町屋敷遺跡は、用地取得の終了した範囲から工事の工程にしたがって、平成16(2004)年６月15日から10月４日に矢加部町屋敷遺跡１次調査として調査区南東部から本調査を実施した後、県道西側のクリークの高架工事を行う必要が生じたため、２次調査を平成16(2004)年６月15日から10月４日に、３次調査を平成17(2005)年３月17日から４月24日に実施した。４次調査については、県道東側で柳川農林事務所が工事用地内のクリークの付け替え工事を先行して行うため、県道東側の用地内に工事用道路を設置することから西側を調査することとなり、平成

第２図　有明海沿岸道路調査地点図(1/50,000)

表１　有明海沿岸道路調査一覧

地点	市町名	大字名（区間）	遺跡名	H19.4.1現在対象面積(㎡)	試掘確認調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要	
					試掘年度	未試掘面積(㎡)	調査年度	面積(㎡)	作成年度	面積(㎡)	主な時代	特記事項
1	大川市	津（終点～県道新田榎津線間）		12,900	H18	0						試掘済み、遺跡無し
2	大川市	津（県道新田榎津線～大字境）		25,700	H14･15･18	0						試掘済み、遺跡無し
3	大川市	幡保		15,400	H15･18	0						試掘済み、遺跡無し
4	大川市	坂井	坂井長永	3,820	H17･18	0	H17	1,820	H19	3,020	鎌倉時代	・条里の区画溝
							H18	1,200				
5	柳川市	西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16	4,390	H19	14,200	平安時代	・条里の区画溝
							H17	9,460			鎌倉時代	・墨書土器
							H18	350			室町時代	
6	柳川市	西蒲池	西蒲池将監坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代	・条里の区画溝
											奈良時代	
7	柳川市	西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	・条里の区画溝と畑畝跡
8	柳川市	西蒲池	西蒲池下里	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	・条里の区画溝
9	柳川市	東蒲池	東蒲池榎町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	弥生時代	・中世の集落遺跡
											古墳時代	
											平安時代	
											鎌倉時代	
10	柳川市	東蒲池	東蒲池大内曲り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代	・中世の集落遺跡
											平安時代	
											鎌倉時代	
11	柳川市	矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15･16	0	H16	2,040	H17整理	1,500	江戸時代	・江戸時代の町屋跡
							H17	430	H18	880	明治時代	・水田焼の銘入り土器
							H18	1,820	H21	860		・鉄湯釜の鋳型とるつぼ
							H19	565(860)	(H22～23)	560		・街道側溝らしい大溝
12	柳川市	矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
											江戸時代	
13	柳川市	矢加部	矢加部南屋敷	10,470	H16	0	H17	6,000	H20	10,470	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
							H18	4,470			江戸時代	
14	柳川市	三橋町柳河		4,700	H18	0						試掘済み、遺跡無し
15	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津江頭	9,700	H16	0	H17	4,700	H20	4,800	弥生時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
							H18	3,300	H21	3,300	古墳時代	・弥生時代後期の
							H19	1,700	(H22)	(1,600)	古代・中世	礎板（掘立柱建物の柱の基礎）多数
16	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津水町	4,500	H17	0	H19	(1,400)	(H22)	4,500	弥生時代	・弥生～中世の複合集落遺跡
								4,500			鎌倉時代	
17	柳川市	三橋町蒲船津	蒲船津西ノ内	2,280	H16～18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代	・戦国時代の集落遺跡
18	柳川市	大和町徳益		4,500	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
19	柳川市	大和町豊原		25,000	H17・18	0						試掘済み、遺跡無し
20	柳川市	大和町塩塚	塩塚地蔵面	22,740	H17～19	0					江戸時代	一部本調査必要（塩塚地蔵面遺跡）
												一部試掘済み、遺跡無し
21	柳川市	大和町栄	慶長本土居跡	64,500	H16～18	0			H20		江戸時代	・柳川市指定史跡慶長本土居跡
												一部試掘済み、遺跡無し
22	高田町	黒崎開	新開村旧隄記碑	－		0	H14		H20	－	江戸時代	・敷粗朶工法（葦など植物を敷く工法）
							H19	－				
23	高田町	黒崎開	黒崎堤防	300		0	H16	移設作業	H20	300	江戸時代	・福岡県指定史跡旧柳河藩干拓遺跡
								300				

18(2006)年５月９日から平成19(2007)年１月に着手した。最後に、５次調査を平成19年６月15日から開始し、９月25日に埋め戻しを終了し、矢加部町屋敷遺跡の調査が完了した。

蒲船津水町遺跡は柳川市三橋町蒲船津534－1･2･11～14番地を対象範囲とした約1,800㎡を、平成19(2007)年５月10日から８月31日にかけて調査した。

蒲船津西ノ内遺跡は柳川市三橋町蒲船津314－1～4･5A番地を対象とした900㎡を、平成18(2006)年12月４日から平成19(2007)年１月31日にかけて調査した。

これらの調査成果の報告書作成業務については、矢加部町屋敷遺跡は、平成16年度の１次調査の遺構と遺物、平成19年度の５次調査の遺物について行い、蒲船津水町遺跡と蒲船津西ノ内遺跡の報告内容と合本して報告することで協議が整った。なお、福岡県教育委員会の組織改変により、これまで文化財保護課で行っていた国の機関等の受託業務は、平成23年度以降九州歴史資料館で実施することとなった。

２．調査の組織

遺跡の発掘調査・整理報告に関わる平成16年から19年度、21年から23年度の関係者は次のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
所長	増田　博行	増田　博行 (～H17.8.1) 小口　浩 (H17.8.2～)	小口　浩	小口　浩	森山　誠二	山本　悟司	山本　悟司 (～H23.8.31) 富山　英範 (H23.9.1～)
副所長	後田　徹 徳留　忠	後田　徹 佐々木英明	春田　義信 佐々木英明 (～H19.6.30) 桑林　正純 (H19.7.1～)	春田　義信 佐々木英明	白川　逸喜	白川　逸喜 柳田　誠二	白田　雅彦 柳田　誠二
建設監督官	松尾淳一郎	松尾淳一郎 今村　隆浩	今村　隆浩 鵜林　保彦	今村　隆浩 鵜林　保彦	山北　賢二 鵜林　保彦	山北　賢二 柴尾　照雄	伊藤　康弘 柴尾　照雄
調査第二課長	小椎尾　優	鈴木　昭人					
調査課長			鈴木　昭人	鈴木　昭人	今里　英美	今里　英美	清時　義雄
調査係長	長友　浩信	松木　厚廣	松木　厚廣 (～H18.9) 川原　一哲 (H18.10～)	川原　一哲	矢野　幸樹	藤木　厚志	藤木　厚志
専門員	相島　伸行	相島　伸行	伊東　良二	伊東　良二	田中　博明	田中　博明	北御門繁己 大川優一郎
国土交通技官	柳瀬　純矢	柳瀬　純矢	谷川　勝	谷川　勝	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎	猿澤宗一郎
工務課長	田中秀之進	堀　泰雄	堀　泰雄	堀　泰雄	今田　一典	山口　隆	山口　隆

福岡県教育委員会

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
総括	（発掘調査）	（発掘調査）	（発掘調査・整理）	（発掘調査・整理）	（整理報告）	（整理報告）	（整理報告）
教育長	森山　良一	森山　良一	森山　良一	森山　良一	森山　良一	杉光　誠	
教育次長	三瓶　寧夫	清水　圭輔	清水　圭輔	楢崎洋二郎			
総務部長	清水　圭輔	中原　一憲	大島　和寛	大島　和寛			
総務部副理事兼文化財保護課長			磯村　幸男	磯村　幸男			
文化財保護課長	井上　祐弘	井上　祐弘	井上　祐弘		平川　昌弘	平川　昌弘	
副課長			佐々木隆彦	佐々木隆彦	池邊　元明	伊崎　俊秋	
参事兼課長技術補佐	川述　昭人		池邊　元明	池邊　元明	小池　史哲	小池　史哲	
	木下　修		小池　史哲	小池　史哲			
参事			新原　正典	新原　正典			
参事兼課長補佐	久芳　昭文		安川　正郷	中薗　宏			
課長補佐		安川　正郷			前原　俊史		
庶務							
参事補佐兼管理係長	古賀　敏生						
管理係長		稲尾　茂	井手　優二	井手　優二	富永　育夫	富永　育夫	
事務主査	宮崎　志行	宮崎　志行	野中　顯		藤木　豊	藤木　豊	
主任主事	末竹　元	石橋　伸二	渕上　大輔	渕上　大輔	近藤　一崇	近藤　一崇	
	秦　俊二	末竹　元	柏村　正央	柏村　正央	野田　雅	内山　礼衣	
				小宮　辰之	仲野　洋輔	仲野　洋輔	
				野田　雅			
調査・整理・報告							
参事補佐兼調査第二係長	中間　研志	中間　研志	飛野　博文	飛野　博文	飛野　博文	飛野　博文	
参事補佐			濱田　信也	濱田　信也	新原　正典	新原　正典	
						池邊　元明	
技術主査			小川　泰樹	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二	
主任技師	秦　憲二	秦　憲二	秦　憲二				
			進村　真之				

九州歴史資料館

	平成23年度
総括	（整理報告）
館長	西谷　正
副館長	南里　正美
庶務	
企画主幹兼総務室長	圓城寺紀子
企画主査	塩塚　孝憲
主任主事	熊谷　泰容
主任主事	近藤　一崇
主事	谷川　賢治
整理・報告	
企画主幹兼文化財調査室長	飛野　博文
参事補佐	小池　史哲
文化財調査班長	小川　泰樹
保存管理班長	加藤　和歳
技術主査	秦　憲二
	進村　真之

なお、発掘調査及び整理期間中には、国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所・有明海沿岸道路出張所・柳川市教育委員会をはじめとする関係各位の御理解・御協力を得ることができた。特に、発掘作業員として参加された地元を中心とする多数の方々には、悪天候、悪条件の中、御協力いただいた。また、地元の方々にはひとかたならぬご理解をいただき、無事に発掘調査を終了することができた。ここに深甚の謝意を表します。

Ⅱ．位置と環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は福岡県南西部に位置し、筑後平野南西部の有明海沿岸部に位置している。筑後平野・佐賀平野の有明粘土を基盤とする沖積地は標高10m以下の低平な平地であり、水田の灌漑・排水のためのクリークが網の目のように走る独特な景観を呈している。柳川市内は矢部川の支流である沖端川・塩塚川が東西に走っており、川の間の微高地や自然堤防上に集落が形成されている。平成17年２月５日付けで柳川市・三橋町・大和町が合併し、現柳川市となったが、合併後の市域でも最も内陸部で標高４m前後という低平地である。第３図には入っていないが、沿岸部には近世以降の干拓地が鱗状に広がっており、河口には干潟が発達している。

本書所収の矢加部町屋敷の所在する矢加部地区は柳川市の北東端の微高地上に展開する村矢加部集落の南西にあり、調査地点の町矢加部は県道23号線沿いに所在する。蒲船津西ノ内遺跡・蒲津水町遺跡の所在する蒲船津地区は柳川市中心部の東に位置する。蒲船津西ノ内遺跡は微高地の中心部の国道443号沿いにあり、蒲津水町遺跡は沖端川と二ツ川に挟まれた自然堤防上に位置する。

歴史的環境

柳川市域では旧石器・縄文時代の遺跡は確認されておらず、集落が進出したのは弥生時代前期末以降である。市北部では蒲池遺跡群(注１)を拠点的な集落として、中期には微高地上に小集落が点在していたようだ。西蒲池扇ノ内遺跡(注２)では支石墓の上石と見られる巨石が発見されており、三島神社楼門前の石橋に使用された１枚石もこの巨石の１つといわれている。このほかに発掘調査の行われた弥生時代の遺跡としては、中期の磯鳥フケ遺跡(注３)や、後期の蒲船津江頭遺跡(注４)があり、後者では礎板が伴う掘立柱建物跡が多数検出されている。

古墳時代・古代の遺跡は散布地があるものの、実態のわからないものが多かったが、近年の有明海沿岸道路建設に伴う発掘調査によりわずかながら当該期の遺跡が発見されている。律令制下には市北部は三潴郡、市南・東部は山門郡に属したであろうが、その境界は不明である。平安時代に入ると柳川市東部の三橋町域は瀬高下庄に属しているが、一部は瀬高横手庄であった可能性もある。

遺跡が増加するのは中世になってからである。柳川市北部地域には、蒲池氏の居城である蒲池城が造られ、城の西には東蒲池門前・西門前遺跡(注５)、南からは中世前期の東蒲池大内曲り遺

跡(注６)・東蒲池榎町遺跡(注７)が確認されている。その他にも中世後期の矢加部南屋敷遺跡(注８)などの集落や、西蒲池古塚遺跡・下里遺跡・将監坊遺跡・古溝遺跡、坂井長永遺跡など西蒲池地区で条里跡が発見されている(注９)。

戦国時代末期には、蒲池地区を本拠地として勢力を持っていた蒲池氏が滅亡し、天正15(1587)年立花宗茂が立花城から柳川城に移り、三潴・下妻・山門の三郡を支配した。立花氏はその後関ヶ原の戦いで西軍に与して改易となり、替って田中吉政が筑後国主となり、慶長６(1601)年に入国した。

田中吉政は「慶長本土居」の建設、掘割の掘削、街道整備などの多くの土木事業を行い、領国整備に努めた。慶長本土居は、慶長７年(1602)に柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防を補強した総延長32キロメートルに及ぶ干拓堤防で、この「慶長本土居」を起点として、その後の干拓が行われることになる。掘割は、飲用、農業用、舟運や戦時の防衛の目的で整備しており、市内の水路の総延長は、実に470キロメートルものぼる。この掘割が現在の「水郷柳川」の景観を形成している。

本遺跡の中央を走る県道23号線は、「久留米柳川往還」と呼ばれる街道であり、田中吉政が整備

1 矢加部町屋敷遺跡
2 矢加部五反田遺跡
3 矢加部南屋敷遺跡
4 玉垂命神社遺跡
5 阿弥陀屋舗遺跡
6 磯鳥フケ遺跡
7 東小路遺跡
8 南矢ヶ部遺跡Ⅰ
9 南矢ヶ部遺跡Ⅱ
10 東蒲池榎町遺跡
11 東蒲池大内曲り遺跡
12 東蒲池蓮池遺跡
13 東蒲池門前遺跡
14 蒲池城跡
15 蒲池焼窯跡
16 三島神社貝塚
17 蒲池遺跡群
18 西蒲池下里遺跡
19 扇ノ内遺跡
20 西蒲池古溝遺跡
21 西蒲池将監坊遺跡
22 西蒲池古塚遺跡
23 坂井長永遺跡
24 蒲船津江頭遺跡
25 蒲船津水町遺跡
26 蒲船津西ノ内遺跡
27 徳益八ツ枝遺跡
28 今古賀城跡
29 逆井出遺跡
30 浮島天神遺跡
31 内新開遺跡
32 西馬場遺跡
33 江崎城跡
34 垂見古墳
35 垂見遺跡
36 垂水城跡
37 大坪遺跡
38 白鳥城跡
39 東中道遺跡
40 地蔵堂遺跡
41 ヘータカサン遺跡
42 日渡遺跡
43 一本松遺跡
44 赤太郎遺跡
45 松の木三十六遺跡
46 サヤモト遺跡
47 中村遺跡
48 大藪条里遺跡
49 天満宮遺跡
50 江鶴遺跡
51 上久末城跡
52 場口遺跡
53 田脇昭代地区条里遺跡
54 条里跡
55 慶長堤防
56 玉垂命神社遺跡
57 新町遺跡
58 細工町遺跡
59 坂本町遺跡
60 柳川城跡
61 国指定名勝松濤園
62 県指定建造物戸島邸
63 国指定名勝戸島氏庭園
64 東蒲池西門前遺跡
65 東蒲池畠中遺跡
66 浦田遺跡
67 池田遺跡
68 池淵遺跡
69 蒲船津西古賀遺跡
70 下百町鬼童遺跡

柳川城郭関連遺跡

第３図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

したことから「田中道」とも呼ばれる。三橋町の柳河地区では、道路の両側に大きな溝を伴う旧状が残された部分を見ることができる。

田中氏改易後、筑後国は柳川藩と久留米藩に分断され、柳川藩は立花氏が、久留米藩は有馬氏が領有した。本遺跡の所在する矢加部地区は藩境となり、街道上に関所と藩境木が設置された。現在も藩境木跡の石碑が残されている。

注

1．福岡県教育委員会1978『福岡県遺跡等分布地図』(大牟田市・柳川市・山門郡・三池郡編)
2．前掲注１
3．柳川市教育委員会2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書第１集
4．福岡県教育委員会2009『蒲船津江頭遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第６集
福岡県教育委員会2010『蒲船津江頭遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第８集
福岡県教育委員会2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集
5．福岡県教育委員会で整理中
6．福岡県教育委員会2007『東蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第２集
7．福岡県教育委員会2005『東蒲池榎町遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第１集
8．福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡・矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集
9．福岡県教育委員会2009『坂井長永遺跡(１・２次)　西蒲池古塚遺跡(１～４次)　西蒲池将監坊遺跡(１・２次)　西蒲池古溝遺跡　西蒲池下里遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵　文化財調査報告第６集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ

５次調査の出土遺物
１次調査
まとめ

Ⅲ．調査の内容

１．矢加部町屋敷遺跡５次調査の出土遺物

５次調査の遺構については既報告の『矢加部町屋敷Ⅲ』で掲載しており、本書では出土遺物について報告する。５次調査では、土坑25基、大土坑１基、溝状遺構３条などを検出した。『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』において遺構だけを先に掲載しているが、出土遺物の説明の前に各遺構の時期のみ再度挙げておきたい。

１号土坑はせんじ碗と広東碗があるので18世紀後半から19世紀初頭である。

２号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は特定できない。

３号土坑は４号土坑を切り、出土遺物はわずかで、小片が多い。年代は半球形の無文磁器碗が出土していることから18世紀前葉から中葉である。

４号土坑は３号土坑に南部を切られ、東部を５号土坑に切られる。北側は４次調査東区に延び、４次調査の93号土坑に繋がる。出土遺物が少ないが、身の深い赤絵の腰丸碗が出土しているので18世紀中葉だろう。

５号土坑は４次調査の93号土坑に繋がる。南部を１号土坑に切られている。出土遺物はわずかだが、４号土坑を切ることと、氷裂文を地文とする菊花文染付から18世紀中葉だろう。

６号土坑は南東隅を７号土坑に切られる平面隅方形プランで、北側は４次調査東区に延びており、４次調査94号土坑を繋がる。出土遺物はわずかだが、出土した三島手の象嵌入り陶器鉢の口縁部形態から、年代は18世紀前半だろう。

７号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。１・６号土坑に切られ１号溝状遺構を切ることから、18世紀中葉から19世紀中葉の間である。

８号土坑は出土遺物はわずかで、小片が多い。小型甕の口縁部形態から17世紀後半から18世紀代だろう。

９号土坑は12号土坑を切る長方形の土坑である。遺物がほとんど残っていなかったので時期を特定できない。

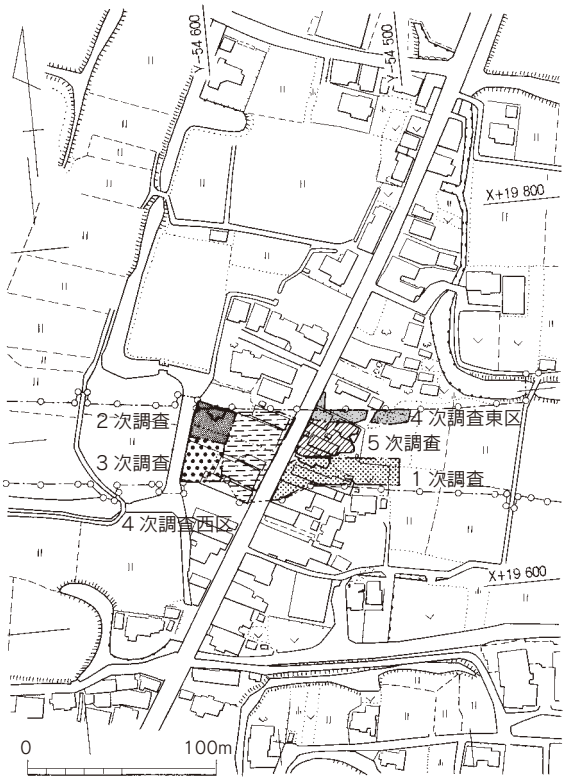
10号土坑は11号土坑に西端を切られて、平面略方形プランで、遺物がほとんど残っていなかったので確実性が弱いが19世紀代か。

11号土坑は10号土坑を切る長方形プランで、無文の壁が直線的に緩やかに立ち上がる磁器碗が出土していることから18世紀代か。

12号土坑は１号大土坑を切り、９号土坑に北西隅を切られる。多条縞文の染付が入る蓋物が出土していることから18世紀後半か。

13号土坑は14号土坑を切る。型紙刷の端反碗染付が出土しているので19世紀中葉である。

14号土坑は13号土坑・２号溝状遺構に切ら



第４図　矢加部町屋敷遺跡調査範囲図(1/4,000)

れる。口縁下に突帯が付く摺鉢や京焼風陶器が出土していることや、内面口縁の肥厚が退化していることから18世紀前葉である。

15号土坑は出土遺物はわずかで小片が多く、年代が特定できない。

16号土坑は南東部は別の土坑かもしれない。出土遺物はわずかで小片が多いが、内面口縁部に袈裟襷文の入る筒形碗があるので18世紀後半だろう。

17号土坑は１号溝状遺構に近接しているが、切り合いは不明確だった。外面口縁部下に突帯が付くタイプと外面口縁部が肥厚するタイプの摺鉢が出土していることから、18世紀中葉である。

18号土坑は口縁部が玉縁状の摺鉢があり、せんじ碗が出土していることから18世紀初頭だろう。

19号土坑は北西隅をピットに切られ、南側を現代の井戸に切られており、鉄釉を内外に掛ける小型碗が出土しているので、17世紀末から18世紀後葉である。

20号土坑は南側を現代の井戸に切られており、21号土坑を切る。年代は台付皿から18世紀初頭から後葉である。

21号土坑は西側を20号土坑に切られており、１次調査29号土坑と同一遺構である。径の小さい平底の摺鉢が出土しているので、17世紀後半の遺構である。

22号土坑は遺物もほとんど残っていなかったが、18世紀中葉か。

23号土坑は18世紀中葉から19世紀中葉の口縁外面肥厚で、高台の付く摺鉢が出土しており、せんじ碗があることから18世紀中葉だろう。

24号土坑は口縁部が長い玉縁形に肥厚する摺鉢が出土していることから、17世紀後半代だろう。

25号土坑は当初24号土坑と一緒に掘り下げており、その途中で別遺構とわかったため、切り合いは不確実である。年代は特定できない。

１号大土坑は４次調査東区100・101号土坑に繋がる。12号土坑に切られており、南部には黒色土が厚く堆積しておりこれを南部上層として取り上げたが18世紀中葉から後葉の遺物の中に燻し瓦が見られた。出土遺物には18世紀前葉から中葉のものが多く出土しており、この時期に属する遺構である。19世紀中葉の遺物も一定量あるが、上層出土である。大正10年銘１銭銅貨は検出段階に上面にあったコンクリート基礎の掘り込み時の混入品だろう。

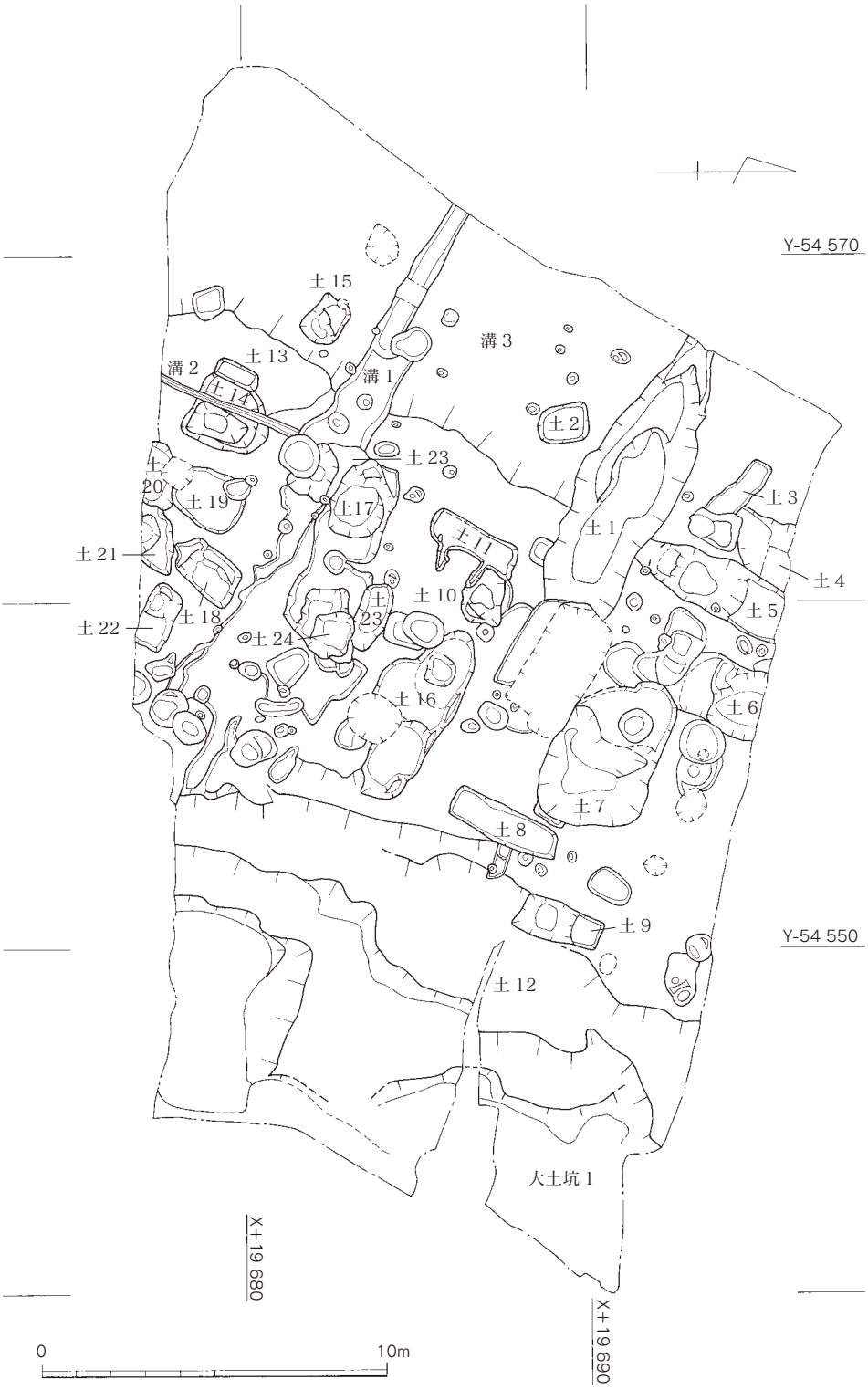
１号溝状遺構は３号溝状遺構を切り、２号溝状遺構は垂直方向に走るが、切り合いは不鮮明だった。17・23・24・25号土坑に切られていることと、草花文のモチーフから17世紀後葉から18世紀初頭のものと考えられる。

２号溝状遺構は14号土坑を切ることから、18世紀後半代の可能性が高い。

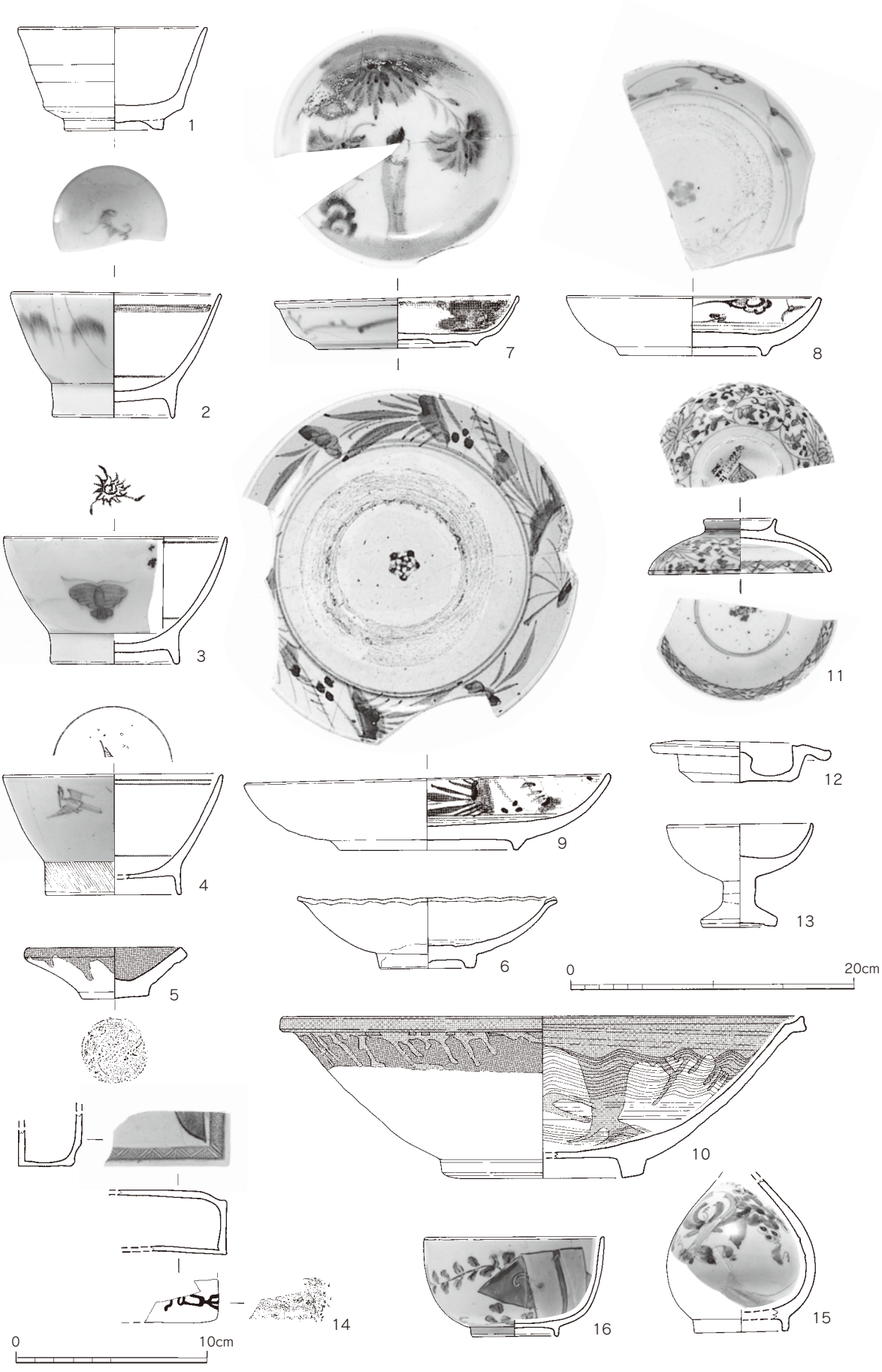
３号溝状遺構は２・15号土坑、１号溝状遺構に切られている。大振りの草花文碗や崩れた雨振り文碗が出土しており、17世紀後葉から18世紀初頭の１号溝状遺構に切られるので、17世紀後葉から末には完全に埋没している。

これより、出土遺物の説明を行うが、個々の遺物については観察表を掲載しているので、追記するべき事項のある遺物についてのみ記述する。

６図２は広東型の染付碗で、口縁部の窪んだ部分に別個体の融着があるので、焼成時に隣接する別個体に押されたために窪んだものとわかる。６図４は広東型の染付碗で、ハケ状の沈線が高



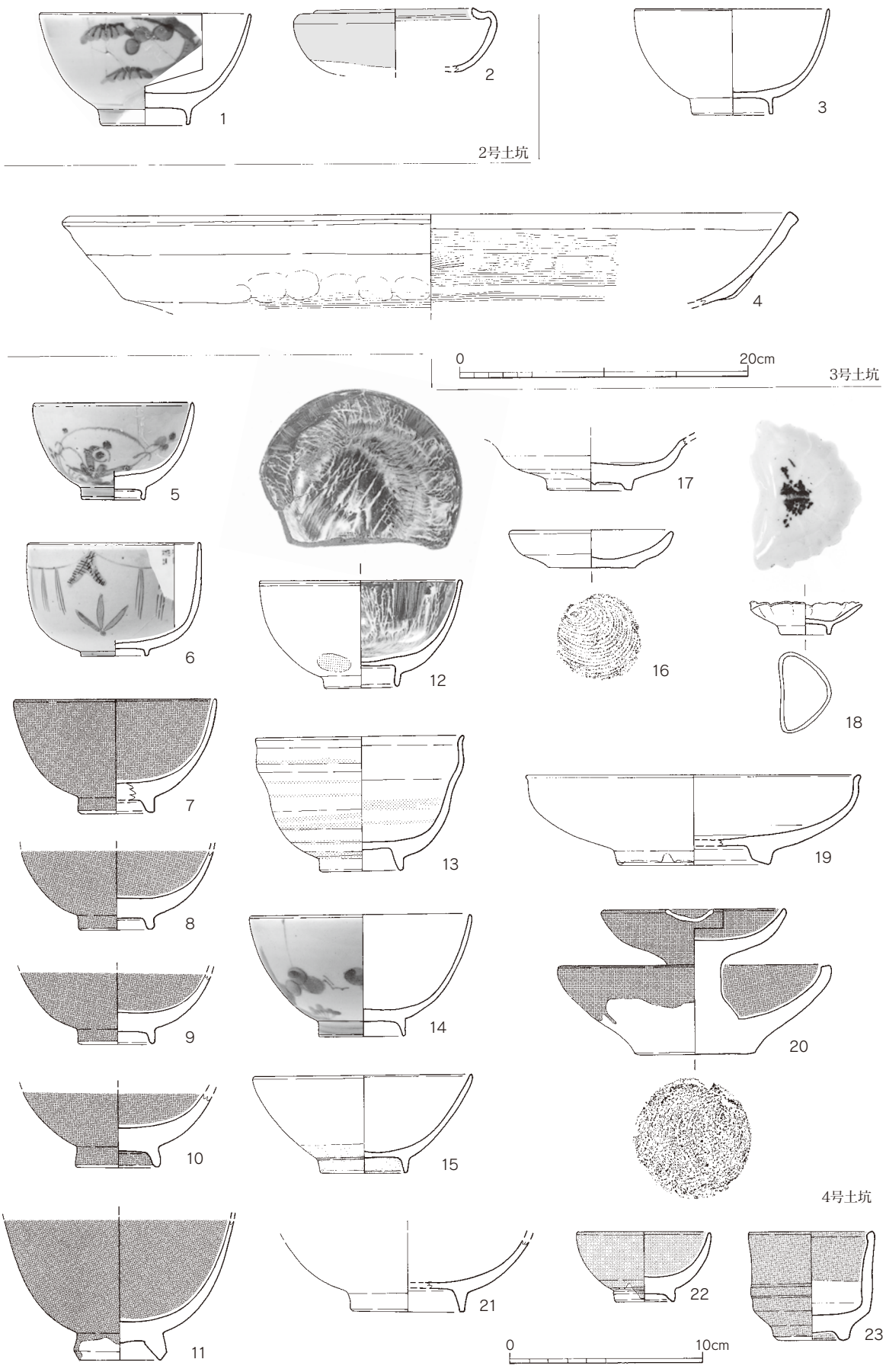
第５図　矢加部町屋敷遺跡５次調査遺構略配置図(1/200)



第６図　５次調査１号土坑出土陶磁器実測図（10は1/4、他は1/3）

表２　５次調査出土土器・陶磁器観察表１

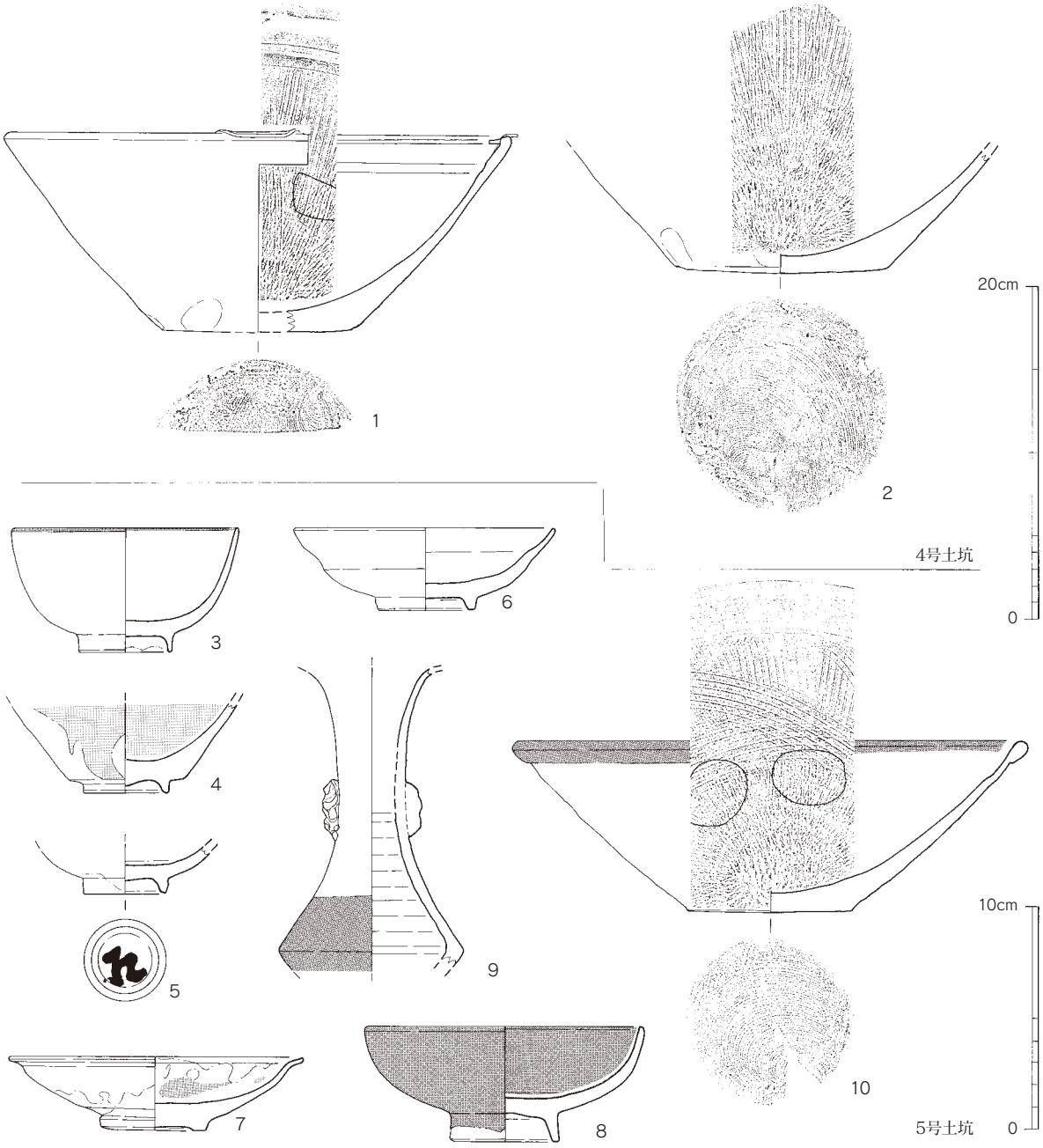
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑１ ６図１	碗 杉形	口径(10.0) 高台径(5.2) 器高5.4	陶器 黄灰白色	黄灰色の灰釉を内面から外面胴下位まで貫入あり	無文 高台内削り出し	底部露胎	高台内に焼成時のひびあり	肥前	18世紀中葉
土坑１ ６図２	碗 広東形	口径(11.1) 高台径6.4 器高6.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に亀文と柳文、見込みに蝙蝠文を染付 呉須に滲みあり	畳付釉剥ぎ	外面に別個体の融着片あり	肥前	19世紀前葉
土坑１ ６図３	碗 広東形	口径(11.4) 高台径6.7 器高6.6	磁器 灰白色	青みがかった透明釉を全面に掛ける	外面に蝶文と薊文、見込みに火炎宝珠文を染付　呉須に滲みあり	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
土坑１ ６図４	碗 広東形	口径(11.6) 高台径(7.2) 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に水鳥文、見込みに不明文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
土坑１ ６図５ 図版１	小皿	口径8.0 底径3.5 器高2.7	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布　底部糸切り		底部露胎	完形　歪みあり	肥前	不明
土坑１ ６図６	小皿 花弁形口縁	口径(13.6) 高台径5.0 器高3.7	陶器 白灰色 軟質	飴釉を内面から外面に胴下位に掛ける	高台削り出し	底部露胎　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑１ ６図７	小皿	口径12.8 高台径8.4 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面は食物と人物文を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	台部に砂目付着　内面に付着物あり	肥前	1780 ～ 1860
土坑１ ６図８	小皿 ５寸皿	口径13.6 高台径7.8 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面崩れた菊唐草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1820 ～ 1860
土坑１ ６図９	中皿	口径19.2 高台径9.4 器高3.9	磁器 灰白色	発色不良で黄色がかった透明釉を全面に掛ける	内面に花草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	見込みに重ね焼き痕あり	波佐見	1750 ～ 1810
土坑１ ６図10	鉢	口径(36.6) 高台径14.2 器高11.4	陶器 橙褐色	外面口縁部下に鉄釉掛け、内面全面に白化粧土を塗布した後に櫛状掻き取り　その上に内外口縁部にオリーブ色の灰釉を緑灰色の灰釉を体面に掛け流し、最後に外面口縁下を釉剥ぎ		底部露胎		肥前	1690 ～ 1750
土坑１ ６図11	蓋	裾径9.5 つまみ径3.8 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花唐草文、内面胴部は袈裟襷文帯、内面天井部に５弁花文、裏銘は角福を呉須染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
土坑１ ６図12	蓋 土瓶蓋	裾径9.6 つまみ径1.4 器高2.1	陶器 暗紫灰色	鉄釉　上面 光沢あり	無文	つまみ上端釉剥ぎ	内面は使用のため黒く変色	肥前	19世紀前半
土坑１ ６図13	仏飯器	口径7.5 裾径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	1690 ～ 1780
土坑１ ６図14	水滴	—	磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	上面外縁に鋸歯文帯、その内側に葉の一部が見られる　板作りで、上面のみ型押し、内底は布目が残る	不明	内面は墨で変色している	肥前	不明
土坑１ ６図15	小型瓶 仏花瓶	高台径(5.0) 最大径(7.8)	磁器 灰白色	透明釉を外面に掛ける	外面に熨斗・葡萄文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1860
土坑１ ６図16	蓋物	口径9.4 高台径4.6 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	藤状の植物文と草紙文状のモチーフを赤・黒・緑彩で上絵付け　見込みのアルミナ塗布は重ね焼きのためか	底部釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ	９割残存	肥前	1650 ～ 1690
土坑２ ７図１	碗	口径11.0 高台径4.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉	外面は松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	４割残存	肥前	1700 ～ 1740
土坑２ ７図２	鉢	口径(8.2) 最大径(10.6)	陶器 黄白灰色 軟質	飴釉を内面口縁部から外面胴下位に掛ける	口縁部が窪むのが意図的なものかは不明	不明		肥前か	不明
土坑３ ７図３	碗	口径(10.2) 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1700
土坑３ ７図４	焙烙	口径(51.0)	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外面口縁下はナデ、肩部はオサエ後ナデ、胴部はハケ、内面は丁寧なハケ	不明	内面は変色なし、外面は煤付着	在地	不明
土坑４ ７図５	小型碗	口径8.4 高台径3.3 器高5.0	磁器 灰白色	暗黄色がかった透明釉全面掛け	外面に草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
土坑４ ７図６	碗 半球形	口径9.0 高台径3.4 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	外面に赤絵で注連縄文に羽子板と花文、緑彩で葉文を上絵付け	不明		肥前	1780 ～ 1810
土坑４ ７図７	碗	口径(10.6) 高台径(4.0) 器高5.9	陶器 黄灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図８	碗	高台径3.9	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780



第７図　５次調査２～４号土坑出土土器･陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）

台外面にある。６図６は花弁形口縁の白磁の小皿で、見込みに重ね焼きの痕跡あり。胎にややざらつきがあることから、肥前産でない可能性もある。６図８は染付の５寸皿で、高台内部にカンナ痕が残る。６図９は染付の中皿で、見込みの重ね焼きの痕跡は幅が広く、高台径が異なるので、別の種類の個体を重ねたとわかる。６図14は水滴で、内面の底面には板作りの際の布目跡があり、そこに墨書がある。判読できないが、成形した後では書くことができないうえに、人目に触れることもなくなるので、陶工が書いたものだろう。

７図２は蓋物の鉢で、口縁が窪むのは意図的なものではなく焼成時のへたれの可能性もある。７図４は土師質土器の焙烙で実測図は接合しない２個体の図上接合である。７図15は陶器の碗で、胴下位から外底に鉄釉ではなく鉄漿が掛かる。７図16は土師質の小皿で、火を受けて赤変



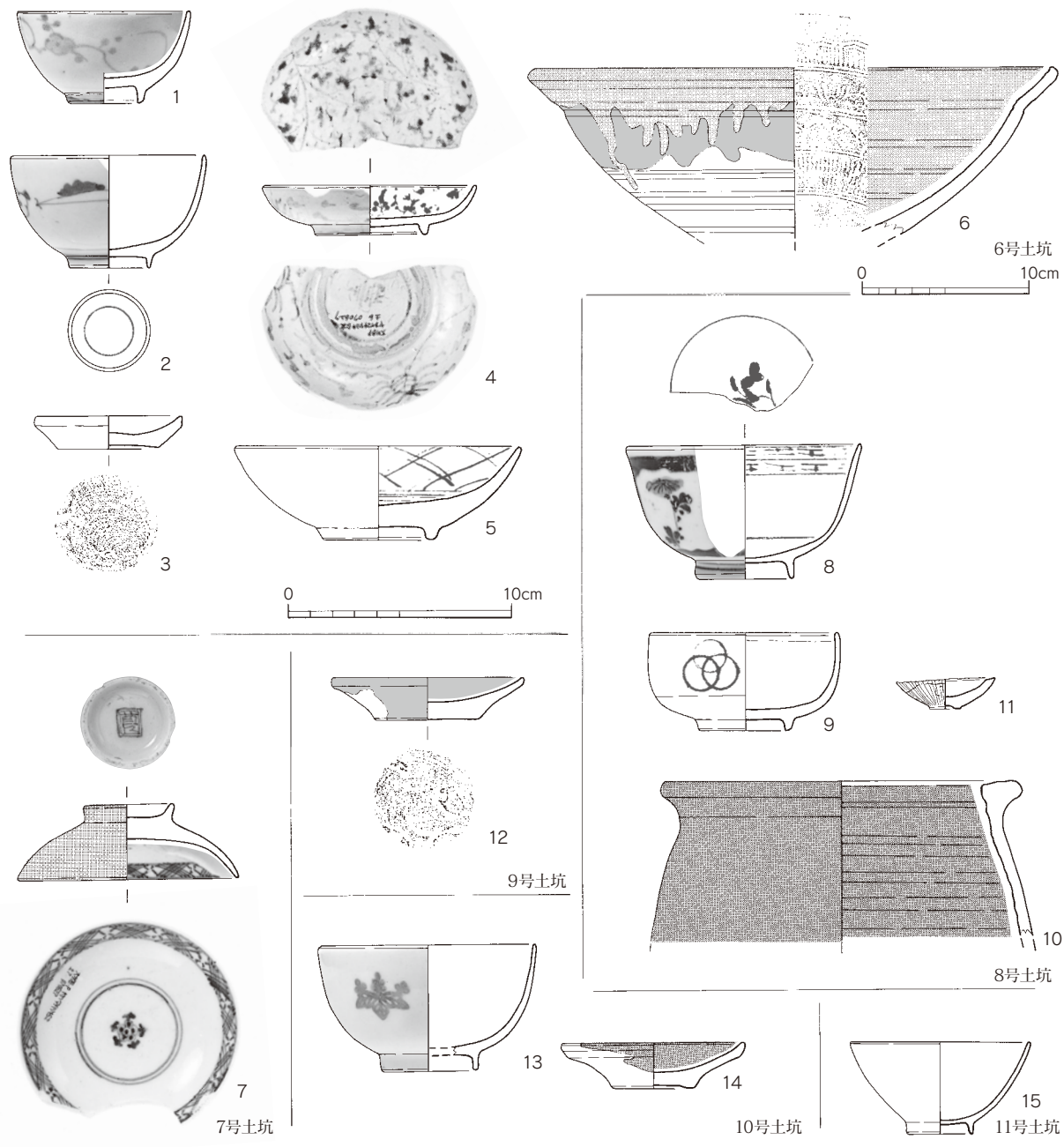
第８図　５次調査４・５号土坑出土陶磁器実測図(1・2・10は1/4、他は1/3)

表３　５次調査出土土器・陶磁器観察表２

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑４ ７図９	碗	高台径4.0	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図10	碗	高台径4.4	陶器 灰白色	黒釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図11	碗 呉器手	高台径4.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文	高台露胎		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図12	碗 蛍手	口径10.1 高台径4.0 器高5.6	陶器 暗茶褐色	白化粧土を外面は丸文、内面は打ち刷毛目掛けした後、透明釉を全面に掛ける		畳付釉剥ぎ		現川焼	1690 ～ 1740
土坑４ ７図13	碗 折湾形	口径(10.8) 高台径4.4 器高6.9	陶器 暗黄灰白色	内外面白化粧土を刷毛掛けした後、透明釉を全面に掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑４ ７図14	碗	口径(11.6) 高台径4.6 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑４ ７図15	碗	口径11.5 高台径4.6 器高5.0	陶器 黄灰白色	内面から外面胴下位まで透明釉を掛け、胴下位から高台まで鉄漿塗布		畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
土坑４ ７図16	小皿	口径(8.4) 底径4.5 器高1.9	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	５割残存 赤変している	在地	不明
土坑４ ７図17	小皿	高台径4.4	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉を高台以外全面に掛ける	外底削り出し	底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図18	小皿 変形小皿 蝶形	長軸7.9 短軸5.6 器高1.6	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内面に羽の筋が型押し陽刻され、中央に呉須掛け、高台は隅丸三角形 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
土坑４ ７図19	中皿	口径17.4 高台径8.0 器高4.7	陶器 濃黄灰白色	黒釉を全面に掛ける	高台横に獣脚あり	畳付釉剥ぎ 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
土坑４ ７図20	灯明受皿	口径9.6 最大径14.2 底径6.4	陶器 暗橙色	鉄釉を内面から裾まで	外底は糸切り 口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色している	胴下半露胎		肥前	不明
土坑４ ７図21	碗	高台径5.8	陶器 黄灰白色	内外面白化粧土を刷毛掛けした後、透明釉を高台以外全面に掛ける　貫入あり		底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1690
土坑４ ７図22	小型碗	口径7.0 高台径3.2 器高3.6	陶器 灰白～橙灰白色で軟質	オリーブ色の灰釉を全面に掛け、口縁部に２度掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑４ ７図23	小型鉢 香炉か	口径6.6 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	緑釉を内面胴中位から外面全面に掛ける	外面に帯状の突帯あり 口縁部は内側に返りがつく	畳付釉剥ぎ・砂目跡付着		肥前	不明
土坑４ ８図１	摺鉢	口径(30.4) 底径(12.0) 器高12.0	陶器 橙～暗紫灰色	無釉	内側に折り返す口縁部の一部を逆に外側に返して注口を作る　内面摺り目11本単位　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡２つあり		肥前	1620 ～ 1650
土坑４ ８図２	摺鉢	底径12.8	陶器 暗橙褐色～暗紫灰色	無釉	内面摺り目12本単位　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位に胎土目跡７つあり　見込みは不鮮明		肥前	1620 ～ 1690
土坑５ ８図３	碗	口径10.2 高台径4.2 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
土坑５ ８図４	碗 杉形	高台径3.8	陶器 にぶい灰黄白色	暗茶褐色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける	無文　高台内削り出し	高台露胎		肥前	1650 ～ 1690
土坑５ ８図５	小皿 ５寸皿	高台径3.8	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	外底に墨書あり	底部露胎 見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
土坑５ ８図６	小皿 ５寸皿	口径11.8 高台径4.4 器高3.7	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外の全面に掛ける		高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑５ ８図７	小皿 ５寸皿	口径13.2 高台径4.7 器高3.3	陶器 灰白色	発色不良で灰白がかる透明釉を高台以外の全面に掛け、緑灰色の灰釉を流し掛け		高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に胎土目跡４つあり		肥前	1690 ～ 1780
土坑５ ８図８	碗	口径(12.6) 高台径4.9 器高5.2	陶器 灰白色	黒釉を高台以外全面に掛ける	無文　高台内削り出し	高台露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に鉄漿塗布		肥前	不明
土坑５ ８図９	瓶 仏花瓶	最大径8.2	陶器 灰白～橙灰白色	胴部に鉄釉を掛けた後、透明釉を頸部から胴部上位に掛ける 側面の耳はモチーフが崩れている		—	透明釉は発色不良で灰白色	肥前	1650 ～ 1690
土坑５ ８図10	摺鉢	口径(31.0) 底径10.0 器高10.3	陶器 暗赤紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位　外底糸切りで、外縁をナデている	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡８つあり		肥前	1650 ～ 1690

しているが、焼成時のものか２次的加熱によるものか不明である。７図17は陶器の小皿で、見込みの蛇ノ目釉剥ぎの重ね焼き痕部分に釉が付着している。７図19は陶器の中皿で、蛇ノ目釉剥ぎ部は黒釉の残りのため茶褐色を呈しているのであって、鉄漿塗布ではない。重ね焼き痕跡の部分に釉が付着している。７図20は陶器の灯明受皿で、大型の特異なものだが、胎は肥前のものである。口縁部の打ち欠いた部分が黒く変色しているので、本来注口が付いていた部分が欠損した後も使用している。

８図1･2は陶器の摺鉢で、１は通常この器形ならば口縁部に鉄釉が掛かるが、間違いなく鉄釉がない。８図５は陶器の碗で、外底に墨書が入るが、判読できない。８図７は陶器の小皿で、畳付に胎土目跡の痕跡が４つわずかに残る。８図９は仏花瓶で、焼成不良で、一部赤化している。



第９図　5次調査 ６～11号土坑出土陶磁器実測図（６は1/4、他は1/3）

表４　５次調査出土土器・陶磁器観察表３

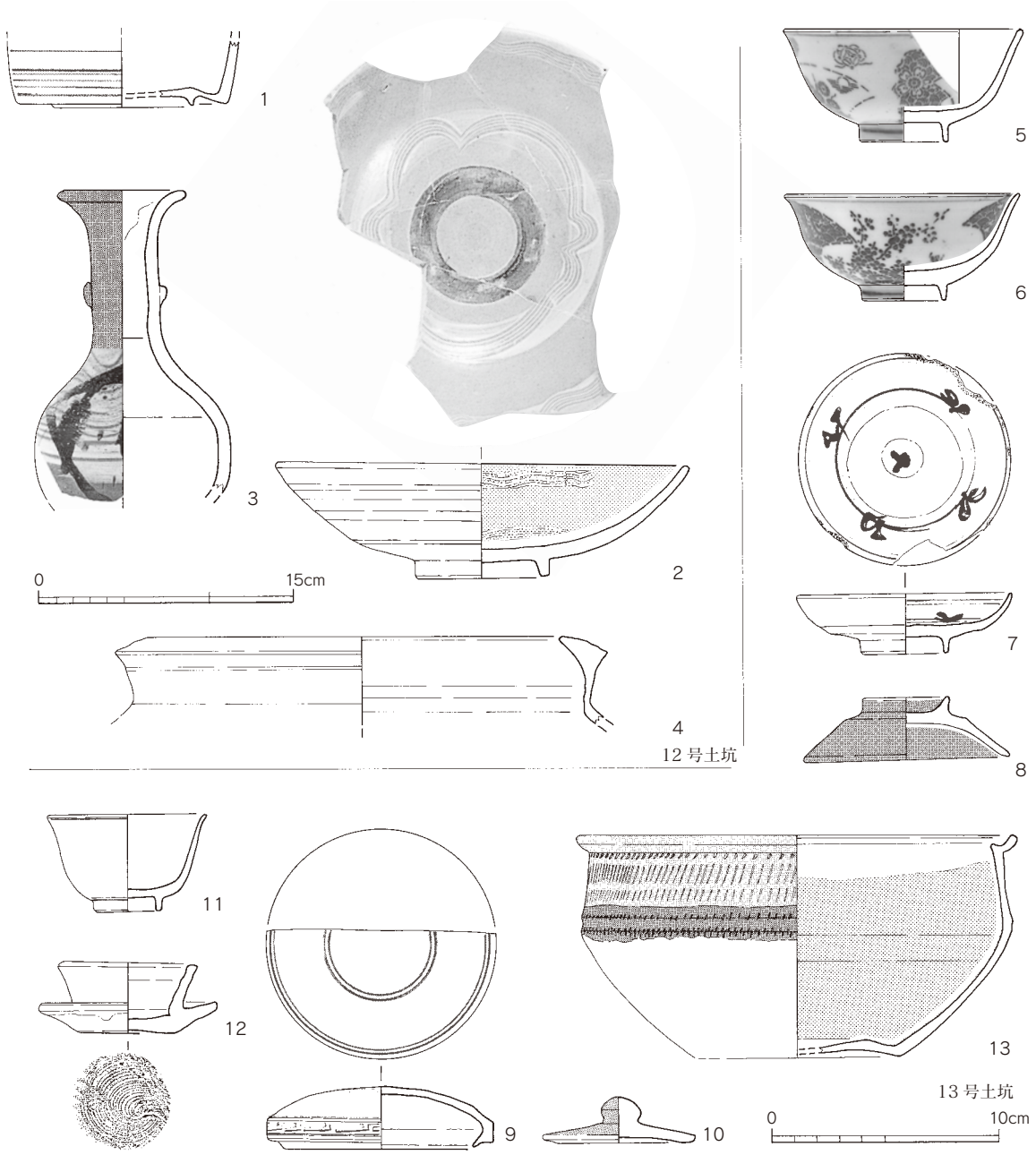
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑６ ９図１	小碗	口径7.8 底径3.4 器高4.2	磁器 完形のため不明	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形	波佐見	1750 〳 1770
土坑６ ９図２	小碗	口径(8.8) 高台径3.6 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅花文と折松葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目跡付着		肥前	1690 〳 1720
土坑６ ９図３ 図版１	小皿	口径6.6 底径4.6 器高1.6	土師質土器 にぶい暗黄灰色	－	外底糸切り	不明	ほぼ完形 底面が黒変している	在地	不明
土坑６ ９図４	小皿	口径(9.6) 高台径5.0 器高2.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	内面に花唐草文、外面に火炎宝珠文、裏銘に寿を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〳 1730
土坑６ ９図５	小皿 ５寸皿	口径(12.8) 高台径5.0 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	内面に２重斜格子文を呉須染付　呉須は発色不良	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ部にアルミナ塗布		波佐見	1750 〳 1810
土坑６ ９図６	皿	口径(32.0)	陶器 橙褐色	内面は三島手の象嵌　外面体部下半に鉄漿ハケ掛け、発色不良で灰白～灰白褐色を呈する釉が内面から外面口縁部に掛けられている		－		肥前	不明
土坑７ ９図７	蓋	裾径9.9 つまみ径4.2 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を内面と高台内に、外面に青磁釉を掛ける	外面は無文、内面口縁部は袈裟襷文帯、内面天井部に５弁花文、裏銘は二重圏に「　」[illegible]呉須染付	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	1770 〳 1780
土坑８ ９図８	碗 端反形	口径(10.6) 高台径4.6 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に墨引きの窓文に零芝文と欠損のため不明なモチーフが交互に描かれ、見込みにも零芝文、内面口縁部には「工」の字列が２段呉須染付されている	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 〳 1860
土坑８ ９図９	鉢 蓋物	口径(8.3) 高台径4.1 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に３つの円文と対面に扇文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 〳 19世紀中葉
土坑８ ９図10	小甕	口径(16.0)	陶器 黄灰白色	内外に鉄釉薄掛け	内面ケズリ、外面カキ目状の横ナデ	口唇部釉剥ぎ		小石原	不明
土坑８ ９図11	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑９ ９図12	小皿	口径(8.6) 底径4.6 器高1.9	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面に胴中位に掛ける	外底糸切り	底部露胎		肥前	1690 〳 1750
土坑10・16 ９図13	碗	口径9.7 高台径(4.3) 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に桐文がコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〳 1740
土坑10 ９図14	小皿	口径(8.2) 底径3.6 器高2.1	陶器 暗橙灰褐色	鉄釉を内面から外面に胴中位に掛ける	外底糸切り	底部露胎		肥前	1690 〳 1750
土坑11 ９図15	小型碗	口径8.0 高台径3.0 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑12 10図１	鉢 蓋物	高台径(6.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に縞文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	畳付が細かく剥離　へたれている	肥前	1740 〳 1780
土坑12 10図２	小皿	口径18.0 高台径6.0 器高5.2	陶器 黄白色	内面に白化粧土を掛け、口縁部と胴下位を残して掻き取りし、残った部分を櫛状に掻き取りする。見込みは蛇ノ目状に釉を掻き取り、鉄漿を塗布する。外面にも白化粧土を掛ける。		畳付釉剥ぎ	見込みの蛇ノ目状釉剥ぎ部に胎土目跡あり	肥前	1690 〳 1780
土坑12 10図３	瓶	口径5.7	陶器 暗橙茶褐色	胴中位まで白化粧土を刷毛掛けし、櫛状掻き取りし、飴釉を流し掛けしたうえに口縁から頸部は鉄釉を上掛け、耳は豆状で、形状を成していない。		－		肥前	1650 〳 1690
土坑12 10図４	甕	口径(29.0)	陶器 にぶい灰色	内外鉄釉で発色不良	外面口縁部は接合部の調整不良でひびが入っている	口唇部は釉剥ぎその上に貝目跡あり		肥前	17世紀後半
土坑13 10図５	碗	口径(10.6) 高台径4.0 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で桜花文と菊花・月を描いた扇文と七宝文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	４割残存	肥前	19世紀後半
土坑13 10図６	碗	口径10.4 高台径3.8 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にコバルト染付で花文と銀杏葉形文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	９割残存	肥前	19世紀後半
土坑13 10図７	小皿 ５寸皿	口径9.4 高台径4.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に花弁文を染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布	口縁部に打ち欠きと黒変	波佐見	1680 〳 1740
土坑13 10図８	蓋	裾径9.2 器高2.8 つまみ径3.8	磁器 灰白色	瑠璃釉を全面に掛ける	無文	つまみ部上端釉剥ぎ	裾部に打ち欠きと煤付着　９割残存	肥前	1760 〳 1780
土坑13 10図９	蓋物蓋	裾径10.0 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に雷文、上面に界線を呉須染付	受け部釉剥ぎ		肥前	不明

８図10は陶器の摺鉢で、全体に赤みをおびているので、焼成が強すぎたためだろう。

９図４は染付の小皿で、発色不良で乳白色を呈し、釉切れも起こしている。９図６は陶器の皿で、発色不良のため釉が灰白～灰白褐色を呈しており、本来の釉調がわからない。

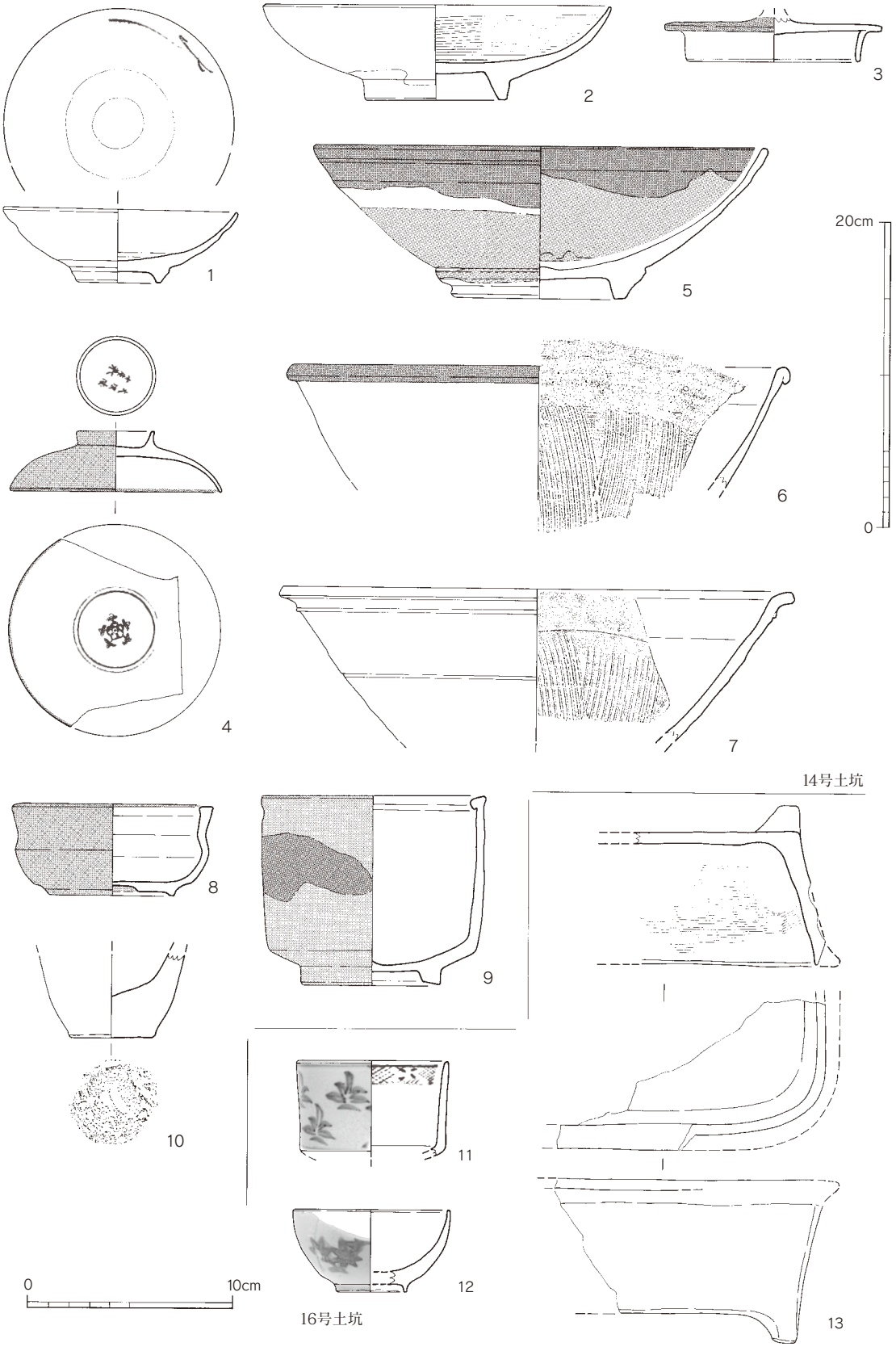
10図１は磁器の筒形碗か蓋物の鉢で、畳付が細かく剥離しているのは焼き台から外した時のものだろう。10図７は磁器の小皿で、口縁部に打ち欠き部分に黒変があるので、灯明皿として使用されている。10図８は磁器の碗蓋だが、裾部の打ち欠き部に煤が付着しているので、本来蓋だが、灯明皿として転用されたことがわかる。10図10は陶器の土瓶蓋で、いわゆる肥前の青土瓶であり、受け部の痕跡が残らない程に丁寧に打ち欠いて急須蓋状に加工している。10図13は低火度の施釉陶器の行平鍋である。把手は接合痕跡が残る。

11図３は陶器の碗で、外底に円文などの刻印はない。11図９は染付の５寸皿で、外底のハリ

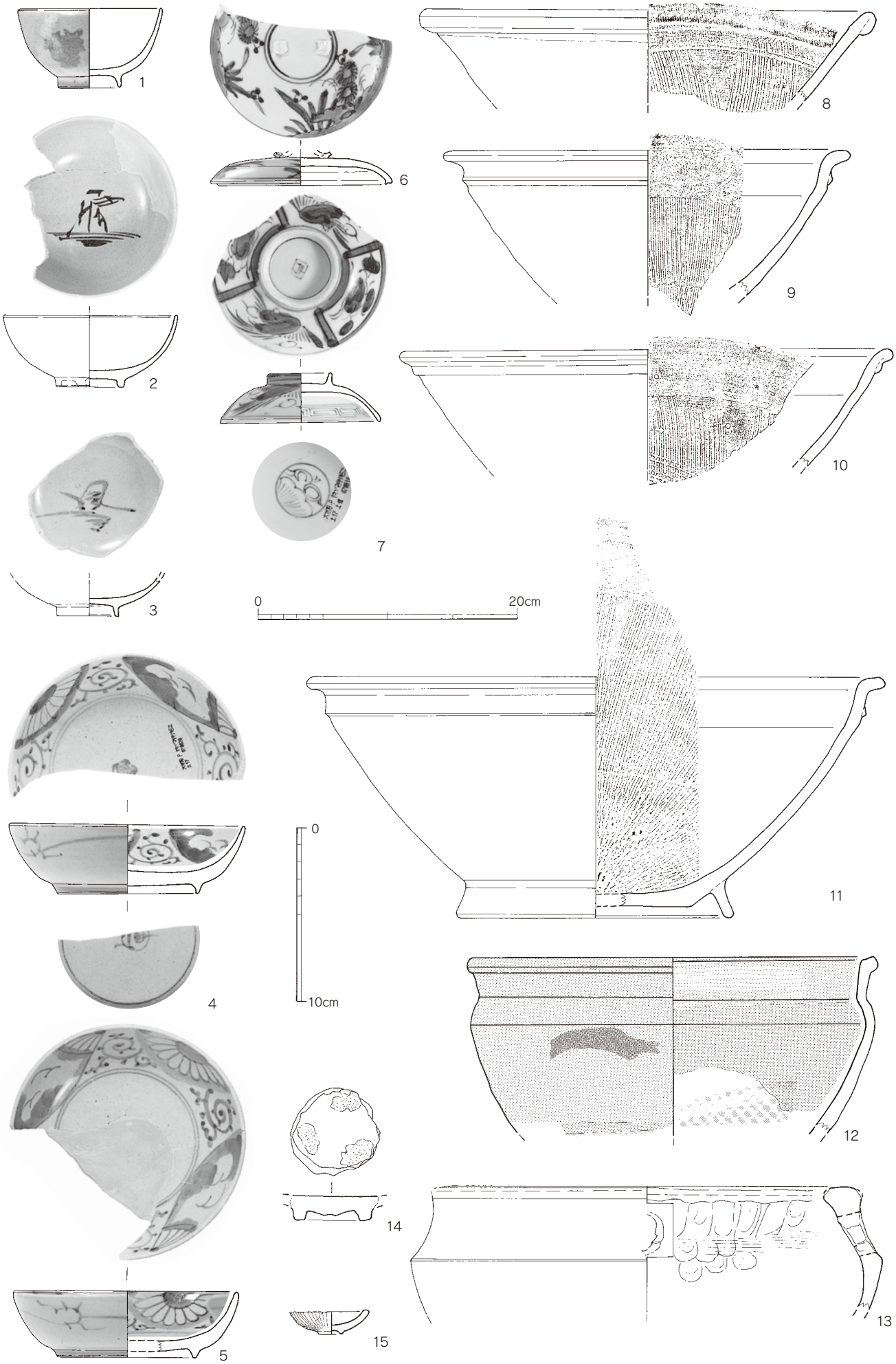


第10図　５次調査12・13号土坑出土陶磁器実測図（４は1/4、他は1/3）

第11図　５次調査14号土坑出土陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3)



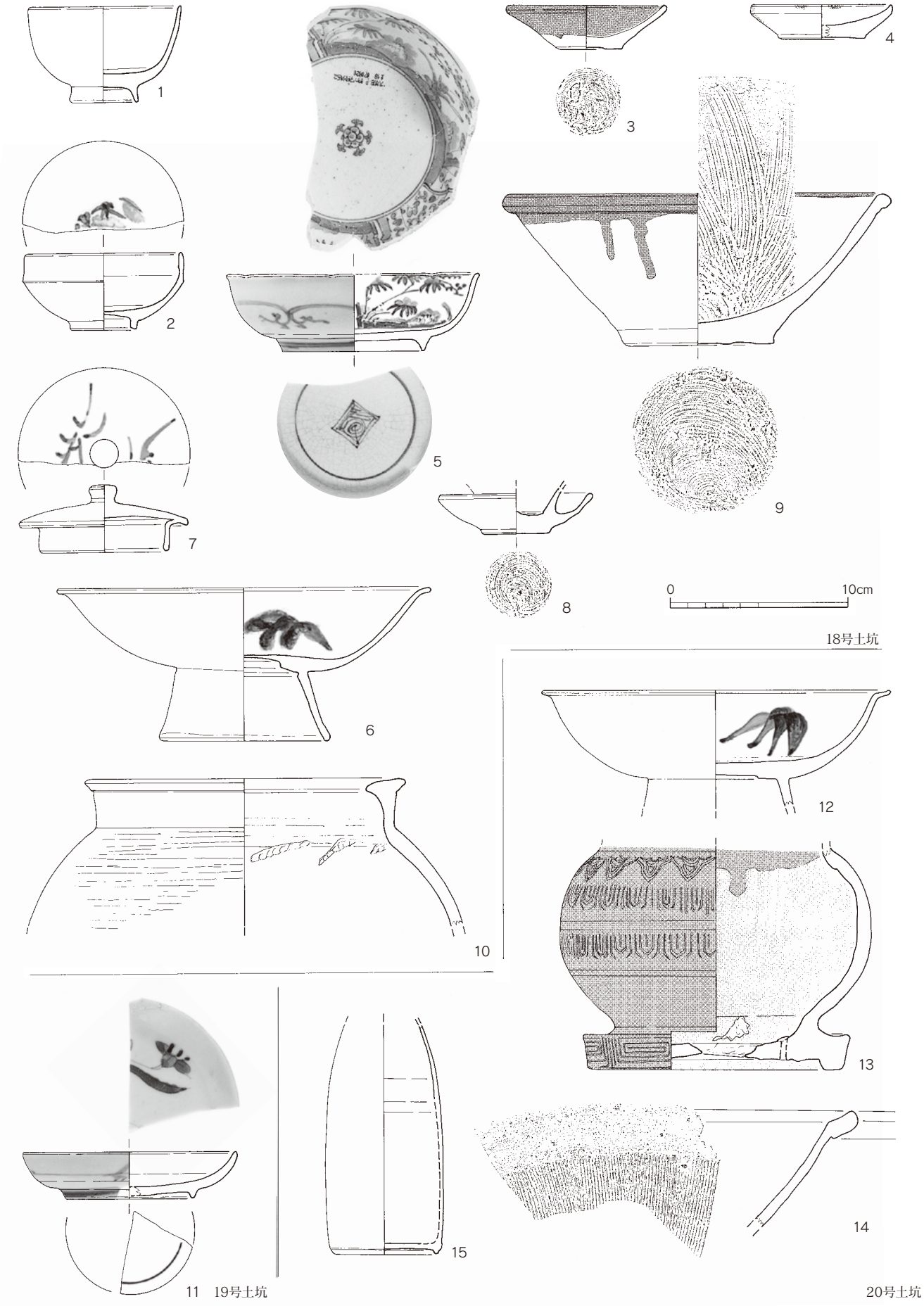
第12図　5次調査14・16号土坑出土陶磁器実測図(5～7･13は1/4、他は1/3)



第13図　５次調査17号土坑出土土器・陶磁器実測図（９～11は1/4、他は1/3）

表５　５次調査出土土器・陶磁器観察表４

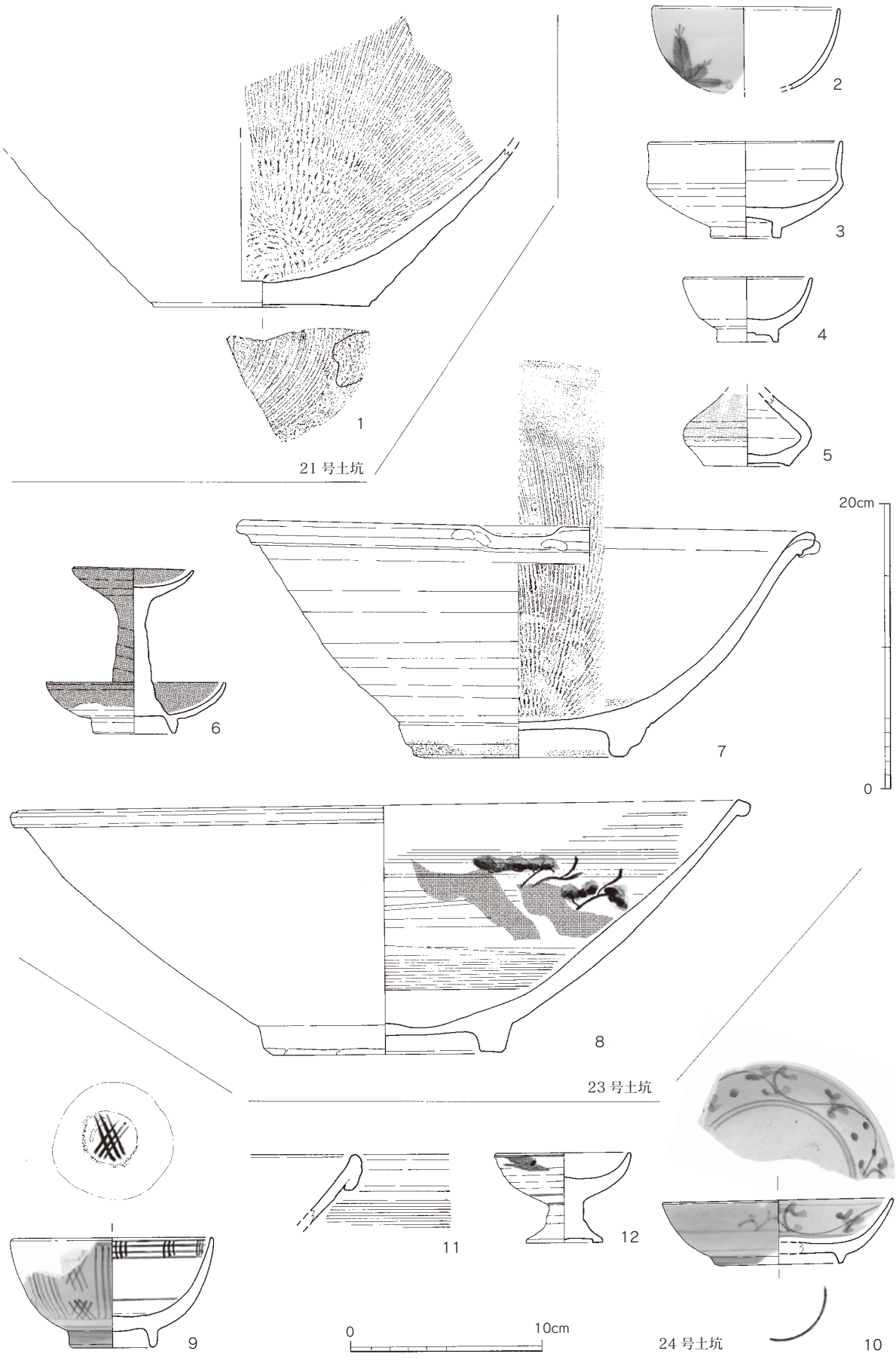
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑13 10図10	蓋 土瓶蓋加工	裾径6.6 器高2.0	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける	側面は平滑に整形している	―		肥前	19世紀前半
土坑13 10図11	杯	口径7.0 高台径3.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に界線を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1710 ～ 1780
土坑13 10図12	灯明受皿	口径6.2 最大径7.8 底径4.4	陶器 橙灰色	鉄釉を内面から裾まで　発色不良で灰白色が残る	外底は糸切り	胴下半露胎 胎土目３つあり		肥前	不明
土坑13 10図13	鍋 行平鍋	口径(19.0)	低火度の施釉陶器 黄灰白色	内面口縁下以下は茶灰色の灰釉厚掛け　外面口縁から肩部は飛び鉋の上に鉄漿、肩部は鉄釉掛け　胴下位は回転ヘラケズリ		畳付釉剥ぎ　砂目付	把手との接合部のみ残る	肥前	不明
土坑14 11図１	碗 拳骨形	口径(9.4) 高台径4.0 器高5.1	陶器 黄灰白色	内外面飴釉の上に藁灰釉流し掛け		高台露胎		小石原	不明
土坑14 11図２	碗	口径(10.4) 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面草花文、裏名は「大明年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 11図３	碗	高台径3.8	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	見込みに鉄絵の山水文	高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11図４	碗	口径10.0 高台径4.0 器高4.6	陶器 黄灰白色 軟質	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	外底に円文の刻印	高台露胎	ほぼ完形 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
土坑14 11図５	碗	口径11.6 高台径4.8 器高6.6	陶器 灰白色 軟質	銅緑釉を外面、透明釉を内面に掛ける		底部露胎		肥前	1690 ～ 1780
土坑14 11図６	小皿	口径(7.5) 高台径(4.7) 器高1.8	土師質 にぶい黄白色	―	外底は糸切り	不明	器面摩滅　内外底面中央が橙色に変色	不明	不明
土坑14 11図７	小皿 ５寸皿	口径(12.2) 底径(7.4) 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に山水文の呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1680 ～ 1710
土坑14 11図８	小皿 ５寸皿	高台径(7.4)	磁器 灰白色	発色不良で灰白色を呈する透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に斜格子の上にコンニャク印判手の菊花文を入れ、見込みに５弁花文、裏銘は「大」まであるので、「大明」を呉須染付	畳付釉剥ぎ	内面の文様が口縁部まで達している	波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 11図９	小皿 ５寸皿	口径(11.6) 高台径(8.2) 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に墨引で流水文　見込みに５弁花文の染付	畳付釉剥ぎ	外底にハリ目跡１つ残る	肥前	1680 ～ 1710
土坑14 11図10	中皿	口径(21.4) 高台径(12.0) 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に唐草文、内面口縁部に墨引で雲文牡丹文を呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ	外底にハリ目跡１つ残る	肥前	1700 ～ 1730
土坑14 11図11	中皿	口径31.1 高台径18.4 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花唐草文、内面に牡丹唐草文と反物文、見込みに雲と波と菊花文、裏銘は「大明成化年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目が崩れて底面に砂目が付着している	９割残存	肥前	1700 ～ 1730
土坑14 12図１	小皿 ５寸皿	口径11.6 底径4.2 器高3.7	磁器 暗灰白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉を全面に掛ける	内面に折れ松葉文を呉須染付	底部露胎　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布		波佐見	1680 ～ 1740
土坑14 12図２	小皿	口径(16.8) 底径6.8 器高3.7	陶器 暗緑黄灰色	内面白化粧土を刷毛掛けし、内面から外面胴部は透明釉を掛ける		高台露胎、畳付にアルミナ塗布　見込みは蛇の目釉剥ぎし、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
土坑14 12図３	土瓶蓋	裾径(10.6)	陶器 黄灰色	外面天井部天目釉	無文　ボタン状のつまみがつくものと思われる	裾下釉剥ぎ		肥前	不明
土坑14 12図４	蓋	裾径10.4 器高3.0 つまみ径3.8	磁器 灰白色	淡い緑釉を外面、外面高台内と内面は透明釉	外面裏銘は「大明成化年製」、内面天井部に５弁花文染付　口唇部口錆	受け部釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
土坑14 12図５	鉢	口径29.3 高台径11.6 器高10.0	陶器 暗紫灰色	内面口縁下以下は鉄釉厚掛け　外面口縁下から胴下位は鉄釉ハケ掛け　その上に内外口縁部のみ茶色がかった鉄釉掛け		見込みに砂目跡あり 高台部露胎	見込みの鉄釉は重ね焼きのため発色不良	肥前	1750 ～ 1860
土坑14 12図６	摺鉢	口径(33.0)	陶器 暗紫灰色	口縁部のみ鉄釉掛け	内面摺り目12本単位	―		肥前	1650 ～ 1690
土坑14 12図７	摺鉢	口径(23.6)	陶器 橙灰色	内外鉄釉　発色不良	内面摺り目単位不明	―		肥前	1750 ～ 1860
土坑14 12図８	鉢 香炉	口径(9.8) 高台径6.0 器高9.1	磁器 灰白色	淡い緑釉を全面掛け発色不良で緑灰白色を呈する		蛇ノ目高台で、高台部は鉄漿塗布	口縁外面の柿釉の色調差は重ね焼きのためか	肥前	不明
土坑14 12図９	鉢	口径(10.6) 高台径6.7 器高9.1	陶器 黄灰色	外面は柿釉の上に鉄絵　見込みにアルミナの円形に付着している		畳付釉剥ぎ	口縁外面の柿釉の色調差は重ね焼きのためか	肥前	不明
土坑14 12図10	焼塩壺	底径4.2	土師質土器 橙灰～黄灰色 混入物なし	―	外底糸切り 内外ナデ	不明	断面に橙色の変色あり	在地	不明



第14図　５次調査18～20号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表6　5次調査出土土器・陶磁器観察表5

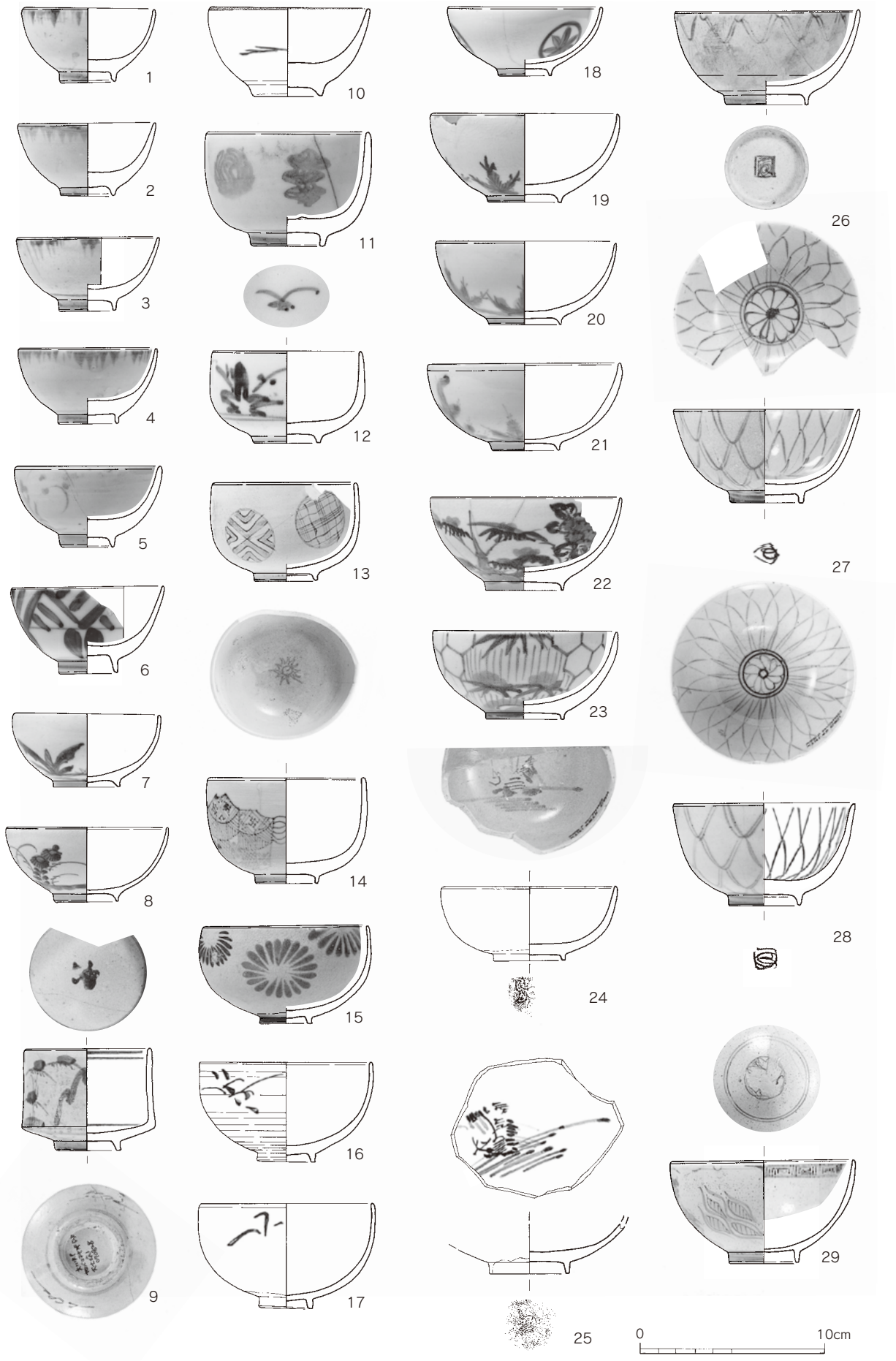
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑16 12図11	碗 筒形	口径(7.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と格子文を呉須染付	―	発色やや不良	肥前	1770 ～ 1780
土坑16 12図12	小碗	口径(7.6) 高台径(3.4) 器高3.8	磁器 灰白色 軟質	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面楓文をコンニャク印判刷り呉須染付			波佐見	1700 ～ 1740
土坑16 12図13	鉢 方形	器高10.6	土師質土器 黒灰～黄灰色 白色粒子多い	―	外面から口唇部まで器面剥離　内面はヨコハケ　板造りか　脚は角にある	不明	内面に煤が付着しているので、火鉢か	在地	不明
土坑17 13図1	碗	口径(8.4) 高台径3.8 器高4.5	磁器 灰白色 軟質	透明釉　全面　発色不良	外面に折菊枝文と思われるのコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1700 ～ 1740
土坑17 13図2	碗 半球形	口径9.9 高台径3.9 器高4.1	陶器 黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を入れた後、透明釉を外面底部以外に全面掛ける		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
土坑17上位 13図3	碗	高台径3.6	陶器 黄灰白色	透明釉を高台以外に掛け、見込みに鉄絵の崩れた山水文		高台露胎	京焼風陶器	肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図4	小皿 ５寸皿	口径13.4 高台径8.2 器高3.9	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に崩れた唐草文、内面は半菊花文と半団扇文の間を蛸唐草文で埋める　見込みに５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	13図5と同一セット	波佐見	1750 ～ 1810
土坑17 13図5	小皿 ５寸皿	口径13.1 高台径8.2 器高3.7	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に崩れた唐草文、内面は半菊花文と半団扇文の間を蛸唐草文で埋める　見込みに５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	13図4と同一セット	波佐見	1750 ～ 1810
土坑17 13図6	蓋	裾径10.4 つまみ長軸3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文呉須染付、つまみは板状で貼り付け	受け部釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13図7	蓋	裾径9.1 つまみ径3.7 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面４分割に枠取りされた中に鳥文と花文が同じモチーフが対面するように入れられており、内面は雷文帯、内面天井部は岩と波文、裏銘は□に青に近い字が入る　呉須染付	受け部釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
土坑17 13図8	小型摺鉢	口径(25.3)	陶器 にぶい黒灰紫色	鉄釉を口縁部のみ	内面摺り目13本単位	―	鉄釉に光沢あり	肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図9	小型摺鉢	口径(29.6)	陶器 にぶい灰白紫色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目10本単位	―	鉄釉に光沢あり	小石原	不明
土坑17 13図10	摺鉢	口径(37.0)	陶器 橙灰色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目17本単位	―	鉄釉に沸騰痕あり	肥前	1750 ～ 1860
土坑17 13図11	摺鉢	口径(43.4) 高台径(20.6) 器高18.5	陶器 にぶい灰白紫色	鉄釉を全面に掛ける	内面摺り目10本単位　外面胴下位に格子目タタキ残る　高台貼り付け	畳付釉剥ぎ　見込みに胎土目跡３つあり		小石原	不明
土坑17 13図12	小型鉢	口径(23.6)	陶器 淡橙灰色	胴下位に内外鉄釉ハケ掛けし、上半にオリーブ色の灰釉を掛けて、口縁部から外面胴上半に白化粧土を上掛け　その上に鉄絵		―		肥前	19世紀前半
土坑17 13図13	火鉢	口径(22.0) 最大径(27.0)	瓦質土器 灰白色が黒灰色を挟む　軟質	―	外面ミガキがあったが摩滅している 内面口縁下部オサエとハケメ 口縁下に穿孔あり	不明	口縁部内外端部が欠損している	在地	不明
土坑17 13図14	円盤形製品	底径4.3	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	小皿底部利用 周縁打ち掻き	畳付釉剥ぎ　見込みに胎土目跡３つあり		肥前	1650 ～ 1690
土坑17 13図15 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.2 器高1.3	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑18 14図1	小型碗	口径(8.4) 高台径3.6 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉　全面に掛ける　貫入あり	内外無文	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1780 ～ 1810
土坑18 14図2	小型碗 腰折形	口径(8.6) 高台径3.7 器高4.3	陶器 黄灰色	緑灰色の灰釉　内面から外面胴下位まで	見込みに竹笹文の鉄絵	胴下位露胎	５割残存	肥前	18世紀中葉
土坑18 14図3	小皿	口径8.7 底径3.7 器高2.5	陶器 完形のため不明	鉄釉を内面から外面口縁部まで　発色不良	外底は糸切り	胴下半露胎	煤付着なし 完形	肥前	1690 ～ 1750
土坑18 14図4	小皿	口径(7.8) 高台径(4.9) 器高1.9	土師質 黄白色	―	外底は糸切り	不明	口縁部に煤付着	蒲池焼	不明
土坑18 14図5	小皿 ５寸皿	口径(14.2) 高台径8.0 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	花弁状口縁　外面に唐草文、内面に松竹梅文、見込みに手描きの５弁花文、裏銘は角福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1700 ～ 1740
土坑18 14図6	台付皿	口径(20.7) 高台裾径9.3 器高8.6	陶器 にぶい黄灰色	透明釉　内面から外面胴下位まで	見込みに緑灰色の灰釉で竹笹文	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	18世紀中葉



第15図　5次調査21・23・24号土坑出土陶磁器実測図(1･7･8は1/4、他は1/3)

表７　５次調査出土土器・陶磁器観察表６

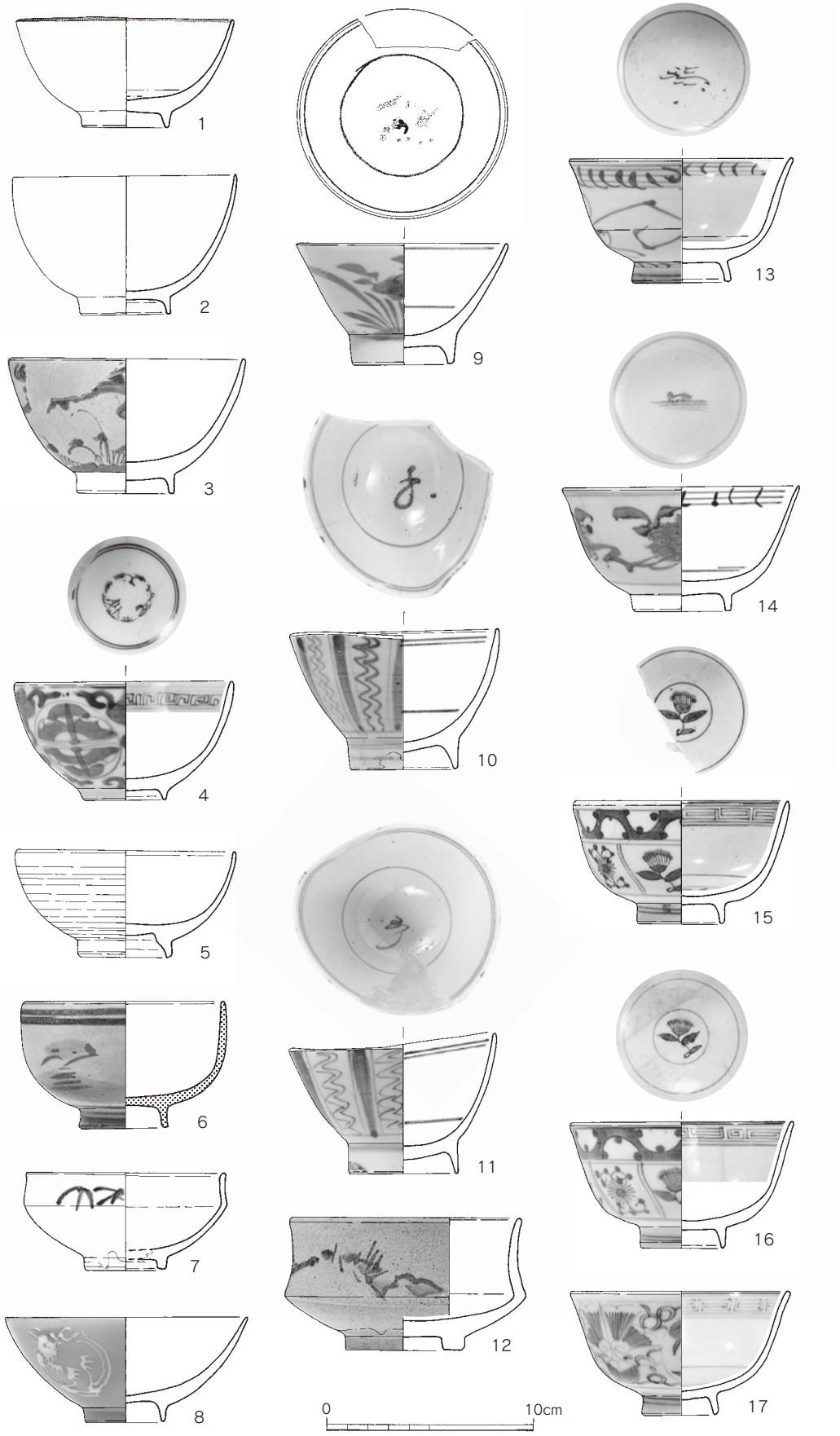
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑18 14図７	蓋	裾径(7.0) つまみ径1.6 器高3.8	陶器 黄灰色	長石釉を上面のみ貫入あり	竹笹文を呉須染付か	下半釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑18 14図８	灯明受皿	最大径8.4 底径3.8	陶器 暗紫灰色	鉄釉を内面から外面胴中位まで　発色不良	外底は糸切り	胴下半露胎	煤付着なし	肥前	不明
土坑18 14図９	小型摺鉢	口径21.8 底径8.3 器高8.6	陶器 にぶい暗橙茶褐色	鉄釉を口縁部のみ	内面摺り目９本単位 外底は糸切り	底部の側面に胎土目の痕跡である窪みあり	鉄釉に光沢あり	肥前	1650 ～ 1690
土坑18 14図10	甕	口径(17.1)	陶器 外面側橙褐色 内面側灰色	内外鉄釉で発色不良	外面肩部にカキ目 内面肩部は格子目タタキ当て具痕あり	口唇部は釉剥ぎその上に貝目跡あり	肩部内面はタタキ当て具痕跡が斜めに残っている	肥前	17世紀後半
土坑19 14図11	小皿 ５寸皿	口径(12.0) 高台径(7.2) 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に水仙文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		肥前	1680 ～ 1710
土坑20 14図12	台付皿	口径19.3	陶器 にぶい黄灰色	透明釉　内面から外面胴下位まで	見込みに鉄絵で竹笹文を描く	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	台部に接合位置が中心からずれている	肥前	18世紀中葉
土坑20 14図13	鉢転用植木鉢	底径14.2 最大径17.4	陶器 黄白色　黒粒子でざらつく	内面口縁部から外面は縁釉　貫入あり　内面と外底は鉄釉ハケ掛け	外面三島手状の印刻型押し底面に２箇所対面に穿孔しており、内面はそれを塞いでいる	畳付釉剥ぎ 見込みに砂目跡６つ付着	胎土が特徴的	瀬戸か	19世紀
土坑20 14図14	摺鉢	—	陶器 暗紫灰色	内外鉄釉	内面摺り目22本単位	—		肥前	1750 ～ 1860
土坑20 14図15	瓶	底径5.8	陶器 黄白色　黒粒子でざらつく	透明釉　貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	胎土が特徴的	瀬戸か	不明
土坑21 15図１	摺鉢	底径(11.2)	陶器 橙～暗橙灰色		内面摺り目13本単位	外面底部に胎土目跡あり		肥前	1650 ～ 1690
土坑23 15図２	碗	口径(10.6)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面花文と格子文を呉須染付	—		肥前	1710 ～ 1750
土坑23 15図３	碗	口径10.2 高台径3.7 器高5.1	陶器 黄灰色	貫入のある黄灰色の灰釉　内面から外面胴下位まで	外面口縁下に竹笹文の鉄絵	底部露胎	４割残存	肥前	18世紀中葉
土坑23 15図４ 図版１	小碗	口径6.6 高台径3.2 器高3.5	陶器 完形のため不明	飴釉を外面胴下位まで	無文　高台削り出し	底部露胎	完形　畳付まで釉が掛かったため砂が付着している	肥前	1690 ～ 1780
土坑23 15図５	髪油壺	底径(4.6) 最大径(6.7)	陶器 灰白色	飴釉を外面胴下位まで	無文　高台削り出し	底部露胎	４割残存	小石原か	1780 ～ 1860
土坑23 15図６	灯明受皿	口径6.3 高台径4.4 最大径9.4	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	上部と下部は別造りしたもの	底部露胎	８割残存	肥前	不明
土坑23 15図７	摺鉢	口径40.8 高台径15.3 器高16.8	陶器 橙灰～暗青灰色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	内面摺り目単位不明	底部露胎		肥前	不明
土坑23 15図８	鉢	口径(52.4) 高台径16.4 器高17.5	陶器 暗紫灰色	内面は白化粧土を刷毛掛けし、鉄絵で雲と山を描いた上に鉄釉と緑灰釉で松樹を上描き、外面は上半に鉄釉を掛け、その上に白化粧土を掛けた後に帯状釉掻き取り、下半は鉄釉を掛けた後、櫛状に掻き取り		畳付釉剥ぎ	釉垂れは白化粧土で、倒立して掻き取りして垂れたものが、正置したため逆に垂れたのであろう	肥前	1690 ～ 1750
土坑24 15図９	碗	口径10.8 高台径4.4 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	
土坑24 15図10	小皿 ５寸皿	口径(12.8) 高台径(6.7) 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた唐草文、内面に水仙文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1710
土坑24 15図11	摺鉢	—	陶器 にぶい灰橙色が灰黒色をはさむ	鉄釉を全面	外面に崩れた唐草文、内面に唐草文を呉須染付	—	鉄釉に光沢なし	肥前	1650 ～ 1690
土坑24 15図12	仏飯器	口径(7.1) 裾径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面に崩れて、本来の文様のわからないモチーフを染付	底部釉剥ぎ	６割残存	波佐見	不明
大土坑１中層 16図１	小碗	口径7.2 高台径2.8 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	７割残存	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図２	小碗	口径7.6 高台径2.8 器高4.0	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	７割残存	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部 16図３	小碗	口径7.8 高台径3.2 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付	発色不調	肥前	1700 ～ 1740



第16図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図１(1/3)

表８　５次調査出土土器・陶磁器観察表７

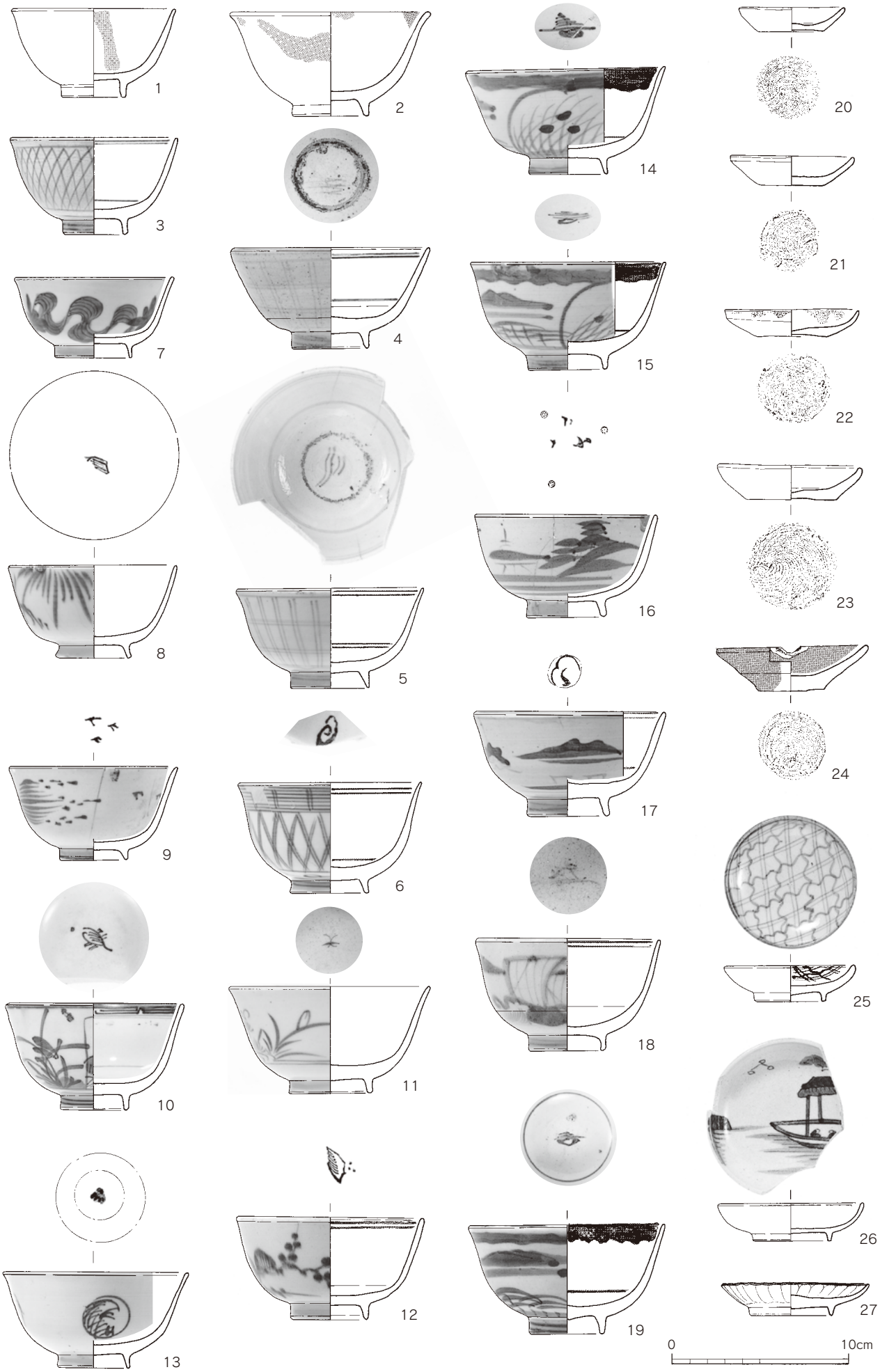
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大土坑１南部上層 16図４	小碗	口径7.5 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	釉切れあり 完形品	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図５	小碗	口径8.0 高台径2.9 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を高台以外に掛ける	外面に花草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形品	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１中層 16図６	小碗	口径8.3 高台径3.2 器高4.7	磁器 灰白色 ガラス質	内外薄いクロム青磁釉を掛け、高台内のみ透明釉	外面上半に太線で鋸歯文、下半に花弁文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ　砂目付		瀬戸	20世紀前半
大土坑１南部上層 16図７	小碗 半球形	口径8.0 高台径2.6 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図８	小碗 半球形	口径8.4 高台径3.3 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文が対面に呉須で染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１ 16図９	小碗 筒形	口径(7.2) 高台径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面に薊文、内面口縁部に界線、見込みに崩れた５弁花文呉須で染付	畳付アルミナ塗布		肥前	1770 ～ 1780
大土坑１南部上層 16図10 図版１	小碗 端反形	口径8.7 高台径3.8 器高5.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口錆あり　外面の鉄絵状のものは偶発的なもので、本来無文だろう	畳付釉剥ぎ	厚手	肥前か	1710 ～ 1750
大土坑１上層 16図11	小碗 端反形	口径9.0 高台径4.1 器高5.7	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面にはコンニャク印判刷り鶴と松文を交互に呉須染付	畳付釉剥ぎ	器壁が厚く、重い	肥前	1730 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図12	小碗	口径8.2 高台径3.4 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に楓葉形の草文、見込みに蝶文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 16図13	小碗 腰張形	口径7.9 高台径3.5 器高5.3	磁器 灰白色 軟質	透明釉全面掛け　発色不良で乳白色	外面に丸文散らし、見込みに昆虫文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
大土坑１中層 16図14	碗 半球形	口径8.5 高台径3.4 器高5.7	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた昆虫文と宝文、見込みに火炎宝珠文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 16図15	碗 半球形	口径(9.0) 高台径2.8 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けた後、外面に黒、緑と青彩の花文の上絵付け　貫入あり		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 16図16	碗 半球形	口径9.6 高台径3.0 器高5.6	陶器 黄灰白色	外面に鉄絵の竹笹文を描いた後、透明釉を高台以外に掛ける		底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図17	碗 半球形	口径(9.4) 高台径3.1 器高5.7	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛けた後、外面に黒、緑と青彩の花文の上絵付け　貫入あり		底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図18	小碗	口径8.6 高台径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に丸に楓葉文の手描き呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図19	碗	口径9.9 高台径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	底部が厚い ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図20	碗	口径10.1 高台径4.1 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	底部が厚い	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図21	碗	口径(10.5) 高台径3.7 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に若松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１南部上層 16図22	碗 半球形	口径10.3 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と竹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大土坑１中層 16図23	碗 半球形	口径10.0 高台径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面に竹文と亀甲文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１南部上層 16図24	碗 半球形	口径(9.4) 高台径3.8 器高4.0	陶器 暗黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を入れた後、発色の悪い暗い透明釉を外面底部以外に全面掛ける　外底に「清水」の刻印		底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 16図25	碗	高台径4.4	陶器 黄灰白色	見込みに鉄絵の山水文を描き、透明釉を高台以外全面掛け　裏銘は「清水」と円の刻印		高台露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀後半
大土坑１南部上層 16図26	碗	口径9.9 高台径4.6 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色不良で白濁する	外面は二重網目文、裏銘は角福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	９割残存	肥前	1690 ～ 1720
大土坑１中層 16図27	碗	口径(10.0) 高台径3.9 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は二重網目文、内面は網目文、見込みは菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750



第17図　5次調査１号大土坑出土陶磁器実測図２(1/3)

表９　５次調査出土土器・陶磁器観察表８

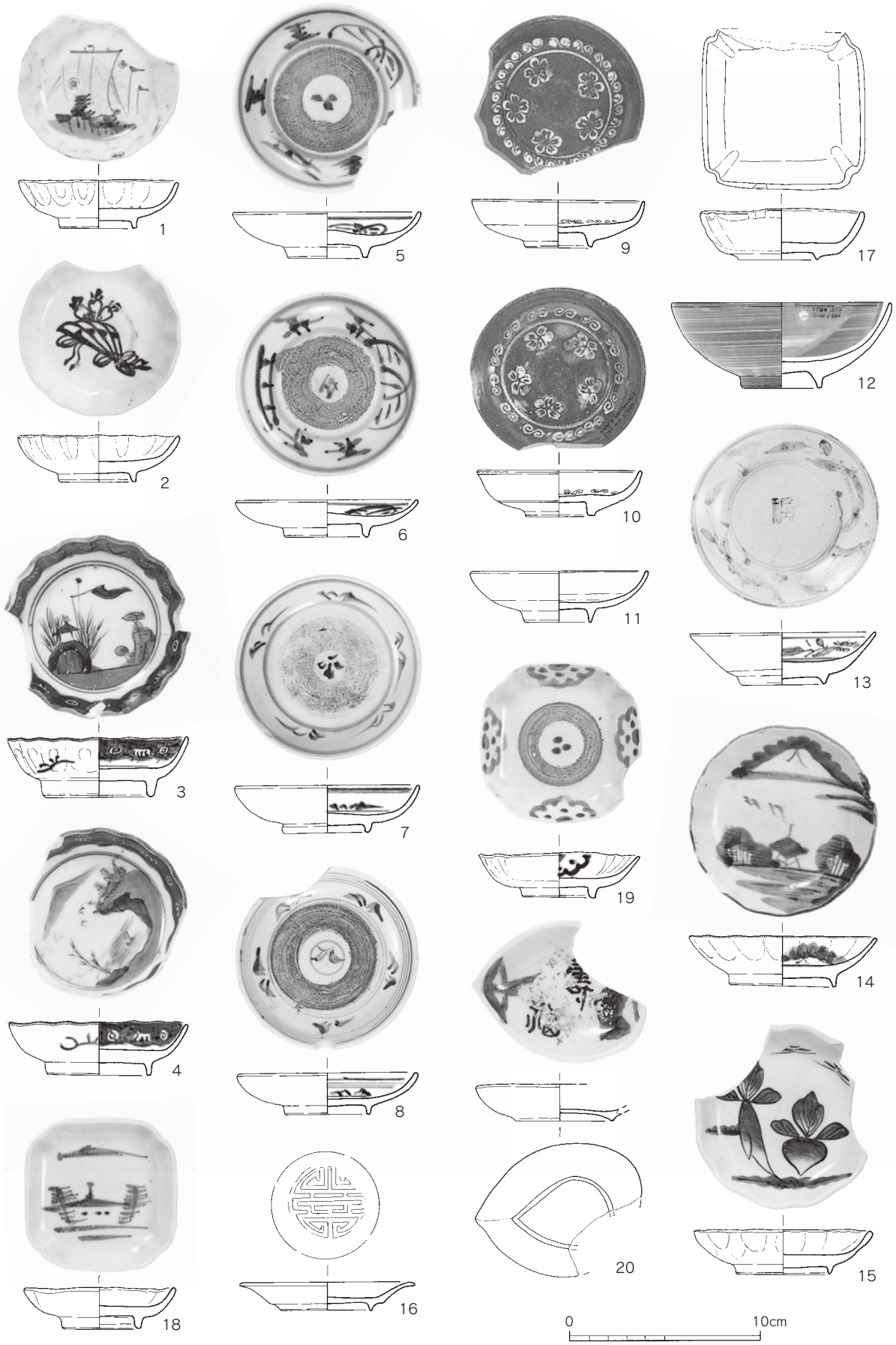
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１中層 16図28	碗	口径9.7 高台径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は二重網目文、内面は網目文、見込みは菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750
大土坑１中層 16図29	碗	口径9.9 高台径3.8 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面はよろけ縞文と菊花文が交互に入る。内面は口縁部が変形雷文帯、見込みは崩れた管状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１南部上層 17図１	碗	口径10.4 高台径4.2 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大土坑１ 17図２	碗	口径10.9 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大土坑１中層 17図３	碗	口径10.7 高台径4.3 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面は島・草花・雲文、高台内に界線を呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良で赤変している	肥前	1700 ～ 1740
大土坑１ 17図４	碗	口径10.4 高台径4.1 器高5.6	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は花文地で、丸内に相向かいの蝶文が入る。内面は口縁部が雷文帯、見込みは崩れた管状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１南部上層 17図５	碗	口径(10.7) 高台径4.4 器高5.3	陶器 にぶい暗黄灰色 精良	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部上層 17図６	碗 陶胎染付	口径9.9 高台径4.2 器高6.0	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で全体に暗い	外面口縁下に２重界線と山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ			18世紀中葉
大土坑１南部上層 17図７	碗 腰折形	口径9.6 高台径4.0 器高4.7	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵で竹笹文を描いた後、透明釉を高台以外に掛ける	畳付釉剥ぎ	８割残存 京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
大土坑１中層 17図８	碗 平形	口径11.8 高台径4.0 器高5.1	磁器 灰白色 ガラス質	内面透明釉、外面薄いクロム青磁釉を掛ける	外面にイッチンで龍文を描く　位置から４箇所にあっただろう	畳付釉剥ぎ 砂目付		瀬戸	20世紀前半
大土坑１上層 17図９	碗 広東形	口径10.2 高台径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた鳥文と水仙文、見込みに鳥文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図10	碗 広東形	口径10.2 高台径5.1 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ縞文、見込みに寿字文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	焼成時のへたれ著しい	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図11	碗 広東形	口径10.2 高台径5.4 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面によろけ縞文、見込みに寿字文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	焼成時の歪み著しい	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１中層 17図12	碗 腰折形	口径(10.3) 高台径3.8 器高6.4	陶器 灰白色	黄灰色の灰釉を外面胴下位から内面に掛けた後、外面に鉄絵を描く　貫入あり		－	京焼風陶器	肥前	不明
大土坑１中層 17図13	碗 端反形	口径10.8 高台径4.4 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内外面の口縁部と外面胴下位には重界線に連続弧文を加えた文様帯があり、外面はその間に宝珠文と鍵文が交互に入り、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 17図14	碗 端反形	口径11.4 高台径4.8 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には不明文、内面口縁部に縞文に縦線が入り、見込みに波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１ 17図15	碗 端反形	口径10.4 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に薊文と菊花文が交互に入る　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに薊文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 17図16	碗 端反形	口径10.7 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面の口縁部に墨引きによる雪ノ輪文帯、その下に枠内に薊文と菊花文が交互に入る　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに薊文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	15・16は同じセット	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 17図17	碗 端反形	口径10.4 高台径3.6 器高6.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面は幾何学的な花弁文　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに崩れた環状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図１	碗 端反形	口径(9.3) 高台径3.6 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、内面口縁部に銅緑釉を流し掛け		見込みにハリ目跡３つあり 畳付釉剥ぎ	内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑１南部上層 18図２	碗 端反形	口径(11.4) 高台径4.4 器高6.2	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛けた後、口縁部に鉄釉と銅緑釉を流し掛け　貫入あり		見込みにハリ目跡あり 畳付釉剥ぎ	内面が変色しているのは重ね焼きのためだろう	肥前	不明
大土坑１ 18図３	碗 端反形	口径9.6 高台径3.7 器高5.5	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面に斜格子文、見込みに格子文を染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1850 ～ 1860
大土坑１中層 18図４	碗 端反形	口径11.2 高台径4.2 器高5.7	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は２重格子文、見込みに松葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに重ね焼き痕	発色不良で透明釉に孔があく	波佐見	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図５	碗 端反形	口径10.8 高台径4.4 器高5.5	磁器 灰白色	外面は２重格子文、内面見込みに波文を呉須染付　その後蛇ノ目にアルミナを塗布して透明釉を掛けている		畳付釉剥ぎ 見込みに重ね焼き痕		波佐見	19世紀中葉



第18図　5次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表10　５次調査出土土器・陶磁器観察表９

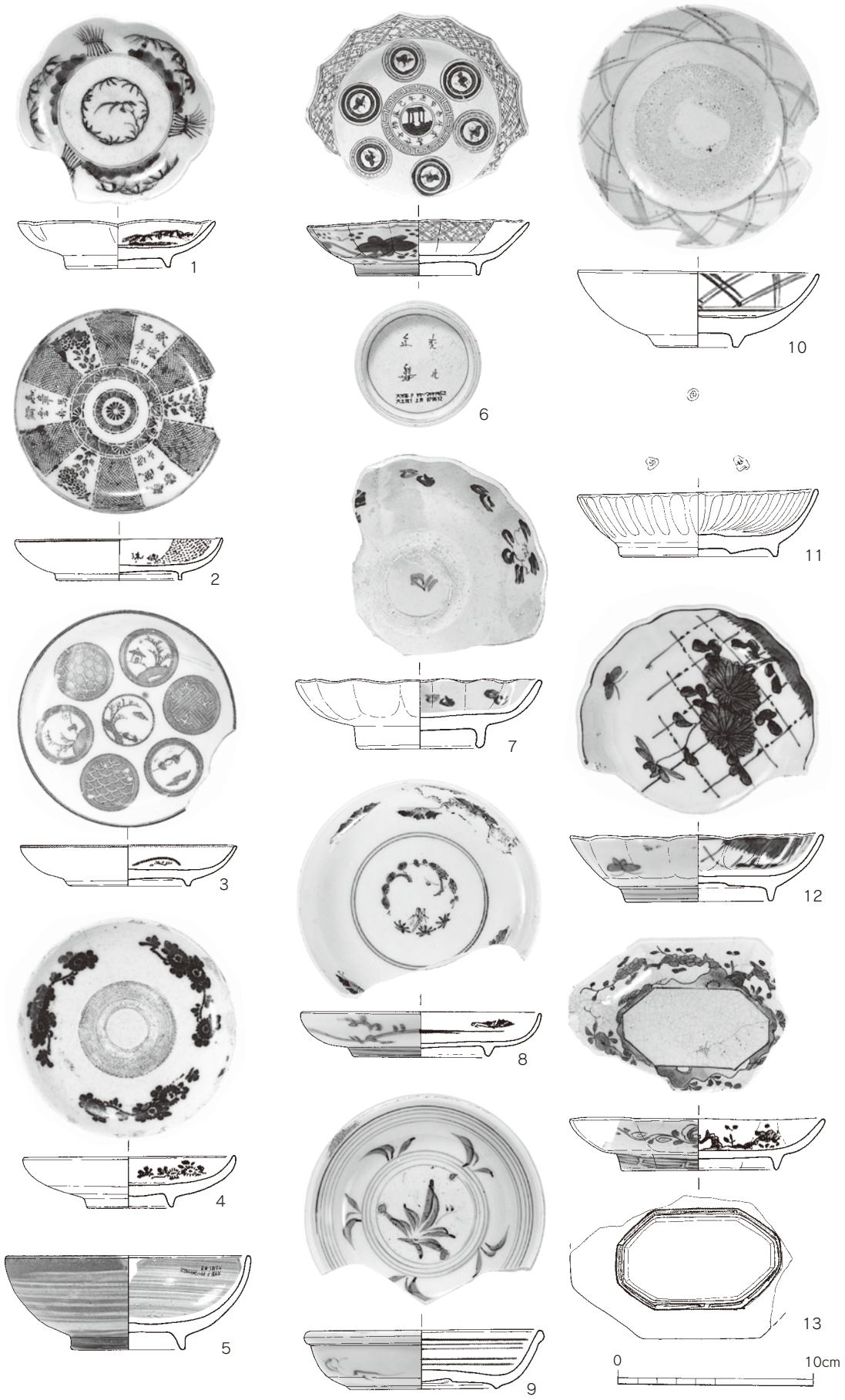
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大土坑１上層 18図６	碗 端反形	口径(10.4) 高台径4.4 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には口縁部に縞文に２本単位の縦線が入り、その下に２重網目文、下位は雲文帯、内面は口縁部２重界線で、見込みに崩れた雲文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 18図７	碗 端反形	口径(9.0) 高台径2.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける	外面に若松文と布文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前葉
大土坑１中層 18図８	碗 端反形	口径(9.7) 高台径4.2 器高5.3	磁器 灰黄白色	透明釉を高台以外に掛ける 貫入あり	外面に草文、見込みに岩文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図９	碗 端反形	口径9.5 高台径3.8 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に稲藁文と鳥文、見込みに鳥文をコバルト須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 18図10	碗 端反形	口径10.1 高台径4.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花草文と蝶文　内面は口縁部に雷文が入り、見込みに崩れた虫文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図11	碗 端反形	口径11.4 高台径4.8 器高6.1	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に草花文・蝶文、見込みに蝶文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図12	碗 端反形	口径10.5 高台径4.5 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に梅樹文、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	呉須に滲みあり	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図13	碗 端反形	口径10.4 高台径4.0 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸にススキ文、見込みに不明文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ後アルミナ塗布		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 18図14	碗 端反形	口径11.4 高台径4.4 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図15	碗 端反形	口径(11.2) 高台径4.6 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図16	碗 端反形	口径10.4 高台径4.5 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良で白濁する	外面には木・建物文が、見込みに崩れた鳥文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡３つあり		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 18図17	碗 端反形	口径10.7 高台径4.7 器高6.1	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面には島・松・帆掛船文が、見込みに崩れた雲文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ後アルミナ塗布	ほぼ完形	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 18図18	碗 端反形	口径10.5 高台径4.3 器高6.4	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面は雲から出る太陽、帆掛文、島文、見込みに波濤文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	波佐見	19世紀中葉
大土坑１上層 18図19	碗 端反形	口径11.1 高台径4.2 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面にはすすき文の入る丸区画と樹と雲文が交互に描かれており、内面は口縁部ダミで、見込みに崩れた波濤文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図20 図版１	小皿	口径6.1 高台径3.8 器高1.4	土師質土器 暗黄灰～橙褐色	－	外底糸切り	不明	完形 歪みあり	在地	不明
大土坑１南部上層 18図21	小皿	口径7.1 底径2.4 器高1.7	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	９割残存　赤変は焼塩壺の蓋として使用したためだろう	蒲池焼	不明
大土坑１上層 18図22 図版１	小皿	口径7.8 底径3.8 器高1.6	土師質土器 黄橙灰～橙色	－	外底糸切り	不明	完形　内面と口縁部が黒変しているので、灯明皿として使用	蒲池焼	不明
大土坑１南部上層 18図23 図版１	小皿	口径8.3 底径5.1 器高2.1	土師質土器 橙灰～暗黄灰色	－	外底糸切り	不明	完形　内面が変色しているが、外面も同様なので、廃棄後の変色だろう	蒲池焼	不明
大土坑１中層 18図24 図版１	小皿	口径8.6 底径3.9 器高2.6	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面口縁部まで塗布　底部糸切り		底部露胎	ほぼ完形　口縁部の打ち掻きが黒変しているので灯明皿として使用している	肥前	不明
大土坑１上層 18図25	小皿	口径7.5 高台径4.2 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内面によろけ文と２重斜格子文、口唇部は口錆状に呉須で染付	畳付釉剥ぎ		波佐見か	19世紀中葉
大土坑中層 18図26	小皿 端反	口径9.2 高台径4.6 器高1.5	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みは隷字の「寿」が印刻している	畳付釉剥ぎ		美濃	19世紀中葉
大土坑１南部上層 18図27 図版１	小皿 菊花形	口径8.4 高台径4.8 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型 口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	不明



第19図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図３(1/3)

表11　５次調査出土土器・陶磁器観察表10

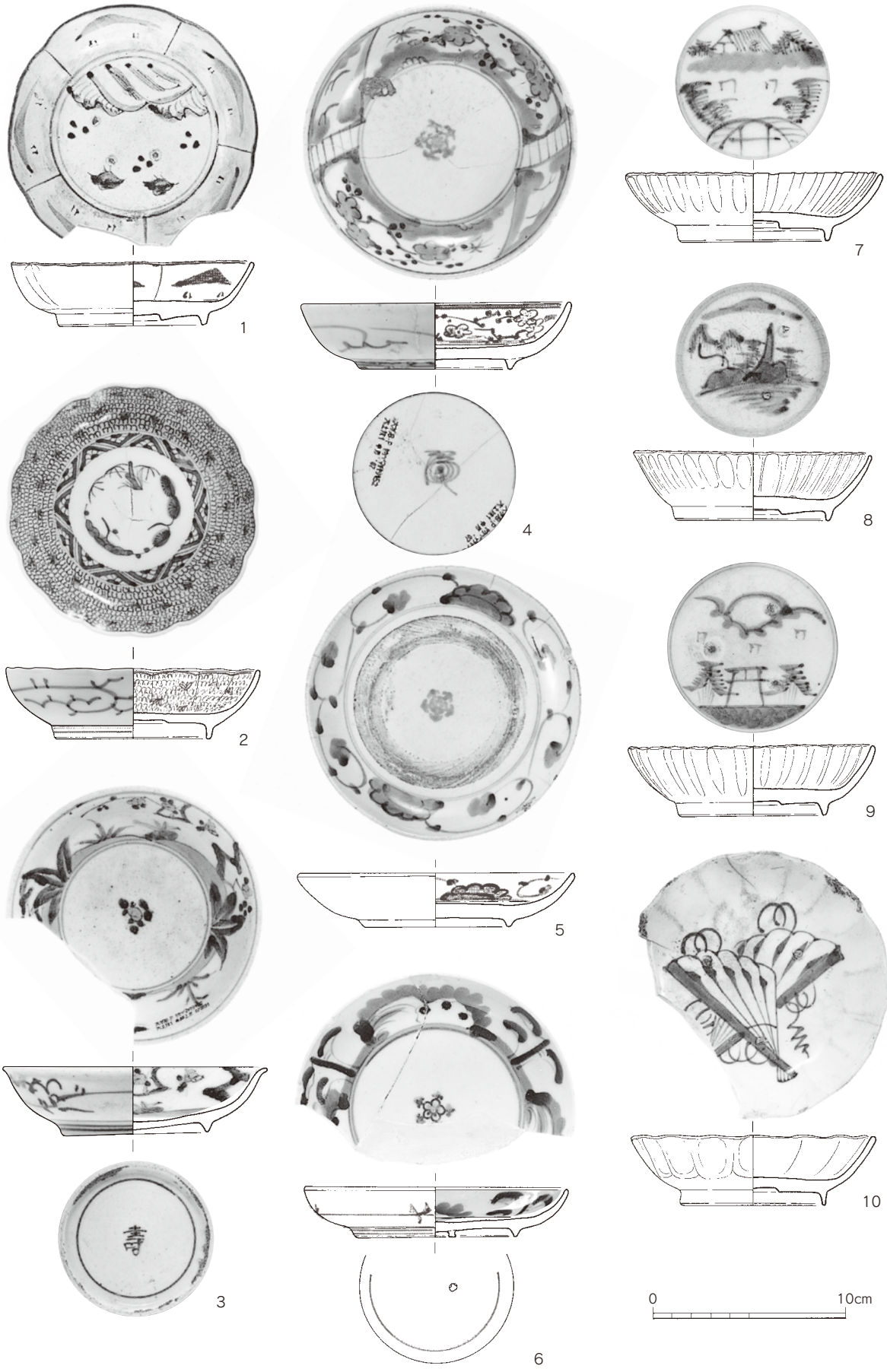
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１南部上層 19図１	小皿 5寸皿 菊花形	口径8.5 高台径4.1 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面無文、内面に帆掛船文をコバルトで染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ	８割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 19図２	小皿 5寸皿 菊花形	口径8.6 高台径4.1 器高2.4	磁器 灰白色	発色不良で乳白色の透明釉全面	型打ち成型 見込みに花と扇子文を呉須染付	蛇ノ目高台で高台部釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 19図３	小皿 菊花形	口径9.3 高台径5.8 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面唐草文　内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後葉
大土坑１南部上層 19図４	小皿 菊花形	口径9.3 高台径5.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面唐草文　内面口縁部は墨引きの記号化文字文、見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後葉
大土坑１上層 19図５	小皿	口径9.7 高台径4.5 器高2.4	磁器 完形のため不明	光沢のある透明釉　全面	内面に社・山・木文、見込みは不明モチーフを呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込み蛇の目釉剥ぎ後アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 19図６	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.0	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに崩れた山と木と鳥居文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布	アルミナは褐色に変色している	肥前	19世紀中葉
大土坑１上層 19図７	小皿	口径9.7 高台径4.6 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は界線と界線の間と見込みに崩れた花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　蛇の目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 19図８	小皿	口径9.5 高台径4.5 器高2.1	磁器 暗灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	内面は４重界線と３重界線の間と見込みに崩れた花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布	アルミナは黒褐色に変色している	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 19図９	小皿	口径9.1 高台径3.6 器高2.5	陶器 暗橙褐～紫灰色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ	発色不良で、胎の色調が暗い	肥前	不明
大土坑１中層 19図10	小皿	口径8.6 高台径3.7 器高2.4	陶器 暗橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１黒色土 19図11	小皿	口径9.4 高台径3.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 蛇ノ目釉剥ぎ部にアルミナ塗布	見込みに赤色が残るので、赤が上絵付けされていた可能性がある	肥前	不明
大土坑１南部上層 19図12	小皿	口径11.4 高台径4.4 器高4.4	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の刷毛掛け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部上層 19図13	小皿	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 暗灰白色	発色不良の乳白色の透明釉を全面に掛ける　外面は発色不良のためモチーフ不明だが、内面には葉と木と虫文らしいもの、見込みには「福」が入る		畳付釉剥ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑１南部上層 19図14	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.9 高台径5.7 器高2.6	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に墨引きで山を描き、樹と鐘楼を呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ	口縁部の欠損部が黒化	肥前か	19世紀中葉
大土坑１ 19図15	小皿 5寸皿 花弁形	口径9.4 高台径5.0 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　内面に大根と蕪を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 19図16	小皿 端反	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みは隷字の「寿」が印刻している	畳付釉剥ぎ		美濃	19世紀中葉
大土坑１中層 19図17	小皿 変形小皿 方形	口径9.9 高台径4.6 器高2.7	磁器 灰白色	長石釉を内面から外面中位に掛ける	型打ち成型で、底面を抉って、小さな高台をつくる　貫入を意匠している	畳付釉剥ぎ		不明	19世紀後半
大土坑１中層 19図18	小皿	口径8.3 高台径4.4 器高2.2	磁器 灰白色　発色不良でやや軟質	発色不良で乳白色の透明釉全面	見込みに赤壁舟遊図の舟人物文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 19図19	小皿 変形小皿 方形	長軸9.1 高台径3.9 器高2.3	磁器 暗灰色	暗い透明釉 全面	内面各辺口縁部に半花文、見込みに３つの点文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１ 19図20	小皿 変形小皿 葉形	長軸(8.7) 短軸7.1 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面不明文と葉文、見込みに「寿」と「福」を呉須染付 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	肥前	不明
大土坑１中層 20図１	小皿 5寸皿 花弁形	口径10.2 高台径5.4 器高2.4	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に竹笹と稲藁束文、見込みに環状の竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１上層 (黒色土) 20図２	小皿	口径10.7 高台径6.4 器高2.1	磁器 白色	透明釉を全面に掛ける	内面に型紙刷りで、点描文による区画が１つおきにあり、その間を牡丹文の入る区画と漢詩文の入る区画が交互に入る　見込みに花文と扇形波紋文の環状文の中に花文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		瀬戸	19世紀後半
大土坑１上層 (黒色土) 20図３	小皿	口径11.1 高台径6.2 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に銅版刷りで、山水文と幾何学文の入る丸文を交互に配置し、見込みは山水文の小さい丸文をコバルト染付 口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図４	小皿	口径10.9 高台径4.9 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は型紙摺りの菊花文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ　見込み蛇の目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉



第20図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図４（1/3）

表12　5次調査出土土器・陶磁器観察表11

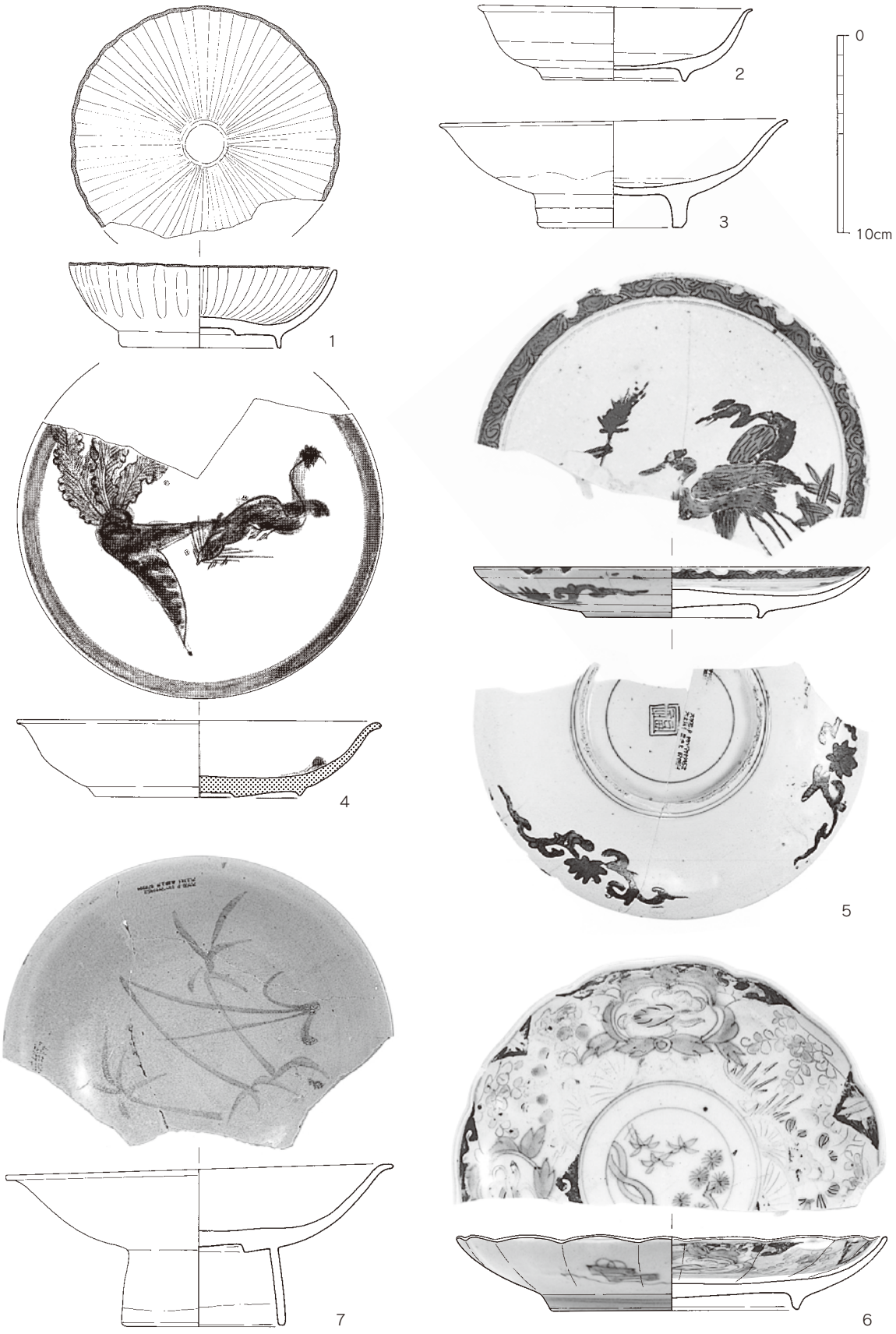
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１中層 20図５	小皿	口径(12.4) 高台径4.6 器高4.7	陶器 灰色	透明釉を全面に掛ける	高台を除く内外白化粧土の刷毛掛け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 20図６	小皿 変形小皿 14角形	口径11.4 高台径6.4 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛け、突出する角を持つ型打ち成型 内面胴部は斜格子内に階段状の線が交差するモチーフに梅花と水仙花文を散らしている　見込み外周に騎馬文を中心に入れる円文が６つあり、その内側に雷文帯内に12支の漢字文帯が入り、中央は石垣の上に建つ建物文が染付けされている　外面は胴部に変形唐草文、裏銘は「成化年製」		畳付釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明
大土坑１上層 20図７	小皿 変形小皿 菊花形	口径12.3 高台径8.1 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型 外面無文、内面に牡丹花文、見込みに花文らしいモチーフを呉須染付	蛇の目釉剥ぎ	発色不良で、染付が見込みしか発色しておらず、胎も部分的に赤味を帯びる	肥前	19世紀中葉
大土坑１ 20図８	小皿	口径12.2 高台径7.1 器高2.2	磁器 暗灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面扇文、見込みに環状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 20図９	小皿 ５寸皿	口径12.3 高台径7.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面雲文、内面に縞文、見込みに葉と草花文を呉須で染付	見込みにハリ目跡３付着　蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	７割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図10	小皿 ５寸皿	口径12.4 高台径4.1 器高3.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	内面に崩れた２重斜格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後砂目塗布		波佐見	1750 ～ 1810
大土坑１中層 20図11	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.3 高台径8.1 器高3.2	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型	蛇の目釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ	完形	肥前か	19世紀前半
大土坑１上層 20図12	小皿 ５寸皿 菊花形	口径11.6 高台径7.7 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	型打ち成型 内面に支柱格子と菊花と蝶、外面に蝶文をコバルト染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	６割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 20図13	小皿 変形小皿 長８角形	長軸13.2 短軸8.2 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面胴部梅花唐草文、高台部雷文 内面梅樹文を呉須染付 糸切り細工の型押し成型	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	不明
大土坑１上層 21図１	小皿 ５寸皿 花弁形	口径12.4 高台径7.1 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉	型打ち成型　内面に山と帆掛船、見込みに波濤文と千鳥文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡５つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１上層 21図２	小皿 ５寸皿 花弁形	口径13.1 高台径7.8 器高3.6	磁器 完形のため不明	光沢のある透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面は唐草文、内面は微塵唐草文、見込みに半花文帯と環状松竹梅文を呉須染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	完形	肥前か	1780 ～ 1860
大土坑１南部上層 21図３	小皿 ５寸皿	口径13.5 高台径7.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に梅樹文・草葉文、見込みに花文、裏銘に寿を呉須で染付	高台内に砂目跡付着	８割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 21図４	小皿 ５寸皿	口径13.5 高台径7.8 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に梅樹文・鳥文、見込みに５弁花文、裏銘に渦福を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1750 ～ 1810
大土坑１ 21図５	小皿 ５寸皿	口径14.0 高台径7.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面無文、内面に崩れた花唐草文、見込みに５弁花文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1680 ～ 1740
大土坑１ 21図６	小皿 ５寸皿	口径13.6 高台径8.2 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面唐草文、内面に崩れた草樹文、見込みに５弁花文、外底に界線を呉須で染付	高台内にハリ目跡付着	４割残存	肥前	19世紀後半
大土坑１上層 21図７	小皿 ５寸皿 菊花形	口径13.1 高台径8.2 器高3.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに建物・橋・樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 21図８	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.3 高台径8.0 器高3.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型 見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つと畳付の重ね焼き痕		肥前か	19世紀中葉
大土坑１中層 21図９	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.7 高台径7.6 器高3.6	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに雲・月・樹・鳥居文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡３つ		肥前か	19世紀中葉
大土坑１南部上層 21図10	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.6 高台径7.5 器高2.5	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型　見込みに扇文を呉須染付	見込みにハリ目跡３つ　外底は蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	口縁部の欠損部が黒化	肥前	19世紀中葉
大土坑１南部上層 22図１	小皿 菊花形	口径13.6 高台径8.2 器高4.0	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	型打ち成型 口錆あり	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１南部 22図２	小皿 陶胎染付	口径14.0 高台径7.4 器高3.6	陶器 暗灰色	乳白色がかった透明釉　全面	無文　貫入は意匠している可能性あり	畳付釉剥ぎ	６割残存	波佐見か	不明
大土坑１中層 22図３	小皿	口径17.6 高台径7.6 器高5.4	陶器 暗紫灰色	発色不良のオリーブ色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける		見込みに蛇の目釉剥ぎ	高台に歪みあり	肥前	不明



第21図　５次調査１号大土坑出土磁器実測図(1/3)

表13　5次調査出土土器・陶磁器観察表12

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑1中層 22図4	小皿 5寸皿	口径18.4 高台径10.3 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	外面無文、内面に鼠と人参文を呉須で染付	見込みにハリ目跡3付着　蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	7割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 (黒色土) 22図5	中皿	口径(19.9) 高台径8.8 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面口縁部は染付界線内に緑彩地に黒で葉文を描く文様帯、見込みと外面は緑・青・紫・赤彩で鶴・草樹・花文の上絵付け　裏銘は2重方形内に「福」のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	6割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1 22図6	中皿	口径21.8 高台径12.6 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面は染付地に花文の上絵付け、外面は宝文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1南部上層 22図7	台付皿	口径(19.6) 高台径8.3 器高8.2	陶器 灰白色	オリーブ色の灰釉全面掛け　貫入あり	見込みに鉄絵で草葉文 台部別造り貼り付け	台下部露胎	6割残存	肥前	1690 ～ 1780
大土坑1上層 23図1	小型鉢	口径15.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は茄子列文帯の間に雪ノ輪文、内面口縁部はダミの上に鋸歯文、内面も山水文の呉須染付	－		肥前	不明
大土坑1南部上層 23図2	小型鉢	口径18.0 高台径5.6 器高8.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	碁笥底で、外面に七宝文、内面は蕪文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1 23図3	小型鉢	口径14.6 底径8.8 器高4.2	磁器 灰白色	青みがかった透明釉　全面	花弁口縁　外面は宝・花唐草文、内面は窓内に菊花文と花唐草文が交互に入る 見込みは龍文を呉須染付	底部蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1 23図4	小型鉢	口径14.8 高台径9.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花唐草文、内面は花葉文、見込みは若松文を呉須染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1中層 23図5	鉢	口径(20.0)	陶器 黄灰色 軟質	内外面鉄釉を掛けた上に、口縁部にオリーブ色の灰釉を掛けている		不明		小石原	1682 ～ 1750
大土坑1南部上層 23図6	鉢 8角鉢	口径(18.5) 高台径9.9 器高11.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に墨引で鷺文と扇形窓文を描き、窓内は山水文、内面は墨引きで雲文帯、見込みに宝文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1南部上層 23図7	片口鉢	口径21.4 高台径8.8 器高12.0	陶器 完形のため不明	外面胴下半は鉄釉塗布、外面胴上半から内面は白化粧土を打ちハケ目掛けし、内面から外面胴上半に透明釉掛け		底部露胎　口唇部釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1750
大土坑1南部上層 23図8	片口鉢	口径(22.9) 高台径9.9 器高12.4	陶器 赤橙色	外面胴上半から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取りし、下端は釉剥ぎ　内面から外面口縁部は発色不良の透明釉を掛け、胴下半は鉄釉塗布		畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1750
大土坑1南部上層 24図1	鉢 方形鉢	器高11.1	瓦質土器 器面は灰白色で、胎は黒灰色　白色粒子を多く含む		板造りと思われる	不明	外面の器面剥落著しい	在地	不明
大土坑1上層 24図2	鉢 方形鉢	器高7.1	土師質土器 黄白色　金ウンモを多く含む	―	板造りで、1側面は調整が粗く焼成に歪みが大きい　1側面はハケ	不明	角部のみ	在地	不明
大土坑1南部上層 24図3	鉢 植木鉢	高台径(11.1)	瓦質土器 灰白色　灰色粒子を多く含む	―	半月状の透し孔があり、見込みに孔があったような欠損の仕方をしているので、本来の器形も植木鉢だろう	不明		在地	不明
大土坑1上層 (黒色土) 24図4	鉢 こね鉢	口径(29.6) 高台径15.8 器高14.4	陶器 淡橙白～暗黄灰白色　精良	―	内外底部以外に鉄釉を掛けた後、口縁部に藁灰釉を掛けたうえに内外中位まで透明釉掛け	底部露胎		小石原	不明
大土坑1中層 24図5	鉢 こね鉢	口径(34.3) 高台径18.6 器高11.8	陶器 淡橙白～黄灰白色 精良	―	口縁部は中空で丸めている 底部以外内外に飴釉を薄く掛ける	底部露胎		小石原か	不明
大土坑1中層 24図6	鉢 火鉢	口径(33.0)	瓦質土器 灰白色が灰色を挟む	―	口縁部から外面が燻されており、ミガキで光沢をもつ　内面はハケ	―		在地	不明
大土坑1黒色土層 24図7	鉢	口径38.5 高台径16.0 器高15.1	陶器 暗紫色	外面は上半と下半に鉄釉を掛け、胴上半に白化粧土を塗布後、帯状掻き取りし、下半も鉄釉を櫛状掻き取りする　内面は全面に白化粧土を掛け、内面から外面上半に透明釉を掛ける		見込みに砂目跡が環状に付着	白化粧土が釉垂れしている	肥前か	1690 ～ 1750
大土坑1南部上層 24図8	鉢	口径40.0 高台径13.9 器高15.6	陶器 暗橙灰色	内面白化粧土を櫛状掻き取りし、外面胴下位から内面口縁部に鉄釉を掛ける		見込みに胎土目の窪みが5つあり、畳付部は不明		肥前	1690 ～ 1750
大土坑1黒色土層 25図1	鉢	口径44.2 高台径17.9 器高16.7	陶器 暗紫色	内外白化粧土を塗布後、外面は櫛状掻き取りし、内面から外面上半に透明釉を掛ける		見込みに砂目跡が環状に付着	白化粧土が釉垂れしている	肥前か	1690 ～ 1750
大土坑1 25図2	鉢	口径29.7 高台径17.8 器高21.3	陶器 暗橙灰色	外面胴下位から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取り　内面から外面口縁部は透明釉を掛け、胴下半は鉄釉塗布　内面は最後に緑灰色の灰釉と鉄絵で上絵付け		見込みに砂目跡8つ付着　畳付け釉剥ぎで砂目跡8つあり	透明釉は貫入なし	肥前	1690 ～ 1750
大土坑1上層 26図1	摺鉢	口径36.0 高台径13.6 器高16.8	陶器 橙灰色	鉄釉を全面	内面摺り目25本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	見込みだけ色調が異なるのは重ね焼きによる焼成の差	肥前	1750 ～ 1860
大土坑1南部上層 26図2	摺鉢	口径37.4 高台径12.6 器高14.5	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目23本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり		肥前	1750 ～ 1860
大土坑1南部上層 26図3	摺鉢	口径37.3 高台径14.3 器高16.6	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目20本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	見込みだけ色調が異なるのは重ね焼きによる焼成の差	肥前	1750 ～ 1860

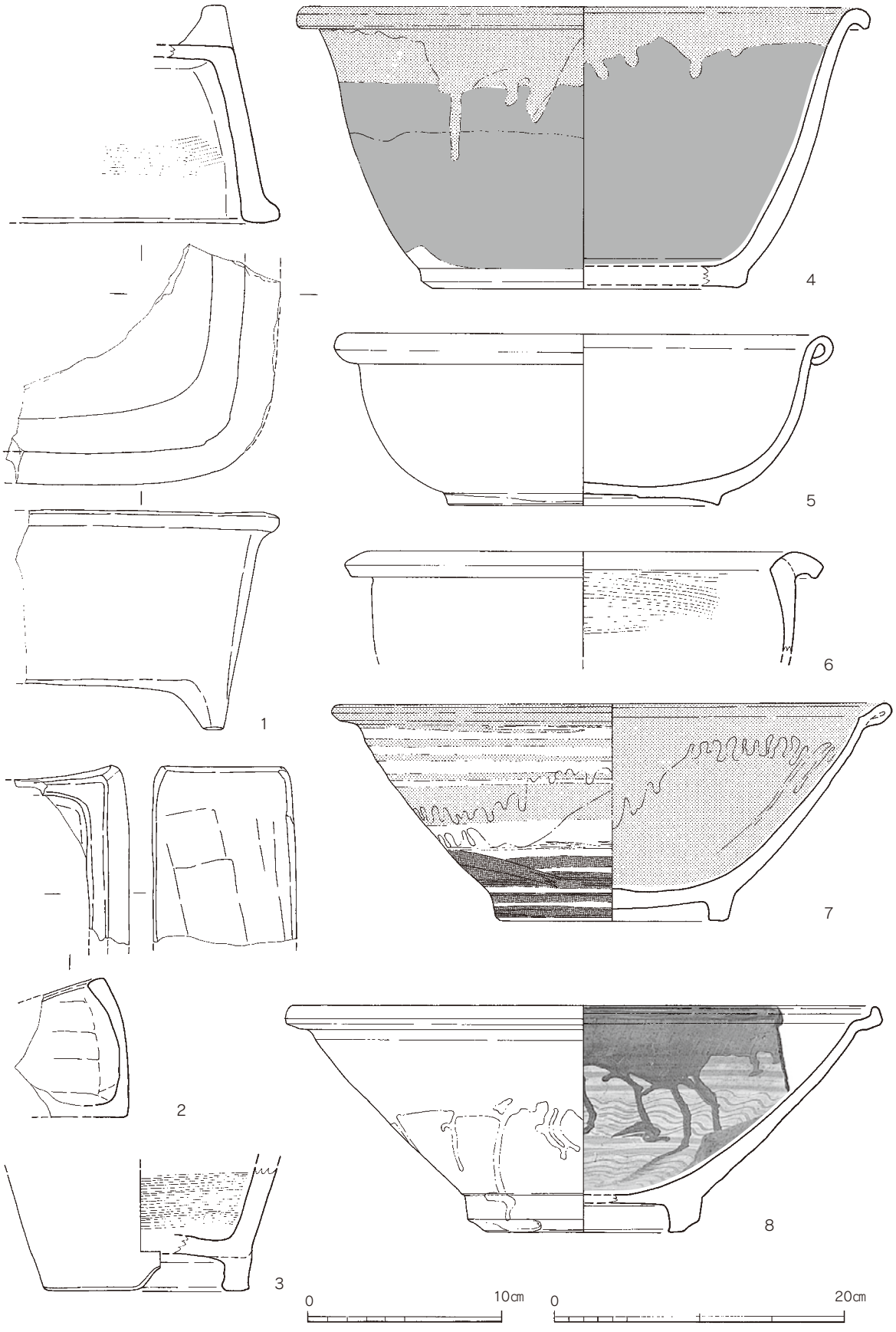


第22図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図５（1/3）

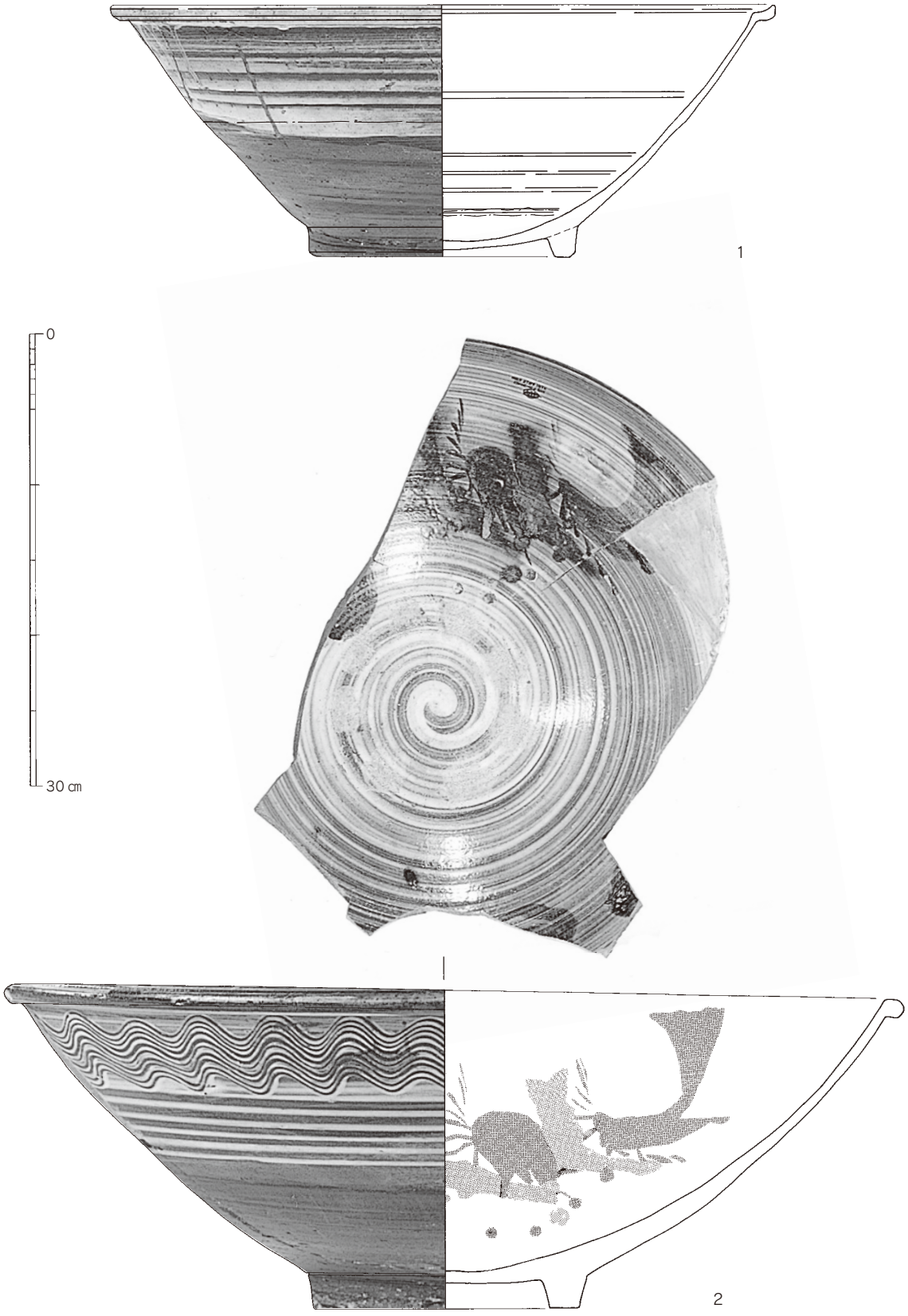
第23図　５次調査１号大土坑出土陶磁器６(1/3)

表14　５次調査出土土器・陶磁器観察表13

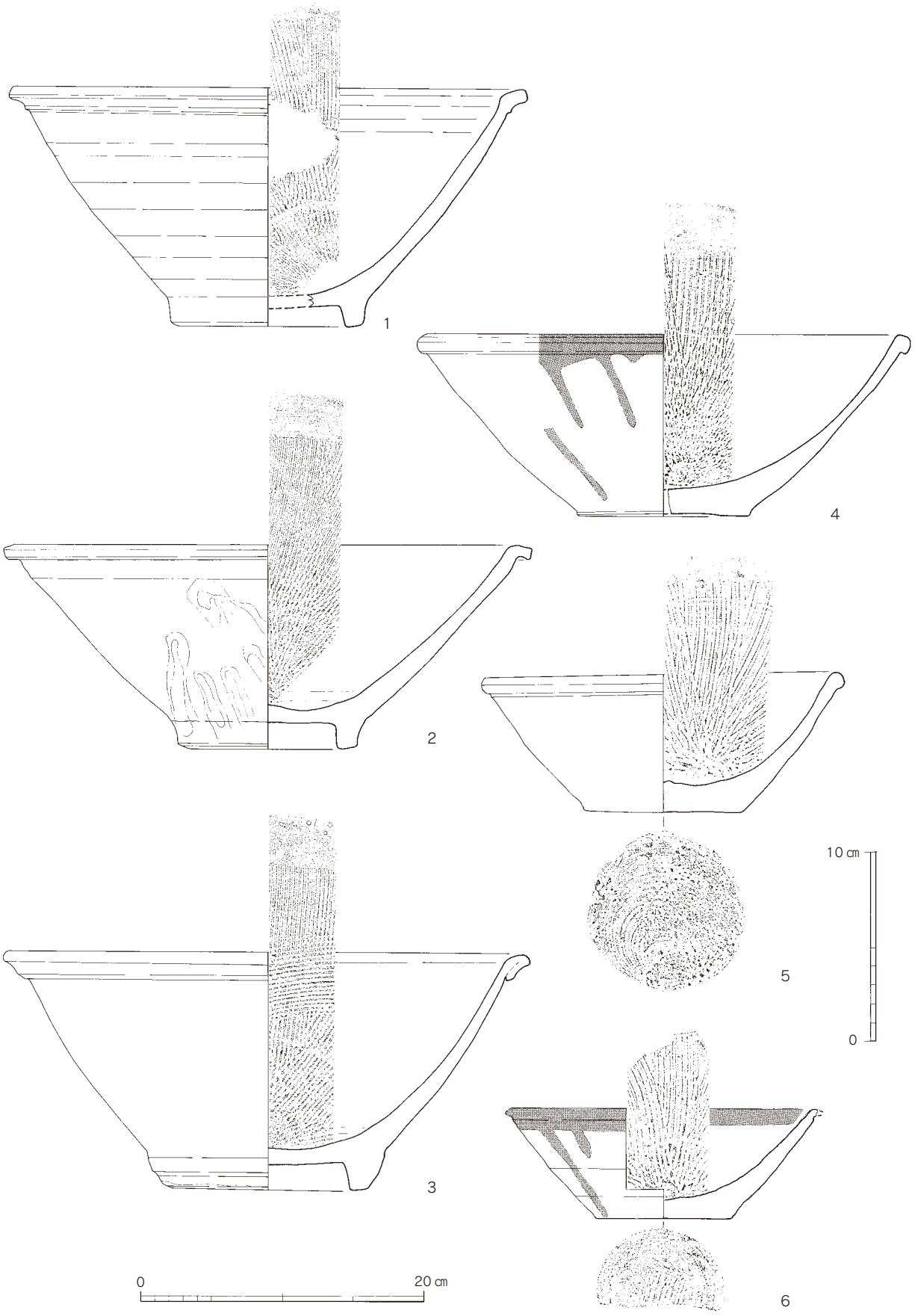
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１中層 26図４	小型摺鉢	口径(25.8) 底径(9.0) 器高9.0	陶器 暗紫黒灰色	鉄釉を内面から外面口縁部に掛ける	底部糸切り 摺り目は12本単位	底部露胎		肥前	1650 ～ 1690
大土坑１南部上層 26図５	小型摺鉢	口径19.0 底径8.3 器高7.2	陶器 黄橙色 軟質	鉄釉を全面に掛ける	底部糸切り 摺り目は13本単位	胎土目跡３つあり	赤色顔料が内面に付着する	小石原	不明
大土坑１中層 26図６	小型摺鉢	口径(15.8) 高台径(7.2) 器高5.8	陶器 橙褐色	発色不良のオリーブ色の灰釉を口縁部にのみ掛ける	底部糸切り 摺り目は９本単位	見込みに重ね焼きの痕跡あり	高台に歪みあり	肥前	1650 ～ 1690
大土坑１上層 27図１	摺鉢	口径38.0 高台径14.2 器高11.7	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目28本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり		肥前	1750 ～ 1860
大土坑１上層 27図２	摺鉢	口径37.5 高台径12.6 器高14.3	陶器 橙褐色	鉄釉を外面の下半から高台内はハケ掛けで、内面から外面上半分には通常通りに掛ける	内面摺り目15本単位　外面ナデ	畳付釉剥ぎ　畳付と見込みに胎土目跡あり	鉄釉が薄い	肥前	1750 ～ 1860
大土坑１上層 27図３	摺鉢	口径35.2 高台径12.0 器高12.7	陶器 橙褐色	鉄釉を全面	内面摺り目単位不明　外面ナデ	畳付釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに環状の砂目跡あり	底部がへたれている　口縁部が湾曲しているのは注口が近い部位のためだろう	肥前	1750 ～ 1860
大土坑１中層 27図４	摺鉢	口径(36.0) 底径12.0 器高15.8	陶器 橙灰白色 軟質	鉄釉を全面薄く掛ける	底部切り離し後ナデ調整　外面カキ目状のナデ　摺り目は16本単位	不明		小石原	不明
大土坑１中層 28図１	鉢 半胴甕	口径(25.0)	陶器 灰色　白色粒子入る	外面から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、内面から外面は透明釉掛け		—		二川焼	19世紀後半
大土坑１中層 28図２	鉢 半胴甕	口径(24.2)	陶器 暗赤紫灰色	外面胴下位から内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取り　内面から外面口縁部は透明釉を掛け、肩部外面は鉄絵上絵付け		—		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 28図３	火鉢	高台径(15.8) 最大径(26.0)	瓦質土器 にぶい暗黄灰白色	—	胴中位は外面は型押しで陽刻し、内面はオサエ後ケズリ状のナデ　底部は内外ハケで、高台部は外面ミガキ	不明		在地	不明
大土坑１南部上層 28図４	火鉢	高台径14.8 最大径18.2	瓦質土器 にぶい暗黄灰色	—	胴中位は外面は型押しで陽刻し、内面はオサエ後ケズリ状のナデ　外面にはミガキがあったと思われるが摩滅している	不明	焼成が不十分らしく、外面は灰色にとどまる	在地	不明
大土坑１ 28図５	火鉢	高台径(24.0) 最大径(25.4)	瓦質土器 灰色が黒灰色を挟む　金ウンモを多く含む	—	外面型押しで陽刻し、内面はナデ 高台部の外面はミガキ、内面はナデ	不明	外面のミガキは光沢をもつ	在地	不明
大土坑１南部上層 28図６	火鉢	口径21.2 底径15.6 器高9.9	瓦質土器 暗灰白色が灰色を挟む	—	内外面はナデ　脚は残った２本の位置から本来３脚だっただろう。	不明	口縁部内面側と脚底に煤が付着している	在地	不明
大土坑１上層 28図７	鉢 植木鉢	口径(55.0) 底径(45.4) 器高16.1	土師質土器 にぶい橙灰白色	—	手捏ねで口縁内面側を波状にする 内外ナデ	—	内底部と外底縁の摩滅が著しい	在地	不明
大土坑１中層 28図８	小甕	口径16.1 底径16.0 器高18.6	土師質土器 にぶい橙灰白色	—	内外ナデ　外底に板状圧痕が残る	—	内底部と外底縁の摩滅が著しい	在地	不明
大土坑１中層 29図１	鉢 半胴甕	口径(27.7)	陶器 橙灰色 軟質	内面は鉄漿の上に発色不良で灰白色を呈する釉を掛け、外面から内面口縁部にオリーブ色の灰釉を掛けている 最後にイッチンを流し掛け		不明	外面の灰釉は光沢あり	小石原か	不明
大土坑１南部上層 29図２	小型鉢 半胴甕	口径(19.6)	陶器 暗紫～灰紫色	内外鉄釉掛け、外面は白化粧土をハケ掛けしてなんらかの文様を描き、その上に透明釉を掛けている		—	口縁部を打ち掻いて再利用したものかも	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図３	小型鉢 半胴甕	口径24.8 高台径8.3 器高15.2	陶器 暗灰色　白色粒子を含む	内外面鉄釉厚掛け	無文	底部アルミナ塗布		須佐唐津か	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１南部上層 29図４	鉢 半胴甕	口径(29.0) 底径(12.8) 器高27.5	陶器 紫灰白色　精良	菊花浮文貼り付け後全面飴釉掛け、その後外面肩部に藁灰釉掛け流し		外底釉剥ぎ	胎が紫色なのは焼成が強いためだろう	小石原	不明
大土坑１中層 29図５	鉢 半胴甕	口径20.9 高台径10.6 器高19.0	陶器 淡紫灰白色	内外鉄釉をハケ掛けした後、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面に鉄絵で松を上絵付け		高台部釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに重ね焼きの痕跡あり		二川焼か	19世紀後半
大土坑１上層 29図６	鉢 半胴甕	口径31.0 高台径13.4 器高30.0	陶器 橙褐色	内外面胴下位は鉄釉ハケ掛け、その後内外中位以上に鉄釉を掛け、外面胴中位から内面口縁部は白化粧土を塗布、外面肩部に緑色の灰釉を流し掛け		高台部釉剥ぎ後アルミナ塗布　見込みに重ね焼きの痕跡あり		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図７	小型鉢 半胴甕	口径(14.0)	陶器 暗橙灰色	内外面黒釉掛け	無文	—		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１中層 29図８	小型甕	口径(16.4)	陶器 黄灰色	薄い鉄釉全面掛け	口縁部外面の刻み目は、施されてない部分もあるので意図的な物か不明	口唇部釉剥ぎ		小石原	不明



第24図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図２（５～８は1/4、他は1/3）



第25図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図１(1/4)



第26図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図２（1･2･3は1/4・他は1/3）

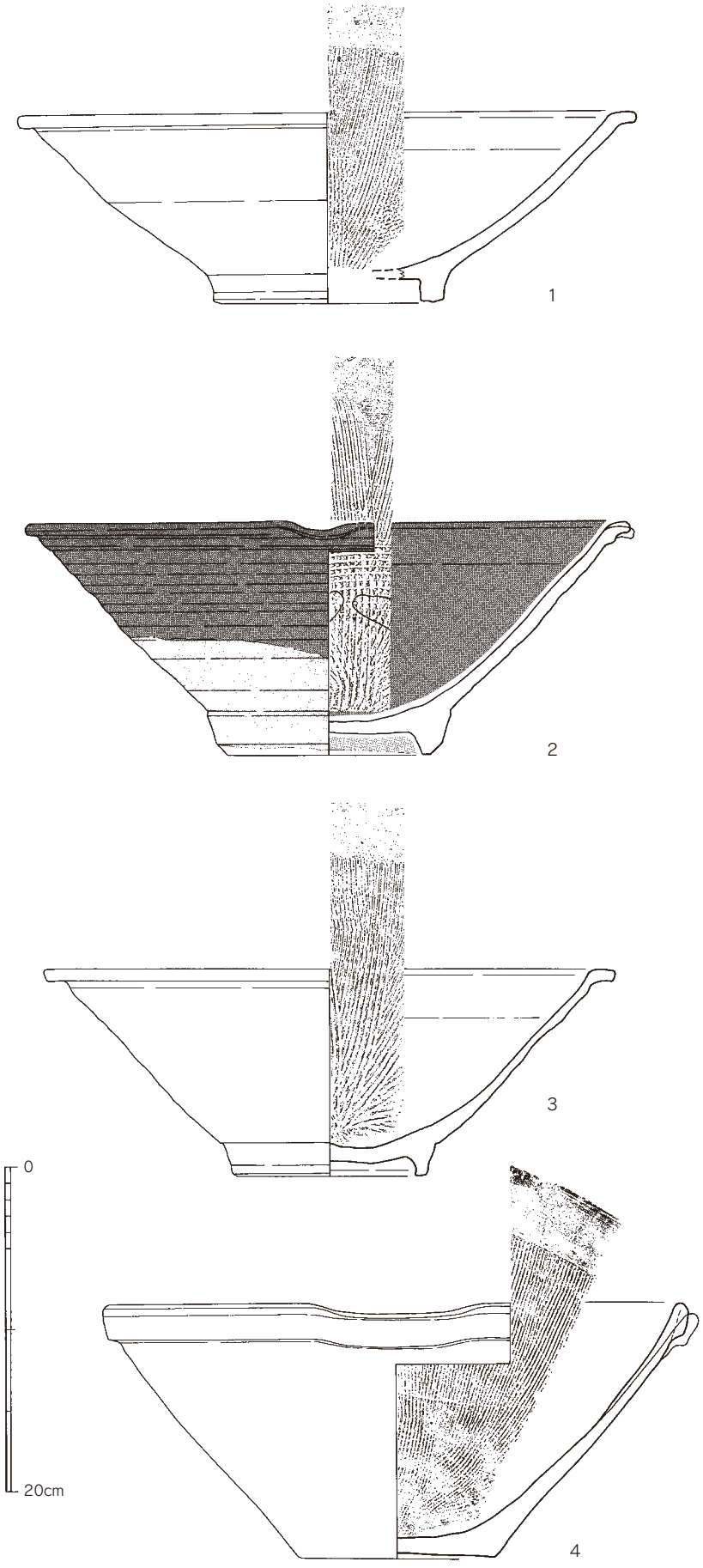
目跡は中央部に１つ残るが、底部残存部が1/3なので、本来他にもあったかもしれない。

12図５は陶器の鉢で、外面中央部に釉が掛かっていないのは、上下で掛け分けたことを示している。12図９は陶器の火入れで、口縁部は小さく欠損しているので、煙管の灰落としの可能性がある。12図13は土師質土器の方形鉢で、側面が平坦であることから板作りと考えられる。

13図2･3は肥前産の京焼風陶器碗で、高台内に円などの刻印はない。13図６は染付蓋で、残欠の形状から、中央に稜線をもつ細長い板状のつまみが付くものと思われる。13図13は瓦質土器の火鉢で、穿孔部分はわずかだが、単なる円坑ではない可能性がある。13図14は陶器の小皿の底部を転用した円盤形製品で、見込みに胎土目跡が３つ付着し、釉調や胎から肥前産陶器皿とわかる。

14図２は肥前産の陶器碗で、見込みに鉄絵の竹笹文が入る珍しいもの。14図６は高台付皿で、高台と皿底との接合部には隙間が残る。14図13は胎から瀬戸産のものとわかる。14図11と11図7は釉調や外面文様など酷似している。

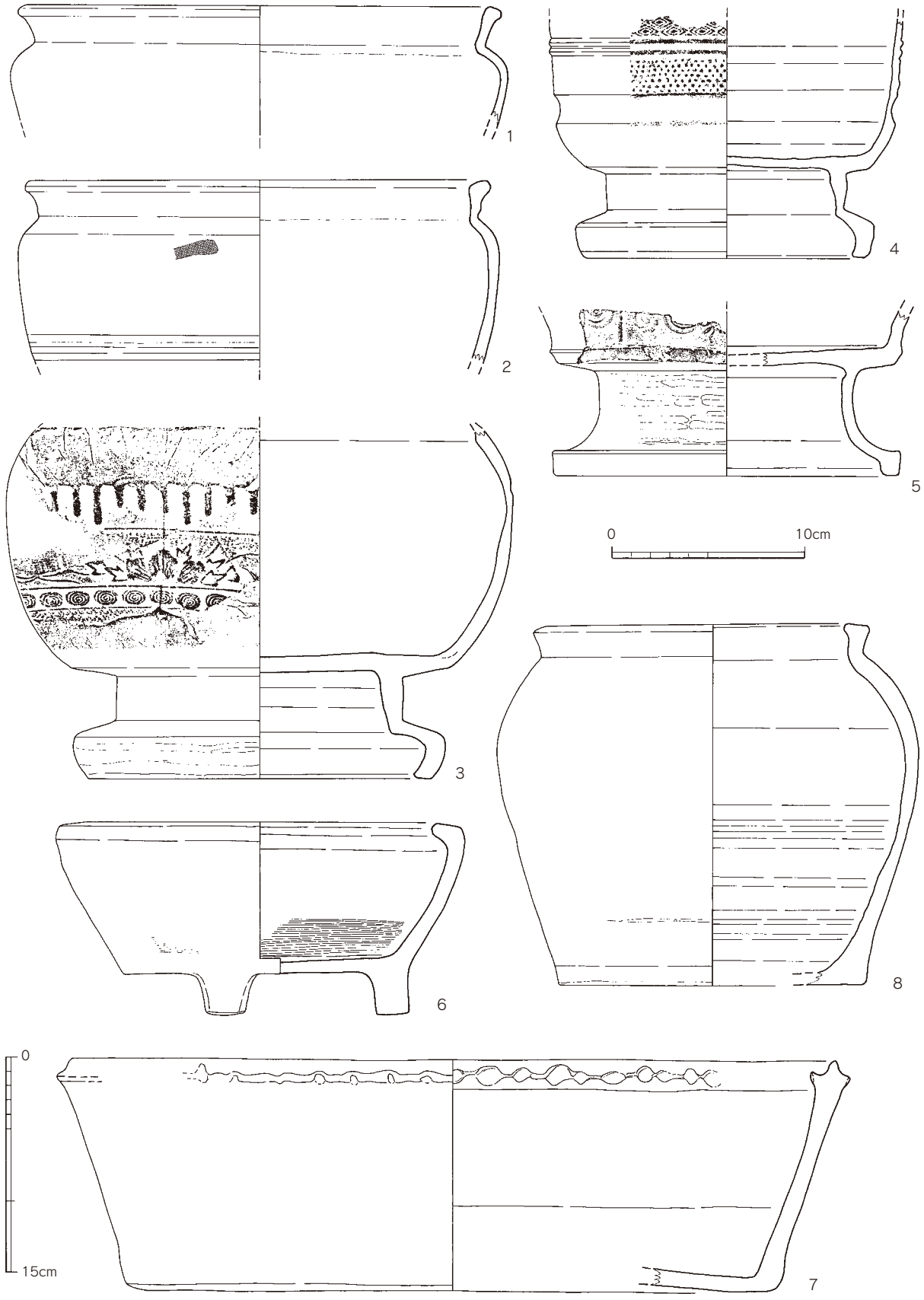
15図１は陶器の摺鉢で、平底であることから1650年以降の可能性が高い。15図５は



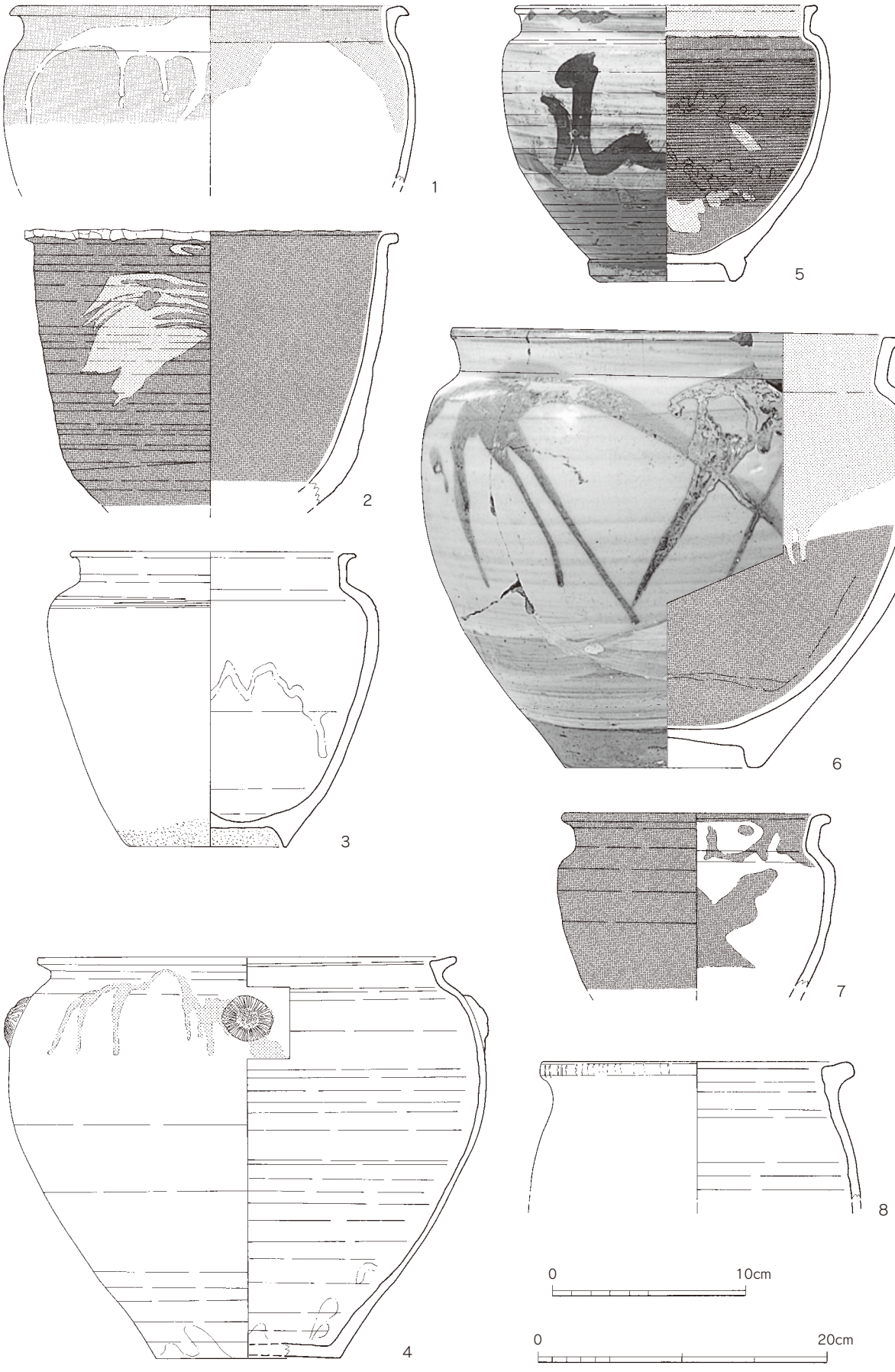
第27図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図３(1/4)

表15　５次調査出土土器・陶磁器観察表14

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大土坑１中層 30図１	甕	口径(33.0)	土師質土器 にぶい橙灰白色	―	外面ナデ、内面目の細かいハケ	不明	内面は口縁部のみ、外面は上半が器面剥落している	在地	不明
大土坑１南部上層 30図２	鉢 半胴甕	口径(36.0)	陶器 淡紫灰白色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、再度白化粧土をハケ掛けした後、鉄絵と緑彩で松を上絵付けし、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける		―	弓野焼か	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１上層 30図３	鉢 半胴甕	高台径13.3	陶器 暗灰白色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、再度白化粧土をハケ掛けした後、鉄絵と緑彩で松を上絵付けし、内外胴下位まで透明釉を掛ける			弓野焼か	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大土坑１黒色土 31図１	小鉢 蓋物	口径9.0 高台径4.8 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に墨引きで松文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 31図２	小鉢 蓋物	口径9.3 高台径4.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に楓文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 31図３	小鉢 蓋物	口径10.0 高台径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文と草文、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	７割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１南部上層 31図４	小鉢 二段折形	高台径5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面と見込みに筆と虫文　口縁部は内外帯文か	高台部露胎		肥前	不明
大土坑１中層 31図５	小鉢 蓋物	口径11.7 高台径5.5 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	７割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑１ 31図６	小鉢 蓋物	口径12.2 高台径6.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に丸文散らしを呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1750
大土坑１中層 31図７	小鉢 香炉か	口径(10.3) 高台径4.7 器高5.0	陶器 暗青灰色	鉄釉を内面口縁部から外面胴中位まで掛け	高台は貼り付け後削り出し	高台部露胎 見込みに重ね焼き痕あり	鉄釉は発色不良 内外変色がない	肥前	不明
大土坑１中層 31図８	小鉢 香炉か	口径(12.1) 高台径5.4 器高5.3	陶器 明黄橙色	鉄釉を内面口唇部から外面胴中位まで掛け	高台は貼り付け後削り出し	高台部露胎	胎は灰色だが、焼成不良のためだろう	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図９ 図版１	小鉢 変形	口径12.0 高台径5.8 器高6.2	陶器 暗灰色	内外藁灰釉の上に長石釉上掛け	口縁部を４カ所押さえて花弁を作る	高台部露胎	９割残存	萩焼	不明
大土坑１中層 31図10	小鉢 変形	口径11.1 高台径5.7 器高4.3	磁器 灰白色	青磁釉を全面に掛ける	外面無文、内面口縁部は赤彩で格子文帯と花雲文と見込みの銘と瓔珞文の縁を、黒彩で瓔珞文のダミを、瓔珞文自体は金彩で描き、見込みには緑・黒彩で描く水草と黄・黒彩の亀文が交互に上絵付け	高台部露胎		肥前	不明
大土坑１南部上層 31図11 図版１	小鉢 変形	口径19.6 高台径9.6 器高7.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面と内面口縁部の窓内に農作業風景　見込みに宝袋文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 31図12	小鉢 香炉か	口径9.7 高台径6.5 器高8.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	胴部外面に花唐草を呉須染付	畳付釉剥ぎ	口唇部に付着している炭化物は使用によるものだろう	肥前	不明
大土坑１ 31図13	小鉢 香炉	口径8.4 高台径5.8 器高6.3	磁器 灰白色	青磁釉を外底以外全面に掛ける	無文で、外面の煤状のものは意匠したものではないと考えた	外底の縁に砂目付着	外底は釉剥ぎ後に釉が掛かっている。上げ底状なので周縁部が接地している	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図14	小鉢 花弁形	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、胴下位は釉剥ぎし、外面に菊花文の鉄絵を描く		胴下位釉剥ぎ、外部露胎	胎がざらつく	京焼か	不明
大土坑１ 31図15	小鉢	口径9.1 高台径6.5 器高7.8	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、胴下位は釉剥ぎし、外面に竹笹文の鉄絵を描く　底部に墨書あり		胴下位釉剥ぎ、外部露胎	墨書は「文三」まで読める	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図16	小鉢	口径15.6 高台径5.7 器高7.9	陶器 暗紫灰色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位から内面口縁部は白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける		畳付釉剥ぎ	口縁下に別個体が融着した痕跡あり	肥前	不明
大土坑１南部上層 31図17	小鉢 筒形	口径11.4 高台径9.4 器高6.0	陶器 暗灰色で一部黄灰色	赤茶色の鉄釉全面掛け	外面肩部の沈線は意図的な物か不明	外面胴下位砂目付着著しい		小石原	不明
大土坑１中層 31図18	鉢 筒形	口径12.4	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部に掛けた後、外面に花文・笹文の鉄絵を描き、暗い透明釉を全面に掛ける　貫入あり		―	京焼風陶器	肥前	不明
大土坑１上層 31図19	鉢 段重	口径14.1 高台径8.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた微塵花唐草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部と外面高台端部釉剥ぎ	９割残存　内面口縁部と外面高台端部釉剥ぎから、段重の中位のもの	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 32図１	瓶 燗徳利	口径2.7 高台径5.5 器高17.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	底部はやや上げ底	底部釉剥ぎ		瀬戸か	19世紀後半
大土坑１黒色土 32図２	瓶 徳利	口径3.0 高台径7.4 器高21.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	底部は上げ底でへたれている 外面口縁部はダミ、胴部は花草樹文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半



第28図　５次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図2（７は1/4、他は1/3）



第29図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図４（1･4～6は1/4、他は1/3）

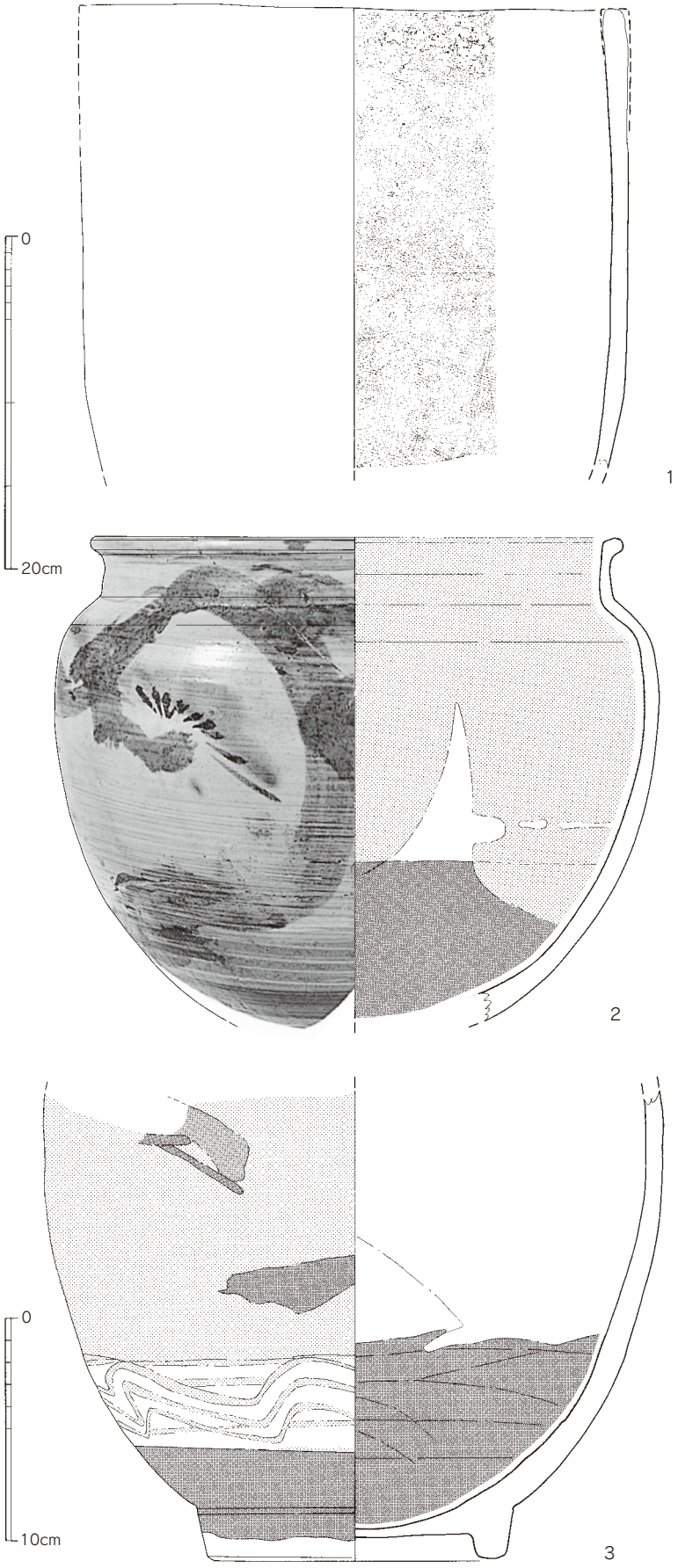
磁器の器形を模した陶器の髪油瓶であり、ざらつく胎に特徴がある。

15図６は陶器の灯明受皿で、下皿の外底は柱部との接合後に削られている。15図11は陶器の摺鉢で、胎は小石原焼に似るが、口縁部の形態は口縁部のみ鉄釉を施す肥前のものであるので、焼成不良によるものと考えられる。

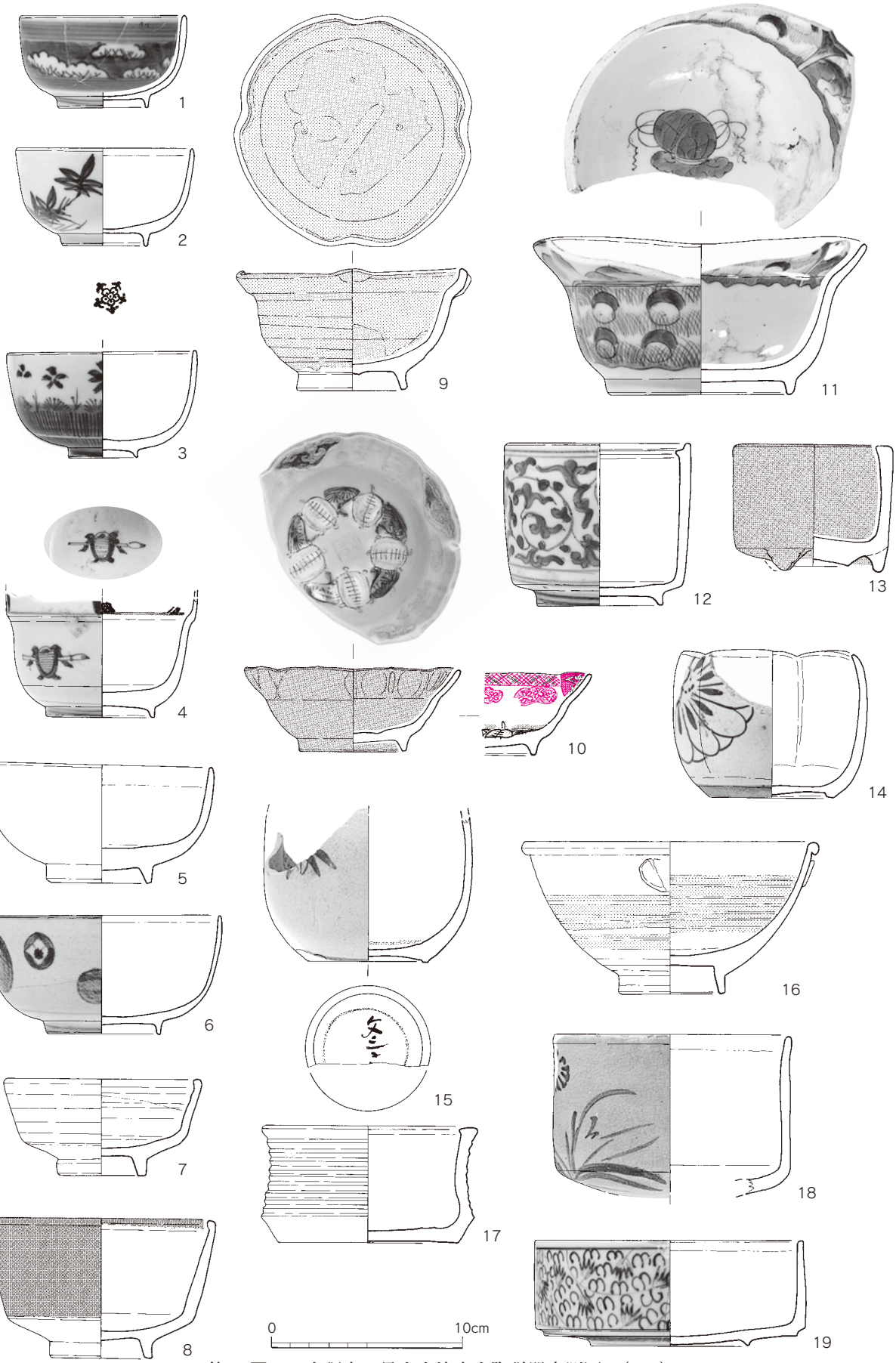
16図１から４は同じモチーフの磁器小碗だが、2･4は厚手な点で共通している。16図の19から21は同じモチーフの碗だが、19･20はモチーフと底部の厚い作りが一致し、焼成が異なるので、同じ窯で異なる陶工が絵を入れたものではなかろうか。16図22の磁器碗は焼成不良で赤変部分がある。

17図６は陶胎染付の碗で、18世紀前葉のものより文様が退化しているので、18世紀中葉のものと考えられる。17図10と11、15と16は同じモチーフであるので同一セットで購入したものだろう。17図12は陶器の碗で、外面の青紫色は鉄絵が釉変したものである。18図4･5は磁器の碗で、４は見込みを蛇ノ目釉剥ぎせずに重ね焼きしているが、５は蛇ノ目釉剥ぎせずにアルミナを塗布し、その上に透明釉を描けている。

18図14･15･19は同じモチーフで１揃えのセットだろう。18図21･22は土師質土器



第30図　5次調査１号大土坑出土土器・陶器実測図３（３は1/3、他は1/4）

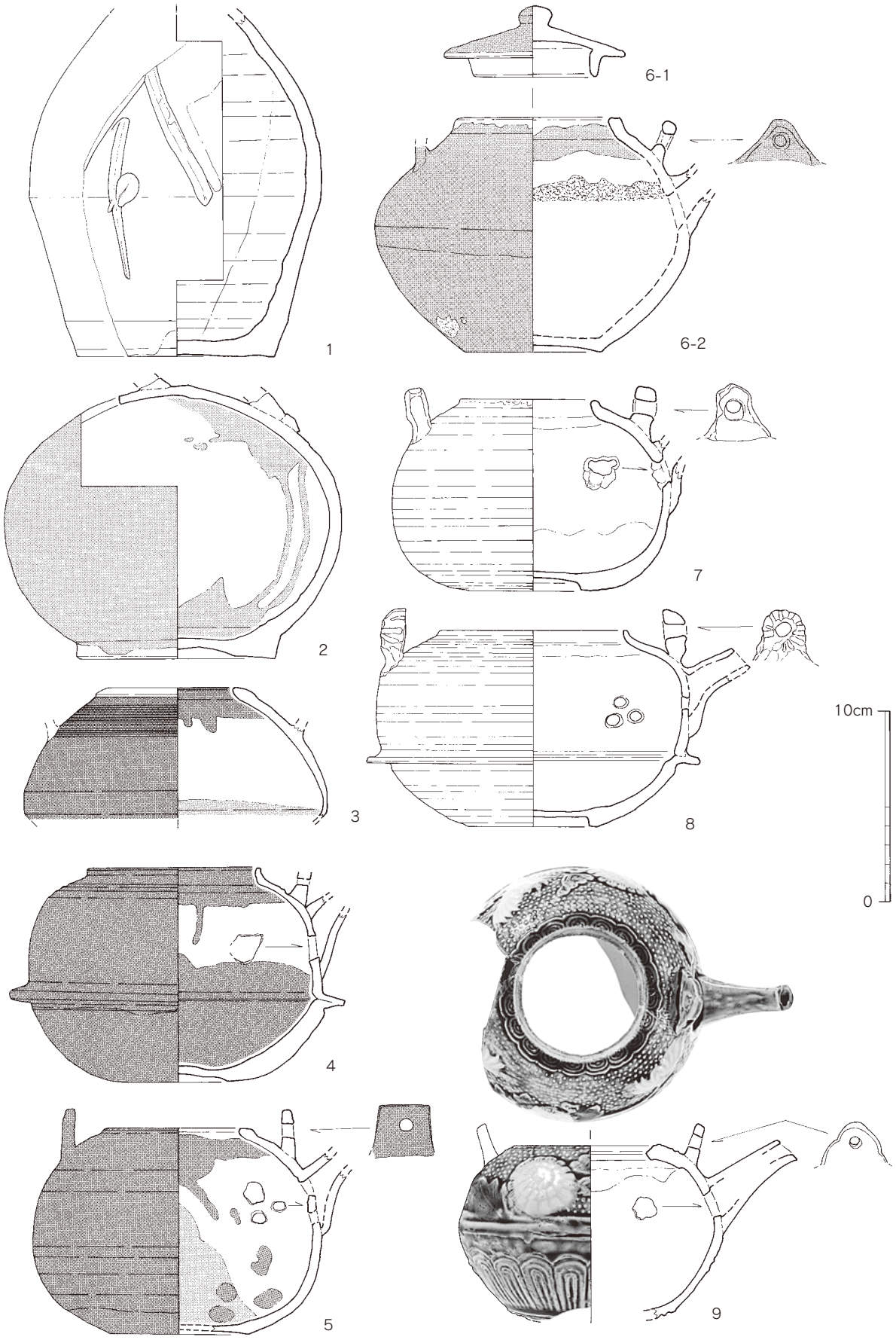


第31図　5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図7（1/3）

第32図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図８（1/3）

表16　5次調査出土土器・陶磁器観察表15

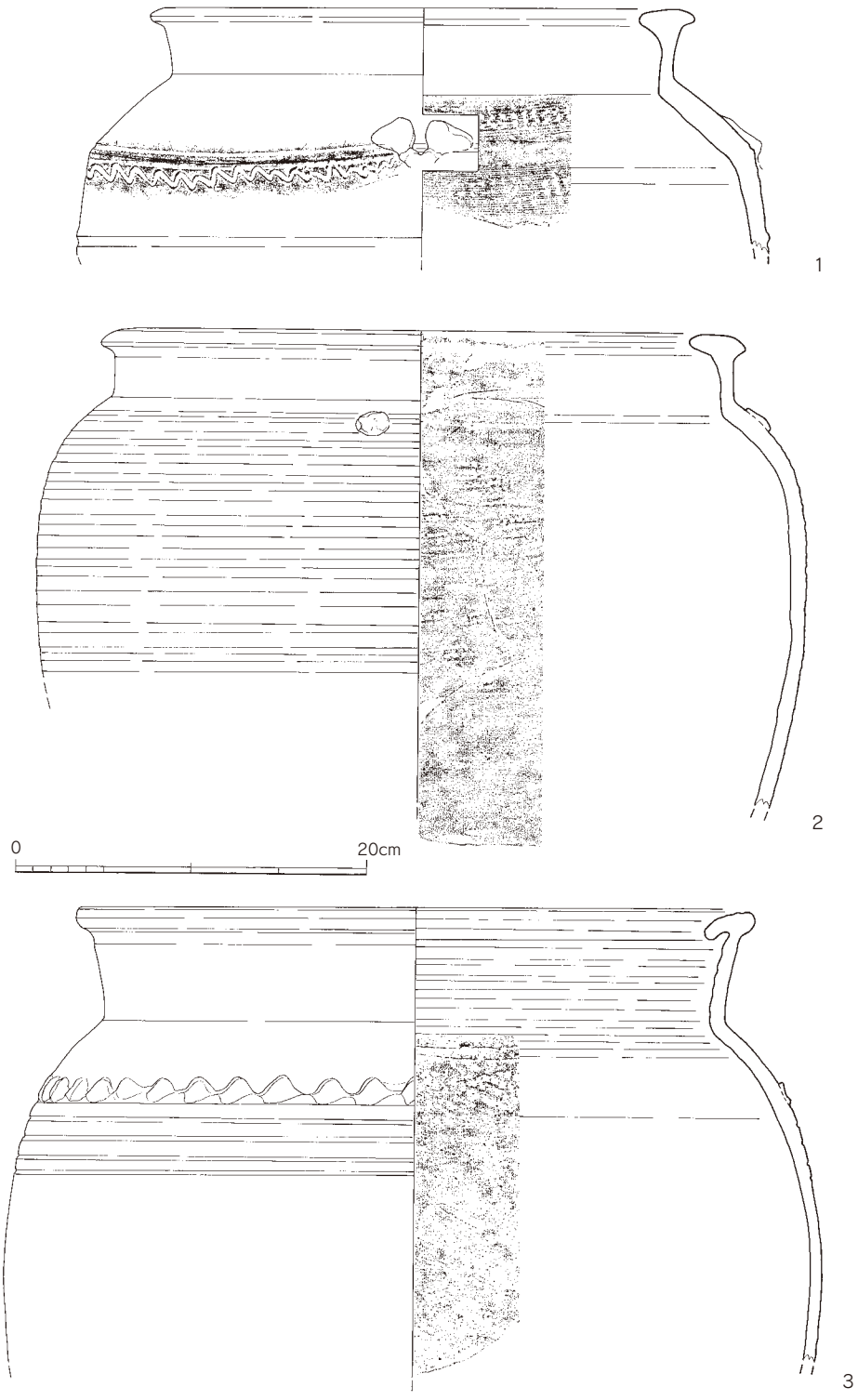
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑1 32図3	瓶 徳利	高台径7.4	磁器 灰白色	外面は頸部に飴釉を掛け、胴部に蝙蝠文とその脇に井桁文のセットを上下2つ呉須染付、最後に肩部まで透明釉掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑1南部上層 32図4 図版1	瓶 仏花瓶 盤口形	口径8.3 高台径7.5 器高15.5	陶器 にぶい暗黄灰色	鉄釉全面厚掛け	耳は手捏ね	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		須佐唐津か	不明
大土坑1南部上層 32図5	小瓶	高台径6.6	陶器 にぶい暗黄灰色	長石釉を全面掛けた後、光沢のない飴釉胴中位より上に厚掛け		貝目付着	貝目から17世紀代だろう	肥前	17世紀代
大土坑1南部上層 32図6	瓶 形状	口径8.0 高台径9.1 器高17.0	陶器 にぶい黄灰～黄橙灰色	肩部から下の外面に白化粧土をハケ掛けし、肩部から上は内外鉄釉を掛け、下は透明釉を掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀代
大土坑1 32図7	瓶 形状	高台径15.3 最大径8.4	陶器 黄橙灰色	白化粧土を肩部以下に掛けた後、頚部以上に内外鉄釉掛け 外面鉄絵の笹文		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布	透明釉を上掛けしていない	肥前	18世紀代
大土坑1南部上層 32図8	瓶 仏花瓶 盤口形	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	磁器 灰白色	透明釉を内面口縁部から外面に掛ける	外面に草花文をコバルト染付 耳は手捏ねか	－		肥前	不明
大土坑1中層 32図9	瓶 秉燭	口径1.8	陶器 暗灰色	飴釉を全面に掛ける	受け部に穿孔と注口あり	－		小石原	不明
大土坑1中層 32図10	瓶 秉燭	高台径6.4 最大径10.2	陶器 暗紫灰色	鉄釉を外面に全面掛け　まず､色調の薄い方を横にして漬け､その後濃い方を上下逆にして漬けているので、内面は2つの異なる釉がかかっているように見える		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	不明
大土坑1中層 32図11	瓶 秉燭	高台径5.8 最大径8.4	陶器 黄橙灰色	鉄釉を外面に全面掛ける　注口は欠損しているが、対面の孔は残る		畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	不明
大土坑1中層 32図12	瓶	高台径6.8 最大径12.2	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面底部以外掛け	外底は削り出し	高台露胎	灰釉は発色不良　高台内に砂目付着	肥前	1690 ～ 1780
大土坑1中層 32図13	瓶	高台径7.3 最大径12.5	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面底部以外掛け	外底は削り出し	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
大土坑1南部上層 32図14	瓶	口径3.1 最大径12.2	陶器 暗紫灰色	緑灰色の灰釉を外面から内面口縁部に掛けた後、最後にイッチンを流し掛け	外底は削り出し	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	1690 ～ 1780
大土坑1南部上層 32図15	小型瓶	高台径6.8 最大径9.6	陶器 暗紫灰色	白化粧土を外面胴下位から内面口縁部にハケ掛けした後、中位を櫛状掻き取りし、口縁部には鉄釉、肩部には発色不良のオリーブ色の灰釉と緑色の灰釉を流し掛け		底部露胎	肩部以下残存	肥前	1600 ～ 1690
大土坑1中層 33図1	瓶	底径(10.4) 最大径15.2	陶器 にぶい暗黄灰色に黄灰色が斑に入る	外面に山形の下に「ト」を陰刻し、オリーブ色の灰釉に藁灰釉を流し掛けし、内面は鉄漿を掛ける		不明	外面は釉の発色不良部分がある	小石原	不明
大土坑1上層 33図2	瓶 尿瓶	高台径10.4 最大径17.8	陶器 橙褐～暗灰色	飴釉を底部以外に全面に掛ける	棒状の把手がつく	畳付釉剥ぎ後、アルミナ塗布	天井部にカルキ付着	肥前	不明
大土坑1 33図3	土瓶	口径6.1 最大径14.9	陶器 暗赤紫灰色	鉄釉を内面口縁部から外面胴上半に掛け　内面胴下半は鉄漿 外面肩部に沈線　把手は板状		口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1中層 33図4	土瓶	口径(9.1) 底径5.4 器高11.7	陶器 黄灰色	鉄釉を内面中位と外面鍔以下以外全面掛け	鍔で上・下を接合　外面肩部に沈線 外底は削り出しで碁笥底状	底部露胎	外底使用変色	小石原	不明
大土坑1 33図5	土瓶	口径7.8 高台径7.1 器高10.8	陶器 暗赤紫灰色	黒釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半は鉄釉 把手は板状		口唇部釉剥ぎ	内面胴中位に変色あり	肥前	不明
大土坑1黒色土 33図6－1 図版1	蓋 土瓶蓋	裾径9.6 つまみ径1.4 器高3.7	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける		受け部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀前半
大土坑1黒色土 33図6－2 図版1	蓋 土瓶	口径8.6 底径7.2 器高12.2	陶器 橙褐色	銅緑釉を外面に掛ける			注口欠損　内部に鉄滓が充填している	肥前	19世紀前半
大土坑1中層 33図7	蓋 土瓶	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	陶器 黄橙白～灰色 軟質	飴釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半はオリーブ色の灰釉　把手は型押し成型		底部露胎	焼成不良で、胎は軟質、釉の発色も悪い	肥前	不明
大土坑1中層 33図8	土瓶	口径40.9 高台径15.3 器高16.8	陶器 淡緑灰白色 軟質　精良	黒釉を内面口縁部から外面胴中位に掛け　内面胴下半は露胎 把手は型押し成型		口唇部釉剥ぎ	内面に使用変色あり	肥前	不明
大土坑1中層 33図9	土瓶	口径7.2 最大径13.7	磁器 灰白色	型作りで、型押しで外面に菊花文や珠文などを陽刻している鉄釉を外面胴下位まで掛け、葉や口縁部は呉須が施し、菊花部は鉄釉拭き取り　外面の胴下位以下と内面口縁部下位以下は透明釉　外面胴下位には凹線が2条ある		底部露胎　受け部釉剥ぎ	底部煤付着	肥前	不明
大土坑1 34図1	甕 半胴甕	口径(31.0) 最大径(39.4)	陶器 橙褐色	鉄釉全面掛け	外面肩部は沈線波状文と浮文、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	－		肥前	18世紀前半
大土坑1中層 34図2	甕	口径(36.6) 最大径(44.0)	陶器 橙褐色 マーブル手	鉄釉全面掛け	外面肩部は刻目突帯と櫛条の沈線、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	口唇部に胎土目跡がある	沈線は平行なので、1つの工具で一度に描いている　内面は発色不良なので倒立して焼成している	肥前	18世紀前半
大土坑1中層 34図3	甕	口径(38.6) 最大径(46.4)	陶器 にぶい紫灰色 マーブル手	鉄釉薄く全面掛け	外面肩部はカキ目の上に円形浮文、内面肩部には格子目タタキの当て具痕があるが、外面はナデ消されている	口唇部の内面側は釉剥ぎしている		肥前	17世紀後半



第33図　5次調査1号大土坑出土陶磁器実測図9（1/3）

の小皿で、22の外面の火を受けた赤変しているラインは、21の径と一致するので、重ねて焼かれたものではなかろうか。

19図８は磁器の小皿で、見込みのアルミナが変色しているのは灯明皿として使用したためだろう。19図9･10は陶器の小皿で胎から肥前産と判断される。19図14は磁器の小皿で、口縁部の



第34図　５次調査１号大土坑出土陶器実測図５(1/4)

打ち欠き部が黒変していることから、灯明皿として使用していたことがわかる。

20図７は磁器小皿で内面胴部に花文が配置されるというモチーフの構成が珍しい。

21図10は陶器小皿で口縁部の黒化は灯明皿として使用したためのもの。

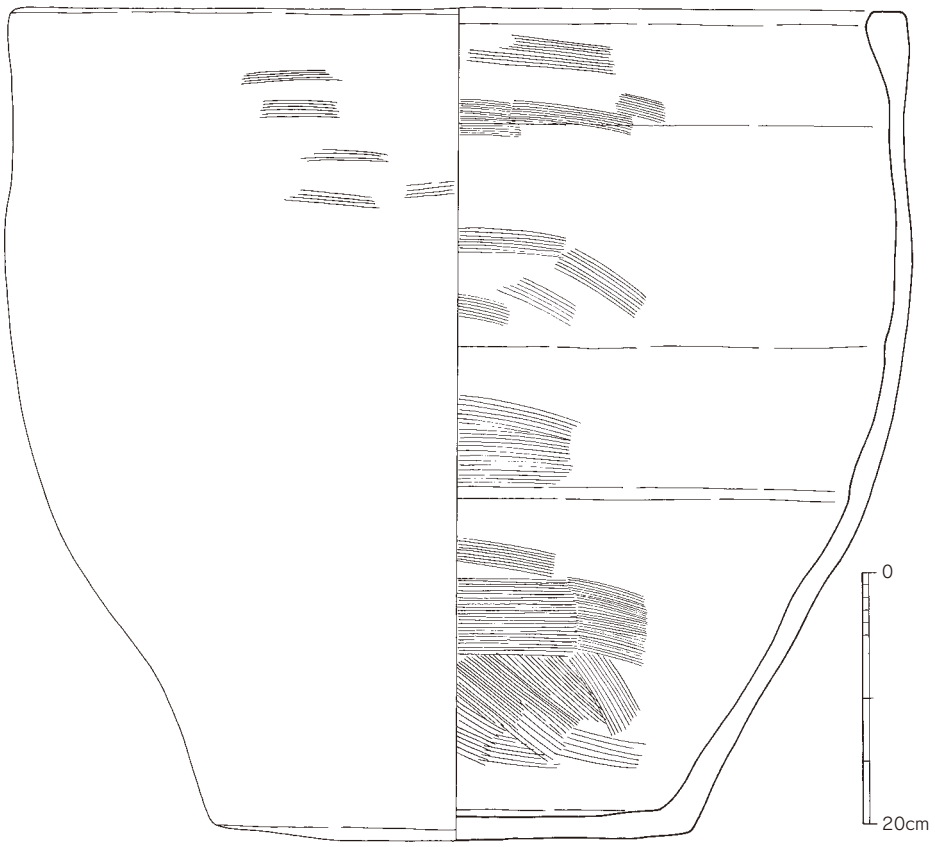
22図５は磁器の中皿で、多色の上絵があるが、発色がよくない。

23図３は磁器の皿で、欠損ではなく高台がなく、高台の付く位置には蛇ノ目釉剥ぎがあるのみで、成型途中での失敗品か、試作品なのか、類例を見ない。23図８は陶器の片口鉢で、内面から外面口縁部の透明釉は発色が悪く白濁する。

24図２は土師質土器の鉢で、内外面とも変色がなく、火入れや火鉢ではないようだ。24図３は瓦質の鉢で、本来器高が高いものだったようだが、欠損部を打ち欠いて新たな口縁部に整形して再利用している。24図４は陶器のこね鉢で、口縁部の釉は、灰白色の釉垂れがあるので白化粧土を使った可能性もあるが、藁灰釉の窯変とした。また、24図４と５は胎が近似しており、同じ系統の時期差の可能性がある。24図８は陶器の鉢で、畳付には見込みと同じように胎土目跡が残るはずだが、胎土目があったと思われる部分が剥落している。

25図1･2は陶器の鉢で、１は白化粧土の発色が悪く、掛け方も粗いことから、肥前産でなく二川焼の可能性もある。２は見込みに重ね焼き用の砂目跡があるのに、外底にはないので、重ね焼きの最下段であったのかもしれない。

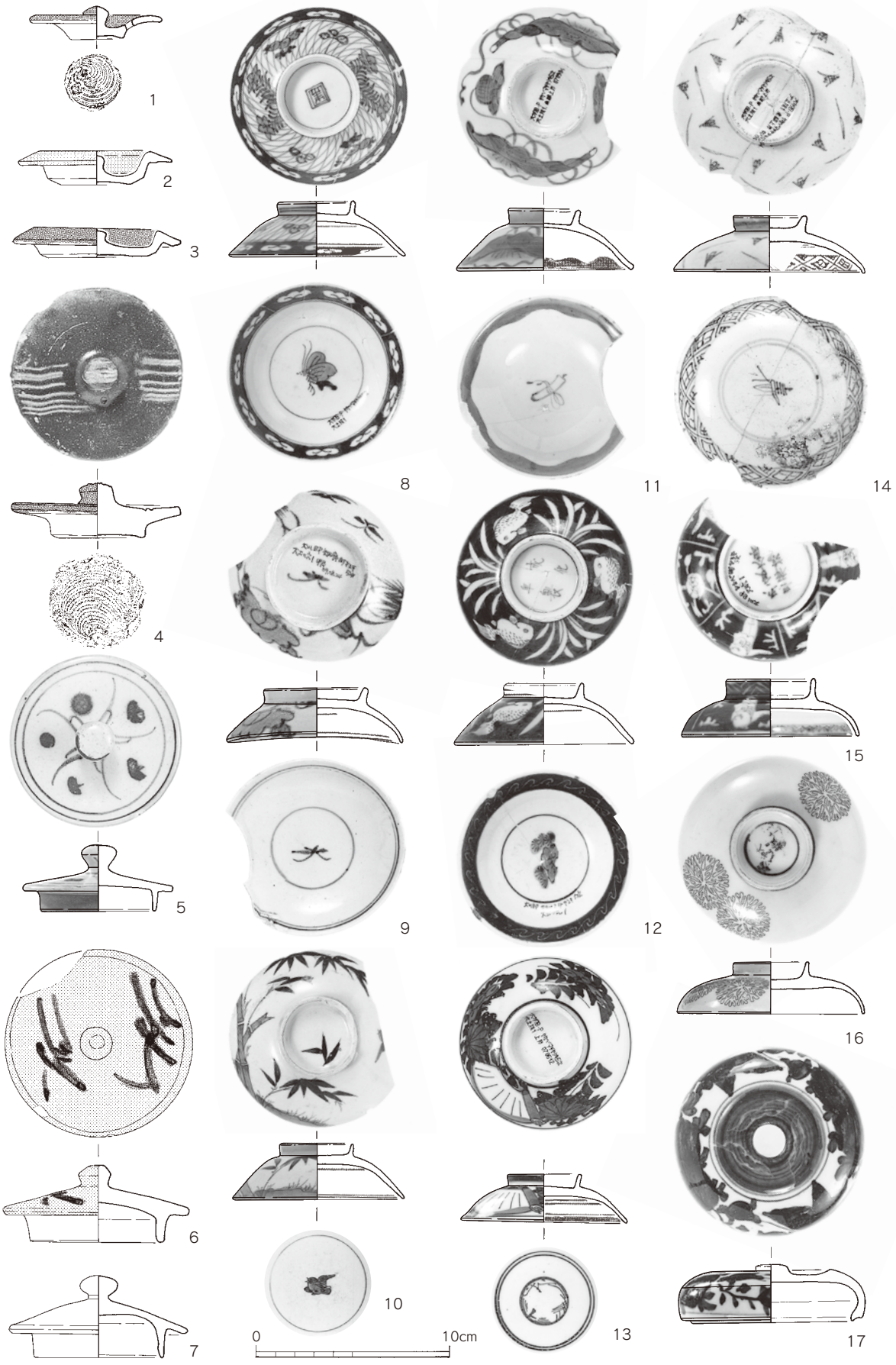
26図1･2･4から６は陶器の摺鉢で、１と２は見込みが使用により摩滅しているが、４から６は摩滅していない。小型の摺鉢であるためだろう。５は摺り目に赤色顔料が入っているのでベンガラを粉末にしたものではないか。６の見込みの重ね焼き痕は目跡ではなく、重ねた個体の底部の痕跡が残ったもの。



第35図　５次調査１号大土坑出土土器実測図(1/6)

表17　５次調査出土土器・陶磁器観察表16

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１南部上層 35図１	大甕	口径(72.0) 器高66.3 底径38.4	土師質土器 にぶい黄灰色	－	内面細かい目のハケ	不明		在地	不明
大土坑１黒色土 36図１ 図版１	蓋 急須蓋	裾径6.8 つまみ径1.2 器高1.7	陶器 にぶい暗黄灰色	黒釉を上面のみ	無文 底部糸切り	下半釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１ 36図２ 図版１	蓋 水注蓋	裾径8.2 つまみ径1.1 器高1.7	陶器 にぶい黄灰色	暗緑灰色の灰釉を上面のみ	無文 底部ヘラ切り	下半釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図３	蓋 土瓶蓋	裾径8.8 つまみ径1.2 器高1.5	陶器 完形のため不明	黒釉を上面のみ	無文	下半釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図４ 図版１	蓋 土瓶蓋	裾径8.9 つまみ径1.8 器高3.0	陶器 暗紫灰色	鉄釉を上面のみ	上面に櫛状釉剥ぎを文様としている 底部糸切り	下半露胎	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 36図５	蓋 土瓶蓋	裾径8.0 つまみ径2.0 器高3.5	陶器 暗紫灰色	白化粧土を掛けた上に鉄絵と赤彩で文様を上絵描きし、透明釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 36図６	蓋 土瓶蓋	裾径9.8 つまみ径1.6 器高4.1	陶器 灰色	長石釉を上面のみに掛けて、鉄絵を上絵描きする		下半釉剥ぎ	９割残存	萩焼か	不明
大土坑１上層 36図７	蓋 土瓶蓋	裾径9.2 つまみ径2.0 器高4.4	陶器 灰色	透明釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	９割残存	不明	不明
大土坑１ 36図８	蓋	裾径10.0 つまみ径4.0 器高2.9	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	内外面口縁部は墨引きの雲文帯で、外面は網目文内に桔梗文、内面天井部は蝶文、裏銘は二重圏に「」を呉須染付	受け部釉剥ぎ	完形	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１中層 36図９	蓋	裾径8.9 つまみ径5.4 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は牡丹花文と蝶文で、内外面天井部に蝶文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１ 36図10	蓋	裾径8.9 つまみ径3.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は竹笹文、内面天井部は鳥文を呉須染付	受け部釉剥ぎ	９割残存 呉須が墨色なのは意図的か	肥前	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大土坑１南部上層 36図11	蓋	裾径9.6 つまみ径4.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は牡丹花文、内面は口縁部がダミの波状文帯、天井部は巻物文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１ 36図12	蓋	裾径9.4 つまみ径4.1 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は墨引きの金魚と水草文、内面は口縁部が墨引きの波状文帯、天井部は松文、裏銘は「成化年製」を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	完形	肥前	1820 ～ 1860
大土坑１上層 36図13	蓋	裾径8.9 つまみ径3.8 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は菊花葉文と扇文、内面は界線と天井部は環状松竹梅文をコバルト染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前か	19世紀後半
大土坑１南部上層 36図14	蓋	裾径10.0 つまみ径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は寿文と折松葉文、内面は口縁部に袈裟襷文帯、天井部は寿文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	９割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑１ 36図15	蓋	裾径9.4 つまみ径4.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は墨引きで枠内に唐子文と花文が交互に入る　内面は口縁部に鋸歯文帯、裏銘は祥瑞焼銘を呉須染付　口錆あり	受け部釉剥ぎ　砂目付着	５割残存	肥前	1730 ～ 1740
大土坑１黒色土 36図16	蓋	裾径9.8 つまみ径4.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	茶とコバルトの２色銅版摺り染付で、外面は海草文　裏銘は「大日本柏山製」	受け部釉剥ぎ　砂目付着	ほぼ完形		19世紀後半
大土坑１中層 36図17	蓋 蓋物蓋	裾径9.8 つまみ径1.8 器高3.0	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	外面崩れた花文をコバルト染付	受け部釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑１中層 37図１	蓋 蓋物蓋	裾径9.4 つまみ径1.6 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は樹文を呉須染付	受け部釉剥ぎ　砂目付着	８割残存	肥前	1780 ～ 1860
大土坑１中層 37図２ 図版１	乗燭	口径3.4 底径7.3 器高11.9	陶器 橙褐色	透明釉を底部以外に掛ける	柱部は中空らしく、振ると穿孔により内部に落ちた粘土の存在がわかる　外底は削って上げ底にしている	底部露胎　口唇部釉剥ぎ	９割残存	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図３	灯明受皿	口径7.0 最大径8.4 底径5.0	陶器 暗橙色	鉄釉を内面から裾外面中位まで	外底は糸切り	胴下半露胎 胎土目跡あり	８割残存	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図４	仏飯器	口径8.5 裾径5.0 器高6.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面杯部に格子文地に菊花文、杯部底面と脚部には花弁文を呉須染付	底部釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明
大土坑１黒色土 37図５	仏飯器	口径(6.4) 裾径4.0 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に半菊文を呉須染付	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	1780 ～ 1860
大土坑１中層 37図６	仏飯器	口径(6.1) 裾径3.8 器高4.8	磁器 灰白色	柿釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	６割残存	肥前	不明



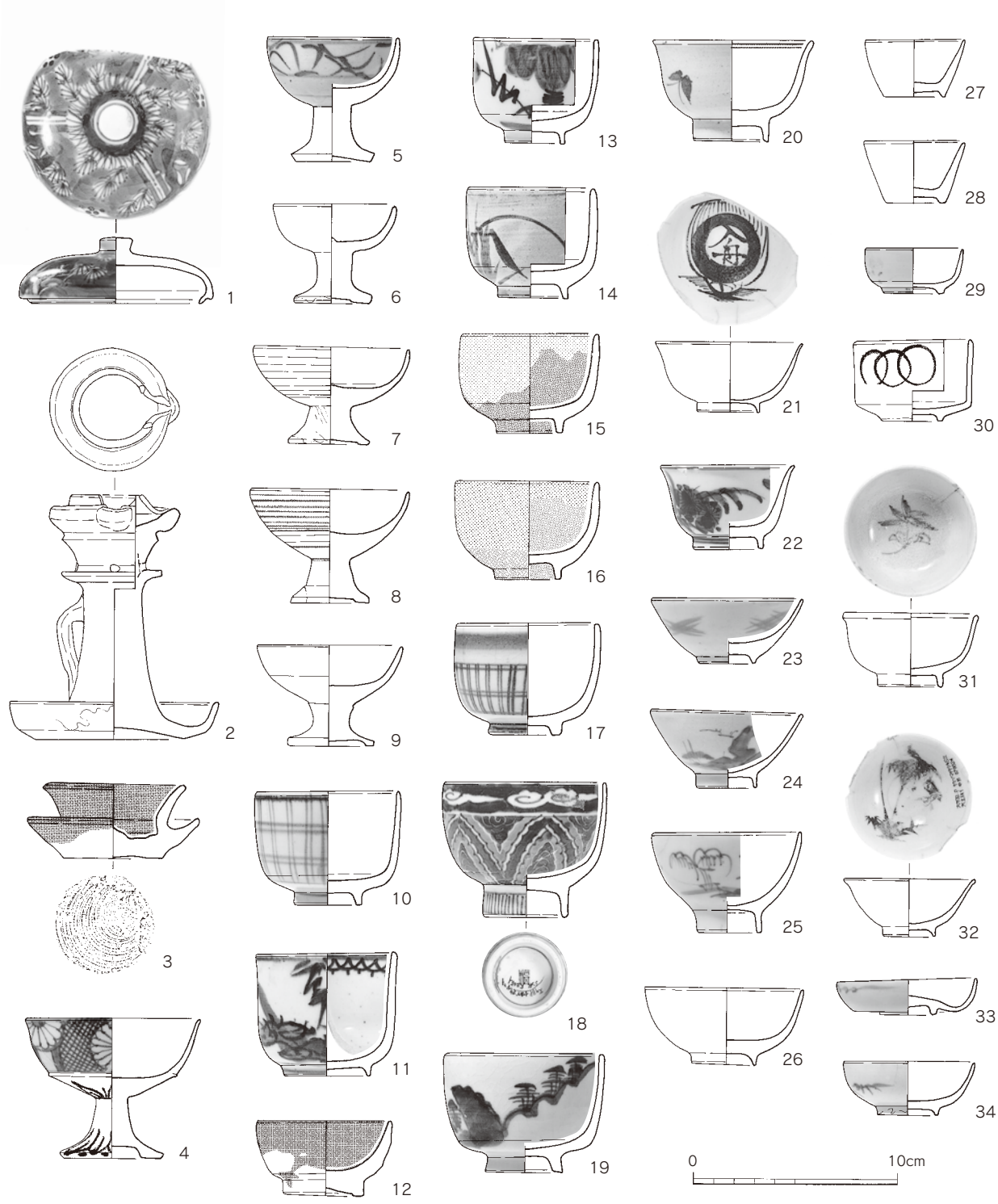
第36図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図10(1/3)

表18　５次調査出土土器・陶磁器観察表17

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑１南部上層 37図７ 図版１	仏飯器	口径7.8 裾径4.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図８	仏飯器	口径7.8 裾径3.9 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	界線を呉須染付	底部露胎	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１南部上層 37図９	仏飯器	口径7.1 裾径3.2 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	底部釉剥ぎ	８割残存	肥前	不明
大土坑１ 37図10	小型碗 湯飲み	口径7.2 高台径3.4 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に二重格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑１上層 37図11	小型碗 湯飲み	口径6.9 高台径4.2 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合半円文コバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１南部上層 37図12 図版１	小型碗	口径6.8 高台径4.0 器高3.6	陶器 発色不良のため軟質で灰白色	鉄釉を内面から外面胴下位まで掛ける		底部露胎	ほぼ完形　発色不良で、内面のみ発色している	肥前	1690 ～ 1780
大土坑１南部上層 37図13	小型碗 湯飲み	口径6.1 高台径2.9 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文、内面口縁部に複合半円文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１黒色土 37図14	小型碗 湯飲み	口径6.4 高台径3.4 器高5.4	磁器 灰白色	発色不良で白濁した透明釉全面掛け	外面に水草文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１中層 37図15 図版１	小型碗	口径6.8 高台径3.1 器高4.8	陶器 灰色	飴釉の上に透明感のある灰釉を外面口縁部から内面胴上半に上掛け　灰釉は窯変が見られる		畳付釉剥ぎ	完形	小石原	不明
大土坑１中層 37図16	小型碗	口径7.1 高台径3.3 器高4.8	陶器 灰色	飴釉の上に透明感のある灰釉を外面口縁部から内面胴上半に上掛け　灰釉は窯変が見られる		畳付釉剥ぎ		小石原	不明
大土坑１中層 37図17	小型碗 湯飲み	口径7.1 高台径3.4 器高5.4	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に口縁下に帯文と中位に格子文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	19世紀中葉
大土坑１ 37図18	小型碗 湯飲み	口径8.2 高台径4.2 器高6.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面に口縁下に墨引きの雲文帯、その下に花弁文、高台外面に櫛歯文、裏銘に「福」を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	８割残存	肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 37図19	小型碗	口径7.7 高台径3.8 器高5.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面に１回転して１つの絵になる山水文を呉須で染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大土坑１南部上層 37図20	小型碗 端反形	口径8.2 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け　貫入あり	外面に菖蒲花文と蝶文、内面に界線をコバルト染付　発色不良で黒色を呈する	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 (黒色土) 37図21	杯	口径7.4 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに帆掛船の帆の中央に円に「入舟」と描かれたモチーフがコバルト吹き付けで描かれている	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大土坑１上層 37図22	杯	口径6.4 高台径3.4 器高4.2	磁器 灰白色	光沢のある透明釉全面掛け	外面に菊花文と蝶文をコバルト染付発色不良で黒色を呈する	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑１中層 37図23	杯	口径7.5 高台径2.8 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉全面掛け　貫入あり	外面に斜格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１ 37図24	杯	口径7.4 高台径3.4 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉を高台以外に掛ける　貫入あり	外面に山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 37図25	杯	口径7.4 高台径3.4 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１中層 37図26	杯	口径7.8 高台径3.1 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑１上層 37図27 図版１	杯	口径4.8 高台径3.0 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑１中層 37図28 図版１	杯	口径5.0 高台径2.9 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑１ 37図29	杯	口径4.6 高台径3.0 器高2.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	赤・緑彩で草花文を上絵付け	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	不明
大土坑１中層 37図30	小型碗 筒形	口径5.8 高台径2.8 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に３つの円文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀前葉

27図２は口縁部や高台の形態は18世紀後半から19世紀前半に見られるものだが、窯詰め技法が胎土目であることや、摺目単位が少ないことや、鉄釉の掛け分けがあることなどから、この器形の古い段階のものと考えられる。

28図１は陶器の半胴甕で、胎土から二川焼と考えられる。28図６は口縁内面側にだけ煤が付着していることから、何かを口に掛けて使用したことが想定される。欠損している範囲に、通風のための窓があっただろう。28図７は煤付きや黒変がないので火鉢ではなく植木鉢と判断した。



第37図　５次調査１号大土坑出土陶磁器実測図11(1/3)

表19　5次調査出土土器・陶磁器観察表18

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑1中層 37図31	杯	口径6.6 高台径3.2 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
大土坑1中層 37図32	杯	口径6.4 高台径2.5 器高2.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	見込みに竹笹がコバルト吹き付けで、鳥が金彩で描かれている	畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 37図33	杯	口径6.8 高台径2.8 器高1.8	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける	外面に崩れた竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目が畳付とへたれた胴下位に付着する	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1南部上層 37図34	杯	口径6.4 高台径3.0 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大土坑1 38図1	鉢	底径16.0	陶器 淡暗紫灰～暗橙灰色 軟質	鉄釉の上に灰白色の灰釉が斑に入る釉を内外面に掛け、その上に藁灰釉を流し掛け　外底に墨書あるも記号らしく意味が通らない		外底釉剥ぎ	「タヒモ」を二本の縦線で消して「ヒヘモ」と横に書き換えている	肥前か	不明
大土坑1黒色土 38図2	急須	口径6.4 底径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	型押し成型で、胴部の窪みに白化粧土を塗布、最後に透明釉を外面に掛ける		外底釉剥ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38図3	急須	口径5.4 底径5.2 器高7.4	磁器 灰白色	型押し成型で、片部の梅花文の陽刻にコバルトを塗布		外底から胴下位釉剥ぎ	把手のみ欠損	肥前	19世紀後半
大土坑1黒色土 38図4	急須	口径6.6 底径6.4 器高6.2	陶器 淡暗紫灰～暗黄灰色	体部は型成型し、内底は小さなオサエの痕跡がある外面に花文・笹文の浮文を貼り付け、そこも異なる濃さの灰釉を掛けている　外面口縁部は鉄釉掛け		不明		不明	不明
大土坑1南部上層 38図5	水注	口径6.4 高台径5.8 器高10.0	陶器 橙灰白色	外面にオリーブ色の灰釉を掛ける		畳付釉剥ぎ 口唇部釉剥ぎ	胴下半は焼成不良で、釉の発色が悪く、外底の釉はちじれている	小石原か	不明
大土坑1中層 38図6	小型壺	口径(11.0) 最大径15.0	陶器 橙色	鉄釉外面施釉後櫛状掻き取り、内面肩部以下に鉄釉ハケ掛け		口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
大土坑1南部上層 38図7 図版1	瓶 灰落とし	底径5.7	陶器 緑がかった灰白色	鉄絵の竹笹文を描いた後に外面透明釉を掛け、胴下位の屈曲部以下を掻き取り		胴下位露胎	完形　口唇部の欠けは煙管を打ちつけた時のもの	肥前	18世紀代
大土坑1中層 38図8	瓶	底径6.0	陶器 にぶい暗黄灰色　粒子がざらつく	外面に白化粧土を掛けた後、貫入の入る透明釉を外面と内面下位に掛け、外面は緑と黒彩の葉文の上絵付け		不明	胎が特徴的	京焼か	不明
大土坑1上層 38図9	瓶	底径8.8	磁器 灰白色	銅緑釉を外面に掛ける	外底に墨書あるも記号らしく意味が通らない	胴下位露胎	「スサ」を二本の縦線で消して「コヒ」と横に書き換えている	肥前	19世紀後半
大土坑1上層 38図10 図版1	焼塩壺	口径6.0 底径4.0 器高6.8	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ	不明	ほぼ完形	蒲池焼か	不明
大土坑1上層 38図11	焼塩壺	底径4.8	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明	ほぼ完形	蒲池焼か	不明
大土坑1南部上層 38図12	焼塩壺	底径4.0	土師質土器 内面は黒変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明		蒲池焼か	不明
大土坑1南部上層 38図13	焼塩壺	底径4.0	土師質土器 内面は赤変しているが、本来にぶい黄灰色　精良	－	内外面ナデ 外底糸切り	不明		蒲池焼か	不明
大土坑1黒色土 38図14	蓮華	短軸4.5	磁器 灰白色	薄い緑釉を全面に掛ける	型押し成型	畳付露胎		肥前	不明
大土坑1中層 38図15	ハマ	径6.2 器高2.0	陶器 砂粒を多く含む　灰白色	－	外面に鉄釉で円に棒の記号を描く	記号のある面が良く焼けているので、下面を接地している	8割残存	不明	不明
大土坑1中層 38図16	七輪窓の蓋	長軸9.8 短軸4.0 厚さ2.0	土師質土器 器面は黄灰白色だが、胎は淡橙色　金ウンモを多く含む	－	内面のカキ目が端部で途切れていることから、板作りではなく、同じ径の筒状のものを裁断している　つまみの凹凸は指オサエ	不明	ほぼ完形　胎から博多七厘のものではなく、在地ものだろう	在地	不明
大土坑1上層 38図17	小型瓶 仏花瓶	口径1.4 高台径3.3 器高9.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1780 ～ 1860
大土坑1中層 38図18	ミニチュア土鍋蓋	裾径5.5 つまみ径2.2 器高1.2	施釉土師質土器 にぶい暗黄灰白色	外面は透明釉の上に緑・黒・赤彩で上絵つけ　全面	型押しで、鹿と楓を陽刻している	裏面露胎	完形	在地	不明
大土坑1黒色土 38図19 図版1	合子	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	無文	底部露胎 受部釉剥ぎ	完形	肥前	不明
大土坑1黒色土 38図20 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.0 高台径1.0 器高1.0	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面に菊花文を陽刻する	底部露胎	完形	肥前	不明

第38図　5次調査 1号大土坑出土土器・陶磁器実測図5 (1/3)

28図８は土師質土器の小甕で、外底の板状圧痕は幅が広い。

29図１から3･5･7は陶器の半胴甕で、１の内面の釉は発色が不十分なので何釉なのかわからない。２の口縁部が鋸歯状だが意図的に打ち掻いたものかもしれない。３は鉄釉の釉調から須佐唐津と想定される。５は胎の色調が斑で、密度が高く、鉄絵が稚拙で、釉掛けの省略が見られることから二川焼の可能性が高い。７は内面の釉切れ部の灰黒色は焼成不良の胎の色であって釉の発色ではない。

30図１は土師質土器の甕で、胎･調整･焼成など土師質瓦と同じものだが、径が小さいことと、下位の湾曲があることから甕と考えた。

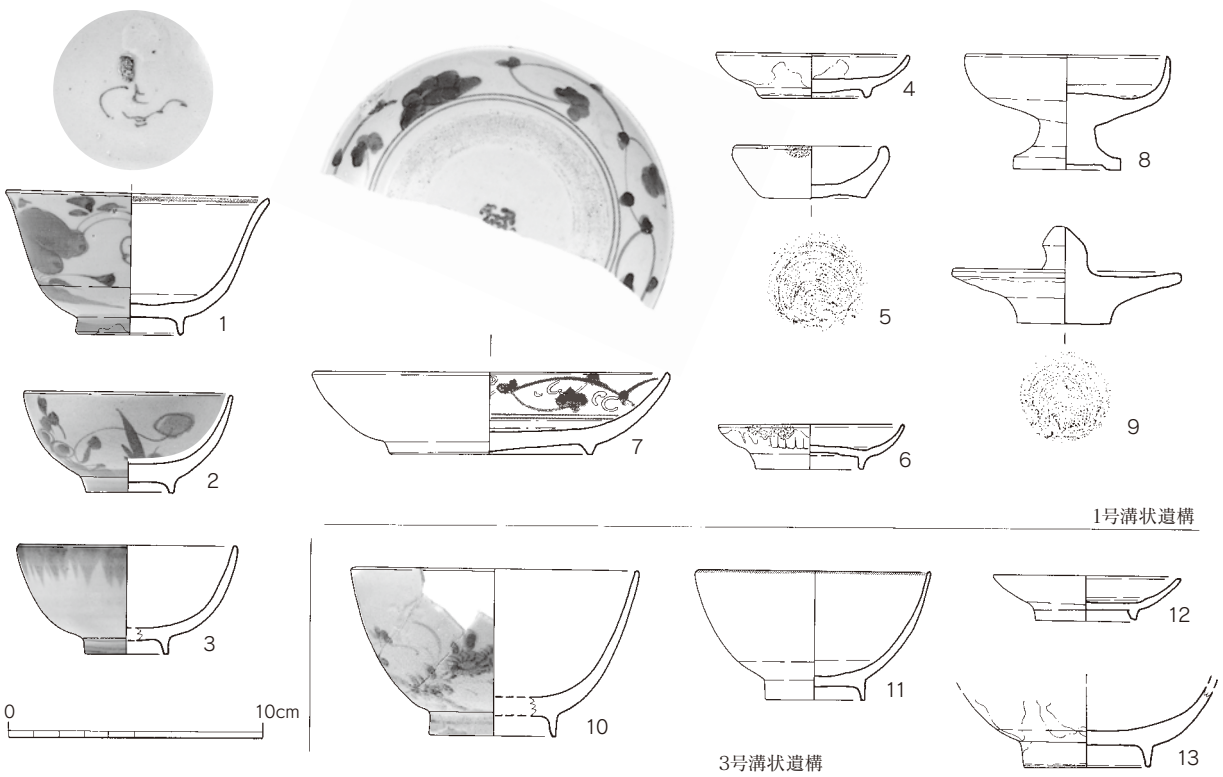
31図18は陶器の鉢で、胎が暗紫灰色なので、白化粧土を黄白色の下地とし、鉄絵を描いている。

33図１は陶器の瓶で、外面胴下位の釉が付着していない丸い部分は、釉薬に漬ける際に保持した指の跡だろう。外底には焼き台から外した際のものであろう欠損がある。33図２は陶器の尿瓶で、上半部は焼成が良いが、下半は飴釉が鉄釉状に発色する。33図６は土瓶の蓋と身ですが、いわゆる青土瓶である。

34図３は陶器の甕だが、内面の釉は薄く、露胎に見えるが、釉剥ぎした範囲と比べれば塗布されていることがわかる。36図15は染付の蓋で、裏銘は「五良大甫　呉祥瑞□」とあり、類例から最後の一字は「造」であり、「祥瑞焼」あるいは「祥瑞手」といわれるものである。銘については「呉」「祥瑞」ともに地名とする説と「五良大甫」「呉祥瑞」は人名とする説があり、後者では「五良太甫」は桃山時代～江戸時代に生きていた陶器商人とする説と、景徳鎮で陶芸を勉強し、中国名を「呉祥瑞」とした日本陶工とする説がある。本資料は釉調・胎から肥前染付である。

37図27は磁器の小杯で、27と28はほぼ同じものだが、畳付の形状が異なる。

38図10は焼塩壺で、胎は底部の中心部が暗紫灰色で、その周囲は淡赤黄灰色を呈する。外面口縁部が焼けているので外蓋がつくとわかる。38図18はミニチュアの土鍋の蓋で、胎は陶器ではないので、施釉土師質土器とした。胎は蒲池焼ではなく、搬入品だろう。



第39図　５次調査１・３号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1/3)

39図５は土師質土器の小皿で、口縁部の窪んだ部分に、39図6･12は磁器の小皿で６は外面口縁部に煤付着しているので灯明皿として使用したとわかる。６と12はつくりが同じ成型方法のなのでセットで購入したものだろう。

40図３は陶器の小型甕で、釉に漬ける際の指の跡が残る。

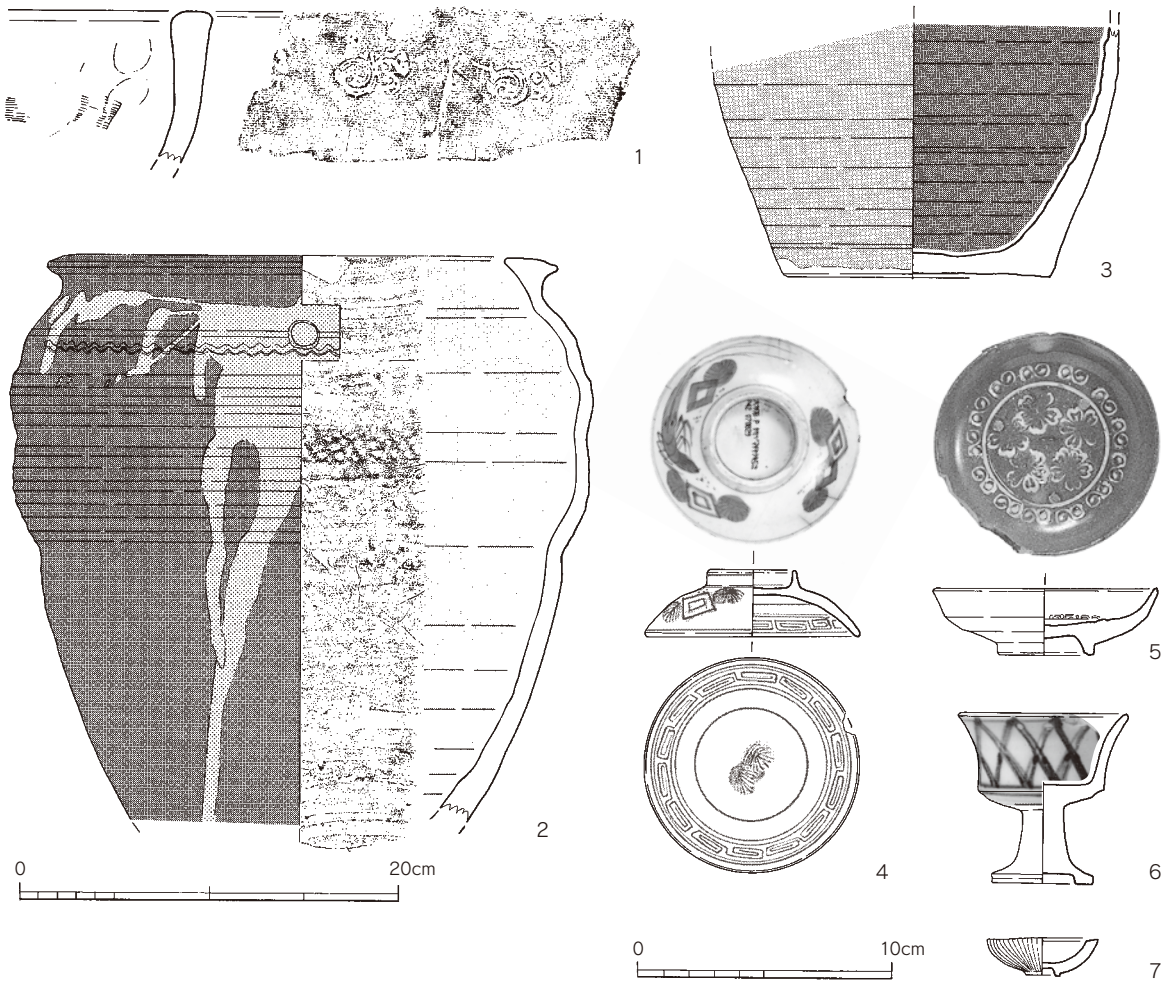
41図２は磁器の小皿で、同じ器形を重ねしており、上の個体の一部が付着している。41図３は陶器の香炉か火入れで、緑色の釉は灰釉ではなく、青磁に使う釉調である。41図６は軟質施釉陶器で､作りが悪い。近代に属するものだろうが､類例がないので産地･時期ともにわからない。

42･43図は土師質の瓦で、 42図６は凹面の中央部のみが暗褐色に変色しており、そこに汚水が流れたことがわかる。樋瓦であることを示す良好な資料である｡(写真４)42図７は雁振瓦としたが、径が小さいので丸瓦の可能性もある。

43図４は端部との接合部は凸面側に丸みがあるので、雁振瓦にあたる。4の凸面の変色は、凸面から端面外側が露出していたことを示す｡(写真４)42図２は樋瓦で凸面の黒変が著しく、凸面が屋内側に向いていたことを示している。

42図3･4、43図４は胎も内外面も橙褐色であり、胎土内の褐色パミスの多さから水田の赤瓦と考えられる。端部との接合部は内部側にオサエ列があり、外側は未調整である。

44図1･2･4は同じ調整が見られるので、同じ製作地の製品だろう。



第40図　５次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(２は1/4、他は1/3)

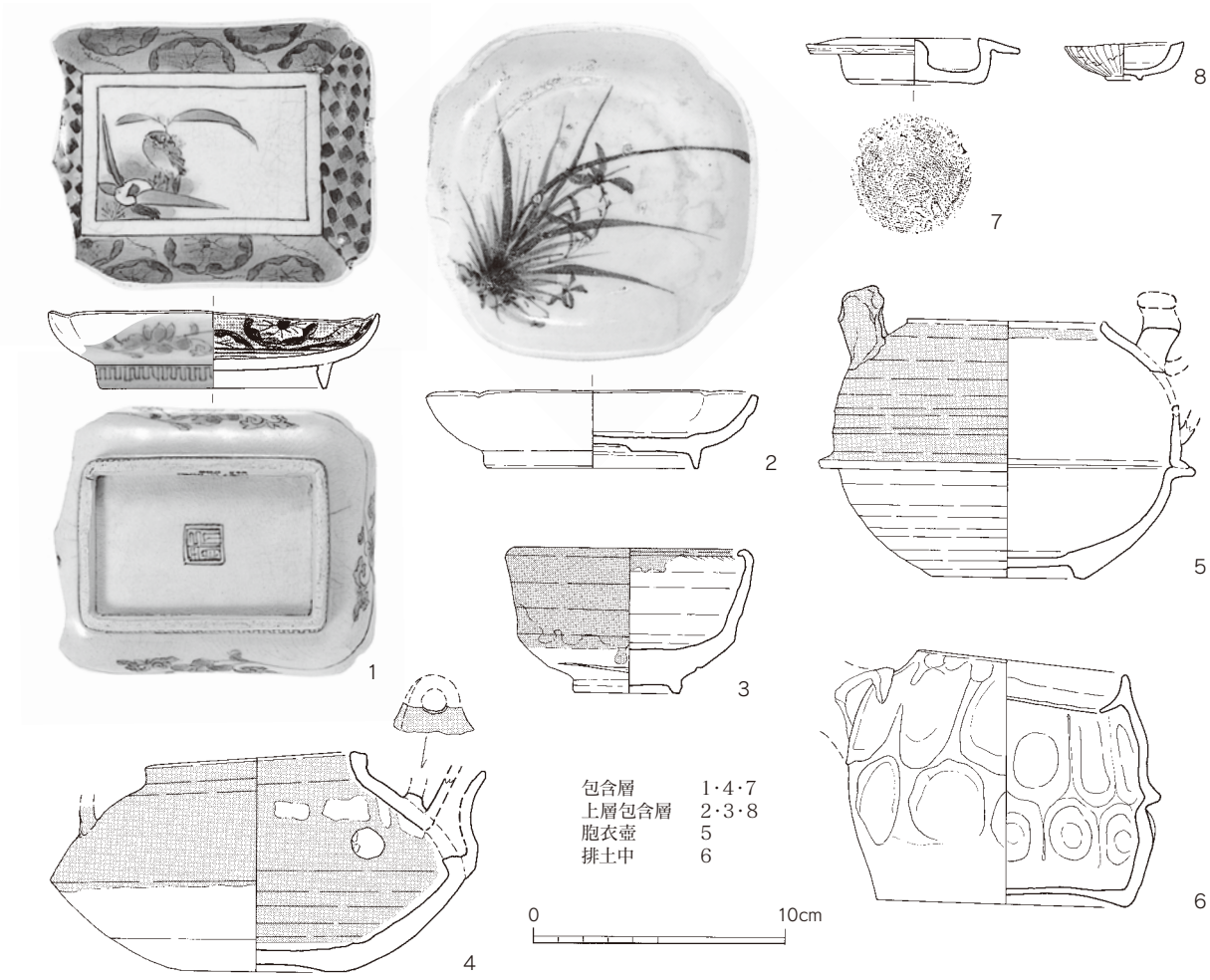
表20　5次調査出土土器・陶磁器観察表19

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
溝1 39図1	碗 端反形	口径10.3 高台径4.2 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は花文､見込みは崩れてモチーフ不明､内面口縁部に口錆状を呉須染付	畳付釉剥ぎ	見込みに焼成時の付着物あり	肥前	19世紀中葉
溝1 39図2	小型碗	口径8.2 高台径3.6 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良	肥前	不明
溝1 39図3	小型碗	口径8.6 高台径(3.3) 器高4.3	磁器 灰白色	暗い透明釉を全面に掛ける	外面雨降文の呉須染付	畳付釉剥ぎ	発色不良	肥前	不明
溝1 39図4	小皿	口径7.6 高台径4.3 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ	発色不良で､貫入化している部分がある	肥前	不明
溝1 39図5 図版1	小皿	口径6.3 底径4.2 器高2.0	土師質土器 完形のため胎不明	－	無文	胎土目跡あり	完形 内面が黒変している	蒲池焼	不明
溝1 39図6	小皿	口径7.4 高台径4.2 器高1.7	磁器 灰白色	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻し、高台は貼り付け	底部露胎	6割残存 歪みあり	肥前	不明
溝1 39図7	小皿 5寸皿	口径(14.2) 高台径8.0 器高3.2	磁器 灰白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉を全面に掛ける	内面に菊唐草文、見込みに5弁花文を呉須染付　赤絵を菊唐草文の上に唐草を、見込みに葉文足し、蛇ノ目釉剥ぎ部には花弁文が入る	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇ノ目に釉剥ぎ後アルミナ塗布	高台内部にカンナ痕	波佐見	1680 ～ 1740
溝1 39図8	仏飯器	口径8.2 裾径4.2 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける		底部露胎	6割残存	肥前	不明
溝1 39図9 図版1	蓋 土瓶蓋	裾径8.9 つまみ径1.8 器高3.0	陶器 完形のため胎不明だが、器面は橙褐色	オリーブ色の灰釉を上面のみに掛ける		下半釉剥ぎ	完形 釉の白色部は発色不良	不明	不明
溝3 39図10	碗	口径(11.4) 高台径(5.0) 器高6.5	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面は菊花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1750
溝3 39図11	碗	口径9.2 高台径4.0 器高5.0	磁器 灰白色	光沢のある透明釉を全面に掛ける	口錆あり	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
溝3 39図12	小皿	口径7.4 高台径4.0 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉　内面から外面口縁部	型押し成型で、外面菊花文を陽刻し、高台は貼り付け	底部露胎	4割残存 歪みあり	肥前	不明
ピット7 40図1	鉢	－	土師質土器 橙灰白色 軟質粗放	－	外面に花付きの巴文のスタンプ 外面は燻した後にミガキ	不明	スタンプから水田焼とわかる	水田焼	不明
ピット7 40図2	鉢 半胴甕	口径27.0 肩径30.5	陶器 橙褐色	円形浮文貼り付け後全面鉄釉掛け、その後外面肩部に藁灰釉掛け流し　内面には格子目タタキ当て具痕が残る		口唇部釉剥ぎ	胎が紫色なのは焼成が強いためだろう	肥前	不明
ピット24 40図3	小甕か	底径10.3	陶器 橙褐色	外面オリーブ色の灰釉、内面鉄釉掛け		外底釉剥ぎ	釉の発色が良いのは胎が灰色の範囲	小石原	不明
ピット42 40図4	蓋	裾径8.3 つまみ径3.4 器高2.6	磁器 完形のため不明	透明釉を全面のみに掛ける	外面は海老文と菱形文で、内面口縁部に雷文帯、天井部に松文を呉須染付		裾部の欠損部が黒化	肥前	19世紀中葉
ピット42 40図5	小皿	口径8.8 高台径3.8 器高2.6	陶器 橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、鉄釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、発色不良で黄色がかった透明釉全面掛け		畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前	不明
ピット12 40図6	仏飯器	口径6.7 裾径4.0 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前	不明
ピット42 40図7 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.5 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
上層包含層 41図1	小皿 変形皿 方形	長軸13.1 短軸10.0 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　内面に花文と　文を対面の区画内に入れ、見込みに鳥文、外面胴部は牡丹唐草文、裏銘二重圏線内に**青**　呉須染付	畳付釉剥ぎ	8割残存	肥前か	19世紀中葉
上層包含層 41図2	小皿 変形皿 方形	口径13.0 高台径8.2 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面無文、内面見込み草花文と5弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡5つあり　蛇ノ目高台の台部釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
上層包含層 41図3	小鉢 香炉か	口径9.8 高台径4.2 器高5.7	陶器 灰白色 軟質	青磁釉を内面口唇部から外面胴中位まで掛ける	高台は貼り付け後削り出し	胴下位露胎	内面は口縁部以外は釉掻き取り	肥前	不明
包含層 41図4	土瓶	口径8.9 最大径16.6 器高8.5	陶器 にぶい橙灰色 混入物多い	オリーブ色の灰釉を胴中位まで、内面は口縁部と底部に鉄釉	把手部は型作り	底部露胎 口唇部は釉剥ぎ	外底部は黒く変色	小石原	19世紀代
胞衣壺2 41図5	土瓶	口径7.8 最大径14.9 器高10.2	陶器 紫灰色 精良	鉄釉を外面胴中位以上と内面口縁部まで掛ける	把手部は型作り	底部露胎 口唇部釉剥ぎ	鉄釉は発色悪く、白濁している	肥前	不明
排土中 41図6	急須	口径8.0 最大径11.2 底径9.7	軟質施釉陶器 黄灰色	型押し成型で、外面に凹凸を作り、受け部を貼り付けた後、内面の受け部以下に透明釉を掛ける		底部露胎	つくりが悪い内底と外面下半は煤付着	不明	不明
上層包含層 41図7 図版1	蓋 土瓶蓋	裾径8.4 つまみ径1.1 器高1.8	陶器 完形のため胎不明だが、器面は橙褐色	黒釉を上面のみ	底面糸切り	裏面釉剥ぎ	完形	肥前	不明
ピット42 41図8 図版1	紅猪口 紅皿	口径4.8 高台径1.4 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉　内面から外面口縁部まで	型押し成型で、外面菊花文を陽刻する	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明

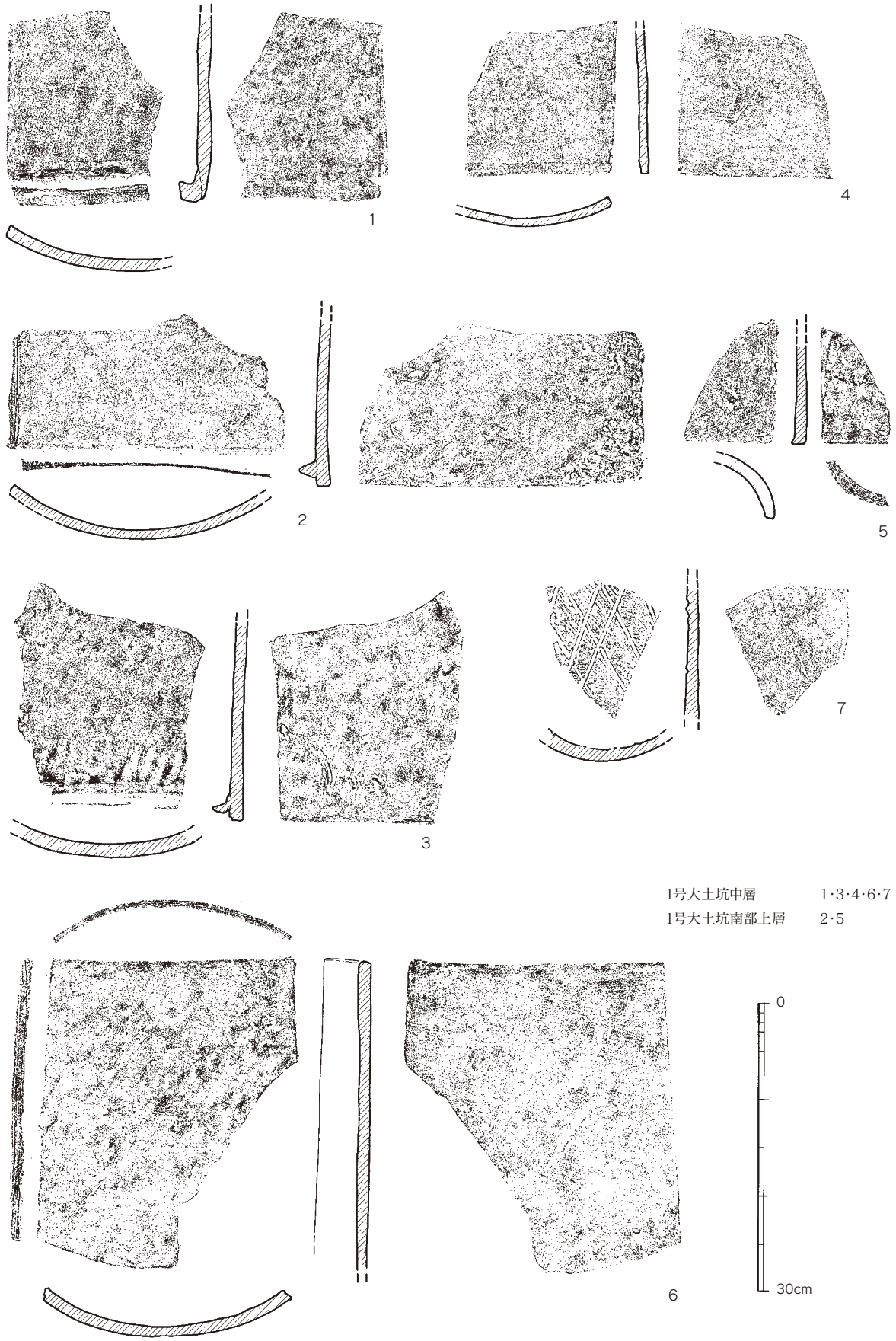
45図２は土人形の土馬で、騎人の痕跡ないが背中を窪ませているので、別造りの騎人人形と組み合わせた可能性がある。45図９は幼児人形で、頭の両横に穿孔があり、兜のしころの表現があるので、兜の鉢部は別造りで紐で組み合わせていたのではないだろうか。45図12は陶器の摺鉢で、内外露胎なので、口縁部のみ施釉する17世紀後半代の肥前産と考えられる。45図13は七輪のサナで、穿孔部の側面と外縁の側面は付着物がない。外縁の下半部は七輪の内面に固定されていたためで、焼けが弱い。45図14は円盤形の土製品だが中央に穿孔があるので、メンコ形土製品ではない。上面にのみ線刻文様があるが、近世にこのような小型の紡錘車は実用的ではないので、紡錘車ではないだろう。砲弾型ではなくとも独楽とされる例はあるので、独楽としたい。（注１）

46図3･4は窯道具の土製品で、丁寧に平坦面が作られているので、積み重ねる部材だろうか。まとめで後述するこしき炉の壁体だろうか。46図13は軽石製の砥石で、全面加工して小型の三角柱形状を呈している。曲面を研磨するための手持ち砥石と形態や大きさが同じなので、砥石に使う石材ではないが砥石と考えるべきだろう。46図14は硯で、側面・裏面に光沢のある付着物があるので、木枠に収めて膠などで固定していたものと思われる。

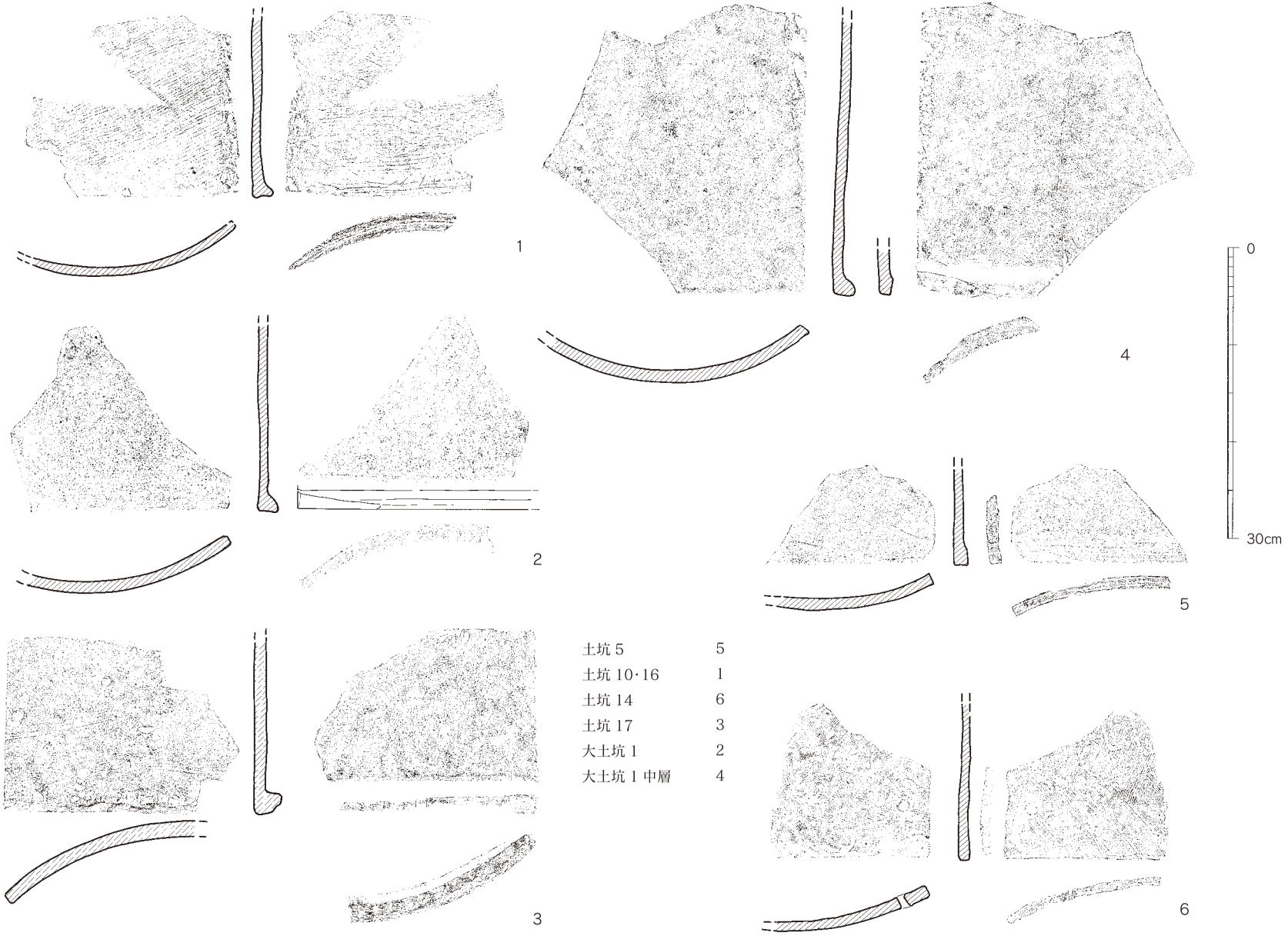
47図５は火打金で、三角形の下辺部分の中央部が使用により摩滅している。47図９～11は大型の縫い針だろう。9･10の短いものは莚で長いものは畳用だろうか。47図16は包丁で、17･18に比べて身が厚く、17･18は刃が付いておらず未成品の可能性があるが、包丁にしては幅が広い



第41図　５次調査包含層・２号胞衣壺・排土出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第42図　5次調査出土土師質瓦実測図1 (1/6)

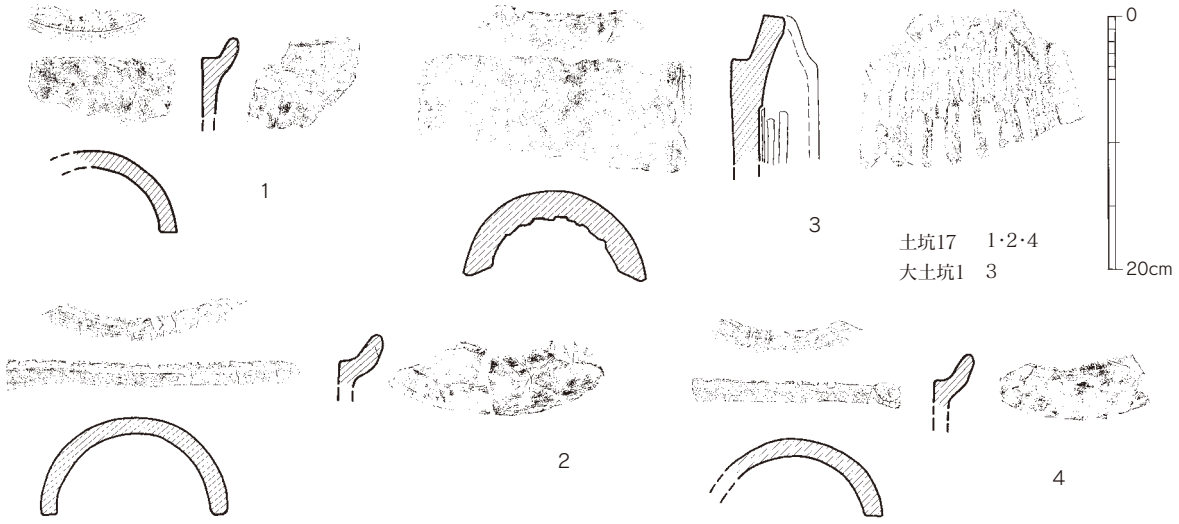


土坑 5	5
土坑 10·16	1
土坑 14	6
土坑 17	3
大土坑 1	2
大土坑 1 中層	4

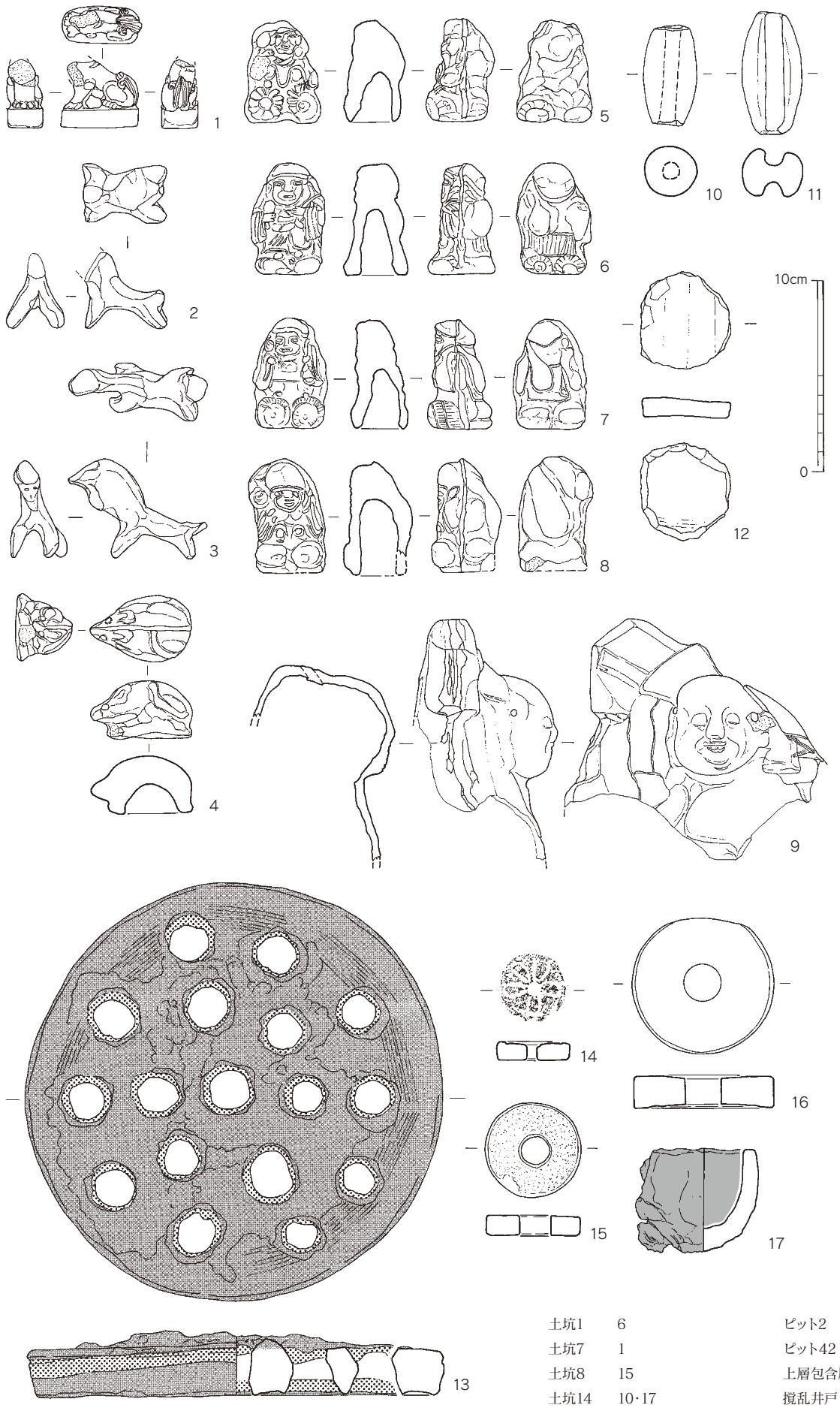
第43図　5次調査出土土師質瓦実測図2 (1/6)

表21　５次調査出土瓦観察表

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	色調	調整・整形・装飾技法				製作技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴		凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面		特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名											
大土坑１中層 42図１ 図版３	樋瓦	長さ19.6 幅16.3 厚さ1.2	土師質土器 黄灰白色が黒灰色を挟む	黄灰白色	目の細かいハケを丁寧に施す	目の細かいハケを丁寧に施す	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	１枚造り	白色粒子を多く含む　変色なし	在地	不明
大土坑１南部上層 42図２	樋瓦	長さ18.0 幅26.6 厚さ1.5	土師質土器 にぶい暗黄灰白色	灰黒色	ナデ	目の細かいハケ	ナデ	ケズリ	１枚造り	凸面から端面外側が変色	在地	不明
大土坑１中層 42図３ 図版３	樋瓦	長さ21.4 幅18.5 厚さ1.3	土師質土器 暗茶褐色が黄灰色を挟む	橙茶褐色	オサエ後ナデ	ハケ後ナデ	ナデ	—	１枚造り	凹面のみ器面摩滅	在地	不明
大土坑１中層 42図４ 図版３	雁振瓦	長さ15.0 幅15.3 厚さ1.0	土師質土器 橙茶褐色がにぶい黄灰色を挟む	橙茶褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ 面取り	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	器面摩滅も変色もなし	在地	不明
大土坑１中層 42図５ 図版３	丸瓦	長さ10.6 幅5.5 厚さ1.0	土師質土器 にぶい暗黄灰白	灰黒色	オサエ後ナデ	目の粗いハケを丁寧に施す	ナデ	ナデ	１枚造り	凸面端部は突出する	在地	不明
大土坑１中層 42図６	樋瓦	長さ32.5 幅26.3 厚さ1.2	土師質土器 にぶい暗黄灰白灰色	にぶい暗黄灰褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	凹面のみ器面摩滅　変色あり	在地	不明
大土坑１中層 42図７ 図版３	雁振瓦	長さ14.2 幅12.4 厚さ1.2	土師質土器 橙灰色がにぶい灰色を挟む	橙灰色	目の粗いハケの後格子目沈線	目の細かいハケ	—	—	１枚造り	凸面のみ器面摩滅	在地	不明
土坑10・16 43図１ 図版３	雁振瓦	長さ19.0 幅16.4 厚さ1.2	土師質土器 灰黒色が灰白色を挟む	灰黒色	目の粗いハケを丁寧に施す	目の粗いハケを丁寧に施す	ナデ	—	１枚造り	側端側の凹凸面の器面剥落著しい	在地	不明
大土坑１ 43図２ 図版３	雁振瓦	長さ19.5 幅21.3 厚さ1.0	土師質土器 黄橙色が暗黄灰色を挟む	にぶい橙褐 色～灰黒色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ナデ	—	１枚造り	器面摩滅なし 内外変色あり	在地	不明
土坑17 43図３ 図版３	雁振瓦	長さ18.5 幅20.1 厚さ1.6	土師質土器 にぶい黄灰白灰	灰白褐色	目の細かいハケ	目の細かいハケ	ケズリ	ケズリによる面取り	１枚造り	内外変色ほとんどなし	在地	不明
大土坑１中層 43図４	雁振瓦	長さ28.8 幅27.2 厚さ1.3	土師質土器 暗茶褐色が黄灰色を挟む	橙茶褐色	目の細かいハケ後ナデ	目の細かいハケ後ナデ	ナデ	中央まで切り込みを入れ、折っている	１枚造り	凹面のみ変色	在地	不明
土坑５ 43図５ 図版３	雁振瓦	長さ10.4 幅16.2 厚さ1.0	土師質土器 黄灰白色が黒灰色を挟む	明黄灰褐色	ハケ	ハケ後ナデ	ナデ	ケズリ	１枚造り	器面摩滅も変色もなし	在地	不明
土坑14 43図６ 図版３	雁振瓦	長さ16.4 幅16.4 厚さ11.3	土師質土器 灰色　白色粒子を多く含む	灰黒色	丁寧なハケ	丁寧なハケ	ナデ	ケズリ	１枚造り	釘孔あり	在地	不明
土坑17 44図１	丸瓦	長さ6.1 幅9.3 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	１枚造り		在地	不明
土坑17 44図２	丸瓦	長さ4.4 幅15.0 厚さ1.4	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリ	１枚造り		在地	不明
大土坑１ 44図３ 図版３	丸瓦	長さ11.8 幅14.5 厚さ2.5	瓦質 灰白色	灰黒色	摸骨痕が大きく窪むその周りに茣蓙のような圧痕あり	ナデ	ナデ	ヘラケズリが２面ある	１枚造り		在地	不明
土坑17 44図４	丸瓦	長さ4.5 幅13.6 厚さ1.3	瓦質 灰色	灰黒色	ナデ	ナデ	ナデ	ヘラケズリが２面ある	１枚造り		在地	不明



第44図　５次調査出土瓦実測図(1/6)



土坑1	6	ピット2	7
土坑7	1	ピット42	14
土坑8	15	上層包含層	11
土坑14	10·17	撹乱井戸	5·8
大土坑1	2～4·9·12·13·16		

第45図　5次調査出土土製品実測図(1/3)

ので調理用ではなく、藁やい草などを切るための農作業用かもしれない。

49図1･4は椀で、1は外面モチーフは欠損と剥落のため判然としない。金彩が剥げた下に赤漆が残っているので、赤漆だけになっている部分も本来金彩があったのだろう。4は高台側面に穿孔して桜の樹皮と思われるもの縒った紐を通しているが、樹皮の先端は端部は欠損している。桜の樹皮は緊縛具として使用されることから、柄や板と緊縛していたことが予測される。9は端反形で低い高台が底部端につく変わった器形の椀である。22は脚付盤であろう。残存する脚の位置関係から３脚であろう。

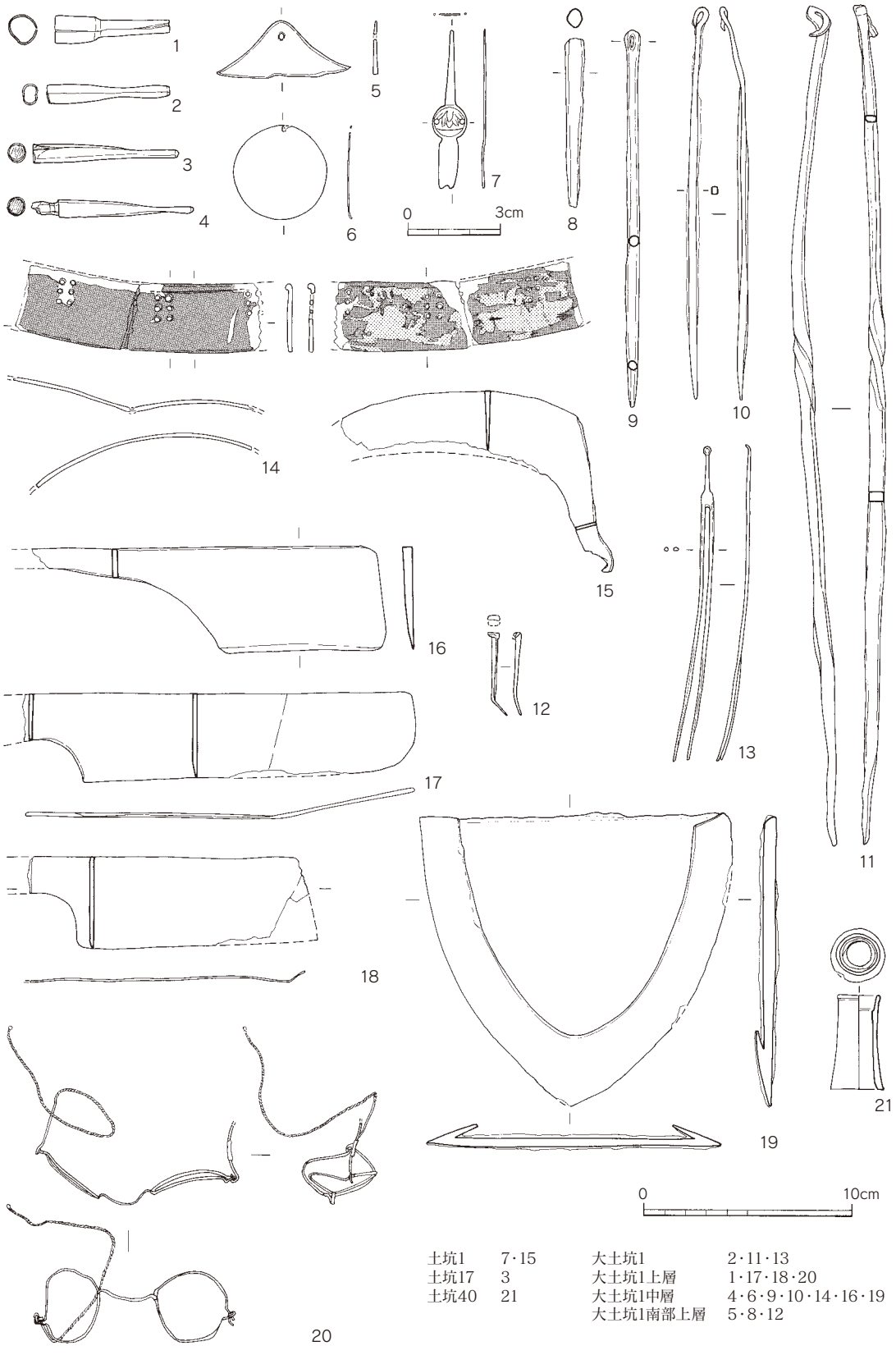
50図4･10･12は下駄で、４の台上面踵部の×印の沈線は秋田裕毅(文献１)によると、呪術的な封印の意味があるといわれている。10は歯の接地部分に砂が挟まっている。12は壺孔の周囲

表22　５次調査出土土製品観察表

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴			特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名							
土坑７ 45図１ 図版２	土人形 狛犬	長さ4.0 幅1.9 高さ3.5	土師質土器 暗黄灰白色	頭部は欠損、左右対称で、前足は融合している	型合わせ成型		在地か	不明
大土坑１上層 45図２ 図版２	土人形 土馬	長さ3.0 幅3.8 高さ4.0	土師質土器 暗灰白色	頭部は欠損だが鬣がある　尻尾は尖る	手捏ね		在地	不明
大土坑１上層 45図３ 図版２	土人形 土馬	長さ2.8 幅7.1 高さ5.2	土師質土器 黄灰白色	顔は粘土貼り付けで表現　尻尾は丸い	手捏ね	完形	在地	不明
大土坑１南部上層 45図４ 図版２	土人形 鼠	長さ3.6 幅5.3 高さ3.0	土師質土器 暗黄橙灰色	表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	完形	在地	不明
撹乱井戸 45図５ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.6 幅3.4 高さ5.8	土師質土器 金雲母なし 黄橙灰色	型合わせ成型の接合痕が隆起している　下面から穿孔あり	型合わせ成型	後面が高いのは型のずれ ほぼ完形	在地	不明
土坑１ 45図６ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.5 幅3.5 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄橙灰色	２つの型で成型したものの１片　表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	完形 変色なし	不明	不明
ピット２ 45図７ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.8 幅3.4 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄灰白色	型合わせ成型の接合痕が隆起している　下面から穿孔あり	型合わせ成型	後面も文様がよく出ている 完形	在地	不明
撹乱井戸 45図８ 図版２	土人形 大黒天像	長さ3.9 幅3.4 高さ5.3	土師質土器 暗橙灰白色	表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	器面摩滅 ほぼ完形	在地	不明
大土坑１中層 45図９ 図版２	土人形 幼児人形	長さ11.6 幅7.4 高さ10.2	土師質土器 黄白色	２つの型で成型したものを接合している　接合部はケズリ　頭の両横に穿孔があり、兜のしころの表現がある	型合わせ成型		在地	不明
大坑14 45図10 図版２	土錘 管型	長さ5.1 最大径2.9 重量30	黄灰色	手捏ね　ナデ　穿孔径0.8cm	―	ほぼ完形	在地	不明
上層包含層 45図11 図版２	土錘 有溝断面工字形	長さ6.3 幅3.0 厚さ2.4重量34	黄灰色 淡橙褐色	手捏ね　ナデ　孔幅1.0cm	―	完形	在地	不明
大土坑１上層 45図12 図版２	陶器片転用 円盤形製品	長軸4.9 短軸4.7 厚さ1.0	土師質土器 混入物あり 黄灰色	肥前陶器の擂鉢の転用 側縁は全周打ち欠いている	転用		在地	不明
大土坑１ 45図13 図版２	サナ	径21.8 孔径2.7～3.2 厚さ3.0	土師質土器 黄橙灰色	表裏面にハケが残る　穿孔の縁が尖っているので両面から穿孔しており、貫通させるのではなく抉り取っているとわかる　焼け方は両面とも同じくらいだが、上面より下面の方が付着物が多い		完形	在地	不明
P42 45図14 図版２	独楽か	径3.8 厚さ1.0	土師質土器 黄灰色	ナデで上面は花形のスタンプ　中央に径４mmの穿孔あり		完形	在地	不明
大坑８ 45図15 図版２	戸車	径4.0 孔径1.6 厚さ1.1	磁器 灰白色	表裏面にアルミナ付着　穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている		完形	肥前	不明
大土坑１黒色土 45図16 図版２	戸車	径7.2 孔径1.8 厚さ1.7	磁器 灰白色	穿孔面に透明釉があるが側面は釉が摩滅して失われている　側面の一部が集中的に磨り減っている　一面に高台の痕跡があるので、焼き台の転用だろう		完形	肥前	不明
土坑14 45図17 図版２	るつぼ	口径5.4 器高5.4	土師質土器 完形のため不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	外面の赤茶色の付着物は鋳鉄か	在地	不明

土坑1	11
土坑17	7·10
大土坑1	2·8
大土坑1上層	3～6·9·13·15
大土坑1中層	1
上層包含層	12

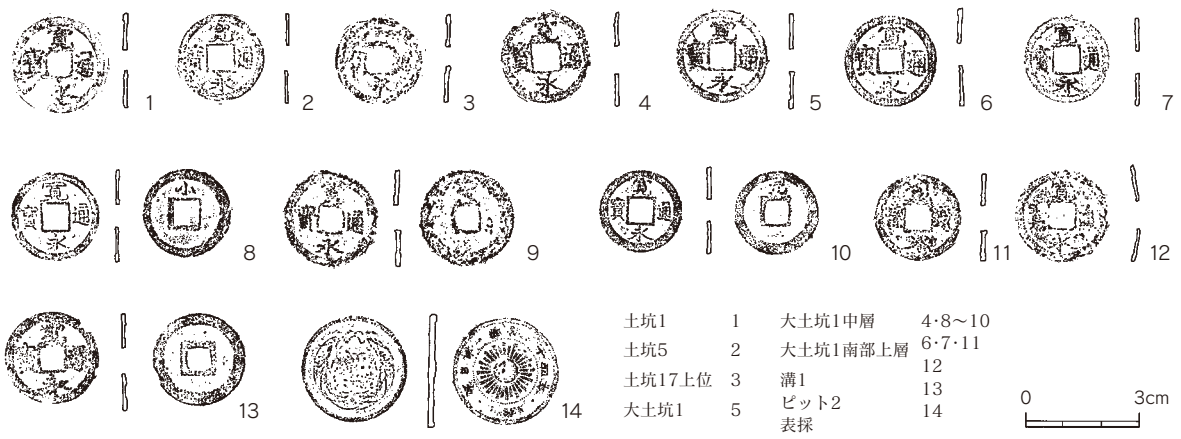
第46図　５次調査出土土・石製品実測図(1/3)



第47図　５次調査出土金属・鹿角製品実測図(1/3)

表23　５次調査出土土・石製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm、g) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大土坑１中層 46図１ 図版２	棒状土製品	長さ13.7 幅2.8 厚さ3.0	土師質土器	下面がよく焼けており、付着物多い　上面は端部だけが赤化している	手捏ね　端部は斜めに裁断されている		在地	不明
大土坑１ 46図２ 図版２	棒状土製品	長さ12.5 幅2.7 厚さ2.9	土師質土器	下面がよく焼けており、付着物多い　上面は側端面だけが赤化している	手捏ね　側端面は裁断されている	上面に板状圧痕が残る	在地	不明
大土坑１中層 46図３ 図版２	棒状土製品	長さ16.3 幅5.1 厚さ4.2	土師質土器	上面がよく焼けており、付着物多い　下面は赤化しているのみ	手捏ね　端部は面取りで丸く仕上げられている	側面に融着物が剥がれた痕跡あり	在地	不明
大土坑１上層 46図４ 図版２	棒状土製品	長さ14.0 幅4.9 厚さ4.0	土師質土器	上面がよく焼けており、付着物多い　１側面と下面は付着物なし	手捏ね　各面は丁寧に整形されている		在地	不明
大土坑１上層 46図５ 図版２	板状土製品	長さ9.1 幅9.4 厚さ2.0	瓦質土器	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けており、側端面は付着物あり		上下面とも中央が帯状に焼けていない	在地	不明
大土坑１上層 46図６ 図版２	板状土製品	長さ9.0 幅10.2 厚さ1.9	瓦質土器	平瓦片の転用で、上下面とも端部がよく焼けており、側端面は付着物あり		下面は１つの角だけが焼けておらず、上面は側端以外は焼けていない	在地	不明
土坑17上位 46図７ 図版３	置き砥石	長さ8.2 幅5.2 厚さ1.2重量86	頁岩 天草石	側面の丸みは使用によるもの　仕上げ砥石				
土坑１ 46図８ 図版３	置き砥石	長さ7.0 幅5.6 厚さ2.7重量156	頁岩 天草石	左側面は欠損、右側面と下面は整形面　仕上げ砥石				
大土坑１上層 46図９ 図版３	置き砥石	長さ9.8 幅5.3 厚さ0.8重量105	頁岩	上下面は使用面が剥離しており、側面は整形されている　仕上げ砥石				
大土坑１ 46図10 図版３	置き砥石	長さ8.3 幅5.9 厚さ1.8重量96	頁岩	下面は使用面が剥離しており、側面は整形されているが左側面の下部の角を使用している　仕上げ砥石				
土坑１ 46図11 図版３	置き砥石	長さ2.4 幅5.8 厚さ1.1重量25	頁岩	下面は研磨されていない整形面、側面は整形されているが右側面の上部の角を使用している　仕上げ砥石				
上層包含層 46図12 図版３	置き砥石	長さ17.7 幅7.3 厚さ5.7重量968	砂岩	側面は７面の使用面があり、上下端面は整形されている　粗砥石				
上層包含層 46図13 図版３	手持ち砥石	長さ5.2 幅6.3 厚さ3.8重量21	軽石	底面は平滑な平坦面で、他の面には丸みがある　仕上げ砥石				
上層包含層 46図14 図版３	石硯	長さ13.7 幅6.2 厚さ2.1重量359	凝灰岩	下面に沈線はあるが、文字にはなっていない　側面・裏面に光沢のある付着物がある				
上層包含層 46図15 図版３	石塔部材	長さ9.3 幅10.3 厚さ4.2重量638	凝灰岩	１面しか残っていないが、直方体で下部は別の部材に挿入する臍であろう。上面には沈線による装飾がある				



第48図　５次調査出土銭実測図(1/2)

の窪みがに鼻緒が玉止め状態で残っている。

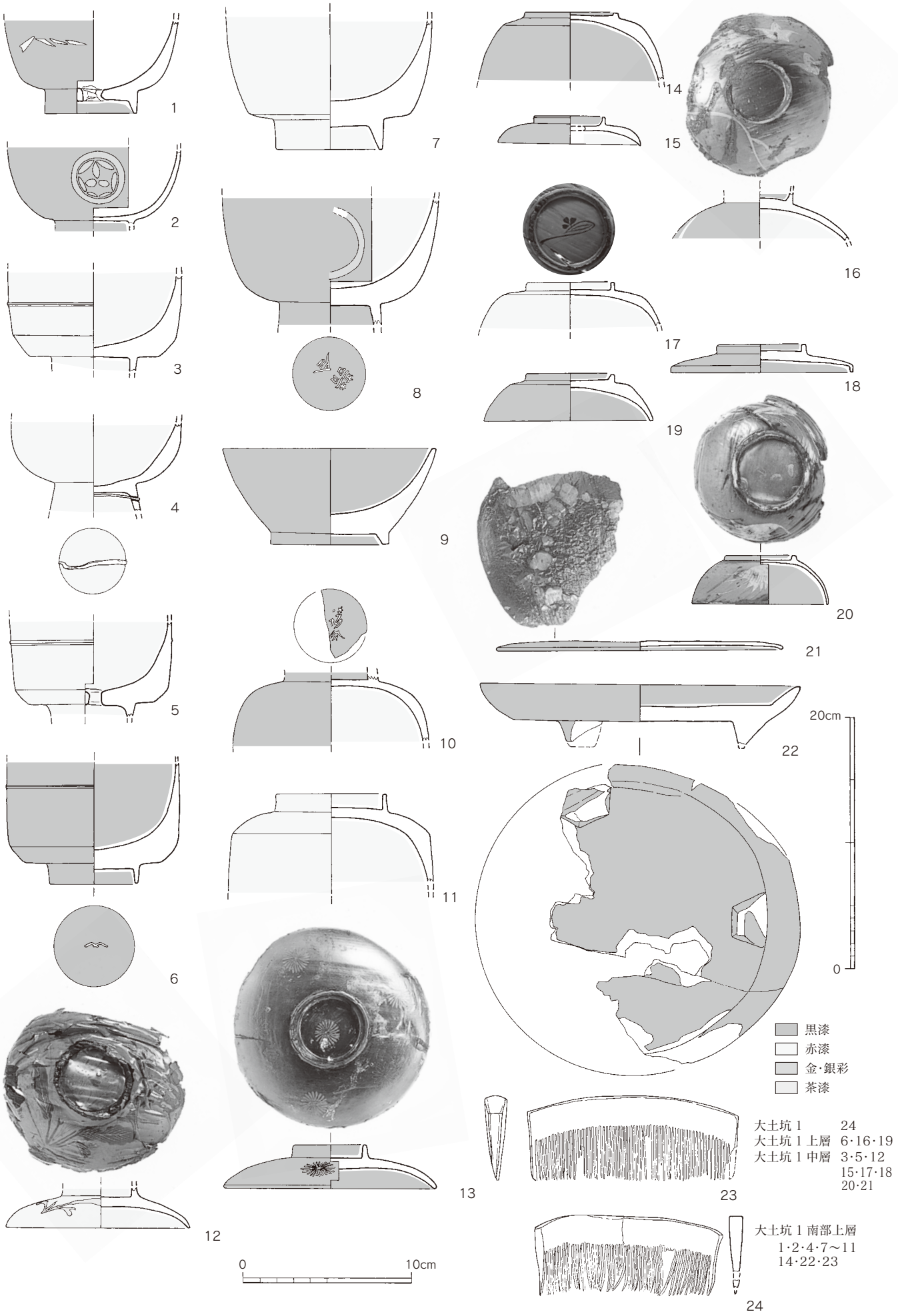
52図3は傘の手元ロクロ部分で、刻みの入る部分に小骨が入る。54図12は行灯の部材で、円盤形の窪みを穿った板材は秉燭や灯明皿を固定する台座であり、その台座を鉄釘で留めた方形の板材の縁には木釘列があるので、側板がつくことがわかるので、脚台部の天井板とわかる。四隅の断面方形の小柱は紙が貼られた部分であり、太い部分と細い部分があるので、細い部分から挿入して太い部分で固定したものと見られる。54図12は鋤の柄で、平鍬の臍孔に刺し込んだものであろう。

52図1・2、図版6-1は荷札木簡で、木簡1～3を付す。木簡1(図版6-1)は整理中に紛失したため

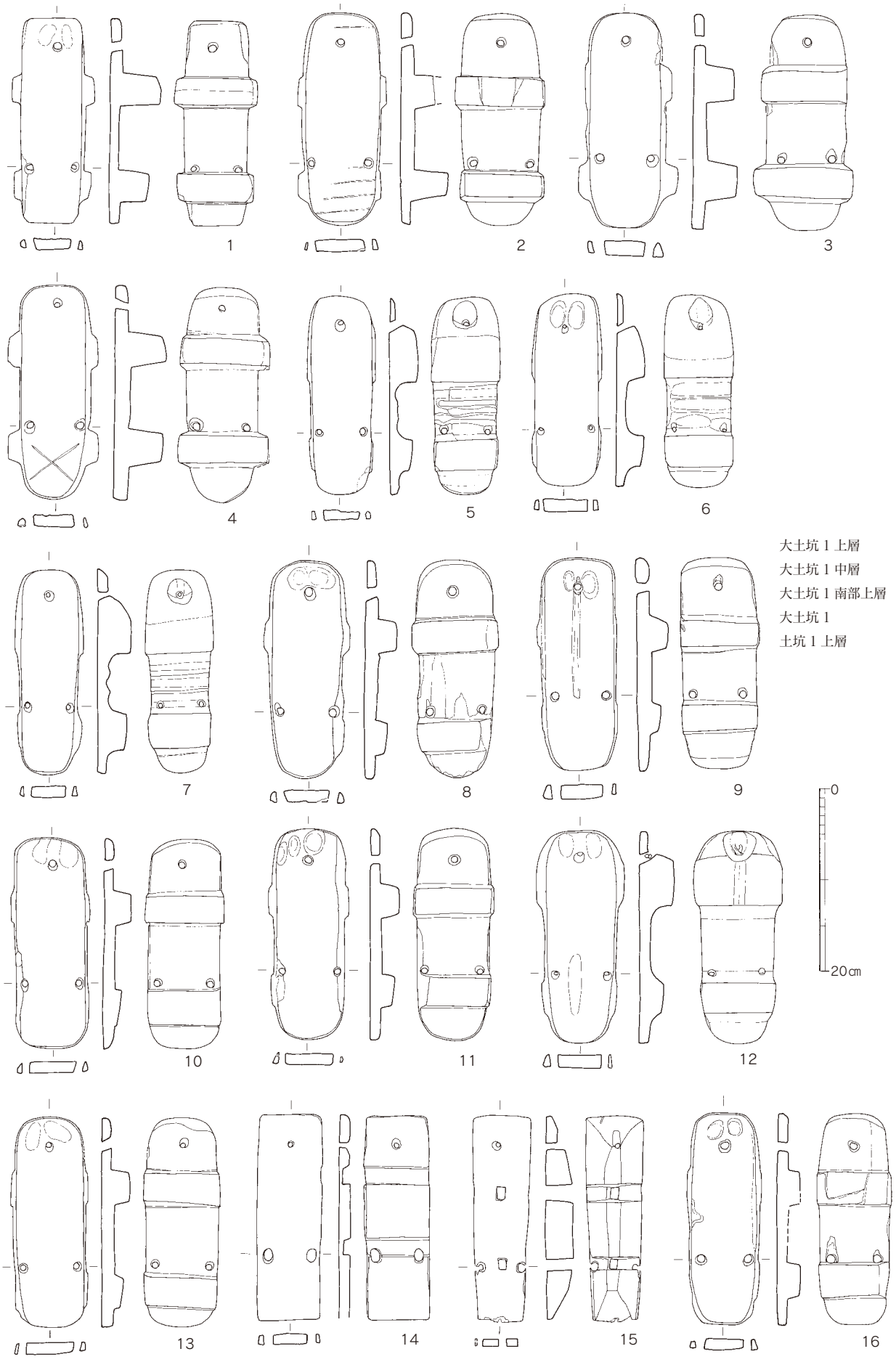
表24　5次調査出土金属製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特　徴
大土坑1 47図1 図版3	煙管吸口	長さ5.5 最大径1.4	真鍮製だが、緑青付着 完形
大土坑1 47図2 図版3	煙管吸口	長さ6.6 最大径0.8	完形 真鍮製　金メッキが1部だけ残っている
土坑17 47図3 図版3	煙管吸口	長さ7.0 最大径0.9	真鍮製　羅宇の木質と金メッキが残っている 完形
大土坑1 47図4 図版3	煙管吸口	長さ7.5 最大径0.7	真鍮製　羅宇の木質が残っている 完形
大土坑1南部上層 47図5 図版3	火打金 山形	長さ2.7 幅6.2 厚さ0.2	鉄製で、山形の頂部に穿孔　下辺は中央部が窪む波形
大土坑1中層 47図6 図版3	不明金属製品	径4.6 厚さ0.1	真鍮製　円盤で、わずかに中央が窪む穿孔部分が欠損しているが、ほぼ完形 凸面側が光沢を持つほど研磨されている
土坑1 47図7 図版4	測定針	長さ5.2 幅2.1 厚さ0.1	完形 真鍮製　金メッキが1部だけ残っている　円形部分は毛彫りの蓮花文が入る
大土坑1南部上層 47図8 図版3	鑿か	長さ8.0 最大径0.9	断面円形で、先端は欠損しているのか不明
大土坑1中層 47図9 図版3	縫い針	長さ18.2 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものだろう 断面円形
大土坑1中層 47図10 図版3	縫い針	長さ21.0 頭部幅0.7 径0.4	頭部の穿孔は板を折り返したものだろう 断面方形
大土坑1 47図11 図版3	縫い針	長さ40.5 頭部幅1.2 径0.9	上位は断面楕円形、中位以下は方形で、断面方形になる位置に捩れが入る
大土坑1南部上層 47図12 図版3	小釘	長さ4.1 頭部幅0.4	頭折れで、先端が折れているので抜かれたものか
大土坑1 47図13	簪	長さ15.2 最大幅0.7 厚さ0.1	真鍮製 毛彫などの文様はない
大土坑1 47図14 図版5	鎧小札	長さ11.2 最大幅3.1 厚さ0.2	当世具足で、復元した湾曲が大きいことから肩鎧か 鉄芯の上に黒漆を塗り、内面は金箔を貼る
大土坑1 47図15 図版3	鎌	長さ14.3 幅8.5 厚さ0.2	鉄製　先端欠損　基部は残っている
大土坑1中層 47図16 図版3	包丁	長さ14.3 幅5.0 厚さ0.1	鉄製　先端の丸みは意図的なもので、基部は欠損
大土坑1上層 47図17 図版3	包丁	長さ18.8 幅4.0 厚さ0.1	鉄製　先端の丸みは意図的なもので、基部は欠損
大土坑1上層 47図18 図版3	包丁	長さ13.4 幅4.3 厚さ0.1	鉄製　先端は欠損だが、基部は欠損でない可能性あり

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特　徴
大土坑1中層 47図19 図版	鋤先	長さ14.2 幅15.0 厚さ0.6	側縁の袋部は折り返しでも、別部材との鍛造でもないようなので、鋳造品だろう
大土坑1上層 47図20 図版4	メガネ フレーム	長さ9.7 高さ6.4 幅8.5	合金製　金メッキが1部だけ残っているレンズフレームと側部の部材は可動式
土坑40 47図21 図版3	鹿角製品	長さ4.6 最大径2.7	完形 外面は光沢を持つほど平滑で、上端に沈線が入り、内面側には段があるので、上部に別部材に挿し込んだものだろう
土坑1 48図1 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.4 孔径0.5	表面は残りが良いが、裏面は摩滅している　一部文字が欠損しているため分類できない
土坑5 48図2 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.7	薄くやや脆い　紫色に変色している 「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
土坑17上位 48図3 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.6	銅質悪く、摩滅して薄くなっている　「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
大土坑1中層 48図4 図版4	寛永通宝 鉄銭	径2.3 孔径0.6	残りよく、錆び膨れもない　錆のため字体の分類が不確実
大土坑1 48図5 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.5 孔径0.6	「永」の打ち込みから近江坂本銭(1716年初鋳)　(1656初鋳)　裏面は笵ずれしている
大土坑1南部上層 48図6 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.3 孔径0.7	表面は摩滅が少ないが、裏面摩滅しており、やや笵ずれがある　武蔵小菅銭(安政6年初鋳)
大土坑1南部上層 48図7 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.3 孔径0.7	銅質は良いが、表裏面摩滅して薄くなっている　「永」の打ち込みから亀戸(四ツ宝)銭(1708年初鋳)
大土坑1中層 48図8 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.5 孔径0.6	銅質は良く、残りもよい　裏面に「小」が入るから小梅銭(1735年初鋳)　裏面はやや笵ずれがある
大土坑1中層 48図9 図版4	寛永通宝 文銭	径2.3 孔径0.7	銅質は良く、残りもよい　(1668年初鋳)
大土坑1中層 48図10 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.1 孔径0.6	銅質は良く、摩滅のため凹凸が小さくなっている　裏面に「元」が入るから高津新地所鋳銭(1740年初鋳)
大土坑1南部上層 48図11 図版4	寛永通宝 古寛永	径2.4 孔径0.6	銅質は良く、摩滅も少ない　建仁寺銭(1636年初鋳)
溝1 48図12 図版4	寛永通宝 新寛永	径2.4 孔径0.6	銅質は良いが素がわずかに入る　「宝」の字体から不旧手(1726年初鋳)
ピット2 48図13 図版4	寛永通宝	径2.5 孔径0.6	銅質は良く、摩滅のため凹凸が小さくなっている　「通」の字体から水戸銭(1717年初鋳)
表採 48図14 図版4	一銭銅貨	径2.8	明治34年銘

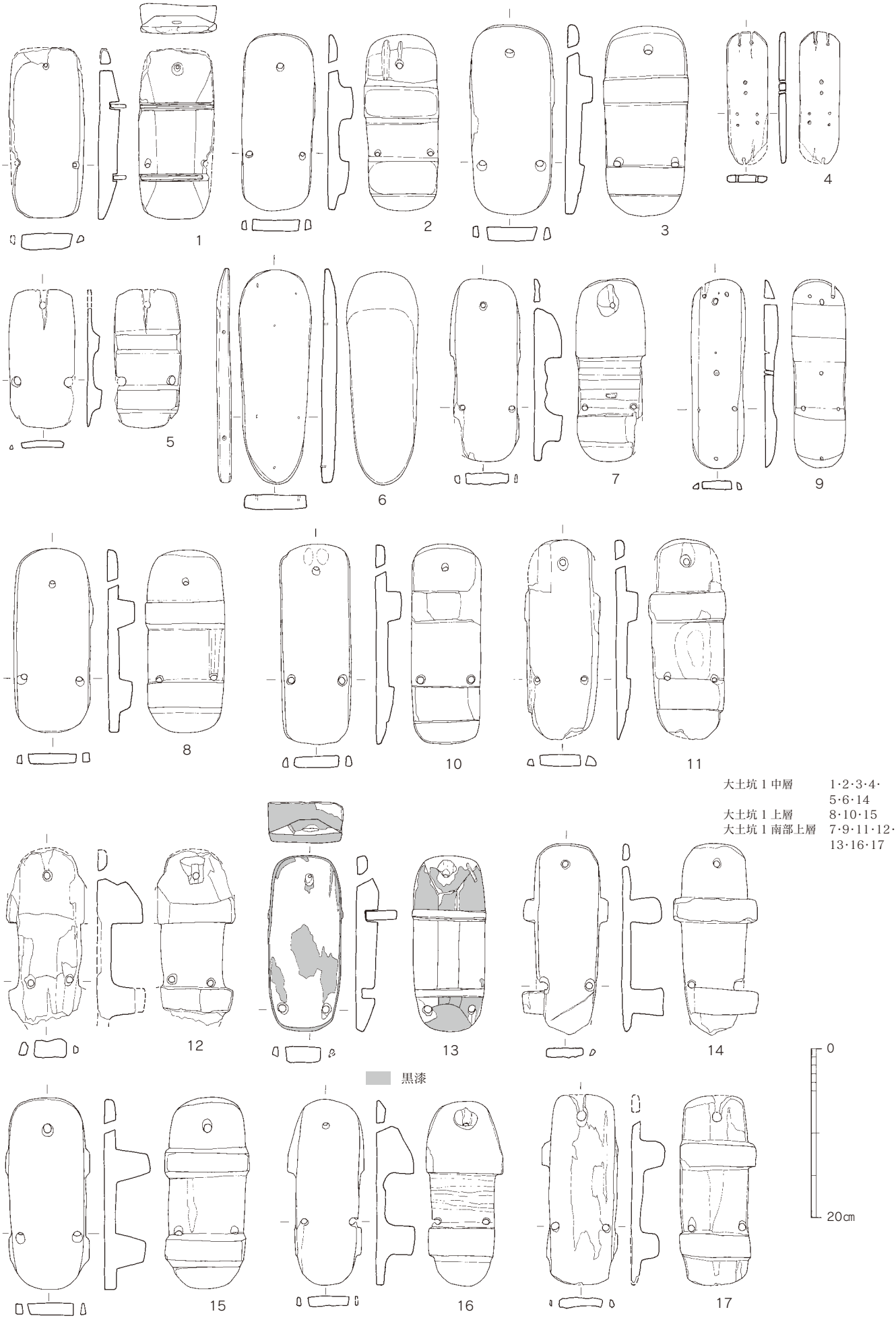


第49図　５次調査出土木製品実測図１（22は1/4、他は1/3）



大土坑 1 上層	5·6
大土坑 1 中層	1·2·3·8·12·13
大土坑 1 南部上層	7·9·10·11·14·15
大土坑 1	16
土坑 1 上層	4

第50図　5次調査出土木製品実測図 2 (1/6)

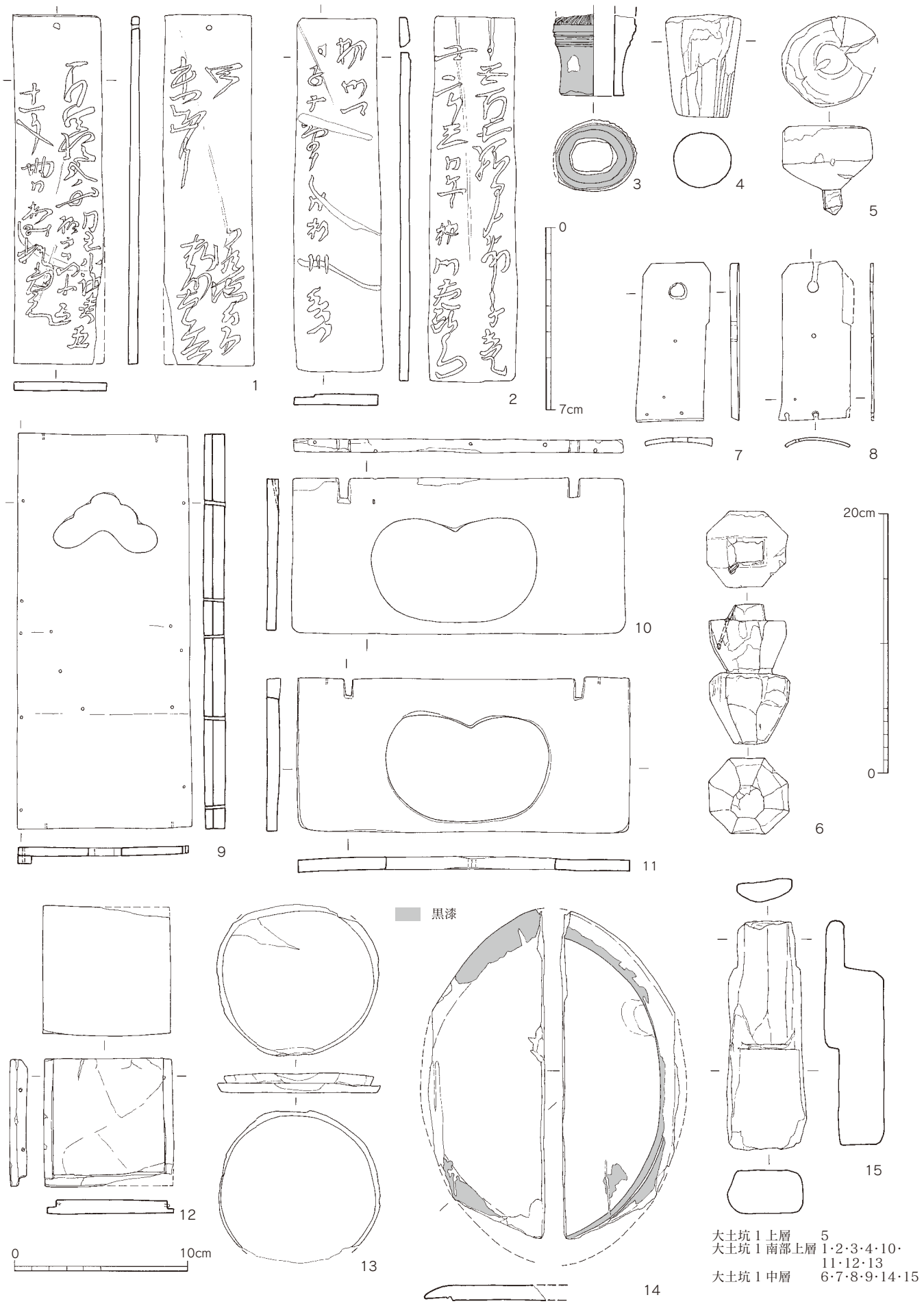


第51図　５次調査出土木製品実測図３(1/6)

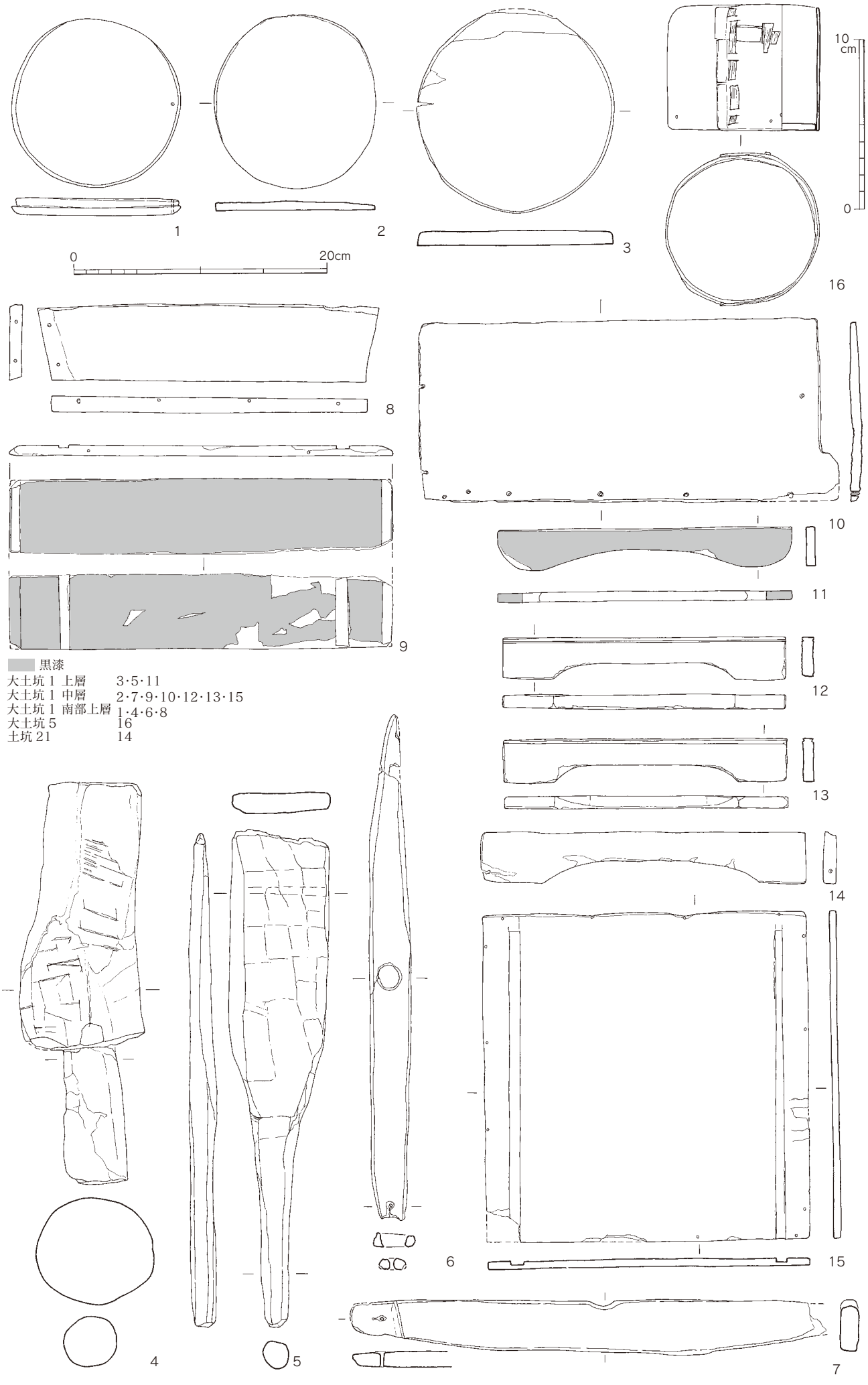
表25　5次調査出土木製品観察表1

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大土坑1南部上層 49図1 図版5	椀 腰丸形	高台径5.5	歪みなく、底部に穿孔あり 外面黒漆 内面赤漆　外面に赤漆で下地塗りした上に金彩で不明モチーフを描いている　漆の遺存状態悪い
大土坑1中層 49図2 巻頭図版	椀 腰丸形	最大径(10.4)	内外面黒漆を下塗りした上に内面のみ赤漆を塗る 漆膜の剥落が著しい 金彩で円に三つ葉文の家紋文
大土坑1南部上層 49図3 図版5	椀 壺形	最大径(10.2)	内外赤漆　無文 歪みのため一部復元して実測
大土坑1中層 49図4 図版5	椀 腰丸形	最大径(10.1)	内外面赤漆　歪みあり 高台側面に穿孔して、桜の樹皮を通している
大土坑1南部上層 49図5	椀 壺形	最大径(9.6)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る 漆膜の剥落が著しい 底部に穿孔あり
大土坑1上層 49図6 図版5	椀 壺形	最大径(9.6)	内外黒漆　無文 高台外面に重なる山形が赤漆で描かれている
大土坑1南部上層 49図7 図版5	蓋 一文字腰形	最大径(12.2) 高台径6.4	内外赤漆　無文　ほぼ完形
大土坑1南部上層 49図8	椀 腰丸形	最大径(12.8) 高台径7.1	歪みは少ないが、遺存状況は悪い　外面黒漆　内面赤漆　外面は金彩で円に不明モチーフ、裏銘に「請合」を赤漆で描く
大土坑1南部上層 49図9 図版5	椀 端反形	口径(12.6) 高台径(7.0) 器高5.8	内外黒漆　無文 歪みのため一部復元して実測
大土坑1南部上層 49図10	椀 壺形		外面黒漆　内面赤漆　裏銘に赤漆で「請合」 歪みなし　径が小さいので蓋にしたが、小型の身の可能性もある
大土坑1南部上層 49図11 図版5	椀 一文字腰椀	つまみ部径(6.3)	内外赤漆　無文 歪みあり　接合して9割残存　漆の遺存状況は悪い
大土坑1南部上層 49図12	椀 腰丸形	つまみ径4.4	内外赤漆
出土地不明 49図13 巻頭図版	蓋 平形	つまみ径4.4 裾径12.8 器高2.8	内外面黒漆で、外面は銀彩で菊花文を描く　ほぼ完形
大土坑1南部上層 49図14 図版5	蓋 壺形	つまみ径5.4 最大径(11.0)	内外黒漆　無文　9割残存
大土坑1中層 49図15	蓋 平形	つまみ径(4.2) 裾径8.4 器高1.6	内面赤漆　外面黒漆で、銘の存在は欠損のため不明　歪みはない
大土坑1上層 49図16 巻頭図版	蓋	つまみ径4.1	外面黒漆、内面赤漆で、外面は赤漆と金彩で波の上を飛ぶ鶴3羽を描く　9割残存
大土坑1中層 49図17 巻頭図版	蓋 腰丸形	最大径(10.4)	内外赤漆　外面に黒漆で葉と三つ葉文を描く　9割残存
大土坑1中層 49図18 巻頭図版	椀蓋 平形	つまみ径5.4 裾径10.8 器高1.7	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆を塗る
大土坑1上層 49図19 図版5	蓋 一文字腰形	つまみ径5.2 裾径9.0 器高2.8	内外黒漆　無文　ほぼ完形
大土坑1中層 49図20 巻頭図版	小蓋 腰丸形	つまみ径4.4 裾径8.2 器高3.0	内外面黒漆で、外面は金彩で鶴文を対面に描く　接合してほぼ完形
大土坑1中層 49図21 巻頭図版	合子蓋か	裾径(17.0)	内外面黒漆で、外面は赤漆と金彩で梅樹文を描く　遺存状態悪くひずみあり
大土坑1南部上層 49図22 図版5	脚付皿	径(26.0) 器高3.0	内外面黒漆塗りで、内底のみ赤漆を塗る 外底は削り出しの脚がつく　位置関係から本来4つだろう　やや歪みあり
大土坑1南部上層 49図23 図版9	櫛	長さ5.0 幅12.5 厚さ1.3	完形 漆塗りなど装飾はない

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大土坑1 49図24 図版8	櫛	長さ4.3 幅11.0 厚さ1.3	変形し、中央部で欠損している 変形しているので、本来は幅12cmほどあったと思われる
大土坑1中層 50図1 図版7	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅9.0 厚さ5.5	完形　歯は右側が摩滅　後歯が摩滅で極端に低くなっている　前壺は右に偏っているので、左脚用で、親指のあたる位置が窪んでいる
大土坑1中層 50図2 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅9.7 厚さ5.2	ほぼ完形　前歯が欠けている以外、、摩滅や欠損がない　前歯と前壺の間が長い
大土坑1中層 50図3 図版7	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.9 厚さ4.7	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きい　歯は左側が摩滅し、裾が右に張り出しているので、右脚用　ほぼ完形
土坑1上層 50図4 図版7	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.0 厚さ7.8	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きいが、歯は右側が摩滅する　踵部分に×印がある　完形
大土坑1上層 50図5 図版7	下駄 ぽっくり	長さ21.8 幅7.4 厚さ3.2	歯の間に大きな鑿痕が3つが残る　歯は右側が摩滅 完形
大土坑1上層 50図6 図版7	下駄 ぽっくり	長さ21.0 幅7.5 厚さ4.8	加工痕が残り、つくりが粗い　前壺が左に偏っており、穿孔も同じ方向に偏っている　ほぼ完形
大土坑1南部上層 50図7 図版7	下駄 ぽっくり	長さ22.4 幅7.4 厚さ3.7	歯の間に大きな鑿痕が3つが残る　歯は右側が摩滅し前歯の裾が左に張り出しているので、左脚用　完形
大土坑1中層 50図8 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.8 幅9.5 厚さ4.8	前壺の周囲が窪んでいるが、孔の左の窪みが大きい　ほぼ完形　横緒穴の右側が摩滅しているので右脚用だろう
大土坑1南部上層 50図9 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅8.8 厚さ3.4	後歯は左側が張り出すので、左足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑1南部上層 50図10 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.0 幅8.7 厚さ2.9	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑1南部上層 50図11 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅8.8 厚さ3.3	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みの形から左足用　完形　後歯が摩滅で低くなっている
大土坑1中層 50図12 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.2 幅9.0 厚さ2.5	後歯が斜めに摩滅して、台と同じ角度になっている　ほぼ完形
大土坑1中層 50図13 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.0 幅8.4 厚さ3.1	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形
大土坑1 50図14 図版7	下駄 挿し込み式 連歯下駄	長さ22.4 幅7.0 厚さ1.3	台部はほぼ完形　遺在状態が悪い
大土坑1南部上層 50図15 図版7	下駄 露卯下駄	長さ22.5 幅6.3 厚さ2.8	台部はほぼ完形　遺在状態が悪い　上面は踵部分に×の線刻あり
大土坑1 50図16 図版7	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅8.1 厚さ2.5	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　完形
大土坑1中層 51図1 図版7	下駄 挿し込み式 連歯下駄	長さ20.1 幅8.8 厚さ3.0	後歯の端部が欠損するだけでほぼ完形 ほぼ完形だが遺在状態が悪い　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑1中層 51図2 図版7	下駄 連歯下駄	長さ20.8 幅8.7 厚さ2.8	前壺の周囲が窪んでいるが左右同じぐらい　後歯は右側が摩滅するので左足用 完形
大土坑1中層 51図3 図版7	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅10.0 厚さ3.4	完形　前歯も摩滅で低くなっているが、後歯の摩滅は著しい
大土坑1中層 51図4 図版8	下駄 草履底	長さ15.6 幅4.6 厚さ0.9	裏は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　孔のほとんどに木釘が残る
大土坑1中層 51図5 図版8	下駄 連歯下駄	長さ16.2 幅7.7 厚さ1.8	歯は右側が摩滅するので左足用　ほぼ完形　子供用



第52図　５次調査出土木製品実測図４（1･2は1/2、6･9～11･14･15は1/4、他は1/3）



第53図　5次調査出土木製品実測図5（16は1/3、他は1/4）

表26　５次調査出土木製品観察表２

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１中層 51図６ 図版８	下駄 草履底	長さ24.2 幅8.5 厚さ3.1	裏は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　木釘でなく鉄釘で、釘頭が露出していない
大土坑１南部上層 51図７	下駄 ぽっくり	長さ21.5 幅8.2 厚さ3.3	歯の間に大きな鑿痕が３つが残る　歯は左側が摩滅　台の先端の弧が右に偏っている　完形
大土坑１上層 51図８	下駄 連歯下駄	長さ21.5 幅9.5 厚さ3.1	歯は左側が摩滅するので、右足用　完形　前歯と後歯の摩滅の差は小さい
大土坑１南部上層 51図９ 図版８	下駄 草履底	長さ22.0 幅6.2 厚さ1.8	前壺が左に偏り、裏は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　孔のほとんどに木釘が残る
大土坑１南部上層 51図10	下駄 連歯下駄	長さ23.1 幅8.6 厚さ3.6	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大土坑１南部上層 51図11	下駄 ぽっくり	長さ23.3 幅9.6 厚さ3.8	前壺の周囲が窪んでいるが左右同じぐらい　後歯は右側が摩滅し、左側が張り出すので右足用　完形　前壺に紐が残る
大土坑１南部上層 51図12	下駄 ぽっくり	長さ20.1 幅9.1 厚さ5.3	中心孔の穿孔が長方形　前歯は右側が摩滅　ほぼ完形
大土坑１南部上層 51図13	下駄 露卯下駄	長さ20.6 幅8.2 厚さ4.7	表裏黒漆塗り　ほぼ完形
大土坑１中層 51図14	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅10.0 厚さ4.9	踵側が狭く、歯は高い　歯は右側が摩滅する　ほぼ完形
大土坑１上層 51図15	下駄 連歯下駄	長さ22.5 幅10.0 厚さ4.4	完形　均一なつくりで、摩滅がほとんどない
大土坑１南部上層 51図16	下駄 ぽっくり	長さ22.0 幅8.9 厚さ4.3	加工痕が残り、つくりが粗い　前歯の裾が左に張り出しているので左用 ほぼ完形
大土坑１南部上層 51図17	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅14.6 厚さ4.0	台座の遺存状態が悪い　前歯は右が摩滅し、後歯は左が摩滅する　摩滅の程度は同じ ほぼ完形
大土坑１ 図版６	荷札木簡	長さ約15 幅約3 厚さ約0.5	遺物が整理中に紛失したため、作図できず、Ｘ線写真のみ掲載している　法量は概数
大土坑１南部上層 52図１ 図版６	荷札木簡	長さ13.6 幅3.5 厚さ0.4	穿孔あり　側面を一部欠損 表裏面に削り痕が残る
大土坑１南部上層 52図２ 図版６	荷札木簡	長さ13.7 幅3.6 厚さ0.4	穿孔あり　穿孔部分で中央から割れている　表裏面に削り痕が残る
大土坑１南部上層 52図３ 図版８	和傘部材 手元ロクロ	長さ4.6 幅4.8	外面黒漆塗りで、やや歪みあり 本来は最大径4.2cm前後だろう
大土坑１南部上層 52図４ 図版８	栓	長さ5.9 最大径7.3	側面に孔があいているが、これは木目の節が脱落したものだろう
大土坑１上層 52図５ 図版８	独楽	最大径5.1 器高5.0 芯径1.0	変形し、欠損している 上面中央は半球状に窪む 芯は鉄で断面方形
大土坑１中層 52図６ 図版８	碁盤脚	長さ10.7 最大径6.2	上端面に方形の臍を作り、挿し込むもの 側面は８面に面取りしている
大土坑１中層 52図７ 図版８	不明木製品 側板	長さ9.0 幅3.9 厚さ0.5	７・８がセットになる　薄く、側面に釘孔はない　上端の穿孔は釘孔には大きいので、棒が挿入されたものか
大土坑１中層 52図８ 図版８	不明木製品 側板	長さ9.1 幅4.0 厚さ0.5	７・８がセットになる　薄く、側面に釘孔はない　上端の穿孔は釘孔には大きいので、棒が挿入されたものか

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　　徴
大土坑１中層 52図９ 図版８	側板	長さ30.4 幅13.5 厚さ1.6	松葉形の透かし窓なので、縦長の側板だろう　端部には別の部材を木釘で留めて肥厚させている
大土坑１南部上層 52図10 図版８	膳脚 足打折敷	長さ12.0 幅25.6 厚さ1.0	ハート形の透かし窓がある 側面に木釘がないので、２脚だろう
大土坑１南部上層 52図11 図版８	膳脚 足打折敷	長さ12.0 幅25.8 厚さ1.0	ハート形の透かし窓がある 側面に木釘がないので、２脚だろう
大土坑１南部上層 52図12 図版８	側板	長さ7.5 幅7.3 厚さ0.9	箱の側板で、上端面は斜めに加工されている以外は平坦で、側面には木釘孔が２つあるが、下端面には見られない
大土坑１南部上層 52図13 図版８	曲げ物底板	長軸9.3 短軸9.1 厚さ1.2	欠損のため楕円形に見える　側縁は丸みを持つ　抉り込みは幅1.8cm程の幅の工具によるもの　側面に木釘孔はない
大土坑１中層 52図15 図版８	留め具か	長さ17.5 幅6.5 厚さ4.6	上下端で互い違いに臍が作られているので、部材を繋いで固定する部材だろう
大土坑１南部上層 53図１ 図版８	曲げ物底板	径13.2 厚さ0.7	段差があるが、側面に木釘孔なし 表裏端部の木釘孔は柄の留め具を固定したものだろう
大土坑１中層 53図２ 図版８	曲げ物底板	長軸12.8 短軸12.6 厚さ0.7	段も側面の木釘孔もなし
大土坑１上層 53図３ 図版８	曲げ物底板	径15.3	ほぼ正円形 段差はなく斜めに削る
大土坑１南部上層 53図４ 図版８	木槌	長さ31.5 最大径9.7 柄部径4.8	中央部が全周同じように窪んでいる
大土坑１上層 53図５ 図版８	羽子板形木製品	長さ39.2 幅7.7 厚さ2.4	柄がつく板状もので、先端を両側から削っているが、尖ってはいない　何か鉄の刃を挿入したかも知れない
大土坑１南部上層 53図６ 図版８	網針形木製品	長さ40.0 幅3.5 厚さ1.1	先端は尖っており、基部は小さな抉りが入る　中央に径2.2cmの孔があるので、そこに紐を通して編むものだろう　ゴザ作りと関係あるか　黒漆
大土坑１中層 53図７ 図版８	桶把手	長さ4.4 幅37.7 厚さ1.5	把手で、端部には斜めに挿入痕あり　中央部が窪む
大土坑１南部上層 53図８ 図版９	箱の側板	長さ7.0 幅26.8 厚さ1.2	側縁には片側にしか木釘孔がなく、側端面も同じであることから、互い違いの組み合わせで側板を形成していたようだ
大土坑１中層 53図９ 図版９	箱蓋	長さ30.2 厚さ0.8	全面黒漆塗り 側端部で約1/4残存
大土坑１中層 53図10 図版９	箱の側板	長さ14.2 幅32.5 厚さ0.8	側縁には片側にしか木釘孔がなく、対面は臍になっているので、臍部分を最後に固定したものである
大土坑１上層 53図11 図版９	足打折敷の脚	長さ3.0 幅23.2 厚さ1.2	黒漆塗り　接地部は漆が剥離している
大土坑１中層 53図12 図版９	膳脚 足打折敷の脚	長さ3.5 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に溝があるので、ここに板を挿入するものである 側端面・上下端面には木釘孔なし
大土坑１中層 53図13 図版９	膳脚 足打折敷の脚	長さ3.4 幅22.3 厚さ0.9	12・13はセットで、下端部に溝があるので、ここに板を挿入するものである 側端面・上下端面には木釘孔なし
土坑21 53図14 図版８	膳脚 是打折敷の脚	長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	側面の片側に木釘孔があるので、方形脚か　上端は欠損しているので、もう少し長いものか　つくりは粗雑
大土坑１中層 53図15 図版９	膳	長さ26.0 幅25.4 厚さ0.7	表裏黒漆で、上面の端部は木釘あり、縁がつく　裏面の溝彫りされている部分には脚がつくが、釘固定ではない
土坑21 53図16 図版９	曲げ物	径9.0 器高7.4	側面に木釘跡があるが、 底板を止めるには高い

写真のみを掲載している。片面のみの使用で長さ約20cm、厚さ5mm程だったと記憶している。釈文は下に提示した通りである。重なってはいなかったがほぼ同じ場所から出土した。

木簡2・3は表裏使用されており、表裏で日付と人名が異なっている。2は裏面の冒頭に×印らしいものがあり、3は３本の横線で内容を抹消しているように見える。表裏で筆跡も異なるようなので、使用済みの面に×や横線で印をして反対面を再利用したものと考えられる。出荷先で再利用されたものであるとすれば、2は11月に某所から発送されて出荷先に届いた木簡を翌年１月に再利用して発送し、3は某所から12月18日に発送されて出荷先に届いた木簡を翌年２月に再利用したことになる。

干支が書かれている面を表面とすると、下記のようになる。○は穿孔を表す。

なお、54図9〜11は、『矢加部屋敷Ⅲ』ではこの形態のものを鋤と報告している。今回、1・5次調査出土資料が増加したが、やはり他の部材と組み合わせる臍孔がないので、牛馬に引かせる通常の唐鋤と考えた。しかし、先端に鉄刃をつけるような加工がなく、柄の断面が逆台形なものも

木簡1

・「四　□〔百カ〕　□□□□　□〔服カ〕　□　□
○　未正月　□〔日カ〕　柳川六郎太」
・「　□〔百カ〕　□　小袖　□　□
〆百四拾参匁
○　袷　□　□　小　□
十一月州日柳川　□〔日カ〕　左衛門」
一三四・三四・二　九〇一一型式

木簡2

・○「□〔柳〕□〔川カ〕　□□□　□
子十二月十八日柳川□左衛門」
・○「五百十八　□〔柳〕□〔川カ〕　□布子壱
丑二月　□〔五カ〕　□　□〔了カ〕　□□　□〔石右カ〕　左衛門」
一三四・三四・二　九〇一一型式

木簡3

・ヘキ「筑後久留米領矢加部　大坂　ならや
野田喜兵衛様　□□氏」
一三四・三四・二　九〇一一型式

共通しており、土留め材の杭にするため再加工した結果ではない。鋤以外に考えられるものとして脱粒用の棒だが、柄にするのであれば断面逆台形でなく握りやすく円形にするべきであり、民俗例にもない。まとめで後述するが、堆肥小屋と思われる４次調査100号土坑から出土していることから、堆肥作りに使う鋤かもしれない。堆肥造りに使われたと考えられる土坑からは炭化物や籾殻が互層に堆積しているが、深い土坑であり、上から投入した後で均さなければほぼ水平に同じ厚さの層にはならないことから均すための道具なのではなかろうか。先端に鉄製の刃をつけた痕跡がないのはそのためだろう。鋤の一種であろうからここでは鋤として報告しておく。

図版５－２は大學目薬の目薬瓶で、明治32(1899)年に田口参天堂から発売されたものである。昭和７年に両口点眼式目薬瓶が発売されるまでの間のものだろう。図版５－３は「みや古染め」の染料瓶で、桂屋商店から明治29(1896)年に発売された家庭用染料である。

図版10－６は写真のみ掲載したもので、２本の撚り紐２本で、先端は帆綱結びで、中央に２つの止め結びの結び目にもう１本の紐を通したもの。

注

1　江戸遺跡研究会2001「遊・玩具６羽根つき・独楽」『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

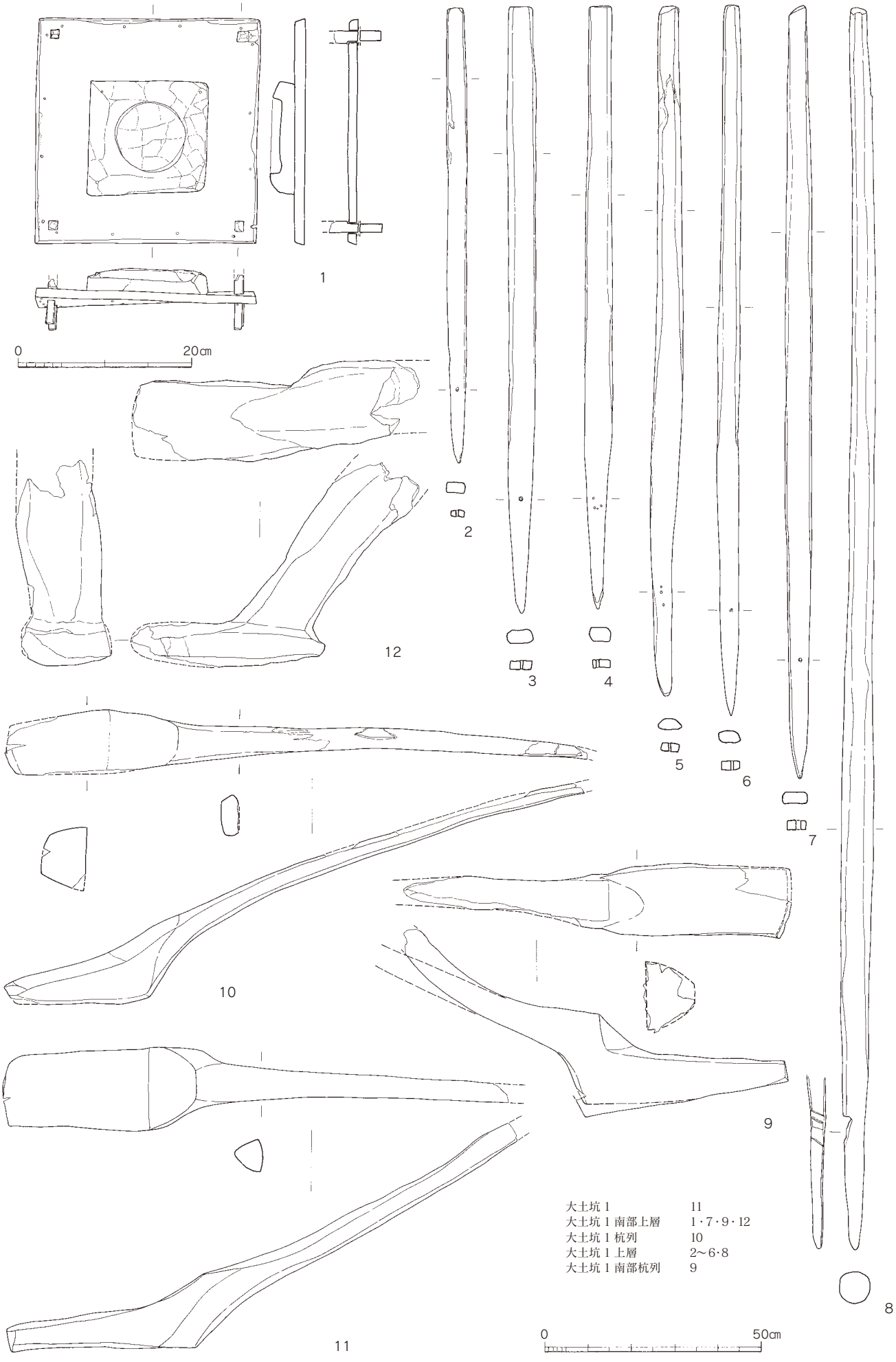
参考文献

1　秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104　下駄』法政大学出版局

表27　５次調査出土木・ガラス製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大土坑１南部上層 54図１ 図版９	行灯台座	長さ26.0 幅25.5 厚さ4.0	鉄釘で周囲を止めている 板は周囲に木釘があるので、下に側板がつくとわかる 板は下面が平滑になっている
大土坑１上層 54図２ 図版９	柄杓の柄	長さ52.8 幅2.8 厚さ1.5	小型の柄杓
大土坑１上層 54図３ 図版９	柄杓の柄	長さ69.6 幅3.1 厚さ2.0	柄杓を固定する釘孔が３つある
大土坑１上層 54図４ 図版９	柄杓の柄	長さ70.0 幅3.2 厚さ1.8	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない
大土坑１上層 54図５ 図版９	柄杓の柄	長さ79.7 幅3.6 厚さ1.4	断面長方形の扁平部分が長く、通常の柄杓の柄ではないかもしれない
大土坑１上層 54図６ 図版９	柄杓の柄	長さ82.2 幅2.6 厚さ1.3	側面の一部に窪みがあるが、意図的なものかわからない
大土坑１南部上層 54図７ 図版９	柄杓の柄	長さ89.1 幅3.1 厚さ1.5	基部が欠損している　乾燥のためやや反っているので、長さに誤差あり
大土坑１上層 54図８ 図版９	棒柄	長さ143.1 径3.6	長柄杓の柄であろう　先端の柄杓に差し込む部分だけ断面長方形だが、それ以外は断面円形
大土坑１南部杭列 54図９ 図版９	鋤	長さ91.7 幅16.6 厚さ24.0	柄を欠損している　完形で、乾燥で歪んでいるので図は復元
大土坑１上層 54図10 図版10	鋤	長さ117.6 幅19.1 厚さ15.3	柄の先端を欠損している　乾燥で歪んでいるので図は復元

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大土坑１ 54図11 図版10	鋤	長さ134.2 幅13.2 厚さ14.3	ほぼ完形で、乾燥で歪んでいるので図は復元による
大土坑１南部上層 54図12 図版10	小型鋤	長さ31.3 幅9.6 厚さ5.0	１本作りで、平鍬の臍孔に挿し込むものだろう　乾燥による歪み大きい
大土坑１上層 図版５－１	瓶 青ガラス 両口点眼式目薬瓶	長さ8.8 幅2.8 厚さ1.6	型合わせ「EYE LOTHION ROHTO」「Z21」の陽刻がある面の対面にはシールを貼る枠が洋式盾形に陽刻されている
撹乱井戸 図版５－２	瓶 透明ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸1.6	型合わせ珠文列で囲まれた内部に　「大學目薬」「参天堂薬房」の陽刻あり　側面は縞状、底面は田の字型の陽刻あり
撹乱井戸 図版５－３	瓶 透明ガラス 染料瓶	口径2.1 最大径3.2 高さ6.1	型合わせ　「みやこ染」の陽刻の対面に目盛りが陽刻され、底面には「三」の屋号が陽刻されている
大溝２ 上層包含層 図版５－４	瓶 透明ガラス ポマード瓶	口径3.6 底径4.5 器高4.0	円柱状　側面は点描格子で、窓が対面にあり、裏銘に「・意匠登録No30148・」と上下逆に「IUZUTSUBAKI」の陽刻がある
撹乱井戸 図版５－５	瓶 磁器 ポマード瓶	口径3.6 最大径4.8 高さ5.4	肩の張る甕形で、裏銘にウテナの文字をデザイン化した三つ葉の陽刻がある昭和４(1929)年発売
撹乱井戸 図版５－６	瓶 磁器 ポマード瓶	口径3.6 最大径4.8 高さ5.1	肩の張る甕形で、底に２つの点が陽刻されている　裏銘がないが、同一規格なので、ウテナだろう
出土地不明 図版５－７	瓶 緑ガラス ニッキ瓶	口径0.7 底径2.1 器高12.3	口縁部は打ち欠き外し　完形 型合わせ　口縁部が曲がっているのは口縁部の処理の失敗　気泡あり



第54図　5次調査出土木製品実測図6（9～11は1/12、他は1/6）

３．矢加部町屋敷遺跡１次調査

１次調査区は柳川市大字矢加部672-3･672-4･674･676-2･677･669-1･700-1･701-1･701-2･702-1･702-2･713-9番地の一部と、字橋本3･4-1･13-1番地の一部の1,730㎡で実施した。

平成16(2004)年６月15日、0.7のバックホーを搬入して掘削を開始した。整地面が何枚も見られ、調査すべき近世の整地面がわかりにくいため遺構面を検討しながら慎重に掘り下げ、炭化物を多く含む遺構が見え始めた整地面まで掘削した。この整地面から検出される遺構には明治以降の遺物が混じるものの近世の遺物も混じることから、この面から調査を始めることにした。この面の上で検出された胞衣壺や埋甕については近代に属するものと判断し、調査から除外し、写真と位置記録を残すに留めた。重機で掘削した客土から出土する陶磁器が多く、これを包含層出土分として取り上げながら掘り下げたため、表土剥ぎに多くの時間を費やした。水路の東側の調査区は戦後の産業廃棄物を入れた客土を掘削すると遺構面が検出された。６月25日に作業員を投入、遺構検出を開始した。遺構プランは鮮明なものもあったが、不鮮明なものが多く、鮮明なプランの検出された遺構の壁面と底面に切られる遺構のプランが見えるので、さらに下層の整地面があることがわかった。そのため、最初の整地面を掘り下げて下位の遺構面を検出した。県道側には大溝があることがわかり、さらに掘削しなければならない可能性があったので、トレンチを入れてみたところ、溝の規模が大きく出土遺物はほとんどないことがわかった。そこで、９月９日に重機を入れて溝を掘削した。９月15日に九州航空により空中写真を撮影した。実測終了後、10月４日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

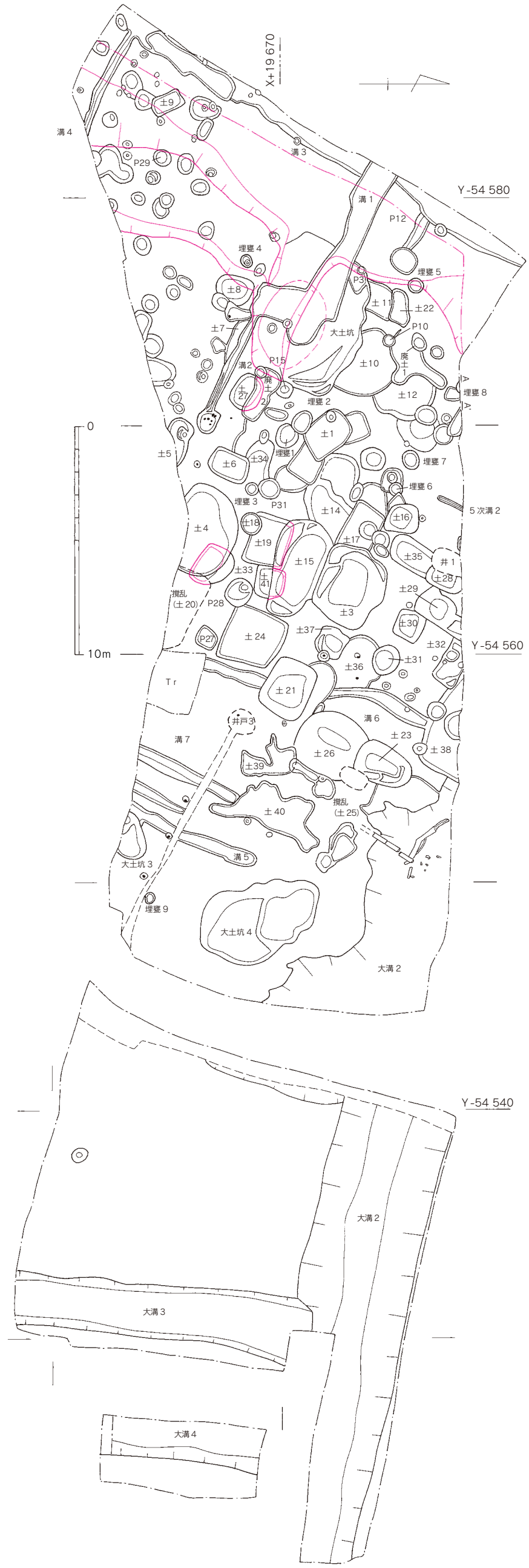
１）遺構

矢加部町屋敷遺跡１次調査は県道23号線の東と、水路を挟んで東側の低地部分に分かれている。前者は旧状宅地だが、後者は水田であった。基盤層自体の高さに大きな差はないが、宅地側は90㎝程の整地層・客土層で地上げされている。上から50㎝程は昭和40年代以後の客土層でその下面にはコンクリート基礎が埋設された整地面があり、そこから大きな廃棄土坑が切り込んでいた。この整地面の下に炭化物を多く含む黒色土層が広がっており、撹乱土坑とした20号土坑がこの黒色土層を埋土としており、そこからは大正時代のものが出土しているので黒色土層は大正包含層とした。この包含層が炭化物を多く含むのはこの面に鋳造遺構が存在するためだろう。この黒色土層の下に整地面があり、上下層の時期から判断して明治後半代から大正時代のものと考えられる。その上面は硬化しており、埋甕の多くはここから掘り込まれている。

その下にさらに黄灰褐色粘土層の整地層があり、その下には洪水層と思われる砂を含む灰白色土が薄く堆積していた。この時期に水害の記録はなく、意図的に敷かれたものかもしれない。その堆積層が覆っていたのは黄緑灰色粘土の整地層であり、その上面は硬化していた。これが１号大土坑の最終堆積層だったころから明治前半代の遺構面と考えられる。

その整地層の下が江戸時代の遺構面である。１号大土坑と１号溝状遺構の検出面との間に整地層があったことから、その間にも薄い数枚の整地面があったものと思われるが、明瞭に捉えることのできたのは上記の２面のみであった。

報告する遺構は、土坑37基、廃棄土坑２基、大土坑３基、溝７条、大溝４条、埋甕８基、井戸１基である。



第55図　矢加部町屋敷遺跡１次調査遺構配置図（1/200）

a）土坑

土坑は現場で41基まで番号をつけたが、このうち２号土坑は15号土坑の埋土の差で同一遺構とわかったため、２号を欠番とした。13号土坑もまた、８号土坑の埋土の差で同一遺構とわかったため、13号土坑を欠番とした。20号土坑は掘削してみて大正時代のものと判明したので、本来は掲載しない時期のものだが、鋳型など重要な遺物を出土し、大正包含層である黒色土の時期を判断する根拠となることから、撹乱土坑として遺物のみ掲載した。25号土坑は近代のものだったので遺構・遺物ともに掲載していない。結果、ここでは37基の土坑を掲載する。

１号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の西部中央に位置する略方形の土坑である。南西部のピットとの切り合いは不明瞭だった。１号土坑が切る方形のピットは浅い落ち込みなので、土坑として報告していない。２号埋甕は１号土坑を切っている。床面はほぼ平坦で、現存で長軸215㎝、短軸で161㎝、深さ16㎝程度を測る。主軸方向はN-43°-Wで、にぶい暗黄灰褐色土の埋土であった。

出土遺物は少なく、見込みに菊花文の染付碗があることから18世紀中葉に属する。

３号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の中央に位置する略方形の土坑である。14･15･17号土坑を切っており、南側のテラスは別の遺構であった可能性もある。主軸方向はN-24°-Eで、現存長軸347㎝、短軸279㎝を測り、177㎝と深い。底面は略方形で、ほぼ平坦である。種子や魚骨・魚鱗などが籾殻と一緒に出土した。床面近くに籾殻の堆積があるが、炭化していなかった。

出土遺物はわずかで、広東碗や外面古相の蛸唐草文と内面袈裟襷文帯の染付鉢があることから、19世紀初頭に属する。

４号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の中央南端に位置する黒色土層の下位から検出された不整楕円形プランの土坑である。東側に撹乱土坑である20号土坑に切られ、北に33号土坑を切り、南は調査区外に延びる。現存長軸395㎝、短軸290㎝で、41㎝ほどの深さを測る。主軸方向はN-18°-Wである。床面は平坦で、北側斜面は緩やかである。混入物の多い黄灰色粘土層を下げると６号土坑に近い黒色土層になり、木片・木材・萱のような草状の植物が見られた。

出土遺物はパンケース１箱分あり、４号土坑が切る土坑も掘り抜いてしまったので遺物が混ざった可能性もある。花唐草文染付小皿や半球形家紋文染付碗、京焼風陶器碗から18世紀前葉に属するとわかる。

５号土坑（第56図）

調査区水路西側の中央南端に位置する隅円長方形プランの土坑で、北側のピットとの切り合い関係は不明である。南は調査区外に延びる。現存長軸約210㎝、短軸110㎝で、深さは17㎝と浅い。主軸方向はN-67°20′-Wである。にぶい黄灰褐色土を埋土とする。

出土遺物はパンケース１箱あるが、摺鉢が大きいためで、器種は少ない。銅緑釉の小皿や渦福の裏銘入り染付皿、皿の見込みに整った５弁花文の染付があることから、18世紀後葉に属する。

６号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の中央南端に位置する整った隅円長方形プランの土坑で、34号土坑を切る。現存長軸188㎝、短軸72㎝である。深さ29㎝ほどの深さで、主軸方向はN-24°20′-Eである。中位に軟質の黒色土があり、その上位に黄灰色粘土が被っている。これは周囲に見られた整地層が被ったものだろう。

出土遺物はわずかで、小片ながら筒形碗や内面口縁部に袈裟襷文帯の染付碗があることから18世紀後葉に属する。

７号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の西部に位置する不整形の細長い土坑で、２号溝状遺構に切られている。２号溝状遺構の北側に遺構の続きの痕跡が見られたが､図化する段階ではプランが確認できなかった。そのため現存で長軸210㎝、短軸70㎝である。12㎝ほどの深さしかなく、主軸方向はN-61°20′-Wである。西側は１号溝状遺構の南北軸に切られており、１号大土坑の上面を切っている。

出土遺物はわずかで、土師質土器が数個体とコンニャク印判の桐文の入る染付碗があるが、遺構の重複範囲が大きく、遺構が浅いので本土坑の出土遺物は混入の可能性があるため確実な時期はわからない。

８号土坑（図版12、第56図）

調査区水路西側の西部に位置する略方形プランの土坑で、東側はピットに切られている。現存長軸161㎝、短軸121㎝である。深さは17㎝ほどしかなく、主軸方向はN-21°10′-Eである。当初13号土坑としていたものを付け替えている。埋土中の黒色土が北側に偏っていた。

出土遺物はわずかながら、京焼風陶器碗や呉器手陶器碗の小片があることから18世紀前葉に属する。

９号土坑（図版12、第56図）

調査区南西側に位置する方形プランの土坑で、ピットを切る。現存長軸141㎝、短軸87㎝で25㎝ほどしかなく、主軸方向はN-26°20′-Wである。南東部床面に木質が出土したが、９号土坑の下の　号溝状遺構の埋土内のものが露出した可能性もある。

出土遺物はなく、時期不明。

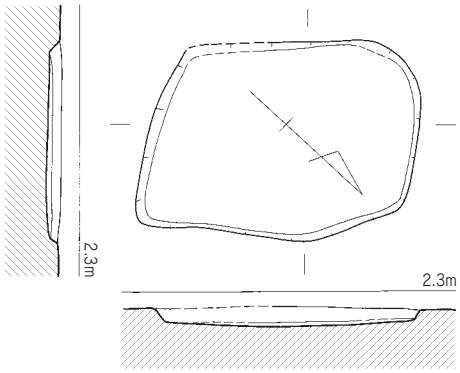
10号土坑（第57図）

調査区西側に位置する不整形プランの土坑で、１号大土坑に南側を切られ、北は１号廃棄土坑に切られ、12号土坑を切る。長軸は約300㎝ほどに復元され、短軸296㎝である。深さは20㎝ほどしかない。主軸方向はN-62°10′-Wである。１号大土坑との切り合いは明確に検出された。埋土上面を覆う明黄色粘土は整地層だが、炭化物を含む。

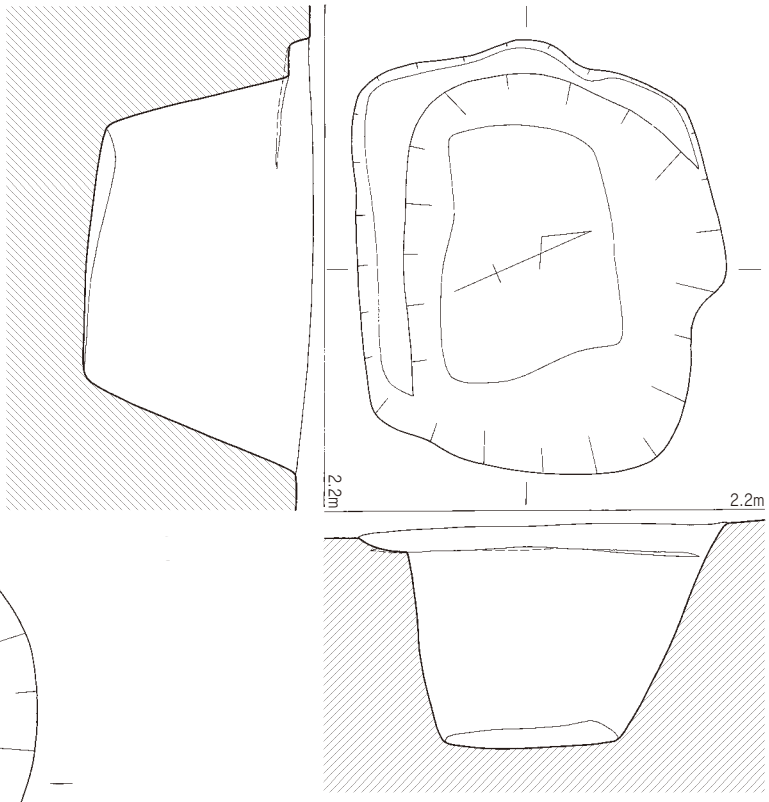
出土遺物はパンケース半分ほどで、家紋文半球形染付碗や京焼風陶器碗から18世紀前葉から中葉と考えられる。

11号土坑（図版12、第57図）

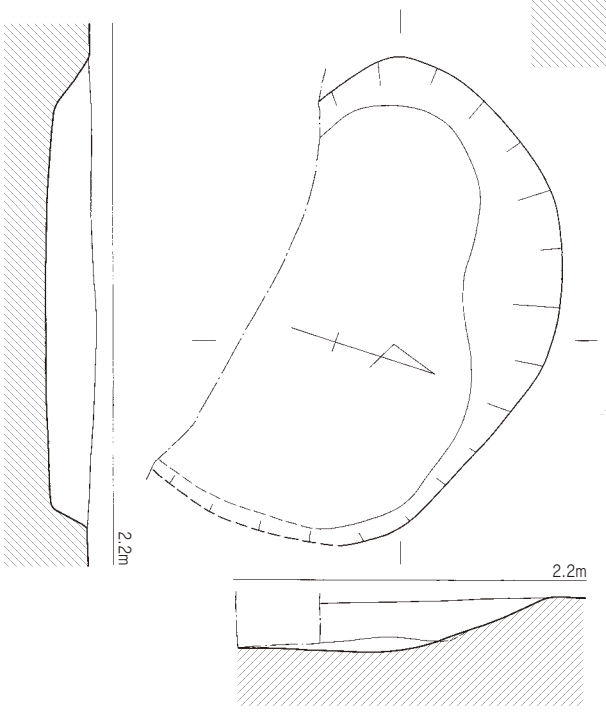
調査区西側に位置する略方形の土坑で、22号土坑に北側を、南を１号大土坑に切られる。長



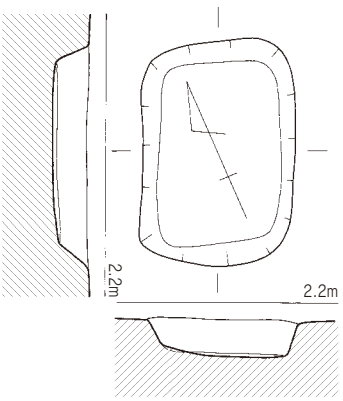
1．1号土坑



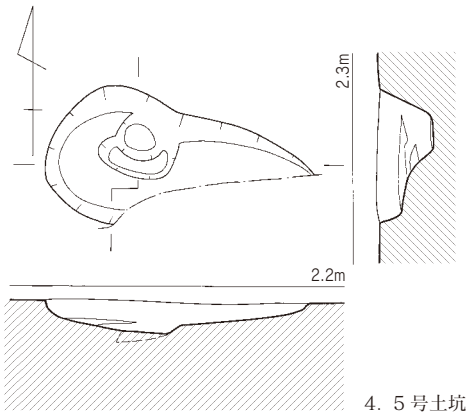
2．3号土坑



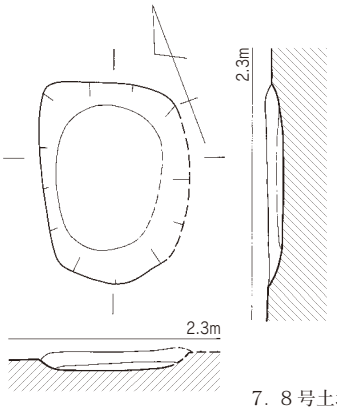
3．4号土坑



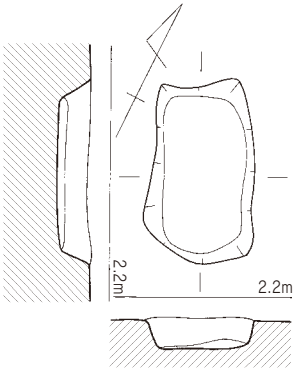
5．6号土坑



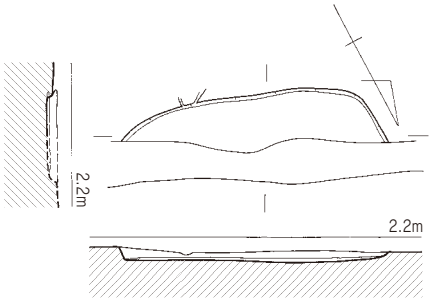
4．5号土坑



7．8号土坑



9．9号土坑



6．7号土坑

第56図　1次調査1・3～9号土坑実測図(1/60)

軸約190㎝、短軸132㎝で、主軸方向はN- 9 °30′-Eである。整地面で検出され、暗黒灰色粘土の埋土上層は北側に偏っていた。

出土遺物はわずかビニール１袋だが、肥前産摺鉢の形態から18世紀代に属すると推定される。

12号土坑（図版12、第57図）

調査区西側に位置する不整形プランの土坑で、10号土坑に南側を切られ、西は１号廃棄土坑に切られる。現存長軸278㎝、短軸164㎝である。76㎝ほどの深さがあり、主軸方向はN-11°30′-Wである。上面整地層では鮮明には検出できず、周囲を１段下げたところで発見されたので、整地層の下位の面から掘り込まれたものだろう。底面にピットからカボチャの種が30個ほどまとまって出土した。埋土は暗灰色である。

出土遺物は少なく時期の特定しづらいものだが、17世紀後半代に属するとはいえる。

14号土坑（第57図）

調査区水路西側の中央部に位置する。平面不整形プランの土坑で、長軸320㎝、短軸約120㎝である。17号土坑に北側を切られ、東は15号土坑に切られる。15号土坑との切り合いは不明確だった。西に緩やかに傾斜し､最深部でも37㎝ほどの深さしかない。主軸方向はN-70°-Wである。埋土は黒灰色土であった。

出土遺物はわずかで、矢羽文の染付猪口片やコンニャク印判刷りの染付碗から18世紀前葉である。

15号土坑（図版13、第57図）

調査区水路西側の中央部に位置する平面長方形プランの大型土坑で、西は14号土坑を切り、南は19･41号土坑を切り、北は３号土坑に切られる。14号土坑との切り合いは不明確であった。19号土坑は当初15b号土坑としていたが、プランが15号土坑に収まらないことがわかったので、19号土坑に付け替えた。長軸は246㎝、短軸で129㎝を測り、主軸方向はN-58°50′-Wをとる。床面はほぼ平坦で、深さは88㎝程である。

埋土上面の土層は当初別遺構としたほど西側に偏っており、中位では木質層と炭化物層が互層に入っていた下位からは自然木や木器が多く出土し、そのうち１点の倒置状態で出土した漆椀を取り上げると、その内側にウリ科のものとカボチャなどの種子、焼けた籾殻が入っていた。

出土した折松葉文染付皿、竹文の染付碗、猪口が存在することから年代は18世紀前葉であろう。

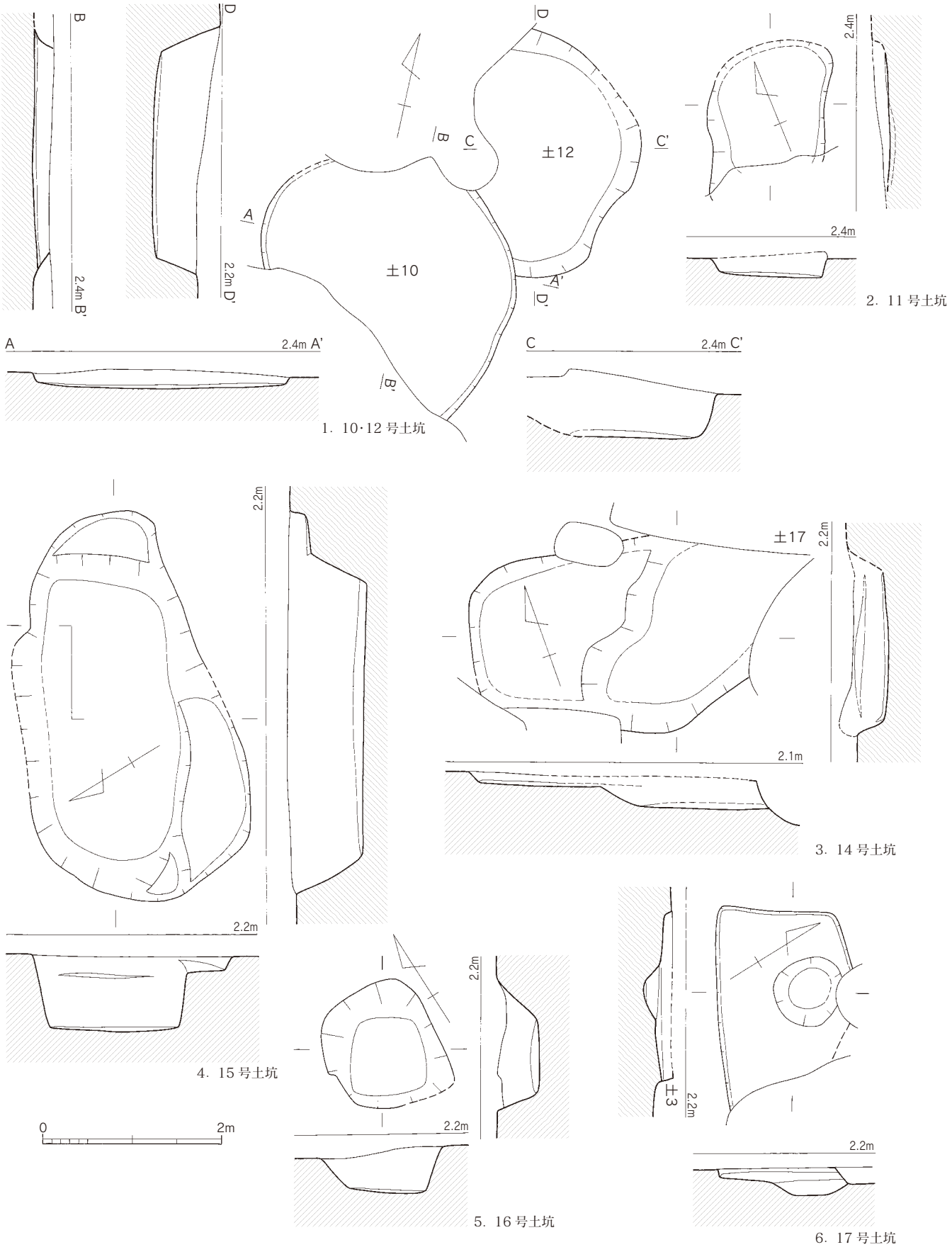
16号土坑（図版13、第57図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する隅円方形プランの土坑で、10号土坑を切る。長軸146㎝、短軸132㎝を測る。深さは52㎝を測る。主軸方向はN-31°40′-Eをとる。

出土遺物はわずかで、時期と特定できない。倒置状態で出土した漆椀を取り上げると、その内側にウリ科のものとカボチャなどの種子、焼けた籾殻が入っていた。菊花文の半球形染付碗や花唐草文があるので、18世紀前葉に属する。

17号土坑（図版13、第57図）

調査区南東部に位置する平面方形プランで、長軸が130㎝以上で、短軸152㎝、深さ31㎝程で



第57図　1次調査10～12・14～17号土坑実測図(1/60)

床面はほぼ平坦である。南は14号土坑を切り、東は３号土坑に切られる。埋土は明黄色の整地層が被らない。主軸方向はN-32°-Eをとる。

出土遺物は二重網目文皿と内面口縁部袈裟襷文帯の筒形染付碗や、広東型の染付碗片があることから、18世紀後葉から19世紀初頭に属する。

18号土坑（第58図）

調査区水路西側の中央南部に位置する、径88㎝の平面円形プランの土坑である。床面はやや南側に傾く。壁はほぼ直立しているが72㎝程の深さしかないので、井戸とは考えにくい。19号土坑に切られる。主軸方向はN-16°10′-Eをとる。

出土遺物はわずかで不確実だが、菊花文染付の筒形碗と高台付皿から、年代は18世紀中葉から後葉であろう。

19号土坑（第58図）

調査区水路西側の中央部南側に位置し、15･18･41号土坑に切られる。長軸が226㎝、短軸は190㎝、46㎝程の深さがあり、主軸方向はN-14°26′-Wをとる。碗や下駄などの木製品や紐が多く出土し、下位に貝殻が層を成していた。

出土遺物の網目文の染付碗と蛸唐草文皿から18世紀初頭から前葉だろう。

21号土坑（第58図）

調査区水路西側の中央部東側に位置し、６号溝状遺構を切る。隅円方形プランで、長軸が262㎝、短軸は207㎝、120㎝と深い。主軸方向はN-23°20′-Wをとる。木製品や完形に近い貝殻が出土している。

格子目文小皿や微塵唐草文の合子があることから19世紀前葉に属する。

22号土坑（第58図）

調査区北西側に位置する略方形プランの小型土坑で、主軸方向はN-90°-Wをとする。現存で長軸が252㎝、短軸は185㎝前後で、６㎝程しかない。

出土遺物はわずかで、端反染付碗から19世紀前葉に属する。

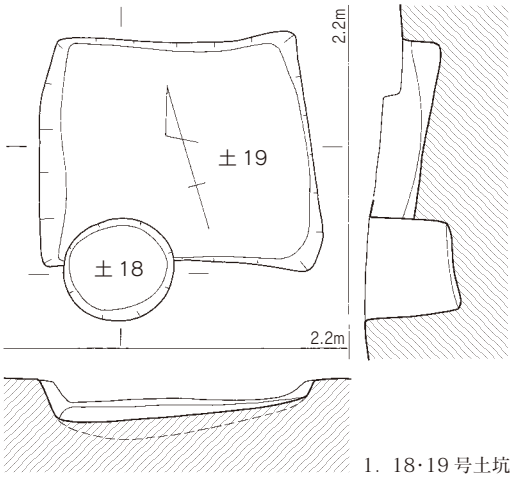
23号土坑（図版13、第58図）

調査区水路西側の北東側に位置する平面隅円方形プランの土坑で、壁が緩やかで床面は細長くグライ化して青灰色を呈する。長軸が252㎝前後、短軸は185㎝前後で、主軸方向はN-28°20′-Eである。南側は26号土坑を切る。南東隅は撹乱坑に切られている。甕や摺鉢など大型品の廃棄が目立つ。

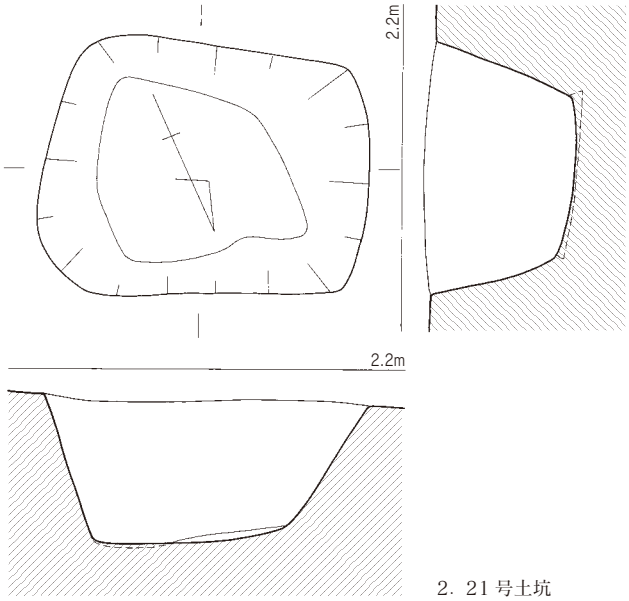
出土遺物に唐草文皿のモチーフと摺鉢の口縁部から18世紀後葉に属する。

24号土坑（第58図）

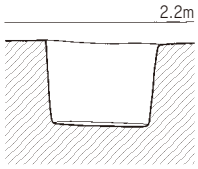
調査区水路西側の中央に位置する平面正方形プランの大型土坑で、長軸が253㎝前後、短軸は252㎝前後で、深さは18㎝ほどしかない。主軸方向はN-24°40′-Wで、６号溝状遺構と一致する。床面はほぼ平坦である。

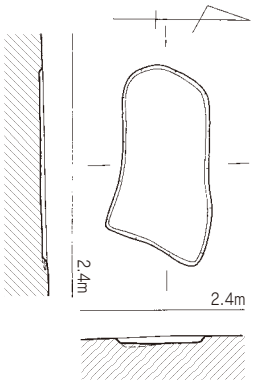


1．18･19 号土坑

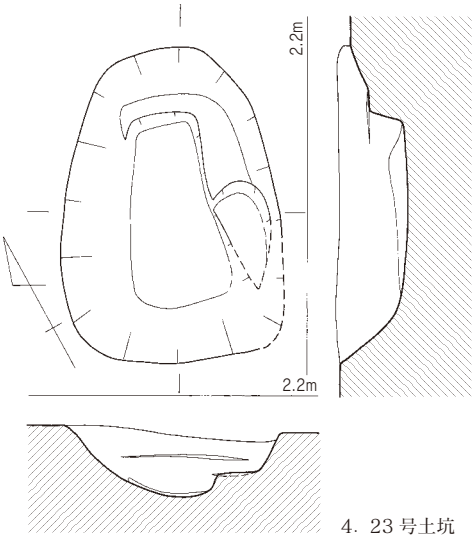


2．21 号土坑

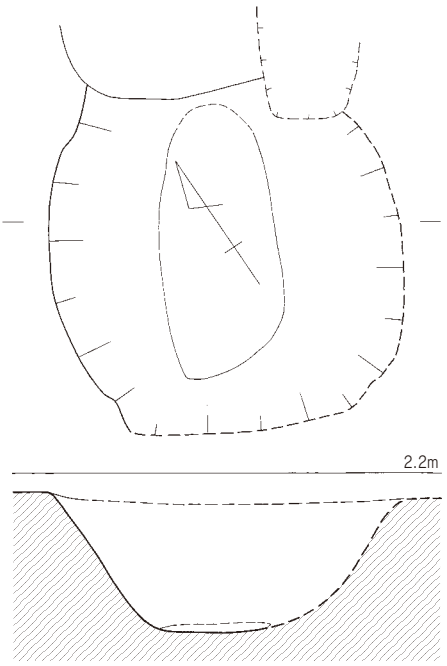




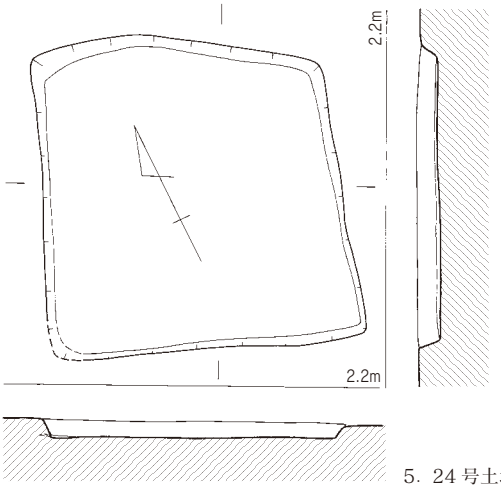
3．22 号土坑



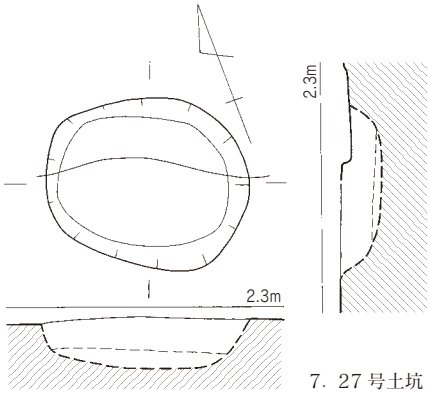
4．23 号土坑



6．26 号土坑



5．24 号土坑



7．27 号土坑

第58図　1次調査18・19・21～24・26・27号土坑実測図(1/60)

出土遺物に古相の蛸唐草文をもつ染付小皿があることから18世紀後葉である。

26号土坑（第58図）

調査区水路西側の西側に位置する楕円形プランの大型土坑で、長軸が280㎝前後、短軸は不明で、深さは112㎝程ある。壁は緩やかで床面は細長い。主軸方向はN-34°20′-Eをとる。北側は23号土坑に切られ、北西部は撹乱土坑に切られる。埋土上位は焼土を多く含み、下位は炭化物バンドが入る。

見込みに菊花文の入る染付碗とコンニャク印判手小皿があることから18世紀中葉に属する。

27号土坑（図版13、第58図）

調査区水路西側の中央部西側に位置する平面楕円形プランの小型土坑で、２号廃棄土坑に切られる。主軸方向はN-21°-Eをとする。現存で長軸が161㎝前後、短軸は138㎝前後で、深さはレベルの記録をとり忘れていたが、50㎝前後だったものと思われる。床から樹皮が数枚縦横に重なって出土した。編んだ痕跡はなかったが、意図的に敷いたものか。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

28号土坑（図版13、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形プランの小型土坑で、北側は５次調査区20号土坑と重複する。西側が１号井戸に切られ、南側は35号土坑を、東側は29号土坑を切る。主軸方向はN-15°30′-Eをとる。長軸が170㎝前後、短軸は約100m前後で、深さは58㎝程ある。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

29号土坑（第59図）

調査区の水路西側の中央部北側に位置する。平面方形プランの小型土坑で、北側は５次調査区の21号土坑と重複している。東側は32号､西側は28号土坑に切られる。南東では30号土坑を切る。主軸方向はN-16°-Eをとる。長軸が188㎝前後、短軸は150㎝前後で、深さは80㎝程ある。

出土遺物は、無文の大振りの磁器碗と直線的な唐草文の入る染付皿から17世紀末から18世紀初頭に属する。

30号土坑（図版14、第59図）

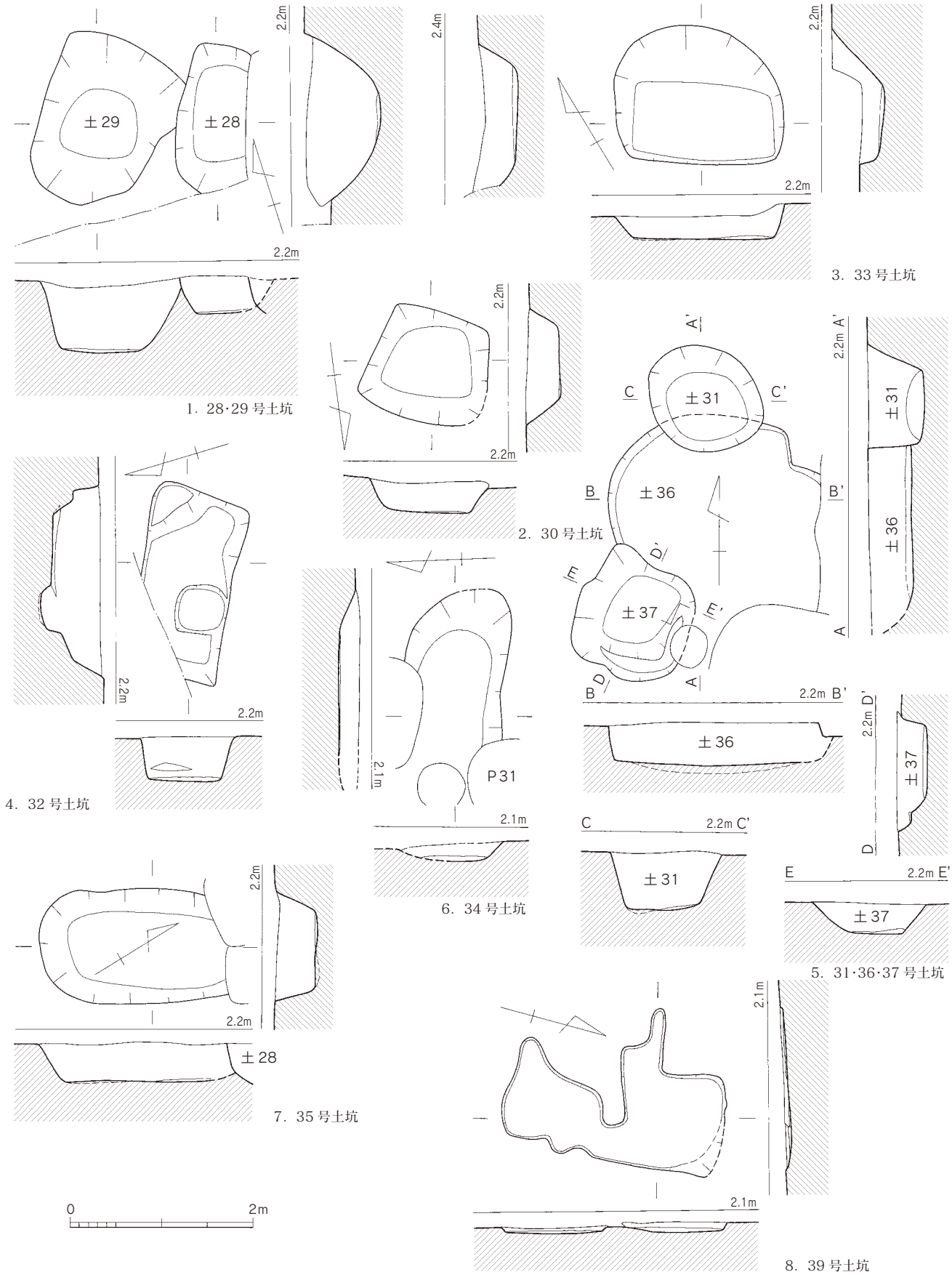
調査区水路西側の中央部北側に位置する平面正方形プランの小型土坑で、北側は29号土坑に切られる。長軸が135㎝前後、短軸は122㎝前後で、深さは37㎝程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

31号土坑（図版14、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面円形プランの小型土坑で、南側は36号土坑を切る。長軸が137㎝前後、短軸は112㎝前後で、深さはで68㎝程しかなく井戸ではない。埋甕を掘り抜いたものだろうか。主軸方向はN-40°30′-Wをとる。

出土遺物がほとんどないので時期不明。



第59図　1次調査28～37・39号土坑実測図(1/60)

32号土坑（図版14、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形プランの小型土坑で、北半分は５次調査区22号土坑と重複している。長軸が199㎝前後、短軸は110㎝前後で、深さは63㎝程ある。主軸方向はN-17°50′-Wである。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

33号土坑（図版12、第59図）

調査区水路西側の中央部南側に位置する小型の土坑で、撹乱土坑の20号土坑と４号土坑に切られる。４号土坑の床面から大部分を検出したため平面形は現状で不整形だが、床面が長方形であることから、本来隅円方形だったと思われる。長軸が184㎝前後、短軸は152㎝前後で、深さ58㎝を測る。主軸方向はN-58°50′-Wをとる。

出土遺物に内面口縁部袈裟襷文、天井部に整った５弁花文染付の蓋があることから18世紀後葉に属する。

34号土坑（図版14、第59図）

調査区水路西側の中央部西側に位置する小型の土坑で、平面形は隅円方形と思われる。南を６号土坑に切られるが、３号埋甕と切り合い関係はわかならなかった。長軸が220㎝前後、短軸は110㎝前後で、深さは22㎝程しかない。主軸方向はN-87°40′-Wをとる。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

35号土坑（図版13、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する。北は28号土坑と１号井戸に切られる。平面プランは隅円方形で、主軸方向はN-31°30′-Eをとる。現存で長軸が207㎝前後、短軸は123㎝前後で、深さは46㎝程ある。

出土遺物はほとんどないが内面に花唐草文が入る皿があることから、18世紀中葉に属する。

36号土坑（図版14、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面不整形の大型土坑で、北は23号土坑に、南は37号土坑に切られる。長軸が270㎝以上で、短軸は約220㎝で深さは47㎝程ある。主軸方向はN-55°40′-Wである。

出土遺物に台付皿があることから18世紀中葉に属する。

37号土坑（図版14、第59図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形の小型土坑で、北は36号土坑を切り、東は柱痕が残っている柱穴に切られる。主軸方向はN-29°40′-Eをとる。長軸が130㎝前後、短軸は124㎝前後で、深さは33㎝程ある。

出土遺物がほとんどないが、筒型碗があることから18世紀後葉に属する。

38号土坑（第60図）

調査区水路西側の中央部北側に位置する平面方形になるものと思われる大型土坑で、北は５次

調査側に延びるが５次調査側では繋がる遺構が見られなかったので平面プランは不明である。長軸が443㎝前後、短軸は250㎝以上だろう。深さは55㎝程である。西は32号土坑に切られる。主軸方向はN-61°-Wである。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

39号土坑（図版14、第59図）

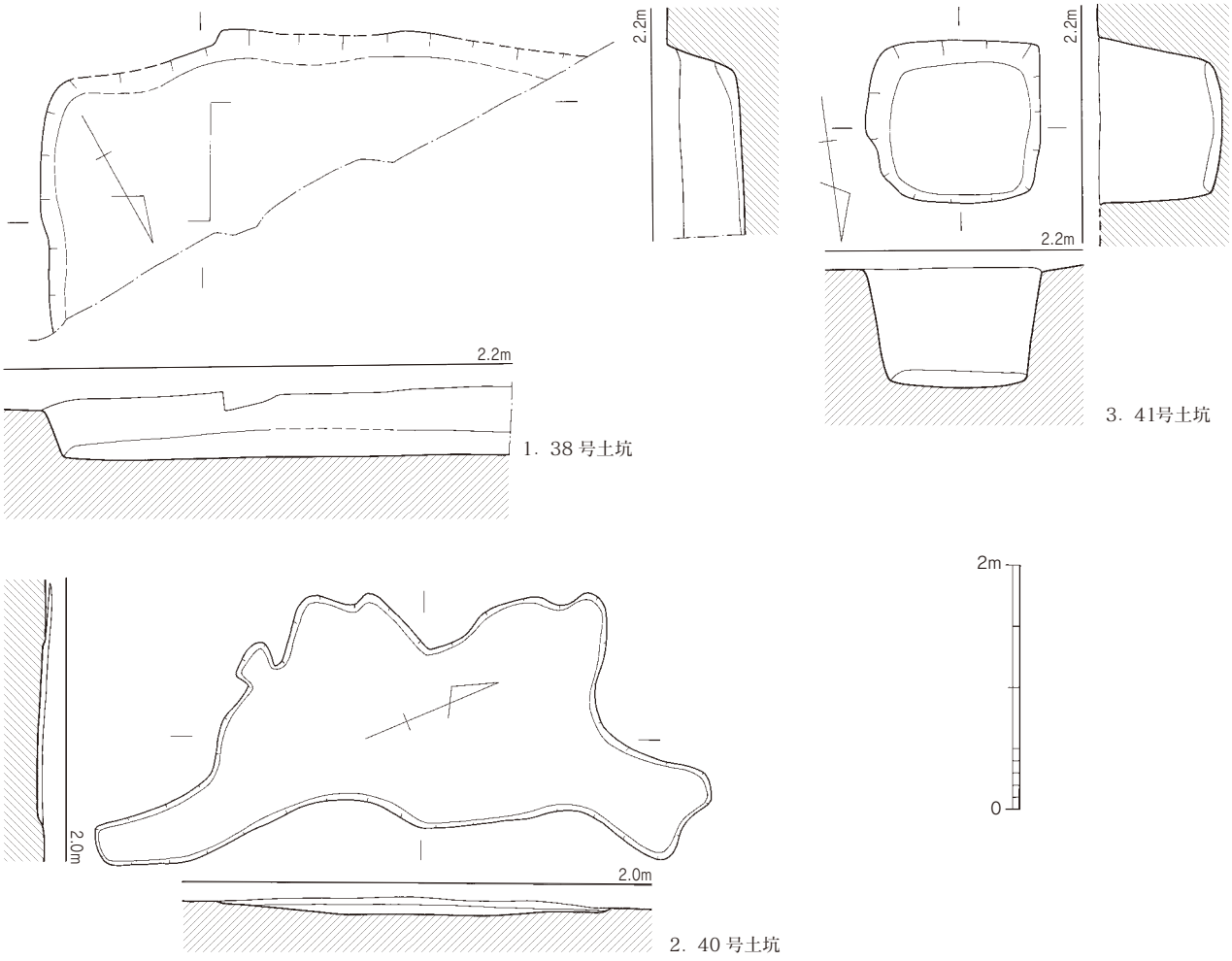
調査区水路西側の中央部東側に位置する不整形の土坑で、落ち込み状の窪みであるが、黒色土を埋土とするので、明瞭に検出された。26号遺構との切り合い関係は不明瞭だった。主軸方向はN-17°40′-Wとする。現存で長軸が224㎝前後、短軸は193㎝前後で、深さは12㎝程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。

40号土坑（第60図）

調査区水路西側の中央部東側に位置する不整形の土坑で、落ち込み状の窪みであるが、黒色土を埋土とするので、明瞭に検出された。７号溝状遺構を切る。主軸方向はN-23°40′-Eとする。現存で長軸が410㎝前後、短軸は170㎝前後で、深さは14㎝程しかない。

出土遺物がほとんどないので時期不明。



第60図　１次調査38・40・41号土坑実測図(1/60)

41号土坑（図版13・14、第60図）

調査区水路西側の中央部南側に位置する平面正方形プランの土坑で、壁が直立する。15号土坑に切られ、19号土坑を切る。長軸が142㎝、短軸は170㎝、101㎝程の深さがあり、主軸方向はN- 6°40′-Eをとる。

大土坑

検出段階で大型の土坑については土坑とは別に遺構名をつけた。２号大土坑は掘り進めた過程で溝状遺構とわかったので２号大溝に名称を変更しており、２号大溝の上層部分のみを指すのではない。２号大土坑は欠番とし、３基の大土坑を掲載する。

１号大土坑（図版14、第61図）

調査区水路西側の西端に位置する隅円方形の大型土坑で、１号溝状遺構と２号廃棄土坑に切られ、10･11号土坑を切っている。長軸652㎝前後、短軸は485㎝前後で、深さ50㎝程である。壁は緩やかである。埋土上位は黒色土が斑に入っており、その下は硬化していた。中位には木質の層がある。主軸方向はN-75°20′-Wをとる。

出土遺物の無文の磁器碗や摺鉢の口縁部形態から17世紀末から18世紀初頭に属する。

３号大土坑（図版15、第61図）

調査区水路西側の南東端に位置する不整形の大型土坑で、５号溝状遺構を切っている。長軸210㎝前後、短軸は150㎝前後で、深さは最深部で44㎝程あるが、壁面の土層断面の掘り込み面では約340㎝程になり、深さは76㎝に達する。主軸方向はN-56°-Wをとる。

出土遺物のやや崩れた蛸唐草文の染付蓋と広東型染付碗から19世紀初頭に属する。

４号大土坑（図版15、第66図）

調査区水路西側の南東端に位置する不整形の大型土坑で、長軸562㎝前後、短軸は355㎝前後で、深さは25㎝程しかない。主軸方向はN-26°40′-Wをとする。

出土遺物に花唐草文の皿片やくらわんか手があるので、18世紀中葉に属する。

廃棄土坑

検出段階で遺物が集中して検出された土坑については廃棄土坑であることが明らかであったので、土坑とは別に遺構名をつけた。

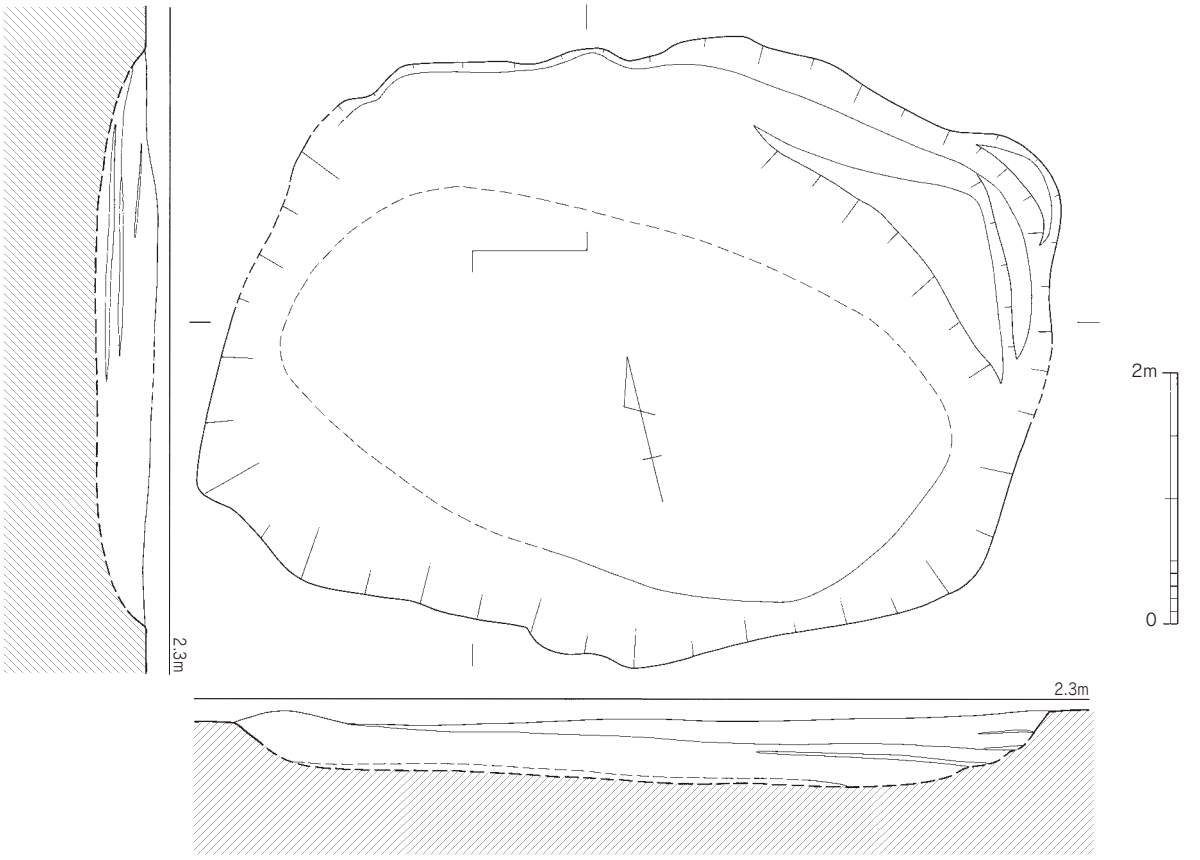
１号廃棄土坑（第62図）

調査区水路西側の北東側に位置する不整形の土坑で、10･12号土坑を切る。西側は削られておりプランが不明確主軸方向はN-34°-Eである。現存で長軸が285㎝前後、短軸は183㎝前後で、最深部で11㎝程しかなく、床面はほぼ平坦である。埋土は黒色土で、遺物は集中していた。

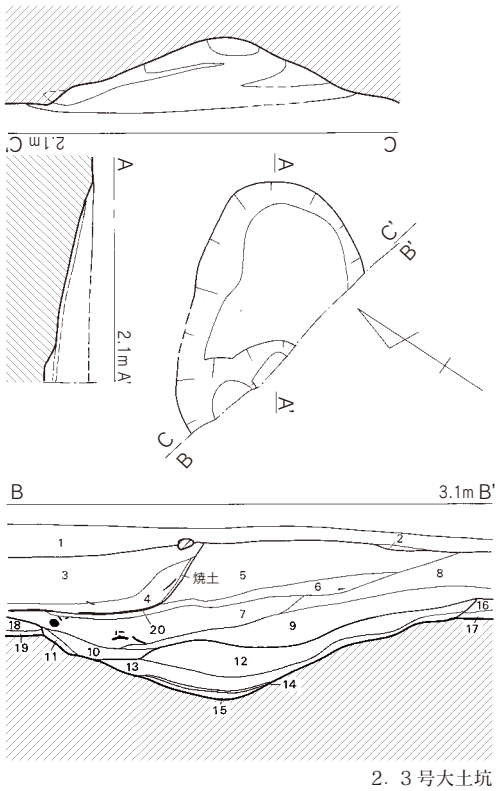
出土遺物の蛸唐草文の染付鉢と無文の磁器碗から18世紀中葉に属する。

２号廃棄土坑（図版14、第62図）

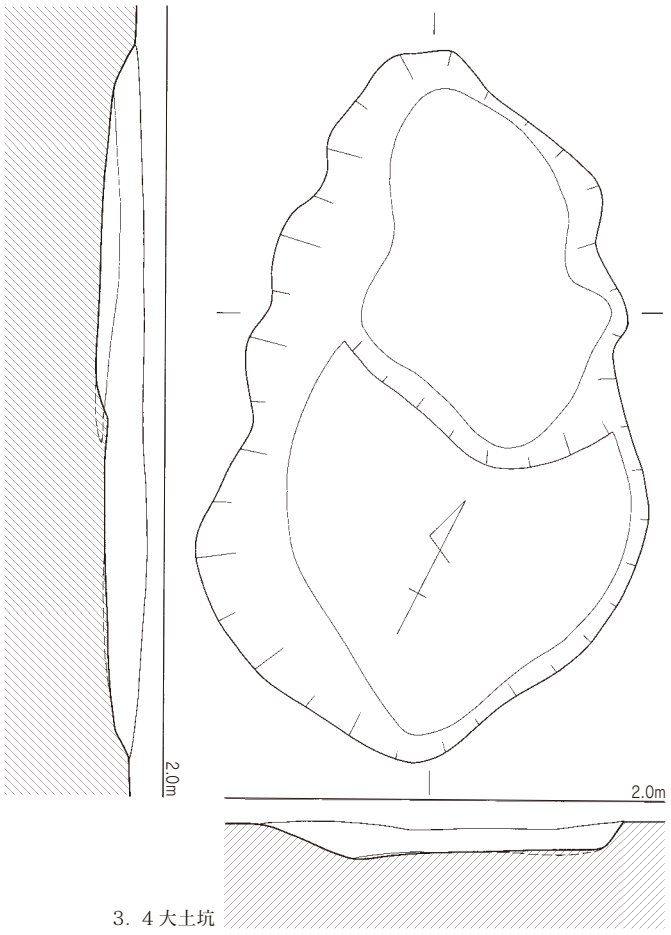
調査区水路西側の南東側に位置する長方形の土坑で、南は27号土坑を切る。主軸方向はN-69°



1．1号大土坑



2．3号大土坑



3．4大土坑

1　表土
2　黒色バンド層
3　黒色土層 焼土塊を多く含む
4　暗灰色土
5　黒色褐色土
6　淡灰褐色土
7　暗灰色土
8　橙灰褐色土
9　灰色土
10　黒青灰色土粘土
11　暗灰色粘土
12　暗橙灰色土
13　暗灰色粘土
14　黒色バンド層
15　暗灰色粘土
16　やや暗い灰色土
17　やや暗い黄灰色粘土
18　黄橙灰色粘土（客土）
19　にぶい暗灰色粘土（整地層）
20　炭層バンド層

撹乱層

3号大土坑埋土

第61図　1次調査1・3・4号大土坑実測図(1/60)

-Wをとる。現存で長軸が239㎝前後、短軸は112㎝前後で、深さはわずか14㎝程ある。瓦片が多く出土した。

出土遺物の端反染付碗と鳥居文染付皿から19世紀中葉に属する。

埋甕

２号埋甕の北西側に上位の整地面から掘り込まれた土師質の埋甕があったが、これは機械掘削作業中に掛かったもので番号もとらず記録なしに廃棄した。遺物の出土しなかった９号埋甕については写真記録だけ残し、８基の埋甕について報告する。

１号埋甕（図版15）

調査区水路西側中央に位置し、２号埋甕に切られる。埋設されていたのは陶器大甕で、重機による表土剥ぎの際に引っ掛けて斜めになったのだろう口縁部が内部に落ちていたのはそのためではない。1号埋甕の南側には胞衣壺が２点表土剥ぎ中に検出されたが、元位置がわからなくなったため、遺構としては記録に留めておらず、遺物のみ回収した。

甕の口縁形態から19世紀代であろう。

２号埋甕（図版15）

調査区水路西側中央に位置し、１号埋甕を切る。埋設されていたのは土師質大甕で底面だけが残っていた。底部内面の中央に寛永通宝があった。調査区水路西側中央に位置し、１号埋甕を切る。埋設されていたのは土師質大甕で、底面が半分失われていた。また、銅銭が底面に貼り付いていた。

甕が時期不明の土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

３号埋甕（図版15）

調査区水路西側中央南に位置し､34号土坑との関係はわからない。内面には何も残っていない。内面にカルキが付くことから便壺とわかる。

甕は土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

４号埋甕（図版15）

調査区水路西側西端に位置し、明治後半から大正時代の整地面から掘り込まれ、甕の上面は削られている。明黄色粘土の掘り方に土師質土器の大甕が埋設されていた。内面にカルキが付くことから便壺とわかる。

出土遺物がほとんどないので時期不明だが、大正時代の面から掘り込まれているので、近代に属するだろう。

５号埋甕（図版15）

調査区水路西側西端に位置し、明治後半から大正のものが出土しており、明治後半から大正整地層から掘り込まれていた。

甕は土師質土器であり、出土遺物がほとんどないので時期不明。

６号埋甕（図版15）

調査区水路西側中央北に位置し、土師質の大甕の内面に陶器の甕片が重なっていた。

17世紀代の甕だが、出土した碗は19世紀代のものであった。出土遺物がほとんどないので時期不明。

７号埋甕（図版15）

陶器の半胴甕の内面に陶器の碗と小壺が２つ並んで入っていた。単に廃棄されたものか、意図的なものかわからない。

陶器の甕から17世紀後半から18世紀前半代のものだろう。

８号埋甕（図版15、第62図）

調査区水路西側の中央北西側に位置し、壁にかかった状態で検出した。土層から見て、掘り込み面で長軸70㎝ほどあり、80㎝掘り込んだ後裏込め土を敷いて土師質の大甕が埋設されている。内部に黒色土が堆積していた。甕自体は胴部しか残っていなかったので図化していないが、丸腰碗や蛸唐草文が出土していることから19世紀前葉に属する。

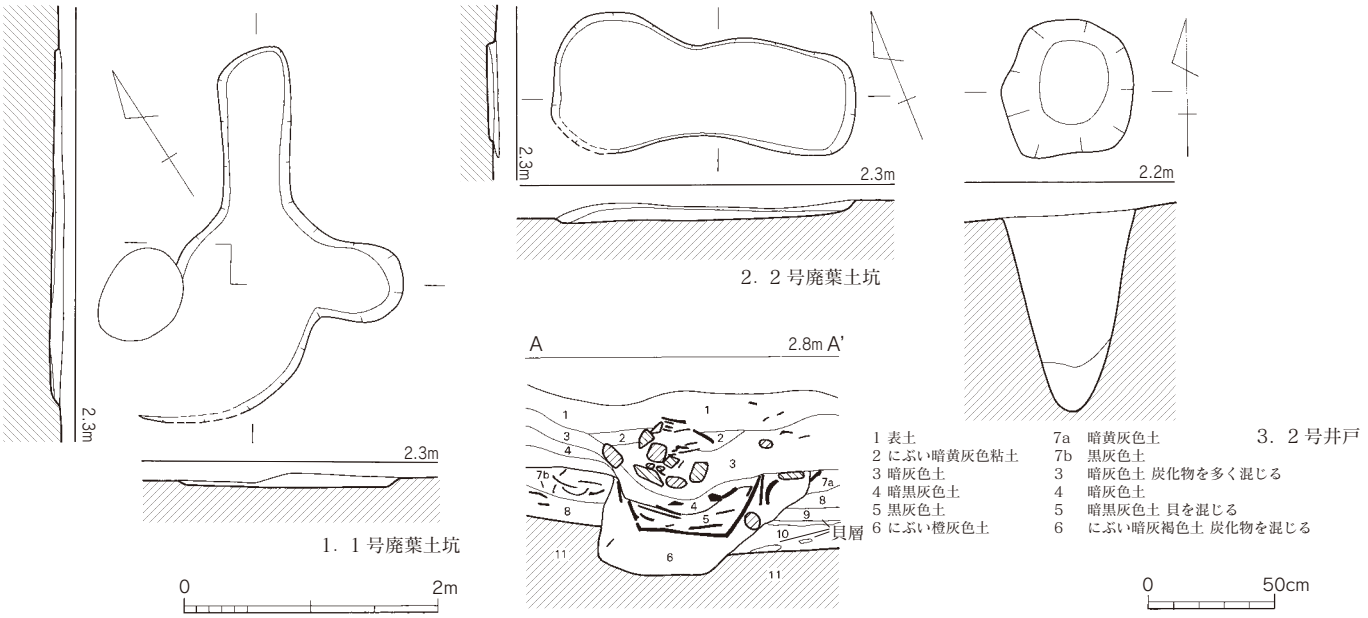
井戸

３基の井戸が検出されたが、このうち２号井戸以外はコンクリートの井戸枠をもつことから記録していないので、１基のみ報告する。

２号井戸（第62図）

調査区水路西側の中央北側に位置する平面隅円正方形で、方形の地上部があったのだろう。長軸が106㎝前後、短軸は104㎝前後で、深さは156m程ある。

出土した摺鉢から18世紀後葉に属する。



第62図　1次調査１・２号廃棄土坑、２号井戸実測図、８号埋甕土層断面図(4は1/30、他は1/60)

溝状遺構・大溝遺構

溝状遺構は７条検出されている。大溝は溝状のなかでも特に大きいものを別遺構名にしたものだが、２号大溝は当初２号大土坑を掘り下げていく過程で溝状遺構とわかったので、遺構名をつけかえたものである。5･7号溝は規模が等しく同じ方向に一定間隔に走っていることから畑の畝跡かもしれない。

１号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、北西から南東方向に走る大溝で、南東端で南に直角に折れていた。長く検出された部分を東西軸、折れた部分を南北軸と称した。さらに南北軸の南端の東角から幅の狭い２号溝状遺構が繋がっており、本来同じ遺構であったのかもしれない。３号溝状遺構を切っているが、これは掘り直し段階の埋土と切り合っていただけで、掘り直し前の段階の掘り込み面とは切り合っていなかった可能性が高い。

幅162㎝、深さは検出面から約30㎝で、土層断面でみる限り掘り直しがあり、最終掘り直しはコンクリートの基礎が掘り込まれた整地面から掘り込まれており、多色刷の絵皿やヤクルトの瓶などが入っていた。検出された溝状遺構はその下の明治後半から大正の整地面から掘り込まれている。

半球形碗や腰張形碗など18世紀中葉から後葉のものと鳥居文の染付小皿など19世紀中葉のものが混在しており、１号大土坑を切っていることから後者に属するだろう。

２号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、１号溝状遺構南北軸南東隅から派生している。幅42㎝、深さ５㎝前後で、南東端は木杭が集中する落ち込みと繋がっており、床面は西に向かって下がっている。この施設の機能はわからないが、屋根の雨水の導水的な施設だろうか。

摺鉢の口縁部形態や湯飲み形の小碗から19世紀前葉に続するだろう。

３号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、県道と併走して北東から南西方向に走っていた。１号溝状遺構に切られていたが、１号溝状遺構は掘り直しされていることから、掘り直される前の段階の溝は共伴していたかもしれない。上面は整地層があり、中位には黄灰色の軟質粘土が堆積していた。西壁が調査区外にかかるため幅は明らかでないが、現存で95㎝、深さは約30㎝あった。

遺物は摺鉢の口縁部形態から18世紀後葉に続するだろう。

４号溝状遺構（図版11）

調査区の西端に位置し、３号溝状遺構と垂直に走る小溝で、北西から南東方向に走る。幅40㎝、深さは９㎝と浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

５号溝状遺構（図版11）

調査区水路西側の南東端に位置し、6･7号溝状遺構と平行に走る小溝で、３号大土坑に切られる。幅68㎝、深さは５㎝前後と浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

６号溝状遺構（図版11）

調査区水路西側の中央に位置し、21･38号土坑に切られる小溝で、幅63㎝、深さは10㎝前後と浅い。遺物が少なく時期を特定できない。

７号溝状遺構（図版11）

調査区水路西側の南東端に位置し、5･6号溝状遺構と平行に走る小溝で、幅58㎝、深さは17㎝と浅い。40号土坑との切り合い関係は不明。遺物が少なく時期を特定できない。

１号大溝遺構（図版11）

調査区西端に位置し、県道と併走して北東から南西方向に走っていた。当初西端クリークとしていたが、掘削すると溝であることがわかったので大溝とした。埋土内に遺物がほとんどなかったため、重機で大部分を掘削し、壁と底面は人力で掘削した。壁は緩やかで、東壁は１号大土坑の下位で東に張り出していた。埋土は完全埋没後に上位が整地されており、その上位を1･3･4号溝状遺構、１号大土坑に切られていた。西壁は調査区内には検出されておらず、正確な幅はわからないが、現存で4.1mほどあり、深さは190㎝前後である。

大振の磁器碗や陶器甕の口縁部形態など17世紀後半のものが出土しており、上位を切る１号大土坑が17世紀末から18世紀初頭に属するので、17世紀末には埋没していたことがわかる。

２号大溝遺構（図版11・15）

調査区水路西側の北東端から東に走り、南側には張り出し部があり、北側は５次調査の１号大土坑に繋がる。当初２号大土坑としていたが、水路西側の調査区の溝と繋がることがわかったので、大溝に変更した。西部の南壁には土管が埋設されており、排水されていた。南壁側には杭列があり、横木が残る部分もあった。

この杭列は５次調査の１号土坑の護岸施設と繋がるので、１号土坑の南側は２号大溝の北壁と考えるべきだろう。水路西側には護岸施設は残っていない。土管は遺構面から10cm程掘り下げると３本が露出した。溝内には土管の破片が見られなかったので、先端から残っていたといえる。土管は調査区外まで続いていたが、近代のものと想定してすべてを掘削せず、３本だけ取り上げた。基盤層を埋土としているため、掘り方がわからず、埋設の方向がわからないが、南端のトレンチにはかからず集水枡のような土管の先端部分も見られなかったので、トレンチの東を調査区外まで走っていたと思われる。

溝幅は広い所で420㎝、深さは最深部で70㎝ほどである。最上位の埋土は万年筆や豆電球などの入る現代の層で、その下に大正包含層である黒色土層がバンドを成していた。

遺物はパンケース８箱程あり、年代幅も広い。18世紀前葉の半球形碗染付から20世紀初頭ほどの遺物を掲載している。

３号大溝遺構（図版11）

調査区中央水路東部に位置し、南北方向に走る。幅は約３mあり、２号大溝に繋がる。深さは80㎝ほどで２号大溝より浅いことから水を落としていたのだろう。４号溝状遺構とは切り合わないが、併走することから、掘り直しの可能性が高い。

遺物は少ないが、摺鉢から18世紀後葉に属する。

４号大溝遺構（図版11）

調査区中央水路東部に位置し、南北方向に走る。幅は西側の壁がコンクリート揚水ポンプの導水管の下に入るため確認できないが、現存で192㎝ある。２号大溝に繋がる可能性が高く、西壁は現在の水路のため検出していない。深さは45㎝前後、２号大溝より浅いことから水を落としていたのだろう。３号溝状遺構とは切り合わないが、併走することから、掘り直しの可能性が高い。

遺物が少なく時期を特定できない。

１次調査の出土遺物

１次調査ではパンケース約40箱分の陶磁器類や８箱分の木製品が出土している。個々の遺物については観察表を掲載しているので、追記するべき事項のある遺物についてのみ記述する。

63図１は染付碗で、見込みの菊花文にダミを施す文様構成は珍しいので、肥前産ではないかもしれない。63図２は底部の小片だが、高台径が小さく畳付の外縁に丸みがあるので呉器手の碗とみてよいだろう。63図３は磁器皿で、小片のためモチーフがわからないが、亀甲文のような区画線が入る。

64図３は磁器碗で、外面の寿字を帆に見立てた船の横に栗が３つと船の下に筆が描かれている。絵文字の「はんじ文」と考えれられるが、何と読むべきものかわからない。64図5･7は陶器の小皿で、外底に胎土目跡がある。

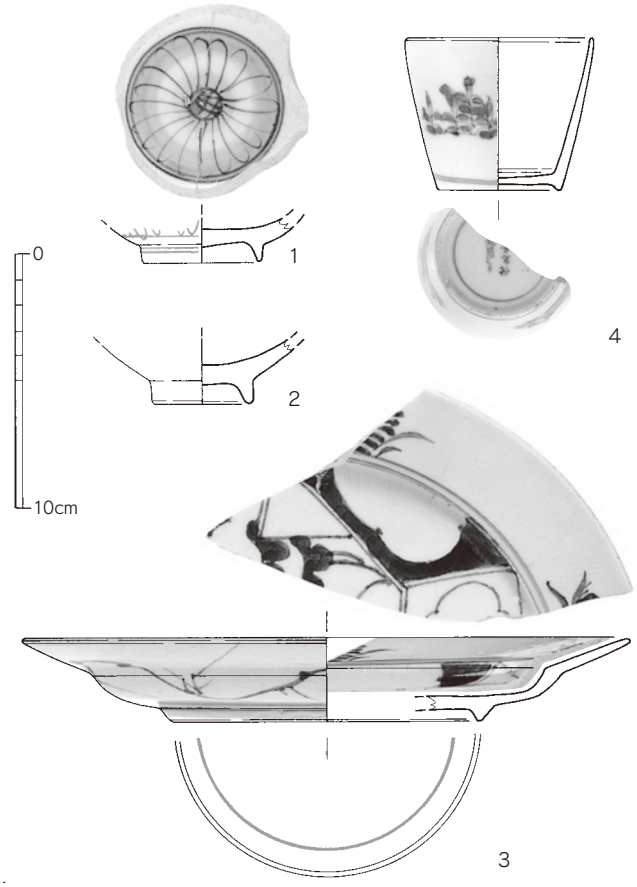
65図７は陶器の大鉢で、上掛けしている釉薬は灰釉のように見えるが、鉄釉が発色不良のために色調が異なっているものと判断した。65図12は土師質の甕で、口縁下にわずかに段があるので、口縁部が肥厚する甕の小型のものだろう。口縁部の穿孔は２つ並び、紐を結ぶためのものだろうか。

66図８は陶器の摺鉢で、外面胴部に子供の手の跡が付着している。施釉作業後に両手を置いて手の置いた部分だけ釉の掛かり方が薄くなったものである。類例がないのでモチーフとして意図的につけたものではないと思われる（巻頭図版）。

68図５は「水田庄」のスタンプの入る火鉢で、水田焼の製品とわかる。

69図14と15は絵の特徴が異なるので、同じ工房で別の絵付け工人が描いたのだろう。５次調査の42図１も同じモチーフで、やはり別の絵付け工人の手によるものだろう。

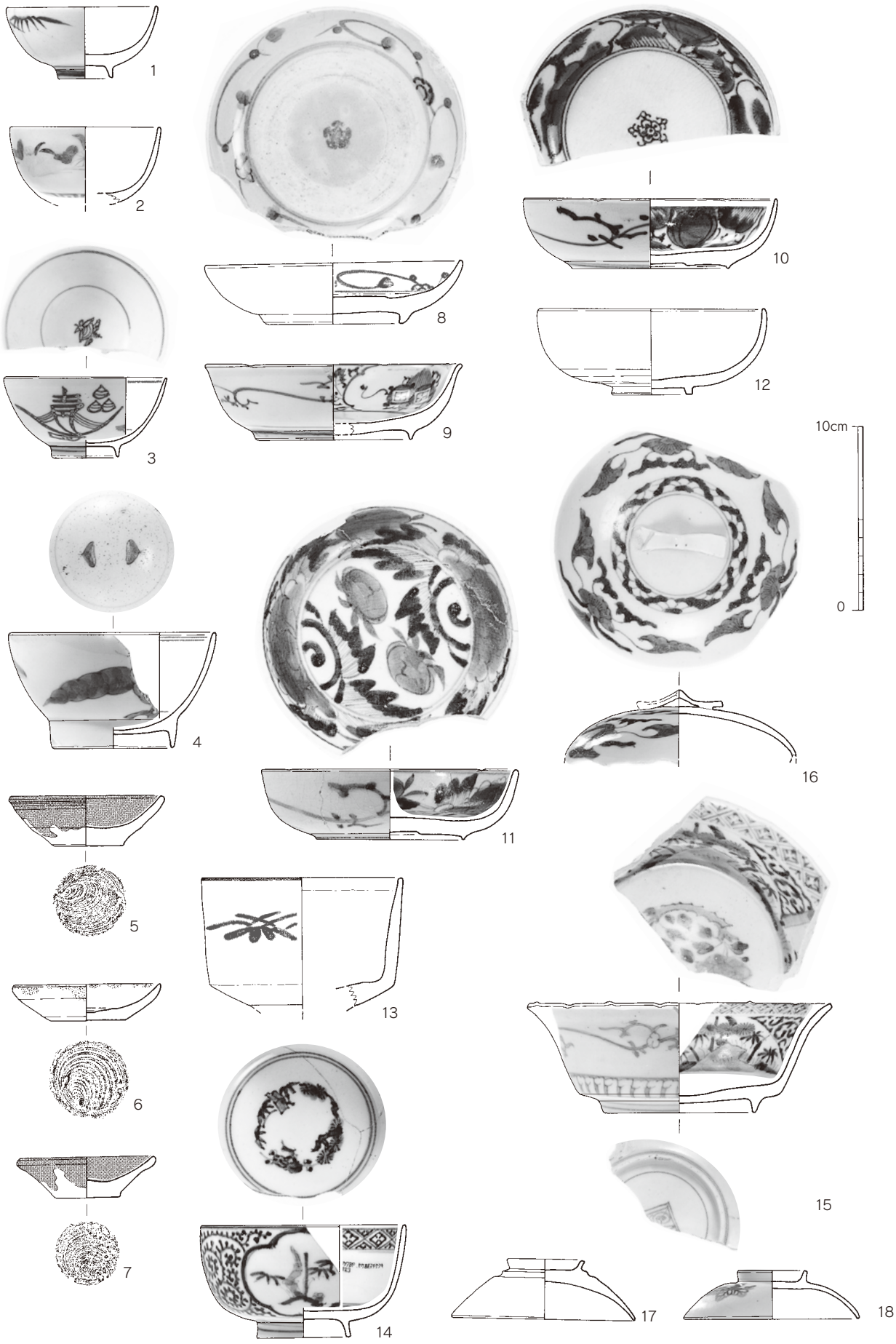
70図２は土師質土器の焜炉である。内面に付く煤は、口縁下に厚く付着し、口縁部は煤が付着していないことから、上に何か土瓶や鍋などを掛けて使用していたことがわかる。口唇部に突起があるので、口唇



第63図　１次調査１号土坑出土陶磁器実測図（1/3）

表28　1次調査出土土器・陶磁器観察表1

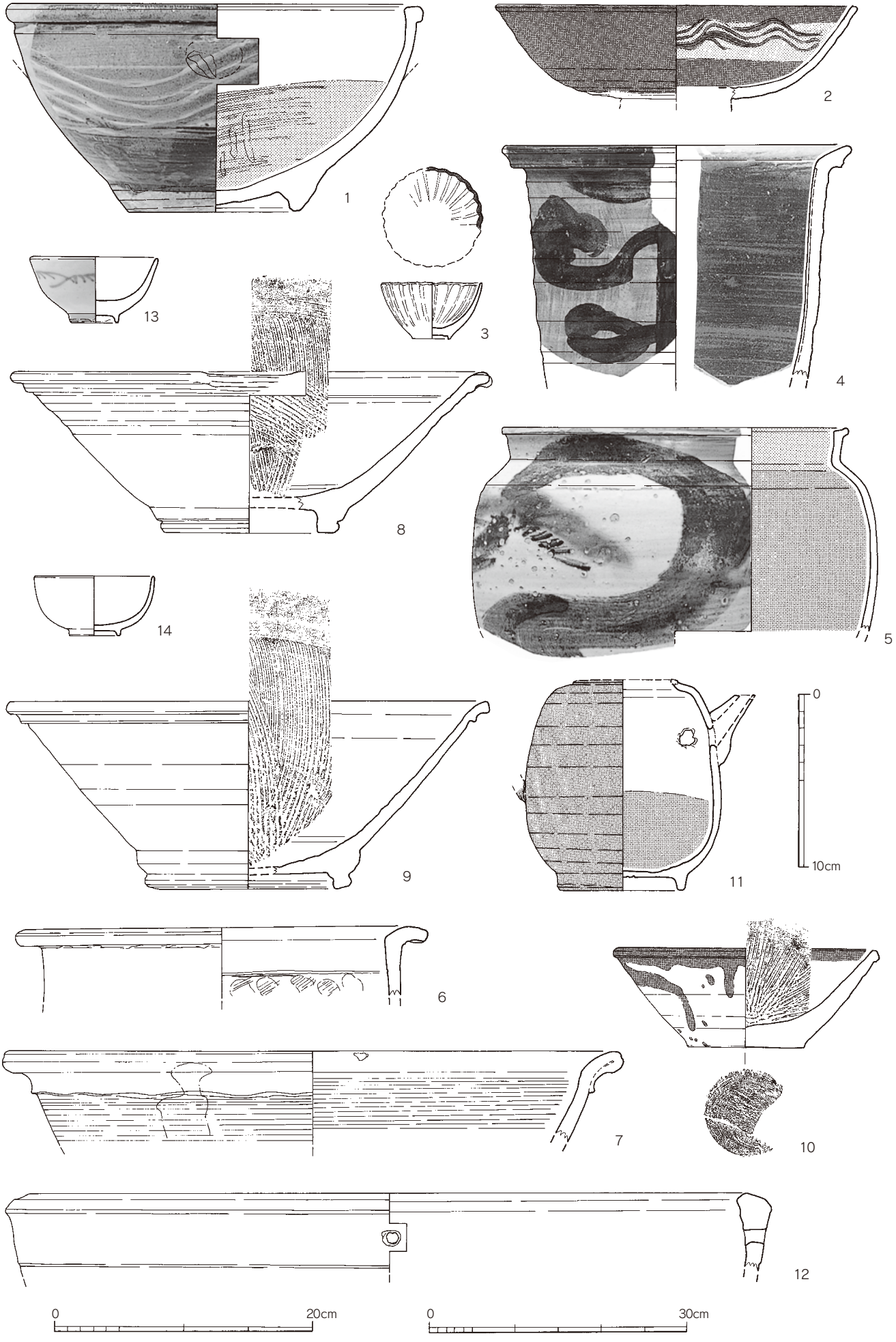
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑1 63図1	碗	高台径4.7	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面網目文、見込みにはダミと網目文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	1750 〜 1770
土坑1 63図2	碗	高台径4.1	陶器 灰白色	透明釉全面に掛け　貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑1 63図3	皿	口径(24.0) 高台径12.3 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 貫入あり	外面は枝文、内面は口縁部に草文、見込みに幾何学文　裏銘の有無不明で界線のみあり　呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目跡の有無は不明		肥前	不明
土坑1 63図4	猪口	口径(7.6) 高台径(5.0) 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面草花文、外底「大明成化年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	1650 〜 1780
土坑3 64図1	小碗	口径(8.2) 高台径3.0 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑3 64図2	小碗	口径(8.2)	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面下位は変形櫛歯文を呉須染付胴部は緑・赤・金彩で草花文の上絵付け	—		肥前	1740 〜 1780
土坑3 64図3	小碗	口径(8.8) 高台径2.8 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は波文と寿字を帆に見立てた船の横に栗が3つ宝珠と下に筆のはんじ文、内面口縁部は界線、見込みは昆虫文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半 〜 20世紀前半
土坑3 64図4	碗 広東形	口径(11.1) 高台径6.4 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に栗と鳥文、見込みに栗文が対面に入る　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 〜 1810
土坑3 64図5	小皿	口径7.6 底径3.5 器高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	外底糸切り	外底にアルミナ塗布		肥前	不明
土坑3 64図6	小皿	口径8.0 底径4.1 器高2.0	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外底糸切り 内外面ナデ	外底に胎土目跡あり	使用により内面黒灰色、口縁部の一部が強く黒変しており灯明皿として使用したとわかる	蒲池焼	不明
土坑3 64図7	小皿	口径7.6 底径3.5 器高2.2	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	外底糸切り	外底に胎土目跡あり		肥前	不明
土坑3 64図8	小皿 5寸皿	口径14.0 高台径7.6 器高3.4	磁器 暗灰白色	暗い透明釉　全面掛け	外面は無文、内面は半菊唐草文、見込みは5弁花文のコンニャク印判刷りの呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	ほぼ完形 見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕あり	波佐見	1680 〜 1740
土坑3 64図9	小皿 花弁口縁	口径(14.0) 高台径8.6 器高4.1	磁器 灰白色 焼成不良	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文　内面花唐草文と窓文内に宝文　裏銘は福だが、角福か渦福か不明　呉須染付	畳付釉剥ぎ	小片のため見込みの有無不明	肥前	18世紀後半
土坑3上位 64図10	皿	口径13.8 高台径8.4 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 貫入あり	口縁部は低い山形　外面唐草文、内面胴部牡丹花文が花と蕾が対になる　見込みに蕾と葉と渦文を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑3上位 64図11	皿 花弁口縁	口径14.0 高台径8.0 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 貫入あり	外面唐草文、内面胴部牡丹花文が花と蕾が対になる　見込みに蕾と葉と渦文を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	高台がない	肥前	18世紀後半
土坑3 64図12	皿	口径(12.4) 高台径4.4 器高4.6	陶器 黄灰白色	透明釉を胴下位以外に掛け　貫入あり	無文	底部露胎		肥前	不明
土坑3上位 64図13	鉢	口径11.0	陶器 灰色	白化粧土を外面胴上半から内面口縁部に掛け、透明釉を内外に掛けた後、外面に竹笹文の鉄絵と口錆		—		肥前	不明
土坑3 64図14	小鉢	口径11.5 高台径5.1 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は蛸唐草文地に雲形窓文　窓文2つの中には松と竹があるので松竹梅の3つが入る　内面口縁部は袈裟襷文帯で、見込みに環状松竹梅文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	1780 〜 1810
土坑3下層 64図15	皿 花弁口縁 腰折形	口径(16.4) 高台径(8.4) 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面唐草文と不明文帯、内面口縁部四方襷文帯、内面区画内に花葉文、見込み環状花葉文、裏銘には渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着	呉須染付は色が薄い	肥前	1680 〜 1700
土坑3 64図16	蓋	つまみ長軸4.6 つまみ短軸1.1 裾径12.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面天井部半菊文帯、中位は牡丹花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 〜 1860
土坑3上位 64図17	蓋	裾径9.9 つまみ径4.2 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり	無文	つまみ端部釉剥ぎ		肥前	1740 〜 1750
土坑3 64図18	蓋	裾径9.7 つまみ径3.8 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は桐文のコンニャク印判刷り　桐文は位置関係から3つあっただろう　呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ	8割残存	肥前	1700 〜 1740
土坑3 65図1	片口鉢	口径24.0 高台径9.8 器高12.0	陶器 紫橙色 精良	内面胴中位は白化粧土ハケ掛けし、外面胴中位は白化粧土塗布後、太い櫛状掻き取り　外面胴下位から高台内は鉄釉ハケ掛け、内面と外面胴中位までオリーブ色の灰釉掛け		高台剥ぎ	胴中位に帯状に露胎部がある	肥前	不明
土坑3上位 65図2	鉢	口径21.0	陶器 にぶい灰褐色　精良	外面胴下位露胎で鉄漿を掛けた後、内面胴部に白化粧土をハケ掛けし、櫛状掻き取り　透明釉を胴下位から内面に掛ける		見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	不明



第64図　1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測図1 (1/3)

表29　1次調査出土土器・陶磁器観察表2

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑3 65図3	小鉢	口径5.8 高台径2.2 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型　口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑3 65図4	鉢 半胴甕	口径(20.0)	陶器 暗紫灰色	内面から外面口縁部は鉄釉掛け、外面は白化粧土を縦にハケ掛けし、鉄絵で松文を描く		畳付釉剥ぎ　高台内面に砂目付着 見込みに環状の砂目付着	内面に縦に凹線があるが、意味不明	肥前か	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
土坑3上層 65図5	鉢 半胴甕	口径(27.0)	陶器 にぶい淡暗灰褐色	内面にオリーブ色の灰釉を掛けた後、外面から内面頸部まで白化粧土ハケ掛けし、外面に鉄絵と緑彩で松絵を上絵付けし、透明釉を全面に掛ける		—	白化粧土の上の透明釉が沸騰している	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
土坑3 65図6	火鉢	口径(32.0)	瓦質土器 にぶい灰白色が灰黒色を挟む　金雲母多い	—	外面口縁下は接合の工具痕あり　口唇部ミガキ　内面は口縁下に沈線の下にハケ状のオサエ列あり	不明	外面の黒色は炭素吸着によるもの	在地か	不明
土坑3 65図7	大鉢	口径(48.0)	陶器 橙褐～にぶい紫褐色	内外面鉄釉掛け 発色不良	内面カキ目 外面口縁下はカキ目、口縁部は折り返して肥厚	口縁部内面に胎土目跡付着		肥前	1750 ～ 1860
土坑3下層 65図8	摺鉢	口径(37.3)	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は17本単位 外面上半はナデ、下半はケズリ	畳付釉剥ぎ後砂目付着　見込みに環状重ね焼き痕あり	重ね焼き痕に別個体の畳付の一部が付着している	肥前	1750 ～ 1860
土坑3 65図9	摺鉢	口径(37.6)	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は18 本単位 外面上半はナデ、下半はケズリ	畳付釉剥ぎ 見込みに環状重ね焼き痕あり	内底の窪みは胎土目跡か	肥前	1750 ～ 1860
土坑3下層 65図10	小摺鉢	口径(15.4) 底径6.8 器高5.8	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目９本単位　外底糸切り	底部露胎　見込み中央の窪みは胎土目跡か		肥前	1650 ～ 1690
土坑3下層 65図11	水注	口径6.0 高台径7.5	陶器 橙褐色	飴釉を外面全面、内底にオリーブ色の灰釉掛け	把手部は欠損	畳付釉剥ぎ　アルミナ塗布	内面部分的に使用変色	肥前	不明
土坑3上位 65図12	大甕	口径(90.0)	土師質土器 にぶい灰色　砂粒多い	—	内外ケズリ状のナデ　器面残りよい 穿孔は焼成前で、紐ずれなし	—		在地	不明
土坑3 65図13	杯	口径(7.4) 高台径2.8 器高3.7	磁器 灰白色	発色不良の透明釉が全面に掛かる	外面竹笹文の呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着	胎の色から波佐見の可能性あり	波佐見	1680 ～ 1740
土坑3 65図14	杯	口径(7.0) 高台径3.0 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑4 66図1	碗	口径(9.2) 高台径3.4 器高4.7	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を外面に掛ける	外面は３つの花文のコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1700
土坑4 66図2	碗	口径10.0 高台径4.1 器高4.4	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面は３つの織田木瓜文を手書き呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1700
土坑4 66図3	碗	口径(10.7) 高台径4.5 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面には草花文、裏銘は「大明年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑4 66図4	碗 半球形	口径(10.2) 高台径5.2 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に柴垣と牡丹文　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
土坑4 66図5	碗 半球形	口径(11.4) 高台径4.2 器高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
土坑4 66図6	小皿 花弁形	口径9.2 高台径5.2 器高2.3	磁器 灰白	透明釉　全面掛け	型作りで、花弁形に成型、内外面は花唐草文、見込みは５弁花文、裏銘は「大明化製」を呉須染付　口錆	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1680 ～ 1700
土坑4 66図7	片口鉢	口径(21.6) 高台径9.2 器高10.8	陶器 灰～黄橙色　精良	外面胴中位と内面は白化粧土ハケ掛けし、外面は櫛状掻き取り　外面胴下位から高台内は鉄漿ハケ掛け、内面と外面胴中位までオリーブ色の灰釉掛け		畳付釉剥ぎ	胴中位に帯状に露胎部がある	肥前	不明
土坑4 66図8 巻頭図版	摺鉢	口径39.4 高台径16.7 器高14.0	陶器 暗紫灰～橙灰色	内外面鉄釉掛け	摺り目は16本単位 外面ナデ、高台貼り付け後、外底の接合部を丸くナデる	畳付釉剥ぎ　畳付と見込みに６つの目跡の窪みあり	外面胴部鉄釉の上に掌の跡が残る	肥前	17世紀後半
土坑4 66図9	摺鉢	口径32.8 底径13.3 器高13.0	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目15本単位　外底糸切り	底部露胎　見込みと外底に７つの胎土目跡	ほぼ完形	肥前	1650 ～ 1690
土坑5 67図1	碗 筒形	口径8.1 高台径4.3 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は３分割され、同じモチーフが描かれる　竹文を両端にして、中央に草花文と竹笹文らしいモチーフが入る　体部下位は宝文、内面口縁部は四方襷文帯で、見込みには５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	９割残存	肥前	1780 ～ 1810
土坑5 67図2	中皿	口径20.6 高台径10.8 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面に草花文か　見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕	波佐見	1680 ～ 1740
土坑5 67図3	中皿 花弁口縁	口径18.3 高台径11.0 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は唐草文、内面は牡丹花文を呉須染付　口縁部は切り込みか	畳付釉剥ぎ	９割残存	肥前	18世紀後半



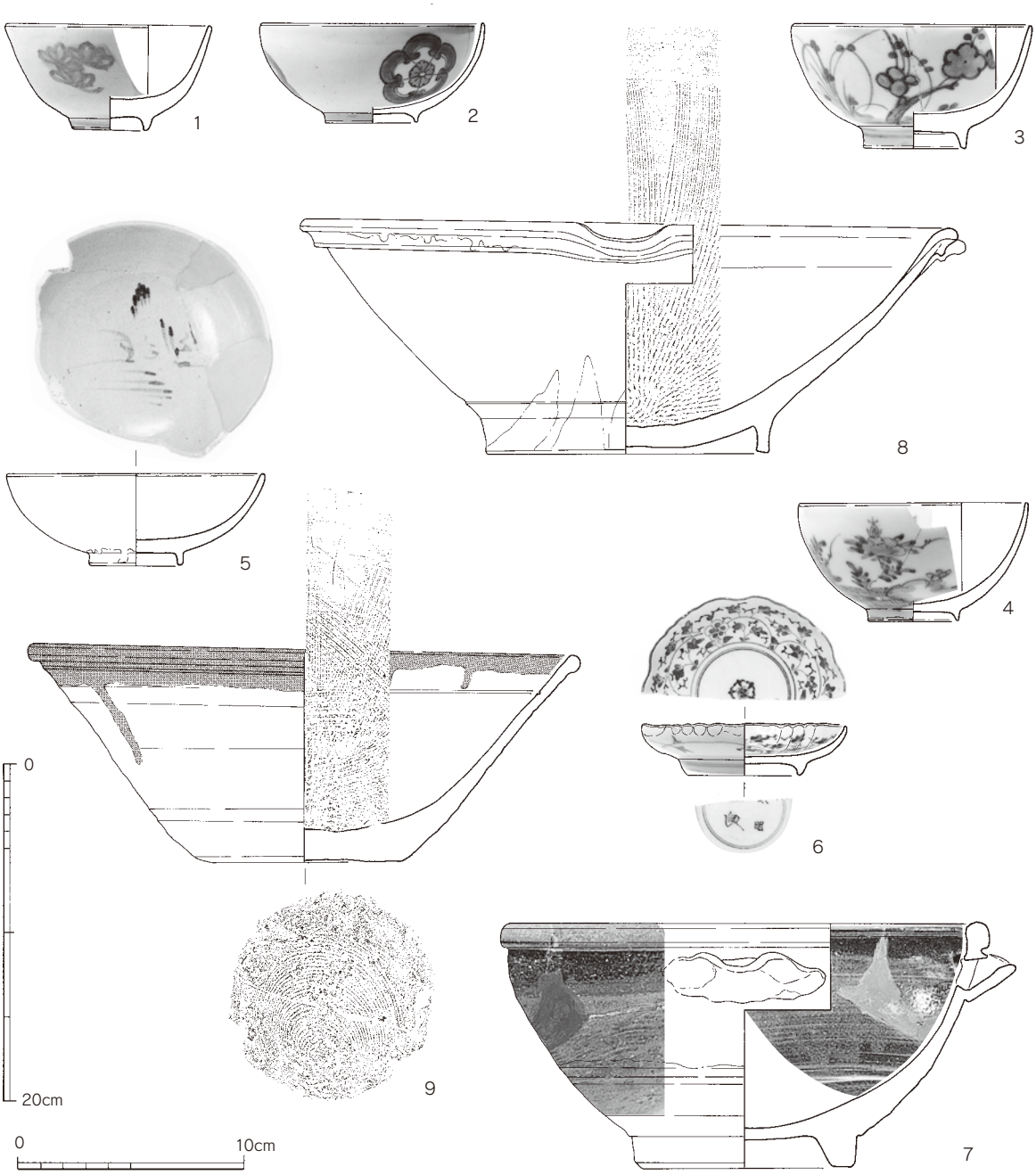
第65図　1次調査3号土坑出土土器・陶磁器実測図2（12は1/6、6～9は1/4、他は1/3）

部に接してないと判断した。70図９は陶器の小型甕で、内面は強く火を受けているが、外面には被熱痕跡がないので、内部で火を使っているとわかる。したがって、火入れかあるいは火消し壺だろう。

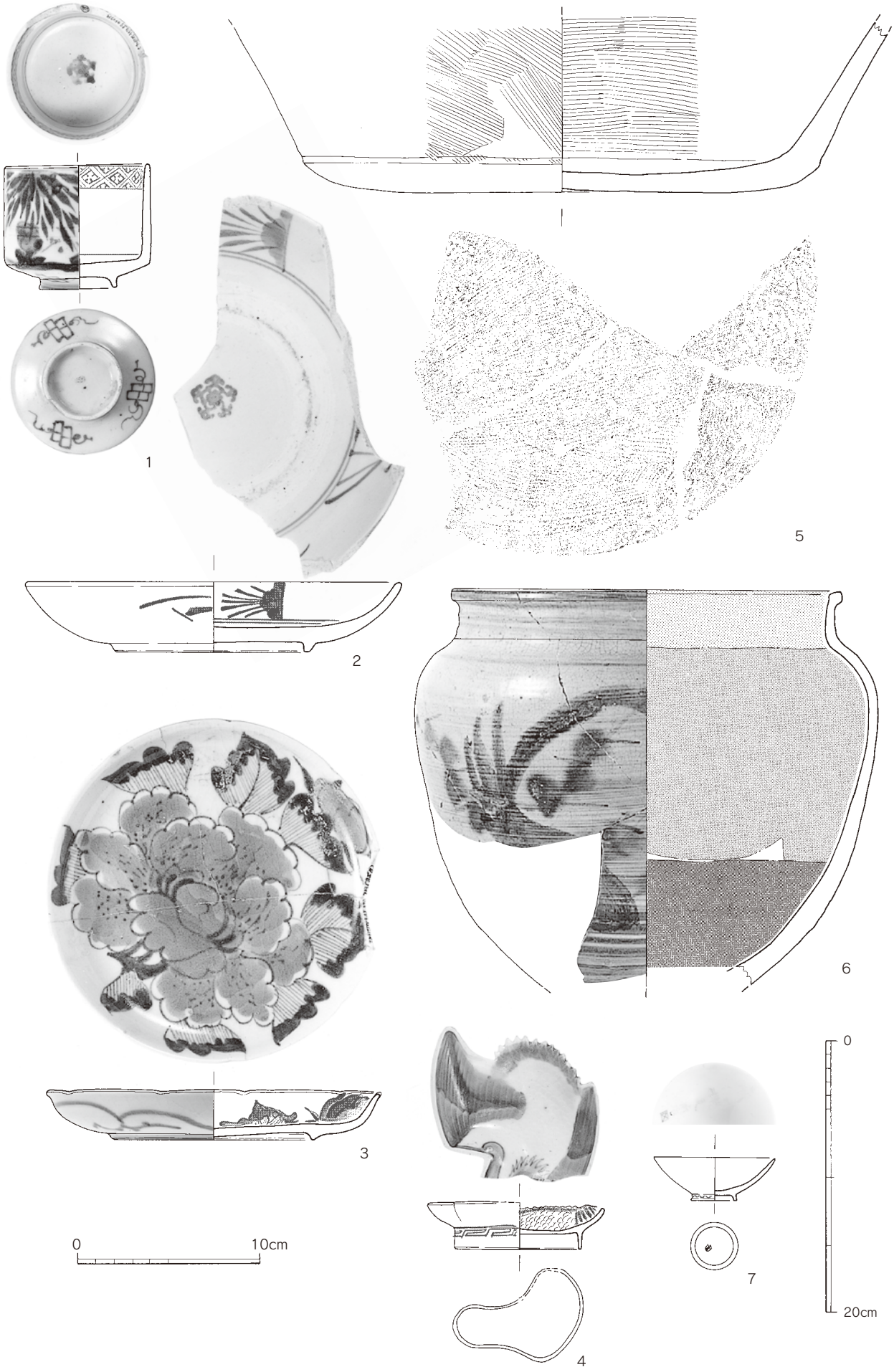
71図４は陶器の燭で、飴釉が内面から外面体部に掛かっているが発色不良のため鉄釉に見える。外底の穿孔は行灯の台座に固定用の釘を打って、そこに挿し込むための釘であろう。

72図6･7は土師質土器の小皿で、６は外面の煤が付着する部分に口縁部の打ち掻きがないが、灯明皿として使用しただろう。７の内面の変色は油によるものではないだろうか。

73図７は陶器の香炉か火入れに使用される小型鉢で、口唇部の釉が部分的に崩落しており、一部黒変しているので、煙草の灰落としに使用したものとわかる。73図８は美濃・瀬戸産の香炉か火入れであろう。



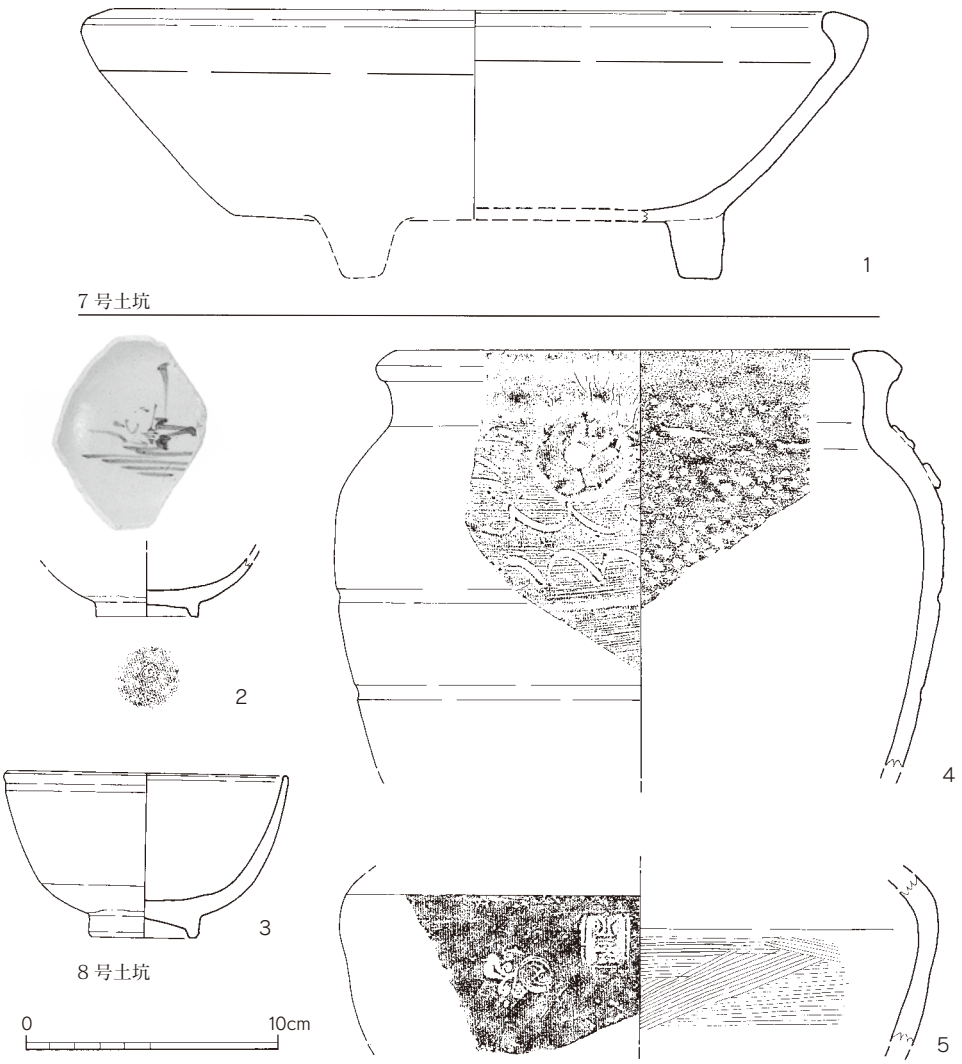
第66図　１次調査４号土坑出土陶磁器実測図(8･9は1/4、他は1/3)



第67図　１次調査５号土坑出土土器・陶磁器実測図(5･6は1/4、他は1/3)

表30　1次調査出土土器・陶磁器観察表3

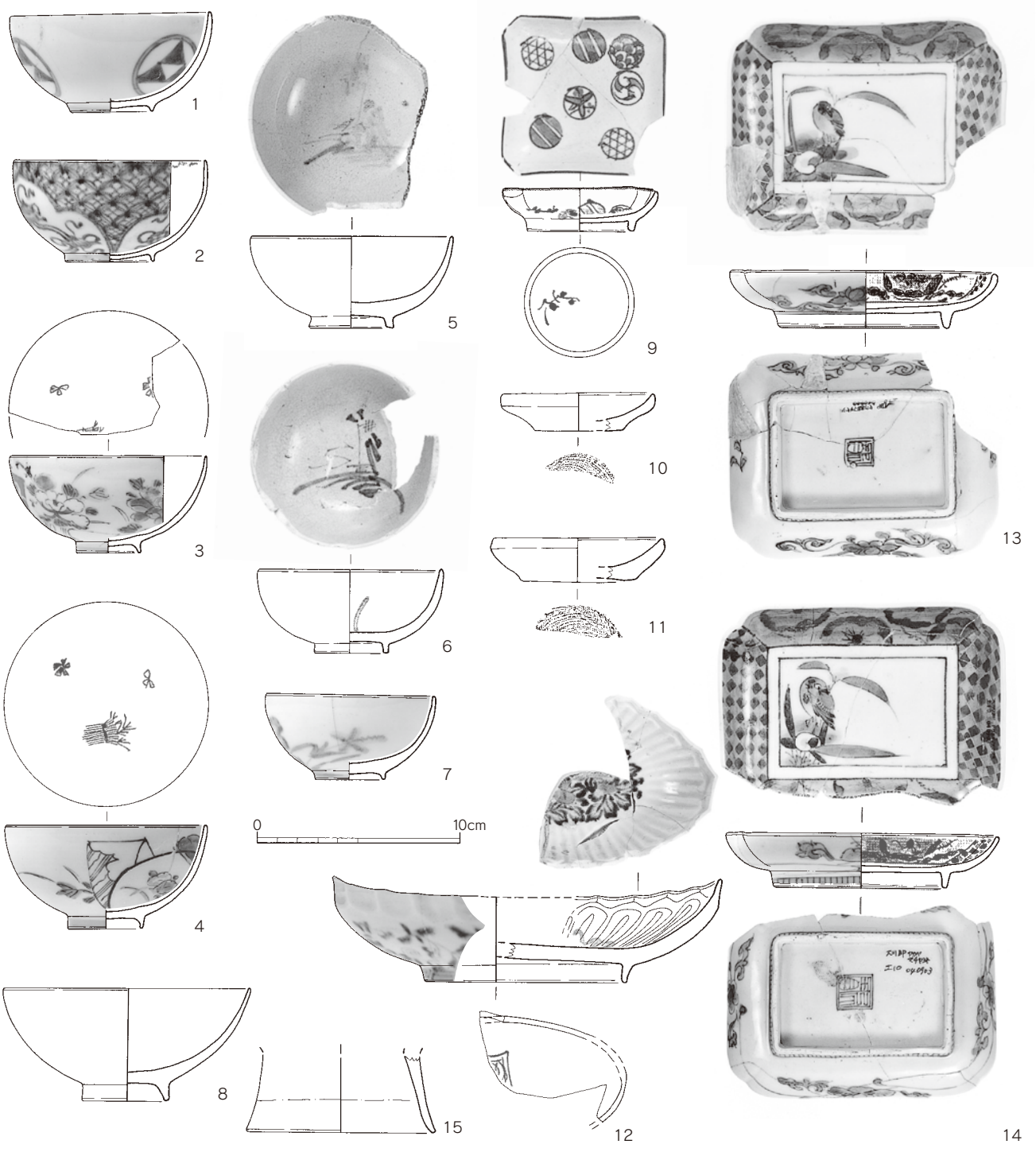
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑5 67図4	小皿 変形小皿 鳥形	短軸9.5 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉　全面	糸切り細工の型押し成型後、尾羽は切り込み体部の羽文は型押しによる陽刻で、それ以外は線描きとダミ　高台外面は雷文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑5 67図5	大甕	底径(38.0)	瓦質土器 にぶい灰色　混入物粒子小さく均一	—	内外面丁寧なハケが底部まで入る	不明	内外面淡灰色で、変色はない	在地	不明
土坑5 67図6	鉢 半胴甕	口径(28.8)	陶器 暗橙褐色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位には白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状掻き取り後、鉄絵と緑灰色の灰釉で松文を上絵付けし、内面頸部以下から胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける最後に内面頸部から外面に透明釉掛け		—		肥前	18世紀後半 〜 19世紀中葉
土坑5 67図7	杯 記念杯	口径(6.7) 高台径2.5 器高2.4	磁器 灰白色　ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で「樽見商店」、その下に柿釉で□にIXと描いている　商店名の右上には2文字あるが、判読できない　その上方に屋号の山形に「タ」が入る　商店名の対面にも文字があるが、「井」だけが判読できる　高台外面の凹凸文と、判読できない裏銘はコバルト染付			瀬戸か	20世紀前半
土坑7 68図1	火鉢	口径(31.0)	瓦質土器 にぶい黄灰色	—	内外ナデ	不明	内面の暗黄灰色は使用変色か	在地か	不明
土坑8 68図2	碗 半球形	高台径4.0	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり　外底に不明の刻印	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 〜 18世紀後葉
土坑8 68図3	碗	口径11.2 高台径4.4 器高6.5	陶器 灰白色	透明釉に近い灰釉を外底以外に掛ける　貫入あり	高台削り出し	底部露胎		肥前	1690 〜 1780
土坑8 68図4	小型甕	口径(20.8) 肩部(20.4)	陶器 紫灰〜にぶい灰色	鉄釉を全面に掛ける	肩部外面はカキ目は、その上に波状文上下に反対に施文し、その上に花弁浮文貼り付け内面は格子目タタキ当て具痕	口唇部中央のみ釉剥		肥前	17世紀後半か
土坑8 68図5	火鉢	最大径(23.6)	土師質土器 にぶい橙灰色が灰白色を挟む	—	外面は丁寧なミガキの上に方形区画に「水田庄」と花付巴文ののスタンプ、内面は丁寧な横ハケのちナデ	不明	胎土はだが、外面は炭素を吸着させているので瓦質土器	水田焼	不明
土坑10 69図1	碗 半球形	口径10.0 高台径4.1 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には三角形に重ねた三角形文で北条家の家紋を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 〜 1750
土坑10 69図2	碗 半球形	口径(9.4) 高台径4.3 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は七宝文地に宝珠形窓文内宝文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 〜 1750
土坑10 69図3	碗 半球形	口径(9.6) 高台径3.1 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は布文・牡丹花文を呉須染付、内面は見込みに花弁文を赤・緑・紫・金彩で上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 〜 1740
土坑10 69図4	碗 半球形	口径10.0 高台径3.8 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には透明釉の上に牡丹花文を赤絵と緑彩で描く　見込みは柴垣文の赤絵	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	1710 〜 1740
土坑10 69図5	碗 半球形	口径(10.0) 高台径4.2 器高4.5	陶器 黄灰白色	透明釉を胴下位以外に掛け　貫入あり	見込みに鉄絵の山水文 外底に円刻	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 〜 1810
土坑10 69図6	碗 半球形	口径9.1 高台径3.7 器高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文あり　外底に螺旋状に円文を線刻	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 〜 18世紀後葉
土坑10 69図7	小碗 半球形	口径8.4 高台径3.4 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面は花草文の呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1750
土坑10 69図8	碗 半球形	口径(12.2) 高台径4.3 器高5.5	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	無文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 〜 1810
土坑10 69図9	小皿 変形小皿 方形	一辺7.6 高台径5.3 器高2.2	磁器 灰白色	発色悪く乳白色の透明釉　全面掛け	糸切り細工の型押し成型で、見込みに丸文散らしと外面胴部と外底に枝葉文を呉須染付 口唇部に口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑10 69図10	小皿	口径(7.4) 底径(4.4) 器高1.8	土師質土器 淡橙灰色	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	内面の黒変は使用によるものか不明	蒲池焼	不明
土坑10 69図11	小皿	口径(8.4) 底径(5.5) 器高2.1	土師質土器 黄灰白色	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	変色なし	蒲池焼	不明
土坑10 69図12	鉢 変形	長軸(19.8) 短軸不明 器高5.5	磁器 灰白色	青みのある透明釉全面掛け	糸切り細工の型打ち成型　外面花唐草文、高台は雷文帯、内面は胴部に花弁の陽刻、見込みに牡丹花文、外底の裏銘は「福」らしいコバルト染付　内面には赤と緑彩色の上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑10 69図13	小皿 変形小皿 方形	長軸8.6 短軸5.4 器高2.6	磁器 暗灰色	透明釉　全面	糸切り細工の型押し成型で、内面長辺側は芙蓉文、短辺側は市松文、見込みは草に鳥、外面は牡丹唐草文、高台に凹凸文、裏銘は不明文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑10 69図14	小皿 変形小皿 方形	長軸8.6 短軸5.4 器高2.6	磁器 暗灰色	透明釉　全面	糸切り細工の型押し成型で、内面長辺側は芙蓉文、短辺側は市松文、見込みは草に鳥、外面は牡丹唐草文、高台に凹凸文、裏銘は不明文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑10 69図15	台付皿	裾径9.2	陶器 黄灰白色	透明釉を裾以外に全面掛け	無文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 〜 1810



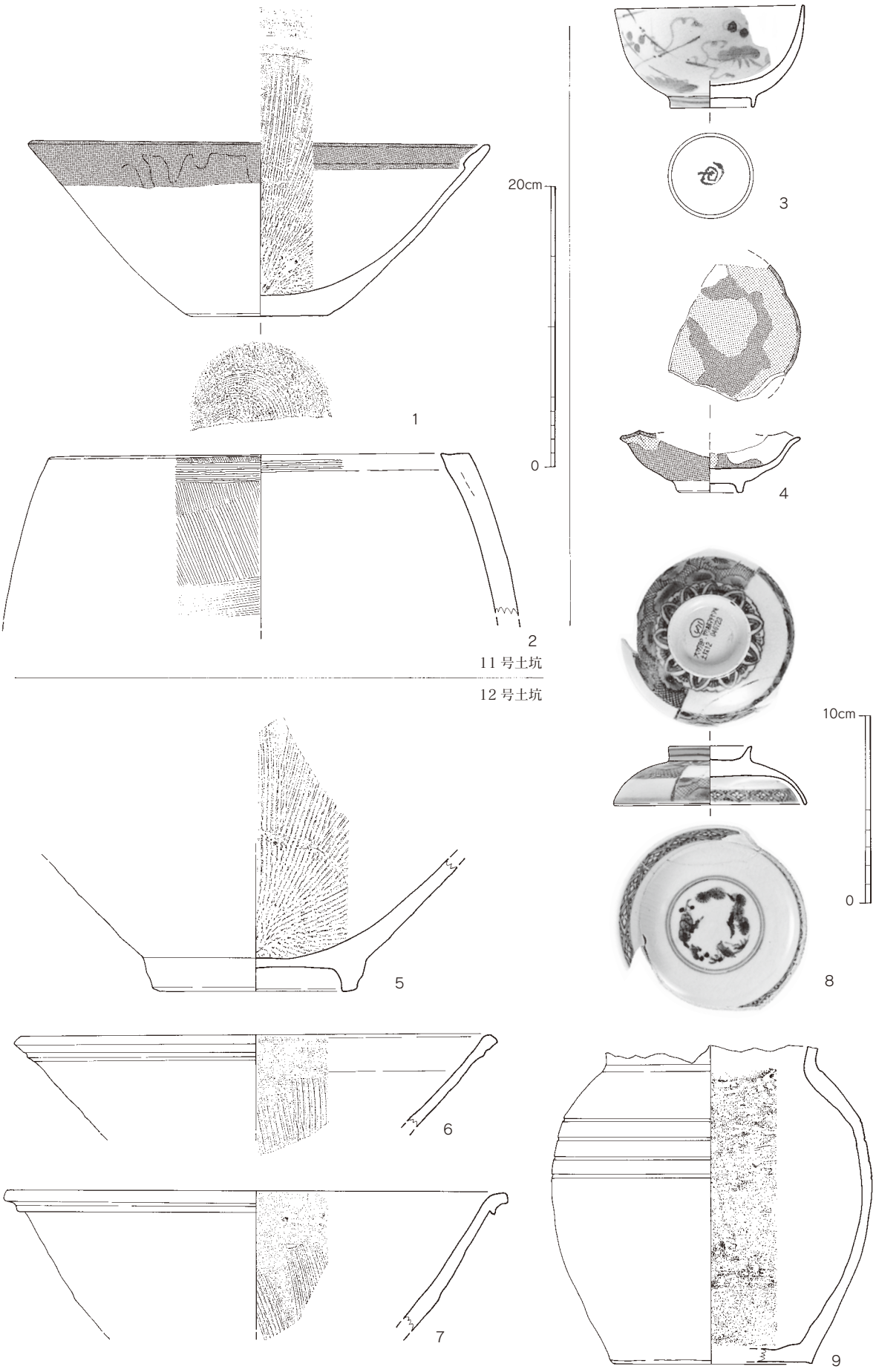
第68図　1 次調査 7 ・ 8 号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

74図 3 は土師質土器の小皿で、赤変している部分があるのは焼塩壺の蓋であるからだろう。外底には胎土目跡が 3 ヶ所に残る。74図 6 の見込みには重ね焼きの痕跡が残る。74図 6 は陶器の摺鉢で、胎土から小石原焼と推定できる。

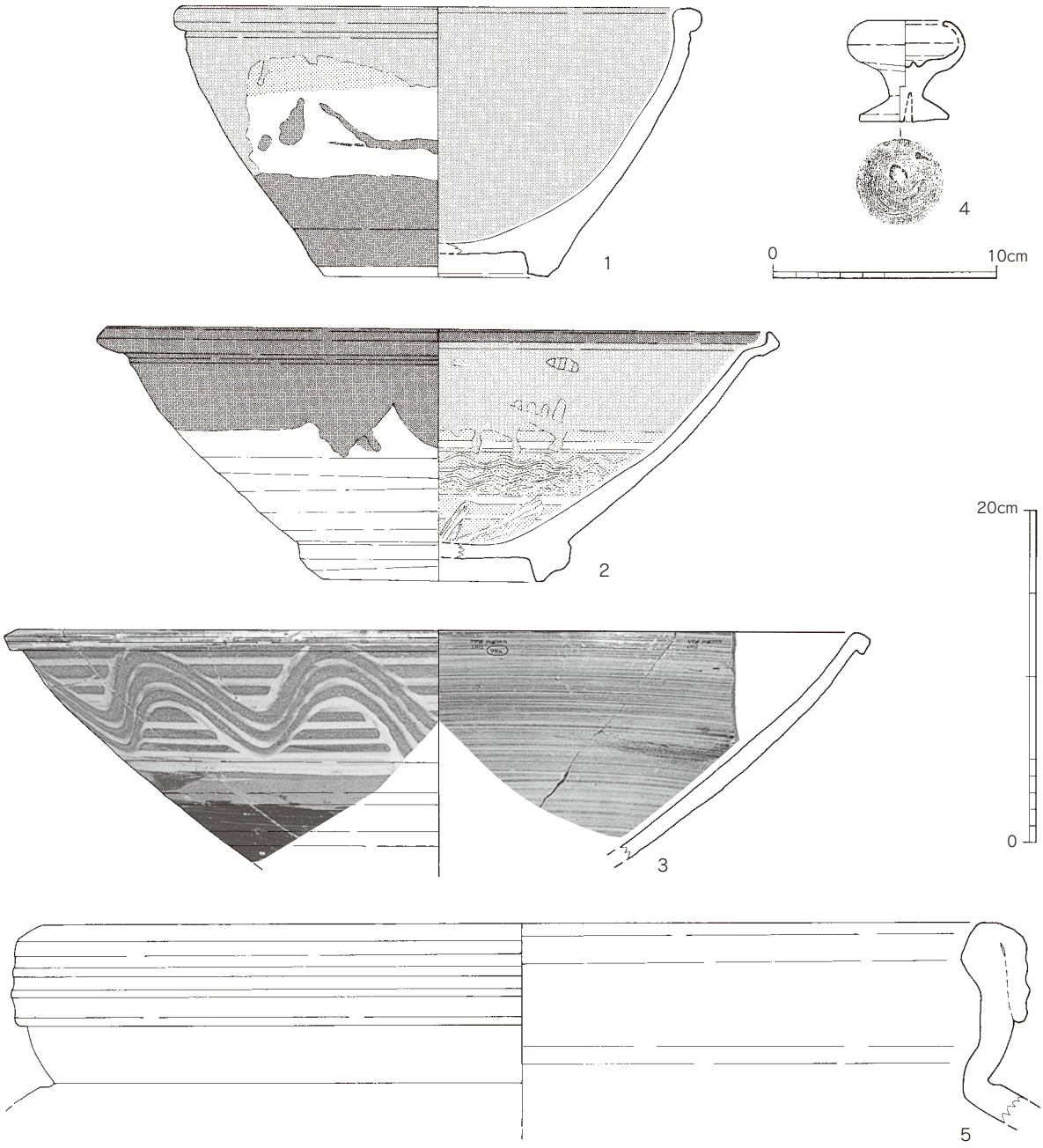
75図 8 は土師質土器の小皿で、内面は口縁下に煤が付着し、その下は油による変色と見られ、灯明皿として使用されたことがわかる。75図13は施釉作業の最後に通常は掛ける透明釉を掛けないので、白化粧土が剥落している。75図17は陶器の鉢で、外面口縁下に格子目タタキがわずかに残るのは、口縁の突帯の下にほとんど隠れることから、接合のために貼り付け部に施したものであろう。



第69図　1次調査10号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)



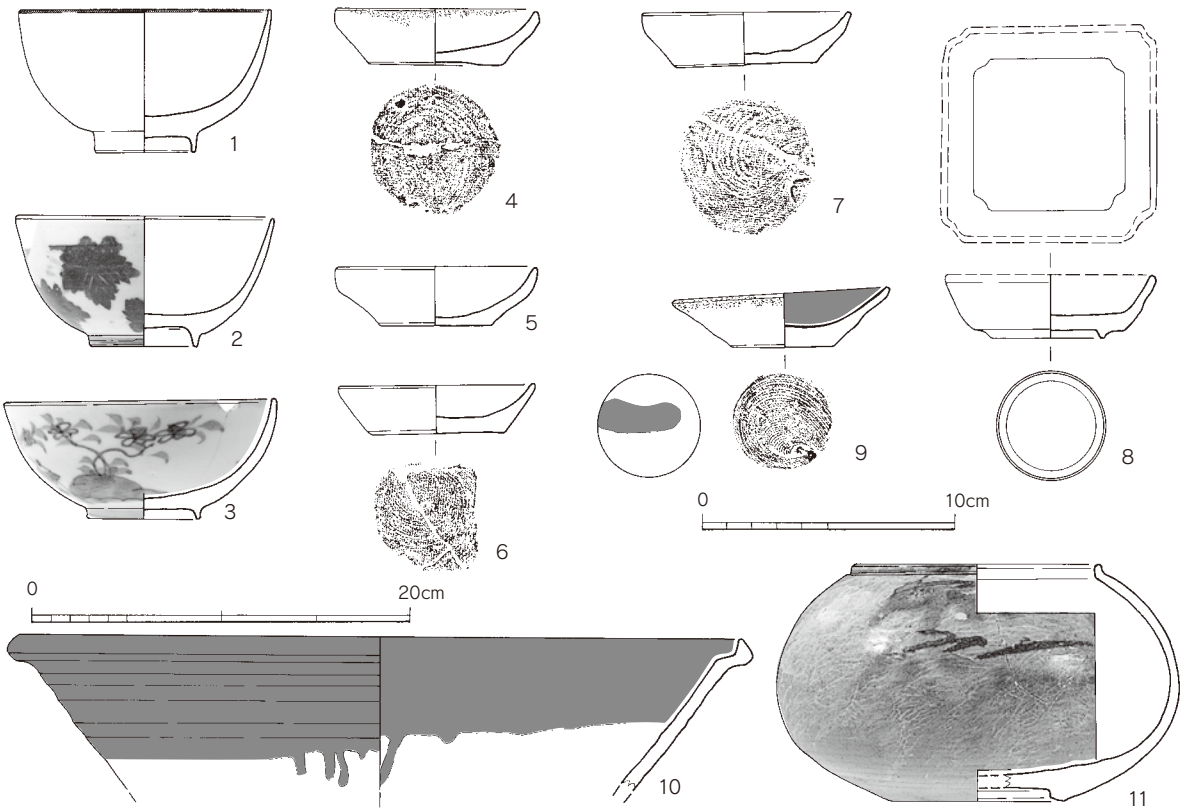
第70図　1 次調査11・12号土坑出土土器・陶磁器実測図(1･2･5～7は1/4、他は1/3)



第71図　1次調査12号土坑出土陶器実測図(2･3･5は1/4、他は1/3)

表31　1次調査出土土器・陶磁器観察表4

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑11 70図1	摺鉢	口径(32.9)	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉 発色不良	内面摺り目12本単位　外底糸切り	底部露胎　輪トチらしい胎土目跡あり		肥前	1650 ～ 1690
土坑11 70図2	焜炉	口径(30.0)	土師質土器	—	外面丁寧なハケ　内面は煤が付着し、調整がほとんどわからないが、口縁部のみハケとわかる	不明	内面の煤は口縁下に厚く付着し、口縁部は煤が付着していない	在地	不明
土坑12 70図3	碗	口径(10.1) 高台径4.5 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け　貫入あり	外面は花・竹・垣根文　裏銘は渦福　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1740
土坑12 70図4	小皿 花弁形	口径(9.6) 高台径3.5 器高3.3	陶器 灰色	型打ち成型　飴釉を全面に掛け、その上に藁灰釉を流し掛け		—		小石原	不明
土坑12 70図5	摺鉢	高台径14.4	陶器 茶褐色	鉄釉を全面に掛ける	外面ケズリ　摺り目は単位不明	畳付釉剥ぎ後砂目付着　見込みに環状重ね焼き痕		肥前か	1750 ～ 1860
土坑12 70図6	摺鉢	口径(34.4)	陶器 淡茶褐色	鉄釉を全面に掛ける	外面ナデ　摺り目は単位不明	—		肥前	1690 ～ 1750



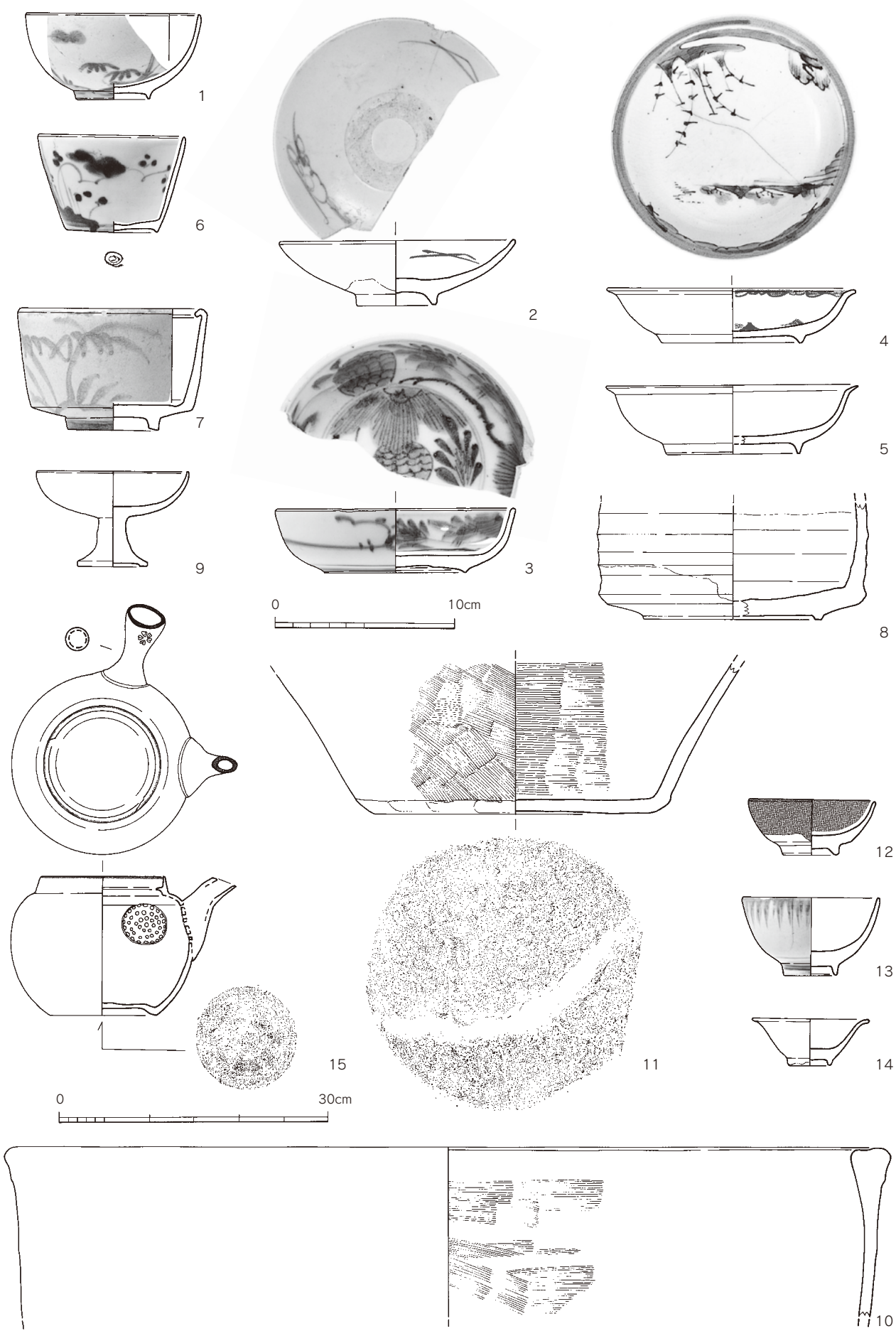
第72図　１次調査14号土坑出土土器・陶磁器実測図(14は1/4、他は1/3)

表32　１次調査出土土器・陶磁器観察表５

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑12 70図７	摺鉢	口径(36.0)	陶器 淡茶褐色	鉄釉を全面に掛ける	外面ナデ　摺り目は単位不明	—		肥前	1750 ～ 1860
土坑12 70図８	蓋	裾径(11.0) つまみ径4.4 器高3.1	磁器 灰白色	透明釉　全面貫入あり	外面は胴下位と中位は、格子文地に半花輪文帯と白地が交互に入る　上位は花葉文帯 内面裾部は四方襷文帯で、内面天井部に環状梅樹文呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	1740 ～ 1780
土坑12 70図９	小型甕	肩部(17.0) 底径10.8	陶器 外面は橙灰、内面はにぶい灰色	鉄釉を全面に掛ける	外面はナデ後肩部にカキ目状沈線、内面は格子目タタキ当て具痕	外底部に胎土目跡残る	口縁部は鋸歯状に打ち欠いている	肥前	17世紀後半か
土坑12 71図１	片口鉢	口径(23.6)	陶器 暗紫灰～橙灰色	外面上位～中位は白化粧土掛けし、その後下半に鉄釉ハケ掛け、外面口縁部から内面は褐色の灰釉掛け　高台は削り出し		畳付と口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
土坑12 71図２	鉢	口径(40.8) 高台径16.2 器高15.1	陶器 にぶい暗橙灰色 混入物あり	外面胴部上半ナデで、鉄釉掛け、下半はケズリによる釉剥ぎ 内面白化粧土をハケ掛けした後、櫛状と帯状の掻き取り　上半分は飴釉流し掛け		底部露胎 高台に胎土目跡４つ付着		肥前	1690 ～ 1750
土坑12 71図３	大鉢	口径(52.0)	陶器 橙褐色	外面下位に鉄釉をハケ掛けし、外面上半分に白化粧土を塗布して帯状掻き取りし、内面は白化粧土をハケ掛け　内面は緑彩と鉄絵のモチーフを上絵付けし、最後に内面から外面に発色不良の透明釉掛け		—		肥前	1690 ～ 1750
土坑12 71図４ 図版16	秉燭	口径3.3 底径4.0 器高4.5	陶器 完形のため不明	発色不良の飴釉が内面から外面体部に掛かる	外底糸切り　芯立欠損　内外面ナデ	底部露胎　胎土目跡あり	完形	小石原か	不明
土坑12 71図５	大甕	口径(61.0)	陶器 淡灰色	鉄釉を全面に掛ける	内外ナデ　口縁部は外側に折り曲げて肥厚させている	—		肥前	17世紀後半か
土坑14 72図１	碗	口径(10.0) 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文　口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1740
土坑14 72図２	碗	口径(10.1) 高台径4.1 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け貫入あり	外面は桐文のコンニャク印判刷り　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1700
土坑14 72図３	碗 半球形	口径(10.8) 高台径4.5 器高4.8	磁器 灰白色	透明釉全面掛け貫入あり	外面は花樹文・祠堂文　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
土坑14 72図４	小皿	口径8.0 底径5.2 器高2.2	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	内面は油による変色、外面は口縁部に煤付着しているので灯明皿として使用	在地	不明

表33　1次調査出土土器・陶磁器観察表6

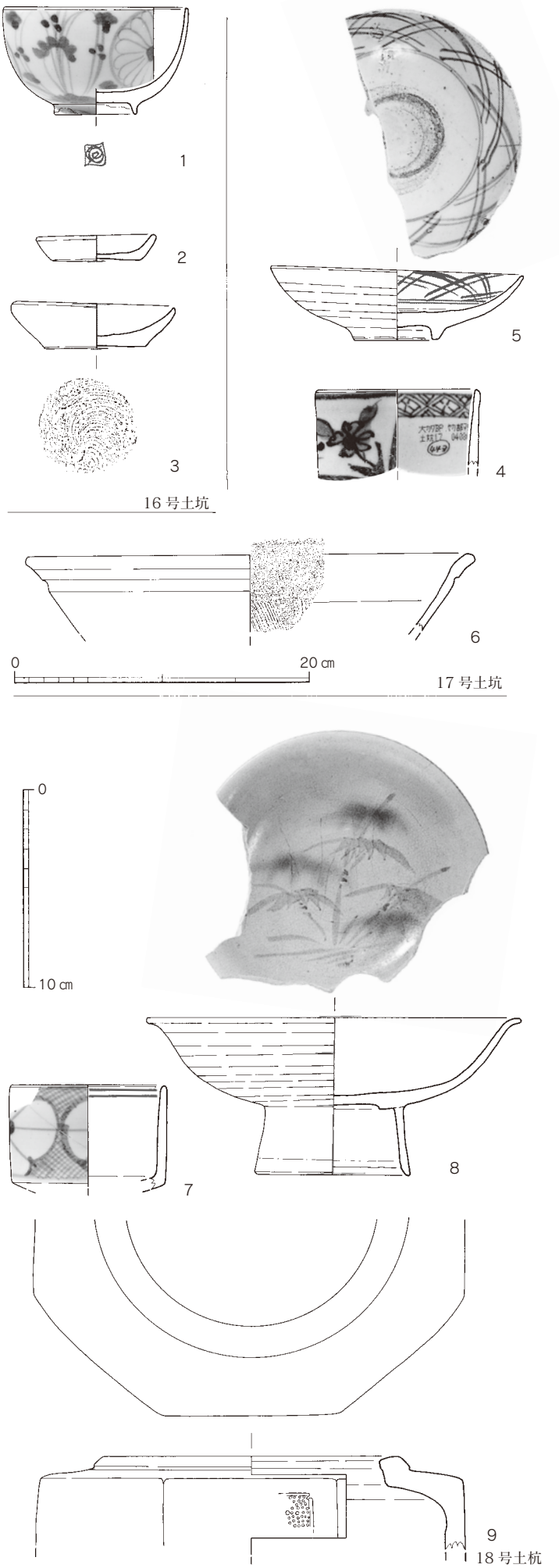
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑14 72図5	小皿	口径8.0 底径4.3 器高2.3	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切りの摩滅	不明	変色なし	蒲池焼	不明
土坑14 72図6	小皿	口径(7.8) 底径5.2 器高1.9	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	内面底部と外面の一部に煤付	在地	不明
土坑14 72図7	小皿	口径8.3 底径5.4 器高2.0	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切りの摩滅	不明	口縁部に煤が付着し、内面も変色していると見られ、灯明皿としての使用とわかる	在地	不明
土坑14 72図8	小皿 変形小皿 方形	高台径4.2 器高(2.5)	陶器 灰白色	透明釉を外底以外全面に掛ける　貫入あり	糸切り細工の型押し成型で、外底削り出し　貫入を意匠している	底部露胎		瀬戸	19世紀後半か
土坑14 72図9	小皿	口径8.3 底径4.1 器高2.4	陶器 内面灰色、外面橙色	鉄釉を内面から外面中位まで	外底は糸切り	底部アルミナ塗を厚く塗布	外面口縁部に煤付着　外底の墨書状のものは鉄釉か	肥前	1690 〜 1750
土坑14 72図10	大鉢	口径(39.6)	陶器 暗紫褐〜茶褐色	内面に白化粧土を塗布して帯状掻き取りし、内外面口縁部に鉄釉を厚く掛ける		—		肥前	1750 〜 1860
土坑14 72図11	土瓶	口径(9.8) 底径(6.8) 器高9.3	陶器 にぶい暗淡黄灰色　精良	外底は削り出しで碁笥底状　白化粧土を胴中位の一部に打ちハケ目掛けし、鉄絵の竹笹文を描いた後、緑灰色の灰釉で竹笹文を上書きする　最後に外面口縁部から胴下位に透明釉掛け		底部露胎　口唇部と内面口縁部は釉剥ぎ	内面使用変色ほとんどなし	肥前	不明
土坑15 73図1	碗 半球形	口径(9.8)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には竹文のみ見えるが、松竹梅文だろう　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 〜 1750
土坑15 73図2	小皿	口径13.1 高台径4.4 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面に折松葉文と菊花文を呉須染付	胴下位露胎 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕	波佐見	17世紀後半
土坑15 73図3	皿	口径13.4 高台径7.4 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 貫入あり	口縁部は低い山形　外面唐草文、内面は松ボックリと松の枝葉文を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	松文はアップで写実的に描かれている	肥前	18世紀後半
土坑15 73図4 図版16	5寸皿	口径13.9 底径7.8 器高3.1	磁器 完形のため不明	透明釉　全面　貫入あり	外面無文、内面に山水文、口唇部に口錆状の呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形 歪みあり	不明	18世紀前半
土坑15 73図5	小皿 5寸皿	口径(14.0) 高台径7.6 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1740
土坑15 73図6	猪口	口径8.2 高台径5.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面竹文、裏銘渦福の呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着	歪みあり	波佐見か	1700 〜 1780
土坑15 73図7	香炉・火入	口径(10.5) 高台径5.1 器高6.7	陶器 黄灰白色	外面胴上半に鉄絵の竹笹文を描いた後、透明釉掛け 外底に円の幅広い線刻		胴下半以下露胎	京焼風陶器	肥前	不明
土坑15 73図8	鉢	高台径(9.8)	陶器 灰白色 粗放	透明釉を外面胴中位以上に掛ける 貫入あり	外底ケズリ	底部露胎	内面変色なし	瀬戸	19世紀後半か
土坑15 73図9	仏飯器	口径(8.5) 裾径3.9 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	無文	底面釉剥ぎ		肥前	1690 〜 1780
土坑15 73図10	大甕	口径(100.6)	土師質土器 灰白色 混入物少ない	—	外面観察不能　内面細かいハケ	不明	変色なし	在地	不明
土坑15 73図11	大甕	底径35.5	土師質土器 淡灰色　白色粒子多く含む	—	内外面目の細かいハケ　内底面ナデ	不明	内外面に変色なし 器面の剥離もない	在地	不明
土坑15 73図12	小碗	口径7.0 高台径3.2 器高3.0	陶器 完形のため不明	鉄釉を内面から外面中位まで	高台削り出し	胴下半露胎	ほぼ完形 鉄釉は厚いところはオリーブ色を呈する	肥前	1690 〜 1780
土坑15 73図13	小碗	口径(7.6) 高台径3.0 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に雨降文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着		波佐見	18世紀中葉
土坑15 73図14	杯	口径6.5 高台径2.4 器高2.6	磁器 白磁釉	透明釉全面掛け	無文　口錆	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 〜 1740
土坑15 73図15 図版16	急須	口径6.7 底径5.7 器高7.7	陶器 完形のため不明	無釉の焼き締め陶器	型作りで、外底は布目痕残る 口唇部や注口の先端、把手の先端など鉄釉が掛かる	不明	ほぼ完形	不明	不明
土坑16 74図1	碗 半球形	口径(9.2) 高台径4.1 器高5.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は花唐草文地に菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1750
土坑16 74図2	小皿	口径6.0 底径4.4 器高1.3	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	変色なし	在地	不明



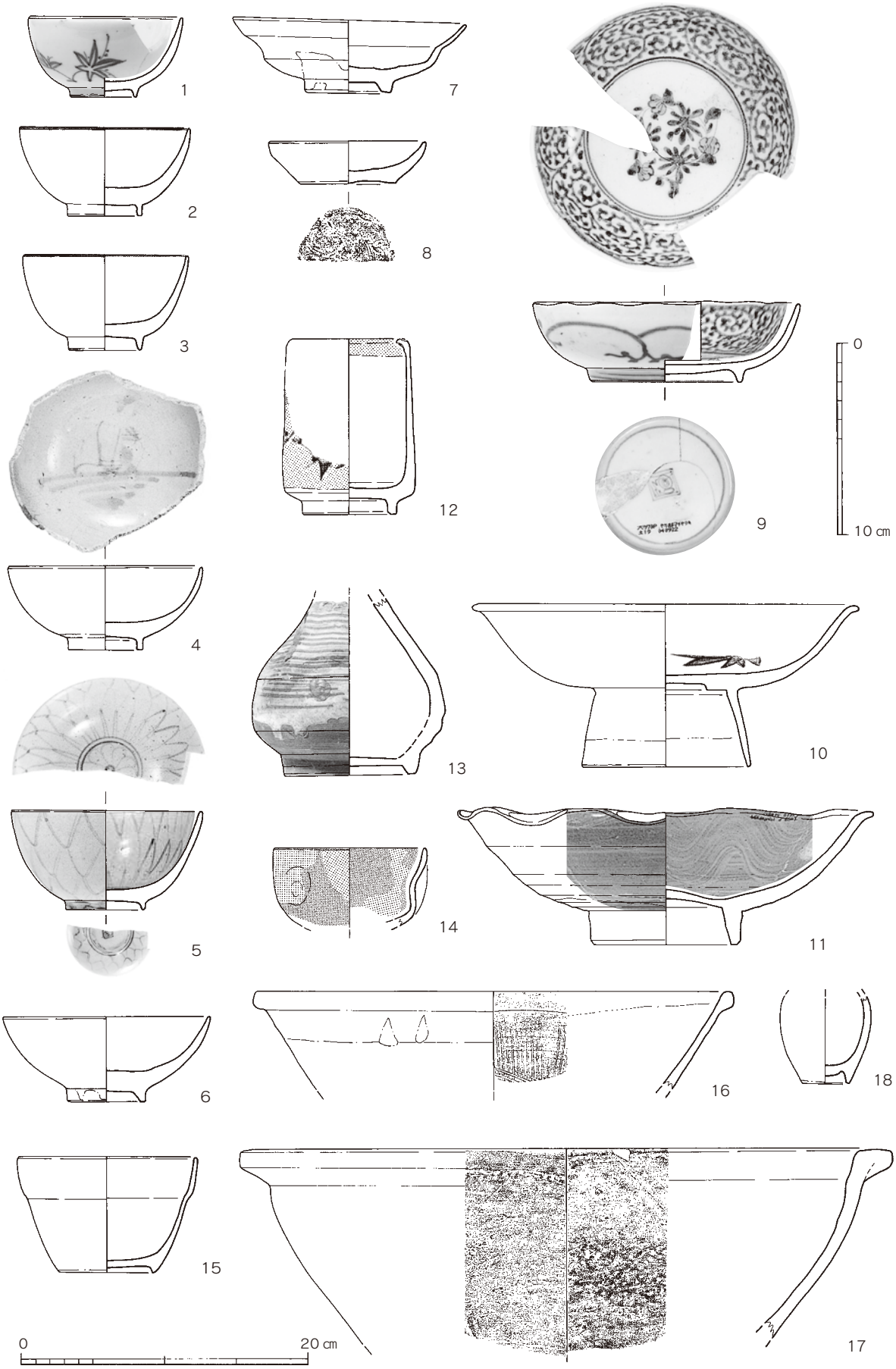
第73図　1次調査15号土坑出土土器・陶磁器実測図(10・11は1/6、他は1/3)

表34　1次調査出土土器・陶磁器観察表7

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑16 74図3	小皿	口径8.0 底径4.8 器高2.4	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	内外底部が赤変している	蒲池焼	不明
土坑17 74図4	碗 筒形	口径(8.4)	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	外面は草花文、内面口縁部四方襷文帯を呉須染付	—		肥前	18世紀後半
土坑17 74図5	小皿 5寸皿	口径12.8 高台径4.4 器高3.8	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面に二重網目文を呉須染付に	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕と融着片あり	波佐見	1750 ～ 1770
土坑17 74図6	摺鉢	口径(30.4)	陶器 黄橙灰色 粗放	鉄釉を全面に掛ける	外面ナデ　摺り目は単位不明	—		小石原	1750 ～ 1860
土坑18 74図7	碗 筒形	口径(8.0)	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	外面は格子目文地に菊花文を呉須染付	—		肥前	1780 ～ 1810
土坑18 74図8	台付皿	口径(19.0) 高台径9.8 器高8.0	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵と緑灰色の灰釉の竹笹文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
土坑18 74図9	火鉢	口径(14.8)	瓦質土器 灰白色が黒灰色を挟む	—	外面は型押しによる方形区画内に珠文の陽刻、内面はナデ、外面区画の窓枠はミガキ小片だが、8角形に復元できる	—		在地	不明
土坑19 75図1	小碗	口径8.0 高台径3.5 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に楓文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀中葉
土坑19 75図2	碗	口径(8.9) 高台径3.9 器高4.6	磁器 白磁釉	透明釉全面掛け	無文　口錆あり	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
土坑19 75図3	小碗	口径8.6 高台径3.8 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文　口錆あり	畳付釉剥ぎ	厚手なので波佐見だろう	波佐見	1680 ～ 1740
土坑19 75図4	碗 半球形	口径(10.0) 高台径3.9 器高4.4	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり　外底に螺旋状に円文を線刻	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
土坑19 75図5	碗	口径9.8 高台径4.1 器高5.1	磁器 暗灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面二重網目文と内面網目文、見込み菊花文、裏銘渦福の呉須染付	畳付釉剥ぎ	釉溜まりあり	波佐見	1750 ～ 1770
土坑19 75図6	碗	口径10.8 高台径4.1 器高4.0	陶器 暗紫灰色	発色不良のオリーブ色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける 高台内削り出し		見込みに蛇の目釉剥ぎ　底部露胎		肥前	不明
土坑19 75図7	小皿	口径12.2 高台径4.6 器高3.6	陶器 暗紫灰色	発色不良のオリーブ色の灰釉を内面から外面胴中位に掛ける 高台内削り出し		見込みに蛇の目釉剥ぎ　底部露胎		肥前	不明
土坑19 75図8	小皿	口径8.2 底径5.2 器高2.1	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	内面は口縁下に煤付着、その下は油変色、外面は煤付着なし	在地	不明
土坑19 75図9	小皿 変形小皿 花弁形	口径14.0 高台径8.1 器高4.1	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面	型押し成型で、内面は蛸唐草文、外面側は唐草文、見込みは菊花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑19 75図10	台付皿	口径(20.2) 高台径8.8 器高8.5	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵と緑灰色の灰釉の竹笹文	底部露胎	京焼風陶器	肥前	1780 ～ 1810
土坑19 75図11	皿 花弁口縁	口径(21.6) 高台径7.6 器高7.1	陶器 暗灰褐色	外面胴上半と内面は白化粧土櫛状掻き取り、緑灰色の灰釉を掛ける 花弁は手で成型		底部露胎　見込みに環状の砂目付着 見込み蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕あり	外底が上がっているのは窯道具のためか	肥前	不明
土坑19 75図12	灰吹き	口径(6.4) 高台径4.9 器高9.2	陶器 淡橙色	外面胴下位から内面口縁部に白化粧土を掛け、外面胴部に鉄絵を入れた後、透明釉を白化粧土と同じ範囲に掛ける		胴下位屈曲部以下は釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	1740 ～ 1780
土坑19 75図13	仏花瓶 変形	高台径7.0 最大径10.1	陶器 橙灰褐色	外面胴下位は鉄釉ハケ掛け、胴下位から内面頸部まで白化粧土ハケ掛けし、櫛状掻き取り　最後に外面に緑彩の灰釉を流し掛け　灰釉も鉄釉も発色不良		底部露胎	肩部に稜があるのは17世紀後半の特徴	肥前	17世紀後半 ～ 18世紀前半
土坑19 75図14	小碗 拳骨形	口径8.0	陶器 淡橙白色	鉄釉の上に飴釉を掛け、その上に藁灰釉を流し掛け　側面はオサエによる窪みあり		—		小石原	不明
土坑19 75図15	猪口	口径(9.4) 高台径5.0 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文　碁笥底	畳付釉剥ぎ		肥前	17世紀中葉 ～ 18世紀前葉
土坑19 75図16	摺鉢	口径(33.6)	陶器 灰色	鉄釉を口縁部に掛ける	外面ナデ　摺り目は単位不明	—		肥前	1650 ～ 1690
土坑19 75図17	鉢 こね鉢	口径(45.6)	陶器 茶褐色 マーブル手	鉄釉を全面に掛ける	外面格子目タタキ当て具痕ナデ消し、内面は格子目タタキ当て具痕ナデ消しているが部分的に残る	不明	マーブル手の胎だが、鉄釉の釉調は肥前に近い	肥前か	不明
土坑19 75図18	瓶 ミニチュア	高台径2.5	磁器 灰白色 白磁釉	白磁釉を外面に掛ける	無文　高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前	17世紀代



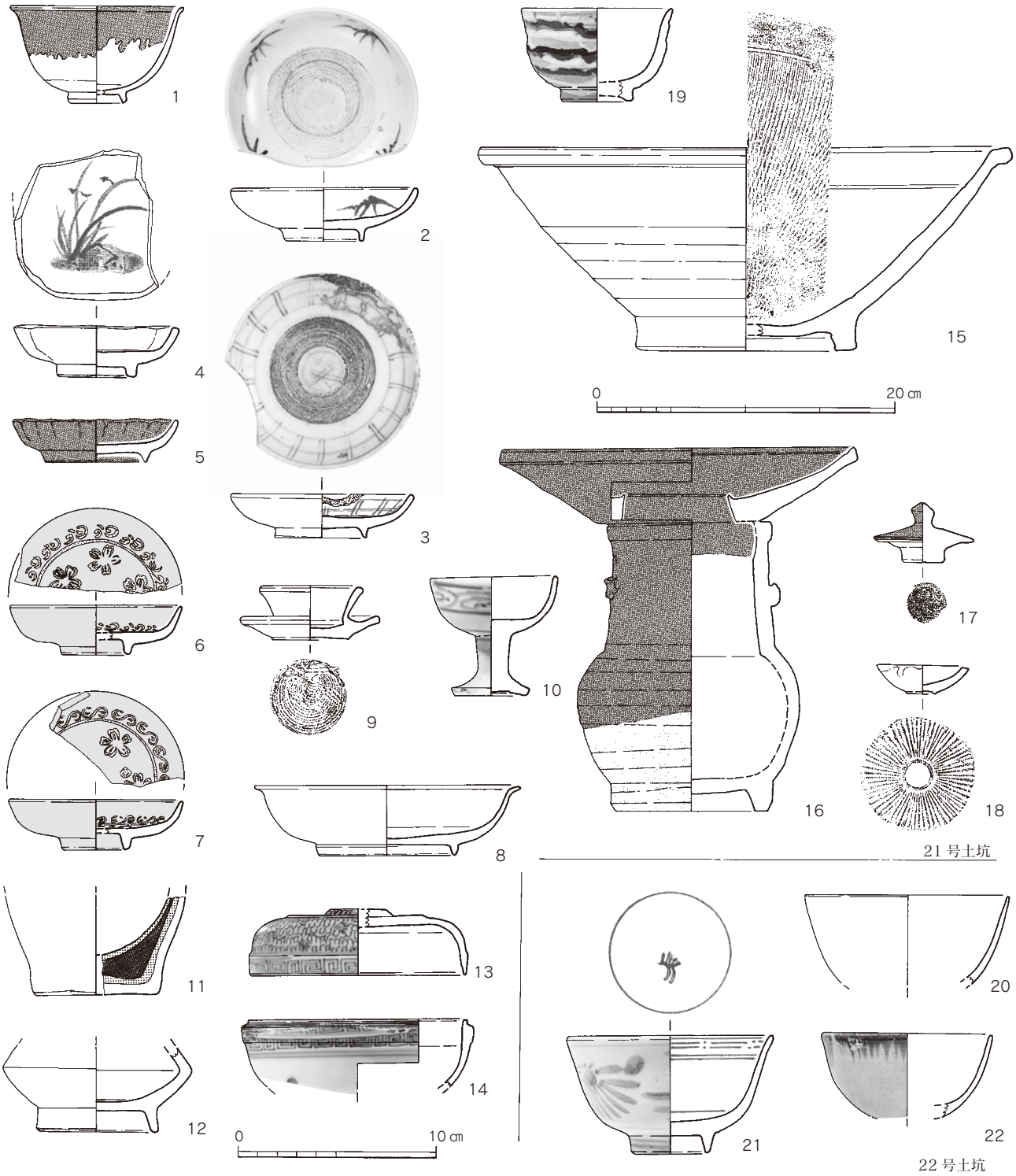
第74図　1 次調査16～18号土坑出土土器・陶磁器実測図（6 は1/4、他は1/3）



第75図　1次調査19号土坑出土土器・陶磁器実測図(16・17は1/4、他は1/3)

表35　1次調査出土土器・陶磁器観察表8

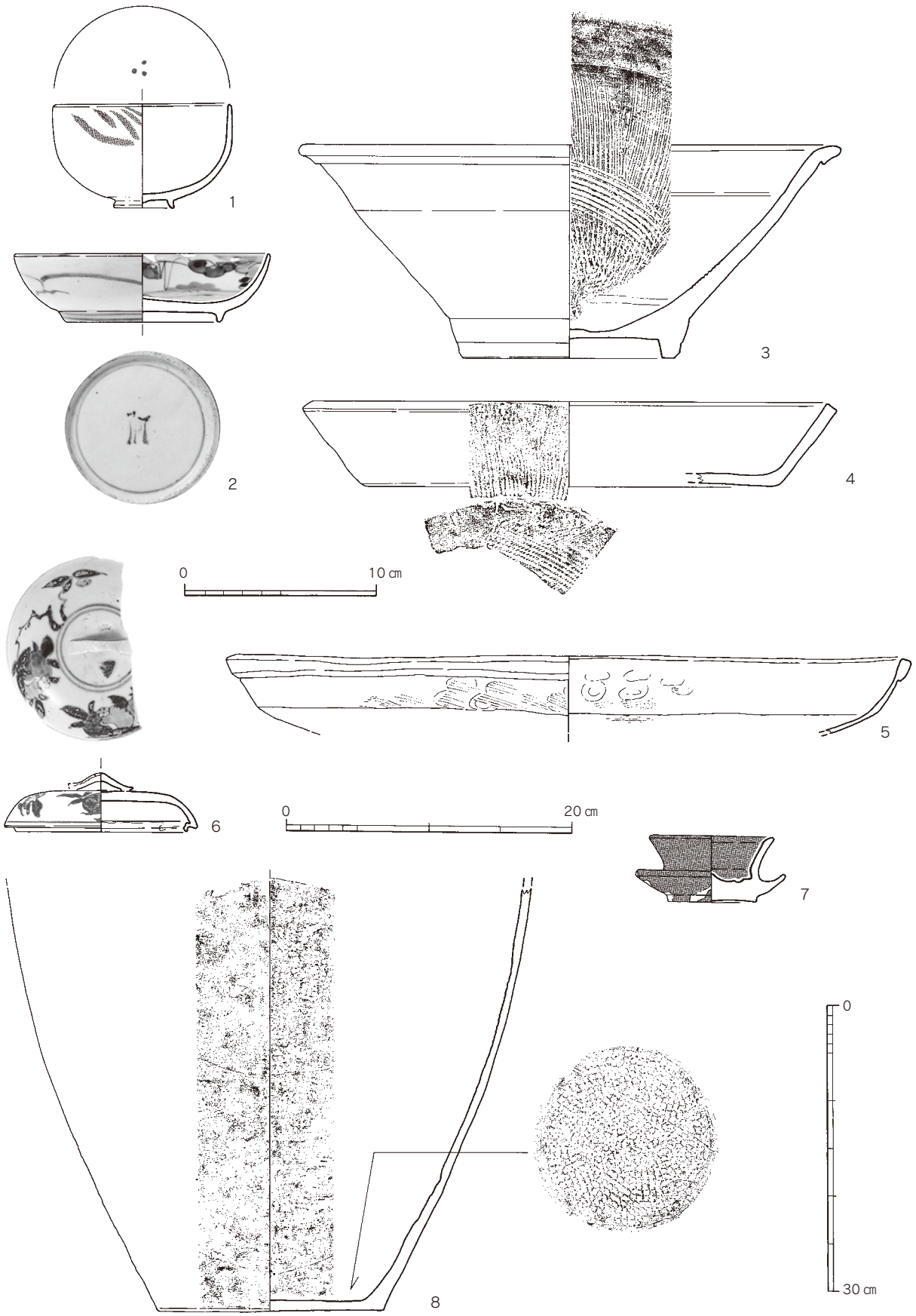
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑21 76図1	小碗 端反形	口径(8.6) 高台径2.8 器高4.9	陶器 黄灰白色	内外口縁部に銅緑釉を掛けた後、透明釉を全面掛け　貫入あり		胴下位釉剥ぎ	透明釉が口縁部と外面胴中位で白く変色している	肥前	19世紀中葉
土坑21 76図2	小皿	口径9.2 高台径3.8 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は竹笹文の呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇の目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕と融着片あり	肥前	19世紀中葉
土坑21 76図3	小皿	口径9.0 高台径4.6 器高2.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面に格子文、見込みに井形文　呉須で染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕　口縁打ち欠き部に煤付	肥前	19世紀中葉
土坑21 76図4	小皿 変形小皿 方形	口径(8.3) 高台径3.9 器高2.6	磁器 灰白色	透明釉　全面　貫入あり	見込みに草文の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑21 76図5	小皿 菊花形	口径(8.2) 高台径(5.2) 器高2.1	磁器 灰白色	瑠璃釉　全面	型打ち成型　口錆	畳付釉剥ぎ		肥前か	不明
土坑21 76図6	小皿	口径(8.5) 高台径(3.5) 器高2.5	陶器 橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、暗いオリーブ色の灰釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け　貫入あり		畳付釉剥ぎ	象嵌のS字文はスタンプ	肥前	不明
土坑21 76図7	小皿	口径(8.7) 高台径(3.4) 器高2.5	陶器 橙褐色	三島手のモチーフを見込みに刻印し、暗いオリーブ色の灰釉を全面掛けた後、印刻部に白化粧土を掛けて、印刻部以外を拭き取って象嵌し、透明釉全面掛け　貫入あり		畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目あり	象嵌のS字文はスタンプ	肥前	不明
土坑21 76図8	小皿	口径(13.2) 高台径7.0 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑21 76図9	灯明受皿	口径(5.2) 最大径7.0 底径3.8	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎 胎土目跡あり	鉄釉は厚いところはオリーブ色を呈する	肥前	不明
土坑21 76図10	仏飯器	口径(6.4) 裾径3.9 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面蛸唐草文呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1780 ～ 1860
土坑21 76図11	焼塩壺	底径(6.4)	土師質土器 にぶい黄灰白色 精良	—	外底摩滅しているが糸切り　内外面ナデ	—	内面から断面赤変し、外面は赤変していない	蒲池焼	不明
土坑21 76図12	瓶 尊形	高台径6.2	陶器 黄灰色	白化粧土を外面に掛けた後、透明釉上掛け　透明釉は発色不良		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
土坑21 76図13 図版16	蓋	裾径11.0 つまみ長軸(3.4) 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は微塵唐草に蝶文、天井部は雲文、口縁部は雷文帯、つまみは三つ葉の浮文貼り付け　呉須染付	受け部釉剥ぎ	75図14の身とセットになる	肥前	19世紀前半
土坑21 76図14 図版16	蓋物	口径11.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は雲文と珠文、口縁部は雷文帯、呉須染付	受け部釉剥ぎ	口縁部に75図13の蓋の裾部片が融着している	肥前	19世紀前半
土坑21 76図15	摺鉢	口径(35.4)	陶器 橙褐色	発色の悪い鉄釉全面掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ 摺り目は27本単位	見込みに蛇の目焼き重ね痕　畳付釉剥ぎ	内面の重ね焼き以下は鉄釉が発色してない	肥前	1750 ～ 1860
土坑21 76図16	瓶 仏花瓶	口径18.1 高台径7.6 器高18.2	陶器 暗紫灰色	鉄漿を外面胴下位にハケ掛けし、鉄釉を外面胴中位から内面頸部に掛ける	耳部は手捏ね成形で、退化しているため本来のモチーフがわからない	底部露胎　畳付から高台内部は砂目付		肥前	不明
土坑21 76図17 図版16	小蓋	裾径9.0 つまみ径1.0 器高2.0	陶器 橙褐色	鉄釉を上面に掛ける 釉切れあり	底部は糸切り	下半釉剥ぎしているが、釉の残りあり	茶入れの蓋か	肥前	不明
土坑21 76図18 図版16	紅猪口 紅皿	口径4.6 高台径1.5 器高1.5	磁器 完形のため不明	白磁釉　内面から外面口縁部	型打ち成型で、外面菊花文	底部露胎	完形	肥前	不明
土坑21 76図19	小碗 端反形 ビラ掛け碗	口径(7.6) 高台径3.6 器高4.1	陶器 にぶい淡黄橙色	内面に長石釉を掛けた後、外面に長石釉を格子状にイッチン掛けし、その上に黒釉を横に3条上掛ける		高台露胎		萩焼	19世紀前半
土坑22 76図20	碗	口径10.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	—		肥前	1700 ～ 1740
土坑22 76図21	碗 端反形	口径10.2 高台径3.8 器高6.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け　発色不良	外面は菊花文・草文　内面は口縁部に2重の1点破線文　見込みは崩れた波文か　呉須染付	畳付釉剥ぎ アルミナ付着		肥前	19世紀中葉
土坑22 76図22	小碗	口径(8.6)	磁器 灰白色	暗い透明釉全面掛け	外面は雨降文の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑23 77図1	碗 腰張形	口径(9.4) 高台径3.2 器高5.5	陶器 黄灰白～暗黄灰色	緑白灰色の灰釉を胴下位以外に掛ける	見込みに青彩で三ッ星文を上絵付け 外面に緑彩と赤彩の上絵付け 口縁部がやや外反する	底部露胎		京焼か	1780 ～ 1810
土坑23 77図2	小皿	口径13.4 高台径8.0 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は崩れた唐草文、裏銘は崩れた「大明年製」、内面胴部は扇形区画文内に鳥文、それ以外は葡萄文、見込みには5弁花文が入る	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740



第76図　1次調査21・22号土坑出土土器・陶磁器実測図(15は1/4、他は1/3)

表36　1次調査出土土器・陶磁器観察表9

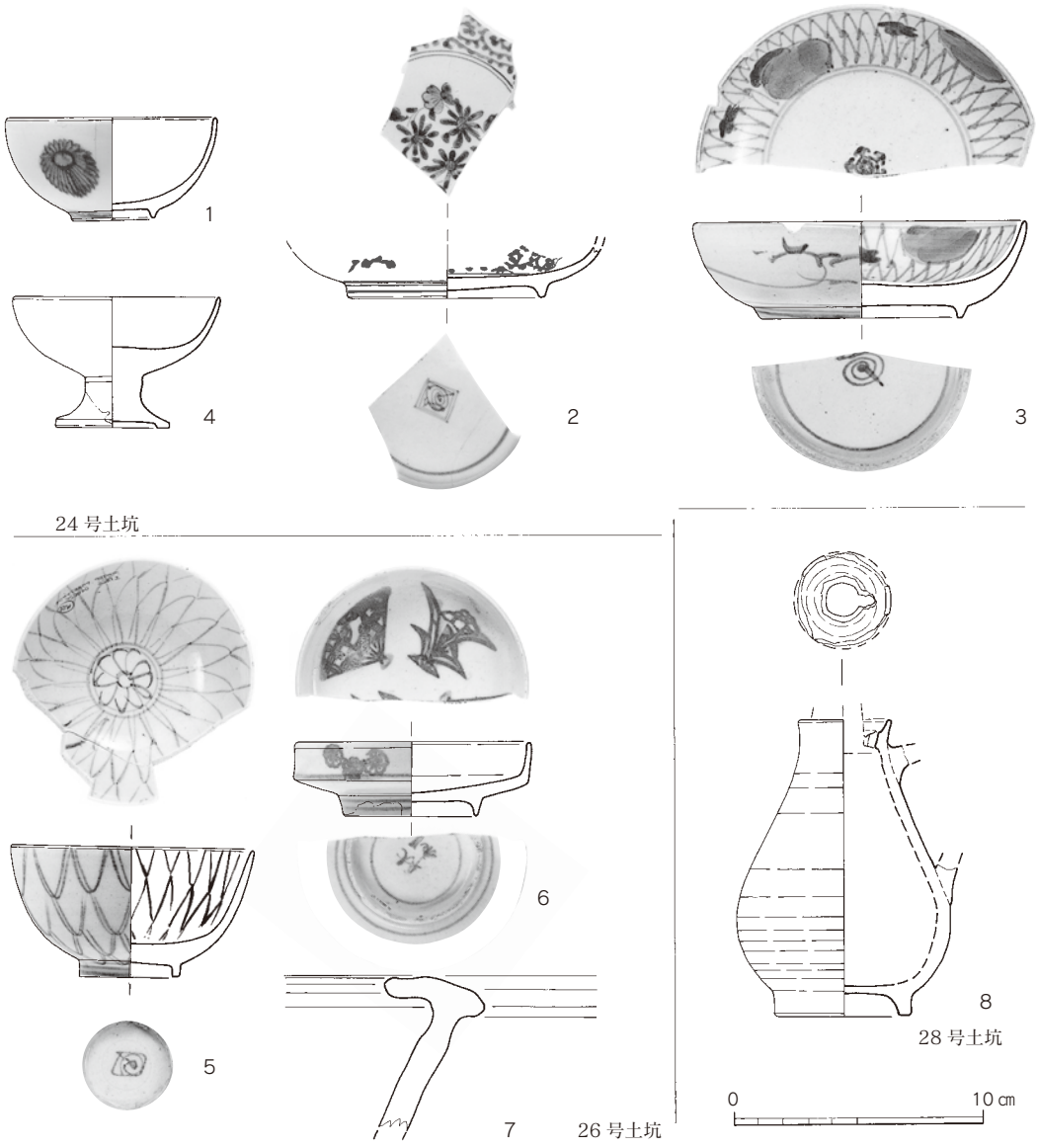
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑23 77図3	摺鉢	口径(37.0) 高台径(14.8) 器高14.9	陶器 橙褐色	鉄釉全面掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ 摺り目は15本単位	見込みに蛇の目焼き 重ね痕　畳付釉剥ぎ 後アルミナ塗布	アルミナは外面高台にも掛かる	肥前	1750 〜 1860
土坑23 77図4	鉢	口径(27.0) 底径(22.0) 器高4.4	瓦質土器　灰白色が黒灰色を挟む　金雲母を含む	—	型内面はハケ状のナデで、外面体部は縦ハケ、外底は目の太いハケと細かいハケが交差する	不明	内底が黒変、外面口縁部が煤付着しており灯明皿だろうか	在地	不明
土坑23 77図5	焙烙	口径(46.6)	土師質土器 にぶい暗黄灰色	—	外面口縁下はオサエ後粗いハケ、外底はナデ、内面は丁寧なナデ	不明	内面は変色なし、外面は煤付着し、全体的に黒変	在地	不明
土坑23 77図6	蓋	裾径9.0 つまみ長軸3.3 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は花木文を呉須染付　つまみは板状で、上面に格子目沈線	受け部釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑23 77図7	灯明受皿	口径(6.5) 最大径7.8 底径4.7	陶器 暗橙褐色	鉄釉を内面から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎		肥前	不明
土坑23 77図8	大甕	底径24.0	陶器 暗紫灰色で灰白色がマーブル状に混じる	鉄釉全面掛け	内外面格子目タタキで、部分的にナデ消し、外底部は調整不明	外底にアルミナ塗布		肥前	17世紀後半



第77図　1次調査23号土坑出土土器・陶磁器実測図(3･5は1/4、8は1/6、他は1/3)

表37　1次調査出土土器・陶磁器観察表10

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑24 78図1	小碗 半球形	口径(8.4) 高台径(3.2) 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には菊花文と胴下位に隅丸雷文帯の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
土坑24 78図2	小皿	高台径7.9	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は唐草文、内面は蛸唐草文、見込みに花文　裏銘渦福の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀中葉
土坑24 78図3 475	小皿 くらわんか手	口径13.4 高台径8.0 器高3.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉　全面掛け	外面は唐草文、内面は網目文と雲文、見込みは5弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着	5割残存　外面は焼けすぎによる変色あり	波佐見	1680 ～ 1740
土坑24 78図4	仏飯器	口径(8.2) 裾径4.6 器高5.2	磁器 灰白色		無文	底部釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
土坑26 78図5	碗	口径9.7 高台径4.0 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に二重網目文と内面網目文、見込みに菊花文、裏銘は渦福の呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着		波佐見	1750 ～ 1770
土坑26 78図6	小皿	口径(9.5) 高台径5.4 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は3つで1セットの花文、見込みは菖浦文と扇文のコンニャク印判刷り、裏銘は「大明年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	1700 ～ 1740

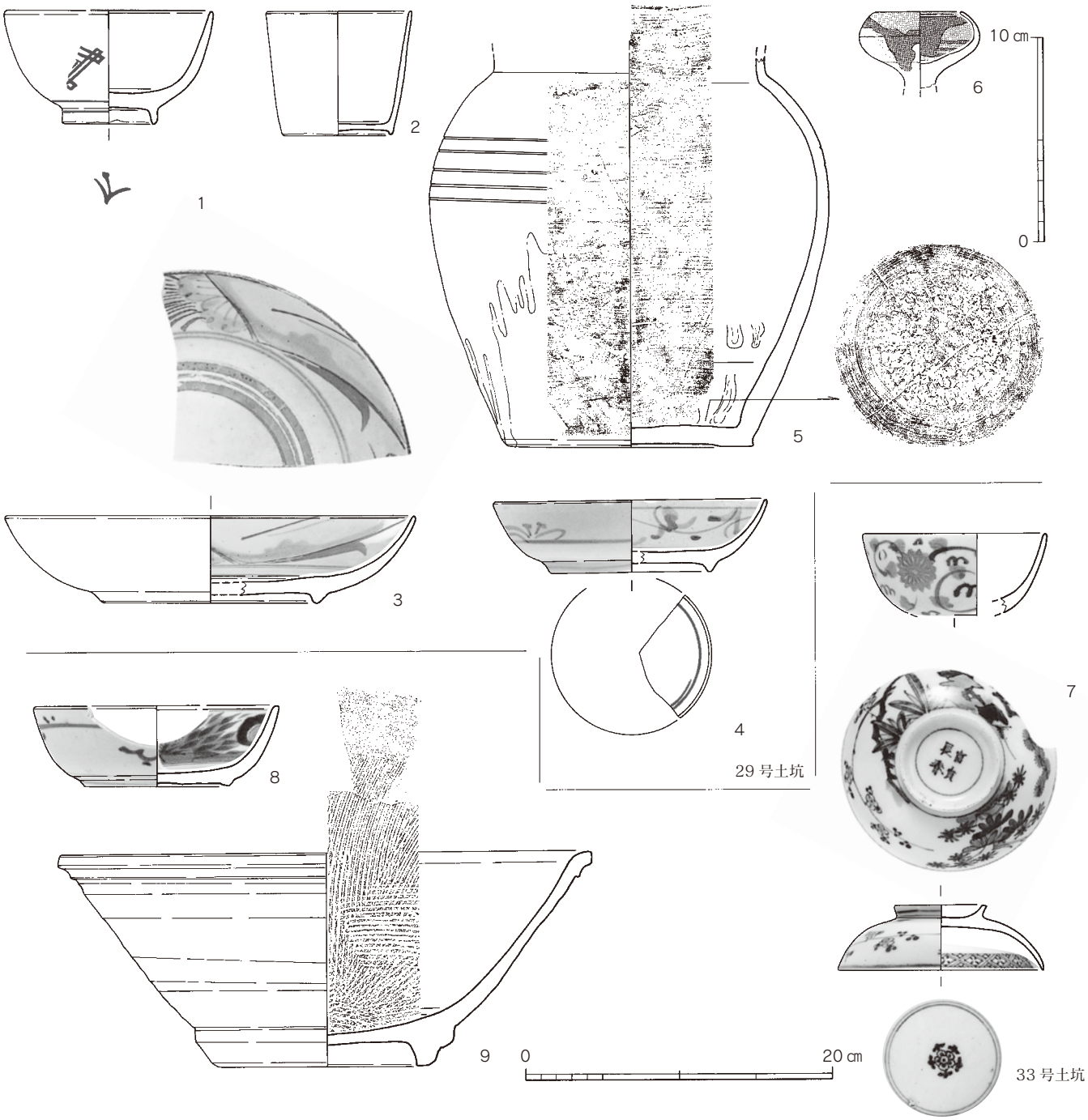


第78図　1次調査24・26・28号土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表38　1次調査出土土器・陶磁器観察表11

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑26 78図7	大甕	—	陶器 内面灰橙色、外面黒灰色	鉄釉全面掛け	内外ナデ	—	口縁部は釉剥ぎしていない	肥前	17世紀後半
土坑28 78図8	瓶 油壺	高台径5.4	陶器 にぶい灰色	黒釉を外面全面に掛ける　内面はどこまで掛かっているか不明	無文	畳付釉剥ぎ　砂目付着	肥前にしては胎が灰色か	肥前か	不明
土坑29 79図1	小型碗 半球形	口径(10.0) 高台径4.6 器高5.5	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には武田菱文コンニャク印判刷り、裏銘に崩れた「大明」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1750 〜 1770
土坑29 79図2	猪口	口径7.0 高台径5.4 器高6.1	磁器 灰白色	発色不良で乳白色を呈する透明釉貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1780
土坑29 79図3	小皿 5寸皿 くらわんか手	口径20.0 高台径10.6 器高4.3	磁器 暗灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	外面は無文、内面は花葉文と扇形窓文内雲文呉須染付、その上に赤絵を入れ、口紅も入る　見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部にも赤絵	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ		波佐見	18世紀中葉 〜 19世紀前葉
土坑29 79図4	小皿 5寸皿 くらわんか手	口径13.4 高台径7.8 器高3.5	磁器 暗灰白色	発色不良の暗い透明釉　全面掛け	外面は直線の上に草花文、内面は崩れた唐草文呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1750 〜 1810
土坑29 79図5	中型甕	肩部径26.0 底径16.0	陶器 外面側暗灰色、内面側暗紫灰色	内外鉄釉薄掛け	外面カキ目、内面格子目タタキ当て具痕の上を横ナデ、内底は格子目タタキ当て具痕跡が円形に巡る	外底アルミナ付着	外底部はアルミナのため観察できない	肥前	不明
土坑29 79図6	瓶 秉燭	口径4.1	陶器 橙黄色	鉄釉内面から外面口縁部掛け　その上に黒釉流し掛け　内面に芯立ての痕跡あり		底部露胎		肥前	不明
土坑33 79図7	碗	口径(9.0)	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面はコンニャク印判刷りの菊花文を中心とする唐草文の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1740
土坑33 79図8	小皿	口径(12.0) 高台径7.0 器高3.9	磁器 灰白色 焼成不良	透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面花草文か、見込みに不明モチーフを呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	小片なので口縁部形態や、見込み文、裏銘は不明	波佐見か	1680 〜 1740
土坑33 79図9	摺鉢	口径(34.8) 高台径14.5 器高14.0	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は16本単位 外面ナデ	畳付釉剥ぎ後砂目付着　見込みに環状重ね焼き痕あり	見込みの窪みは胎土目跡か	肥前	1750 〜 1860
土坑33 79図10	蓋	裾径10.0 つまみ径4.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は松竹梅文は、天井部裏銘は「富貴長春」、内面裾部は四方襷文帯で、内面天井部に5弁花文を呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑35 80図1	小皿	口径(13.8) 高台径(9.0) 器高4.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	型打ち成型　内面に花唐草文、外面は唐草文、裏銘は「福」か　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後前半
土坑36 80図2	碗 筒形	高台径3.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面は上半分が失われており判然としないが建物に藤だろうか、見込みに5弁花文のコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ	胎の色から波佐見の可能性あり	波佐見か	1780 〜 1810
土坑36 80図3	台付皿	高台径8.5	陶器 黄灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	見込みに鉄絵で竹笹文 台部は別造りによるものを貼り付け	台下部釉剥ぎ	高台の貼り付け位置がずれている	肥前	1690 〜 1780
土坑36 80図4	小皿	口径5.8 底径4.0 器高1.6	土師質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	内外ナデ　外底糸切り	不明	変色なし	蒲池焼	不明
土坑36 80図5	小皿	口径8.5 底径4.4 器高2.1	陶器 外面側にぶい橙褐色、内面側灰褐色	内面から外面胴中位まで鉄釉掛け	外底糸切りか 器面はナデ	底部露胎で、アルミナ塗布		肥前	不明
土坑36 80図6	鉢	口径(22.3) 底径(15.8) 器高4.4	土師質土器 にぶい黄灰色　金雲母を含む	—	型作りで、内面はハケ状のナデで、外面体部は未調整、外底はハケ状のナデ	不明	内底が黒変、外面口縁部が煤付着	在地	不明
土坑36 80図7	小型瓶 仏花瓶	高台径5.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色不良	外面にモチーフ不明の文様の一部を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 〜 1750
土坑36 80図8	仏飯器	口径(7.1) 裾径3.4 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉　内面から外面高台下位まで	外面に界線を呉須染付	底部露胎		肥前	1690 〜 1780
土坑37 80図9	碗 筒形	口径5.8 高台径2.8 器高3.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に不明文、内面底は5弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 〜 19世紀前葉
土坑41下層 80図10	小皿 変形小皿 花弁形	口径13.7 高台径8.1 器高4.0	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面	型押し成型で、内面は蛸唐草文、外面側は唐草文、見込みは菊花文、裏銘は渦福の呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
土坑41下層 80図11	鉢	高台径13.5	陶器 橙褐色	外面胴下位に鉄釉ハケ掛け、その上位は白化粧土をハケ掛けして櫛状掻き取り、内面は白化粧土をハケ掛けして、暗緑灰色の灰釉を流し掛け		高台釉剥ぎ　見込みと高台に環状に巡る胎土目跡8つあり		肥前	1750 〜 1860

76図１は陶器の小碗で、透明釉が口縁部と外面胴中位で白く変色している。これは焼成時の灰被りによるためと考えられる。76図６は陶器の小皿で、三島手の象嵌のＳ字文には線の一部が切れる特徴があるが、どのＳ字文にも見られるので、同じスタンプで施文しているとわかる。76図13と14はセットになる染付の蓋物で、焼成時に14の口縁部に13の蓋の裾部片が融着していたらしく、蓋に融着した破片と接合する。したがって、焼成後に融着していた蓋と身を本体部分が割れないように外して、販売したものであろう。76図15は陶器の摺鉢で、外面胴下半と高台内面は露胎のように見えるが、鉄釉が発色していないだけで、釉は掛かっている。76図16は陶



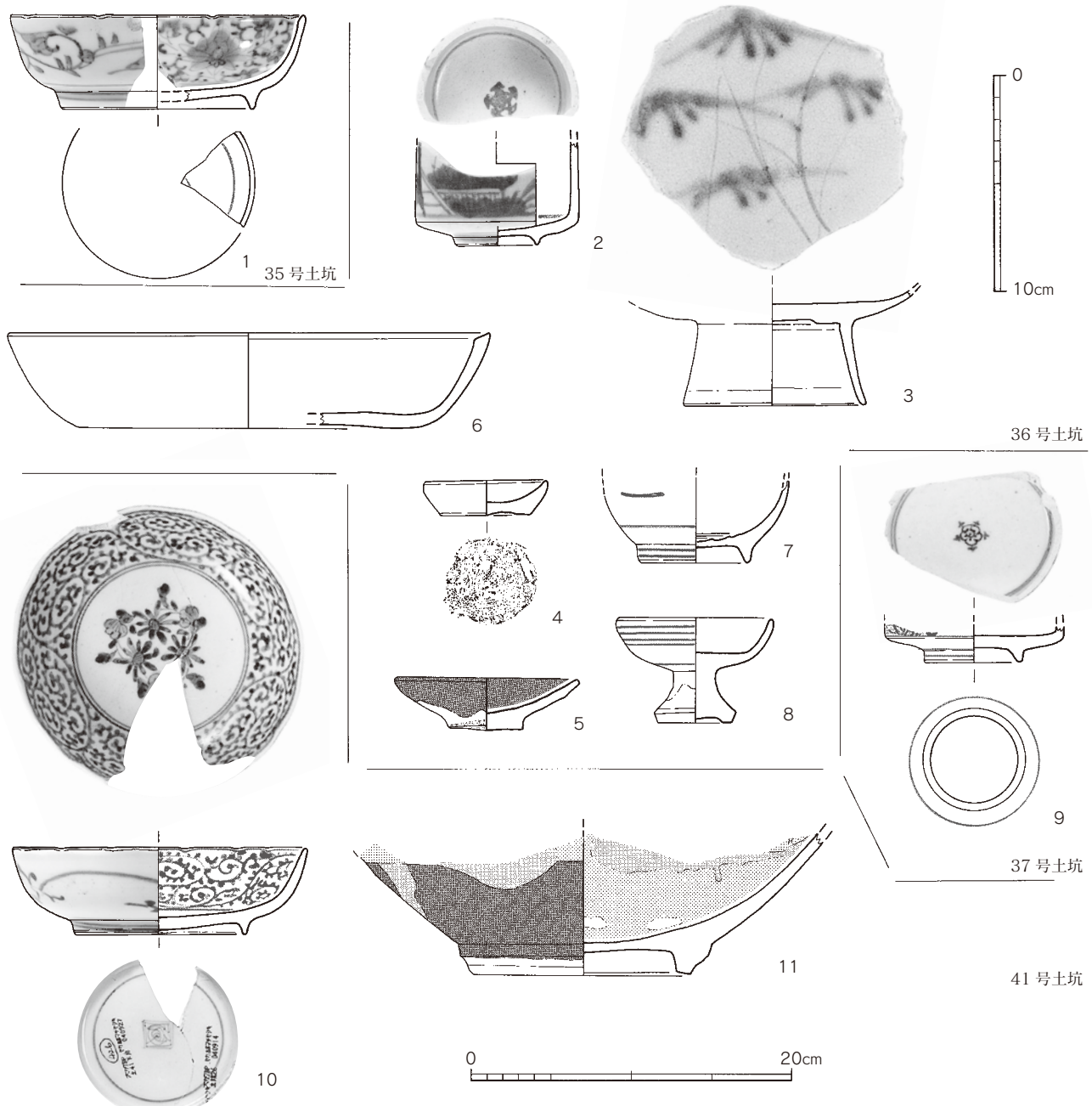
第79図　１次調査29・33号土坑出土陶磁器実測図(5･9は1/4、他は1/3)

器の仏花瓶で、耳部は何らかのモチーフになっていない。外面に異なる鉄釉が掛け分けている。外面胴下位は鉄漿をハケ掛けし、外面胴中位から内面頸部に鉄釉を掛けている。

77図１は陶器の碗で、京焼の可能性を提示したが、胎に肥前との差はないので肥前産京焼風陶器の可能性もある。77図３は陶器の摺鉢で、見込みに蛇の目状の重ね焼き痕があり、外底は畳付釉剥ぎ後に高台外面までアルミナを塗布している。

79図３は磁器の小皿で、見込みの蛇ノ目釉剥ぎ部にも赤絵が施されており、赤絵が崩れていないことから、重ね焼きはしていない。79図９は陶器摺鉢で、畳付釉剥ぎ後に砂目が付着しており、見込みに環状重ね焼き痕があり、重ね焼きの痕跡に見られる窪みは胎土目跡であろう。

80図２は染付の筒型碗で、外面は上半分が失われておりモチーフが判然としない。胎の色調から波佐見焼の可能性がある。80図10は75図２・78図２と同じモチーフだが、78図２とは描き方も同じなので、絵付け工人も同じとわかる。80図11は陶器の鉢で、見込みと高台に環状に巡



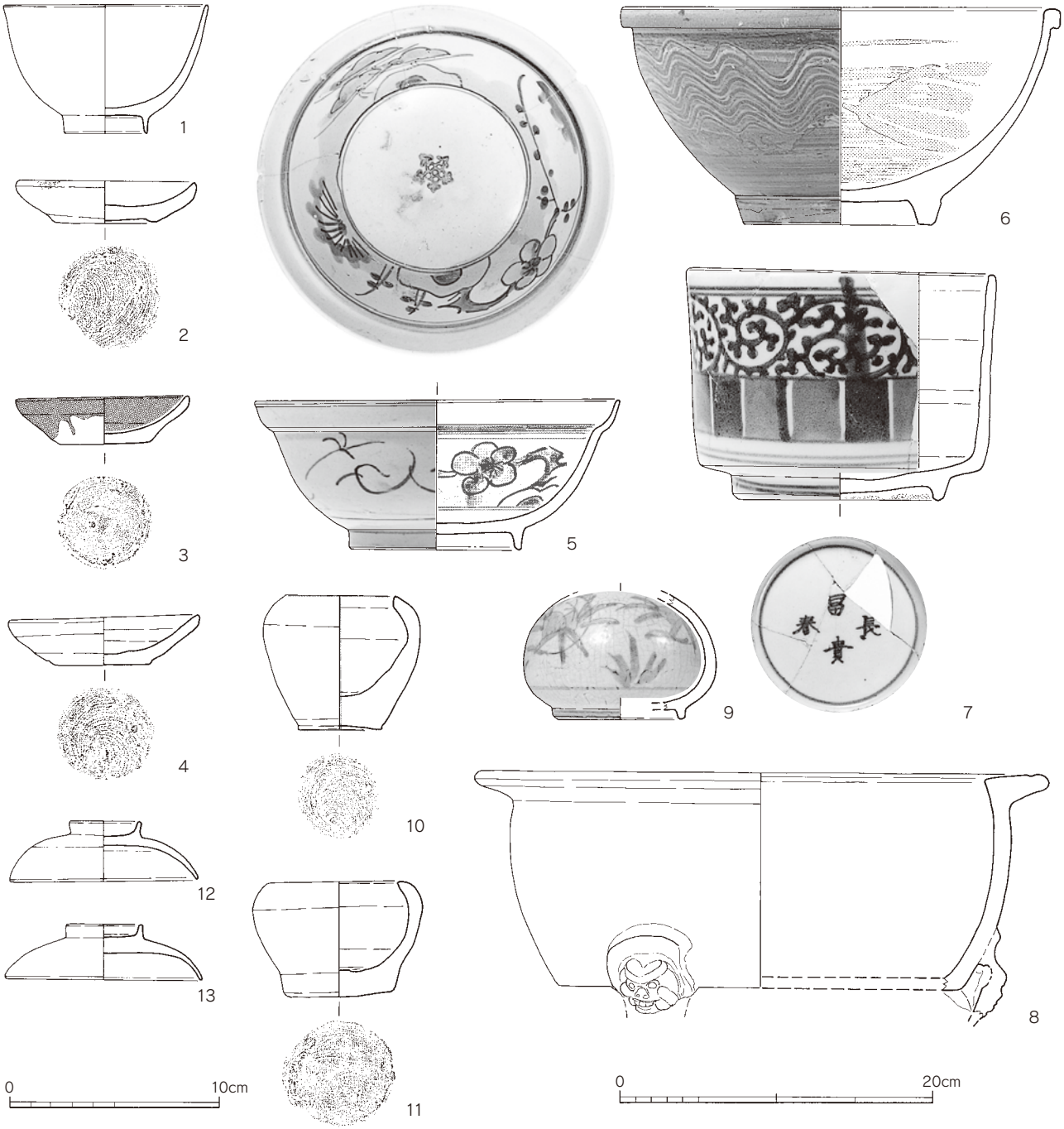
第80図　１次調査35～37・41号土坑出土土器・陶磁器実測図(11は1/4、他は1/3)

る胎土目跡が８つあり、胎土目跡が一部残っていて、砂目だけが残っている部分もある。外底には砂目もなく胎土圧痕のみが残る。

81図３は陶器の小皿で、内面の鉄釉は劣化しているが、これは灯明皿として使用されたためだろう。81図10･11は土師質土器の焼塩壺で、10の断面は赤化しておらず、全体に橙色に変色している。焼塩作業のためだろう。11はほぼ完形のため断面の胎の変色は確認できない。

82図4･5は磁器の小皿で、４は裾部が一部打ち欠いており、そこに煤が付着していたので転用して灯明皿に使用したことがわかる。５と６は若干異なるモチーフだが、絵付けの工人は同じと皿で、高台外面と畳付にカンナ痕状の段があるので、型打ち成型だろう。

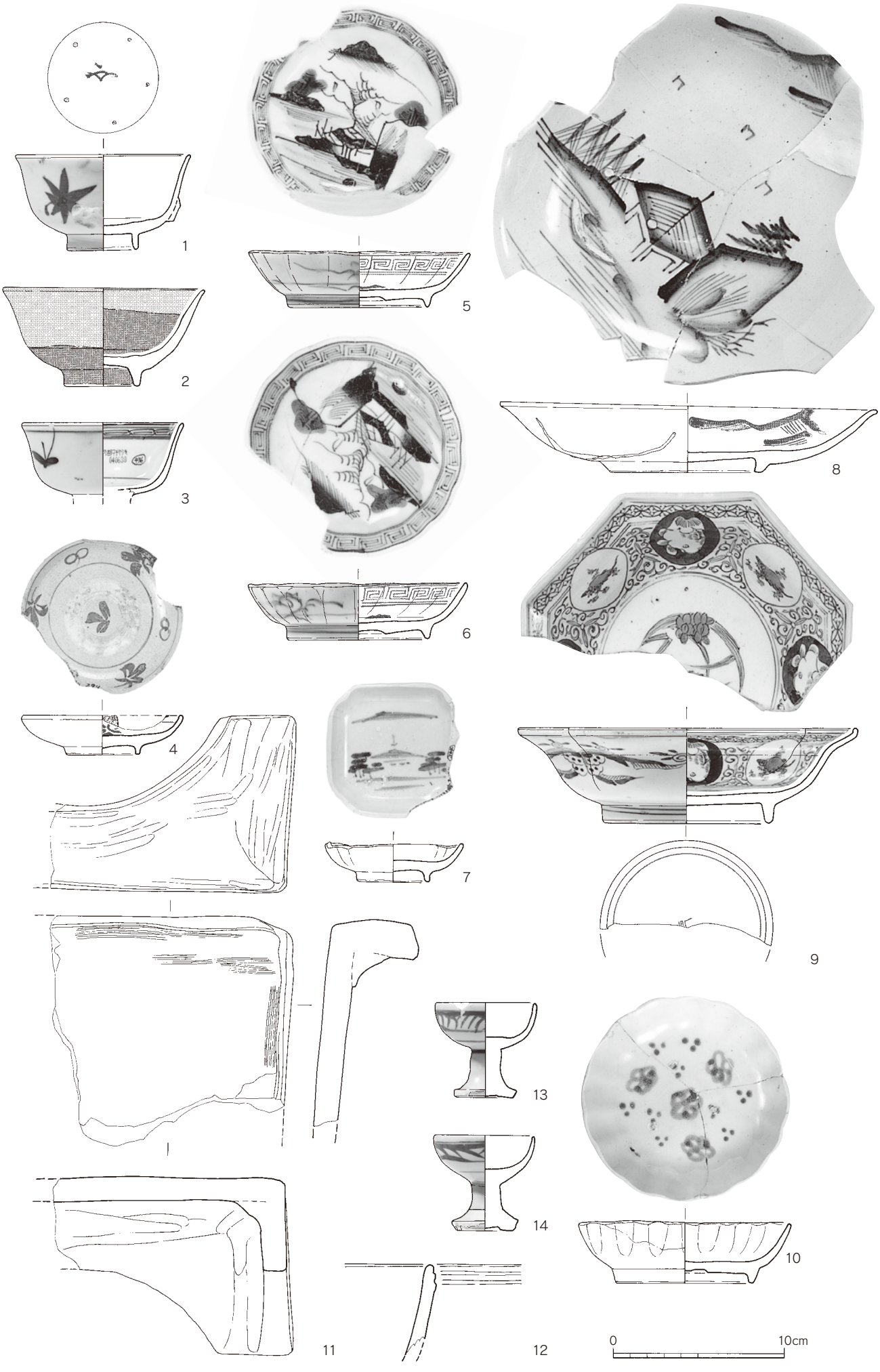
83図17は土師質土器の火鉢で、底部だけ灰黒色になっていないのは、重ね焼きのためか。83図19は口縁部が部分的に残っているので、磁器の筒状の瓶であり、欠損部は煙管を打ち付けた際の打ち掻きによるもので、灰落としとして使用したものである。



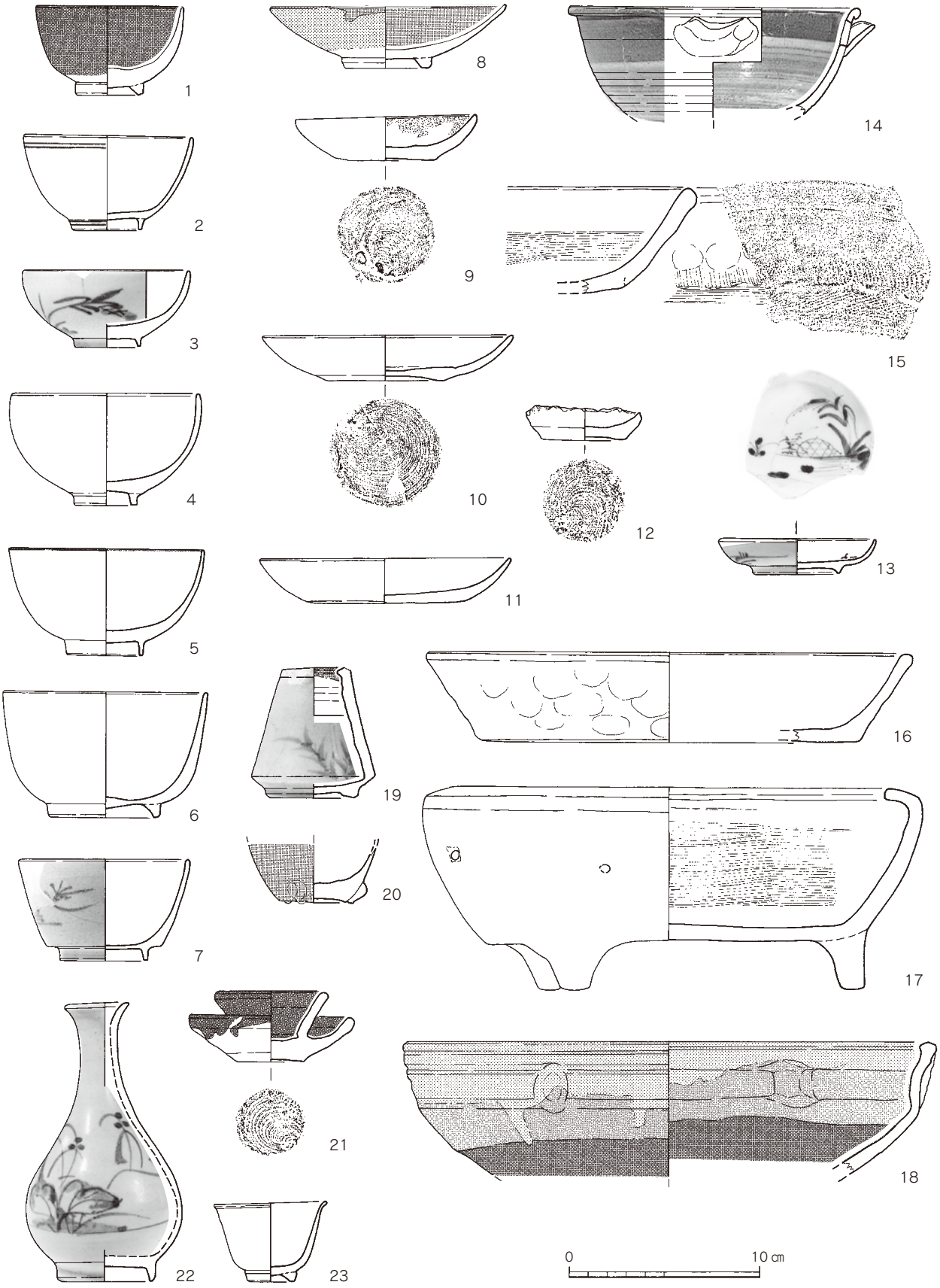
第81図　１次調査１号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図（８は1/4、他は1/3）

表39　1次調査出土土器・陶磁器観察表12

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
廃棄土坑1 81図1	碗	口径(9.8) 高台径2.0 器高8.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
廃棄土坑1 81図2 図版16	小皿	口径8.4 底径5.1 器高2.0	土師質土器 完形のため不明	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	外面口縁部の一部に煤付着　灯明皿として使用	蒲池焼	不明
廃棄土坑1 81図3	小皿	口径8.3 底径4.4 器高2.3	陶器 にぶい橙褐色	内面から外面胴中位まで鉄釉掛け	外底糸切り 器面はナデ	不明	器壁が薄い 内面の釉が劣化	肥前	不明
廃棄土坑1 81図4 図版16	小皿	口径9.2 底径4.5 器高2.4	土師質土器 黄灰白色 精良	—	外底糸切り 外面ナデ　内面螺旋ナデ	不明	外面口縁部の一部に煤付着しているので灯明皿として使用	蒲池焼	不明
廃棄土坑1 81図5	鉢	口径17.2 高台径7.9 器高7.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 発色不良で釉切れあり	外面は唐草文　内面は松竹梅文　見込みは5弁花文のコンニャク印判か　呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	17世紀後半
廃棄土坑1 81図6	片口鉢	口径(21.0) 高台径9.3 器高10.3	陶器 灰～橙褐色 精良	外面胴下半は鉄釉ハケ掛け、外面胴上半には白化粧土ハケ掛けし、帯状掻き取り後、緑灰色の灰釉を掛ける　内面は胴中位以下に白化粧土ハケ掛けし、透明釉掛け		口縁部・底部露胎		肥前	不明
廃棄土坑1 81図7	蓋物	口径14.3 高台径10.1 器高11.0	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は胴上半は蛸唐草文、下半はダミの濃淡で色分けした帯文、内面は蛸唐草文　裏銘「富貴長春」 呉須染付	内面口縁部と畳付釉剥ぎ　砂目付着		肥前	18世紀中葉
廃棄土坑1 81図8	火鉢	口径36.8 底径(25.4)	瓦質土器 にぶい黄灰色 混入物あり	—	外面器面摩滅、胴下位に型押し獅子面の貼り付け　外底の器面調製は不明、内面はナデ 口縁部外縁は肥厚	—		在地	不明
廃棄土坑1 81図9	瓶 仏花瓶	高台径6.2	陶器 灰白色	発色の悪い透明釉を外面に掛ける	外面は花草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
廃棄土坑1 81図10	焼塩壺	口径5.2 底径4.1 器高6.4	土師質土器 黄橙色　精良	—	外底糸切り 内外面ナデ	—		蒲池焼	不明
廃棄土坑1 81図11 図版16	焼塩壺	口径6.2 底径5.2 器高5.5	土師質土器 明黄色　精良	—	外底ヘラ削り 内外面ナデ	—	ほぼ完形　器面摩滅	蒲池焼	不明
廃棄土坑1 81図12 図版16	蓋	裾径9.0 つまみ径3.5 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉　全面 やや発色不良	無文	つまみ部上端釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1700 ～ 1740
廃棄土坑1 81図13	蓋	裾径9.4 つまみ径3.6 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	つまみ上端釉剥ぎ		肥前	不明
廃棄土坑2 82図1	碗 端反形	口径10.0 高台径3.9 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は楓文、見込みに崩れた波文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目5つあり	口縁部に歪みあり	肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図2	碗 端反形	口径11.8 高台径4.5 器高6.8	陶器 暗灰色	黒釉を全面に掛け、内外上半に藁灰釉上掛け		畳付釉剥ぎ	見込みにハリ目3つあり	小石原	19世紀前半
廃棄土坑2 82図3	碗 端反形	口径9.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は蝶・牡丹文、内面口縁部は崩れた雷文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図4	小皿	口径9.4 高台径4.3 器高2.3	磁器 青灰色	発色不良の透明釉　全面	内面に花文を連結丸文　コバルトで染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	ほぼ完形 裾部が一部打ち欠いており、そこに煤付あり	肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図5	小皿 菊花形	口径12.8 高台径8.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面は唐草文、内面は口縁部雷文帯、見込みに山水文をコバルト染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半
廃棄土坑2 82図6	小皿 菊花形	口径12.7 高台径8.0 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面は唐草文、内面は口縁部雷文帯、見込みに山水文をコバルト染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半
廃棄土坑2 82図7	小皿 変形小皿 方形	一辺8.0 高台径4.2 器高2.2	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	糸切り細工の型押し成型で、見込みに山水文呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図8	中皿	口径(22.0) 高台径8.9 器高4.1	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	外面は無文、内面は山水文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ　見込みにハリ目跡5つと見込みと外面胴部に融着痕あり	歪みあり	肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図9	鉢 8角形	口径(19.8) 高台径(10.0) 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	型打ち成型　蝶文、内面は口縁部に七宝文帯、内面は唐草文地に亀と金魚が交互に入る　見込みに水仙文　裏銘「福」のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	漆接ぎの痕跡あり 畳付の釉剥ぎ部が丸みをもつ	肥前	19世紀後半 ～ 20世紀前半
廃棄土坑2 82図10 図版16	5寸皿	口径12.4 底径8.2 器高3.5	磁器 灰白色 やや粗放	透明釉全面掛け 焼成不良で白濁	外面無文、内面に花文と三つ星文呉須染付	畳付釉剥ぎ　高台内蛇ノ目釉剥ぎ	ほぼ完形 見込みにハリ目3つ付着	肥前	19世紀中葉
廃棄土坑2 82図11	炬燵底か	—	瓦質土器 灰白色	—	板造りで接合部は櫛状沈線を施し、接合後はナデ　内底には目の粗いハケ入り、丸みがある面が前面で、ここだけミガキが入る	不明	銀化 前面には2つひびあり	不明	不明
廃棄土坑2 82図12	鉢	—	土師質土器 黄灰白色 混入物なし	—	外面口縁部に沈線2条 器面はナデ	不明	変色なし	蒲池焼	不明



第82図　1次調査2号廃棄土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)



第83図　1次調査1号大土坑出土土器・陶磁器実測図1(1/3)

表40　1次調査出土土器・陶磁器観察表13

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
廃棄土坑2 82図13	仏飯器	口径5.9 裾径3.6 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面半菊文赤絵上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
廃棄土坑2 82図14	仏飯器	口径4.9 裾径3.5 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面竹笹文赤絵上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
大土坑1 83図1	小碗	口径7.8 高台径3.6 器高3.7	陶器 灰白色	鉄釉を内面から外面中位まで	高台削り出し	胴下半露胎	ほぼ完形	肥前	1690 ～ 1780
大土坑1 83図2	小碗	口径8.7 高台径3.6 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に口縁部と高台部に界線の染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1670
大土坑1 83図3	小碗	口径8.8 高台径3.5 器高4.0	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面蒲文か　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大土坑1 83図4	碗 半球形	口径9.7 高台径3.4 器高5.9	陶器 暗黄灰白色	透明釉を高台以外全面に掛ける　貫入あり	高台削り出し	高台部露胎		肥前	1780 ～ 1810
大土坑1 83図5	小型碗	口径(10.3) 高台径4.0 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文　口錆	畳付釉剥ぎ		肥前	1680 ～ 1740
大土坑1 83図6	碗	口径(10.6) 高台径(5.6) 器高6.6	陶器 暗黄灰白色 粗放	透明釉を全面に掛ける 貫入あり		高台部露胎		肥前か	不明
大土坑1 83図7 図版16	碗 小杉形	口径9.0 高台径4.6 器高5.4	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に鉄絵のモチーフ	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1740
大土坑1 83図8	小皿	口径12.2 底径4.7 器高3.3	陶器 黄灰白色 精良だが粗放	内面から外面中位まで緑灰色の灰釉が掛かり、その上に銅緑釉が内面から外面口縁部に掛かる　外面胴下位にカンナ痕あり		外面下半露胎	5割残存	肥前	1650 ～ 1690
大土坑1 83図9	小皿	口径9.4 底径5.0 器高2.4	土師質土器 外面側黄灰色、内面側黄橙色	—	外底糸切り 内外面ナデ	—	口縁部に煤付着するが、内面は煤付と被熱を受け変色	蒲池焼	不明
大土坑1 83図10	小皿	口径13.1 底径5.8 器高3.3	土師質土器 灰白色	—	外底糸切り 内外面ナデ	—	内外とも黒変、外面はタール状の炭化物が付着	蒲池焼	不明
大土坑1 83図11	小皿	口径(13.2) 底径(8.2) 器高2.3	土師質土器 灰白色	—	ヘラケズリ 内外面ナデ	—	変色なし	蒲池焼	不明
大土坑1 83図12 図版16	小皿	口径6.1 底径4.3 器高2.7	土師質土器 黄橙灰白色 精良	—	外底糸切り 外面ナデ　内面螺旋ナデ	不明	外面口縁部に煤付着　内外面ともに変色	蒲池焼	不明
大土坑1 83図13	小皿	口径8.2 高台径4.4 器高1.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	内面草文・籠文、外面不明モチーフの呉須染付	畳付釉剥ぎ	歪みあり	肥前	不明
大土坑1 83図14	片口鉢	口径15.2	陶器 黄灰色	内外面口縁部は鉄釉、胴中位は白化粧土ハケ掛けで最後に全面透明釉掛け		見込みに環状のアルミナ付着		肥前	不明
大土坑1 83図15	焙烙	－	土師質土器 にぶい暗黄灰色 金雲母あり	－	外面口縁部は横ナデ、屈曲部はオサエ、接合部下は横ハケ、内面は接合部が細かい横ハケで、他はナデ	不明	内面は淡灰色、外面は煤付着	在地	不明
大土坑1 83図16	焙烙	口径25.0 器高4.7 底径20.2	土師質土器 にぶい暗黄灰色 金雲母あり	－	外面はオサエ、底部はハケ、内面はナデ	不明	内面は変色少ない、外面は煤付着	在地	不明
大土坑1 83図17	火鉢	口径26.4 器高10.6 底径17.3	土師質土器 にぶい黄灰色	—	外面はナデ　外底と内面はハケ　脚3つ貼り付け	不明	胴部の穿孔は補修孔だろう	在地	不明
大土坑1 83図18	鉢	口径(28.0)	陶器 にぶい黄灰色	内外鉄釉掛け、口縁部飴釉2度掛け	外面胴下位ケズリ、口縁部にオサエによる窪み1つあり	－		肥前か	不明
大土坑1 83図19	灰吹き	口径3.5 高台径5.0 器高5.8	磁器 灰白色	青磁釉外面から内面口縁部に掛ける　貫入あり　高台内の灰白色は発色不良だろう	外面は呉須で花文を染付け	畳付釉剥ぎ	口縁部に打ち欠きが全周する	肥前	不明
大土坑1 83図20	小鉢 香炉か	底径3.6	磁器 灰白色	暗緑色の緑釉を胴下位まで掛ける	無文　脚は4つのうち2つが残存 上底	外底に鉄漿掛け		肥前	不明
大土坑1 83図21	灯明受皿	口径(5.6) 最大径8.8 底径3.5	陶器 灰黒色	鉄釉を内面から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎	裾下半露胎 胎土目跡あり	肥前	不明
大土坑1 83図22	仏花瓶	口径3.3 高台径7,4 器高14.7	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け　発色不良	外面花葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	1690 ～ 1750
大土坑1 83図23	杯	口径6.0 高台径2.5 器高4.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け　貫入あり	無文	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1650 ～ 1680
大土坑1 84図1	小鉢	口径(22.0)	陶器 にぶい黄灰白色	内外鉄釉掛け、口縁部オリーブ色の灰釉上掛け	口縁部に跳ね上げ	－		小石原	不明
大土坑1 84図2	摺鉢	口径(31.0)	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位	不明		肥前	1650 ～ 1690

83図16は土師質の鉢で、外面の調整はオサエのみ。83図20は瑠璃釉の小鉢で豆状の脚が３つ付く。

84図５は土師質の焜炉片で、窓の大きさと下部の湾曲ラインは推定である。

85図７は陶器の摺鉢で、内面下半に釉がないのは、発色不良で定着していないため摩耗したためだろう。11は土師質土器の焼塩壺の蓋で形態から18世紀中葉の大阪難波産の焼塩壺である。12は磁器仏飯器で、モチーフが崩れているので新しい。

86図１は土師質小皿で、口縁部の一部が黒変しているので灯明皿として使用している。

87図１は１号埋甕本体の陶器大甕で、内面はカルキが付着しているため白色に変色している。付着物はないので、小便壺と考えられる。裏底の墨書の屋号の記号に下にある「七平」とあるが、生産・販売に関わる人物の名前であろう。

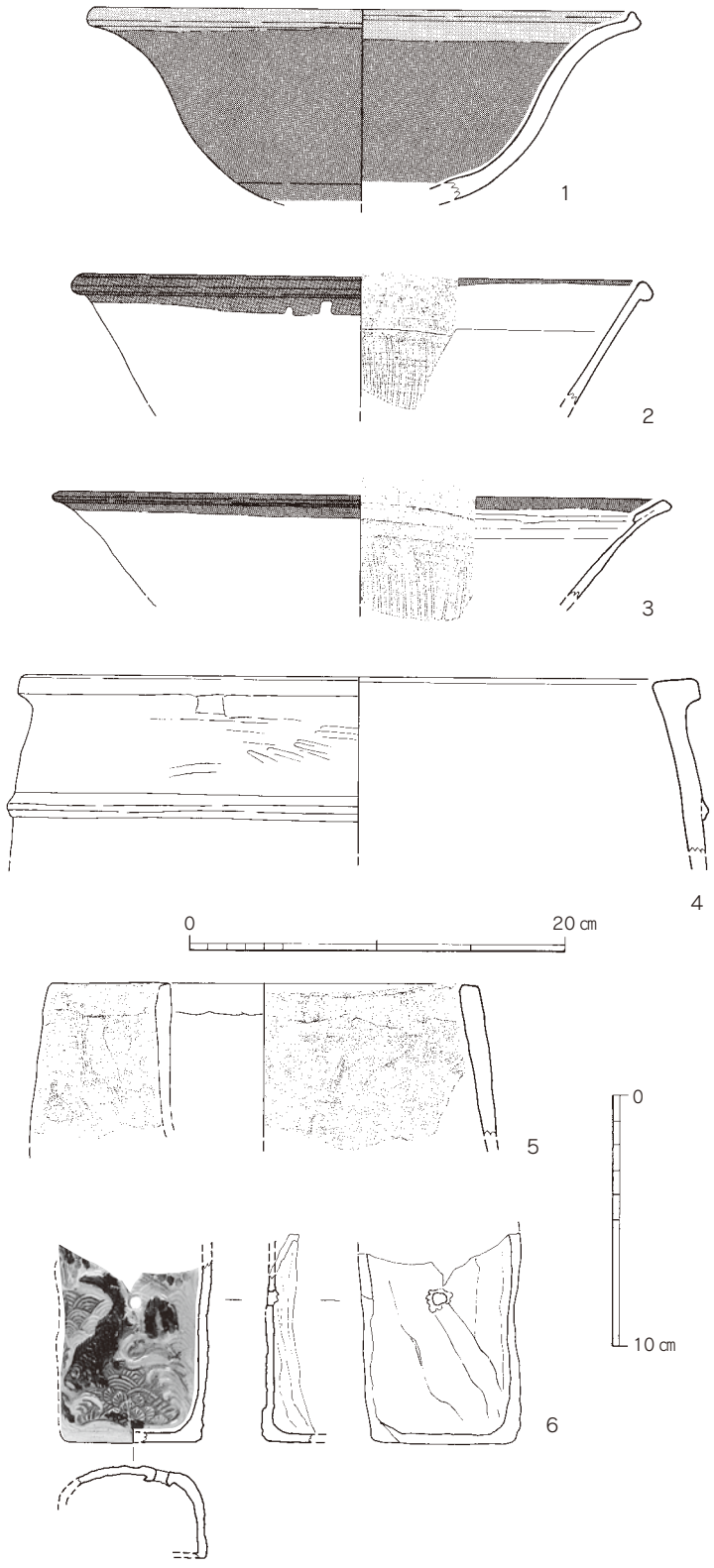
88図４は３号埋甕本体で、内面はカルキが付着しているため便壺として使用していたとわかる。内面はカルキ付着のため調整の観察ができなかった。

91図２は６号埋甕本体の土師質土器の大甕で、内面に変色がないので水甕か穀物を入れた甕ではないだろうか。５は土師質の蓋であろうが、これを蓋にする身になるものがない。

92図４は７号埋甕の本体で、小甕なので便槽ではない。内部に２の碗と３の壺が入っていたが、意図的なものかわからない。

93図５は土師質土器の大甕で、内面はカルキのため白色に変色しているが、付着物はないので、小便壺ではないだろうか。

96図19･20は磁器の小皿で、モチーフの構成が同じで描き方が異なっているので、同じ窯で絵付け工



第84図　１次調査１号大土坑出土土器・陶磁器実測図２(2～4は1/4、他は1/3)

表41　1次調査出土土器・陶磁器観察表14

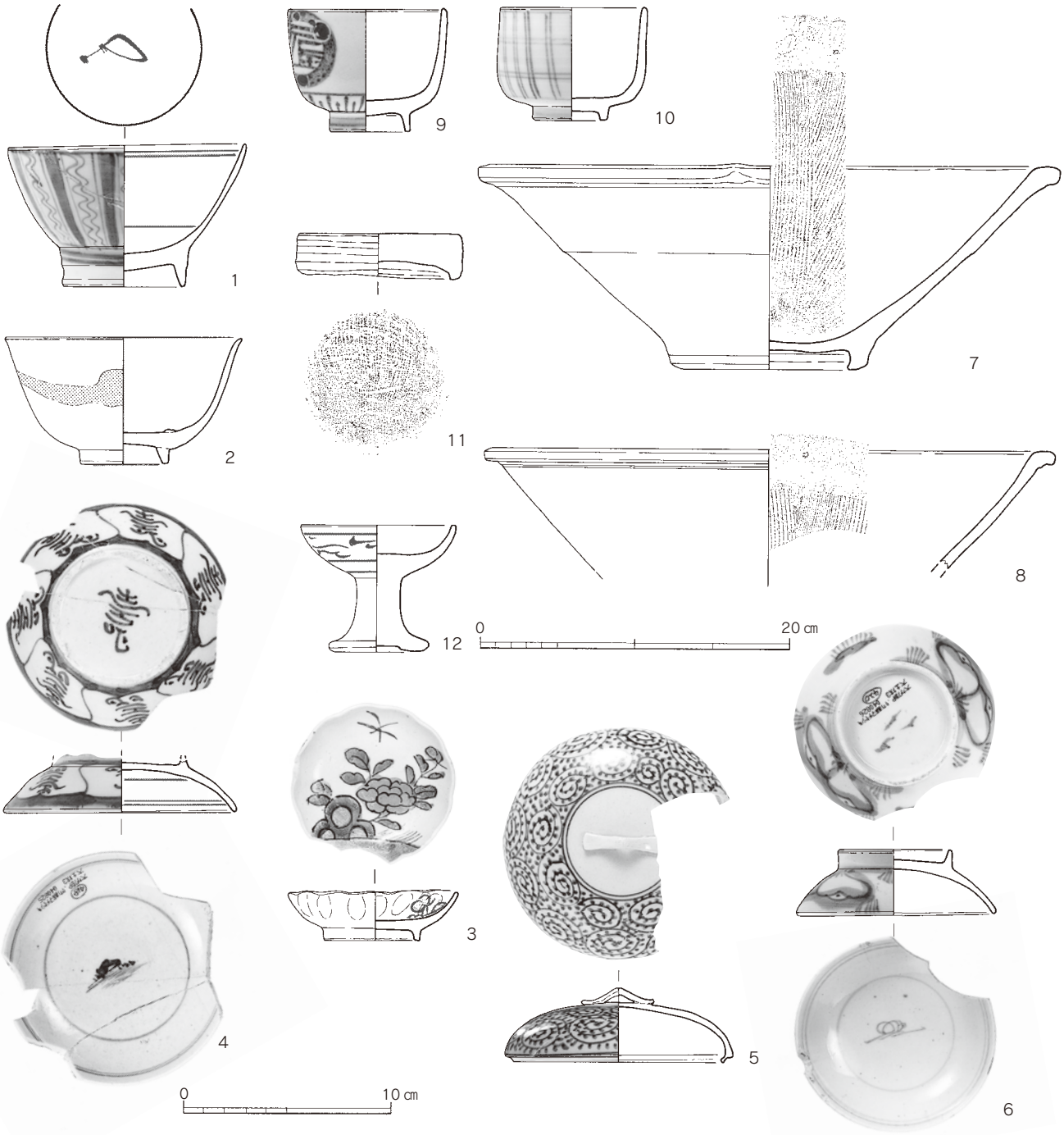
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大土坑1 84図3	摺鉢	口径(32.2)	陶器 橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位	不明	器壁薄く、大きく反るのが特徴的	肥前	1650 ～ 1690
大土坑1 84図4	火鉢	口径(36.0)	瓦質土器 灰白色が灰黒色を挟む	—	外面から口唇部ミガキ　内面はナデ	不明	外面の黒色は炭素吸着によるもの	在地か	不明
大土坑1 84図5	焜炉	口径(30.0)	土師質土器	—	外面丁寧なハケ　内面は煤が付着し、調整がほとんどわからないが、口縁部のみハケとわかる	不明	内面の煤は口縁下に厚く付着し、口縁部は煤が付着していない	在地	不明
大土坑1 84図6	水滴	短軸(6.0)	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	糸切り細工の型押し成型流水文・青海波文と鯉文の型押しによる陽刻で、呉須の濃淡で色分けしている染付 上面に上から穿孔	下端面露胎		肥前	不明
大土坑3 85図1	碗 広東形	口径11.5 高台径6.0 器高6.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　発色やや不良	外面によろけ縞文と縦帯文が交互に入る、見込みに寿文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	高台中位に段がつくのはへたれ　見込みにひっつき多い	波佐見	1780 ～ 1810
大土坑3 85図2	碗 端反形	口径11.3 高台径4.3 器高6.1	陶器 暗灰色	オリーブ色の灰釉を全面に掛け、外面中位に藁灰釉流し掛け		畳付釉剥ぎ	見込みにハリ目3つあり	小石原	19世紀前半
大土坑3 85図3	小皿 5寸皿 菊花形	口径8.2 高台径4.6 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　牡丹文と蝶文、呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑3 85図4	蓋	裾径11.0	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面はデザイン化した寿文、外面天井部も寿文、内面天井部は波と岩文を呉須染付	—		肥前	1780 ～ 1810
大土坑3 85図5	蓋	裾径10.2 最大径11.0 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面天井部蛸唐草文を呉須染付	受け部釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1780
大土坑3 85図6	蓋	裾径9.5 つまみ径5.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は草文、外面天井部は鳥文、内面天井部は崩れた波と岩文　呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ	9割残存	肥前	1780 ～ 1810
大土坑3 85図7	摺鉢	口径(39.6)	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け 発色不良	摺り目は26本単位	畳付釉剥ぎ　見込み環状に重ね焼き痕あり		肥前	1750 ～ 1860
大土坑3　7層 85図8	摺鉢	口径(37.0)	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は23本単位	不明		肥前	1750 ～ 1860
大土坑3 85図9	小型碗 湯飲み	口径(7.7) 高台径3.9 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 釉の沸騰あり	外面に帯丸に直線のみでデザインされた「福」字、胴下位に変形」櫛歯文帯を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑3 85図10	小型碗 湯飲み	口径6.8 高台径3.7 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面に二重格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大土坑3上層 85図11 図版16	焼塩壺蓋	裾径8.6 つまみ径1.9 器高3.9	土師質土器 完形のため不明	—	外底胴部ナデによる凹凸ある 内面天井部布目痕あり、型押し成型 外面天井部はナデのみ	不明	完形	堺	不明
大土坑3　7層 85図12	仏飯器	口径(7.5) 裾径4.8 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面胴部に崩れた鳳凰文コバルト染付	畳付釉剥ぎ	裾部に丸みがあり、モチーフが崩れているので新しい	肥前	19世紀後半か
大土坑4 86図1	小皿	口径(6.2) 底径4.6 器高1.7	土師質土器 黄灰色	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	内外とも口縁部の一部に黒変	在地	不明
大土坑4 86図2	小皿	口径8.9 底径3.4 器高2.6	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面胴下位まで	外底糸切り	底部露胎		肥前	不明
大土坑4 86図3	小皿 5寸皿	口径13.4 高台径7.8 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は唐草文、内面は半菊唐草文、見込みは5弁花文のコンニャク印判刷りの呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着　見込み蛇ノ目釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1680 ～ 1740
大土坑4 86図4	中皿 花弁口縁	口径21.0 高台径12.0 器高2.5	磁器 暗灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	型打ち成型　外面は唐草文、内面は半花輪文散らしの扇文に唐草文、見込みに5弁花文、外底の裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着ハリ目跡3つ外底にあり　位置関係から本来5つか		肥前	1740 ～ 1780
大土坑4 86図5	中皿	口径(22.3) 高台径12.0 器高4.2	磁器 灰白色	青みのある透明釉 全面掛け	外面は対面に草文、内面は流水文と草文、牡丹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　外底にハリ目跡	5割残存 見込みにひっつきあり	肥前	1680 ～ 1740
大土坑4 86図6	灯明受皿	口径(5.9) 最大径8.9 底径4.0	陶器 暗橙褐色	鉄釉を内面から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎		肥前	不明
大土坑4 86図7	瓶	口径5.8 高台径6.7 器高27.3	磁器 灰白色　黒色粒子を含む	透明釉を内面肩部から外面に掛ける	外面胴部に花葉文の呉須染付 底部は碁笥底	畳付釉剥ぎ		波佐見	1650 ～ 1690
大土坑4 86図8	瓶	最大径16.0 高台径8.8	磁器 灰白色	外面に透明釉掛け	外面花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1690

人が違うのではないか。

99図４は陶器の鉢で、肥前産としたが胎の密度が高く、外面の一部に白化粧土・鉄釉・透明釉のすべてが縮れて剥がれている焼成不良さから二川焼の可能性もある。

100図1･2は陶器大鉢で、１はの内面が白いのは白化粧土を塗布したのではなく、胎が白い上に透明釉が掛かっているためである。胎に特徴があるので、肥前産でないかもしれない。２は畳付に胎土目が外されないまま付着している。100図５は陶器の摺鉢で底部だけ胎の表面が橙色なのは発色不良のためで、釉が剥がれているのもそのためである。

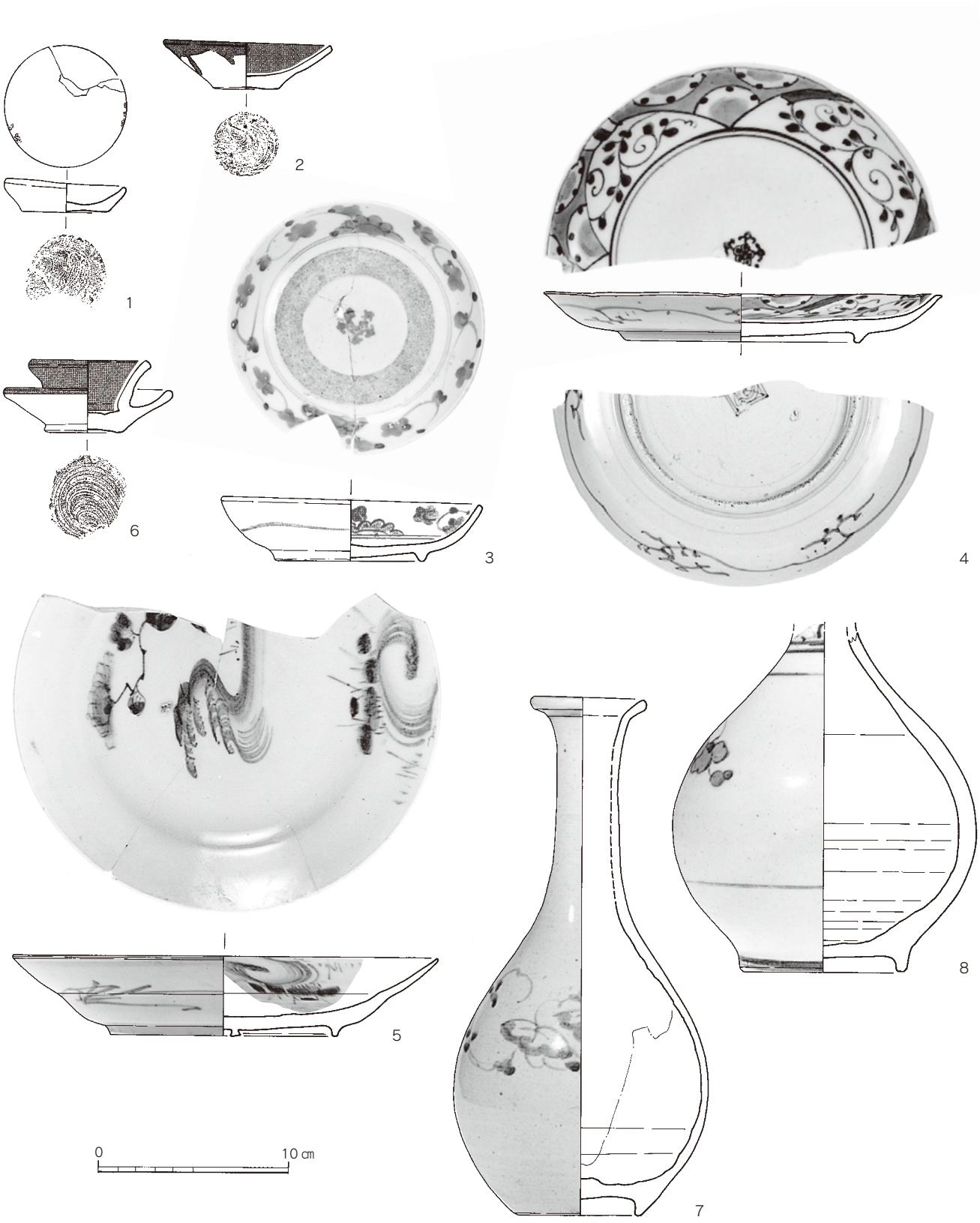
102図１は磁器鉢で、器形や文様から朝鮮半島向けに作られた製品とわかる。102図５は小型



第85図　１次調査３号大土坑出土土器・陶磁器実測図(7･8は1/4、他は1/3)

の半胴甕だが、内面にカルキが付着しているので尿瓶として使用したものである。

103図１は土師質の火鉢で、口縁部の炭化物を吸着させた範囲は丁寧に磨かれており、光沢を持っている。

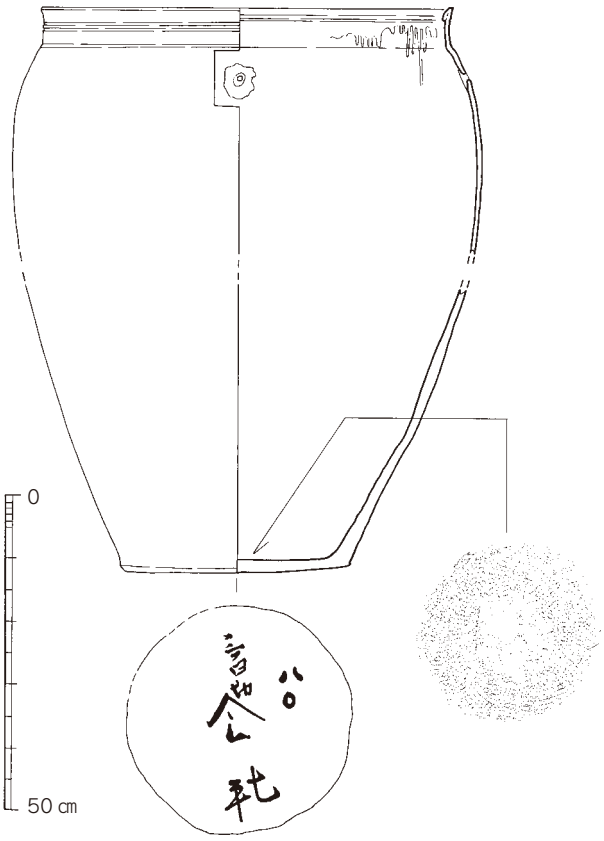


第86図　１次調査４号大土坑出土土器・陶磁器実測図(1/3)

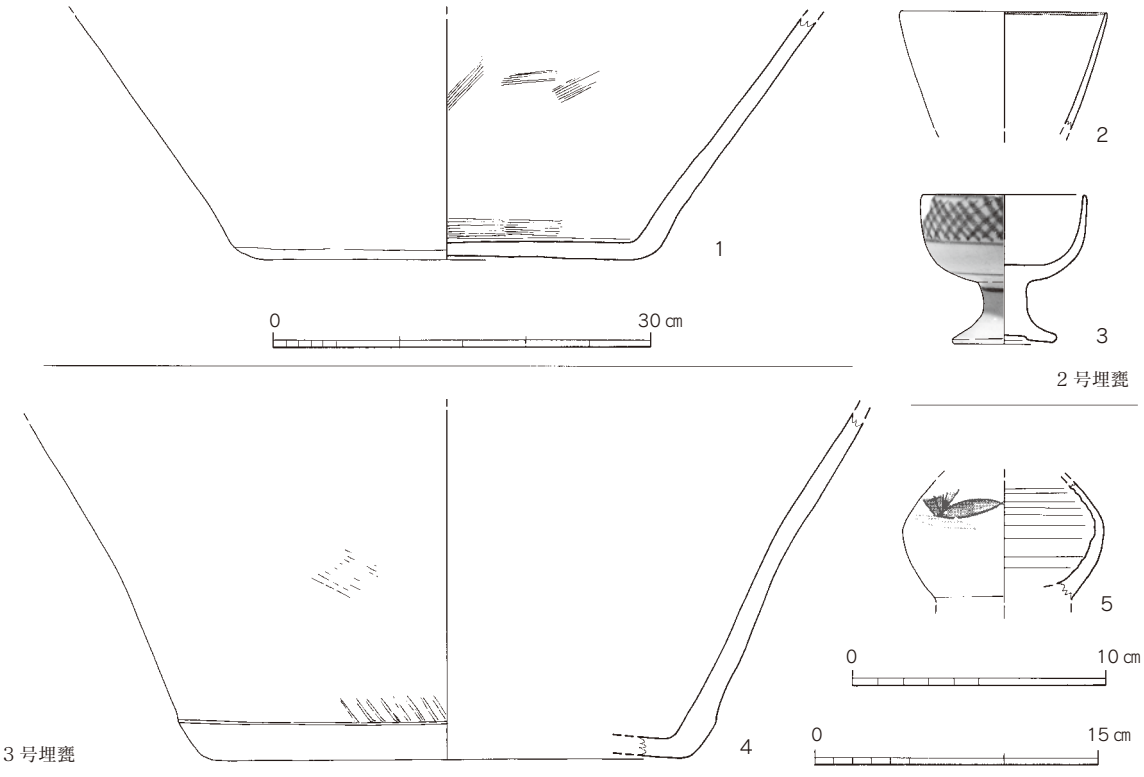
103図65の半胴甕は白化粧土の上には透明釉を掛けていないので、飴釉が褪色している。103図７は陶器の仏花瓶で、頸部の中位の上下で色調が異なるのは、透明釉の有無であり、胴下位の屈曲部の上下で混入物に差があるのは下地の灰釉の有無の差であろう。

104図２は磁器の貧乏徳利で、與田商店の貸し酒瓶であろう。「冂長」は屋号で「七平」「丑」の下は欠損のため読めない。104図6･7は土師質の焼塩壺で、６は胎土と底部形態がやや蒲池産のものと異なるので、別の地域の産ではないだろうか。７は内面の赤変した範囲白色の斑点が見られるが、塩の影響ではないだろうか。

105図１は土師質の七輪で、扇形の窓内に「勧業課御□」「筑前博多産□」「更荘」というスタンプが残っており、博多七厘の類例から「勧業課御試験済」「筑前博多産物」である。同じ形態で同じスタンプをもつものが北九州市木屋瀬宿本陣跡でも出土している。



第87図　１次調査１号埋甕実測図(1/12)



第88図　１次調査２・３号埋甕出土土器・陶磁器実測図(１は1/6、４は1/4、他は1/3)

表42　1次調査出土土器・陶磁器観察表15

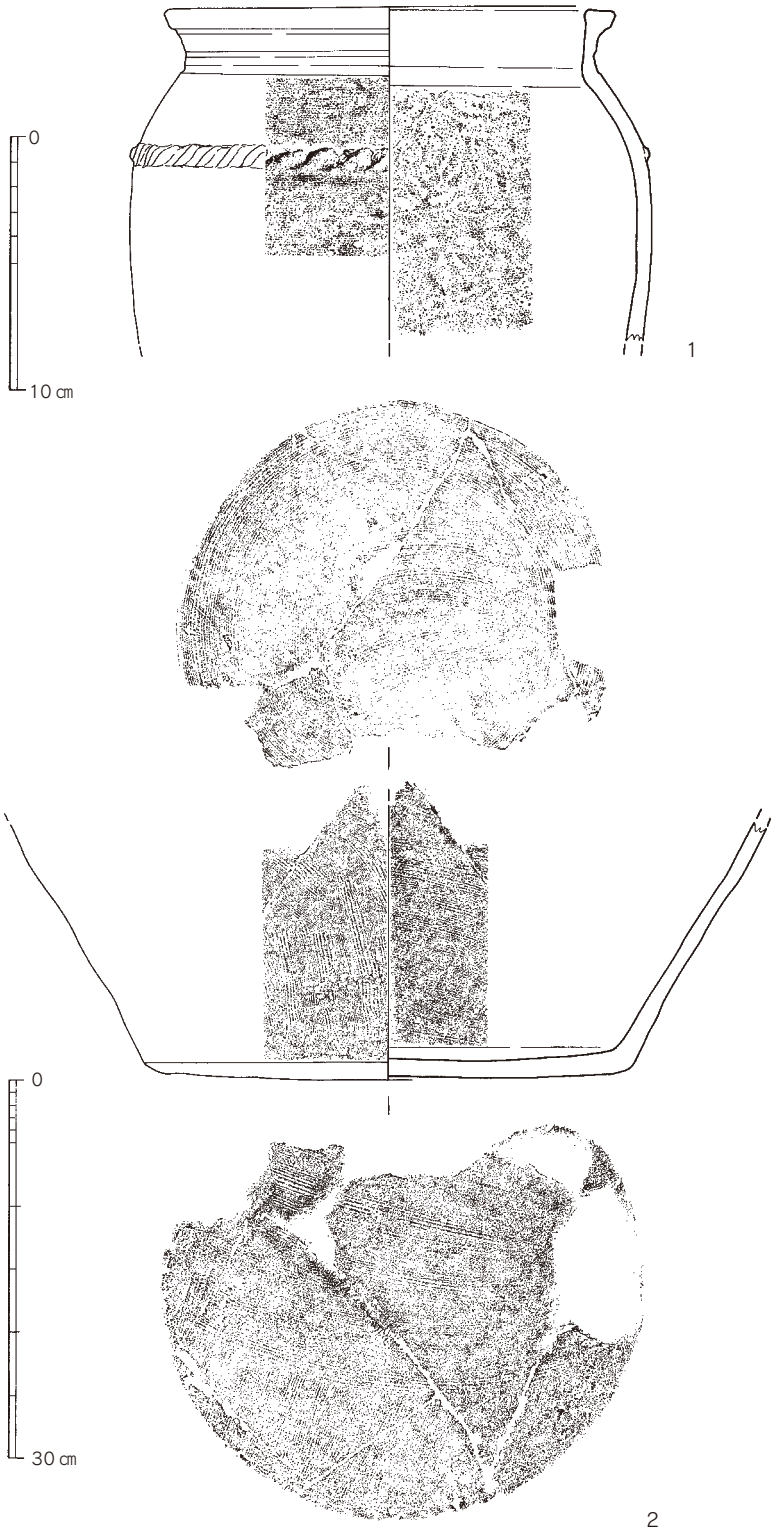
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
埋甕1 87図1	大甕	底径36.8	陶器　橙褐色に灰白色がマーブル状に混じる	鉄釉全面掛け	内外面格子目タタキ痕ナデ消しで、内底部は同心円状に格子目タタキ痕が残る　外底に墨書	不明		肥前	17世紀後半
埋甕2 88図1	大甕	底径34.0	瓦質土器 灰色　混入物少ない	—	外面器面剥落のため不明　内面目の細かいハケ	不明		在地	不明
埋甕2 88図2	猪口	口径(8.0)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	口錆あり	—		肥前	1700 〜 1780
埋甕2 88図3	仏飯器	口径(6.6) 裾径4.2 器高5.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面格子文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 〜 1780
埋甕3 88図4	大甕	底径(26.0)	土師質土器 にぶい橙褐色　混入物多い	—	外面は器面剥落のため調整を観察できない　内面カルキ付着のため調整観察不能　外底器面摩滅	不明	内面はカルキのため変色している	在地	不明
埋甕3 88図5	髪油壺 胴丸形	最大径(8.0)	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は花草文を呉須染付	—		肥前	1650 〜 1690
埋甕4 89図1	小甕	口径(17.8)	陶器 橙褐色 やや軟質	鉄釉全面掛け 焼成不良	内面は同心円タタキ痕を、外面は格子目タタキ痕ナデ消し、頸部は凹線	口唇部釉剥ぎで貝目跡あり		肥前	17世紀中葉
埋甕4 89図2	大甕	底径39.2	瓦質土器 にぶい黄灰色　白色粒子多く含む	—	内外面目の細かいハケ	不明	内外面に変色なし	在地	不明
埋甕5 90図1	大甕	底径34.0	土師質土器 にぶい暗黄白色	—	内外面目の細かいハケ	不明	外面に変色・摩滅なし　内面は黒灰色に変色し、部分的に鉄分が付着している	在地	不明
埋甕5 90図2	小型鉢 香炉か	口径(7.0)	磁器 灰白色	緑釉を全面に掛ける 貫入あり	無文	不明		肥前	不明
埋甕6 91図1	大甕	口径58.0	陶器 暗紫灰色	内外鉄釉	外面はタタキ痕をナデやハケで消し、内面も同様だが格子目タタキ目が残る	口唇部の釉剥ぎや貝目跡なし		肥前	17世紀中葉
埋甕6 91図2	大甕	底径33.2	土師質土器 にぶい暗黄白色	—	外面ナデ　内面・内底細かいハケ	不明	変色・付着物はない	在地	不明
埋甕6 91図3	碗	口径11.0 高台径4.0 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は崩れた源氏香文と水鳥文と墨引きの渦文、高台外面は櫛歯文、内面口縁部は菱形繞文帯、見込みは崩れた環状松竹梅文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	内面口縁部の文様帯は目の錯覚で雷文帯に見える	肥前	19世紀後半
埋甕6 91図4	碗 半球形	口径(10.4) 高台径4.2 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には菖蒲文と蝶文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 〜 1750
埋甕6 91図5	蓋	最大径(4.4) 裾径3.0 器高2.6	土師質土器 褐色パミス入る	—	手捏ね成型 裾内部はケズリ	不明		在地	不明
埋甕7 92図1	碗 半球形	口径(10.8)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面に梅樹文を呉須染付	—		肥前	1710 〜 1740
埋甕7 92図2	碗	口径10.7 高台径4.5 器高6.8	陶器 灰白色	淡緑灰色の灰釉を外面口縁部から胴下位まで掛け、その上に濃い緑灰色の銅緑釉を2度掛け、内面は透明釉掛け	外面胴下位はカンナ痕	底部露胎　見込み蛇の目釉剥ぎ部に胎土目4つあり		肥前	1690 〜 1780
埋甕7 92図3	小甕	肩径12.0 底径6.8	陶器 にぶい橙褐色	内面に鉄釉を掛けた後、外面の胴下半は鉄釉をハケ掛け、外面肩部まで白化粧土を掛け、その上に肩部から胴中位に銅緑釉を掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
埋甕7 92図4	中甕	口径27.9 底径19.7 器高36.8	陶器 内面暗灰色で外面橙色	鉄釉全面掛け	肩部に円形浮文　内外面格子目タタキで、部分的にナデ消し、内底部はタタキが放射状に入る　外底部は調整不明　白化粧土を肩部に掛け流し	外底は未調整	内底の変色はカルキが沈着してものか	肥前	18世紀
埋甕8　2層 93図1	小碗 筒形	高台径3.8	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 外底に釉切れあり	外面に楓文と格子区画文が入る　体部下位は崩れた鳳凰文、内面見込みに5弁花文のコンニャク印判刷り呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1740 〜 1780
埋甕8 93図2	碗 腰張形	口径(8.0) 高台径(3.2) 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は松文、見込みに波千鳥文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀前半
埋甕8　2層 93図3	小皿 腰張形	口径14.6 高台径10.4 器高4.2	磁器 暗黄灰〜橙白色	発色不良の透明釉　全面掛け	外面は簡略化した蛸唐草文、内面は亀甲文と草文、見込みに花文を呉須染付	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ	内底がへたれている	波佐見	1820 〜 1860
埋甕8 93図4	鉢 蓋物	口径(13.4) 高台径(8.0) 器高6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は蛸唐草地に雲形の窓文を描き、その中に宝文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 内面口縁部釉剥ぎ		肥前	18世紀後半 〜 19世紀前半
埋甕9 93図5	大甕	底径36.2	土師質土器 橙褐色　混入物少ない	—	外面細かいハケ　内面観察不能　外底粗いハケ目	不明	内面はカルキのため白色に変色しているが、付着物はない	在地	不明

105図３は土師質の七輪で、四角の中に「喜八」のスタンプがある。３の形態のものは広い範囲に出土するので、産地を特定できない、スタンプの位置は復元である。

106図２は陶器の中型甕で、外底に陶器片を胎土目に利用することは珍しい。胎は肥前に近く、内底の放射状のタタキ痕も乱れているので、肥前産ではなく二川焼だろう。106図９は磁器の蓋だが、裾部が一部打ち欠いており、そこに煤付が見られるので、転用して灯明皿にしている。

107図12は従軍記念杯で、金彩の「四連隊」が残っているので、久留米歩兵第四八連隊のことだろう（注１）。107図14は磁器杯で、「野田新平」の金彩が書かれている（注２）。107図17は土師質の急須で、胎の色調から見て博多瓦町焼だろう。107図19から21は土師質の土管で、土師質瓦の胎や調整に近く、製作地が近いのだろう。107図22は陶器の摺鉢で、見込みに胎土目跡と環状の砂目跡の両方が見られる。焼成技法の過渡期ではなかろうか。

108図２は京焼風陶器碗だが、高台が小さく、胴の張りが大きい。胎のざらつきもあるので肥前産でないかもしれない。108図３は陶器碗で、外面胴中位の沈線と下位のカンナ痕は成型時のものである。108図６は磁器小皿でアルミナが釉剥ぎ部からはみ出している。108図７は土師質土器の小皿で、内外の色調は黄灰白色だが、見込みに螺旋ナデがあるので、蒲池焼だろう。108図９は陶器の香炉で、オリーブ色の灰釉は緑釉のようである。108図12は陶器の小甕で、胎がややにぶいが肥前産だろう。108図14は水滴の内面に墨書が見られるもので、最も上



第89図　１次調査４号埋甕出土土器・磁器実測図（1は1/3、2は1/6）

のものは屋号だろうか。「千之」と読むべきか。板作り成型なので成型してしまうと墨書を書けない上に、人目に触れることもなくなるので、工人が書いたものだろう。何の意図なのかわからない。

109図１は陶器の摺鉢で、鉄釉が薄く掛かっていることから二川焼の可能性を残す。109図５は陶器の嗽茶碗で、胎が灰色なのが特徴的である。109図７は土師質の焙烙で肩部の接合部にハケ調整が入る。金雲母が入らない胎土の異なるもの。内面の井桁沈線文は112図10にも見られるが、戦国時代のもので久留米市城島町北ノ屋敷遺跡(引用文献１)の鉢にも見ることができる。焼成前に施文されたものである。

110図２は瓦質土器の火鉢で、外面・口唇部にはミガキがあるが、単位がわからないほど入念に磨かれている。口唇部内面側が白化しているのは被熱のためである。112図10･11は土師質土器の焙烙で、反転復元できない大型品の破片である。

113図６は瓦質土器の火鉢で、口縁部下に突帯がつくのは珍しい。

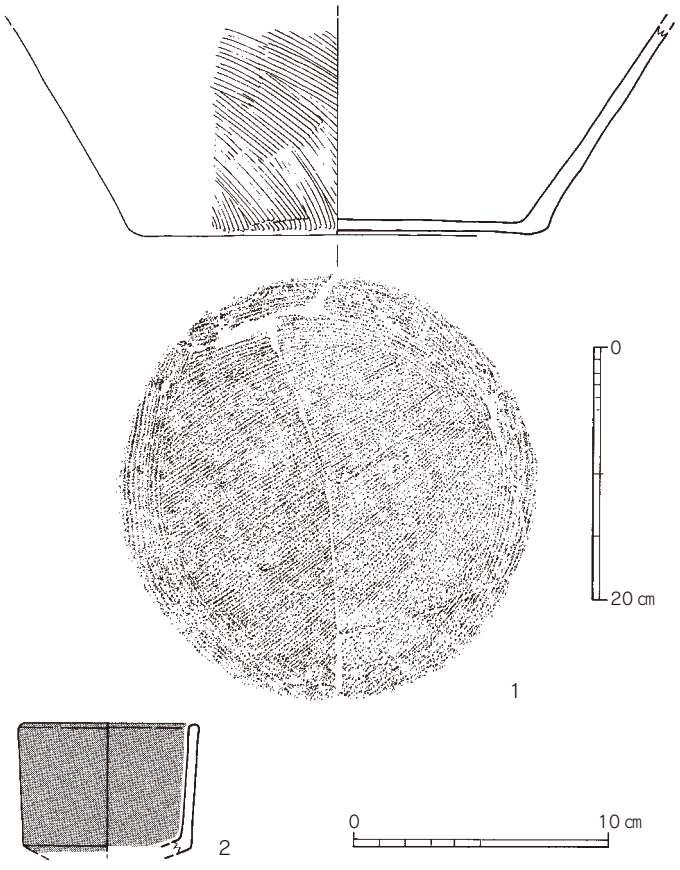
114図１は磁器蓋物の鉢で、焼成時のひびが入っており、ひびの入ったものを購入したものだろう。114図７は瓦質土器の火鉢で、胎が瓦質らしくなくミガキがない。114図5･6は土師質の焼塩壺で、断面に赤色の変色がある。114図８は瓦質の火鉢で、胴下位には型押しによる鋸歯文帯、亀甲文帯などの陽刻がある。突出部の接合部には沈線がある。窓にはミガキが入る。

115図・116図は土師質瓦で、116図１は同一個体の両側端の破片で、接合しないため、図上復元している。117図３は玉縁状の突帯部の上面を面取りしている部分があるので、側端部の破片とわかる。

118図１から３は瓦質の丸瓦で、１は蓆と模骨痕が明瞭に残る。模骨は幅から竹製と見られ、円柱の模骨の上に蓆を掛けて成型したものである。118図2･3は蓆よりも目が細かいので、麻布のようなものではなかろうか。4･5は屋根の棟の先端につく「堤瓦」である。

119図６は磁器の唐人人形の芯押さえで、型合わせの痕跡がなく、裏面は型で成形されたものがないことから、表面を型押しするのみで、裏面は手捏ねとナデのみで仕上げていると見られる。頭部を失っているが、頭頂部に鉄釉を掛ける唐人人形であろう。７は兵隊人形で、前面にのみ着色しているので、子供の玩具ではなく、置物として飾るためのものだろう。４次調査で出土した着せ替え人形(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ４』55図13･1)とつくりが似ている。

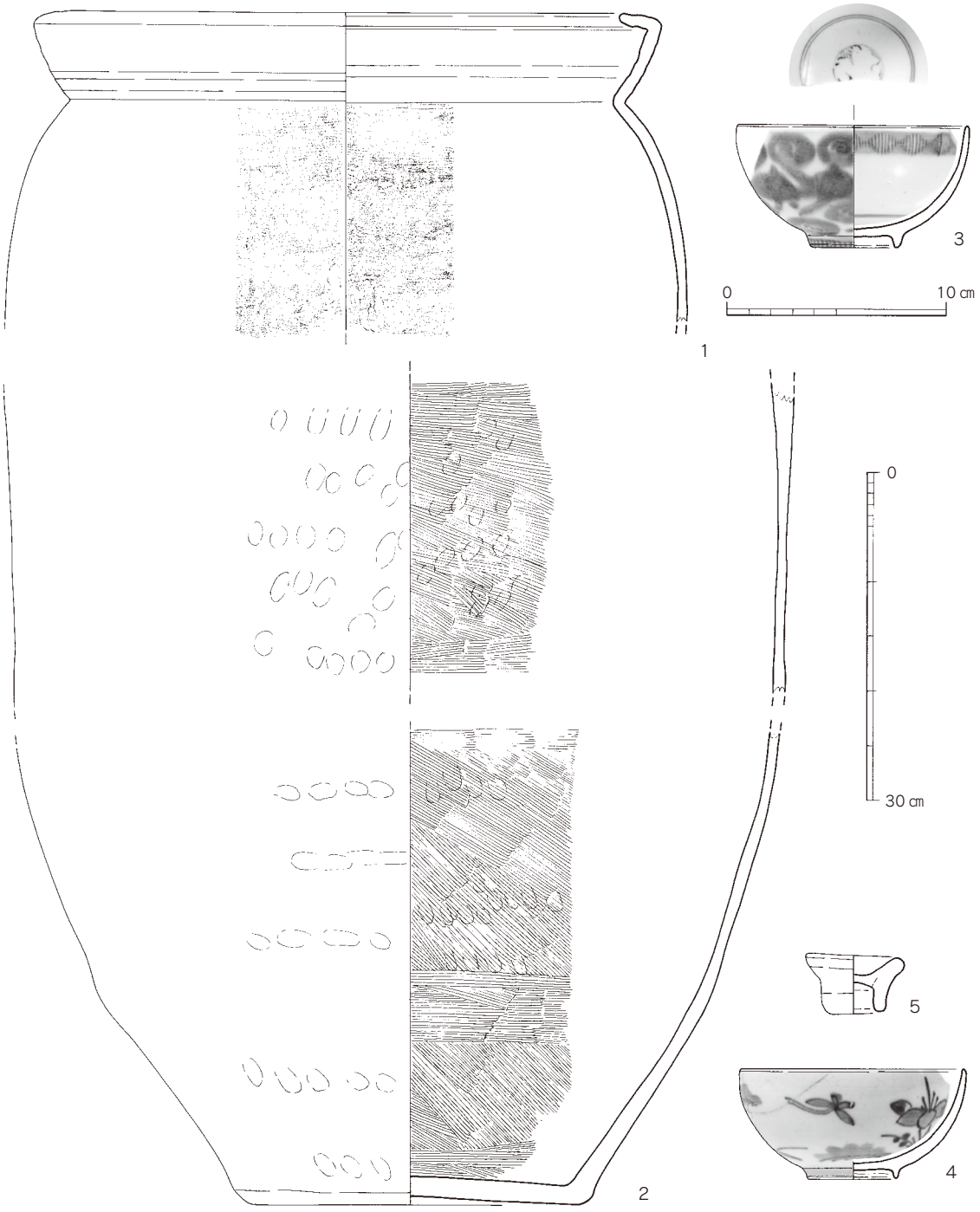
119図12は土師質の鳩笛で、胎が土師質の赤瓦に近いことから、水田焼の可能性が高い。基部は細い方形の穿孔があるのみなので、吹き口がつくのだろう。119図14は極小形の土鈴で、手捏ね成型である。119図20は窯道具で、被熱



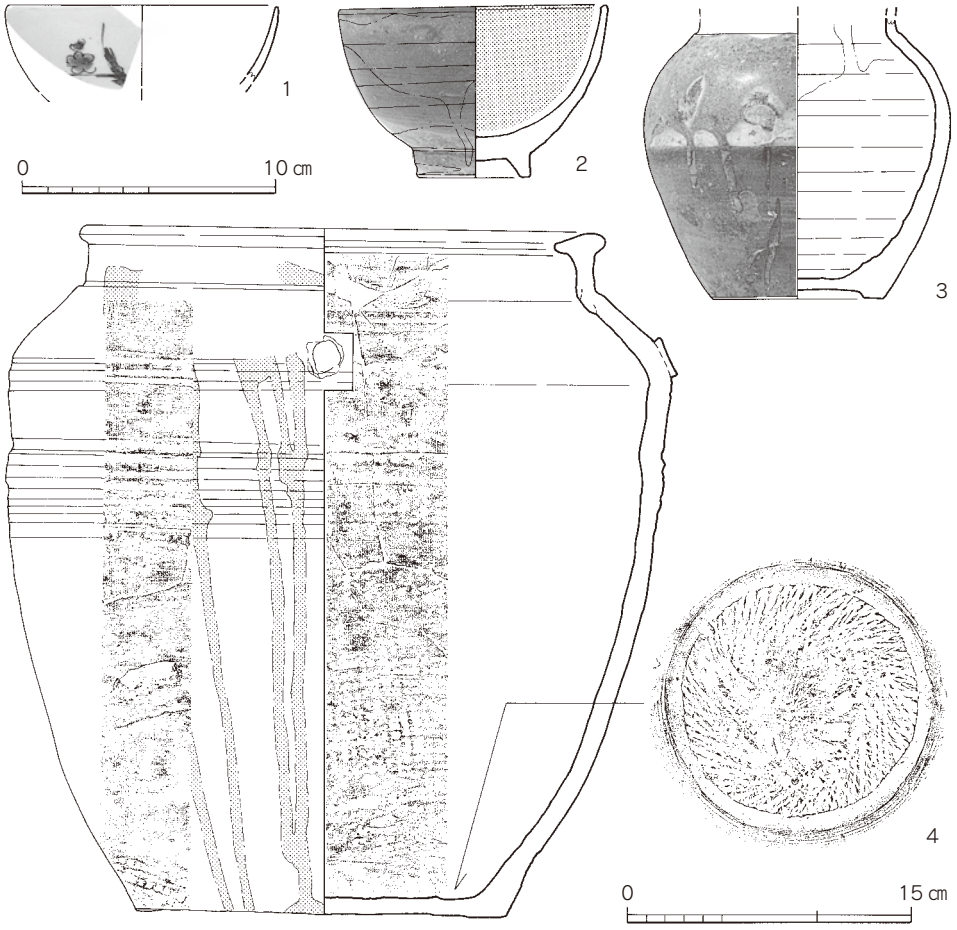
第90図　１次調査５号埋甕出土土器・磁器実測図(1は1/6、2は1/3)

をあまり受けていない面に黒い円形の痕跡がある。119図20は窯道具で、被熱をあまり受けていない面に黒い円形の痕跡がある。119図21・22はサナ状土製品で、21は歪みが大きく破片が小さいため、径を復元できない。22は外縁部の作りが荒いことから、七輪にセットされないものかもしれない。

120図１から５は大型の土人形で、鎧を着けた武者人形と、袴を履いた人形の少なくとも２種類があるようだ。胎土は大黒天人形の底部に抉りの入らないものに近く、在地産である。節句人形と思われ、彩色はなく、つくりと胎は大型土人形のいずれも同じである。120図９は灰落としの際打ち付ける部分に鉄版を貼って強化したもので、管の綴じ目に板を被せている。120図18は非常に薄い金輪であるので、それ単体で使用するものではなく、何かの部品の１つであろう。



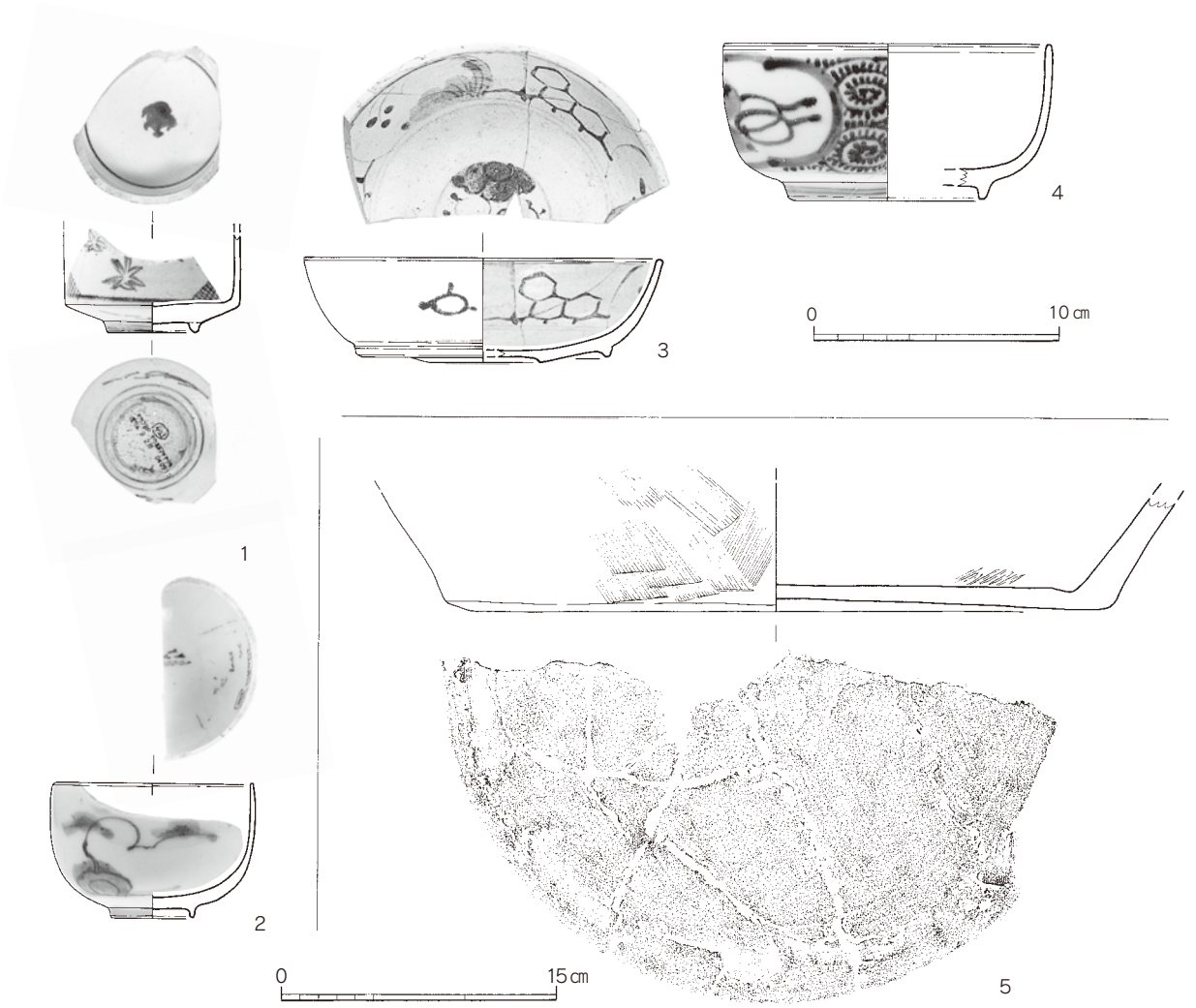
第91図　１次調査６号埋甕出土土器・陶磁器実測図(1・2は1/6、他は1/3)



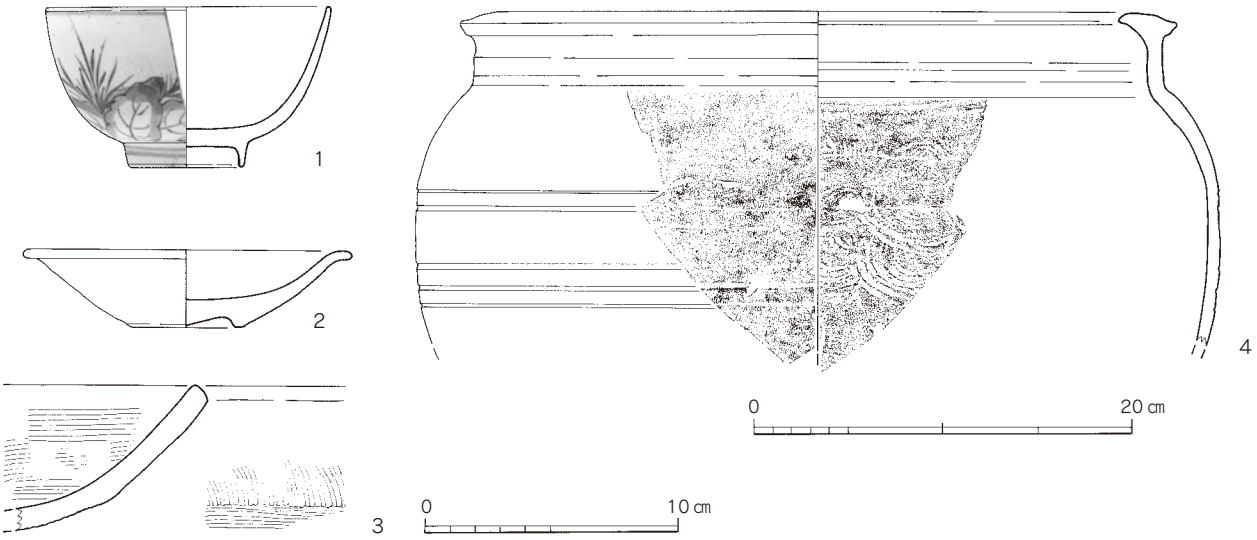
第92図　１次調査７号埋甕出土陶・磁器実測図（４は1/4、他は1/3)

121図はるつぼで、すべて被熱を強く受けており、融着物が著しいため、本来の器面や胎は観察できない。ほとんどの個体の内面には銅の粒が付着していたが、１･12･16は溶解鉄が、３は銅が流れた痕跡が残る。

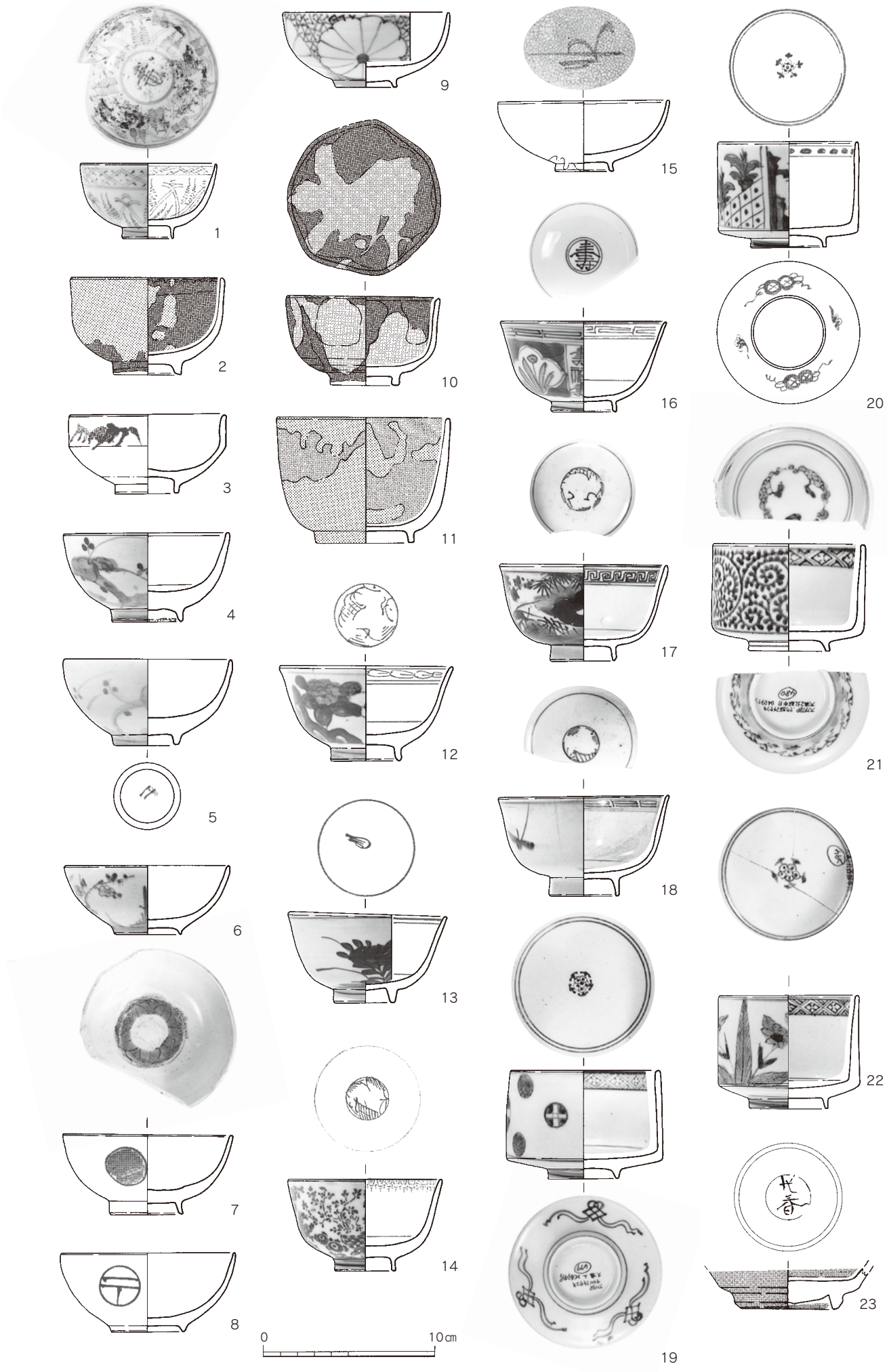
図版20－１～５は近代の撹乱土坑である20号土坑出土であったため、写真のみ掲載していた鋳型で、１は円盤形の上下の鋳型のうちの上型である。湯釜の鋳型であり、内部には製品が残ったまま廃棄されている。X線CTでスキャンしたところ、製品が確認されたがその鉄には素が多く入っており、取り出したとしても製品にならないことがわかった。これほど質の悪い鉄を使用したとは考えられないので、鋳型に問題があったのではなく、鋳造炉の不具合が鋳型に流し込んだ段階で発見されたのではないだろうか。また、X線CTによると鋳型の上部の断面が２層になっていた。これは粘土が異なっていることを示しており、別の粘土を貼り付けたものと思われる。湯口に近いことから使用に欠損を補修した痕跡であろう。このことから１度鋳型として使用しており、それを再利用しようとしているので前回はこの鋳型で鋳出すことができたと見てよく、やはり炉に問題があったのだろう。また、外面の一部に鉄部が露出しており、X線CTスキャンでは製品部分から棒状の鉄部が延びているように見えた。湯釜に取り付けるものとも考えられず、上面の釜口縁部に湯口があるので、ガス抜きにしては近すぎる。現段階ではこの小さな管状の鉄部の機能はわからない。



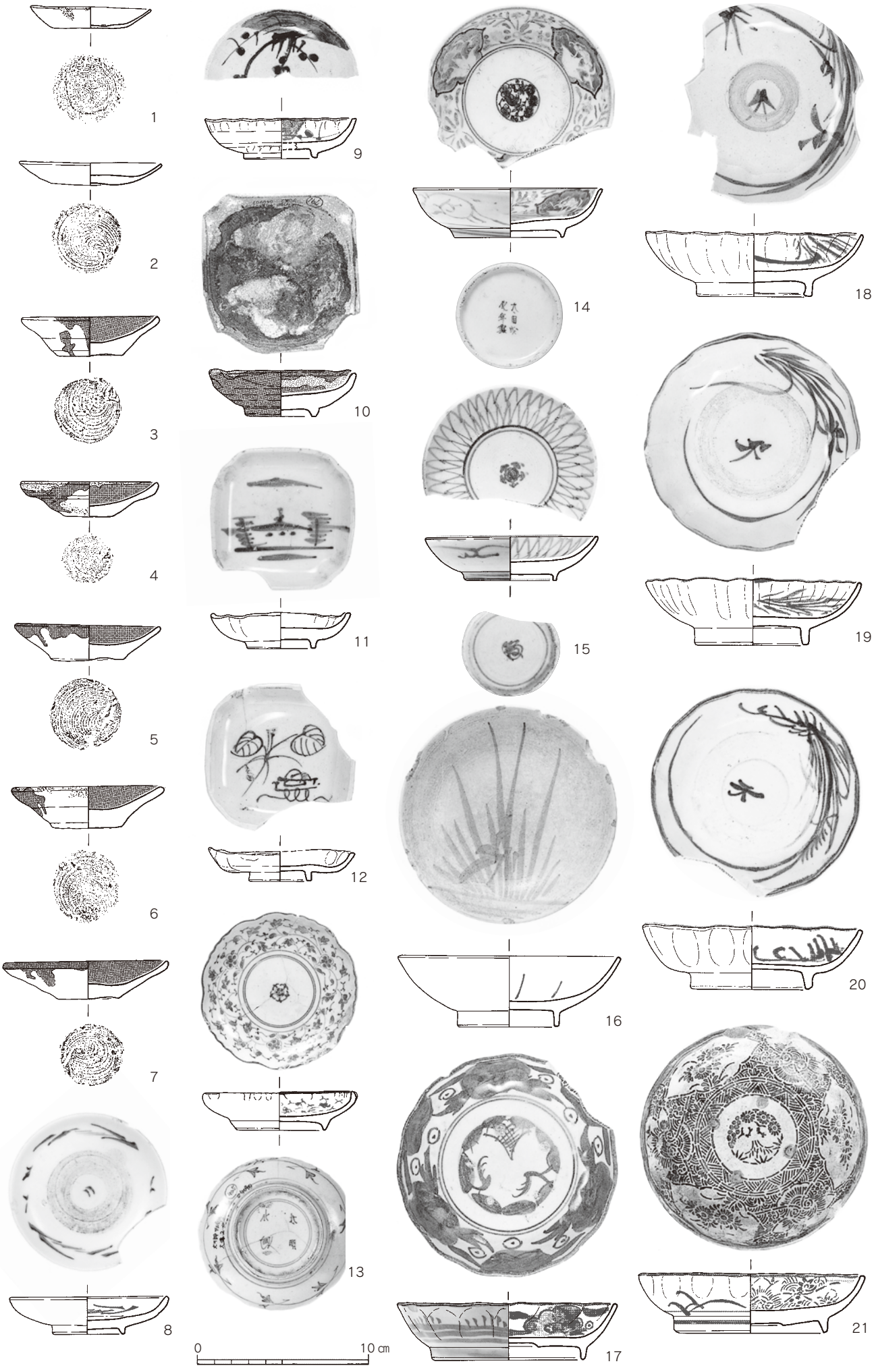
第93図　1次調査8・9号埋甕出土土器・磁器実測図(5は1/4、他は1/3)



第94図　1次調査1号大溝出土土器・陶磁器実測図(4は1/4、他は1/3)



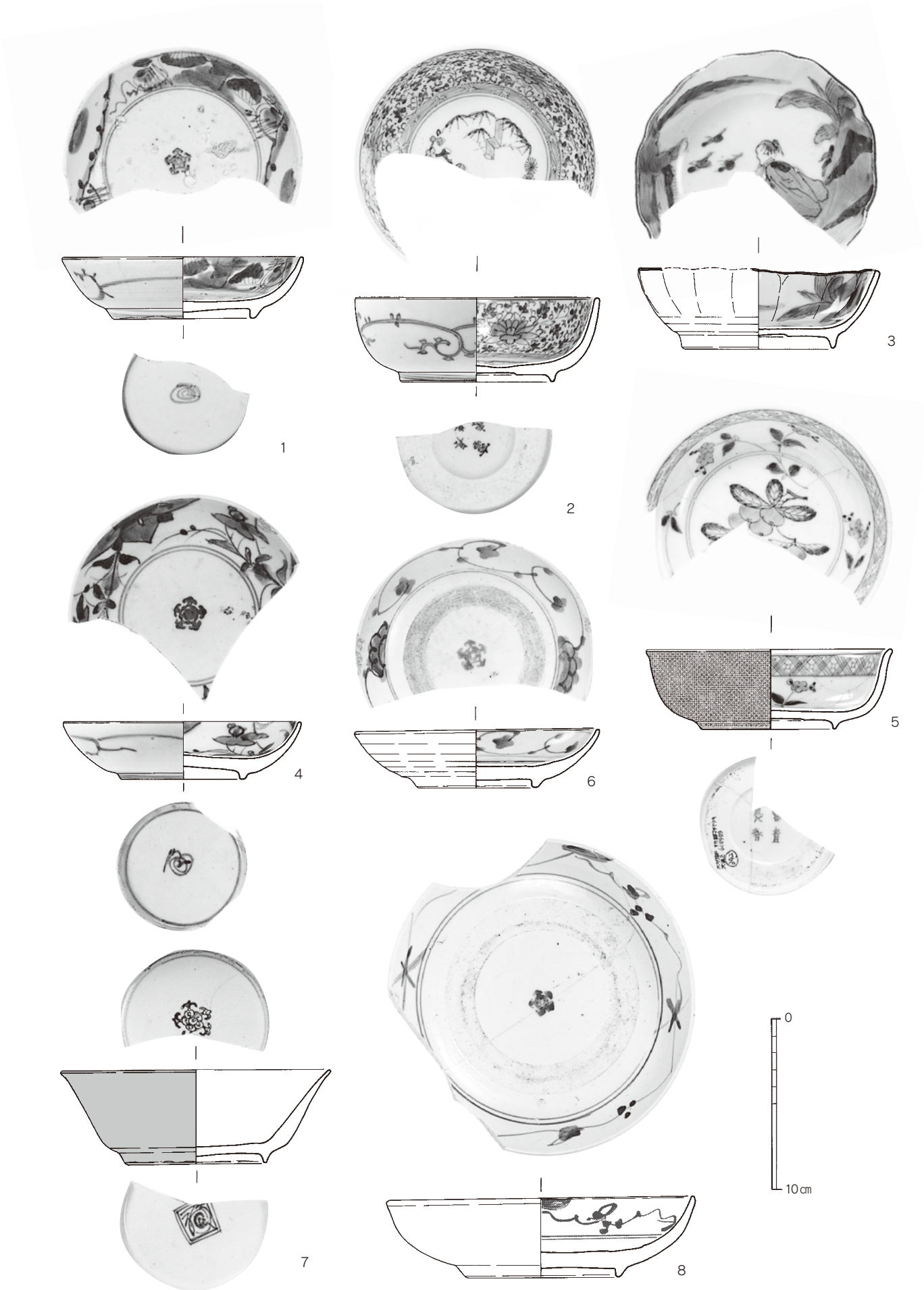
第95図　１次調査２号大溝出土陶磁器実測図１(1/3)



第96図　１次調査２号大溝出土陶磁器実測図２(1/3)

表43　1次調査出土土器・陶磁器観察表16

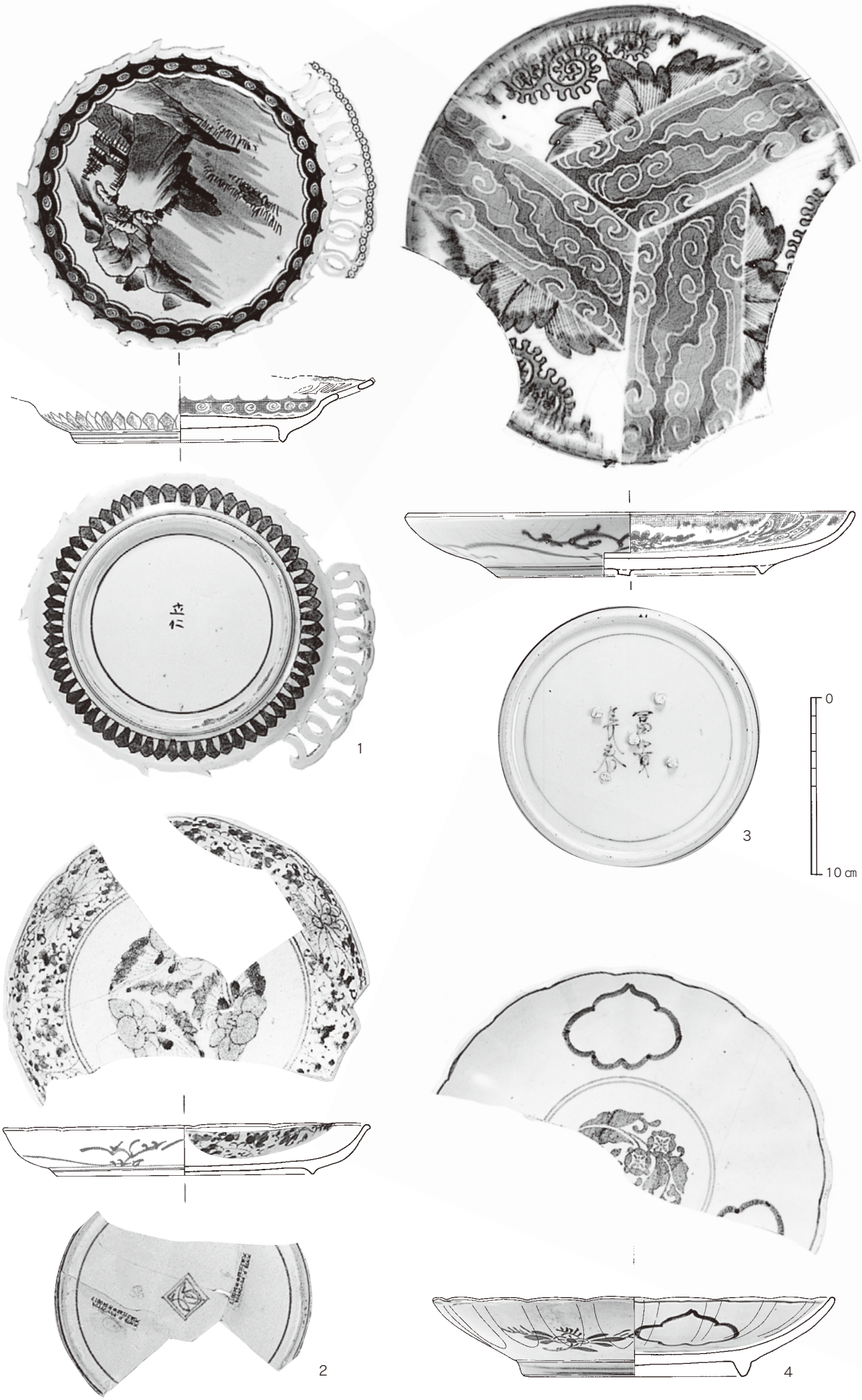
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝1 94図1	碗	口径11.3 高台径4.6 器高6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に草葉文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1690 ～ 1720
大溝1上層 94図2	小皿	口径(12.9) 底径4.4 器高3.1	陶器 橙灰色	長石釉が内面から外面口縁部に掛かる　外底削り出しで碁笥底状		底部露胎	見込みに胎土目付着	不明	不明
大溝1 94図3	焙烙	—	土師質土器 灰色 軟質	—	内面ハケ状の横ナデ、外面体部は縦ハケ、底部は斜めハケ	不明	外面煤付著しい	在地	不明
大溝1 94図4	鉢 半胴甕	口径(38.0)	陶器 外面側暗紫灰褐色～内面側橙灰色	内外面鉄釉掛け 内面側は発色不良	外面カキ目と格子タタキ痕、内面同心円文痕	口唇部に貝目跡		肥前	17世紀後半
大溝2北部上層 95図1	小碗	口径7.9 高台径2.8 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面口縁部は変形四方襷文帯、内面口縁部は変化格子目文帯、内外変形露草文の呉須染付	畳付釉剥ぎ	9割残存	肥前	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大溝2 95図2	碗	口径(10.2) 高台径4.0 器高5.6	陶器 明黄灰色	黄褐色の灰釉全面の上に外面のみ灰白色の灰釉上掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大溝2北部 95図3	碗 腰折形	口径(9.2) 高台径3.8 器高4.6	陶器 にぶい黄灰色	外面は鉄絵と緑灰色の灰釉で竹笹文、最後に外面胴下位以下を除いて透明釉掛け　貫入あり		底部露胎		肥前	18世紀後半
大溝2 95図4	碗 くらわんか手	口径9.5 高台径3.9 器高5.1	磁器 灰白色	暗い透明釉全面掛け	外面は花輪文、裏銘は「大明」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1700
大溝2北部中層 95図5	碗 くらわんか手 半球形	口径(9.9) 高台径(3.9) 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は花輪文、裏銘は「大明」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
大溝2北部中層 95図6	碗 半球形	口径9.4 高台径3.8 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は梅樹文・竹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大溝2 95図7	小型碗	口径(9.9) 高台径4.3 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面に赤絵の丸文、見込みは蛇ノ目釉剥ぎして緑彩を塗布した上に黒彩で花弁を描く花弁の周囲に赤彩の界線　口紅の上絵付け	高台内面に砂目付着		肥前	不明
大溝2 95図8	碗 半球形	口径10.2 高台径4.4 器高4.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面は郵便局の記号状の家紋文を手書き呉須染付	—		肥前	1710 ～ 1740
大溝2北部中層 95図9	碗 半球形	口径9.7 高台径3.6 器高4.4	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は氷裂文地に菊花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
大溝2 95図10	碗 拳骨形	口径8.4 高台径4.0 器高5.1	陶器 にぶい黄灰色	鉄釉を全面に掛け、その上に藁灰釉を流し掛け　側面はオサエによる窪みあり		畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	小石原	不明
大溝2北部 95図11	碗 腰張形	口径(10.2) 高台径5.8 器高7.3	陶器 にぶい灰色	鉄釉を全面に掛け、その上に藁灰釉を流し掛け		畳付釉剥ぎ		小石原	不明
大溝2北部中層 95図12	碗 端反形	口径10.1 高台径4.1 器高5.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は蝶・牡丹文　内面口縁部鎖文、見込みに崩れた環状松竹梅文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		須恵焼か	19世紀中葉
大溝2北部上層 95図13	碗 端反形	口径9.2 高台径3.6 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は花文・蝶文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝2北部上層 95図14 図版16	小型碗 端反形	口径9.0 高台径3.6 器高5.3	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面壺に生けられた菊花と花木文、内面口縁部は瓔珞文が型紙刷り、見込みは崩れた環状松竹梅文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	完形	不明	19世紀後半
大溝2北部中層 95図15	碗 半球形	口径9.9 高台径3.4 器高4.2	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける 貫入あり	見込みに鉄絵の山水文あり	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
大溝2北部中層 95図16	碗 端反形	口径9.5 高台径3.6 器高5.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	口縁部は内外間延びした雷文帯、外面はダミの中に花弁形の窓文内花文とその間に「寿福寿」と「福寿福」が交互に入る、見込みに寿文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝2北部 95図17	碗 端反形	口径9.8 高台径3.8 器高5.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は樹文と花樹文、内面口縁部は雷文帯、見込みは崩れた環状松竹梅文をコバルト染付、外面は金彩の上絵付け	畳付釉剥ぎ	7割残存	肥前	19世紀後半
大溝2北部上層 95図18	碗 端反形	口径10.0 高台径4.1 器高5.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	外面は蝶か虫文と樹文、内面口縁部はダミ上に崩れた雷文帯う、見込みに崩れた環状松竹梅文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	5割残存	肥前	19世紀後半
大溝2北部中層 95図19	碗 筒形	口径8.7 高台径4.2 器高6.4	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は丸の中に斜格子・亀甲などのモチーフが描かれる丸文散らし　体部下位は宝文、内面口縁部は袈裟襷文帯で、見込みに5弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	7割残存	肥前	1780 ～ 1810
大溝2北部中層 95図20 図版16	碗 筒形	口径8.2 高台径4.3 器高6.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は2分割され、同じモチーフが描かれる　竹文を左端にして、山を遠景に入れて右端は幾何学文に草花　体部下位は宝文、内面口縁部は珠文帯で、見込みに5弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1780 ～ 1810



第97図　1次調査2号大溝出土磁器実測図1 (1/3)

表44　1次調査出土土器・陶磁器観察表17

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
大溝２北部 95図21	碗 筒形	口径8.9 高台径4.7 器高6.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は蛸唐草文　体部下位は不明モチーフ、内面口縁部は四方襷文帯で、見込みに環状梅樹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1780 ～ 1810
大溝２北部北西部中層 95図22	碗 筒形	口径8.2 高台径4.6 器高6.5	磁器 灰白色	やや暗い透明釉を全面に掛ける	外面は４分割され、３つ葉の花文と丸い実のつく草文が同じモチーフが対面に描かれ、内面は口縁部は袈裟襷帯で、見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	５割残存	肥前	1780 ～ 1810
大溝２北部中層 95図23	碗	高台径5.8	磁器 灰色	青磁釉	高台内ヘラ削り　見込みに片切り彫の円の中に、毛彫りで丸の中に「大春」	畳付釉剥ぎ		龍泉窯	不明
大溝２北部上層 96図１	小皿	口径7.1 底径4.2 器高1.3	土師質土器 完形のため不明	—	外底糸切り 外面ナデ　内面螺旋ナデ	内面底部と胴部の境界が焼成不良なのは重ね焼きのため	外面口縁部に煤付着 内面変色	蒲池焼	不明
大溝２北部中層 96図２	小皿	口径8.4 底径3.9 器高1.3	土師質土器 黄白～黄橙色 軟質	—	内外螺旋ナデ　外底糸切り	不明	赤変は焼成が強いため	蒲池焼	不明
大溝２北部中層 96図３	小皿	口径8.1 底径3.8 器高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面裾縁まで	外底糸切り	内面に同じ器種の底部の大きさの重ね焼き痕		肥前	不明
大溝２ 96図４	小皿	口径8.2 底径2.9 器高2.1	陶器 にぶい橙灰色	発色の悪い鉄釉が内面から外面口縁部に掛かる	外底糸切り 内外面ナデ	底部露胎	口縁部の一部に煤付着	肥前	不明
大溝２北部中層 96図５	小皿	口径8.6 底径4.0 器高2.2	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面裾縁まで	外底糸切り	不明		肥前	不明
大溝２北部上層 96図６ 図版16	小皿	口径8.5 底径4.2 器高2.5	陶器 橙褐色	鉄釉が内面から外面口縁部に掛かる	外底糸切り 内外面ナデ	底部露胎　胎土目跡あり	口縁部の打ち欠き部に煤付着	肥前	不明
大溝２北部中層 96図７	小皿	口径9.7 底径3.6 器高2.3	陶器 橙褐色	鉄釉を内面から外面裾縁まで	外底糸切り	内面に同じ器種の底部の大きさの砂目付 外底にもわずかに付着		肥前	不明
大溝２北部上層 96図８	小皿	口径9.2 高台径3.8 器高2.7	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は植物文、見込みは葉文か　呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕と融着片あり	肥前	19世紀中葉
大溝２北部中層 96図９	小皿 菊花形	口径(8.9) 高台径4.3 器高2.3	磁器 灰白色	発色不良の透明釉　全面	型打ち成型　見込みに梅樹文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大溝２ 96図10 図版16	小皿 変形小皿 方形	一辺8.6 高台径3.9 器高2.7	陶器 暗灰色	鉄釉を全面掛けた上に、内面灰白色の藁灰釉流し掛け		畳付釉剥ぎ		肥前	不明
大溝２北部中層 96図11	小皿 変形小皿 方形	一辺8.2 高台径4.0 器高2.1	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	糸切り細工の型押し成型で、見込みに山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝２北部上層 96図12	小皿 変形小皿 方形	一辺8.5 高台径3.7 器高1.9	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	糸切り細工の型押し成型で、見込みに山芋葉文と宝文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みにハリ目跡３つ	へたれている	肥前	19世紀中葉
大溝２ 96図13	小皿 花弁形	口径8.8 高台径4.4 器高2.1	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	型作りで、花弁形に成型、内外面は花唐草文、見込みは５弁花文、裏銘は「大明化製」を呉須染付　口錆あり	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1680 ～ 1700
大溝２北部 96図14	小皿 藍錦手	口径(11.5) 高台径6.5 器高2.9	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面楓葉唐草文、内面は胴部に染付の雲形窓文内の赤と金彩の花文、その間には黒と赤と緑彩の花葉文、見込みに赤彩の蕨手文帯と中心に染付の松竹梅と鳥文、外底の裏銘は「大明成化年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着		肥前	18世紀後半 ～ 19世紀前半
大溝２北部 96図15	小皿	口径10.1 高台径7.3 器高2.6	磁器 灰白色	やや暗い透明釉全面掛け	外面は唐草文、内面は網目文、見込みは５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着	７割残存	肥前	1680 ～ 1740
大溝２北部上層 96図16 図版17	５寸皿	口径13.1 底径6.0 器高4.1	磁器 灰白色 やや粗放	透明釉全面掛け 焼成不良で白濁	外面鳥文、見込みに水草文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		不明	19世紀後半
大溝２北部上層 96図17	小皿 菊花形	口径12.7 高台径8.7 器高3.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	型打ち成型　外面水面文か　内面花文、見込みに環状の不明文　口錆状にコバルト染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ　見込みにハリ目跡５つあり		肥前	19世紀後半
大溝２北部 96図18	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.7 高台径6.8 器高3.8	磁器 暗い灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　菖蒲文と見込みに蝶文、口錆状にコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前か	19世紀中葉
大溝２北部 96図19	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.6 高台径6.7 器高3.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　水草文と見込みに蝶文、口錆状にコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝２北部 96図20	小皿 ５寸皿 菊花形	口径12.8 高台径7.1 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉　全面	型打ち成型　水草文と見込みに蝶文、口錆状にコバルト染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝２北部上層 96図21	５寸皿 菊花形	口径13.1 底径9.0 器高3.5	磁器 灰白色 やや粗放	透明釉全面掛け 焼成不良	型打ち成型　外面草文、内面型紙刷で、牡丹文地に窓内菊花文、見込みは環状松竹梅文で、口錆状に呉須染付	高台内蛇ノ目釉剥ぎ 見込みにハリ目跡４つあり		波佐見か	19世紀後半

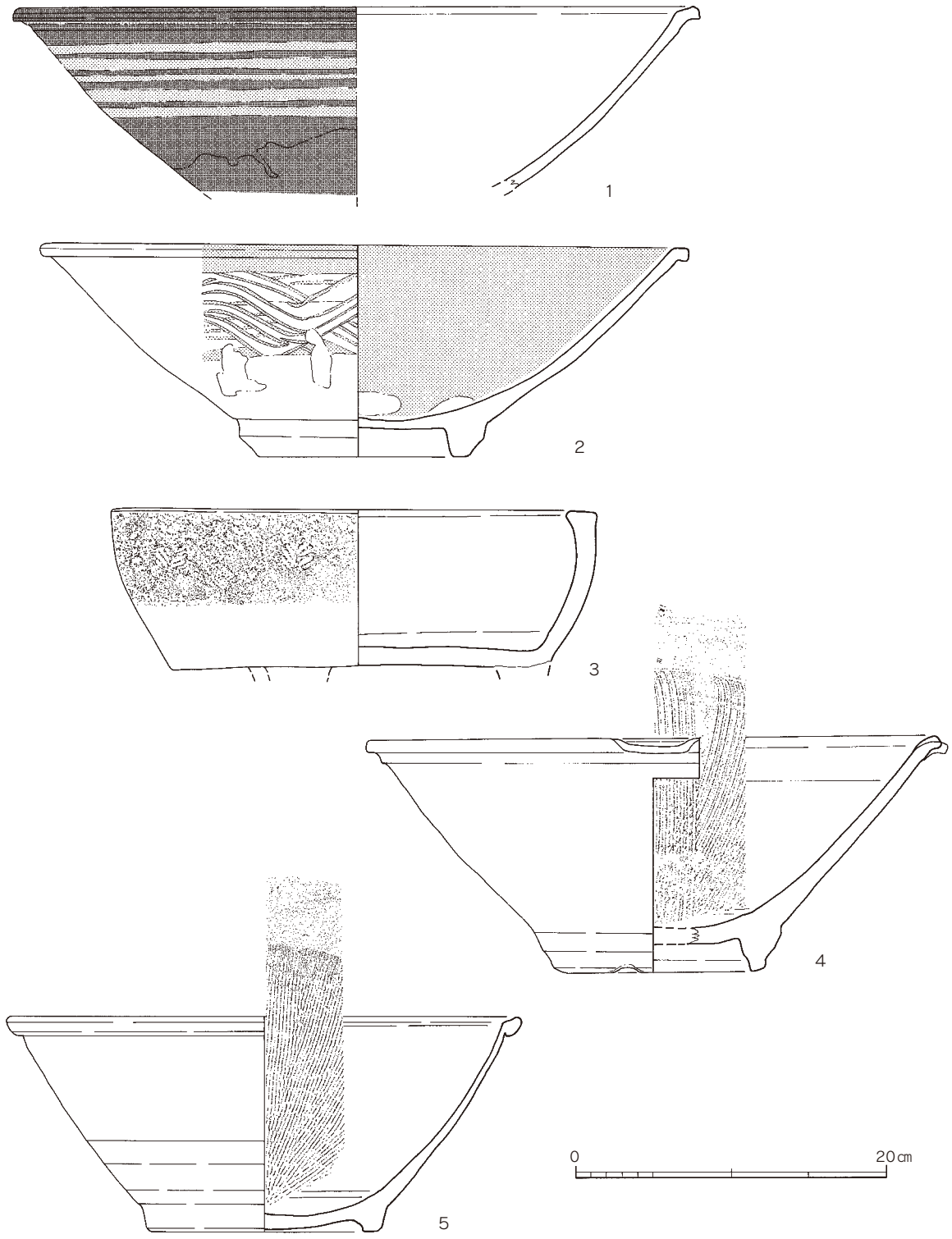


第98図　1次調査2号大溝出土磁器実測図2 (1/3)

表45　1次調査出土土器・陶磁器観察表18

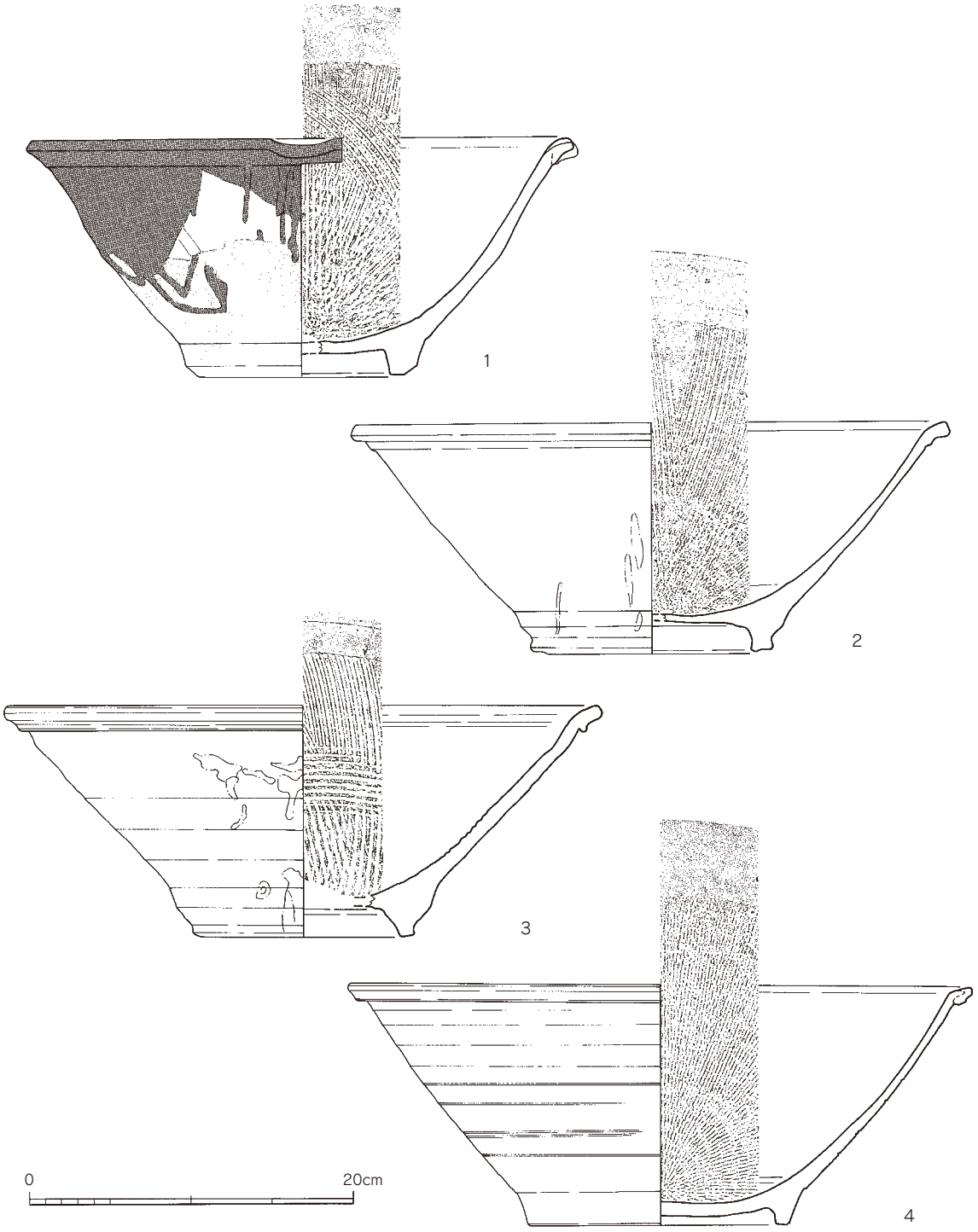
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝２北部 97図１	小皿 くらわんか手	口径14.1 高台径8.4 器高3.6	磁器 灰白色	暗い透明釉　全面掛け	外面は唐草文、内面は半花輪文と葉文、見込みは５弁花文、裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ	５割残存 見込みにひっつきあり	波佐見	1680 ～ 1740
大溝２北部 97図２	皿	口径14.2 高台径9.0 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は唐草文、内面は花唐草文、見込みは環状松竹梅文、裏銘「富貴長春」を呉須染付　墨書あり	外底は蛇ノ目高台状で、台部は露胎		肥前	1740 ～ 1780
大溝２ 97図３	小皿 菊花形	口径14.0 高台径9.0 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	型打ち成型　内面に山水文と鳥・人物文を呉須染付　口錆あり	蛇ノ目高台で台部釉剥ぎ		肥前	1810 ～ 1860
大溝２北部 97図４	小皿 くらわんか手 5寸皿	口径(13.8) 高台径7.2 器高3.4	磁器 灰白色	やや暗い透明釉 全面掛け	外面は唐草文、内面は桔梗文、見込みの５弁花文はコンニャク印判刷り　裏銘に渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着	口縁部は斜めに平坦面をもつ花弁で、長いものと短いものがある	波佐見	18世紀中葉
大溝２ 97図５	皿	口径14.3 高台径7.8 器高4.6	磁器 灰白色	外面は青磁釉、外底と内面は透明釉を掛ける	内面口縁部変形四方襷文、胴部は花文、見込みは枇杷文、裏銘は「富貴長春」を呉須染付	蛇ノ目高台で、台部釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
大溝２北部中層 97図６	小皿 5寸皿 くらわんか手	口径14.3 高台径7.2 器高3.5	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は無文、内面は半菊唐草文、見込みは５弁花文のコンニャク印判刷りの呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込み蛇ノ目釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740
大溝２北部 97図７	皿	口径15.8 高台径8.3 器高5.5	磁器 灰白色	内面透明釉、外面青磁釉　貫入あり	見込みは５弁花文、裏銘渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀後半
大溝２北部中層 97図８	中皿	口径18.0 高台径9.1 器高4.7	磁器 灰白色	透明釉　全面	内面に花文と唐草文　見込みに５弁花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 見込みに蛇ノ目釉剥ぎ	蛇ノ目釉剥ぎ部に重ね焼き痕	波佐見	1680 ～ 1740
大溝２ 98図１	中皿	口径21.8 高台径11.8 器高3.6	磁器 灰白色	透明釉　全面	口縁部は切り抜きによる透かしで、外面剣状葉文帯で、内面口縁部は連続丸文、見込みに墨引きの螺旋文と山水文　裏銘は「立仁」をコバルト染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着	「立仁」は立林仁蔵の略	有田 立林窯	19世紀末
大溝２北部中層 98図２	中皿 花弁口縁	口径20.7 高台径14.5 器高2.9	磁器 暗灰白色	発色不良の透明釉 全面掛け	型打ち成型　外面は唐草文、内面は花唐草文、見込みに環状牡丹花文、外底の裏銘は渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着　ハリ目跡２つ外底にあり　位置関係から本来３つか		肥前	1680 ～ 1700
大溝２ 98図３	中皿	口径25.6 高台径15.0 器高3.7	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面側は唐草文、内面は蛸唐草文と葉文、雲文が幾何学的に配置されている　裏銘は「富貴長春」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目跡５つあり		肥前	18世紀前半
大溝２北部 98図４	皿 花弁形	口径(22.7) 高台径(12.6) 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 発色不良で乳白色を呈する	型打ち成型　外面は蔓を延ばさない七宝文の花唐草文、内面は口縁部に雲形窓文、見込みに型紙刷りの花文を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目跡の有無は不明		肥前	1680 ～ 1740
大溝２北部上層 99図１	中皿 花弁口縁	口径20.4 高台径12.4 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	型打ち成型　外面は唐草文、内面は松竹梅文、見込みに５弁花文、外底の裏銘は「大明成化年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目跡５つ外底にあり		肥前	1740 ～ 1780
大溝２北部上層 99図２	大皿	口径40.0 底径21.1 器高8.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	内面に花唐草文、見込みに山水文、外面は唐草文、裏銘は「福」を呉須染付	畳付釉剥ぎ　ハリ目跡５つあり		肥前	1740 ～ 1780
大溝２北部中層 99図３	鉢	口径(21.7) 高台径10.0 器高7.0	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け 貫入あり	外面は唐草文、内面は蝶と牡丹花文、裏銘渦福を呉須染付	畳付釉剥ぎ　砂目付着		肥前	1700 ～ 1740
大溝２北部上層 99図４	鉢	口径31.6 高台径12.4 器高12.0	陶器 暗紫灰色	内外白化粧土を掛けた後、外面上半は柳釉剥ぎ、下半は鉄釉ハケ掛け、内面から外面上半に透明釉を掛ける		畳付釉剥ぎ 見込みに砂目跡付着	外面の一部に白化粧土・鉄釉・透明釉のすべてが縮れて剥がれている	肥前か	19世紀代か
大溝２北部中層 100図１	大鉢	口径(44.2)	陶器 外面上位以下は暗紫灰色、外面上位から内面は黄白灰色	外面上位以下に鉄漿をハケ掛けした後、外面上半分に白化粧土を塗布して帯状掻き取りし、最後に透明釉を内面から外面胴中位まで掛ける		—		不明	1690 ～ 1750
大溝２ 100図２	大鉢	口径(41.8) 高台径15.8 器高13.7	陶器 橙褐色	内外に鉄漿をハケ掛けした後、外面上半分に白化粧土を塗布して柳状掻き取りし、内面から外面口縁部に白化粧土をハケ掛けする		見込みに胎土目跡が７つあり、畳付けに胎土目が４つ残っている　痕跡が３つあり本来は７つだった		肥前か	1690 ～ 1750
大溝２北部中層 100図３	火鉢	口径31.3 底径24.4 器高10.5	瓦質土器 にぶい淡橙灰白色が灰白色を挟む	—	内外とも器面の剥落著しい　外面は葉文のスタンプ　内面はナデ　外底に脚の剥離痕が３つある　外底はハケ状のナデ	不明	内面黒変、口唇部に煤付着	在地か	不明
大溝２北部中層 100図４	摺鉢	口径37.6 底径13.8 器高15.5	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は10本単位　外面上半ナデ、下半ケズリ	見込みに蛇の目焼き重ね痕　畳付釉剥ぎ後高台に砂目塗布		肥前	1750 ～ 1860
大溝２北部上層 100図５	摺鉢	口径(33.2) 高台径(15.2) 器高13.8	陶器 暗紫灰色　底部だけ表面橙色	鉄釉を全面に掛ける	底部糸切り 摺り目は20本単位	底部露胎　見込みに環状の砂目付着	上半の器壁が非常に薄い　底部は重ね焼きのため発色不良	肥前	19世紀後半
大溝２北部中層 101図１	摺鉢	口径34.0 高台径14.4 器高14.8	陶器 橙褐色	鉄釉は外面下半にハケ掛けした後、外面上半に厚掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ　摺り目は11本単位	見込みに蛇の目焼き重ね痕　畳付釉剥ぎ		肥前	1750 ～ 1860
大溝２北部中層 101図２	摺鉢	口径37.2 高台径13.6 器高15.2	陶器 橙褐色	鉄釉全面掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ　摺り目は13本単位	見込みに蛇の目焼き重ね痕　畳付釉剥ぎ後高台に砂目塗布		肥前	1750 ～ 1860
大溝２北部 101図３	摺鉢	口径(27.0) 高台径13.6 器高14.3	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	摺り目は15本単位　中位に横に入る 外面上半ナデ、下半ケズリ	畳付釉剥ぎ　見込みに環状重ね焼き痕あり	外底が橙色なのは焼成不良のため	肥前	1750 ～ 1860
大溝２北部上層 101図４	摺鉢	口径(38.6) 高台径8.3 器高15.0	陶器 暗紫灰色	鉄釉を全面に掛ける	底部糸切り 摺り目は18本単位以上	底部露胎　見込みに環状の砂目付着	上半の器壁が非常に薄い	肥前	19世紀後半

第99図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図3 (1/3)

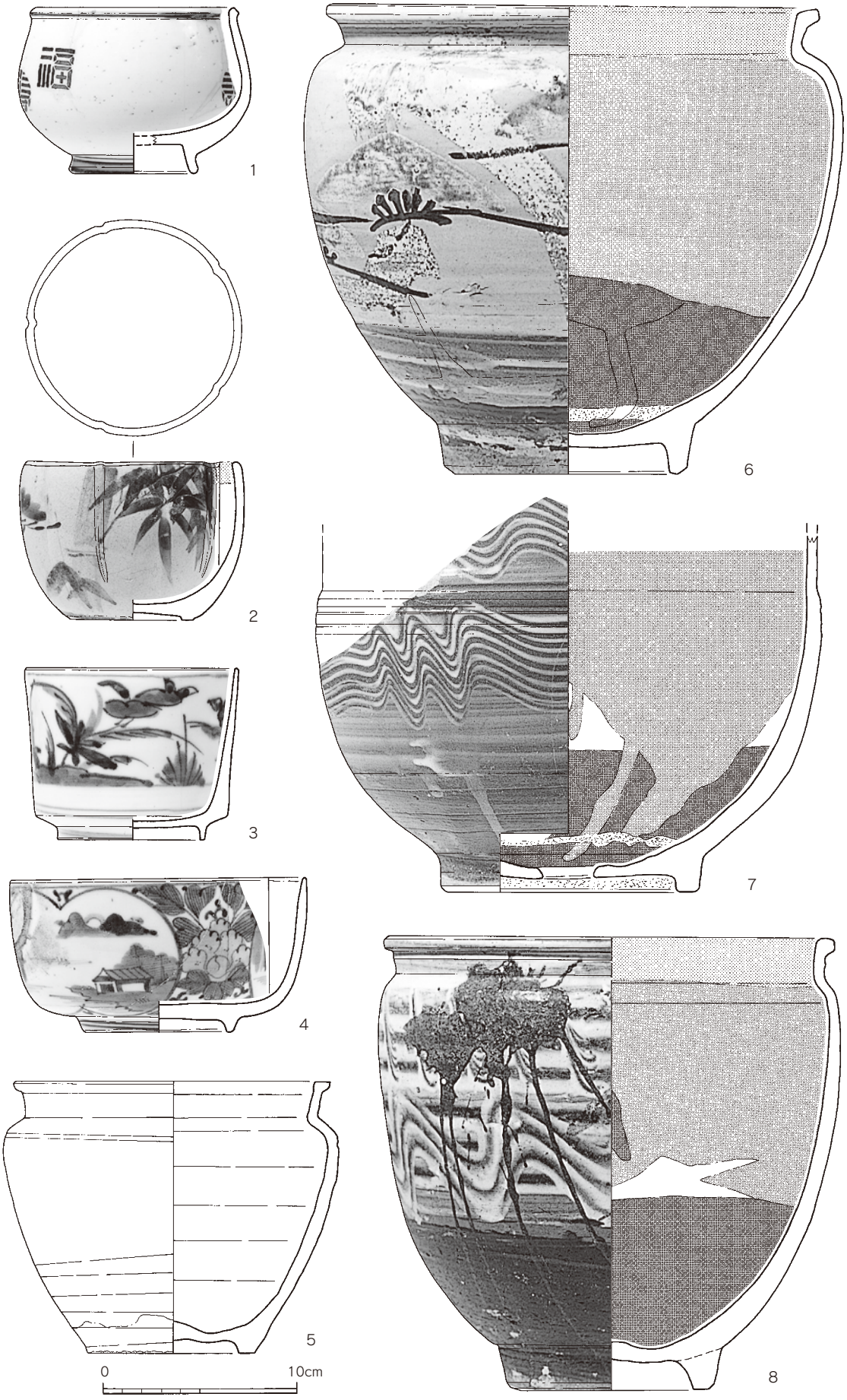


第100図　１次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図１(1/4)

欠損して剥がれた部分から、製品の表面らしい鉄錆の広がりが見られ、剥がれた部分の中子と鋳型表面の間には炭化物が存在し、製品の離脱を促す素材であったものと思われる。『大川市の民俗』の榎津地区の調査報告によると、鋳物屋では中子を外れ易くするため、臼で搗いて粉にした炭の粉を水で溶いて、刷毛で中子の表面に塗り、炭火で乾燥させ、この作業を繰り返して器表面

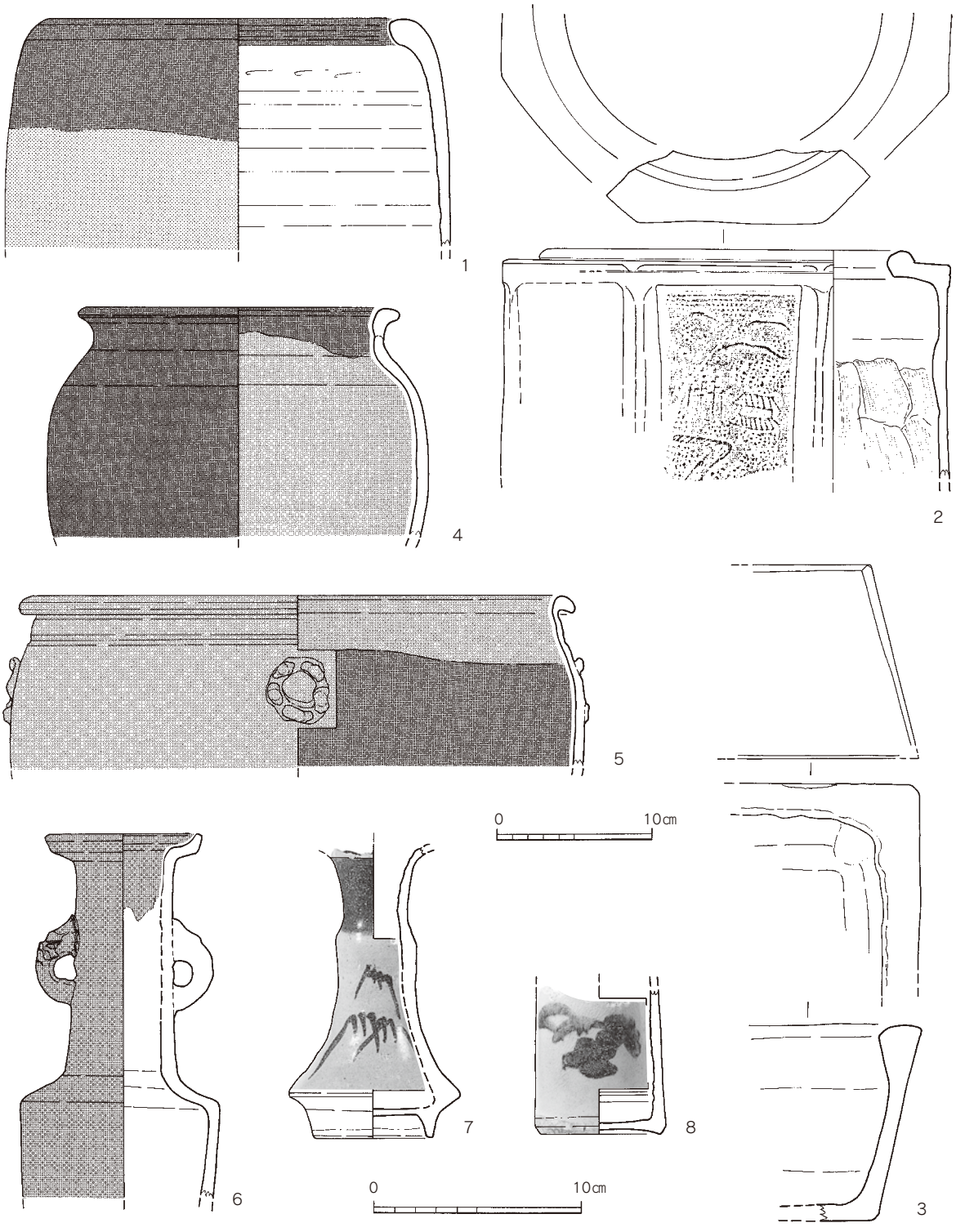


第101図　１次調査２号大溝出土陶器実測図(1/4)



第102図　1次調査2号大溝出土陶磁器実測図4 (1/3)

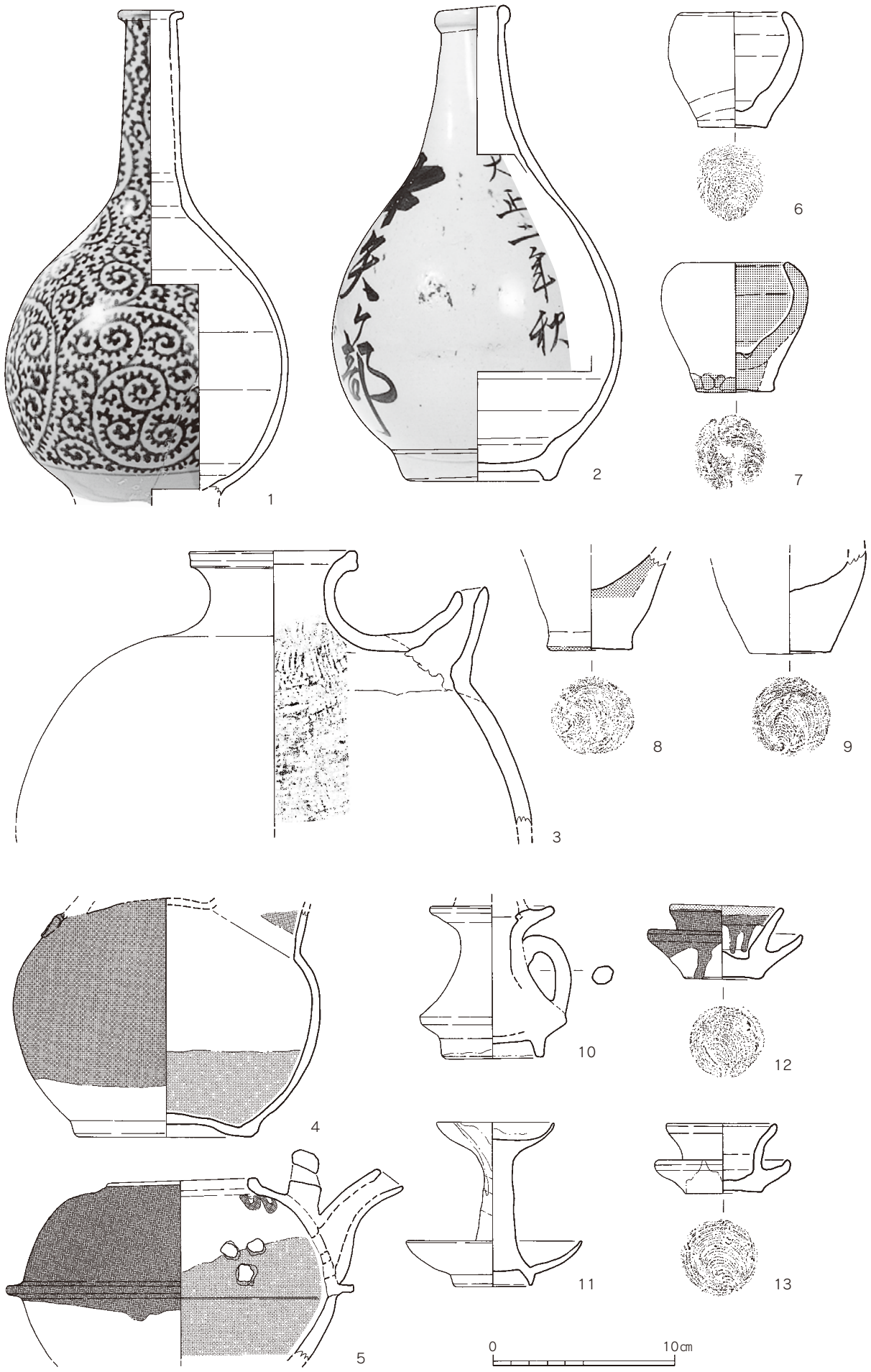
をなめらかに仕上げたとある(引用文献２)。図版20－３の鋳型内面の×形沈線は中子を外しやすくするための加工ではなく、鋳出されて陽刻になる文様だろう。この鋳型によって鋳出された製品と思われるものに３次調査１号溝出土の湯釜がある(『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』72図２)。



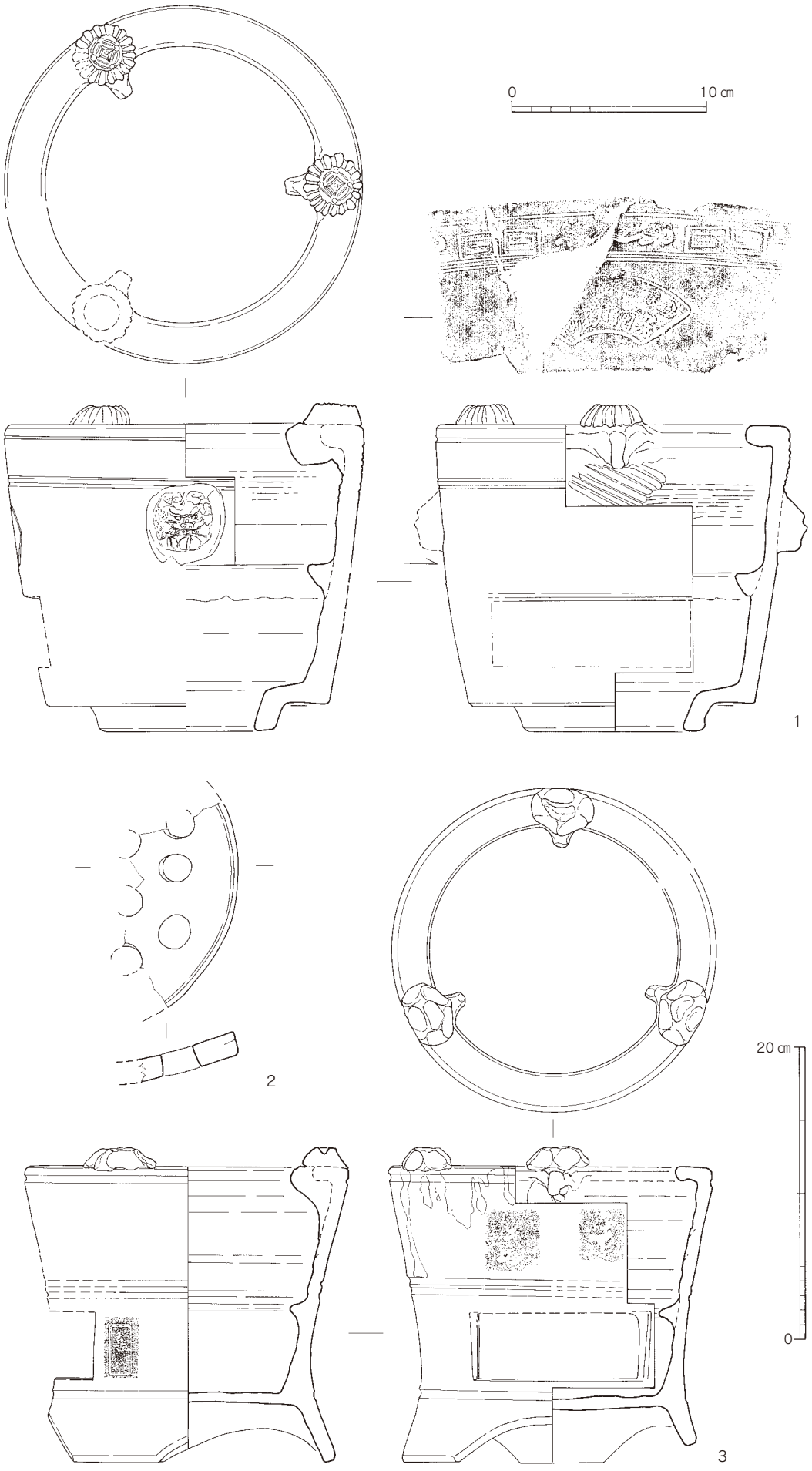
第103図　１次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図２(５は1/4、他は1/3)

表46　1次調査出土土器・陶磁器観察表19

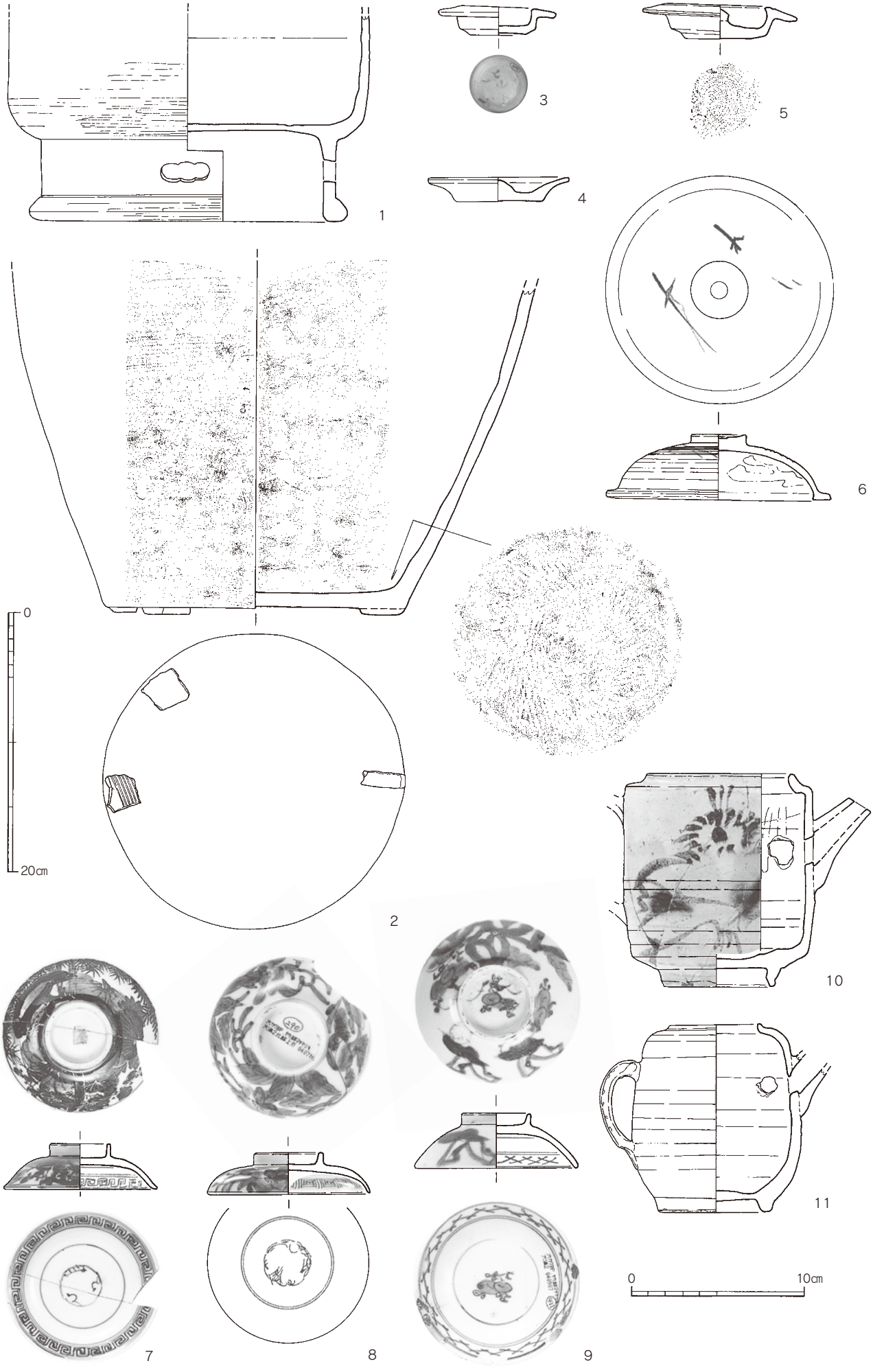
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝２上層包含層 102図１	鉢	口径(10.8) 高台径(6.6) 器高8.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面コバルトの界線を施した後、透明釉を全面掛け、最後に外面に型紙刷りで茶彩で「福」、緑彩で「寿」を上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	20世紀前半
大溝２北部中層 102図２	鉢 花弁形	口径(11.2) 底径6.2 器高8.1	陶器 にぶい黄灰色 混入物多い	型打ち成型で、外面は白化粧土の上に鉄絵の竹笹文をいれ、内面胴上位から外面に透明釉を掛ける　外面はその上に緑・紺色で松文を上絵付け　透明釉には貫入あり		底部露胎	外底の胎にざらつきあり 内面変色なし	京焼か	不明
大溝２北部 102図３	鉢 蓋物	口径(11.0) 高台径(7.4) 器高8.8	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は花草文　呉須染付	口縁部内面釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
大溝２北部中層 102図４	蓋物	口径(15.2) 高台径7.5 器高7.9	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け	外面は胴上半は牡丹花文地に、窓文内山水文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	外面に融着した別個体の破片あり	肥前	18世紀中葉 ～ 19世紀前葉
大溝２北部中層 102図５	小型鉢 半胴甕	口径(16.2) 高台径8.7 器高13.0	陶器 橙褐～暗紫灰色	鉄釉を外面全面掛け		胴下位から高台に砂目付着	内面にカルキ付着	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大溝２上層 102図６	鉢 半胴甕	口径25.2 高台径12.5 器高23.7	陶器 淡灰褐色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、内外胴下位まで鉄漿を掛け、外面胴下位から内面頸部まで白化粧土ハケ掛けし、外面胴下位は帯状掻き取り　最後に外面に鉄絵と緑彩と飴釉で松絵を上絵付け		畳付釉剥ぎ　高台に砂目付着　見込みに環状の砂目付着	白化粧土の上には透明釉を掛けていない	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大溝２ 102図７	鉢 半胴甕	高台径13.3	陶器 橙褐色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、外面胴下位には白化粧土ハケ掛けし、外面下位は帯状・櫛状掻き取り後、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛ける		畳付釉剥ぎ　高台内面に砂目付着　見込みに環状の砂目付着	底部の穿孔は焼成後なので、植木鉢に再利用している	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大溝２上層 102図８	鉢 半胴甕	口径23.0 高台径10.6 器高23.1	陶器 暗灰茶褐色	内外胴下位は鉄釉ハケ掛け、内外胴下位までオリーブ色の灰釉を掛け､外面胴下位から内面頸部まで白化粧土ハケ掛けし、外面胴部は帯状掻き取り　最後に肩部に鉄釉流し掛け		畳付釉剥ぎ　高台に砂目付着　見込みに環状の砂目付着	白化粧土の上には透明釉を掛けていない	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀中葉
大溝２北部 103図１	火鉢	口径(17.0)	土師質土器 橙灰色　金雲母を多く含む	—	外面から内面口縁部は単位がわからないほど丁寧なミガキ　外面はスリップを掛け、口縁部は炭素吸着で光沢をもつ	不明	内面上半は使用変色あり	在地	不明
大溝２ 103図２	火鉢	口径(18.0) 最大径(21.3)	瓦質土器 にぶい黄灰色 軟質	—	外面は型押しによる方形窓に山水文の陽刻、内面は口縁部は回転ナデ、胴部はハケ状工具によるケズリ	不明		在地	不明
大溝２北部中層 103図３	鉢 方形鉢	器高9.4	土師質土器 橙色　金ウンモを多く含む	—	外部と胴部の接合部内面は板状工具で放射状にオサエている　外面はスリップを掛けて丁寧なミガキ　高台側面に雲形透かし孔が対面にある	不明	変色は内底中央にのみある	在地	不明
大溝２ 103図４	小型甕	口径(15.4) 肩部(18.4)	陶器 橙～にぶい灰色	内面鉄漿を塗布し、飴釉外面から内面口縁部に掛け	口縁部外面の刻み目は、施されてない部分もあるので意図的な物か不明	口唇部釉剥後、アルミナ塗布		小石原	不明
大溝２北部上層 103図５	甕	口径(36.0)	陶器 暗黄灰～にぶい黄灰白色	内面に鉄漿を掛けた後、飴釉を全面に掛ける	肩部外面に藁灰釉の流し掛け後、花弁浮文貼り付け	口唇部中央のみ釉剥		小石原	不明
大溝２ 103図６	瓶	口径7.6	磁器 灰白色	外面から内面口縁部は青磁釉、内面頸部以下は透明釉	耳部は型押し成形で、人物の顔が陽刻されている	—		肥前	不明
大溝２ 103図７	仏花瓶 変形	高台径5.8	陶器 橙灰白色	鉄釉を内外口縁部、胴下位はオリーブ色の灰釉を掛け、外面胴中位に竹笹文を鉄絵で描いて、外面頸中位から高台まで透明釉を掛ける		畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1740
大溝２北部中層 103図８	灰吹き	底径5.8 最大径6.3	陶器 にぶい黄灰色 混入物多い	外面は白化粧土を塗布した上に鉄絵の竹笹文と赤紫色の不明モチーフがあり、内面胴下位は鉄漿、最後に外面と内面口縁部、見込みに透明釉　貫入あり		底部露胎	外底の胎にざらつきあり	京焼か	17世紀後半 ～ 18世紀前半
大溝２北部中層 104図１	瓶	口径3.6 最大径15.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は蛸唐草文　呉須染付	不明		肥前	1650 ～ 1690
大溝２北部上層 104図２	瓶	口径4.1 高台径8.4 器高26.1	磁器 灰白色	透明釉を内面頸部から外面に掛ける	外面胴部に「中矢ヶ部」「大正二年秋」「　長與田商店」「丑□」をコバルト染付	畳付釉剥ぎ		肥前	大正二年
大溝２ 104図３	変形瓶	口径9.2	陶器 外面に黒灰色、それ以外は暗紫灰色	鉄釉全面掛け	内面に格子目タタキ当て具痕あり 注口は手捏ね成形	—	底部は欠損しているが、平底の船徳利形だろう	肥前	1690 ～ 1780
大溝２上層 104図４	尿瓶	胴径16.8 底径10.1	陶器 灰色	銅緑釉を外面胴中位以上から注口内面に掛け　内底は灰釉掛け	外底は削り出しで碁笥底状を呈す	底部露胎	内面カルキ付着	肥前	19世紀後半
大溝２北部中層 104図５	土瓶	口径8.1	陶器 灰色　混入物あり　粗放	黒釉を外面胴下位から口縁部に、内面はオリーブ色の灰釉を胴中位以下に掛ける	外面胴下半はケズリ、胴上半は型押し成型らしくオサエ痕がある　把手は型押し成型　胴中位内面には接合痕跡が未調整で残る	口唇部釉剥ぎ	内外使用変色なし	小石原	不明
大溝２北部中層 104図６	焼塩壺	口径5.5 高台径4.4 器高6.3	土師質土器 灰黄橙色	—	外底糸切り 内外面ナデ	—	断面の赤変なし	在地	不明
大溝２北部中層 104図７	焼塩壺	口径(6.0) 底径4.1 器高6.0	土師質土器 にぶい黄灰白色 精良	—	外底糸切り　内外面ナデ　内底中央部は工具痕の窪みがある	—	断面赤変し、底部と口縁部が外面まで赤変する	蒲池焼	不明
大溝２北部中層 104図８	焼塩壺	底径4.7	土師質土器 黄灰白色　精良	—	外底糸切り 内外面ナデ	—	断面中央部赤変、外底も赤変している	蒲池焼	不明



第104図　１次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図３(1/3)



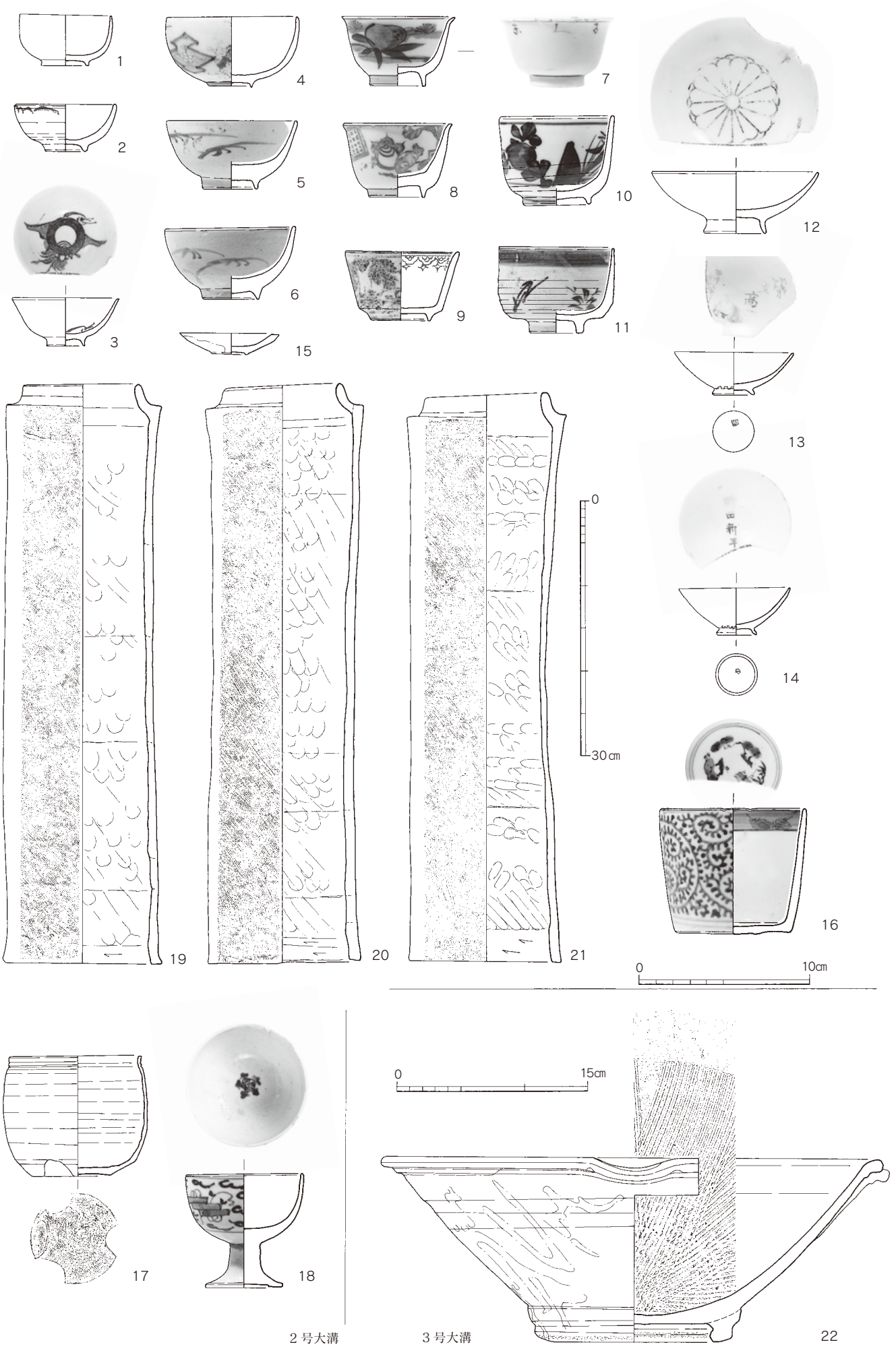
第105図　１次調査２号大溝出土土器実測図（３は1/4、他は1/3）



第106図　１次調査２号大溝出土土器・陶磁器実測図４（２は1/4、他は1/3)

表47　1次調査出土土器・陶磁器観察表20

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝２北部中層 104図９	焼塩壺	底径4.5	土師質土器 にぶい黄灰 白色　精良	—	外底糸切り 内外面ナデ	—	断面赤変は見られないが、外底が黒変している	蒲池焼	不明
大溝２北部上層 104図10	瓶 乗燭	高台径5.6 最大径8.0	陶器 淡紫灰色	黒釉全面掛け	把手は手捏ね成型	畳付にアルミナ付着		肥前	不明
大溝２北部中層 104図11	灯明受皿	口径6.4 最大径9.6 底径4.3	陶器 橙 褐 色～灰黒色	鉄釉を内面から外面裾中位まで	高台内は削り出し	裾下半露胎	裾部外面中位まで露胎	肥前	不明
大溝２北部中層 104図12	灯明受皿	口径6.3 最大径8.5 底径4.3	陶器 橙褐色	発色の悪い鉄釉を内面胴部から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎 口縁部アルミナ塗布		肥前	不明
大溝２北部中層 104図13	灯明受皿	口径6.1 最大径7.4 底径4.2	陶器 橙褐色	発色の悪い鉄釉を内面から外面裾中位まで	外底は糸切り	裾下半露胎		肥前	不明
大溝２北部上層 105図１	七輪	口径18.4 裾径9.3 器高16.8	土師質土器 黄橙色	—	型押し成型で、外面はナデ、内面は下位がケズリ、上位はハケ、内面の突起部の接合部は櫛歯状のハケが入り、内面上面の突起部と側面の獅子面は別造りの型押し成型したものを貼り付けている　最後に全面スリップ掛け　外面の文様はスタンプと沈線	不明		博多	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大溝２北部上層 105図２	七輪サナ	径(18.0) 厚さ1.2	土師質土器 暗黄橙色		穿孔径1.8	不明	下面のみが火を強く受ける	在地	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大溝２北部上層 105図３	七輪	口径22.2 高台径21.0 器高21.6	土師質土器 黄橙色	—	型押し成型で、内面の突起部の接合部は櫛歯状のハケが入り、内面上面の突起部は別造りの型押し成型したものを貼り付けている　外面の文様はスタンプと沈線	不明	内面使用変色 ほぼ完形	在地	19世紀後半 ～ 20世紀前半
大溝２ 106図１	火鉢	口径(16.0)	土師質土器 暗 黄 灰～橙灰色　金雲母入る	口縁部に黒色炭素を吸着させ、内面口縁部から外面はミガキ痕が残らないミガキ　内面はケズリ		—	胎は灰白色でないので蒲池焼でないかもしれない	蒲池焼か	不明
大溝２北部 106図２	中型甕	底径(21.4)	陶器 暗紫灰色	鉄釉全面掛け	内面は格子目タタキ痕をナデ消し、外面下位は同様だがナデ消しが弱く、上位はカキ目　内底は平行タタキ痕が環状にまわる 内面は積み上げ痕が残る　外底は未調整	外底に胎土目の代わりに陶器片を使用		二川焼か	不明
大溝２ 106図３	蓋	裾径6.8 底径3.2 器高1.7	陶器 暗紫灰色	黒釉を上面に掛ける	底部は回転糸切り　底部に墨書あり「ヒルー」か	下半釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大溝２北部上層 106図４	蓋	裾径8.1 底径5.2 器高1.3	土師質土器 にぶい暗灰褐色	—	底部糸切り	不明	器面の剥落著しい	肥前	不明
大溝２北部 106図５ 図版17	蓋	裾径9.0 つまみ径1.0 器高2.0	陶器 橙褐色	鉄釉を上面に掛ける　釉切れあり	底部は糸切り	下半釉剥ぎしているが、釉の残りあり		肥前	不明
大溝２北部上層 106図６	蓋	裾径13.0 つまみ径3.2 器高3.7	低火度の施釉陶器 黄白色	柿釉を内面に掛ける	外面は鉄絵の折松葉文を対面に施す	不明		不明	不明
大溝２北部上層 106図７ 図版17	蓋	裾径8.8 つまみ径3.5 器高2.5	磁器 灰白色	透明釉　全面貫入あり	外面は草花文、内面天井部は崩れた環状松竹梅文、口縁部は雷文帯のコバルト染付、外面は金彩の上絵付け、つまみ内の裏銘は赤絵で書かれているが判読できない	つまみ部上端釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大溝２北部上層 106図８	蓋	裾径9.2 つまみ径4.0 器高2.4	磁器 灰白色	透明釉　全面	外面は桔梗文か　内面裾部は変形雷文帯で、内面天井部に環状松竹梅文をコバルト染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	19世紀後半
大溝２ 106図９ 図版17	蓋	裾径9.4 つまみ径4.0 器高3.2	磁器 灰白色	透明釉　全面貫入あり	外面は唐子に花文、天井部は花文がつながる　内面天井部は花文、内面は口縁部に崩れた斜格子文帯を呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ	ほぼ完形 裾部が一部打ち欠いており、そこに煤付	肥前	1700 ～ 1740
大溝２北部中層 106図10	水注	口径(8.5) 高台径6.5 器高12.3	陶器 暗黄灰色 精良	白化粧土を外面から内面口縁部まで掛けた後、外面に鉄絵と緑彩の花文を施し、最後に透明釉を全面掛け		畳付釉剥ぎアルミナ付着　口唇部透明釉のみ釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	不明
大溝２北部中層 106図11	水注	口径5.3 高台径6.5 器高11.7	陶器 橙褐色	黒釉を外面全面掛け	注口は欠損	口縁部釉剥ぎ　畳付釉剥ぎ　アルミナ塗布		肥前	不明
大溝２北部中層 107図１	杯	口径5.4 高台径2.8 器高3.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	不明
大溝２北部上層 107図２	杯	口径6.0 高台径2.4 器高2.8	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面は竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	歪みがあるが、注口状に利用したか	肥前	不明
大溝２北部 107図３	杯	口径6.2 高台径2.2 器高2.8	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	見込みに蛇ノ目高台状の胴部を持つ鶴文を吹き絵によりコバルト染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大溝２北部中層 107図４	杯	口径7.9 高台径2.5 器高4.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は窓枠と界線は呉須染付　赤彩による梅樹文・竹笹文・窓内花文、緑・黒彩による松文の上絵付け	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
大溝２北部中層 107図５	杯	口径7.7 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	暗い透明釉全面掛け	外面は竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ 砂目付着		波佐見	18世紀代



第107図　1次調査2・3号大溝出土土器・陶器実測図5（19～21は1/6、22は1/4、他は1/3）

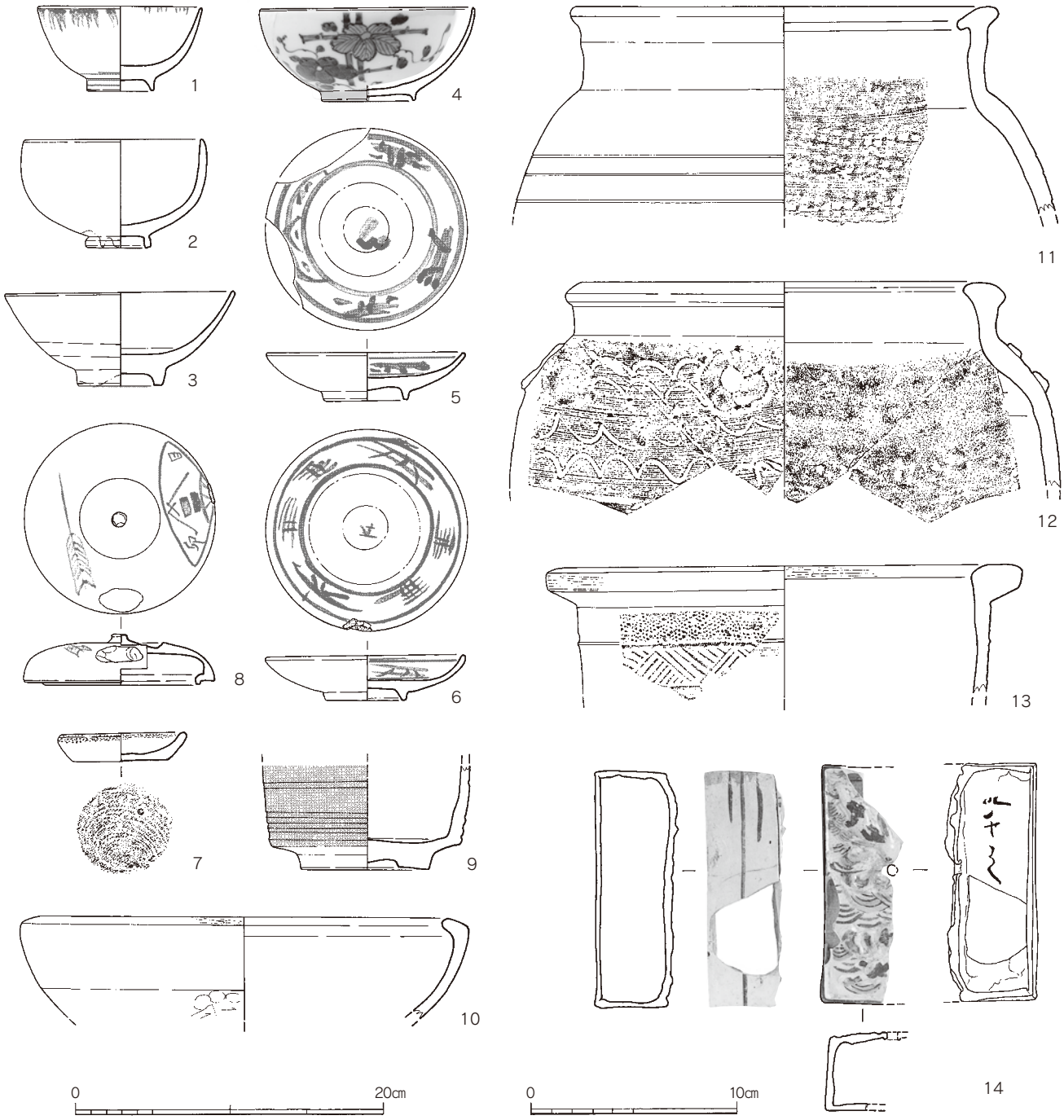
表48　1次調査出土土器・陶磁器観察表21

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝２北部 107図６	杯	口径7.7 高台径3.3 器高4.2	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け 釉の沸騰あり	外面に帯丸に直線のみでデザインされた「福」字、胴下位に変形櫛歯文帯を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
大溝２北部上層 107図７ 図版17	杯 端反形	口径8.6 高台径3.4 器高5.1	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面の草花文の裏に「古人楽」とある　コバルト染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	19世紀後半
大溝２北部上層 107図８ 図版17	杯 端反形	口径6.4 高台径3.4 器高4.3	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面鼠と大根と宝尽くし文が黄彩で銅版刷り　また、「美濃国土岐郡泉村ノ内定林寺西二拾壱番戸後藤新八清々」とある	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	美濃	19世紀後半
大溝２北部 107図９ 図版17	杯	口径6.7 高台径3.5 器高4.0	磁器 完形のため不明	発色不良の透明釉が全面に掛かる　釉切れあり	外面竹笹文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	波佐見	1680 ～ 1740
大溝２北部 107図10 図版17	小型碗 湯飲み	口径6.7 高台径4.0 器高5.2	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	外面蝶と菖蒲文をコバルト染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	19世紀後半
大溝２北部 107図11 図版17	小型碗 湯飲み	口径6.8 高台径3.2 器高5.1	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 発色不良	外面折松葉と草文をコバルト染付	畳付釉剥ぎせずに砂目付着	ほぼ完形	肥前	20世紀前半
大溝２北部上層 107図12	杯 従軍記念杯	口径9.8 高台径3.7 器高3.6	磁器 灰白色　ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で菊花文の上に「四連隊」と描いているので、久留米第四八歩兵連隊の略称だろう			瀬戸	20世紀前半
大溝２北部 107図13	杯 記念杯	口径(7.0) 高台径2.4 器高2.5	磁器 灰白色　ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で「下足商」、その左に稲藁、左には「柳川上町」その横にも２文字あるが判読できない　これらは金彩で、中央下の福助らしい人物は灰と金彩、高台外面の凹凸文と、判読できない裏銘はコバルト染付			瀬戸か	20世紀前半
大溝２北部 107図14	杯 記念杯	口径6.5 高台径2.3 器高2.8	磁器 灰白色　ガラス質	透明釉を全面に掛ける	見込みに金彩で「野田新平」と描いている高台外面の凹凸文と、田の字らしい裏銘はコバルト染付			瀬戸か	20世紀前半
大溝２北部 107図15 図版17	紅猪口 紅皿	口径6.0 高台径2.1 器高1.2	磁器 完形のため不明	白磁釉　内面から外面口縁部	型打ち成型で、外面不明瞭な蛸唐草文	底部露胎	完形	肥前	不明
大溝２北部 107図16	猪口	口径(8.6) 底径6.7 器高7.3	磁器 灰白色	透明釉　全面掛け　釉切れあり	口縁部は低い山形　外面蛸唐草文、内面口縁部ダミに不明文、見込みに環状松竹梅文を呉須染付	蛇ノ目釉剥ぎ	高台がない	肥前	18世紀中葉
大溝２北部上層 107図17	急須	底径5.3 最大径(8.4)	土師質土器 灰白色		底部糸切り　底部縁が３つ抉られて透かし状になる	不明	内面に茶渋と見られる使用変色あり	瓦町焼	不明
大溝２北部 107図18	仏飯器	口径6.9 裾径4.5 器高6.6	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面胴部に飛雲文地に崩れた宝散らし文、見込みに５弁花文を呉須染付	高台畳付釉剥ぎ	９割残存	肥前	1690 ～ 1780
大溝２ 107図19	土管	端部径9.2 基部径14.0 長さ68.8	土師質土器 淡黄灰色　精良	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している　外面は丁寧なハケ　内面はオサエ、端部内面はケズリ、基部内面はナデ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝２ 107図20	土管	端部径18.4 基部径14.2 長さ68.8	土師質土器 淡黄灰色　精良	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している　外面は丁寧なハケ　内面はオサエ、端部内面はケズリ、基部内面はナデ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝２ 107図21	土管	端部径18.2 基部径14.6 長さ67.5	土師質土器 淡黄灰色　精良	—	型作りでなく、粘土板を繋いで成型している　外面は丁寧なハケ　内面はオサエ、端部内面はケズリ、基部内面はナデ	—	ほぼ完形 内外変色なし	在地	不明
大溝３ 107図22	摺鉢	口径39.4 高台径15.4 器高14.5	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ　摺り目は20本単位	見込みに蛇の目焼き重ね痕と胎土目跡５　畳付釉剥ぎ		肥前	1750 ～ 1860
溝１南北軸 108図１	小型碗	口径10.0 高台径3.3 器高4.1	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける　貫入あり	外面に雨降り文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見か	1700 ～ 1740
溝１ 108図２	碗 腰張形	口径(8.7) 高台径3.2 器高5.2	陶器 黄灰白色 やや粗放	透明釉を外面底部以外に全面掛ける　貫入あり　口縁部は半分しか残っておらず鉄絵の有無は不明		底部露胎	京焼風陶器か	肥前か	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
溝１東西軸 108図３	碗	口径(11.1) 高台径4.2 器高4.3	陶器 灰～橙灰白色	オリーブ色の灰釉を高台内以外全面に掛ける	無文	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ、釉剥ぎ部に重ね焼き痕あり	外面胴中位の沈線と下位のカンナ痕は成型時のもの	肥前	不明
溝１東西軸 108図４	碗 半球形	口径10.4 高台径4.6 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面は蔦と竹垣文を呉須染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	肥前	1710 ～ 1750
溝１南北軸 108図５	小皿	口径9.7 高台径4.1 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	内面は界線の間に山文と社文、見込みに不明文様を呉須染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布		肥前	19世紀中葉
溝１南北軸 108図６	小皿	口径9.7 高台径4.0 器高2.2	磁器 完形のため不明	透明釉を全面に掛ける　釉切れあり	内面は界線の間に木文と社文、見込みに不明文様をコバルト染付	畳付釉剥ぎ　見込みに蛇の目釉剥ぎ後、アルミナ塗布	口縁部一部打ち欠きで、打ち欠き部に煤付着　完形	肥前	19世紀中葉
溝１東西軸 108図７	小皿	口径6.1 底径6.1 器高1.4	土師質土器 完形のため不明	—	外底糸切り 内外面ナデ	不明	内外口縁部に煤付着	蒲池焼か	不明

122図16は砥石で、方柱形の置き砥石を粗割りして再利用した手持ち砥石で、断面逆台形状に加工している。

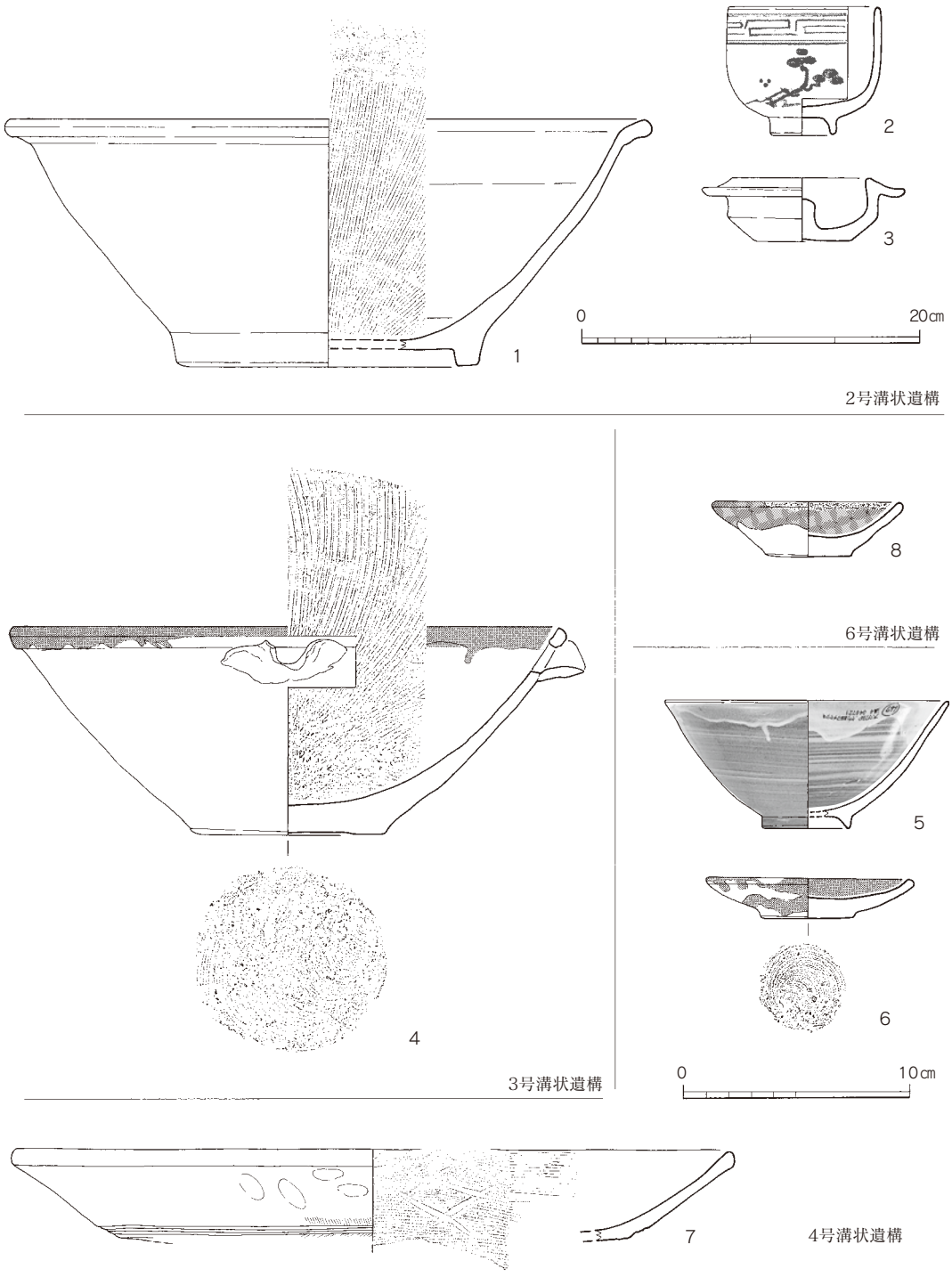
123図１は火打石で、チャート製である。火打金との擦痕が上端の尖った稜線部分にある。ほかに剥離や欠損の痕跡はなく、使用頻度は多くなかったようだ。123図２は朱墨用の硯で朱墨が残っている。朱墨は後述の蛍光Ｘ線分析から水銀朱を使用していることがわかった。

123図３は裏面に「赤間関」と彫られているので、山口県産　の赤間硯である。赤間硯は赤紫色



第108図　１次調査１号大溝出土土器・陶磁器実測図(10は1/4、他は1/3)

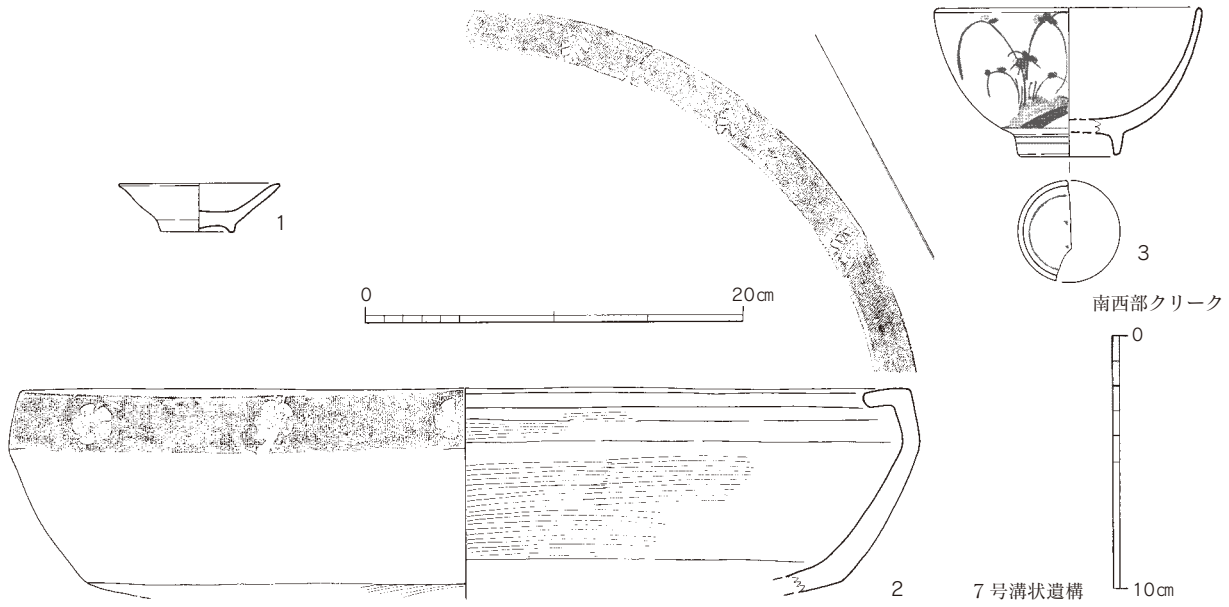
の輝緑凝灰岩製で、江戸時代前期には当時赤間関といわれた下関市で行われていたが、坑内掘り(たぬき掘り)の限界から、江戸時代後期には宇部市西万倉周辺で採石が始まると、次第に採石・一般書道用硯の製作は宇部市西万倉周辺で、販売・文様彫刻などを施した細工硯の製作は下関市で行われるようになったらしく、「赤間硯」と彫られてはいるが前者の宇部市産である可能性が高い。



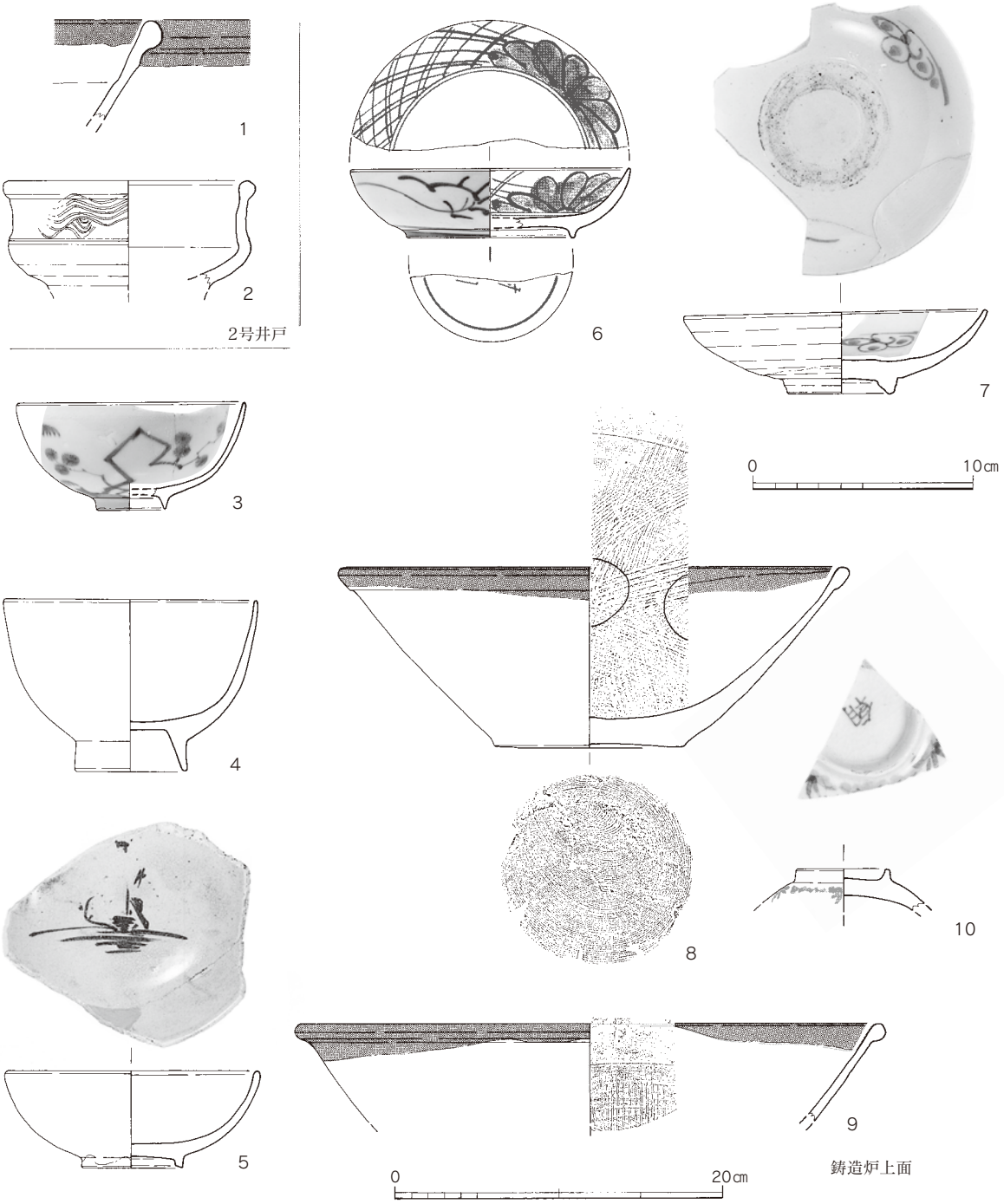
第109図　1次調査2～4・6号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1･7は1/4、他は1/3)

表49　1次調査出土土器・陶磁器観察表22

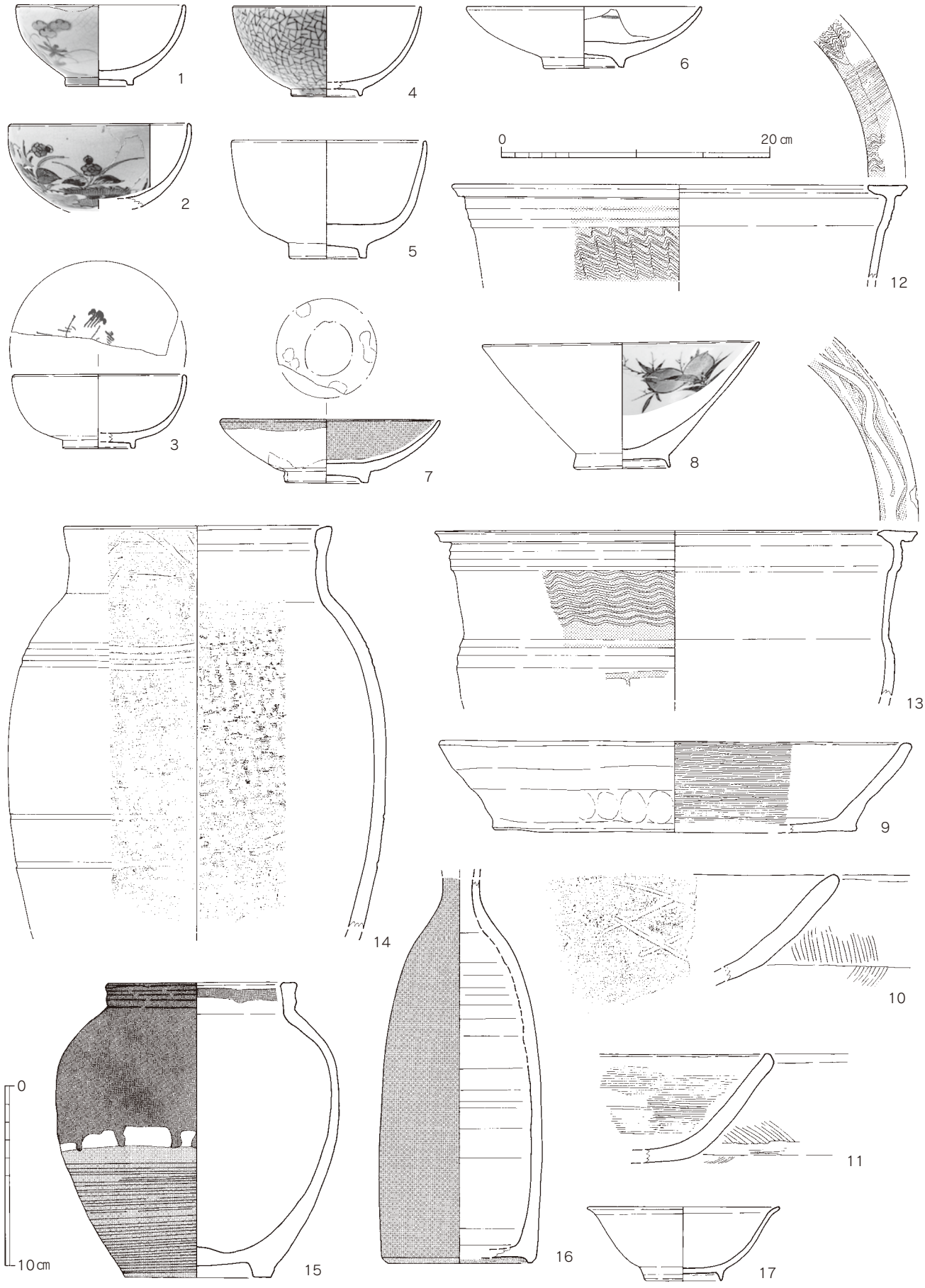
遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
溝1南北軸 108図8	蓋	裾径9.2 つまみ径0.8 器高2.4	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	外面矢文・扇文を対面に配置、扇内部には「目」「印」の間に屋号の記号を呉須染付	受け部釉剥ぎ	外面側面に胎土目らしいもの付着	肥前	18世紀後半 ～ 19世紀前半
溝1東西軸 108図9	香炉	高台径6.3	陶器 にぶい橙黄白色	オリーブ色の灰釉を胴下位以外の外面に掛ける	外面胴中位と下位に沈線	底部露胎　アルミナらしいものが胴下位と高台内に付着	内面やや灰色に変色	肥前	不明
溝1 108図10	火鉢	口径(35.2)	瓦質土器 にぶい橙灰色	—	外面胴下位はケズリとオサエ、その上はナデ、口唇部は丁寧なミガキ、内面はナデのみ	不明	胎土は土師質だが、外面は炭素を吸着させているので瓦質土器	在地	不明
溝1東西軸 108図11	小甕	口径(20.8)	陶器 外面側暗紫灰色、内面側橙色	内外鉄釉	外面はナデ後肩部に沈線、内面は格子目タタキ目をナデ消し	口唇部外面側を残して釉剥ぎ		肥前	18世紀代
溝1東西軸 108図12	小甕	口径(21.2)	陶器 にぶい紫灰白色	内外鉄釉	外面は肩部にカキ目の後、沈線による弧文、その上に環状の花形浮文、内面は格子目タタキ目をナデ消し	口唇部外面側を残して釉剥ぎ		肥前	17世紀後半
溝1東西軸 108図13	火鉢	口径(18.0) 最大径(21.3)	瓦質土器 表面側灰色、内側は灰白色、肥厚部中央は黒灰色	—	小型品で、外面は型押しによる斜線充填の鋸歯文と珠文の陽刻、内面は口縁部は回転ナデ、胴部はハケ状工具によるケズリ	不明	口縁部内面に煤付着	在地	不明
溝1東西軸 108図14	水滴	長軸11.4 高さ3.6	磁器 灰白色	白磁釉を外面の上端面以外に掛ける　内面は穿孔部から流れ出した部分のみ	板造りの型押し成型で、底面は表裏に布目圧痕　その他の面を型押しして上面に兎を陽刻　赤・青・緑・黒で上絵付け	図面上の上端面が露胎なので、立てて焼成している	内側面に墨書あり「□千之」か	肥前	不明
溝2上層 109図1	摺鉢	口径(38.4) 底径(18.0) 器高14.7	陶器 暗紫褐色	鉄釉を底部以外に薄く掛ける	内外ナデ　摺り目は32本単位	畳付釉剥ぎ 見込みに環状重ね焼き痕		肥前か	不明
溝2上層 109図2	小型碗 湯飲み	口径(6.7) 高台径3.0 器高5.7	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面口縁下に雷文帯・胴部に松木文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	19世紀中葉
溝2上層 109図3	蓋	裾径9.0 つまみ径1.0 器高2.8	陶器 にぶい黄灰色	透明釉を上面に掛ける　貫入あり	底部は糸切り後ヘラケズリ	下半釉剥ぎ		肥前	不明
溝3 109図4	摺鉢	口径24.6	陶器 赤紫灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目13本単位　　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡5つあり		肥前	1650 ～ 1690
溝4 109図5	碗 瞰茶碗	口径(12.6) 高台径(3.9) 器高5.7	陶器 灰色	内外白化粧土をハケ掛けした後、口縁部に2度掛けし、前面透明釉掛け　貫入あり		畳付釉剥ぎ		肥前か	不明
溝4上層 109図6	小皿	口径(9.2) 底径4.1 器高1.7	陶器 橙灰色	発色の悪い鉄釉が内面から外面口縁部に掛かる	外底糸切り 内外面ナデ	底部露胎	口縁部の一部に煤付着	肥前	不明
溝4 109図7	焙烙	口径(43.0)	土師質土器 にぶい暗黄橙灰色	—	外面はオサエ、底部はハケ、内面はハケの上に井桁文の沈線	不明	内面は変色少ない、外面は煤付着	在地	不明
溝6 109図8	小皿	口径8.4 底径3.8 器高2.5	陶器 橙褐灰色	発色の悪い鉄釉が内面から外面口縁部に掛かる		底部露胎	内外面口縁部に煤付着	肥前	不明
溝7 110図1	杯	口径(6.4) 高台径3.0 器高1.9	磁器 灰白色	透明釉外底以外全面掛け	無文　高台削り出し	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
溝7 110図2	火鉢	口径(46.7)	瓦質土器 にぶい橙灰白色 金雲母多い	—	外面・口唇部はミガキで、単位がわからない　内面はハケ、口縁下にオサエ列あり　口唇部に木葉文、外面口縁部下に花文のスタンプ列	不明	外面の黒色は炭素吸着によるもの	在地か	不明
南西部クリーク 110図3	碗	口径10.6 高台径4.0 器高4.9	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には草文を呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1700 ～ 1740
井戸2 111図1	摺鉢	—	陶器 暗橙褐色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目1単位不明	—		肥前	1650 ～ 1690
井戸2 111図2	小鉢	口径(11.4)	陶器 橙褐色	内面口縁部から外面胴上半に鉄釉を掛けた後、外面上半は櫛状釉剥ぎ		下半露胎	鉄釉は発色不良	肥前	1650 ～ 1690
鋳造遺構上面 111図3	碗 半球形	口径(10.4) 高台径(3.2) 器高4.9	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける	外面には松と竹文があるので松竹梅文だろう　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
鋳造炉上面 111図4	碗	口径(11.5) 高台径(5.1) 器高7.8	陶器 灰～橙灰色	黒釉全面掛け	無文　外底削り出し	畳付釉剥ぎ	見込みの釉の荒れはひっつきだが、外面の白変は2次的被熱によるもの	肥前	不明
鋳造炉上面 111図5	碗 半球形	口径(11.5) 高台径4.6 器高4.4	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり　外底に螺旋状に円文を線刻	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
鋳造遺構炉上面 111図6	小皿	口径(12.7) 高台径(7.6) 器高3.1	磁器 灰白色	発色の悪い透明釉を全面に掛ける	外面唐草文、内面二重網目文と半菊文、裏銘「大明年製」を呉須染付	畳付釉剥ぎ		波佐見	1680 ～ 1740



第110図　１次調査７号溝状遺構･南西部クリーク出土土器･磁器実測図(２は1/4、他は1/3)



第111図　１次調査２号井戸、鋳造炉上面出土陶磁器実測図(8･9は1/4、他は1/3)



第112図　1次調査ピット出土土器・陶磁器実測図(12･13は1/4、他は1/3)

表50　1次調査出土土器・陶磁器観察表23

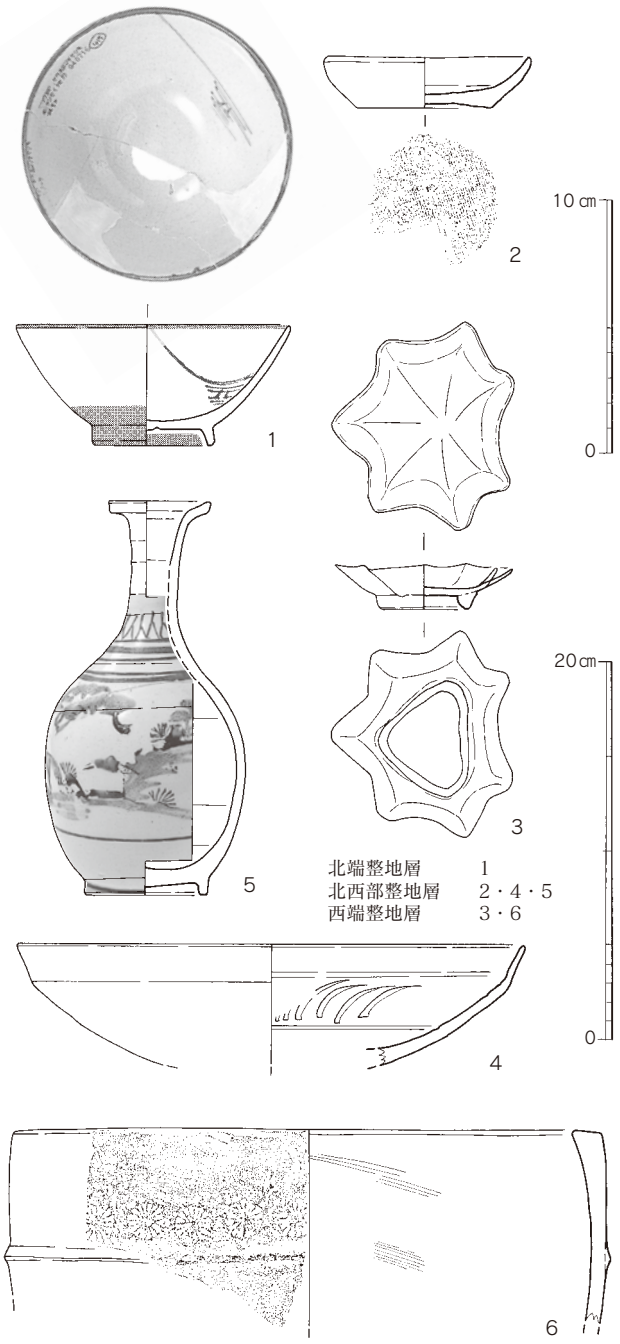
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
鋳造遺構炉上面 111図7 344	小皿	口径(13.8) 高台径4.9 器高3.4	磁器 灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	内面に菊花文染付	底部露胎		波佐見	1680 ～ 1740
鋳造炉上面 111図8 593	摺鉢	口径(31.1) 底径11.7 器高11.0	陶器 暗赤紫灰～赤紫色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位　外底糸切り	底部露胎　外面胴下位と見込みに胎土目跡８つあり	内面の色調差は重ね焼きのため	肥前	1650 ～ 1690
鋳造炉上面 111図9 591	摺鉢	口径(36.0)	陶器 灰色	口縁部のみ鉄釉	内面摺り目12本単位	不明		肥前	1650 ～ 1690
鋳造炉上面 111図10 318	碗	高台径(4.3)	磁器 暗灰白色	透明釉を全面に掛ける 貫入あり	外面草花文、裏銘に「朝」、呉須染付	畳付釉剥ぎ		朝妻焼	1714 ～ 1728
ピット28 112図1 502	碗 半球形	口径9.4 高台径3.8 器高4.5	磁器 灰白色	透明釉全面掛け 貫入あり	外面は花草文のみ　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前か	18世紀前半
ピット28 112図2 485	碗 半球形	口径(10.2)	磁器 灰白色	透明釉を全面に掛ける 発色やや不良	外面には草花文呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	1710 ～ 1750
ピット３ 112図3 718	碗	口径(9.6) 高台径(4.0) 器高4.1	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け 貫入あり	見込みに山水文の鉄絵	胴下位釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	1690 ～ 1810
ピット10 112図4	碗 半球形	口径10.4 高台径3.9 器高5.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面は氷裂文のみ　呉須染付	畳付釉剥ぎ		肥前	18世紀前半
ピット３ 112図5	碗	口径(10.8) 高台径(4.3) 器高6.5	陶器 黄灰白色	緑灰白色の灰釉を高台内面以外全面掛け	無文　外面胴下位にカンナ痕	畳付釉剥ぎ	灰釉は口縁部に２度掛け	肥前	1690 ～ 1810
ピット10 112図6	小皿	口径(13.0) 高台径(4.4) 器高3.4	磁器 灰白色	光沢のある透明釉内面から外面胴下位まで	内面に折松葉文らしいモチーフの呉須染付	底部露胎　見込み蛇の目釉剥ぎ部		波佐見	1680 ～ 1740
ピット28 112図7	小皿	口径12.2 高台径4.7 器高3.4	陶器 灰白色 粗放	緑灰色の灰釉を内面から外面胴下位まで掛け、その上に内面から外面口縁部は銅緑釉を上掛け	外面胴下位はカンナ痕	底部露胎　見込み蛇の目釉剥ぎ部に胎土目４つあり		肥前	1650 ～ 1690
ピット28 112図8	大碗 嗽茶碗	口径15.5 高台径5.4 器高7.0	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	外面無文、内面ザクロ文か	畳付釉剥ぎ		肥前	不明
ピット28 112図9	焙烙	口径(26.0) 底径(20.0) 器高5.0	土師質土器 にぶい暗黄灰色	－	外面口縁部は横ナデ、底部との接合部はオサエ、内面は細かい横ハケ 外底は未調整	不明	内面は変色なし、外面は煤付着	在地	不明
ピット29 112図10	焙烙	－	土師質土器 にぶい暗黄灰色	－	外面口縁部は縦ハケの上を口縁部だけ横ナデ、屈曲部以下も縦ハケ、内面はハケ状の横ナデ	不明	内面は変色なし、外面は煤付着し、全体的に黒変	在地	不明
ピット27 112図11	焙烙	－	土師質土器 にぶい暗黄灰色 金雲母あり	－	外面口縁部は縦ハケの上を横ナデ、屈曲部以下は目の細かいハケ、内面は細かい横ハケ	不明	内面は黒変、外面は煤付着し、全体的に黒変	在地	不明
ピット６ 112図12	鉢 半胴甕	口径(34.0)	陶器 赤紫灰色	内面に鉄釉掛け、外面と口唇部は白化粧土を掛けて櫛状掻き取り、その上に暗緑灰色の灰釉を上掛け		口唇部内側は釉剥ぎ		肥前	17世紀後半か
ピット15 112図13	鉢 半胴甕	口径(26.0)	陶器 灰色	内面に鉄釉掛け、外面と口唇部は白化粧土を掛けて櫛状掻き取り、その上に黄灰色の灰釉を上掛け		口唇部上面側は緑のみ、下面側は釉剥ぎ		肥前	17世紀後半か
ピット31 112図14	小壺	－	陶器 橙褐色	内外面鉄釉掛け	内外面胴部に格子目タタキ痕ナデ消し	口唇部は灰釉のみ釉拭き取り	口縁部は釉剥ぎしていない	肥前	18世紀 ～ 19世紀
ピット28 112図15	小壺	口径10.6 底径8.0 器高10.6	陶器 橙褐色	鉄釉は外面下半にハケ掛けした後、外面上半から内面口縁部に厚掛け	外面上半分はナデ、下半分はケズリ　摺り目は11本単位	畳付釉剥ぎ 口唇部釉剥ぎ		肥前	不明
ピット28 112図16	瓶	高台径(8.5)	磁器 灰白色	透明釉　全面 貫入あり		畳付釉剥ぎ後、鉄漿塗布		肥前	19世紀中葉
ピット12 112図17	杯 端反形	口径(10.6) 高台径4.4 器高4.1	陶器 灰白色	透明釉を全面に掛け	無文	畳付釉剥ぎ	器高の低いもの	肥前	19世紀前半
北端整地層 113図1	杯	口径(10.8) 高台径4.8 器高4.8	陶器 完形のため不明	外面胴下位は鉄釉、透明釉を内面から外面胴中位まで掛け　貫入あり	内面に山水文の鉄絵	胴下位釉剥ぎ	京焼風陶器	肥前	不明
北西部整地層 113図2	小皿	口径8.1 底径5.4 器高2.0	土師質土器 黄灰白色 混入物なし		外底糸切り	不明	外底が黒く変色	蒲池焼	不明
西端整地層 113図3	小皿 変形小皿 長８角形	長軸8.0 短軸5.7 器高1.8	磁器 完形のため不明	透明釉　全面 貫入あり	糸切り細工の型押し成型で、楓葉形、内底は葉脈を陽刻　高台おにぎり形に手捏ね	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
北西部整地層 113図4	皿	口径(20.0)	陶器 黄灰白色	透明釉を全面掛け	内面に草文状の片切彫り	—		肥前	1780 ～ 1810

124図1･2は方柱状の石材で、１には梵字が文字の外郭線を線刻する字体で書かれている。上下端面を除き、欠損した１面以外の３面に１文字づつあるので、本来は４面にあったものだろう。

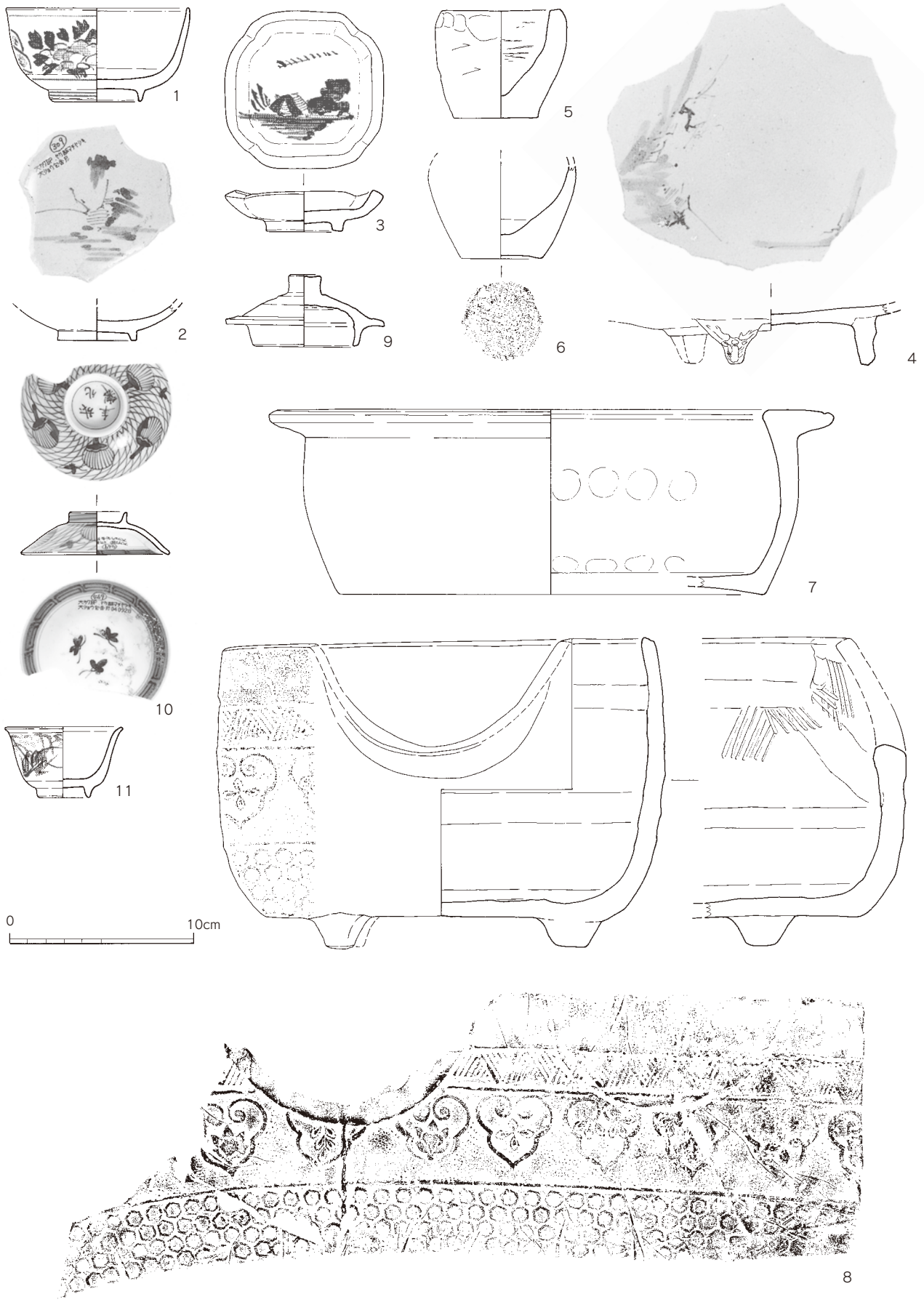
図の左から「キリーク」「タラーク」「ウーン」なので、四方梵字と見られる。したがって、欠損部に彫られていたのは「アク」である。この四方梵字が彫られることが多い石製品といえば宝篋印塔なので、これは宝篋印塔の塔身部と考えられる。ウーンは阿閃如来、タラークは宝生如来、キリークは阿弥陀如来、アクは釈迦如来かあるいは不空成就如来を顕しており、金剛界五仏あるいは塔自身を大日如来として金剛界五仏となる(引用文献３)。124図２には明らかに梵字はないが、規格がほぼ同じなので、この石材も宝篋印塔の塔身部ではあろう。戦国時代の集落遺跡である柳川市矢加部南屋敷遺跡(引用文献４)で出土した宝篋印塔は同じサイズの塔身部であり、ちょうどこの石材のサイズに適合する。また、柳川高校に置かれている天文19(1550)年銘の「蒲池鑑盛造立覚童御篋印塔」の宝篋印塔も規格的には一致する。

宝篋印塔の存在からこの集落内に屋敷墓が置かれた可能性も考えられるが、本遺跡は近世の町屋なので、裏庭にあったとしても屋敷墓とは考えにくいし、実際墓らしい遺構は発見されていない。むしろ、戦国時代から江戸時代初頭に存在していた墓が久留米柳川街道の敷設か、町屋敷集落の造成に伴ってそれ以前にあった墓が掘り崩されたか、あるいは礎石などの石材として転用するために持ち込まれた可能性が高い。

125図７はポマードのガラス瓶で、「IUZUTSUBAKI」の陽刻がある。椿油の商品名であろうが詳細はわからない。８の牛乳瓶は蓋が締まった状態で出土している。蓋の天井部には「え」と線刻されており、同じ形態の牛乳瓶の蓋である９には「永」と線刻されているので、同じ「え」のつく名称の牧場の製品である可能性が高い。



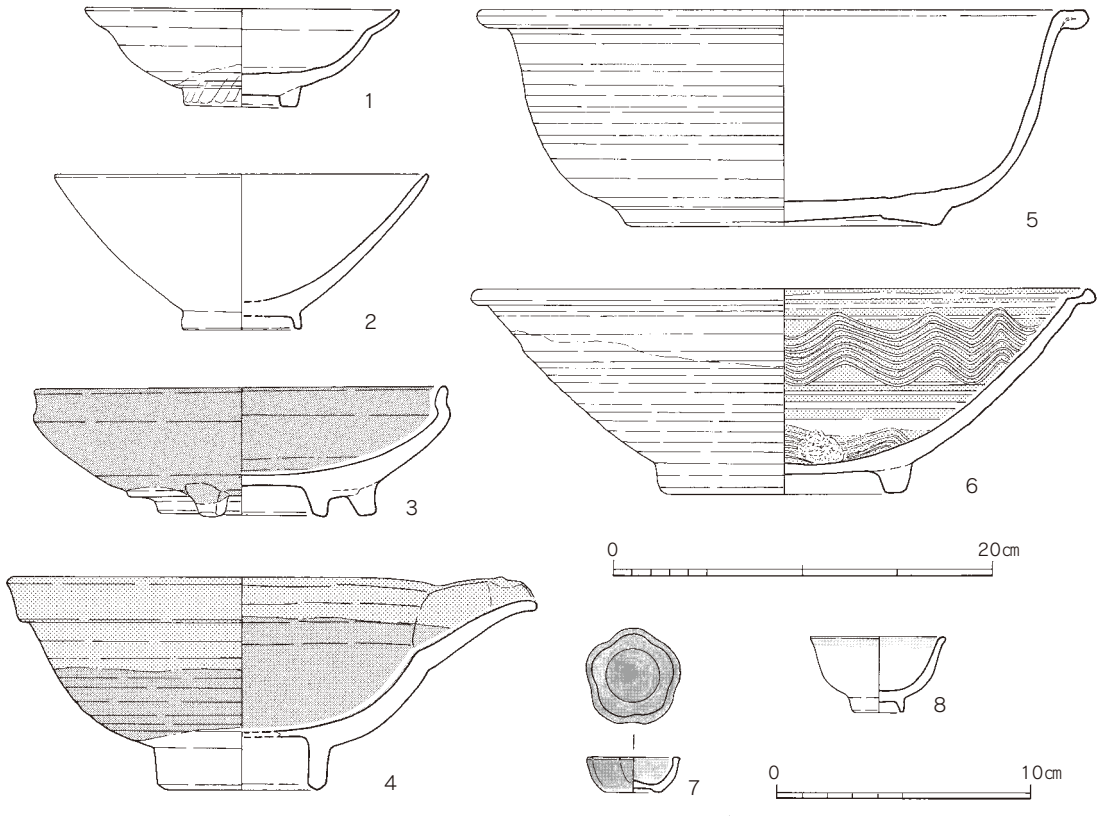
第113図　１次調査整地層出土土器・陶磁器実測図
（６は1/4、他は1/3)



第114図　1次調査大正包含層出土土器・陶磁器実測図(1/3)

表51　1次調査出土土器・陶磁器観察表24

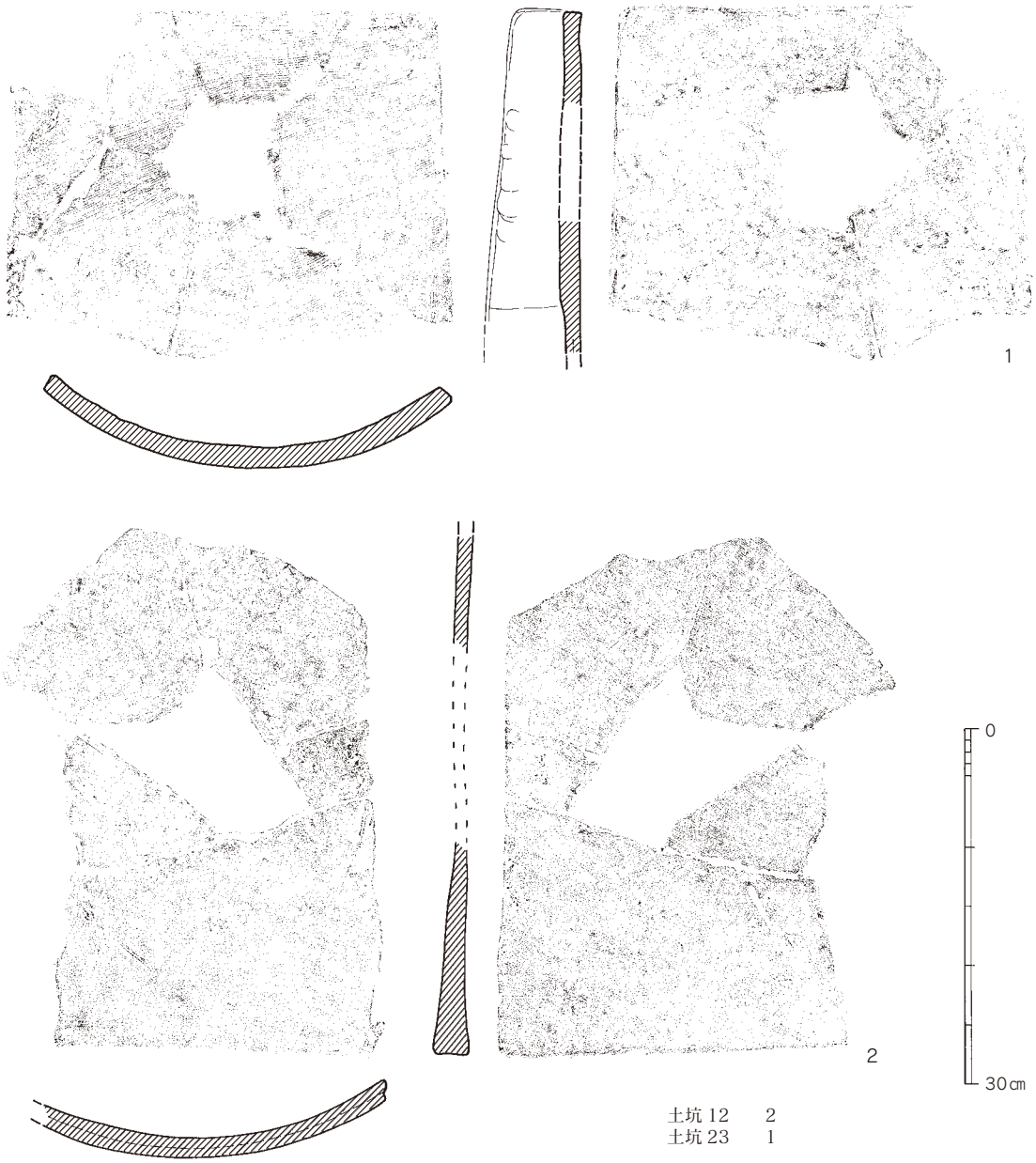
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
北西部整地層 113図5	瓶	口径4.0 最大径8.0 高台径4.8	磁器 灰白色	外面から内面口縁部まで透明釉を掛け、その上に赤・緑・青彩で山水文の上絵付け		畳付釉剥ぎ		肥前	1650 ～ 1690
西部整地層 113図6	火鉢	口径(31.0)	瓦質土器 灰色	—	内外とも器面の剥落著しい　外面はミガキの上に菊花文のスタンプ　内面はナデ	不明	内面口縁部に煤付着	在地か	不明
大正包含層 114図1	鉢 蓋物	口径10.0 高台径4.8 器高5.2	磁器 灰白色	発色不良の透明釉を全面に掛ける	外面葉よろけ縞文と牡丹花文のコバルト染付	畳付釉剥ぎ 口唇部釉剥ぎ	焼成時のひびが入る 完形	肥前か	20世紀前半
大正包含層 114図2	碗 半球形	高台径4.2	陶器 黄灰白色	透明釉を外面底部以外に全面掛ける	見込みに鉄絵の山水文あり　外底に「清水」の刻印	底部露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉 ～ 18世紀後葉
大正包含層 114図3	小皿 変形小皿 方形	一辺8.6 高台径4.2 器高2.1	磁器 完形のため不明	透明釉　全面	型押し成型で、見込みに海底の貝文コバルト手描き染付	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	不明
茶褐色土包含層 114図4	皿 脚付	底部径9.9	陶器 黄灰白色	透明釉を全面に掛け貫入あり	見込みに鉄絵の山水文 脚は3つで、龍面の型押し成型	外底は蛇ノ目高台状で、台部は露胎	京焼風陶器	肥前	18世紀中葉
大正包含層 114図5	焼塩壺	口径6.5 底径4.6 器高5.9	土師質土器 にぶい黄灰色 精良	—	外底糸切り　口縁部に一部ケズリあり　内外面ナデ	—	ほぼ完形 器面摩滅	在地	不明
大正包含層 114図6	焼塩壺	底径4.4	土師質土器 外面にぶい黄灰色　内面淡橙色 中央は灰黒色 精良	—	外底ヘラ削り 内外面ナデ	—	断面赤変	在地	不明
大正包含層 114図7	火鉢	口径30.6 底径23.0 器高10.0	瓦質土器 にぶい灰褐色 白色粒子入る	—	外底切り離し後未調整　器面は外面ナデ、内面オサエ後ナデ	—	ほぼ完形 器面摩滅	在地	不明
大正包含層 114図8	火鉢	口径23.1 底径19.2 器高16.6	瓦質土器 灰白色が黒灰色を挟む	—	外面胴下位は型押しによる鋸歯文帯、亀甲文帯などの陽刻、脚は円柱状で2つ残る 外底はハケ状ノナデ、内面はケズリ、突出部の接合部の沈線がある　窓はミガキ	—	外面のミガキ部は光沢あり	在地	不明



第115図　1次調査撹乱土坑出土陶磁器実測図(5･6は1/4、その他は1/3)

表52　1次調査出土土器・陶磁器観察表25

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大正包含層 114図9 図版17	蓋	裾径5.6 つまみ径8.6 器高4.0	陶器 橙褐色	鉄釉を上面に掛ける　釉切れあり	底部は糸切り	下半釉剥ぎしているが、釉の残りあり		肥前	不明
大正包含層 114図10	蓋	裾径8.0 つまみ径3.1 器高2.3	磁器 灰白色	透明釉　全面　貫入あり	外面に格子文の上に団扇文と蝶文、内面は口縁部に雷文、天井部に蝶文 外面裏銘は「成化年製」を呉須染付	つまみ部上端釉剥ぎ		肥前	1700 〜 1740
大正包含層 114図11	杯 端反形	口径6.5 高台径2.9 器高3.8	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	外面に茶と緑の草文の上絵付け	畳付釉剥ぎ	完形	肥前	19世紀後半
土坑20 115図1	小皿	口径12.4 底径4.4 器高3.8	陶器 暗灰白色	内面から外面胴中位まで緑灰色の灰釉掛け	外底削り出し　胴下位にカンナ痕	底部露胎 見込みに蛇の目釉剥ぎ		肥前	1690 〜 1780
土坑20 115図2	大碗 嗽茶碗	口径(14.7) 高台径(4.7) 器高6.2	磁器 灰白色	透明釉全面掛け	無文	畳付釉剥ぎ		肥前	不明



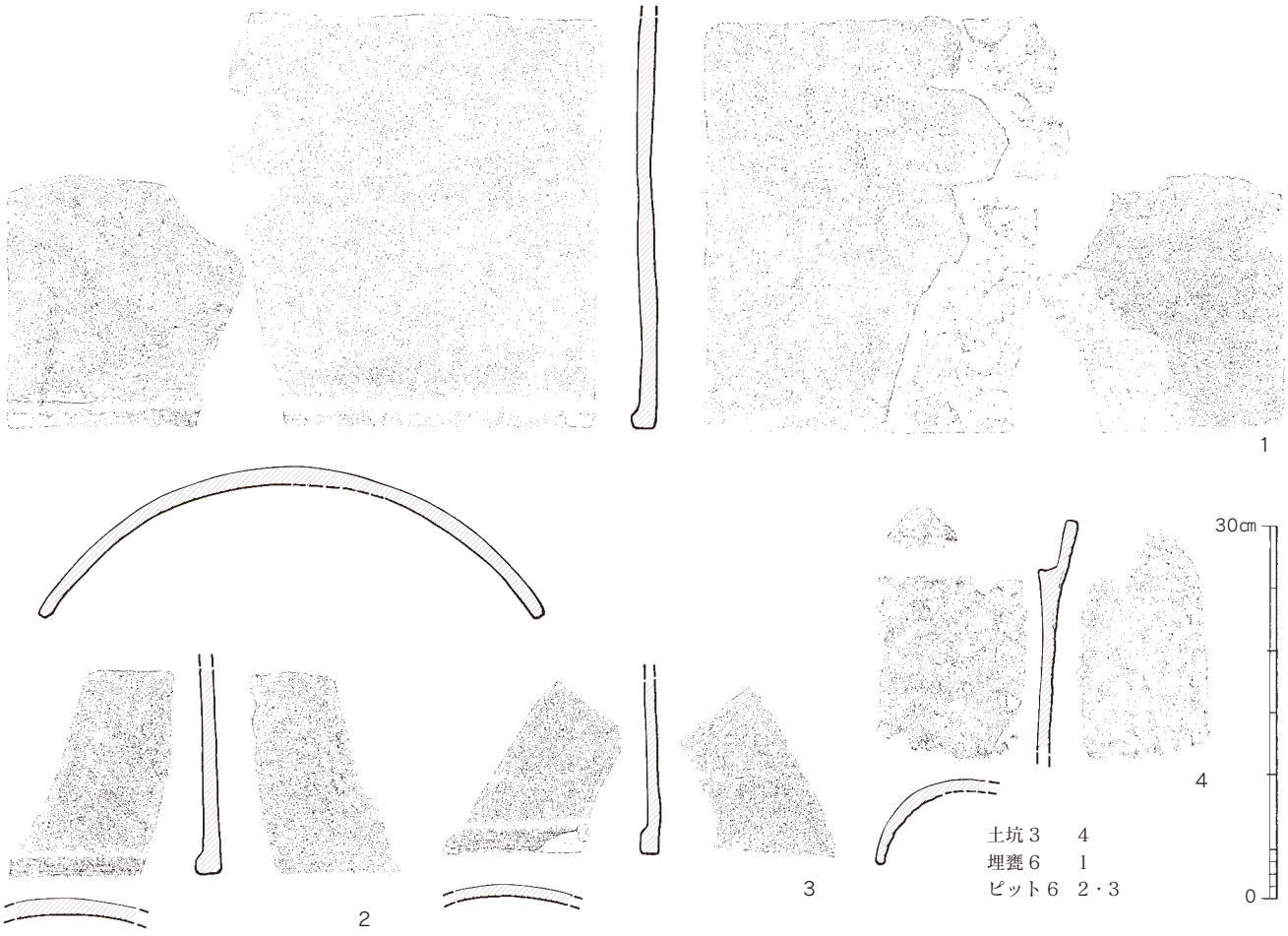
第116図　1次調査出土土師質瓦実測図1(1/6)

13はガラス製おはじきで、じゃんけんのグーが陽刻されており、２次調査１号溝出土のチョキとパー(『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』41図37・38)とセットになる。

128図4～７は膳の脚で、６・７は木釘で固定されておらず、膠のようなものが付着しているので、接着材で固定したと考えられる。脚の低い膳は板部と脚部を木釘で固定しなかったのではないだろうか。128図８・９は箱の側板でセットになるものだろう。

128図11･12の箸はいずれも出土時には直線であったが、水漬けしていたにも関わらず報告時までに変形してしまった。129図16は全面は透明漆塗りの方形板で、1面に透明漆塗りされていない長方形の接合痕があり、そこに木釘孔が２つずつある。箱の身側の板材にしては、木釘孔が足りないことから、受部が２つ付いて蓋になると考えられる。

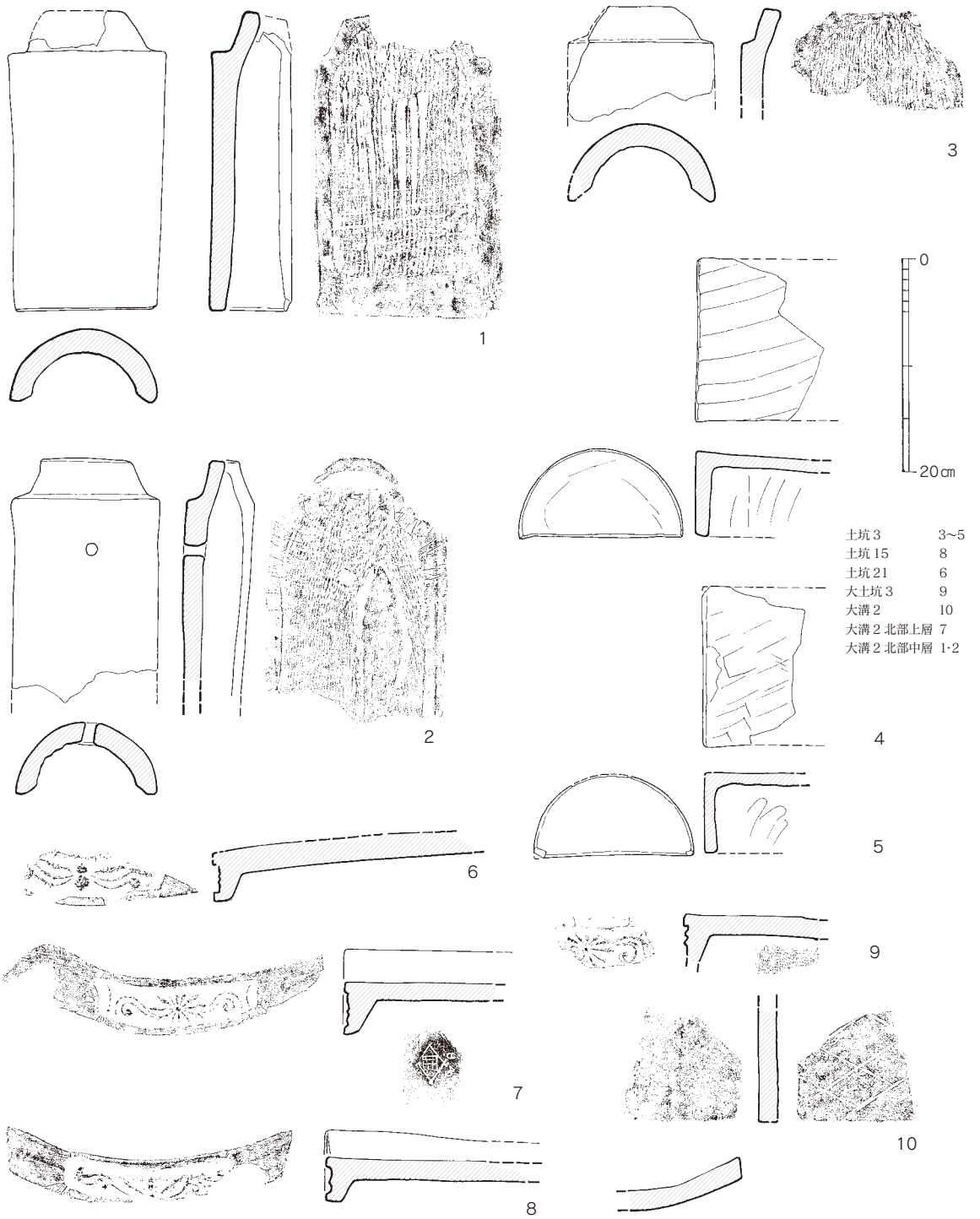
129図２は全面に顔料が塗布されているので、貼り付けるものでもない　赤漆にしては色調がピンクであることと、厚みがないことから、顔料と考えた。129図6は薄い台形の板材で、セットになる。逆台形の上の角を取ったもので、木釘孔が左右の下角から上がったところと、上辺の中央の3箇所ある。木釘孔は側板との固定を目的としたものにしては数が少なく、位置がおかしい。また、５とセットになることから考えても、別の部分を介して接合したことが推測される。129図９は板材の側縁が劣化しておらず、孔は大きく、鉄孔ではない。孔には擦れた痕跡がないので、紐を通すものでもないので、棒を差し込んだのだろう。本来の形態は想定できない。



第117図　１次調査出土土師質瓦実測図２(1/6)

表53　1次調査出土土器・陶磁器観察表26

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見		
挿図番号	形状	( )は復元値					特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名								
土坑20 115図3	小皿 脚付皿	口径(16.4) 底径8.6 器高5.1	陶器 暗灰色	暗いオリーブ色の灰釉 底部以外全面	脚は手捏ねの低い方柱形	底部露胎　見込み蛇ノ目釉剥ぎで、重ね焼きの痕跡あり	陶胎染付の胎だが、残存部に染付はない	肥前	不明
土坑20 115図4	片口鉢	口径18.4 高台径6.6 器高8.4	陶器 灰～黄橙色　精良	内外面胴中位までオリーブ色の灰釉掛け、口縁部内外は白化粧土掛けし、その上に内外胴中位まで透明釉を掛ける　高台は削り出し		底部露胎		肥前	不明
土坑20 115図5	鉢	口径(32.4) 高台径16.6 器高11.3	陶器 黄灰色 精良	柿釉を全面掛け		高台釉剥ぎ 見込みにハリ目跡が5つ		肥前	20世紀前半



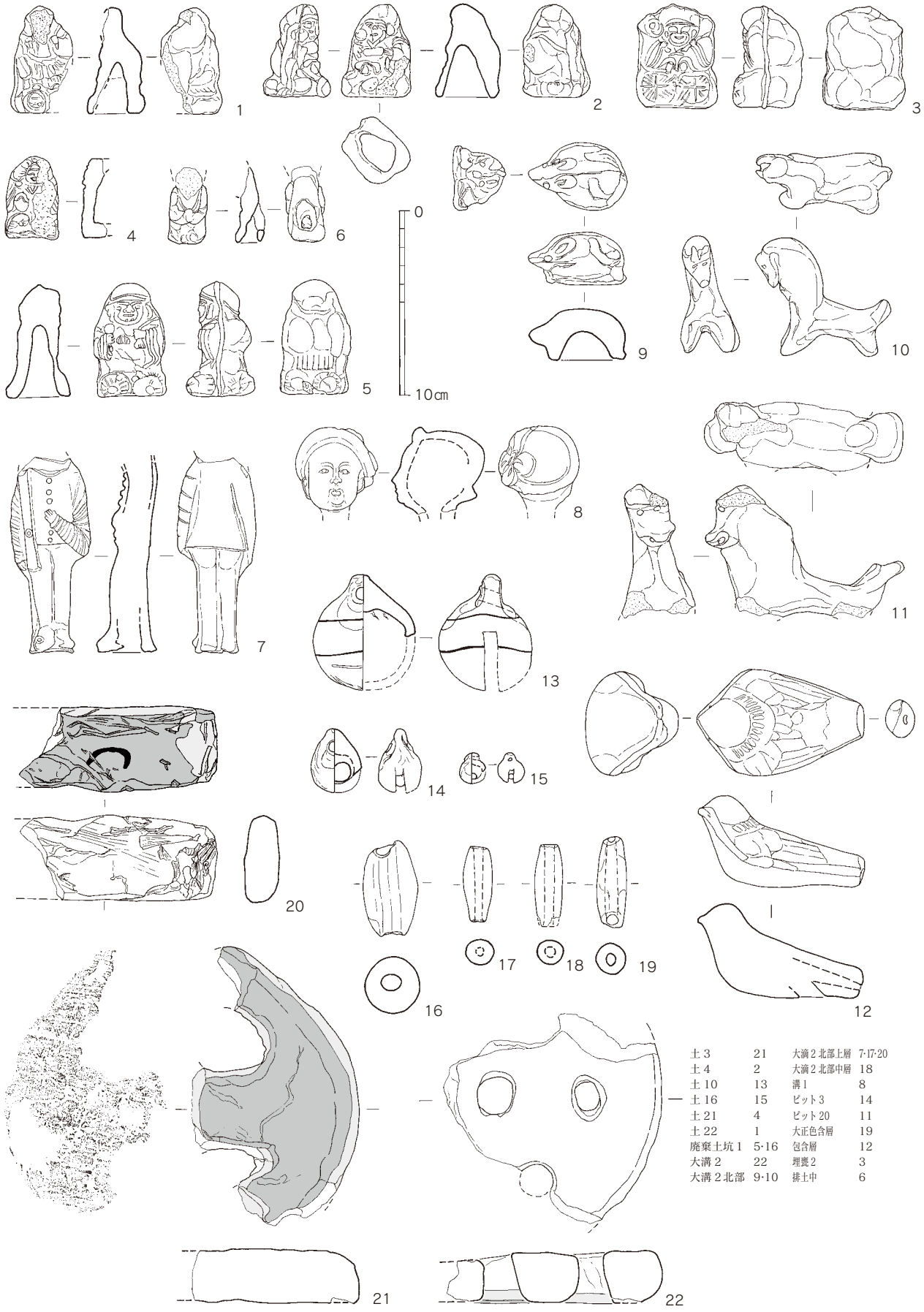
第118図　1次調査出土瓦実測図(1/6)

表54　1次調査出土土器・陶磁器観察表27

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯詰め技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑20 115図6	鉢	口径33.0 高台径12.4 器高10.8	陶器 暗橙灰色	内面白化粧土を櫛状掻き取りし、内面から外面口縁部に暗オリーブ色の灰釉を掛ける		見込みに楕円形砂目跡が7つあり、畳付部は7つ痕跡がある	灰釉は透明釉に近い	肥前	1690 〜 1750	凹面だけが摩滅しているので樋瓦と推定	在地	不明
土坑20 115図7	ミニチュア杯 花弁形	口径3.7 高台径2.1 器高1.4	磁器 完形のため不明	透明釉全面掛け	コバルト全面染付	畳付釉剥ぎ	完形	不明	20世紀前半		在地	不明
土坑20 115図8	杯	口径5.3 高台径2.1 器高3.0	磁器 灰白色 ガラス質	透明釉全面掛け	口縁部に口錆状のコバルト染付	畳付釉剥ぎ	ほぼ完形	瀬戸	20世紀前半		在地	不明

表55　1次調査出土瓦観察表

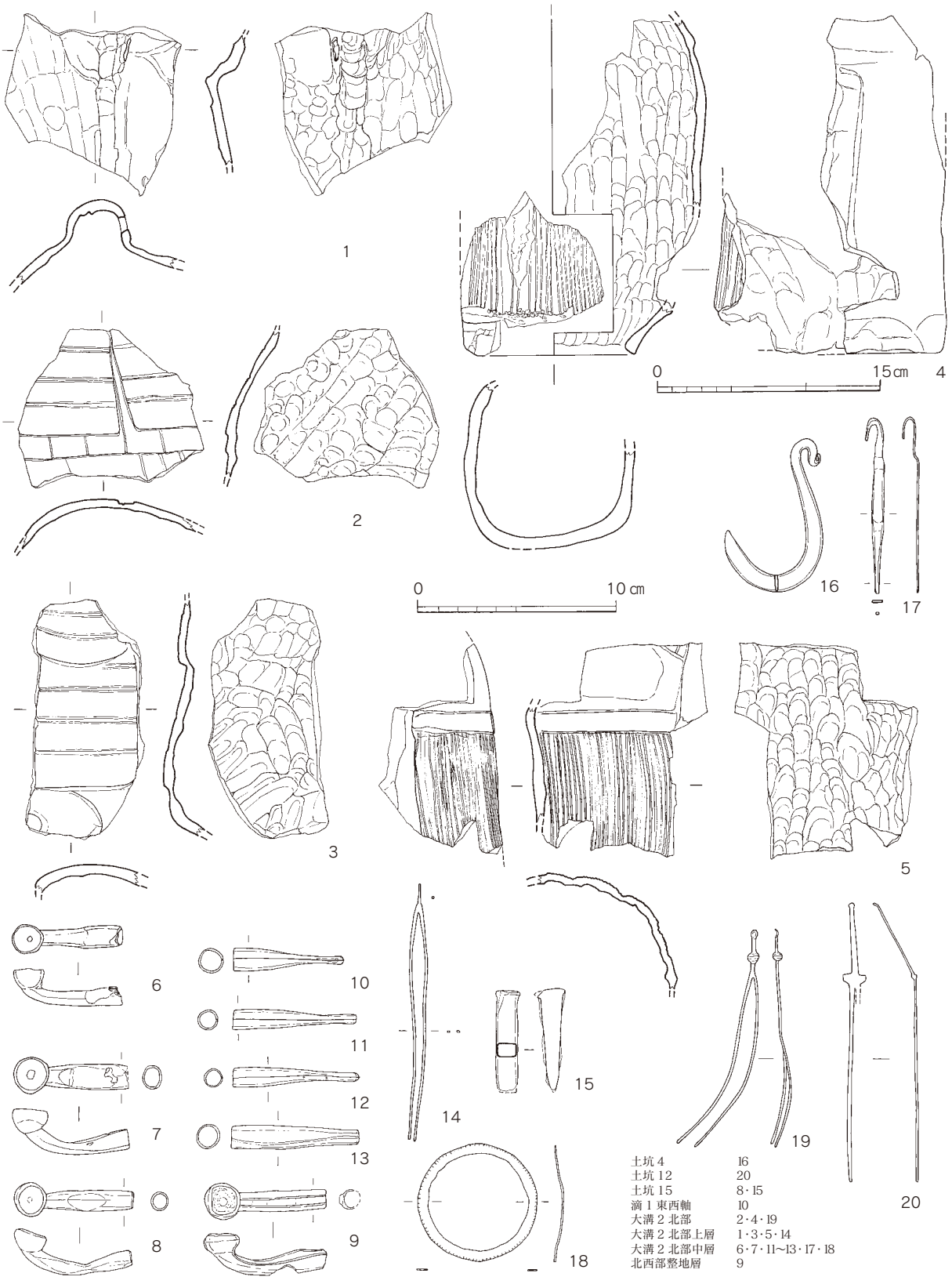
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	色調	調整・整形・装飾技法 凹面	凸面	上下端面・瓦当	側端面	製作技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
土坑23 116図1 図版18	平瓦 樋瓦	長さ29.3 幅35.4 厚さ1.8	土師質土器 黄灰白色	暗灰白〜灰黒色	ハケで、やや摩滅	ハケ	ハケ	切り離し後丁寧なナデ	1枚作り	凹面だけが摩滅しているので樋瓦と推定	在地	不明
土坑12 116図2 図版18	平瓦 樋瓦	長さ43.5 幅28.6 厚さ1.1	土師質土器 黄灰白色　カクセン石を含む	凹凸面にぶい暗黄灰色	ナデ後ハケ	ハケ	基部端面ナデ	凸面から切り込みを入れ、凹側を少し残して外している	1枚作り		在地	不明
埋甕6 117図1 図版18	平瓦 雁振瓦	長さ33.6 幅41.2 厚さ1.4	土師質土器 橙黄色が黄灰白色を挟む	凹凸面橙黄色	ナデ	ハケ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り		在地	不明
ピット6 117図2	平瓦 雁振瓦	長さ13.7 幅11.5 厚さ1.8	土師質土器 中心が黒灰色、その外が黄灰白色、外縁が橙黄色	凹凸面黄橙色	ナデ	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り	突帯に削りが見られるので右端付近の破片	在地	不明
ピット6 117図3	平瓦 雁振瓦	長さ11.1 幅10.9 厚さ2.2	土師質土器 橙黄灰白色が灰色を挟む	凸面暗灰褐色、凹面暗黄灰色	ハケ	ハケ	ナデ	ケズリと面取り	1枚作り	外面のみ変色	在地	不明
土坑3 117図4	丸瓦	長さ14.9 幅8.9 厚さ0.9	土師質土器 にぶい暗黄灰色	にぶい暗灰橙〜にぶい暗黄灰色	オサエ後ナデ	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明	水田の赤瓦が変色したもの	在地	不明
大溝2北部中層 118図1 図版18	丸瓦	長さ28.2 幅14.0 厚さ2.4	瓦質 灰色	表面側は灰黒色で、内部は灰白色	席と模骨痕の上をなでている	ナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明	一部銀化	在地	不明
大溝2北部中層 118図2 図版18	丸瓦	長さ23.3 幅13.2 厚さ1.8	瓦質 にぶい灰白色	にぶい灰白〜黒灰色	摸骨と布目痕あり	ナデ	ナデ	ケズリ後ナデ		銀化していない　釘孔あり	在地	不明
土坑3 118図3	丸瓦	長さ10.0 幅13.0 厚さ2.0	瓦質 灰色	灰白〜灰黒色	不明	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリと面取り	不明	銀化していない	在地	不明
土坑3 118図4 図版18	堤瓦	長さ9.8 幅14.9 厚さ1.4	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	外面灰色、内面灰黒色	指ナデ	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリ	1枚作り		在地	不明
土坑3 118図5 図版18	堤瓦	長さ13.3 幅15.5 厚さ1.2	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	外面灰色、内面灰黒色	指ナデ	ハケ状のナデ	ナデ	ケズリ	1枚作り		在地	不明
土坑21 118図6	平瓦	長さ24.6 幅17.0 厚さ2.2	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	内外灰黒色	ナデ	ナデ	瓦当は主文を宝珠文とする唐草文が描かれる	—	1枚作り	銀化していない	在地	不明
大溝2北部上層 118図7 図版18	平瓦	長さ18.6 幅30.0 厚さ1.5	瓦質 灰白色が黒灰色を挟む	内外灰黒色	ナデ	ナデ 平行沈線とスタンプあり	瓦当は主文菊花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り	銀化	在地	近代
土坑15 118図8 図版18	平瓦	長さ19.9 幅26.4 厚さ2.0	瓦質 青灰色	内外灰黒色	ナデ	ナデ	瓦当は主文3弁花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り	銀化していない	在地	不明
大土坑3 118図9	平瓦	長さ13.5 幅9.7 厚さ1.8	瓦質 灰白色	橙灰色	ナデ	ナデ スタンプあり	瓦当は主文菊花文で、唐草文が描かれる	—	1枚作り	銀化していない	在地	近代
大溝2 118図10	平瓦	長さ15.8 幅10.7 厚さ2.0	瓦質 灰白色	端部が黒灰色　他は灰白色	摩滅	摩滅 格子の線刻	ナデ	ケズリ	桶巻き	器面摩滅で調整不明	在地	不明



第119図　1次調査出土土製品実測図(1/3)

表56　1次調査出土土製品観察表1

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	推定産地	推定年代
土坑22 119図1 図版19	土人形 大黒天像	長さ3.1 幅3.2 高さ5.7	土師質土器 金雲母なし 黄橙色	後頭部から袋にかけて強くナデている　底面から押し上げあり	型合わせ成型		在地	不明
土坑4 119図2 図版19	土人形 布袋像	長さ3.0 幅3.4 高さ4.9	土師質土器 黄橙色	表裏型合わせた後に下面を押し上げが高く、ほぼ中空になっている	型合わせ成型 表裏の型は真横でなく斜め	ほぼ完形	在地	不明
埋甕2 119図3 図版19	土人形 大黒天像	長さ4.4 幅3.3 高さ5.6	土師質土器 金雲母なし 黄橙色	型合わせ成型の接合痕が隆起している	型合わせ成型	後面はヒビ多い 完形	不明	不明
土坑21 119図4 図版19	土人形 大黒天像	長さ2.5 幅1.2 高さ4.5	土師質土器 金雲母なし 黄橙色	型合わせ成型の合わせ部で割れたもの	型合わせ成型		不明	不明
廃棄土坑1 119図5 図版19	土人形 大黒天像	長さ3.8 幅3.6 高さ6.2	土師質土器 金雲母なし 暗灰色	型合わせ成型の接合痕が隆起している　下面から押し上げあり	型合わせ成型	後面はヒビ多い 完形	在地	不明
排土中 119図6 図版19	芯押さえ 唐人人形	長さ2.1 幅1.4 高さ4.2	磁器	型押し成型で、背面はナデ後穿孔している 腕は貼り付け　透明釉全面掛け		頭部欠損	肥前	不明
大溝2北部上層 119図7 図版19	土人形 兵隊人形	長さ4.4 幅2.9 高さ10.5	土師質土器 金雲母あり 暗灰白色	型合わせ成型の接合部を削っている　中空で、下面を塞いでいない	型合わせ成型	後面は着色なし	在地	不明
大溝2北部上層 119図8 図版19	土人形 モダンガール人形	長さ4.6 厚さ4.7 高さ4.6	土師質土器 暗灰白色	型合わせ成型と思われるが、接合痕が見られない　着色していたらしく、帽子に白かピンクが付着している	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部 119図9 図版19	土人形 鼠	長さ3.8 幅5.3 高さ3.0	土師質土器 暗黄橙灰色	表裏型合わせた後に下面を押し上げる	型合わせ成型	完形	在地	不明
大溝2北部 119図10 図版19	土人形 土馬	長さ2.8 幅5.4 高さ6.4	土師質土器 黄灰白色	耳は沈線を入れることで表現	手捏ね	完形	在地	不明
ピット20 119図11 図版19	土人形 土馬	長さ3.6 幅8.0 高さ6.8	土師質土器 暗黄灰白色	耳がなく頭は平坦で、尻尾を扇形にしている	手捏ね		在地	不明
ピット26 119図12 図版19	鳩笛	長さ5.6 幅9.0 高さ3.1	土師質土器 にぶい黄灰白色	型から外してナデているので、凹凸が不鮮明	型合わせ成型	胎から赤坂焼か	在地	不明
土坑10 119図13 図版19	土鈴	長さ6.5 幅5.0 高さ6.4	土師質土器 黄灰色	天井部内面にしぼりあり 下に方形の穿孔があり、側面に2本の墨線あり	型合わせ成型	橙灰色は焼成による色調	在地	不明
ピット3 119図14 図版19	土鈴	長さ2.8 幅2.3 高さ3.5	土師質土器 黄灰色	天井部内面にしぼりあり 下に方形の穿孔があり、内部に球が入っている	型合わせ成型	完形	在地	不明
土坑16 119図15 図版19	土鈴	長さ1.4 幅1.3 高さ1.6	土師質土器 黄灰色	天井部内面観察不能 下に方形の穿孔があり、内部に球が入っている	型合わせ成型	完形	在地	不明
廃棄土坑1北部下層 119図16	土錘	長さ5.2 最大径3.0 重量32	土師質土器 にぶい黄灰色	手捏ね　ナデ　穿孔径1.0cm	手捏ね成型	ほぼ完形	在地	不明
大溝2 119図17	土錘 管型	長さ3.8 最大径1.4 重量8	にぶい暗黄灰色	手捏ね　ナデ　穿孔径0.5cm	—	完形	在地	不明
大溝2北部中層 119図18	土錘 管型	長さ4.0 最大径1.6 重量7	にぶい暗黄灰色	手捏ね　ナデ　穿孔径0.5cm	—	ほぼ完形	在地	不明
大正包含層 119図19	土錘 管型	長さ4.9 最大径1.7 重量12	土師質土器 暗黄橙色	手捏ね　ナデ　穿孔径0.7cm	手捏ね成型	ほぼ完形	在地	不明
大溝2北部上層 119図20	窯道具	長さ10.6 幅5.6 厚さ1.8	土師質土器	上面の側縁が火を強く受け、中央部に半円に黒く変色した痕跡がある　下面は焼けが弱くハケ　藁痕あり	手捏ね		在地	不明
土坑4 119図21	サナ状土製品	長さ14.8 幅10.0 厚さ2.9	土師質土器	下面は平坦で、板状圧痕が残り、焼けが弱い　上面は丸みを持ち、良く焼けている　孔の表面も赤化している　径6cm程度で、孔は楕円形に復元できる	手捏ね		在地	不明
大溝2 119図22	サナ状土製品	長さ11.8 幅11.0 厚さ2.8	土師質土器	下面が凸面、上面が凹面を成すのは、焼成時か使用時の歪みだろう　上面はナデ　下面は焼けていないか器面摩滅　径9cmほどに復元できる	手捏ね	調整がなく、側面が丸みをもつので、七輪のサナではない	在地	不明
大溝2北部上層 120図1 図版19	大型土人形 手・腰部	長さ10.4 幅5.7 高さ11.8	土師質土器 暗黄橙灰色 褐色パミスを含む	型押し成型で、鎧部分の下位だろう	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部上層 120図2 図版19	大型土人形 鎧武者人形	長さ12.1 幅3.3 高さ10.1	土師質土器 暗黄橙灰色 褐色パミスを含む	型押し成型で、鎧部分以外の部分は何の部位か不明	型合わせ成型		在地	不明



第120図　1次調査出土土・金属製品実測図(1～5は1/4、他は1/3)

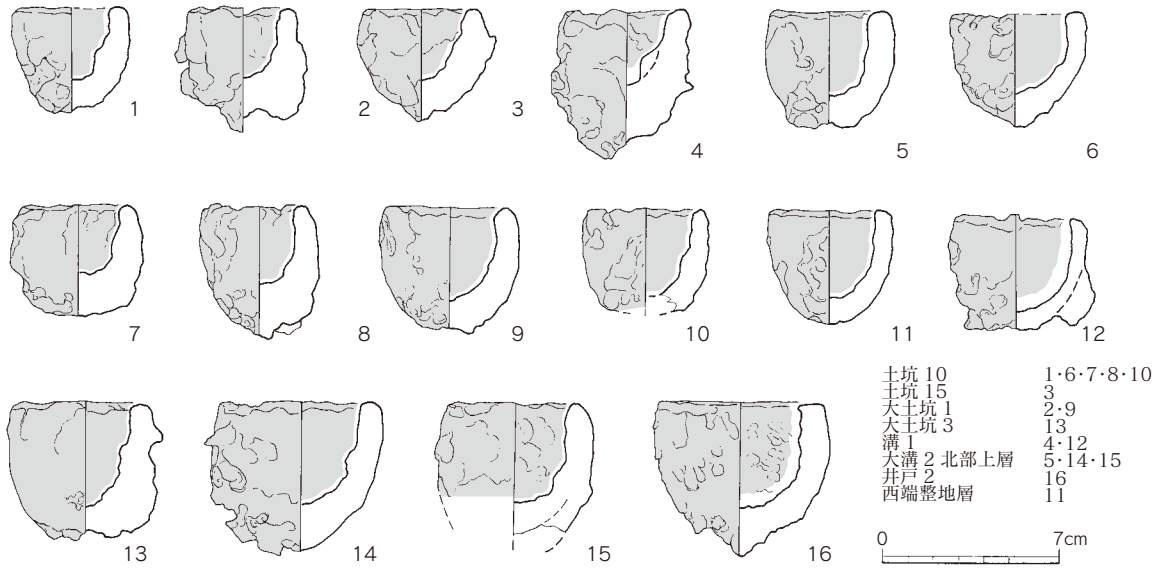
表57　1次調査出土土製品観察表2

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	胎の種類 胎の特徴	調整・整形・装飾技法	製作技法	所見 特記事項	所見 推定産地	所見 推定年代
大溝2北部 120図3 図版19	大型土人形 鎧武者人形	長さ7.5 幅1.8 高さ16.2	土師質土器 暗黄橙灰色 褐色パミスを含む	型押し成型で、鎧部分の下位だろう	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部 120図4 図版19	大型土人形	長さ16.1 幅13.8 高さ22.8	土師質土器 暗黄橙灰色 褐色パミスを含む	型押し成型で、外面の沈線から袴の裾だろう　5と同一個体だろうが接合しない	型合わせ成型		在地	不明
大溝2北部上層 120図5 図版19	大型土人形	長さ12.3 幅8.3 高さ15.5	土師質土器 暗黄橙灰色 褐色パミスを含む	型押し成型で、外面の沈線から袴だろう　4と同一個体だろうが接合しない	型合わせ成型		在地	不明

表58　1次調査出土金属製品観察表

遺構名 挿120図番号 120図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特徴
大溝2北部中層 120図6 図版19	煙管雁首	長さ5.5 火皿径1.3 首部径0.9	銅製　羅宇の木質がわずかに残る
大溝2北部中層 120図7 図版19	煙管雁首	長さ5.6 火皿径2.2 首部径1.1	真鍮製　金メッキ一部残る　鉢内部に炭化物残る
土坑15 120図8 図版19	煙管雁首	長さ6.0 火皿径1.7 首部径0.8	真鍮製　中央部が折れ曲がっている
北西部整地層 120図9 図版19	煙管雁首	長さ6.2 火皿径1.7 首部径0.8	真鍮製　接合部に補強材を被せて肥厚している
溝1東西軸 120図10 図版19	煙管吸口	長さ5.9 最大径1.2	真鍮製　金メッキなしか　短いもの
大溝2北部中層 120図11 図版19	煙管吸口	長さ5.9 最大径1.2	真鍮製
大溝2北部中層 120図12 図版19	煙管吸口	長さ6.3 最大径1.1	真鍮製　金メッキ部分的に残る
大溝2北部中層 120図13 図版19	煙管吸口	長さ6.3 最大径1.3	真鍮製　金メッキ全面

遺構名 挿120図番号 120図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特徴
大溝2北部上層 120図14 図版19	簪	長さ13.1 幅1.0 厚さ0.1	真鍮製　上端は尖っているので珠を刺していただろう
土坑15 120図15 図版19	鏨	長さ5.2 最大幅1.2 厚さ0.8	鉄製で、頭部は折り曲げて叩いて広くしている
大溝2北部中層 120図16 図版19	自在鉤	長さ4.8 高さ7.6 厚さ0.2	銅製　無文
土坑4 120図17 図版19	金具	長さ8.7 幅0.8 厚さ0.1	鉄製　無文　先端は欠損しているか
大溝2北部中層 120図18 図版19	金輪	径7.0 厚さ0.02	銅製　周縁に刻み目があり、組み合わせの金具だろう
大溝2北部 120図19	簪	長さ11.3 幅1.1 厚さ0.5	銅製　頂部に耳かきがあり、玉は材質が不明だが劣化している
大溝2北部 120図20 図版19	簪	長さ15.3 幅0.8 厚さ0.3	銅製　頂部に耳かきがあり、玉は失われている



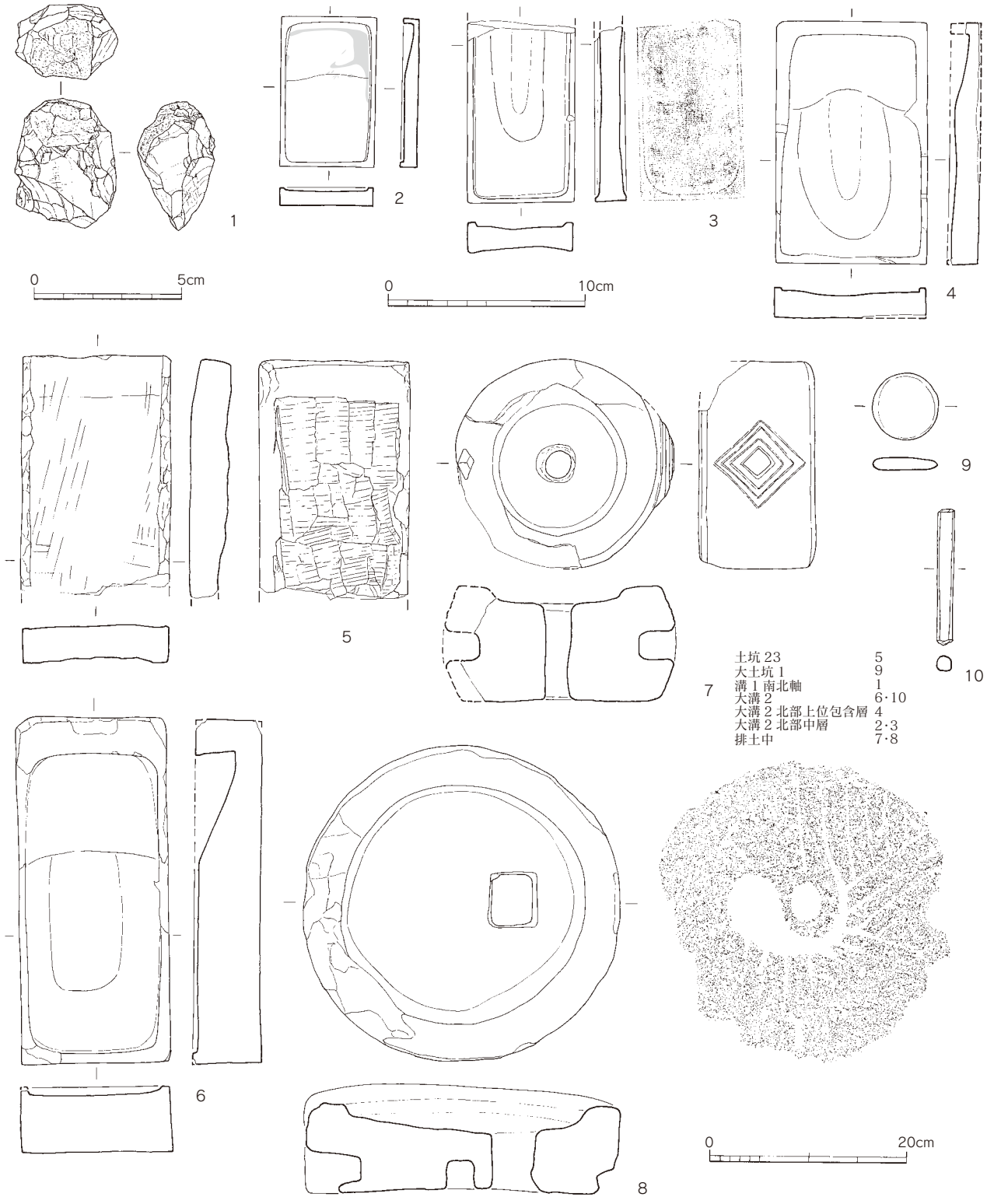
第121図　1次調査出土るつぼ実測図(1/3)

130図１は刀の鞘の半身で、型合わせではなく、刀身を挿し込む部分を繰り込んだものである。表面を繊維質で覆った痕跡や、紐で巻いた緊縛痕はなく木質のみである。刀身を固定する目釘孔はないので、挿し込むだけで固定することになる。上端部と中央部に方形の繰り込みがあるが通常は刀装具の口金物と櫓金物が付く位置だが、付設した痕跡もない。道具刀か白鞘刀であれば、刀装具は必要ないので、未製品なのかもしれない。内面に鉄錆が付着していないことから、刀身を抜いた状態で廃棄したものか、あるいは刀身を抜きとるために半裁した可能性もあるが、外面の加工から未製品とするべきだろう。130図２は矢羽形木製品で、表裏ともに間を空けて黒塗りすることで、鷹羽形にしている。『大川の民俗』調査報告によると、上棟式では家の前に破魔矢と弓を飾り、式終了後は棟梁が持ち帰るとされている(引用文献５)。

表59　１次調査出土土製品観察表３

遺構名	器種	法量(cm)	胎の種類	調整・整形・装飾技法	製作技法	所　見		
挿図番号	形状	( )は復元値	胎の特徴			特記事項	推定産地	推定年代
図版番号	通称名							
土坑10 121図１ 図版19	るつぼ	口径4.8 器高4.5	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に銅の付着物あり	在地	不明
大土坑１ 121図２ 図版19	るつぼ	口径5.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
土坑15 121図３ 図版19	るつぼ	口径4.6 器高4.4	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内外面全面に銅付着	在地	不明
溝１横 121図４ 図版19	るつぼ	口径5.1 器高5.2	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
大溝２北部上層 121図５ 図版19	るつぼ	口径4.6 器高4.6	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
土坑10 121図６ 図版19	るつぼ	口径4.2 器高5.4	土師質土器 にぶい灰色　混入物多い	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に鉄らしい付着物あり	在地	不明
土坑10 121図７ 図版19	るつぼ	口径4.6 器高4.4	土師質土器 にぶい灰色　混入物多い	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面一部に銅付着	在地	不明
土坑10 121図８ 図版19	るつぼ	口径4.2 器高5.4	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　外面一部に銅付着	在地	不明
大土坑１ 121図９ 図版19	るつぼ	口径5.1 器高5.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
土坑10 121図10 図版19	るつぼ	口径4.6	土師質土器 にぶい灰色　混入物多い	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面に白い付着物あり	在地	不明
土坑10 121図11 図版19	るつぼ	口径5.1 器高4.5	土師質土器 にぶい灰色　混入物少ない	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	内面一部に銅付着	在地	不明
溝１横 121図12 図版19	るつぼ	口径5.3 器高4.5	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
大土坑３ 121図13 図版19	るつぼ	口径5.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面に白色の付着物	在地	不明
大溝２北部上層 121図14 図版19	るつぼ	口径6.4 器高6.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
大溝２北部上層 1　21図15 図版19	るつぼ	口径5.0	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか　底部欠損	手捏ね	完形　内面の一部に銅付着	在地	不明
井戸２ 121図16 図版19	るつぼ	口径(6.4) 器高(6.0)	土師質土器 完形のため胎土不明	全面ガラス化のため器面観察できないが手捏ねか	手捏ね	完形	在地	不明

第122図　1次調査出土砥石実測図(1/3)

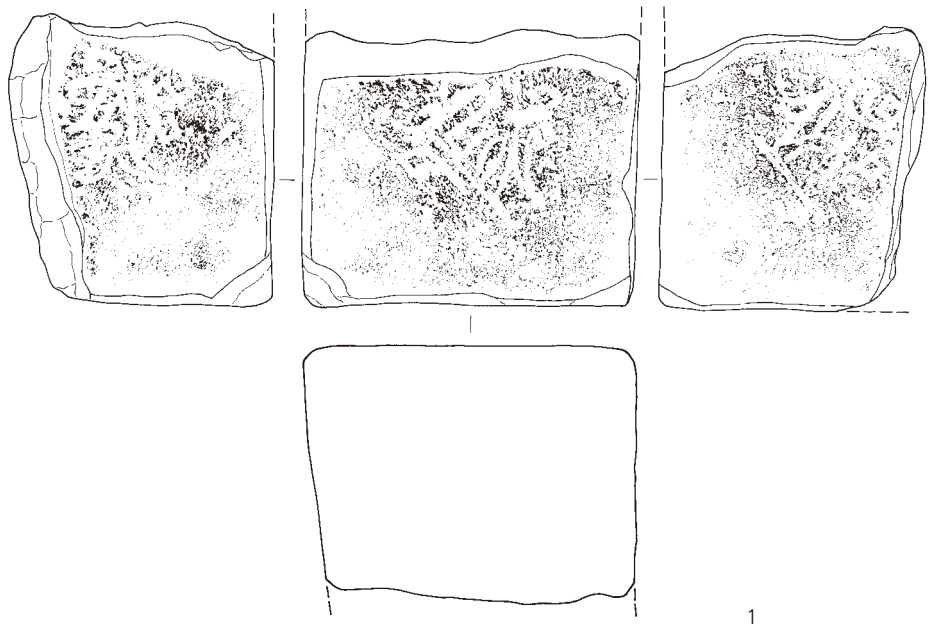


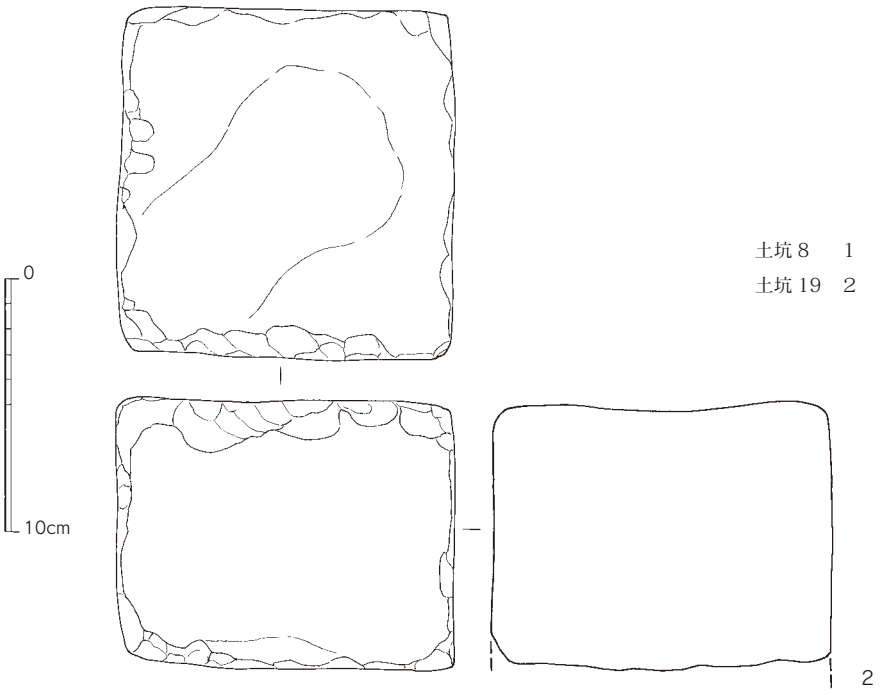
第123図　1次調査出土石製品実測図(1・9・10は1/2、7・8は1/6、他は1/3)

表60　1次調査出土石製品観察表

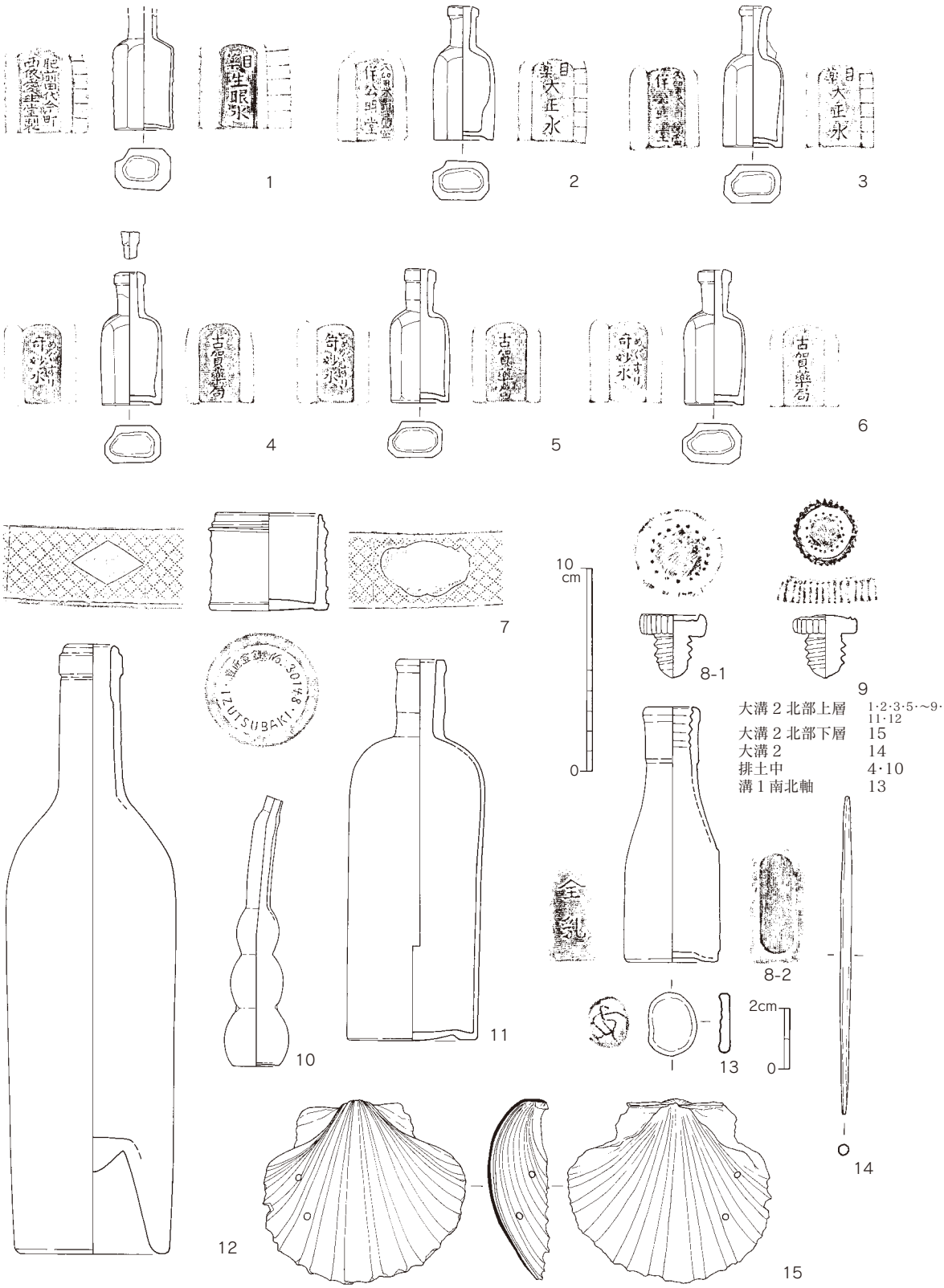
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特　徴
北西部整地層 122図1 図版20	砥石 中砥 手持ち砥石	長さ5.0 幅4.8 厚さ4.2重さ134	砂石製 使用面は上面のみで他は整形面と思われるが、器面摩滅が著しく詳細不明
北西部整地層 122図2 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.9 幅5.6 厚さ1.8重さ140	天草石製　表面にやや窪みと使用痕跡あり　裏面は使用しており、両側面は整形面　上下端面は欠損後整形
土坑4 122図3 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ7.5 幅5.9 厚さ0.6重さ53	頁石製　表裏が使用面で、裏面に剥離痕があるように、薄く剥がれた破片を利用している　側面と上端面は整形面
井戸2 122図4 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.3 幅5.0 厚さ5.2重さ133	天草石製　欠損部を整形しているのみで、平坦面はいずれも使用している 面に凸面はない
ピット7 122図5 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ8.1 幅4.3 厚さ2.6重さ124	天草石製　使用面はやや窪む　裏面と下端面は欠損後の整形面　右側面の上端は集中的に使用されている
土坑12 122図6 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ4.5 幅3.2 厚さ2.5重さ41	天草石製 上端面のみ整形面で、他は使用面だろう　左側面の凸面は曲面用か
北西部整地層 122図7 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ5.6 幅4.7 厚さ1.7重さ51	天草石製 両側面は整形面、裏面・上端面は欠損後の整形面
土坑24 122図8 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ6.0 幅2.0 厚さ1.5重さ32	天草石製 上端の欠損面以外すべて使用面
廃棄土坑1 122図9 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.1 幅4.0 厚さ2.4重さ163	天草石製 左側面は整形面だが、右側面は段がつくので使用面　上端面は整形面
土坑37 122図10 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.1 幅4.8 厚さ3.8重さ298	天草石製 上面は欠損後整形面　下端面は剥落しているが、整形面
土坑3 122図11 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.8 幅3.6 厚さ3.3重さ162	上端面と裏面は欠損後整形面
大土坑1 122図12 図版10	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.6 幅6.8 厚さ3.2重さ236	天草石製　使用面は本来直方体の砥石の端面であったが、欠損後上面に転用したものであり、整形面の中央部だけを使用している　裏面・下端面は欠損後整形面、上端面は本来の整形面
大溝2 122図13 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ7.4 幅5.5 厚さ4.5重さ223	天草石製　置き砥石の欠損品を粗割りして再利用したもので、断面逆台形にして持ちやすくしている
廃棄土坑2 122図14 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ8.0 幅5.9 厚さ5.8重さ333	天草石製 下端面は欠損後整形面で、裏面は整形面が欠損したもので、部分的に使用している
廃棄土坑2 122図15 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ10.6 幅9.3 厚さ3.5重さ558	天草石製 裏面は平坦な整形面で中央に敲打痕が残る　左側面も整形面で、その他は使用面

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm・g) ( )は復元値	特　徴
土坑12 122図16 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.3 幅4.3 厚さ7.8重さ437	天草石製　方柱形の置き砥石を粗割りして再利用している
大土坑1 122図17 図版20	砥石 仕上げ砥 置き砥石	長さ9.0 幅7.8 厚さ3.0重さ229	天草石製 裏面は欠損後整形面で新たに底面を作り、左側面は一部に整形面が残る
西端整地層 122図18 図版20	砥石 仕上げ砥 手持ち砥石	長さ14.2 幅6.4 厚さ3.9重さ427	天草石製　上下端面が使用面に対して斜めに整形面があり、両側・裏面は欠損後整形面
溝1南北軸 123図1 図版20	火打石	高さ4.3 幅3.5 厚さ23重さ37	チャート製　素面を上部に残し、表裏を剥離し下端を刃部のように尖らせて使用部を形成している
大溝2北部上位包含層 123図2 図版20	硯	長さ7.6 幅4.7 厚さ0.8重さ67	水銀朱が残るので、朱用 粘板岩製　黒　完形
大溝2北部中層 123図3 図版20	硯	長さ9.1 幅5.6 厚さ1.6重さ159	裏面に線刻で「赤間関」とあるので赤間石 輝緑凝灰岩製
大溝2北部上位包含層 123図4 図版20	硯	長さ12.3 幅7.8 厚さ1.6重さ267	裏面は剥離しているが、線刻文字はない 粘板岩製　黒
土23 123図5 図版20	硯	長さ12.1 幅7.5 厚さ1.8重さ315	天草石製だが茶色の筋が入っていない 上下端と側面の高い部分を打ち欠いて平坦にし、裏を彫って再利用しようとして廃棄している
大溝2 123図6 図版20	硯	長さ14.2 幅7.6 厚さ3.5重さ773	天草石製製だが茶色の筋が入っていない ほぼ完形　墨が著しく付着
排出土中 123図7	茶臼上臼	径21.4 高さ12.0 重さ8.6kg	凝灰岩製 摺目は摩滅 多孔質
排出土中 123図8	上臼	径32.2 高さ11.2 重さ13.9kg	凝灰岩製 多孔質
大土坑1 123図9 図版20	碁石	径2.2 厚さ0.4 重さ3	粘板岩製　黒 よく研磨されている
大溝2 123図10	石筆	長さ4.6 径0.6 重さ4	滑石製 側面は6面に平坦面を持ち、上下端面は両方使用している
土坑8 124図1 図版20	石塔部材	長さ10.8 幅13.2 厚さ10.1重さ2850	凝灰岩製 多孔質 梵字が線刻される
土坑19 124図2 図版20	石塔部材か	長さ10.6 幅13.5 厚さ13.4重さ4150	凝灰岩製 線刻や加工加工痕はない





第124図　1次調査出土石塔部材実測図(1/3)



第125図　１次調査出土ガラス・鹿角・貝製品実測図(13は1/2、他は1/3)

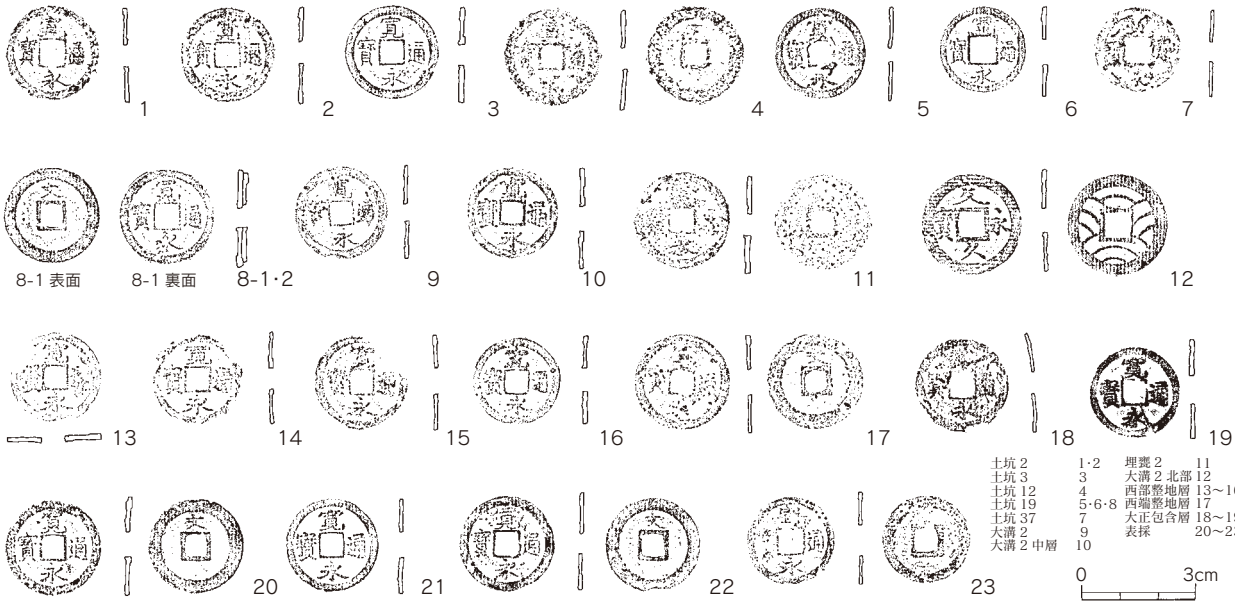
131図１は大きさから子供用のものだろう。前歯は大きさからこの下駄の歯と想定したが厚さが合っておらず確証にかける。131図２の「善」の焼印は製作者の名前ではないかと思われるので、この記号は屋号かもしれない。131図５の前歯は欠損したものであって、摩滅したものではない。131図７は前歯に裏から釘が打ち込まれているが、欠けた面から打ち込んでいるので補修痕ではない。『久留米市史』によると、「家出人が出たら、その人の履物に釘を打つ」という記述があるので、下駄を焼くこと自体が禁忌行為だった可能性がある。これは×の上に横線があるので、単に×のモチーフではないようだ。132図６のぼっくりの台の裏には３つの山形の抉りが入っているが、加工痕跡ではなく、意図的な形態である。132図10は歯の厚さがわずか１㎝しかない。129図15の下部に焼印があるが、残りが悪く判読できないものの、おそらく131図２の丸に「善」と同じ焼印であろう。そういった俗信の類かもしれない(引用文献６)。131図11の中央の孔は穿孔したものではなく、節穴である。131図16は横緒穴がないので未製品だろうか。釘穴らしいものが横穴の位置にあるので、ぽっくりと草履下駄の折衷のような製品の可能性もある。

図版24－１～５は紐で、材質は分析にかけていないが、棕櫚製のものがほとんどだろう。１は縒紐で結び目は馬車馬のこぶと呼ばれるものである。２は幅５から７ミリの樹皮のようなものを縒ったもので、弾力性がない。３本はあるが本来１本のものだろう。３の結び目は止め結びであろう。４は２本の撚り紐２本で、漁師結びで結び目を２つ作っている。５は２本で縒った紐３本の組紐で、２本の紐を漁師結びで、結び目を２つ作っている。

表61　１次調査出土ガラス・鹿角・貝製品観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 材質 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大溝２北部上層 125図１ 図版21	瓶 緑ガラス 目薬瓶	底長軸2.8 底短軸2.1	型合わせ　「肥前田代今町西依愛生堂製」と「目薬」「生眼水」の陽刻あり　両側面の５本の凸線は目盛りの意味があるのだろうか
大溝２北部上層 125図２ 図版21	瓶 青ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 器高6.6	型合わせ　「久留米市局四」「伴公明堂」、「目薬」「大正水」、目盛りの陽刻あり　口縁部が玉縁状で、バリが残る
大溝２北部上層 125図３ 図版21	瓶 青ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 器高6.6	型合わせ　「久留米市局四」「伴公明堂」、「目薬」「大正水」、目盛りの陽刻あり
大溝２北部上層 125図４ 図版21	瓶 青ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 器高6.6	型合わせ　「古賀薬局」「奇妙水」「めぐすり」の陽刻あり コルク栓が残っていた
大溝２北部上層 125図５ 図版21	瓶 青ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 器高6.6	型合わせ　「古賀薬局」「奇妙水」「めぐすり」の陽刻あり　頸部が曲がっている
大溝２北部上層 125図６ 図版21	瓶 青ガラス 目薬瓶	底面長軸2.9 底面短軸2.0 器高6.6	型合わせ　「古賀薬局」「奇妙水」「めぐすり」の陽刻あり
大溝２北部上層 125図７ 図版21	瓶 透明ガラス ポマード瓶	口径5.1 底径5.7 器高4.7	円柱状　側面は点描格子で、窓が対面にあり、裏銘に「・意匠登録No30148・」と上下逆に「IUZUTSUBAKI」の陽刻がある
大溝２北部上層 125図８－１ 図版21	瓶 緑ガラス 牛乳瓶	口径2.7 底径4.5 器高12.6	口縁部はネジ式 型合わせ　接合痕わずか 内面に牛乳のカルシウム分が残る

遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
大溝２北部上層 125図８－２ 図版21	瓶蓋 緑ガラス 牛乳瓶蓋	口径3.2 ネジ部径1.8 器高3.1	ネジ式　型合わせ　接合痕わずか　上面の環状珠文は接合後のスタンプで「え」とも読める
大溝２北部上層 125図９ 図版21	瓶 緑ガラス 牛乳瓶蓋	口径3.2 ネジ部径1.8 器高3.0	ネジ式　型合わせ　接合痕わずか　上面の円形窪みは接合後のスタンプで、「永」と書かれている
大溝２北部上層 125図10 図版21	瓶 緑ガラス ニッキ瓶	口径0.8 底径2.1 器高13.6	口縁部は打ち欠き外し　完形 型合わせ　口縁部が曲がっているのは口縁部の処理の失敗　気泡あり
大溝２北部上層 125図11 図版21	瓶 緑ガラス	口径2.5 底径5.4 器高8.5	型合わせの接合痕なく、全体がややいびつなので、吹きガラスか　完形　無文
大溝２北部上層 125図12 図版21	瓶　ワインか 黒緑ガラス	口径2.2 底径7.4 器高29.8	底部を上げ底にしている 型合わせの接合痕わずかにあり
大溝２ 125図13	おはじき 青ガラス	長軸2.1 短軸2.0 器高0.4	完形　扁平な楕円形で、片面にじゃんけんの「グー」の陽刻がある
大溝２ 125図14 図版19	箸	長さ15.7 径0.6	鹿角製　完形　細い方が先端で、先端以外は光沢がある
大溝２北部下層 125図15 図版19	貝杓子	長さ9.0 幅9.9 高さ3.0	板屋貝製 内面の変色は使用によるものだろう

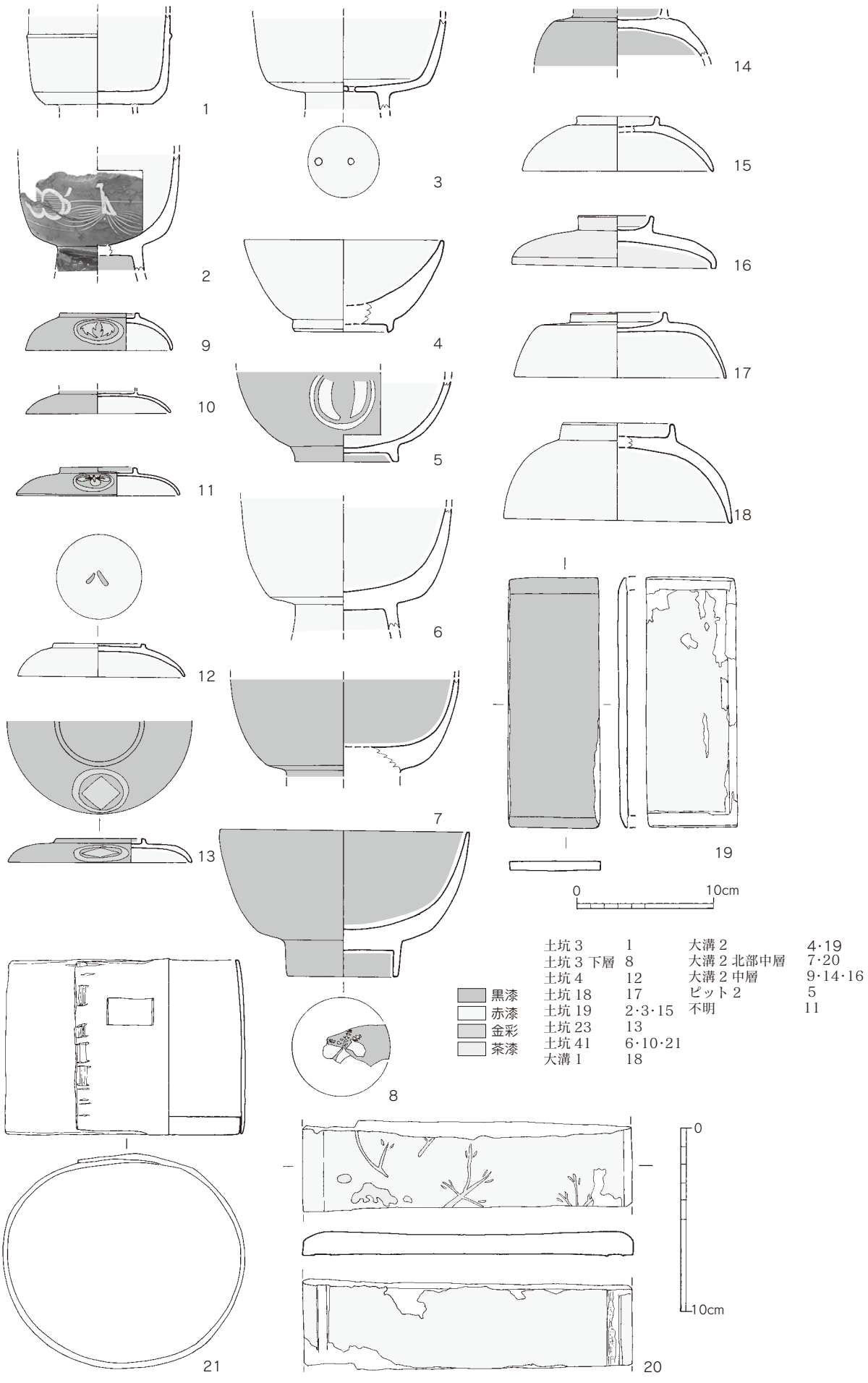


第126図　1次調査出土銭実測図(1/2)

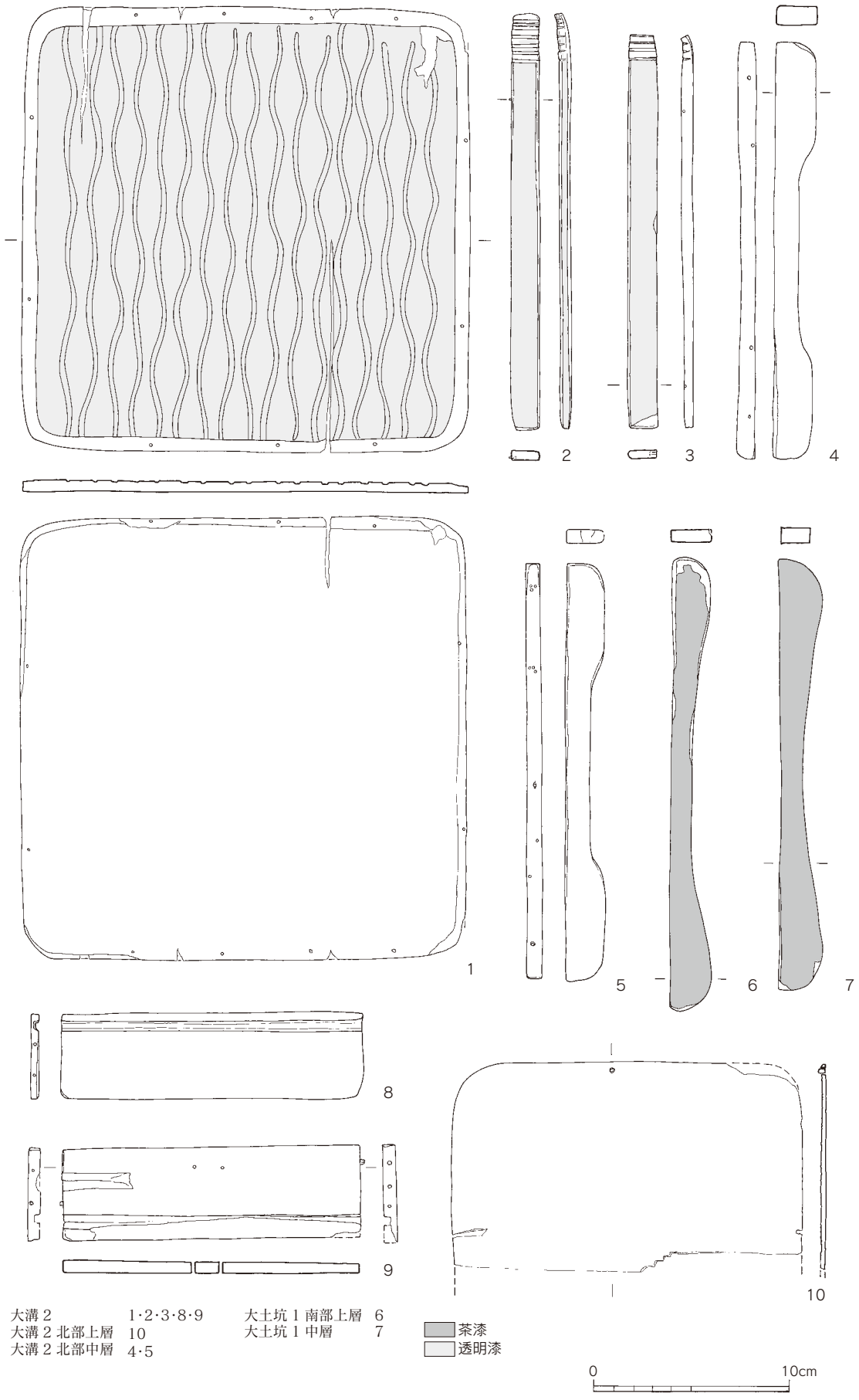
表62　1次調査出土銭観察表

遺構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量(cm) 径 孔径	特　徴
土坑2 126図1 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6	銅質が良いが緑青多く付着　「宝」の字体から不旧手(1726年初鋳)
土坑2 126図2 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6	錆びが少なく、裏がやや摩滅
土坑3 126図3 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.6	銅質が良く、残りも良い 「宝」の字体から石巻銭(1739年初鋳)
土坑12 126図4 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6	緑青多く付着　(1668年初鋳)
土坑19 126図5 図版19	寛永通宝 古寛永	2.5 0.5	「宝」の字体が独特で分類不明
土坑19 126図6 図版19	寛永通宝 新寛永	2.4 0.7	錆びが少なく、残り良い 十万坪銭座(1768年初鋳)
土坑37 126図7 図版19	寛永通宝 古寛永	2.2 0.6	外縁が磨り減っている 文字の遺在状況が悪いので分類不明
土坑19 126図8－1 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6	表面で8－2と融着　(1668年初鋳)
土坑19 126図8－2 図版19	寛永通宝 不明	2.3 0.6	表面で8－1と融着　裏に文字なし
大溝2 126図9 図版19	寛永通宝 新寛永	2.5 0.7	銅質が良く、残りも良い　裏に文はない
大溝2 中層 126図10 図版19	寛永通宝 古寛永	2.2 0.6	錆びは少なく、やや摩滅している　二日市村銭(1637年初鋳)
埋甕2 126図11 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6	錆び著しい　(1668年初鋳)

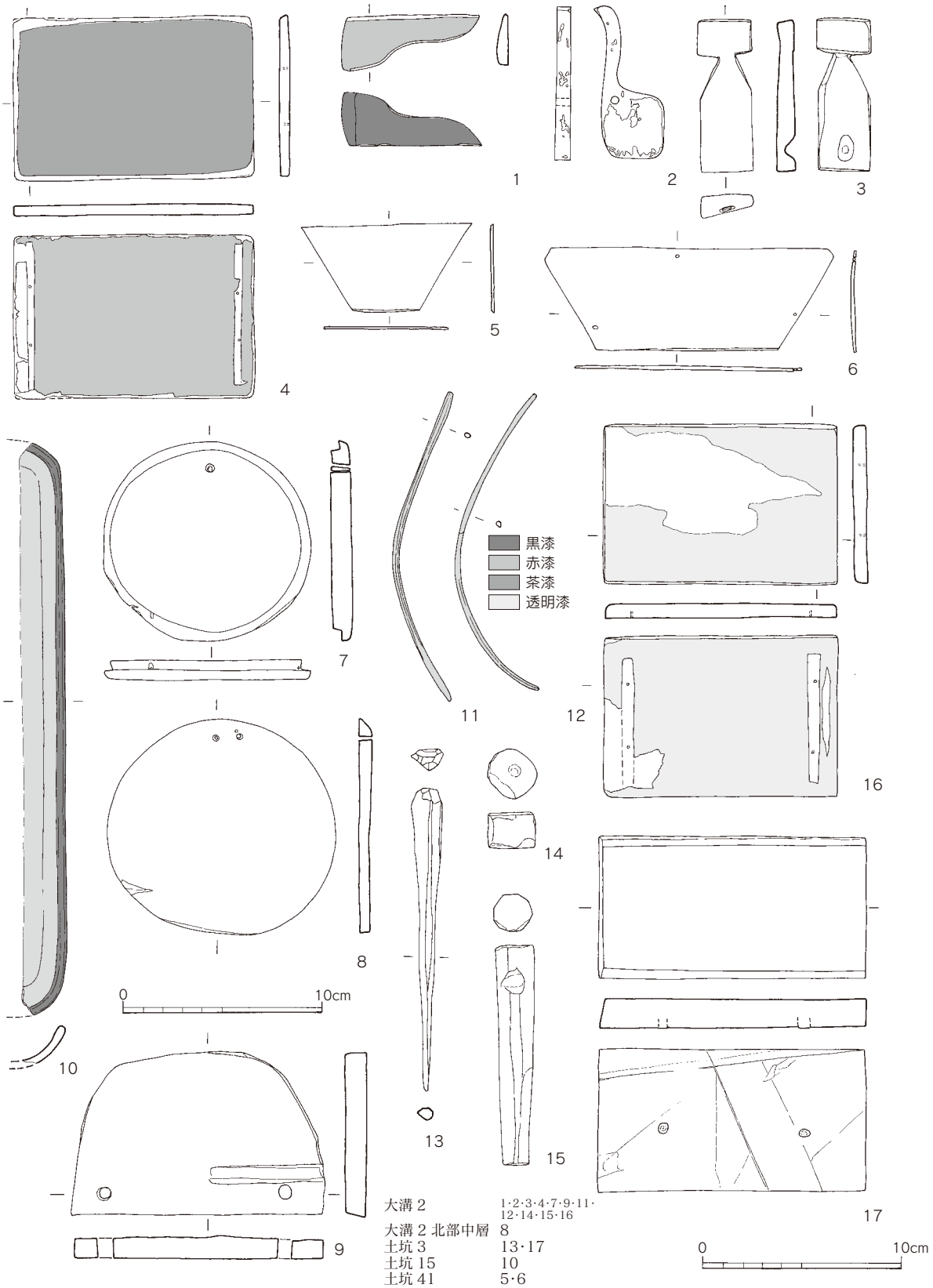
遺構名 挿図番号 図版番号	銭名 分類名	法量(cm) 径 孔径	特　徴
大溝2北部 126図12 図版19	文久永宝	2.7 0.6	銅質が良く、残りも良い (1863年初鋳)
西部整地層 126図13 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6	周縁欠損　銅質が良く、残りも良い　「宝」の字体から芝網縄手銭(1716年初鋳)
西端整地層 126図14 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6	銅質が良く、残りも良いが、縁が欠損 「宝」の字体から芝網縄手銭(1716年初鋳)
西部整地層 126図15 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.6	銅質悪く、摩滅している　欠損あり 二日市村銭(1637年初鋳)
西部整地層 126図16 図版19	寛永通宝 古寛永	2.3 0.6	裏面は摩滅して、外縁と文字の高さが同じになっている　吉田銭(1716年初鋳)
西端整地層 126図17 図版19	寛永通宝 文銭	2.4 0.6	銅質が良く、残りも良い (1668年初鋳)
大正包含層 126図18 図版19	寛永通宝 新寛永	2.4 0.6	表裏摩滅して、外縁と文字の高さが同じになっている　「宝」の字体から不旧手(1726年初鋳)
大正包含層 126図19 図版19	寛永通宝 新寛永	2.3 0.6	歪みあり　「宝」の字体から不旧手(1726年初鋳)
表採 126図20 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6	残り良い　裏面のみ茶色に変色　(1668年初鋳)
表採 126図21 図版19	寛永通宝 古寛永	2.4 0.7	銅質よく、残りよい 高田所鋳銭(1717年初鋳)
表採 126図22 図版19	寛永通宝 文銭	2.4 0.7	銅質が悪く、裏面は摩滅している 1668初鋳
表採 126図23 図版19	寛永通宝 文銭	2.5 0.6	銅質がやや悪いが、残りは良い 1668初鋳



第127図　1次調査出土木製品実測図1（19は1/4、他は1/3）



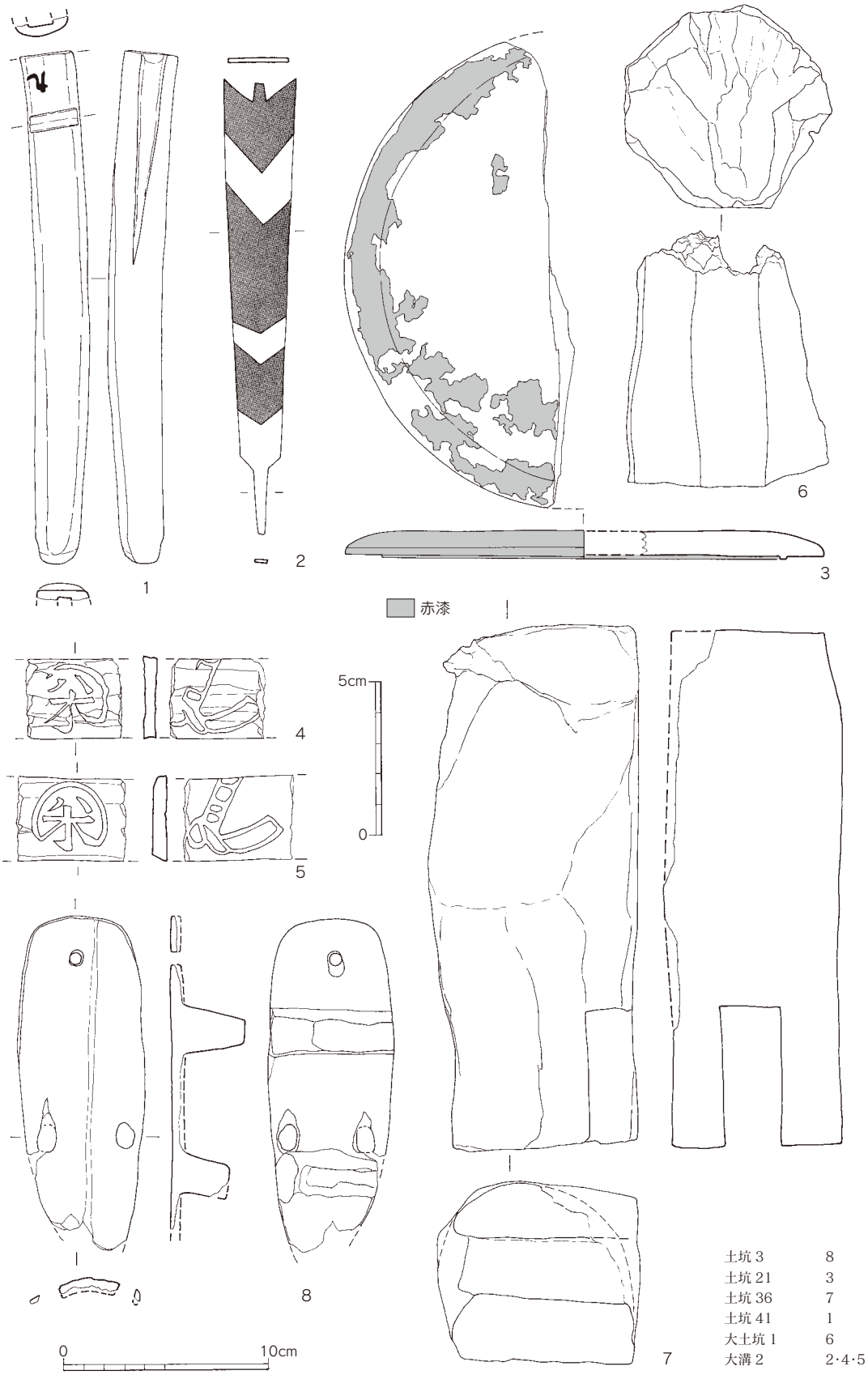
第128図　1 次調査出土木製品実測図 2 (1/3)



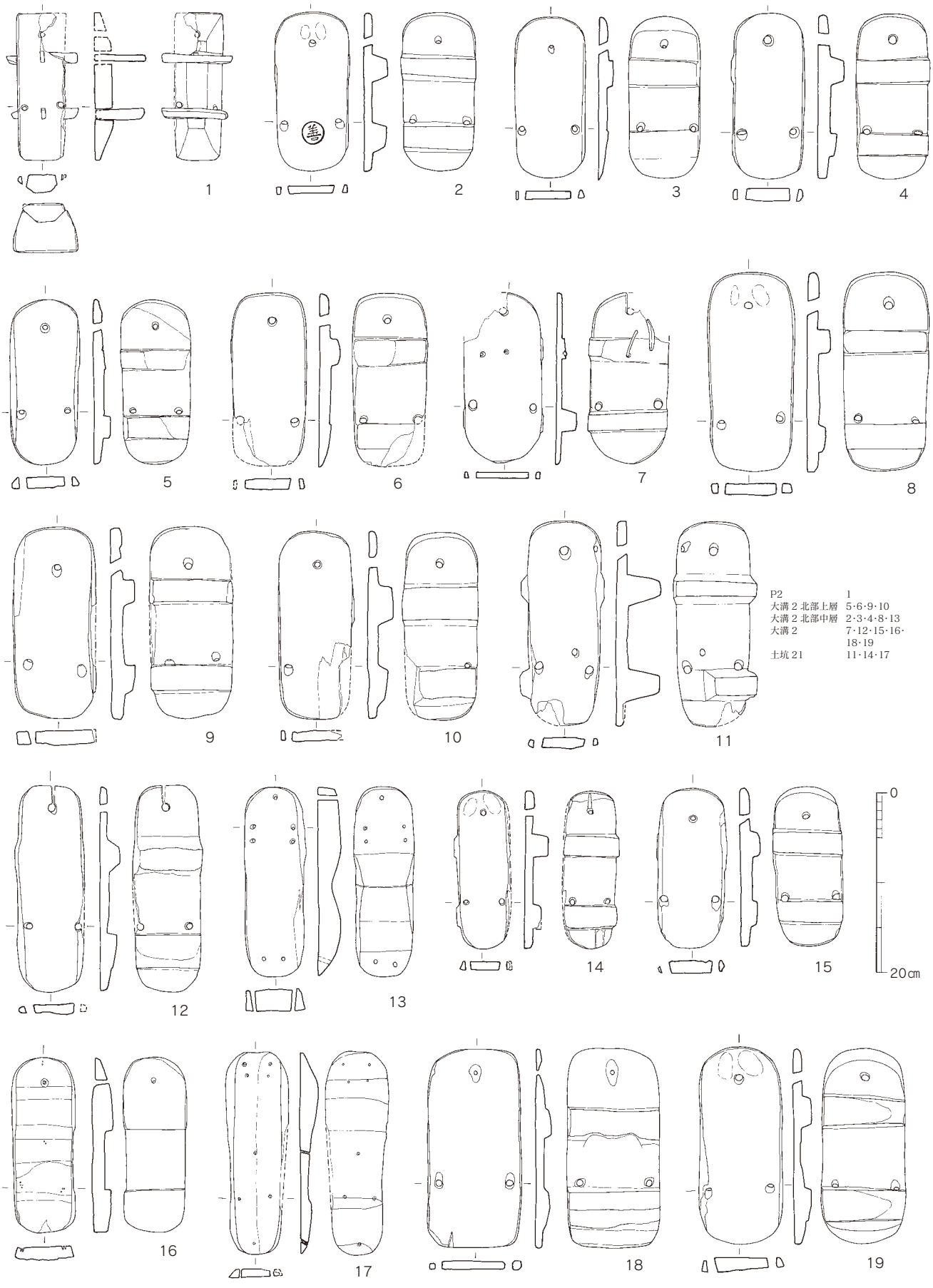
第129図　1次調査出土木製品実測図3（4・17は1/4、他は1/3）

表63　1次調査出土木製品観察表1

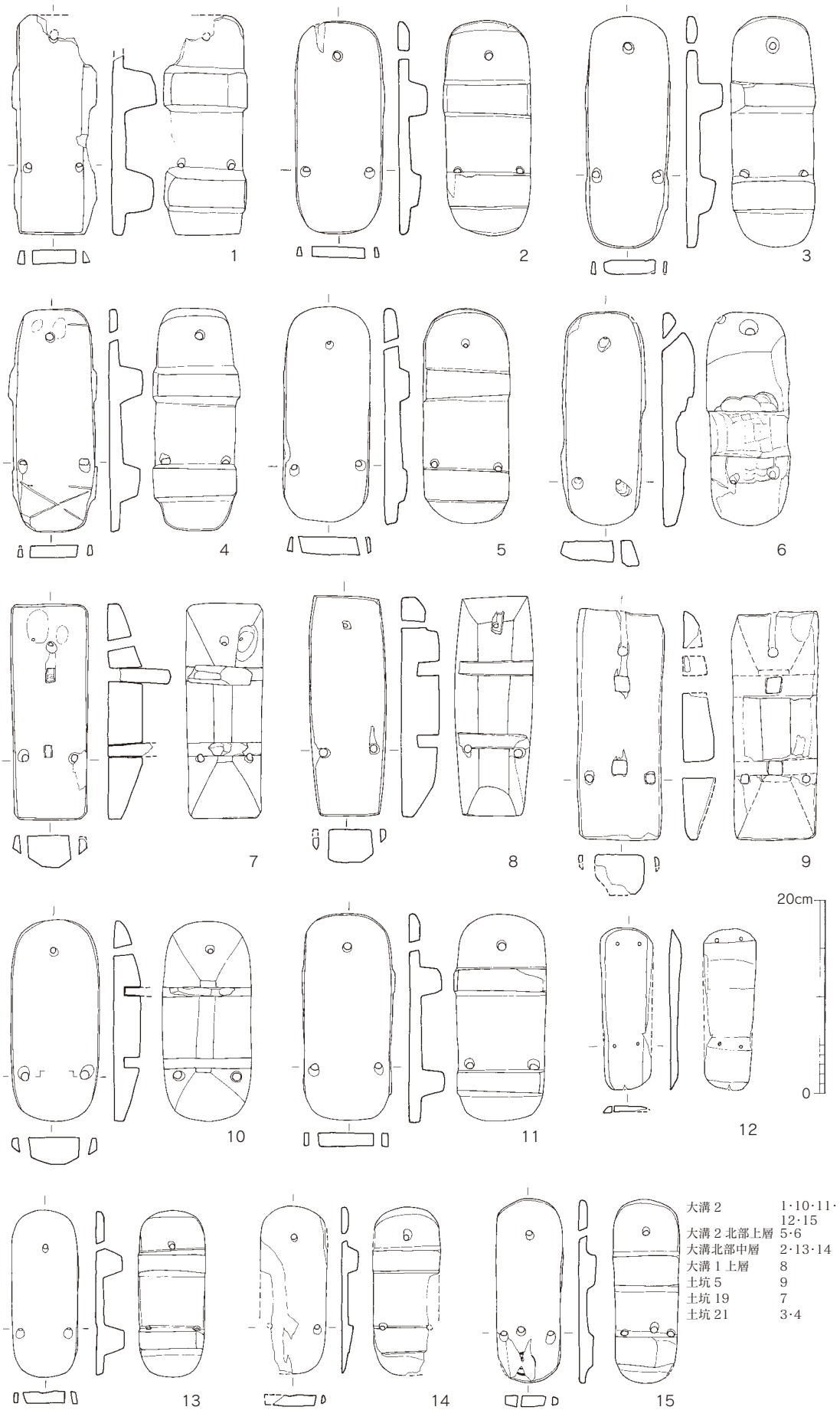
遺構名 挿図番号 図版番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ( )は復元値	特　徴
土坑3 127図1 図版21	小型椀 壺形	最大径(7.8)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆　高台外面の赤漆は剥落しており、裏銘が合ったのかは不明　押し潰されて歪んでいる
土坑15 127図2 図版21	蓋 腰丸形	最大径(8.8)	内外面黒漆　口縁部が欠損している　外面に金彩の文様あり　モチーフ不明　1/4残存
土坑19 127図3 図版21	椀 一文字腰形	最大径(10.7) 高台径(4.6)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆だが、内面は赤茶色に変色している　歪もあり漆の残りも悪い　底面に2つの穿孔があり、何かと緊縛したか
大溝2 127図4	椀 一文字腰形	口径(11.0) 高台径(5.6) 器高5.0	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆　外底部の赤漆は剥落している
ピット2 127図5 図版21	椀 腰丸形	最大径(11.4)	内外面黒漆で、外面に赤漆で丸に向かい合う双葉文を描く
大溝2中層 127図6	椀 一文字腰形	最大径(11.5)	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆　高台は失われている　5割残存
大溝2北部上層 127図7	椀 一文字腰形	最大径(12.6)	内外面黒漆
土坑3下層 127図8	椀	口径(13.1) 高台径(6.2) 器高8.0	内外面黒 漆塗りで、図上接合　高台内に赤漆で桐文が描かれる
大溝2中層 127図9	椀蓋	つまみ径(4.2) 裾径(8.0) 器2.0	外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に柊葉文を向かい合わせに描いた家紋文
土坑41 127図10	椀蓋	つまみ径(4.2) 裾径(7.8) 器高1.2	内外面黒漆塗りで、図上接合　高台内に赤漆で桐文が描かれる
所属不明 127図11	蓋 平形	つまみ径(4.2) 裾径(8.9) 器高1.5	外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に四つ葉文を描く家紋文　4割残存　歪大きい
土坑4 127図12	椀蓋 平形	つまみ径(5.1) 裾径9.2 器高1.8	内外面赤漆で、下地塗りなし　口縁部が欠損している　外面天井部に「八」と黒漆書き
土坑23 127図13	椀蓋 平形	つまみ径(4.9) 裾径(10.0) 器高1.3	外面黒漆、内面赤漆で、外面に金彩で丸に柊葉文を向かい合わせに描いた家紋文
大溝2中層 127図14	椀蓋 一文字腰形	最大径(10.5)	内外面黒漆
土坑19 127図15	椀蓋 腰丸形	つまみ径(4.4) 裾径(10.4) 器高3.1	内外面赤漆
大溝2中層 127図16 図版21	蓋 平形	つまみ径4.1 裾径11.1 器高2.8	内外面茶漆9割残存　歪なし
土坑18 127図17 図版21	椀 一文字腰形	つまみ径(5.4) 裾径(11.4) 器高3.5	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆　無文
大溝1 127図18	椀蓋 腰丸形	つまみ径(6.2) 裾径12.5 器高2.8	内外面黒漆を下塗りした上に赤漆　外底部の赤漆は剥落している　5割残存
大溝2 127図19 図版21	膳	長さ6.7 幅18.3 厚さ0.6	表面黒漆で、裏面赤漆で側端部に受け部の縁がつく　膠のような接着材らしいもので付けているか
大溝2北部中層 127図20 図版21	重箱蓋	長さ4.8 幅18.0 厚さ1.2	表面赤漆で、茶漆で植物文を描き、内面赤漆　側端部から7mm離れた位置に受け部の縁がつく　膠のような接着材らしいもので付けているか
土坑41 127図21	曲げ物	器高9.5 長軸13.1 短軸11.9	底板は付いており、取り上げ後留め具が崩壊した　復元して図化
大溝2 128図1 図版21	膳	長さ22.5 幅22.7 厚さ1.6	表裏透明漆で、上面の端部は木釘あり、縁がつく　表面にはよろけ縞文の溝が入る。裏面に、木釘孔がなく、脚を固定する溝もない
大溝2 128図2 図版21	膳	長さ21.2 幅1.5 厚さ0.6	内面のみ透明漆で、端部は　内面側に刻みが入っており、湾曲できるようにしている
大溝2 128図3 図版21	膳	長さ20.1 幅1.5 厚さ0.6	内面のみ透明漆で、端部は　内面側に刻みが入っており、湾曲できるようにしている
大溝2北部中層 128図4	膳脚 足打折敷の脚	長さ21.2 幅2.2 厚さ1.1	2脚　上端面に目釘孔あり
大溝2北部中層 128図5	膳脚 足打折敷の脚	長さ20.3 幅2.0 厚さ0.7	2脚　上端面に目釘孔あり
大土坑1南部上層 128図6 図版21	膳脚 足打折敷の脚	長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	茶漆塗りで2脚　上端面に目釘孔がなく、膠のような接着材のようなものが付着していた
大土坑1中層 128図7 図版21	膳脚 足打折敷の脚	長さ1.8 幅24.6 厚さ0.7	茶漆塗りで2脚　上端面に目釘孔がなく、膠のような接着材のようなものが付着していた
土坑21 128図8 図版21	膳脚 足打折敷の脚	長さ2.0 幅23.3 厚さ0.7	側面の片側に木釘孔があるので、方形脚か上端は欠損しているので、もう少し長いものか　つくりは粗雑
大溝2 128図8 図版21	箱側板	長さ5.0 幅15.4 厚さ0.5	側端面に木釘孔が2つづつあり、内面下端に溝を彫っているので、その溝に底板を挿し込んだもの　上端面には目釘孔がなく、上には続かない
大溝2 128図9 図版21	箱側板	長さ4.9 幅15.1 厚さ0.6	木釘孔が1側端面に2つ、対面に3つあり、内面下端に溝を彫っているので、その溝に底板を挿し込んだもの　上端面には目釘孔がなく、上には続かない
大溝2北部上層 128図10 図版21	折敷	長さ10.5 幅17.8 厚さ0.3	角を丸く整形している　木釘孔が各辺中央にあるので、縁があっただろう
大溝2 129図1 図版22	折敷の脚	長さ2.7 幅6.9 厚さ0.6	上端面の欠損部に膠状のものが付着しているので、膳の脚と考えた　内外面黒漆塗りして、反っている面には赤漆を上塗り
大溝2 129図2 図版22	不明木製品	長さ7.7 幅3.2 厚さ0.7	全面に顔料が塗布されている部材で、装飾か　穿孔部には釘の痕跡がない　漆は褪色した赤か
大溝2 129図3 図版22	曲げ物固定具	長さ7.7 幅2.8 厚さ1.0	下端に木釘孔らしいものあり　底板と接合したものか
大溝2 129図4 図版22	側板	長さ10.6 幅17.2 厚さ0.7	外面茶漆、内面赤漆　木釘孔が左右の下角から上がったところと、上辺の中央の3箇所ある
土坑41 129図5 図版22	側板	長さ4.6 幅8.5 厚さ0.2	逆台形の上の角を取ってないもので、完形木釘孔がなく溝に挿入するものか
大溝2 129図6 図版22	側板	長さ5.2 幅14.5 厚さ0.2	逆台形の上の角を取ったもので、完形　木釘孔が左右の下角から上がったところと、上辺の中央の3箇所ある
大溝2 129図7 図版22	曲げ物底板	長軸11.5 短軸10.8 厚さ1.1	柄の先端を留める部材を固定する木釘孔がある　側面には段があり、横板を固定する木釘孔がある
大溝2北部中層 129図8 図版22	曲げ物底板	長軸11.5 短軸10.1 厚さ0.7	柄の先端を留める部材を固定する木釘孔が2つある　側面に段がなく、横板を固定する木釘孔もない
大溝2 129図9 図版22	不明木製品	長さ8.3 幅12.8 厚さ1.1	板材の側縁は劣化していない　孔は大きく、釘孔ではない　下駄の作り方にも似る
土坑15 129図10 図版22	膳 宗和膳	長さ18.7	全面黒漆塗りの上に口唇部以外赤漆上塗りのため、口唇部のみ黒漆が残る
大溝2 129図11 図版22	箸	長さ(約16.5) 径0.4	歪みが大きく正確な長さは不明　赤漆塗り上端が太い
大溝2 129図12 図版22	箸	長さ(約11.6) 径0.4	歪みが大きく正確な長さは不明　赤漆塗り太さは一貫している
土坑3 129図13 図版22	笄か	長さ15.3 幅1.6 最大厚1.1	基部は断面略扁平六角形で、先端は尖らせている
大溝2 129図14 図版	栓	径2.4 器高1.5	平面円形で、板材の周囲を削って作っている
大溝2 129図15 図版	栓	長さ2.0 幅2.0 器高11.0	平面8角形で、板材の周囲を削って作っている　下端に面取り残る
大溝2 129図16 図版22	蓋か	長さ8.0 幅11.8 厚さ0.8	全面は透明漆塗りで、1面に長方形の接合痕があり、そこに木釘孔が2つずつある
土坑3 129図17 図版22	不明木製品	長さ9.7 幅17.9 厚さ2.0	側縁や端面に木釘がなく、裏面中央に釘が2つあることから、裏面側から固定しており、表面は平滑に整形している



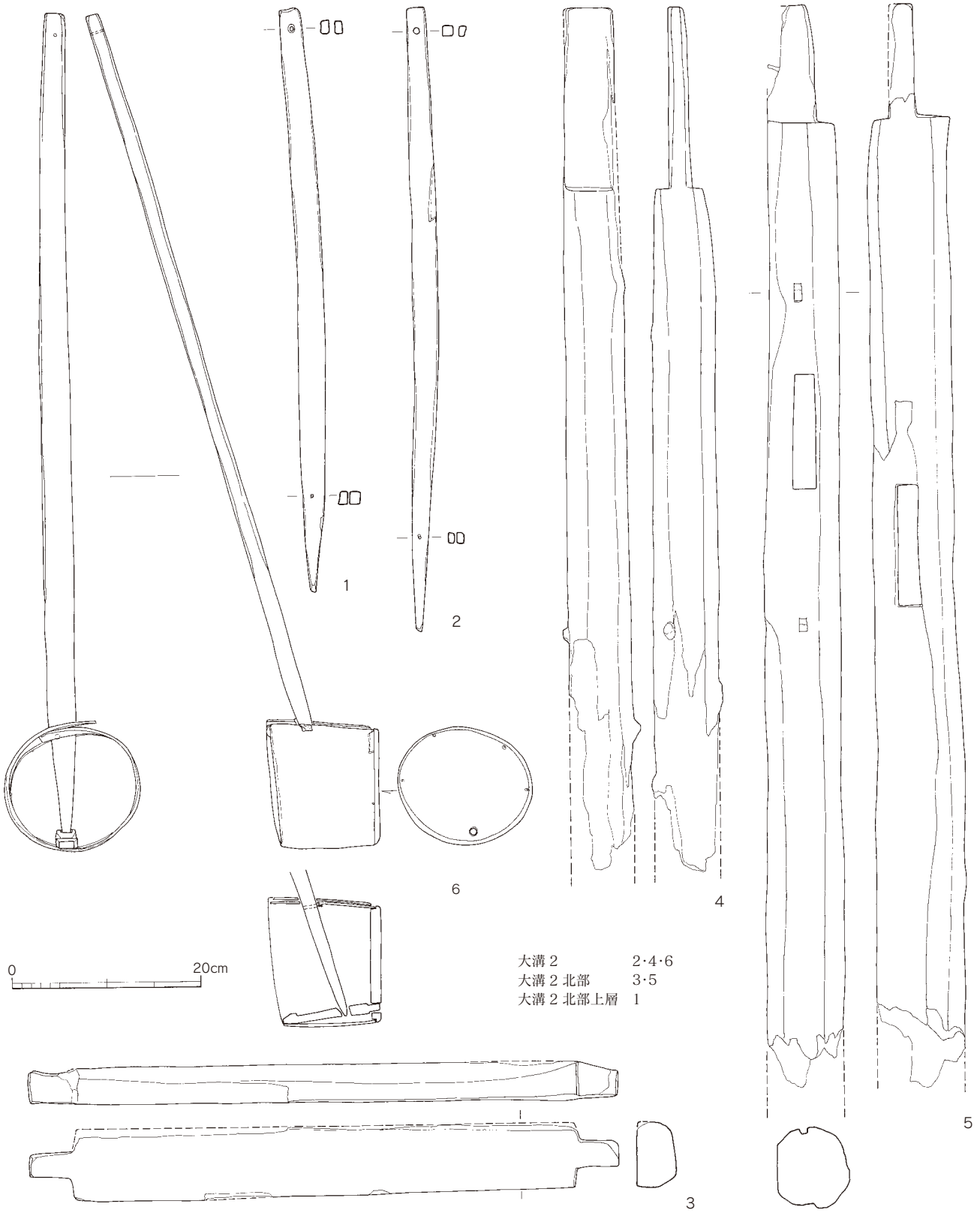
第130図　1次調査出土木製品実測図4（4・5は1/2、他は1/3）



第131図　１次調査出土木製品実測図５(1/6)



第132図　1次調査出土木製品実測図6 (1/6)



第133図　1 次調査出土木製品実測図 7 (1/6)

表64　1次調査出土木製品観察表2

遺構名	器種	法量(cm)	特　徴
挿図番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名		
土坑41 130図1 図版22	鞘	長さ33.3 幅3.5 厚さ1.2	板を合わせたものでなく、上から穿孔したもの　上端に墨書があり、「九」に見えるが、偏側が消えているだろう　止め釘孔はない　方形の削り込みは金具を装着するためか
大溝2 130図2 図版22	破魔矢の矢羽	長さ29.8 幅4.7 厚さ0.4	板材を加工したもので、表裏鷹羽文様に墨塗りされている　先端は矢柄に挿し込む形状
土坑21 130図3 図版22	箱蓋	径(11.2) 器高1.5	表裏黒漆で下塗りしたうえに赤漆 菓子箱やお櫃の蓋か
大溝2 130図4 図版22	不明板材	長さ2.6 幅3.1 厚さ0.4	細長い板材の1面に丸に「八木」、裏面に柄付きの鎌らしい焼印がる　130図5と同一焼印
大溝2 130図5 図版22	不明板材	長さ2.7 幅3.5 厚さ0.5	細長い板材の1面に丸に「八木」、裏面に柄付きの鎌らしい焼印がる 130図4と同一焼印
大土坑1 130図6 図版24	柱材	最大径13.0 器高17.6	柱の根元だけで、上端は欠損しているため、切断なのか折れたのかわからない　面取りで、断面6角形になる
土坑36 130図7 図版24	柱材	最大径13.0 器高17.6	柱材で、上端は切断だろうが、工具痕はわからない　2面に木材表面の丸みを残し、残り2面は平坦に加工している
土坑3 130図8	下駄 連歯下駄	長さ23.8 台板最大幅9.4 台板最大厚0.8	欠損が大きく、左右どちら用かの判別はできない　中央部が割れたことが廃棄原因だろう
ピット2 131図1	下駄 露卯下駄	長さ16.3 幅8.0 厚さ5.4	子供用 歯の臍孔は整った長方形
大溝2北部中層 131図2	下駄 連歯下駄	長さ17.6 幅8.2 厚さ2.7	後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形　後歯が摩滅で低くなっている　上面に丸に「善」の焼印あり
大溝2北部中層 131図3	下駄 連歯下駄	長さ17.9 幅7.9 厚さ2.6	後歯は左側がやや摩滅し、台側面も右が張り出しているのに、左は直なので右足用　完形　後歯が摩滅してなくなっている
大溝2北部中層 131図4	下駄 連歯下駄	径(54.0) 厚さ1.0	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が大きく摩滅するので左足用　完形　後歯が前歯よりやや摩滅している
大溝2北部上層 131図5	下駄 連歯下駄	長さ18.2 幅7.8 厚さ1.9	後歯は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　歯の摩滅ほとんどないので、前歯が欠損したことで廃棄したのだろう
大溝2北部上層 131図6	下駄 連歯下駄	長さ19.2 幅8.4 厚さ2.3	後歯は左側が摩滅するので、右足用　後歯が摩滅でほとんどなくなくなっている
大溝2 131図7	下駄 連歯下駄	長さ19.0 幅9.0 厚さ2.2	歯は摩滅が少なく、前歯は欠損箇所に鉄釘を鎹状に打ち込んでいる　欠損後に再利用しようとしたものだが、台の表にも鉄が頭を出しているので、履くための再利用ではないのかもしれない
大溝2北部中層 131図8	下駄 連歯下駄	長さ22.0 幅8.6 厚さ2.5	前壺の周囲が窪んでいるが、左右の窪みの大きさに差がなく、歯の摩滅も左右で差がないので、左右どちらにも使ったものか　完形　歯の接地部に砂が噛んでいる　後歯が前歯よりやや摩滅している
大溝2北部上層 131図9 図版	下駄 連歯下駄	長さ21.2 幅8.3 厚さ2.7	横緒穴は右が下がっている　後歯は左側が摩滅するので、右足用　後歯が前歯よりやや摩滅している
大溝2北部上層 131図10 図版23	下駄 連歯下駄	長さ20.9 幅8.7 厚さ2.9	前壺横緒穴以外は木の節が脱落したもの　後歯は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　歯の摩滅ほとんどないので、後歯が欠損したことで廃棄したのだろう
土坑21 131図11 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅9.3 厚さ5.0	前壺横緒穴以外は木の節が脱落したもの 後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形 歯の接地部に砂が噛んでいる
大溝2 131図12 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.9 幅7.7 厚さ2.2	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　後歯が摩滅で低くなっている　台が薄い
大溝2北部中層 131図13 図版23	草履下駄 無歯	長さ21.1 幅6.4 厚さ1.6	歯の磨り減りはほとんどない 完形　孔が大きいのが特徴的
土坑21 131図14 図版23	下駄 連歯下駄	長さ19.0 幅8.8 厚さ2.3	前壺の周囲が窪んでおり、孔の右の窪みが大きく、後歯は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大溝2 131図15 図版23	下駄 連歯下駄	長さ17.7 幅7.8 厚さ2.1	前後ともに歯は右が摩滅しているので左足用　ほぼ完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大溝2 131図16 図版23	下駄 ぽっくり	長さ18.5 幅7.1 厚さ2.4	丁寧なつくりだが台が波打っている　横緒穴がなく、未製品なのか ほぼ完形
土坑21 131図17 図版23	草履下駄 無歯	長さ22.4 幅7.0 厚さ2.0	削ったばかりのような痕跡で、未使用か 完形
大溝2 131図18 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅10.3 厚さ1.8	後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形 後歯が摩滅で極端に低くなっている　前歯の中央後部がM字形に抉られている　台は薄い
大溝2 131図19 図版23	下駄 連歯下駄	長さ20.8 幅9.0 厚さ2.1	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用 完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている

遺構名	器種	法量(cm)	特　徴
挿図番号	形状	( )は復元値	
図版番号	通称名		
大溝2 132図1 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.8 幅8.7 厚さ4.4	歯は摩滅が少なく、焼けて表面は炭化している
大溝2北部中層 132図2 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.0 幅11.1 厚さ2.9	後歯は左側が摩滅するので、右足用　完形 後歯が摩滅で極端に低くなっている
土坑21 132図3 図版23	下駄 連歯下駄	長さ23.6 幅8.8 厚さ3.8	前歯の一部が欠けており、そのために廃棄したものか　前歯は右が摩滅しているので左足用 ほぼ完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
土坑21 132図4 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.8 幅9.0 厚さ3.4	壺孔が左に偏って見えるが、左側縁が欠損したため　歯はほとんど摩滅していない 台上面踵部に×印の上辺がつくものがある
大溝2北部上層 132図5 図版23	下駄 連歯下駄	長さ22.2 幅9.0 厚さ2.6	前歯は右が摩滅しているので左足用　ほぼ完形　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大溝2北部上層 132図6 図版23	下駄 ぽっくり	長さ22.1 幅8.7 厚さ3.4	前歯の後方中央に抉りを入れ、後歯の前方中央から横緒穴にかけて方形に削り込んでいる　前歯は左側の摩滅が大きいので右足用
土坑19 132図7 図版23	下駄 差歯 露卯下駄	長さ22.3 幅8.0 厚さ6.4	前壺横緒穴以外は木の節が脱落したもの 台は摩滅していない
大溝1上層 132図8 図版23	下駄 差歯	長さ22.7 幅8.0 厚さ3.9	前壺上面は方形、裏面は長方形に繰り込んでいる　臍がなく、固定用の窪みが横にある 変わったつくり
土坑5 132図9 図版23	下駄 差歯	長さ23.9 幅9.0 厚さ3.3	台の劣化著しい 前壺横緒穴は大きい
大溝2 132図10 図版23	下駄 差歯 露卯下駄	長さ20.8 幅9.1 厚さ3.4	歯は挿し込みだが、臍がない 台は摩滅していない
大溝2 132図11	下駄 連歯下駄	長さ22.4 幅9.4 厚さ3.7	台の摩滅はほほとんどなく、歯のわずかに摩滅し、前歯が一部欠けているのみ　なぜ廃棄したのかわからない　完形
大溝2 132図12 図版24	下駄 草履底	長さ16.6 幅5.3 厚さ1.2	裏は右側が摩滅するので、左足用　ほぼ完形　孔のほとんどに木釘が残る
大溝2北部中層 132図13 図版24	下駄 連歯下駄	長さ17.2 幅7.0 厚さ2.8	後歯は左側が摩滅するので、右足用　ほぼ完形　歯の摩滅ほほとんどない　子供用
大溝2北部中層 132図14 図版24	下駄 連歯下駄	長さ16.3 幅6.9 厚さ1.7	前壺の周囲が窪んでおり、孔の左の窪みが大きく、後歯は左側が摩滅するので、右足用　後歯が摩滅で極端に低くなっている
大溝2 132図15 図版24	下駄 連歯下駄	長さ20.0 幅6.9 厚さ1.8	後歯は左側が摩滅するので、右足用　後歯が摩滅で低くなっている　踵部に焼印が残っており、○に善だろう
大溝2北部上層 133図1	柄杓の柄	長さ61.8 幅2.9 厚さ1.8	小型の柄杓
大溝2 133図2 図版24	柄杓の柄	長さ66.2 幅2.6 厚さ1.7	基部に紐通し孔がある
大溝2北部 133図3	部材	長さ62.4 幅7.1 厚さ4.0	1面は丁寧に平坦にされ、他の面は材の丸みを残す　両端の臍は中央ではなく平坦面側と同一面上にある
大溝2 133図4 図版24	部材	長さ90.5 幅7.0 厚さ6.4	欠損側の端部も刳り込みが見られるので、臍部分であったことがわかる
大溝2北部 133図5 図版24	部材	長さ114.3 幅8.7 厚さ7.6	全面に臍孔がある　貫通しない窪みが見られるが対面側が欠損しているため意図的なものか不明
大溝2 133図6 図版24	柄杓	長さ88.5 曲げ物部長軸14.4 柄厚さ1.8	曲げ物部は平面楕円形だが、乾燥によるものだけではないだろう
土坑21 図版24-1	紐	長さ約8.0 太さ0.5	2本の縒り紐で玉留めして輪を作る 紐を構成する繊維は縒りがない　棕櫚製か
大溝2北部中層 図版24-2	紐	長さ約23.0 太さ0.65	材質は不明だが、繊維でなく、幅約5mmの帯状の紐を縒った物で弾力性がない 樹皮製
大溝2北部 図版24-3	紐	長さ約30.0 太さ0.7	2本の縒り紐で漁師結びで輪を作る 紐を構成する繊維は縒りがない　棕櫚製か
大溝2北部中層 図版24-4	紐	長さ約45 太さ0.9	2本の縒り紐で漁師結びの結び目から別の紐が延びる　棕櫚製か
大溝2北部中層 紐 図版24-5	紐	長さ約50.5 太さ1.2	3本の組み紐で、結び目を作る 紐を構成する繊維は縒りがない　棕櫚製か
大溝2 図版24-6	紐	長さ約75 太さ1.2	3本の組み紐で、結び目を作る 紐を構成する繊維は縒りがない　棕櫚製か

１次調査のまとめ

１次調査は矢加部町屋敷遺跡の最初の調査であり、試行錯誤した段階の調査分を最後に報告することになったため、調査担当者が同じでありながら遺構面や埋甕遺構の調査手法が一環していないような印象を与えたのは否めない。

本書が矢加部町屋敷遺跡での最終報告になるため、ここでの記述は最低限に留め、次の１から５次調査全体のまとめの中で調査区内の全体像を把握したい。

１次調査で報告した遺構は、土坑37基、廃棄土坑２基、大土坑３基、溝７条、大溝４条、埋甕８基、井戸１基であったが、埋甕など時期を特定しにくいものについては近代のものも含んでいる。

大正時代包含層である黒色土層の下に明治後半代から大正時代の整地面があり、その下にさらに黄灰褐色粘土層の整地層と黄緑灰色粘土の整地層の２枚の整地層があり、そこまでが近代の遺構面と考えた。

江戸時代の遺構面はその下から検出され、薄い数枚の整地面があったものと思われるが、明瞭に捉えることのできたのは２面のみであった。上面の整地面は基盤層と同じ粘土を使用しているため、整地面と基盤層の判別が難しく、上層の遺構の壁面に別の遺構が見えて初めて検出できることが多かった。県道側では近世の整地層の下に大溝が掘り込まれており、遺物はほとんど出土しないことと、堆積層から人為的に埋められた可能性が高い。これは久留米柳川往還道の東側溝と考えられ、調査範囲内に確認された側溝は直線的に走る部分のみであることがわかった。

１次調査範囲内ではこのほか近代のものだが、土製鋳型が出土しており、近世に属するるつぼもこの鋳物師と関連があると思われる。

３．矢加部町屋敷遺跡のまとめ

有明海沿岸道路に伴う矢加部町屋敷遺跡の発掘調査は、調査用地内のうち3,400㎡を、平成16年度から19年度まで断続的ではあるが４年間にわたって発掘調査し、その整理報告作業も５年におよんだ。報告書の刊行については平成18年度報告が４次調査の遺構のみになったため、Ⅲについては４次調査の遺物と５次調査の遺構のみとなり、Ⅳでは５次調査の遺物から掲載するというずれが生じてしまった。本報告が最終年度であり、このような利用しにくい状態で刊行した反省も踏まえて、ここで調査成果を総括したい。

矢加部町屋敷遺跡は久留米柳川往還という街道沿いの藩境の町屋であることから、街道の側溝と藩境木埋設坑を発見することができた。遺物については柳川市域の近世遺跡としてまとまった資料が得られたことから、これまで筑後市や久留米市で発見されてきた土師質瓦については有明海沿岸という軟弱土壌に適応した特徴的な家屋に伴うものと推察できる資料が得られた。また、水田焼や蒲池焼、在地産焼塩壺などの筑後地域の近世土器や燻し瓦に新たな知見を見出すことができた。

出土遺物については、木製品の残りが良かったものの、量が多かったので残存率の高いものを優先的に掲載した。

遺構の変遷

本遺跡は微高地に展開する自然発生的な集落でなく、街道沿線に計画的に設置された集落であるため、通常は集落を形成しない軟弱土壌に展開している。出土遺物中の弥生土器や須恵器、中世陶磁器などは、いずれも混入品であり、最も古い時期のものは17世紀中葉段階である。戦国時代においても、柳川城から北に向かう道路は矢加部地区を迂回して蒲池地区に通っており、それまではこの地区は耕地としても使用されていない低湿地だったようである。

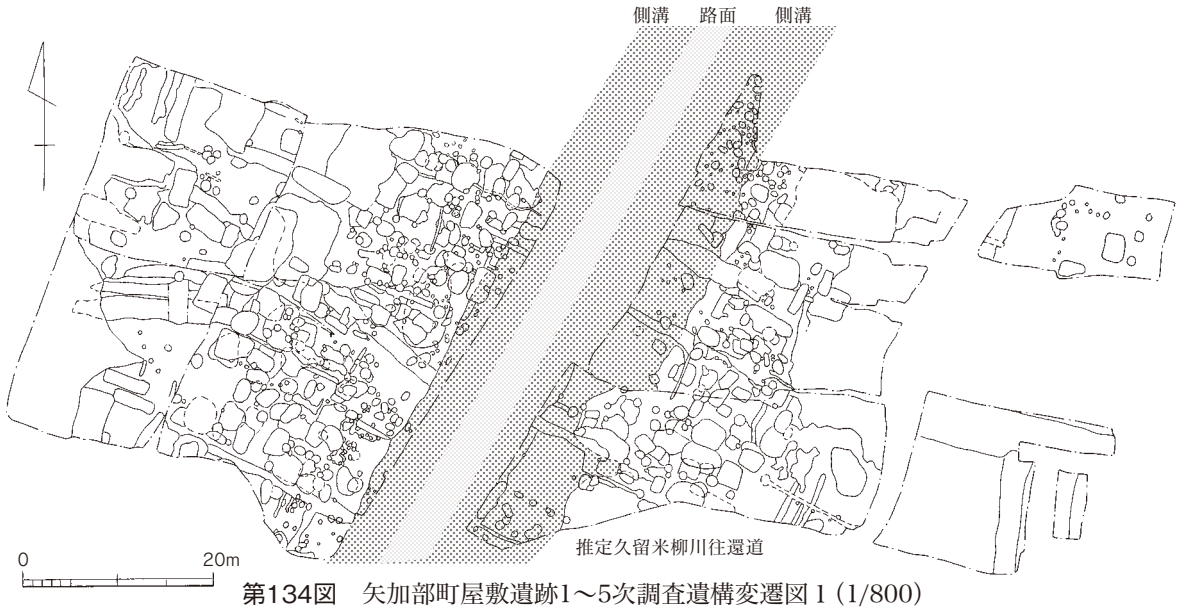
最初に遺跡が形成されたは17世紀であろう。遺物自体は17世紀中葉から見られるものの、土坑など居住地の痕跡はなく、県道に沿って走る県道西側の４次調査西区の４号溝状遺構と県道東側側の４次調査東区10号溝状遺構・５次調査３号溝状遺構・１次調査の１号大溝だけが存在していた。県道の左右に併走する溝は、県道が久留米柳川往還に比定されていることから、この街道の側溝と考えられる。

県道の左右の調査区とも県道側に溝の壁が発見されておらず､溝の幅と道路の幅はわからない。西側溝側の検出範囲が少ないことから、現在の県道の東側車線側に道路があったと推定できる。

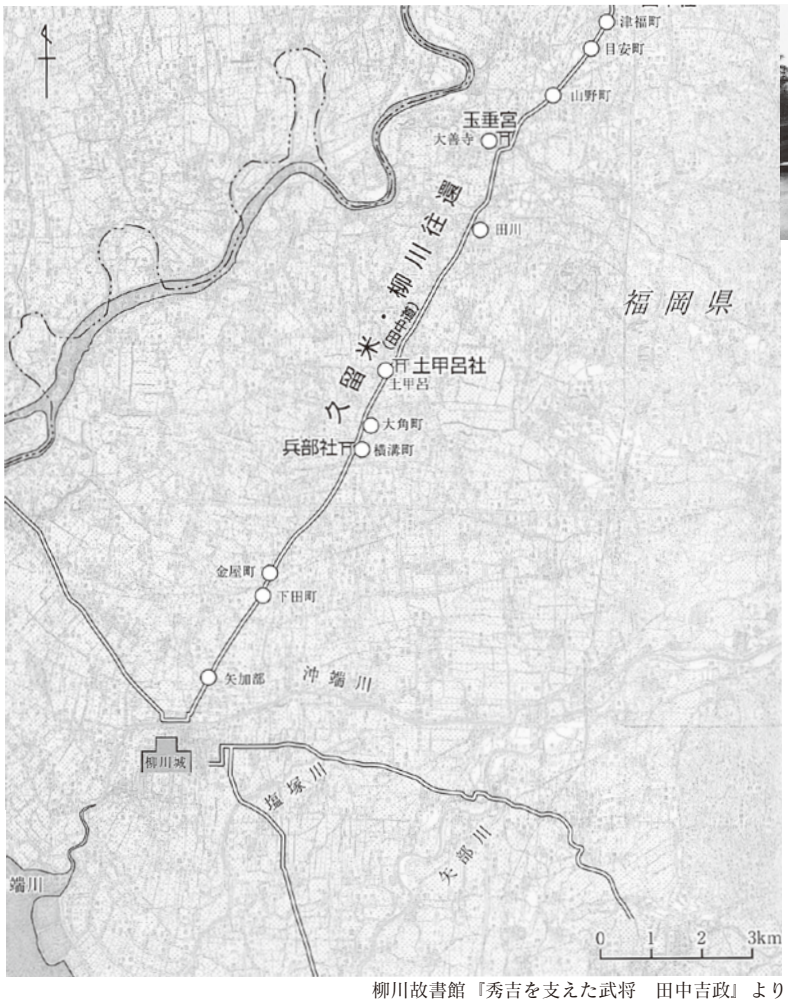
久留米柳川往還は久留米城下町から柳川城下町を繋ぐ街道で、田中吉政が慶長７(1602)年に整備したものである(第135図)。「台所入之掟」によるとによると「新道の両脇に溝を幅４尺(1.2m)に掘るように」とあるが、道路幅についての記載はない。『山門郡柳河村他地誌』(引用文献７)では山門郡外町から三潴郡矢加部までは幅二間と記している。これは柳川市三橋町橋本地区にこの久留米柳川往還が道幅約２mで両脇に４m幅ほどの側溝をもって現存しており、矢加部町屋敷遺跡の側溝規模と推定道路幅と合致する(写真１・２)。

17世紀中葉には側溝は埋め戻されて整地され、集落が形成されるようになる。これは田中家が断絶し、筑後国が久留米藩と柳川藩に分かれた時期にあたり、矢加部地区に国境が置かれることになる。側溝を埋めたのは関所を置くためには道幅が狭すぎたためであろう。

17世紀中葉の陶器摺鉢片が出土した藩境木の埋設坑はこの時期に置かれたものだろう。当時は藩境木周辺から離れて家屋が建てられていたと推定している。



第134図　矢加部町屋敷遺跡1～5次調査遺構変遷図１(1/800)



柳川故書館『秀吉を支えた武将　田中吉政』より

写真１　久留米市柳川往還道跡１(北東から)

矢加部町屋敷遺跡の
道路側溝跡

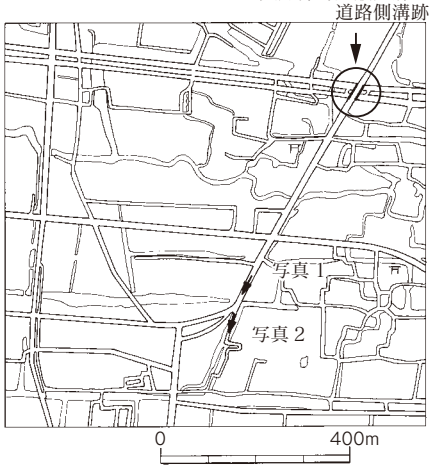
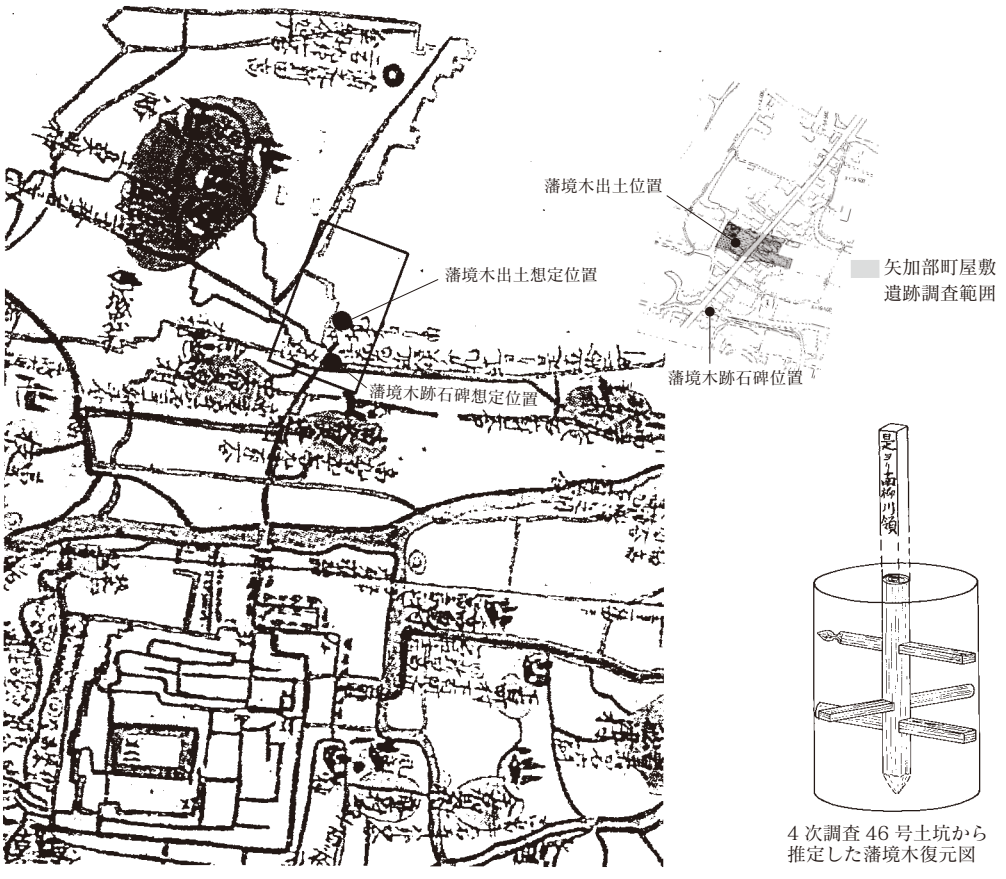


写真２ 久留米柳川往還道跡２(北東から)

第135図　久留米柳川往還路線と現存する往還道跡

現在の藩境木跡の石碑は100mほど南の県道脇に建てられているが、この藩境木が移転したものか、別の藩境木がその場所に立っていた双方の可能性がある。「御領内絵図」（注３）には藩境木の存在が記されているが、道路との位置関係は記されていない。少なくとも調査区内の藩境木は次の18世紀前葉段階には失われている。18世紀初頭から遺構が急速に増え、集落が発展したことがわかる。18世紀から多く見られるのは、方形で壁が直立する深さ50㎝以上ある土坑で、籾柄と炭化物の層が互層を成しており、種子や木製品も多く出土する。この特徴的な土層は自然に堆積したものではなく、県道西側の４次調査区では方形の大型土坑にも見られ、規模の大小があっても同じ機能を有していたと考えるべきだろう。

第136図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図２（1/800）



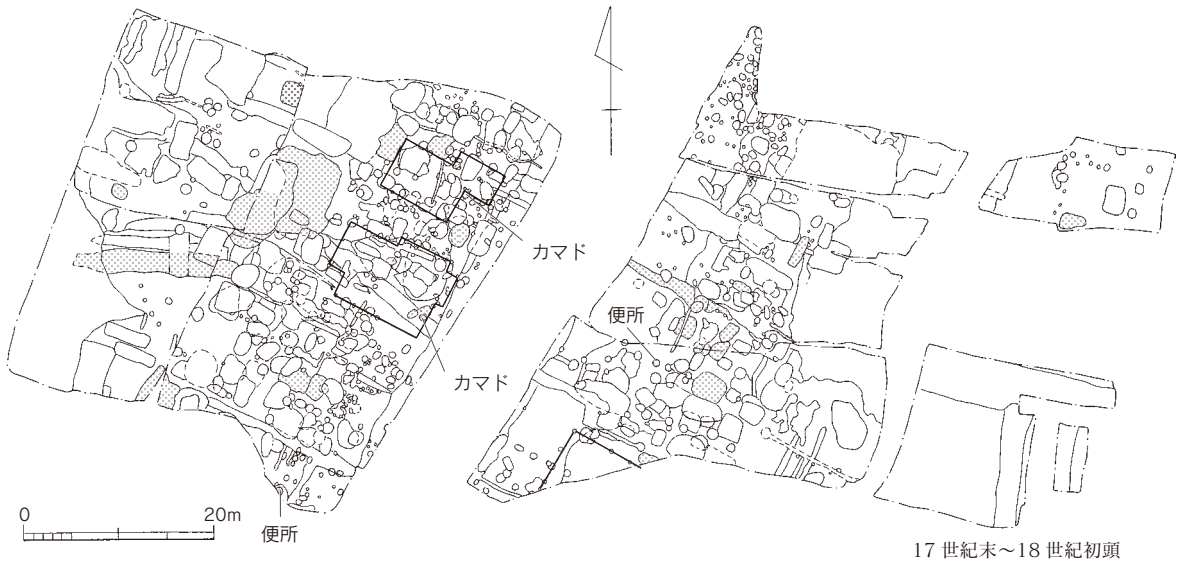
第137図　藩境木位置図と推定復元図

大型土坑は近世遺跡では地下室や大規模な災害の跡の片付け用の廃棄土坑であるなど施設として検出されることが多いが、本遺跡のように薄い瓦層は自然堆積とは考えにくく、廃棄土坑にしては遺物が少ない。また、４次調査４号大土坑には護岸施設もあり、単なる廃棄土坑ではないだろう(注４)。

最も近い民俗例として、堆肥小屋の記事があった。大川市向島地区の堆肥つくりの記事によると、土塀で壁を作り壁が崩れないように「ヨシ」で囲い、ヨシが取れないように縄で横木を結んだ堆肥小屋を作るらしく、本遺跡の土留遺構はこれではないだろうか(引用文献８)。そこに馬の敷き藁や刈り草、ワラくずを積み上げて堆肥を作ったとあるので、つまり、土留遺構としたものは土坑の壁ではなく、縁に作られた土壁を補強するものということになる。土留遺構は細い竹が挿し込まれて並んでいるとしたが、ヨシであったかもしれない。４次調査の64号土坑の土留が平面方形プランの２辺にしか設けられないのは作業しやすいように２辺は簡易的な土留が置かれたということだろう。堆肥は発酵させることで肥料になるが、籾殻が腐っていないのは発酵に失敗して堆肥にできずに廃棄したためだろう。小規模な土坑で作られる堆肥は小規模な畑用かもしれないが、大規模な堆肥小屋の存在は農家があったことを意味する。したがって、県道西側の調査区には農家があっただろう。出土した栽培植物は消費したものだけでなく、生産したものもあるのではないだろうか。

また、『福岡県藺業誌』(引用文献９)に安政六(1859)年に蒲池村の近藤茂三郎という莫蓙商人がいたことが記されており(注５)、５次調査１号大土坑出土の大型の縫い針(47図９～11)は莫蓙用であったのではないだろうか。近代のものだが４次調査客土層出土の「莫蓙問屋」杯(49図12)が出土しているので、藺業農家が近代になって莫蓙商を営むようになったのかもしれない。

県道東側でも堆肥を作ったと思われる土坑があるので、畑は作っていただろうが、他の業種を想定させる遺物が出土しているので、本業は別にあったのだろう。５次調査１号大土坑では布を送ったという内容の荷札木簡が出土しており、呉服店宛てのものと思われる。東区では１号大土坑があるために家屋の裏手の空間が狭く、農作業する場所がないので、ここには呉服店があったことが推察できる。１次調査２号大溝出土の朱墨用の硯(第123図２)もこの呉服店で使用されたものだろうか。地元の古老の聞き取りでは、与田商店という呉服店があったということである。



第138図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図３(1/800)

また、１次調査２号大溝から出土した飾り矢(第130図２)は上棟式で使うものであり、式後に棟梁が持ち帰るものらしいので、大工の棟梁の家が近隣にあった可能性がある(引用文献10)。

県道東側の南部では近代の鋳造遺構や鋳型が出土しており、幕末から明治の鉄滓を入れた土瓶が胞衣壺(第33図６)に見立てられて埋められていたことから、鋳掛屋が存在していたと思われる。本遺跡から出土する鋳造関連の遺物で最も古いものは４次調査84号土坑のるつぼの羽口であり、17世紀後葉から存在していただろう。明治36(1903)年の「蒲池村是」(文献11)によると金納・矢加部・東蒲池・西蒲池・立石・高島の６村を合わせて蒲池村とし、村内に鋳物繕師３名がいると記載されており、鍛冶職人の記載はなかったので、少なくとも明治後期には鋳造のみを行っていたようだ。

また、植物遺体の分析で、１次調査３号土坑で漆の実が絞られた後の状態で多く出土しており、４次調査５号大土坑出土の碗(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』第37図３)の内面には漆らしいものが付着しているが、漆職人がいたにしては漆の付着した遺物が少なすぎるので、自家製の漆糊を作った痕跡だろう。実際に漆糊で継いだ蓋が出土している(『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』第51図11)。

これらの家屋は集落成立後、建て替えをしながら近代まで存続している。大正包含層が厚く堆

第139図　矢加部町屋敷遺跡１～５次調査遺構変遷図４(1/800)

積しているのでこの時に大きく地上げされ、大溝も埋められて現在の土地区画に近い状態になったようである。

瓦について

本遺跡の燻瓦の出土数はわずかだが、製作地を記した刻印のつく軒平瓦・平瓦が出土したことで、柳川で生産された軒平瓦の瓦当文や製作地が明らかになった。

筑後地域では瓦の生産地として久留米市城島地方が有名だが、それ以外にも柳川市やみやま市でも近世の瓦生産の記録がある。本遺跡の資料と蓄積された筑後地域の近世軒平瓦資料を比較検討することで、本遺跡出土の軒平瓦の年代を推定するとともに、筑後地域の瓦の生産状況を推察したい。

矢加部町屋敷遺跡からは大きく、三葉文・菊花文・宝珠形三葉文を中心飾りとする瓦当文が見られるが、このうち製作地の刻印を持ち、久留米市・みやま市・大川市で類例の出土する前２者について検討する。まず三葉文だが、これは播磨系工人が製作するモチーフとして知られており、瀬戸内を中心とした西日本に広汎に見られる。モチーフを比較すると、本遺跡２次調査２号溝状遺構出土の140図22は、久留米市城下町の佐々木家屋敷遺跡出土軒平瓦Ｂ類の１つに酷似している。同範ではないが、同じ工房で生産された可能性は高い。これに対して140図23は唐草のモチーフに類例がないで、柳川で生産されたものかもしれない。

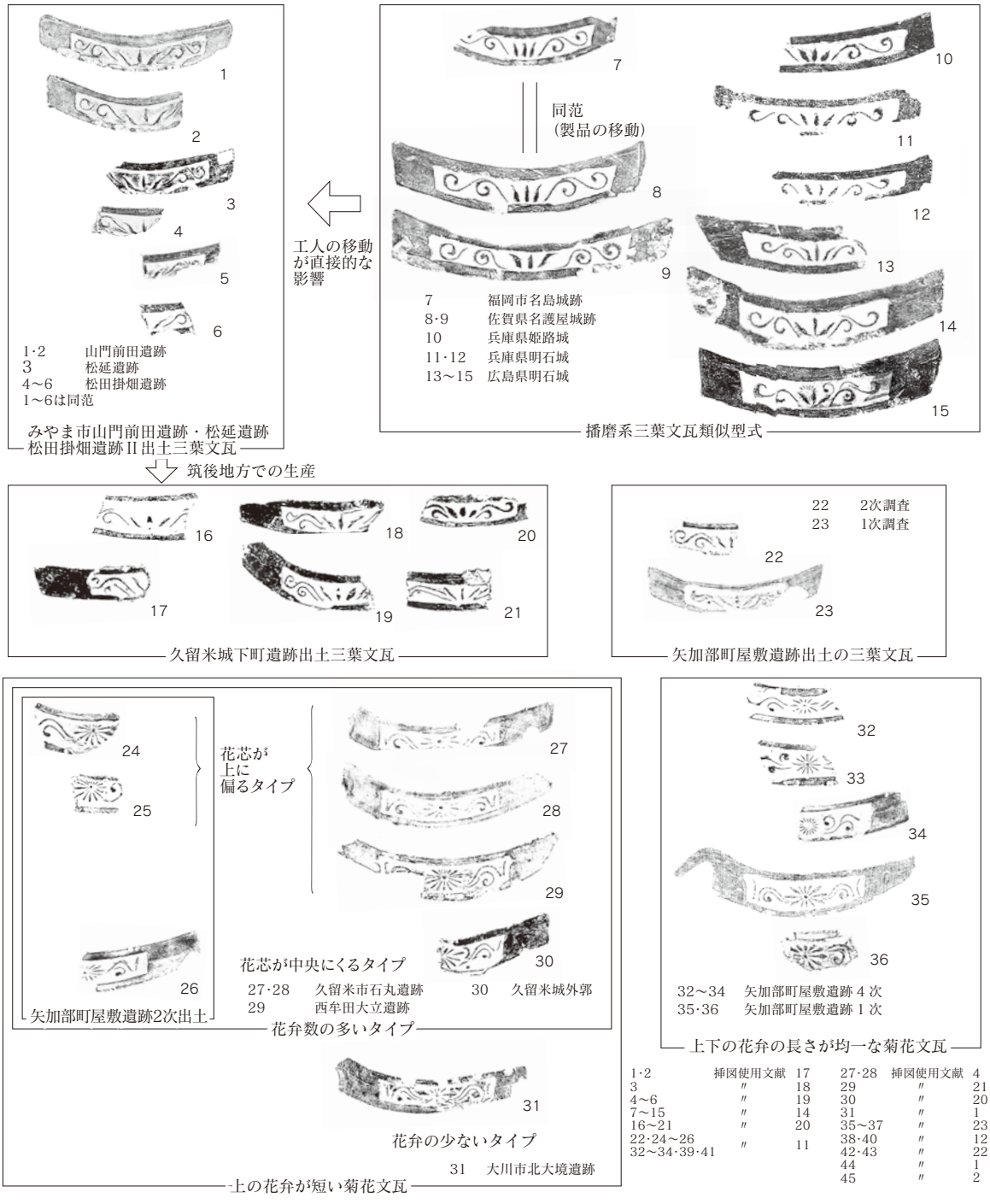
久留米城外郭佐々木家屋敷跡出土瓦は18世紀代に製作されたものが廃棄されたと考えられる。久留米市三本松町遺跡SK21出土品は写真の掲載しかないが、第２唐草文の先端が反る特徴が140図18と一致しており、三本松SK21は18世紀前半の遺構なので、140図22は18世紀代に久留米市域で製作されたものとみてよい。

一方、みやま市山門前田遺跡・松延遺跡・松田掛畑遺跡で出土した三葉文軒平瓦（140図１～６）は、近接地点から出土した同範品である。松田掛畑遺跡では17世紀末から18世紀初頭の遺物を主体とする18世紀後半以前の遺物に伴っているので、それ以前に製作されたものである。

このモチーフに類似するのは福岡市名島城跡出土の140図７や広島城跡出土の140図14など17世紀代の瓦なので、これらも17世紀代の可能性が高い。山門前田遺跡では、鯱瓦や鬼瓦など寺社や富裕層でしか使わない道具瓦が出土しており、近隣で当てはまるのは立花宗茂が社領15石を寄進して祈願所とした松延天満神社しかない。立花宗茂がこの神社を再興したのが天正16（1588）年なので、瓦の使用年代とも一致する。これらが柳川藩内で生産されたのか、久留米藩内産かわからないが、筑後地域の三葉文では最も古相であることから、以後の三葉文軒平瓦はここから変化したものだろう。

次に、菊花文を中心飾りとする軒平瓦だが、本遺跡ではさまざまなバリエーションが出土している。久留米市域の出土品は140図27～29のように菊花文の花芯が上に偏り、花弁数が多く、花弁自体も長く先端がやや太い特徴を持つ。久留米市石丸遺跡第６次調査SD40出土瓦（140図27・28）は共伴する肥前陶磁器から18世紀後葉に廃棄されたものと考えられる。また、久留米市三潴町西牟田大立遺跡でも明治期のもの（140図29）が出土しており、同じ特徴を有したまま、モチーフが変化したことがわかり、これらは久留米市域で製作された可能性が高い。一方、花弁数が少ないものは、本遺跡に多く存在する。（140図32～36）それ以外にも大川市北大境遺跡瓦溜SK1（140図31）にも見ることができ、これらは柳川市域の特徴であろう。

本遺跡出土の140図37には「柳川散田」の刻印がある。「柳川散田」とは三橋町蒲船津地区のこと



第140図　桟瓦・軒平瓦瓦当文と刻印の比較図

で、近世・近代には瓦生産が盛んだったらしく塩塚川の対岸には現在も江崎洋瓦本店が存在しており、刻印に「散田」と記されたものは小倉城にも見ることができる(140図42･43)。大川市北大境遺跡瓦溜１には「藤吉製」･「三橋」(140図44)の刻印を持つ瓦を伴っており、大川市小深町遺跡と同じ瓢箪文の中に「枝光冨吉製」の刻印がある(140図45)ことから、これらは柳川市三橋町で生産された可能性が高く、大川市域の旧柳川領内では柳川産の瓦が流通していたようだ。柳川市域では製品や材料の運送に水運を利用するために柳川市の中心部を通る塩塚川沿いに小規模な瓦製作所が点在していたことがわかる。

以上のように、筑後地域の近世の軒平瓦は、久留米市域・柳川市域・みやま市域ともに、18世紀後半代に三葉文から菊花文に移行したことがわかる(注６)。この動態は唐津城にも見られるが、相互に関連があったかは現段階ではわからない(引用文献12)。

土師質瓦について

『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』ですでに土師質瓦については述べたが、その機能は茅葺屋根の棟に葺く「雁振瓦」と雨樋に使用する「樋瓦」(写真３－４)である。５次調査ではこの使用方法を傍証する変色のある資料が出土したので、カラー写真(写真４)を掲載した。42図2･6は「樋瓦」で、２は凸面側から基部に褐色の付着物があり、凹面側には見られない。これは凸面側が煙などに燻され、凹面側は水が流れるので付着しなかったためである。６の凹面側の中央部だけが暗褐色に変色しているのは、この部分に汚水が流れたことを示している。

43図４は雁振瓦(写真３－１～３)で、凹面側が煤で変色しているので屋内の煙が萱葺屋根を通して付着したものである。また、内外側端部だけが器面が剥落しているのは写真３－１のように漆喰で固めた部分が剥落したためと考えられる。

上述の「樋瓦」は有明海沿岸に特徴的に分布する近世の漏斗造り家屋の雨樋に使われるものである。

より広く分布する平面コ字形の「くど造」の家屋の場合、中央に集まった雨水を口の開く部分に屋根瓦を葺いて排水することができるが、平面ロ字形の「漏斗造」は開開口部がないため、屋内に排水路を通すことになり、屋内の天井に平瓦を縦に並べて雨樋にしたものである(写真３－５･６)。ここには通常の平瓦より大型のものが使われ、『福岡県の民家』では雁振瓦を転用とした「テイ瓦」と報告している(文献13)。しかし、凸帯が凹面側につくものと凸面側につくものを同じように使用していたとは考えにくいく、当初は転用であったが専用に発展したのかもしれない。

前述したように「くど造り」家屋の場合、開口部に排水のための瓦を葺く必要があり、本遺跡から出土する少量の近世の燻し瓦や土師質の軒丸瓦は、屋根全体や軒先のみに使用したのではなく「くど造り」家屋に使用した瓦と考えられる。したがって、矢加部町屋敷遺跡には「漏斗造り」家屋と「くど造り」の両方が存在していたであろう。『福岡県の民家』(引用文献14)によると、「漏斗造」家屋は「くど造り」家屋の発展形であり、「くど造り」家屋の分布域の中により狭い範囲で点在するという。したがって、両者が混在していても不自然ではない。

双方とも軟弱地盤対策のための建築様式であり、第141図３のように「クド造り」家屋は柱間が他の屋根構造の民家よりも狭く、それだけ屋根の重量を多くの柱に分散できるので軟弱地盤には適しているとされている。しかしながら、「クド造り」家屋は軟弱地盤でない山間部にも見られることから、本来の意味とは無関係に伝統的な様式として伝播したのかもしれない。それに比べて「漏斗造り」については顕著な分布上の偏りが見られ、佐賀県側の調査では、「漏斗造り」は福岡県

写真3　土師質瓦の使用状況

1　「漏斗造」の家屋全景

2　漏斗屋根の俯瞰

3　同上近写

4　漏斗谷の樋吐出口

5　漏斗造の樋見上

6　同上

福岡県教育委員会『福岡県の民家』より

1・6　柳川市梅崎武美氏宅
2・3　久留米市城島町江口伊吉氏宅
4・5　柳川市松藤キヨ氏宅

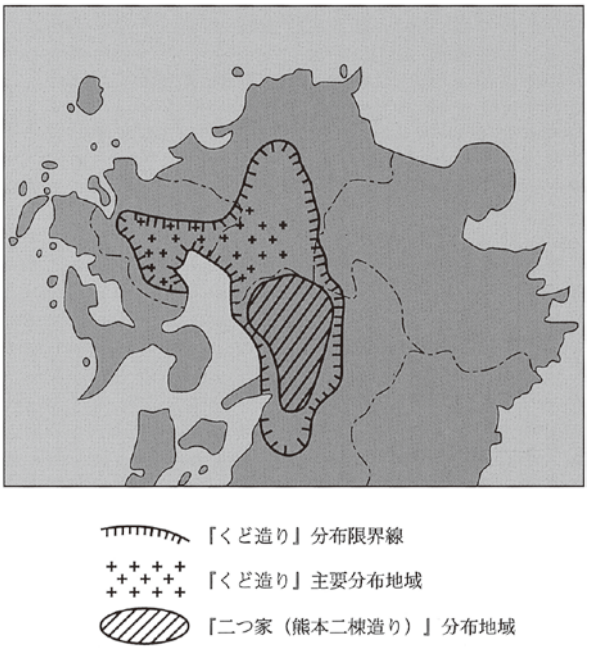
写真4　使用変色のある土師質瓦

42図2

42図6

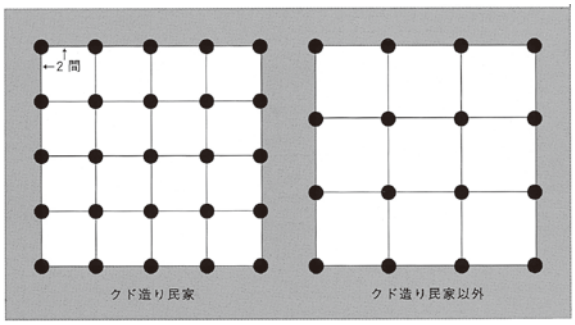
43図4

側の東部に偏って分布している。福岡県でも久留米市内では「樋瓦」は出土していないようで、『久留米市史』の民家の記録にも「クド造り」はあるが、「漏斗造」はない(引用文献15)。筑後市内では「樋瓦」が見られるので、福岡県内では筑後市域を北限とする狭い範囲に限定されるようだ。また、雁振瓦については、久留米市京隈侍屋敷遺跡第５次SK141で出土しているものが北限であろう。突帯が突面に付く冠瓦状のものは佐賀県内にもあるようだが、水田の赤瓦の産地である筑後市水田地区の筑後市水田上町遺跡SK015(文献16)にも見られるので、必ずしも佐賀県内のものが搬入されたものではないだろう。土師質の雁振瓦の分布は樋瓦よりも広かったものと思われる。

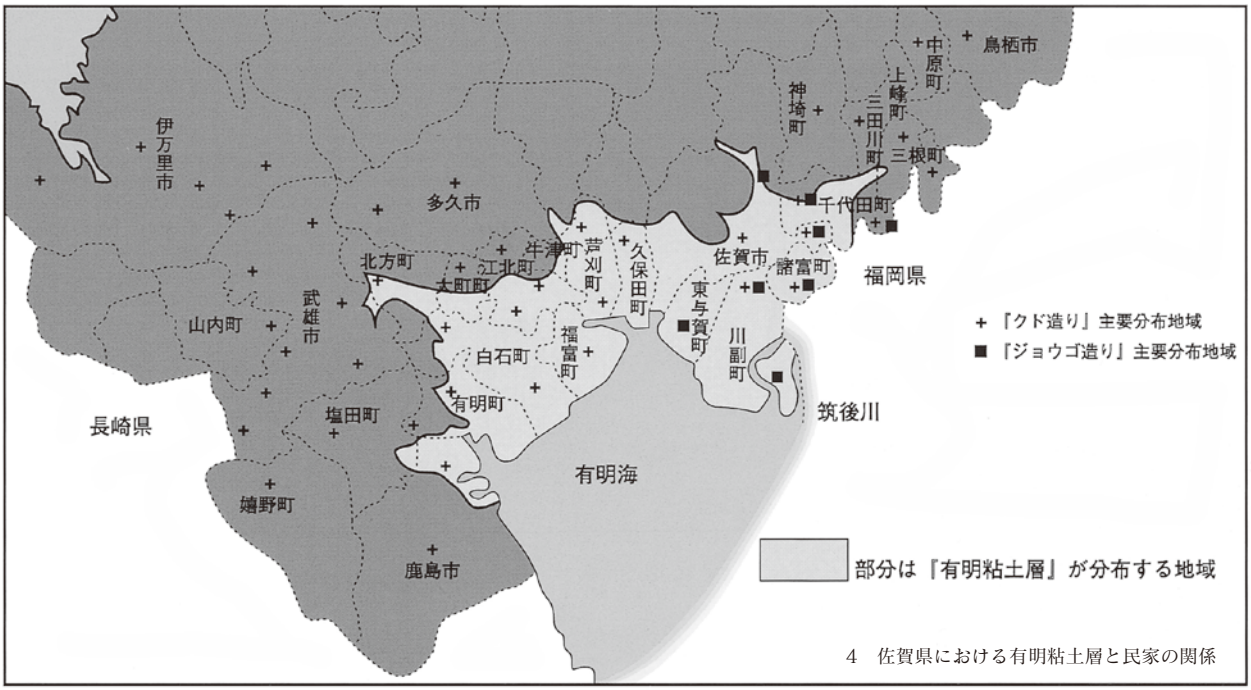


1　二ツ家・くど造り民家分布図

2　二ツ家造り民家　熊本県玉名郡玉東町境家　川島寅次『民家の来た道』より



3　民家・柱配置模式図



4　佐賀県における有明粘土層と民家の関係

1～3・4は 佐賀県立博物館『有明海・博物誌』より

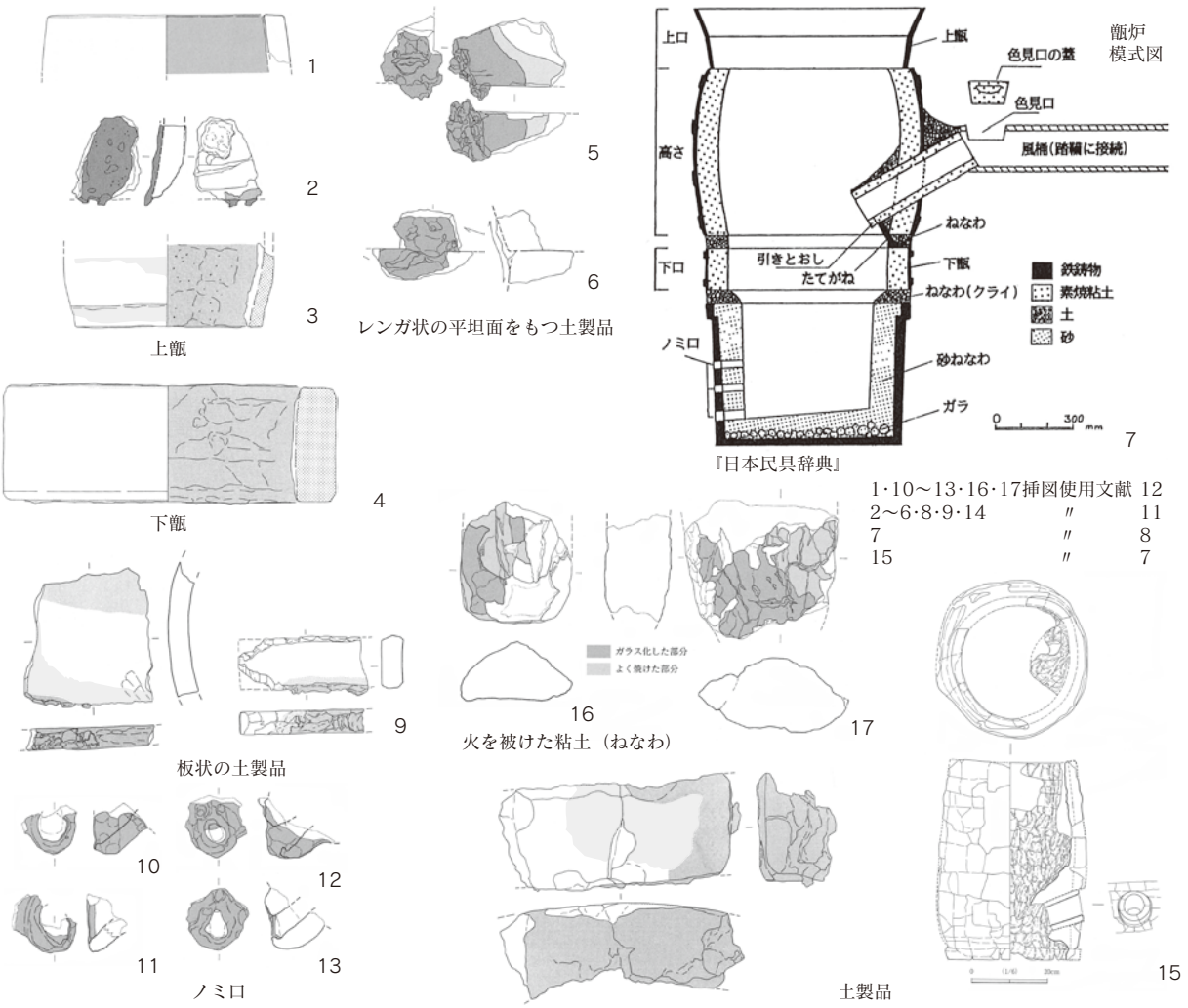
第141図　「クド造り」「漏斗造」家屋の分布と柱配置模式図

棒状土製品

『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』の中でも窯道具の可能性については述べたが、鋳型など鋳造関係遺物が多く出土していることから再考し、こしき炉の壁体の可能性も指摘しておきたい。

棒状土製品の中の大型で湾曲しているのものと、瓦片を転用しているものが中央部だけが焼けない理由が窯道具としてはわからなったので、ここではこしき炉の部材と考えたい。142図2･3は器壁の薄い炉の壁体、外面に粘土を貼って使用し、142図6･7は積み重ねて使用するものであり、これらは第142図７のようなこしき炉であっただろう。142図10から13は溶解した金属の出るノミ口であろう。142図14は大型の棒状土製品で、142図15のようなこしき炉の上甑の壁体ではないかと考えた。比熱を受けた燻し瓦片(142図8･9)が側端部のみ焼けて中央部だけ焼けないのは、こうしたこしき炉の部材の隙間に挟んだため、重なった部分だけが焼けなかったためだろう。142図16･17のような粘土塊もこしき炉の充填粘土であったのではないだろうか。

家屋の密集する町屋で鋳掛屋を営むには炉は小規模なものであろうから、こしき炉を使った可能性は十分にある。



第142図　矢加部町屋敷遺跡出土鋳造関係遺物とこしき炉の例

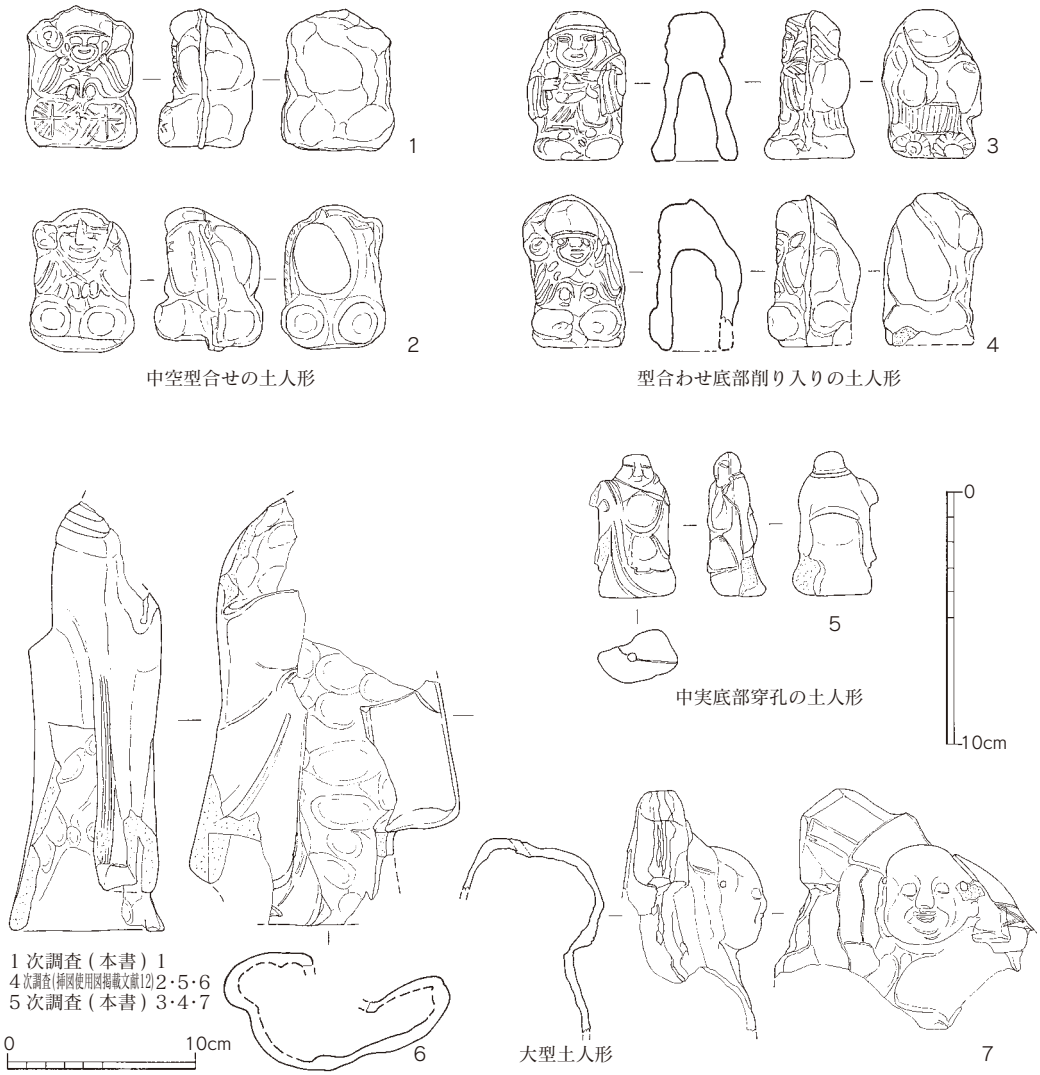
土人形

土人形で多く見られたのは、大黒天と恵比寿像だが、本遺跡は町屋でなので商売の神様として信仰されたのだろう。『久留米市史民俗編』によると、「かせどりといって、元旦の夕方に女の人が土製の大黒天などを持って訪れ、餅や銭をもらった。赤坂の土鳩笛もこれに使用されたという」という記載がある(引用文献17)。「かせどり」とは「かせぎどり」として他地域にも見られる習俗で、地域によって差異があるが、正月や新生児の祝いに各戸をまわって祝いの品を送ったり、なんらかの行為の返礼の品をもらったりする点で共通している。欠損していないものが必要以上に多量に出土しているのは、毎年購入する縁起物であったためだろう。

これらの神像は底面からヘラで削りを入れないもの(144図１)と入れるもの(144図２)の２種類の成型技法が見られる。

ヘラで削りを入れるものは粘土塊を表裏の型に入れた後、中実にならないように内部に空間を設けて焼成を良くしようとしたものであり、削りを入れやすいように頭部が向かって細長い形態になっている。

一方、抉りがなく、平底のものは表裏の型にそれぞれ粘土板を貼って、接合しているため中空

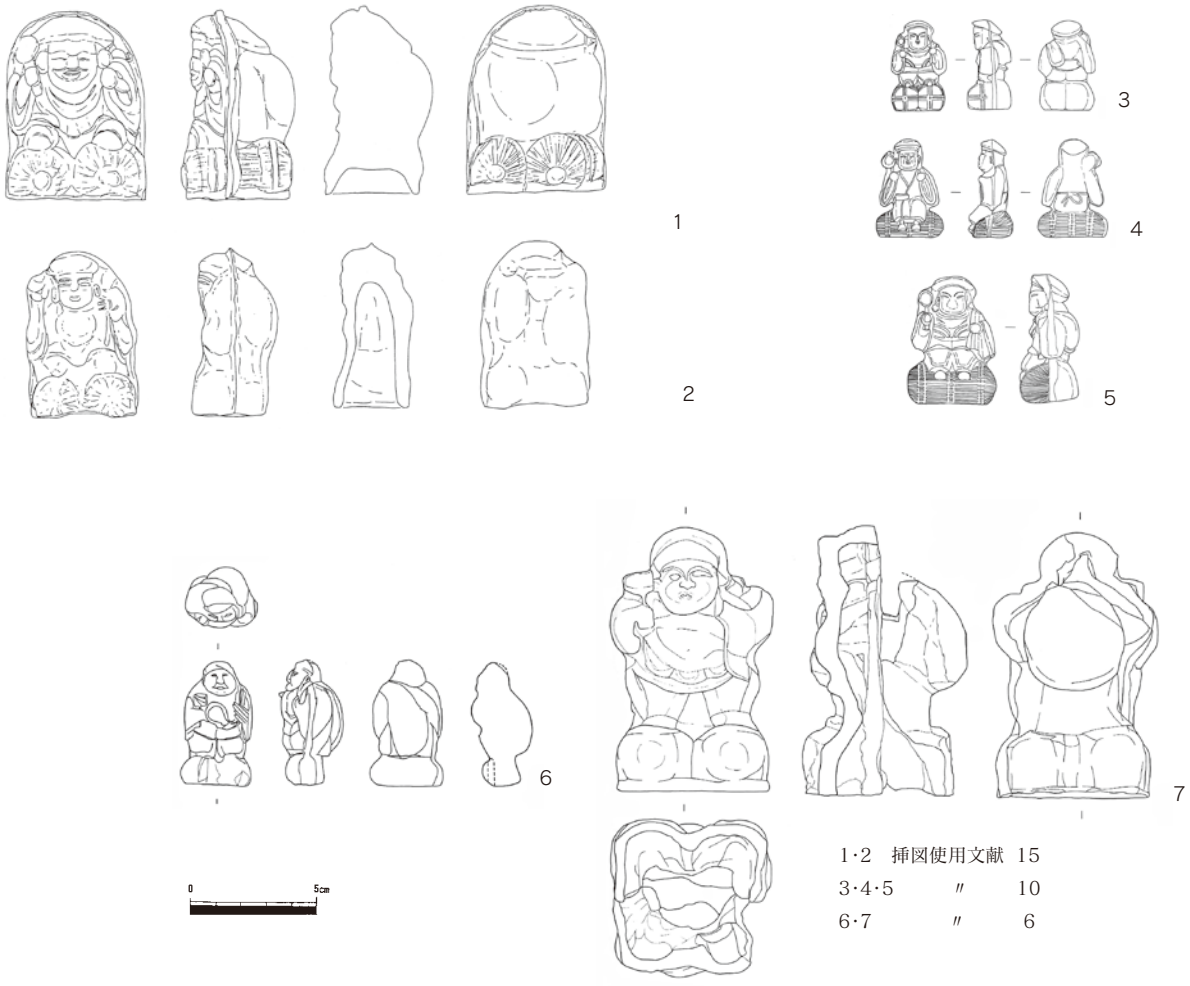


第143図　矢加部町屋敷遺跡出土の主要な土人形(6・7は1/4、他は1/3)

になっている。そのため接合痕を十分に削ることができずに大きな痕跡を残すのである。底部にヘラで抉りを入れる必要がないので、前者に比べて膨らみのあるものが多い。抉りを入れる方の胎は赤茶色の色調に鉄分と思われる褐色パミスを多く含んでおり、入らないものは精良な黄白色で器面の劣化が少ないという胎土の相違がある。胎土も製作技法も異なるので、産地が異なっていると考えるべきだろう。

近世の筑後市内には赤坂人形と水田人形という土師質土器窯で製作された土人形があり、赤坂人形については現在も製作が続いており、店舗で先代製作者の作品を見ることができる(注８)。赤坂人形は「不器用」という意味から「ててぽっぽ」と呼ばれ、接合痕を残す点に特徴があるらしい。現代の赤坂人形の大黒天には厚みがあり、型に粘土板を貼る方法で製作している。このことから、抉りが入らず接合痕を残すものを赤坂人形とし、抉りの入るものは水田人形としたい。本遺跡で抉りの入るものが多く出土するのも、水田焼の窯場の方が近いためであろう。水田人形はつくりが良く大型人形も作ったらしく、120図１から５や４次調査出土(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』第55図16･17)の大型品は水田人形であろう。

なお、『久留米市史』民俗編(引用文献18)によると、土人形は「金丸川付近の久留米高等学校工程の粘土で製作した」とあり、赤坂人形・水田人形とは別に久留米市内に土人形の製作地があっ



第144図　福岡・北九州・筑後市域出土の土人形(1/2)

たらしい。久留米城下町からは確かに赤坂・水田人形とは異なる形態のものが出土しており、本遺跡で出土する赤坂・水田人形以外の人形は久留米城下町産のものかもしれない(注９)。

焼塩壺

本遺跡で出土した焼塩壺は、すでに久留米市城下町の京隈侍屋敷遺跡第５次SK141・第７次SK150(引用文献19･20)などで出土しており、塩壺として報告されている。筆者の知見では、江戸時代の福岡城下町でも小倉城下町でも筑後地方焼塩壺は出土しておらず、流通圏は筑後地方に留まるのではないだろうか。

このように筑後地方の焼塩壺についてはすでに知られていたが、セットになる蓋の存在はわかっていなかった。焼塩壺は蓋をして焼成するので(写真５－３)、焼塩壺にはセットになる蓋が存在するはずであるが、本遺跡では写真５－２のように口縁部が赤くなった焼塩壺に伴って内外面に赤い輪ができている土師皿が出土し、ちょうど赤変する範囲が一致したので、土師質土器の小皿を蓋にしていたことがわかった(写真５－１)。これまで確認されなかったのは、蓋は土師質小皿として再利用され、灯明皿に転用されることが多いので、小皿や灯明皿として認識されていたためである(写真５－４)。

焼塩壺の蓋となる小皿は外面回転ナデの後、スリップを掛けるような静止ナデが見られる。この特徴は焼塩壺にも見られ、蓋にはならない小型の土師皿(写真５－５)にも見られるので、同じ産地で作られたものである。この土師質小皿は灰白を呈する精良な胎土から蒲池焼と想定しているので、必然的に焼塩壺も柳川産と考えられる。この精良な胎土の小皿は、蒲池地区に所在する東蒲池西門前遺跡(注11)の戦国時代の土師器にも見ることができたので、蒲池地区で作られた土師器の伝統を引くものと考えられる。雑器については厳密な意味では蒲池焼ではないのかもしれないが、蒲池に土着し土器司として在来の工人を統括したとすれば、雑器もまた蒲池焼としてよいのではなかろうか。

以上のように今回の矢加部町屋敷遺跡の調査によりいろいろな知見が得られたが、筆者の考察したものなので、今後の筑後地域の近世遺跡の調査の中で検証していただきたい。

最後に長期間にわたる発掘調査に際しては、振動や騒音により周辺住民の方々にはたいへんなご迷惑をお掛けしました。発掘作業に参加していただいた方々には、足場の悪い中で強粘土を掘削していただき、ご苦労に感謝申し上げます。今回の調査で、福岡県内の近世遺跡・遺物の研究が進展するとともに、全国的な近世遺跡・遺物の研究に役立つことを望みます。

注

1　久留米第四八歩兵連隊は明治30(1997)年福岡県久留米市国分町に創設され、主として佐賀県、福岡県の南部地区、長崎県の一部が兵役につく部隊で、連隊前には田中軍人デパートという軍人に記念杯など記念品を販売する専門店があったらしく、そこで販売されたものだろうか。

2　磁器杯の形態は従軍記念杯と同じものだが、個人名のみが書かれた例は知見にない。地元の古老によると町矢加部地区には野田姓は３軒あり、４次調査区で近代の「野田正人」の表札(『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』図版12－10)が出土しているので、調査区付近に野田氏の宅地が存在していたことは間違いなく、親類縁者にあたる人物からもらったのだろう。

3　「寛保年間柳川藩領図」は「寛保年中柳河藩領図」ともいわれているが、寛保年間(1741～1743)である根拠はなく、年代が遡る可能性があるとされている。

4　藺業の盛んな地域でもあるので、大型土坑についてはい草の泥染め用槽の可能性も考えたが、泥染めは大正13(1924)年頃から普及したもので、それまではクリークで洗って天日干しする習慣らしく、これは当てはまらない。(文献22)また、『大川市の民俗』(文献20)によると、三丸地区西田口の項で、「水田を地下げして出た土を瓦屋に売りにいく専門の人がいた」という記事があり、粘土の採掘孔の可能性もない。

5　この記事は『福岡県花莚沿革誌』の記事らしいが、文献22には引用文献の記載がなかった。

6　久留米市内の城島で作られる瓦と柳川市・みやま市で作られる瓦の間には僅差しかなく、城島瓦の系譜を引く瓦が南筑後に広がったているので、これらは「城島系瓦」というべきだろう。
7　博多遺跡群第62次調査2203号遺構は12世紀後半から13世紀初頭のこしき炉で、径80㎝程の小型の炉で、銅の鋳造用であった(文献24)。
8　赤坂人形は野口紘一氏で５代目で、店舗に展示しているのは先代野口文蔵氏の作品である。
「福岡県特産民芸品指定の赤坂人形赤坂人形製作窯元　赤坂飴本舗」として現在も営業している。『矢加部町屋敷Ⅰ』第41図３の鳩笛片は同範と思われる型が残っており、『矢加部町屋敷Ⅲ』第56図７はまったく同じ製品が残っている。矢加部南屋敷出土の笛(『矢加部南屋敷遺跡矢加部御反田遺跡』第38図11)も現代の製品に類似する形態のものがあるので、赤坂人形であろう。
9　佐賀県神崎市に尾崎人形という土人形の製作地がある。ここで製作された鳩笛は『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』41図１の鳩笛に近い。また、三養基郡北茂安町白壁の白石焼でも鳩笛を作っていたらしく、久留米市内と筑後市内、佐賀県内の製作地の土人形が流通していたようだ。
11　九州歴史資料館で整理中。

引用文献

1　城島町教育委員会1994『北ノ屋敷遺跡』城島町文化財調査報告書第１集
2　大川市教育委員会2002「榎津調査報告」『大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集)　大川の民俗』
3　川勝政太郎1980『梵字講話』株式会社河原書店
4　福岡県教育委員会2009『矢加部南屋敷遺跡　矢加部五反田遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集
5　大川市教育委員会2002「向島調査報告」『大川市民俗聞き取り調査報告書(第一集)　大川の民俗』
6　久留米市史編纂委員会1986「第７編　久留米の民俗　第５節　俗信」『久留米市史第５巻』
7　柳川市史編集員会2001「山門郡柳河村他地誌」『柳川市史　史料編Ⅰ』
8　大川市教育委員会2008「三丸調査報告西田口」『大川市民俗聞き取り調査報告書(第四集)　大川の民俗』
9　福岡県い製品商工業共同組合1996『福岡県の藺業誌』
10　文献８
11　文献７
12　「第４節瓦」唐津市教育委員会2005『唐津城跡(Ⅳ)』唐津市文化財調査報告書第123集
13　福岡県教育委員会1972『福岡県の民家　民家緊急調査報告書』
14　文献12
15　久留米市史編纂委員会S61「第７編　久留米の民俗　第３節　住」『久留米市史第５巻』
16　筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡１』筑後市文化財調査報告書第63集
17　久留米市史編纂委員会S61「第11編久留米の民俗　第３節　郷土玩具」『久留米市史第５巻』
18　文献17
19　久留米市教育委員会2006『京隈侍屋敷遺跡第５次発掘調査』久留米市文化財調査報告書第220集
20　久留米市教育委員会2008『京隈侍屋敷遺跡第７次発掘調査』久留米市文化財調査報告書第266集
21　久留米市教育委員会1996『久留米城両替町遺跡発掘調査』久留米市文化財調査報告書第116集
22　文献９
23　文献８
24　福岡市教育委員会1995『博多48』福岡市埋蔵文化財調査報告書第397集

挿図使用図掲載文献

1　大川市教育委員会1999『北大境遺跡』大川市文化財調査報告書第８集
2　大川市教育委員会2001『小深町遺跡』大川市文化財調査報告書第10集
3　久留米市教育委員会1992『久留米市三本松町遺跡』久留米市文化財調査報告書第74集
4　久留米市教育委員会2001「Ⅱ．石丸遺跡(第６次調査)」『平成12年度久留米市内遺跡群』久留米市文化財調査報告書第175集
5　佐賀県立博物館1999『平成10年度佐賀県立博物館企画展　有明海博物誌』
6　財団法人北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室2000『竪町遺跡第１地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第244集
7　財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター2002『郡司鋳造所跡』山口県埋蔵文化財センター調査報告第30集
8　日本民具学会1997『日本民具辞典』
9　福岡県教育委員会1972『福岡県の民家　民家緊急調査報告書』
10　福岡県教育委員会2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第157集
11　福岡県教育委員会2007『矢加部町屋敷遺跡Ⅰ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第３集
12　福岡県教育委員会2011『矢加部町屋敷遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
13　柳川古文書館2005『秀吉を支えた武将　田中吉政』
14　山崎信二2008『近世瓦の研究』奈良文化財研究所学報第78冊
15　筑後市教育委員会2005『水田上町遺跡Ⅰ』筑後市文化財調査報告書第63集
16　川島寅次1992『民家の来た道』
17　福岡県教育委員会2006『山門前田遺跡』九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第３集
18　瀬高町教育委員会1998『瀬高地区遺跡群Ⅱ』瀬高町文化財調査報告書第15集
19　みやま市教育委員会2010『松田掛畑遺跡Ⅱ松延城跡』みやま市文化財調査報告書第１集
20　久留米市教育委員会1995『久留米城外郭』久留米市文化財調査報告書第96集
21　福岡県教育委員会2006『西牟田大立遺跡・西牟田北原遺跡・西牟田平野遺跡(２次調査)』

九州新幹線関係埋蔵文化財調査報告第５集
22　(財)北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2004『小倉城代米御蔵跡Ⅳ』北九州市埋蔵文化財調査報告書第313集
23　九州歴史資料館2012『矢加部町屋敷遺跡Ⅳ蒲船津西ノ内遺跡蒲船津水町遺跡』有明海海岸道路
大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第12集

参考文献

江戸遺跡研究会2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房株式会社
秋田裕毅2002『ものと人間の文化史104　下駄』法政大学出版局
大分市歴史資料館Ｈ３『第10回特別展　九州の土人形』
福岡県教育委員会2008『矢加部町屋敷遺跡Ⅱ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告第９集
渡辺誠1992「焼塩壺　補注１・３」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会編　吉川弘文館

写真５　焼塩壺の蓋と見られる小皿と蛍光Ｘ線分析試料写真

81図2
81図11
1　81図2･11

3　74図３

2　38図10

4　18図22

6　26図6

5　39図5

7　ベンガラ塊

8　123図2

４．矢加部町屋敷遺跡の自然科学系の分析

矢加部町屋敷遺跡出土赤色顔料の保存科学的調査

九州歴史資料館　加藤　和歳

１．はじめに

古代日本において出土赤色顔料は、鉱物である辰砂を粉状にしたもので、硫化水銀を主たる成分とするものである朱と、鉱物としての赤鉄鉱を粉状にしたものや磁赤鉄鉱を焼成して得るもの、その他、鉄細菌、鉄錆が由来となる、酸化第二鉄を主たる成分とするベンガラの二種類に大別できることがこれまでの研究から知られている。

本稿では、福岡県柳川市矢加部町屋敷遺跡から出土した硯(写真５－８)および擂鉢(写真５－６)に付着した赤色顔料の種類を同定することを目的とし、保存科学的手法により調査を行った。

２．調査方法

まず、デジタルマイクロスコープを用いて、20～100倍程度の倍率で、顔料の付着状態を観察し、遺物本体が赤色を発しているのではないことを確認した。その後、顔料付着箇所を、直接、蛍光Ｘ線分析法により、含有される元素を定性的に分析した。

赤色顔料の場合、冒頭で述べたように、各種の顔料において、朱である場合、水銀(Hg)、ベンガラである場合、鉄(Fe)というそれぞれに特徴づけられる元素が含まれており、これらの存在によって、顔料を種類の推定を行うこととした。

測定は九州歴史資料館にて行い、測定機器および分析条件は以下のとおりである。

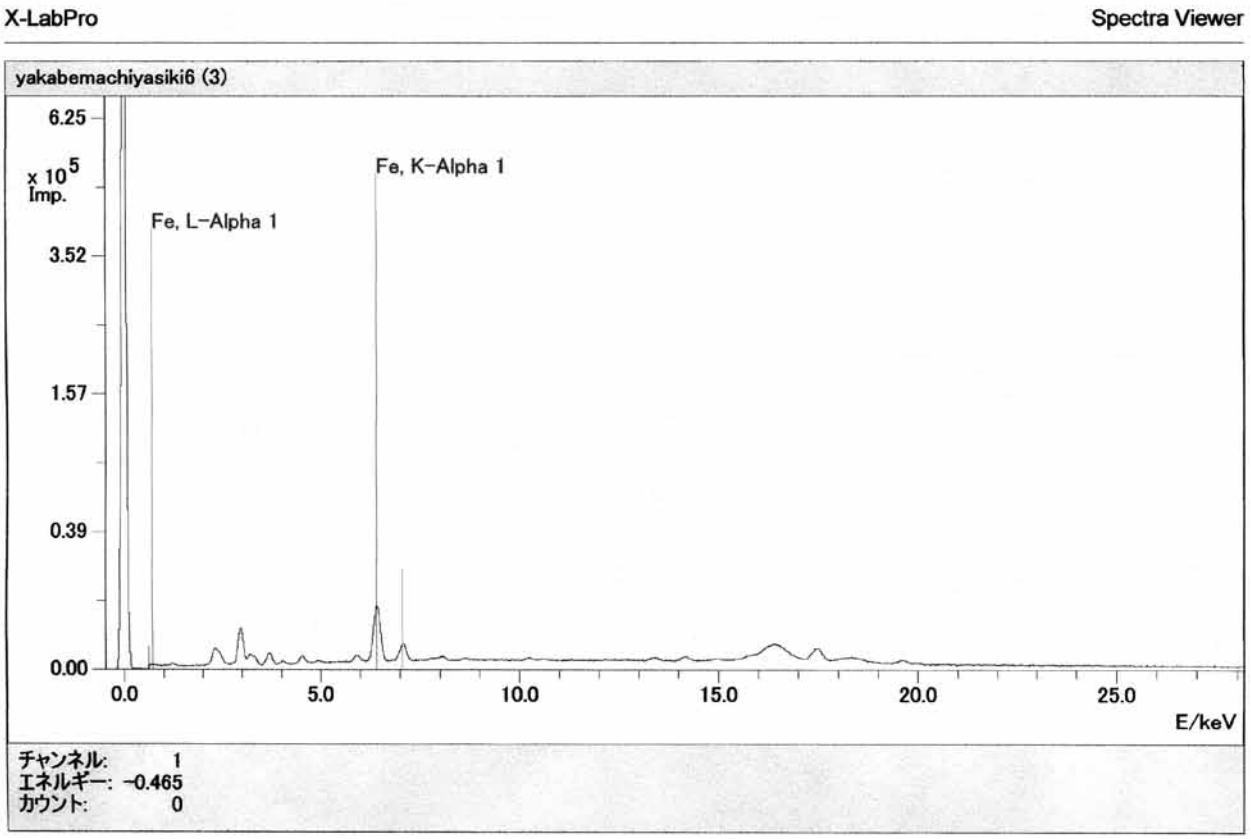
・使用機器：エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置(SPECTRO MIDEX)
・分析条件：電圧　45kV/電流　0.3mA/対陰極　モリブデン(Mo)/検出器　シリコンドリフト検出器/測定雰囲気　大気/測定範囲　0.3ミリ/測定時間　300秒

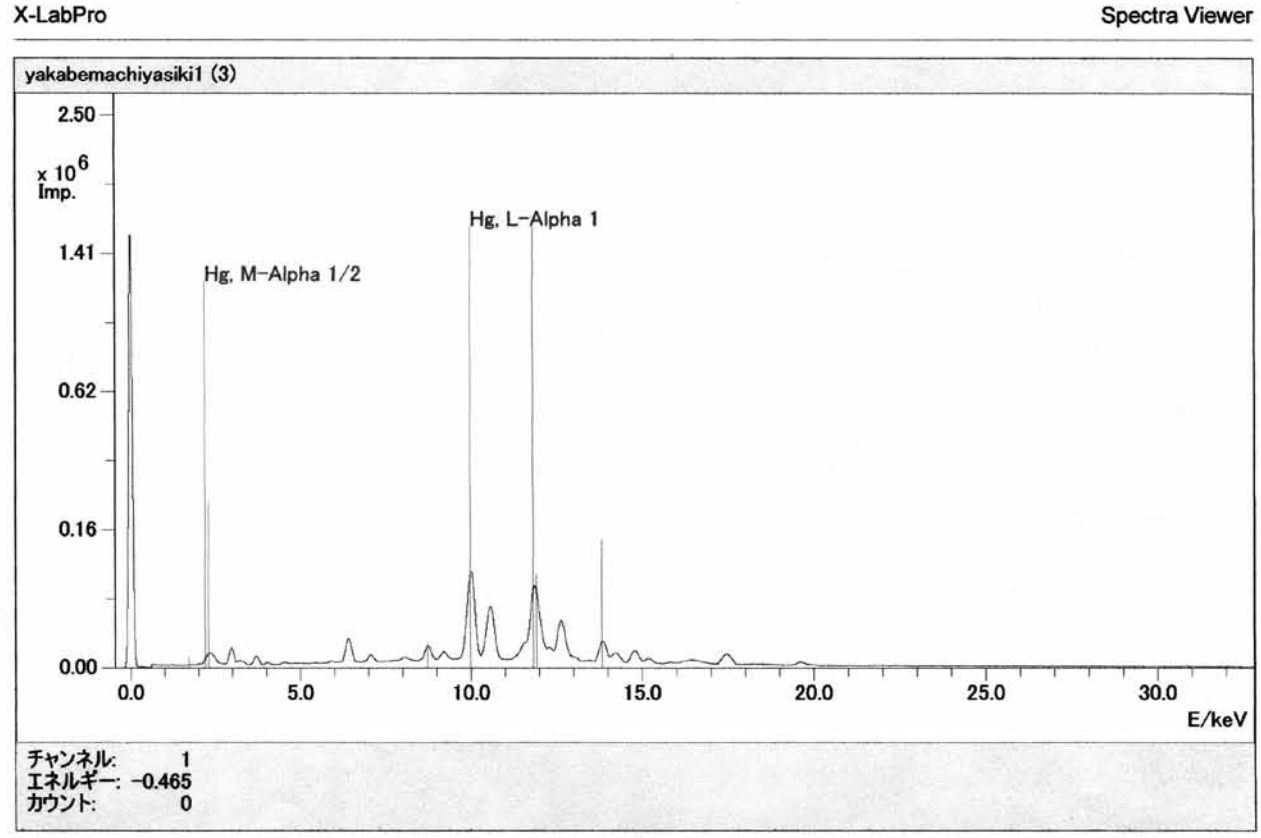
３．調査の結果

推定にあたっては、主たる元素の存在を、検出されたスペクトルのピークから定性的に判断をおこなった。

まず、硯については、水銀(Hg)のピークが明瞭にみられることから、この赤色顔料は朱であると推定できる。硯に付着しているということから考えて、顔料というよりは、書入れの朱である可能性を指摘することができよう。

次に、擂り鉢であるが、鉄(Fe)が検出され、水銀(Hg)は検出されなかったことから、この赤色顔料はベンガラであることが推定できる。なお、比較として擂り鉢胎土部分の測定も行ったところ、胎土由来と考えられるケイ素(Si)やアルミニウム(Al)のピークがみられた。顔料にはそのピークがみられないため、赤色部分は鉄(Fe)であると判断できる。この町屋敷跡において、ベンガラを擂り潰す作業が行われていたのかと、窺うこともできよう。





第145図　摺鉢(上)・硯(下)付着赤色顔料蛍光X線スペクトル図

矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体

佐々木由香・バンダリ スダルシャン(パレオ・ラボ)

1．はじめに

矢加部町屋敷遺跡は福岡県柳川市矢加部に位置する17世紀後半から19世紀中葉の町屋遺跡である。遺跡は久留米柳川往還に面し、有明海沿岸に立地する。堆積物は粘土が主体で、動植物遺体の遺存状況が良い。ここでは、土坑から出土した大型植物遺体を同定し、食用などに利用された植物あるいは遺構周辺での栽培状況や植生について検討する。なお、同定にあたっては、千葉大学園芸研究科百原新氏のご教示を得た。

2．試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が堆積物の水洗と状態が良好な種実の抽出を行った７試料である(一部未水洗)。１試料中には、１点の種実を含む試料もあれば多種の種実が多数混合した試料もあった。少量の種実を含む試料は、調査時に目視で取り上げられ、多量の種実を含む試料は、パンケース１箱分の堆積物を２㎜目の篩で水洗されたものである。試料の内訳は、１次地点の土坑３(試料No.1, 4)と土坑26(試料No.3)、４次地点の土坑７(試料No.5)と土坑12(試料No.2)、土坑80(試料No.7)、土坑84(試料No.6)である。各土坑の詳細な時期は、古い方から４次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、１次地点の土坑26が18世紀中葉、１次地点の土坑３が19世紀初頭、４次地点の土坑７は19世紀中葉で、４次地点の土坑12と80は時期不明である。

試料は、一部の再水洗と表面のクリーニングをした上で、肉眼および実体顕微鏡下で大型植物遺体の抽出・同定・計数を行った。計数が困難な試料や多数含まれている試料は記号(＋)で示した。試料および残渣は福岡県教育委員会に保管されている。

3．結果

同定した結果、木本植物ではヤマモモ核と、クリ果実、コナラ属果実、クスノキ核、ウメ核、モモ核、サンショウ炭化種子、ウルシ炭化内果皮、カキノキ属炭化種子の９分類群、草本植物ではトウガン果実・種子と、メロン仲間種子、カボチャ種子、ヒョウタン仲間種子、ヒシ属果実・炭化果実、ナス属種子、オオムギ炭化種子、イネ籾殻・炭化籾・炭化種子、ホタルイ属果実の９分類群の計18分類群が見いだされた。このうちトウガンには、果実内に多数の種子を残したまま保存されていた試料があり、これらの試料についてはこの状態で果実･種子１として計数した。このほかに科以下の識別点が残存していない一群を同定不能炭化種実とした。単体で出土した種実は完形で3767点、破片で243点であった。

以下に、産出した種実について地点および遺構別に記載する(同定不能は除く)。

［１次地点］

土坑３(19世紀初頭)：ウルシが非常に多く、イネがやや多く、メロン仲間とヒシ属が少量、クリとクスノキ、ウメ、トウガン、カボチャ、ナス属、オオムギがわずかに得られた。

土坑26(18世紀中葉)：ウルシとイネがやや多く、コナラ属とカキノキ属、ヒシ属、ホタルイ属がわずかに得られた。

［４次地点］

表65　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体(括弧は破片を示す)

	地点	1次			4次			
	遺構名	土坑３		土坑26	土坑７	土坑12	土坑80	土坑84
	時期	19世紀初頭		18世紀中葉	19世紀中葉	不明	不明	17世紀中葉～後葉
分類群	部位/試料No.	No.1	No.4	No.3	No.5	No.2	No.7	No.6
ヤマモモ	核					1		
クリ	果実		(6)					
コナラ属	果実			(1)				
クスノキ	核	2 (1)						
ウメ	核	1	(1)					
モモ	核				1			
サンショウ	炭化種子					1		
ウルシ	炭化内果皮	1061 (27)	1	34 (2)			1	
カキノキ属	炭化種子			(4)				
トウガン	果実・種子							2
	種子	7				2362 (111)	2 (50)	
メロン仲間	種子	16				3 (5)	247	
カボチャ	種子	9 (5)						
ヒョウタン仲間	種子					2		
ヒシ属	果実	1 (21)	(3)	(1)				
	炭化果実	(1)						
ナス属	種子	1						
オオムギ	炭化種子	3					1	
イネ	籾殻	(+++)		(++)				
	炭化籾	1					1	
	炭化種子	1		3				
ホタルイ属	果実			1			1	
同定不能	炭化種実	(1)					(3)	

+：1-9,++:10-49,+++:50-99

土坑７(19世紀中葉)：モモが１点得られた。

土坑12(時期不明)：トウガンが非常に多く、ヤマモモとサンショウ、メロン仲間、ヒョウタン仲間がわずかに得られた。

土坑80(時期不明)：メロン仲間が非常に多く、トウガンが少量、ウルシとオオムギ、イネ、ホタルイ属がわずかに得られた。

土坑84(17世紀中葉～後葉)：トウガンの果実(種子を含む)が２破片得られた。１破片あたり、完形の果実の約1/4が残存しており、２破片をあわせると完形の約1/2個体分であった。

以下に、大型植物遺体の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1)ヤマモモ　*Morella rubra* Lour.　核　ヤマモモ科

淡褐色で、凸レンズ型の扁平な球体。木質で表面は粗い。長さ7.6㎜、幅6.6㎜、厚さ4.4㎜。

(2)クリ　*Castanea crenata* Siebold et Zucc.　果実　ブナ科

黒褐色で、破片だが、完形ならば側面は広卵形。表面は平滑で、縦に細く浅い筋がみられる。殻斗着痕は果実幅と同じ程度の幅広になり、不規則で微細な丘状の突起が密にある。長さ15.0㎜、残存幅10.1㎜、厚さ8.8㎜。

(3)コナラ属　*Quercus* sp.　果実　ブナ科

茶褐色で、破片だが、完形ならば長楕円形か。果実直径に対し、1/2程度と思われる臍が残る。コナラもしくはウラジロガシか。残存長9.8㎜、残存幅5.8㎜。

(4)クスノキ　*Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl　核　クスノキ科

明褐色で、上面観・側面観は円形。表面は平滑で一条の稜がある。光沢があり、壁は薄い。長さ6.8㎜、幅6.5㎜、厚さ6.2㎜。

(5)ウメ　*Armeniaca mume* (Siebold et Zucc.) de Vriese　核　バラ科

淡褐色、卵形で上面観は両凸レンズ形。表面には、不規則で深く小さな孔がある。着点は凹む。縫合線に沿って深い溝が入る。長さ17.2㎜、幅13.3㎜、厚さ8.9㎜。

(6)モモ　*Amygdalus persica* L.　核　バラ科

黄褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先が尖る。下端に大きな着点がある。表面に不規則な深い皺がある。また片側側面には縫合線に沿って深い溝が入る。長さ26.2㎜、幅19.4㎜、厚さ15.3㎜。

(7)サンショウ　*Zanthoxylum piperitum* (L.) DC.　炭化種子　ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。基部側面に稜線があり、内側には短く斜め下を向く臍がある。網目状隆線は細かく低い。種皮は厚く硬い。長さ3.3㎜、幅2.7㎜、厚さ2.5㎜。

(8)ウルシ　*Toxicodendron vernicifluum* (Stokes) F.A.Barkley　炭化内果皮　ウルシ科

上面観は中央がやや膨らむ扁平、側面観は中央がややくびれた広楕円形。表面には微細な網目状で中央が凹むディンプルがある。断面を観察すると、内層には波状の壁を持つ縦に長い細胞が配列し、中層では正方形に近い細胞が柵状を呈する。外層は上部が炭化により失われているが、長柱状の細胞が配列する。以上の表面および断面構造からウルシと同定した。任意に抽出した10点の大きさは、長さ3.0～4.9(平均3.7)㎜、幅4.2～6.6(平均5.1)㎜、厚さ2.0～3.2(平均2.6)㎜。

(9)カキノキ属　*Diospyros* spp.　炭化種子　カキノキ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で、基部がやや曲がり突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。長さ13.7㎜、幅10.0㎜。

(10)トウガン　*Benincasa hispida* (Thunb.) Cogn.　果実・種子　ウリ科

果実は果皮が残存していないが、黄白色の果肉部分が部分的に残存する。果実の大きさは長軸115.0㎝、短軸110.0㎝。果肉の内部には種子が残存する。種子は黄白色で、倒卵形。表面は平滑。基部両側に薄い突出部がある。周囲を縁取る肥厚があり、中央部は窪む。任意に抽出した単体出土の種子10点の大きさは、長さ10.8～12.7(平均11.9)㎜、幅6.3～7.1(平均6.7)㎜。

(11)メロン仲間　*Cucumis melo* L.　種子　ウリ科

黄白色で、上面観は扁平、側面観は倒卵形。表面は平滑で、基部は突出せず直線状の隆線となる。藤下(1984)は、種子の大きさからおおむね次の３群に分けられるとしている。長さ6.0㎜以下は雑草メロン型、長さ6.1～8.0㎜はマクワウリ・シロウリ型、長さ8.1㎜以上はモモルディカメロン型である。任意に抽出した10点の大きさは、長さ6.7～8.2(平均7.5)㎜、幅3.0～3.7(平均3.5)㎜で、大きさで分類するとほとんどがマクワウリ・シロウリ型であるが、モモルディカメロン型も混じる。

(12)カボチャ　*Cucurbita moschata* (Duchesne ex Lam.) Duchesne ex Poir.　種子　ウリ科

淡褐色で、長倒卵形。周縁を毛が取り囲む。長さ16.3㎜、幅8.5㎜。

(13)ヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria* (Molina) Standl.　種子　ウリ科

やや淡黄褐色～褐色で、上面観は扁平、側面観は逆三角形。やや湾曲して左右は非対象、本来ならば先端はW字状で、基部から先端まで、浅く広い溝が２本走る。壁はややスポンジ質。長さ14.3㎜、幅6.4㎜。

(14)ヒシ属　*Trapa* spp.　果実・炭化果実　ヒシ科

黒褐色で、不整三角形。細く先端が尖った角が２方向にのびる。上位角は細く鋭い。長さ10.0㎜、幅14.0㎜。

(15)ナス属　*Solanum* spp.　種子　ナス科

褐色で、上面観は扁平、側面観は楕円形。表面には畝状突起が細かい網目模様がある。着点の一端がやや突起する。ここでいうナス属とは、栽培植物のナス以外のナス属である。長さ3.0㎜、

幅2.9㎜。

(16)オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　炭化種子　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には三角形の胚がある。断面形状は楕円形～円形となる(Jacomet, 2006)。長さ6.6㎜、幅3.2㎜、厚さ2.4㎜。

(17)イネ　*Oryza sativa* L.　籾殻・炭化籾・炭化種子　イネ科

籾は黄褐色～淡褐色で、側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。長さ7.0㎜、幅3.3㎜。種子は上面観が両凸レンズ形、側面観は楕円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の２本の浅い溝があり、中央がやや盛り上がる。長さ4.7㎜、幅2.8㎜。

(18)ホタルイ属　*Scirpus* spp.　果実　カヤツリグサ科

黒色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は短倒卵形。頂部は尖り、基部は狭まって着点がある。壁は硬く、光沢がある。長さ2.1㎜、幅1.8㎜。

４．考察

17世紀後半から19世紀中葉の６基の土坑から産出した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物が種類および産出数ともに非常に多かった。栽培植物は、木本植物ではウメとモモ、ウルシの３種類、草本植物ではトウガンとカボチャ、メロン仲間、ヒョウタン仲間、オオムギ、イネが産出した。ウルシ以外は食用に利用した残渣と考えられる。ただし、ヒョウタン仲間は容器に利用した可能性もある。ウルシは18世紀中葉の土坑26と19世紀初頭の土坑３、時期不明の土坑80から産出し、特に土坑３では1000点以上産出した。内果皮がすべて炭化していたため、中果皮に含まれる蝋を採取後に土坑内に廃棄された可能性がある。トウガンは単体出土の種子だけでも破片を含めて2500点以上産出したが、17世紀中葉から後葉の土坑84では、低地遺跡でも通常残存しない黄白色の果肉ごと残存しており、内部に種子が残存した状態で約1/2個体が産出した。メロン仲間も時期不明の土坑80で約250点と多産したが、種子の大きさからほとんどが栽培種のマクワウリ・シロウリ型に分類され、一部モモルディカメロン型が含まれる可能性がある。

18世紀中葉の土坑26から見いだされたカキノキ属には栽培種と野生種があり、出土した種子は栽培種の大きさに近いが、破片が多く、断定できなかった。また野生植物であるが食用可能な種実としてヤマモモとクリ、コナラ属、サンショウ、ヒシ属が見いだされた。クリやコナラ属、ヒシ属はほとんど破片で、利用後の残渣の可能性が高い。

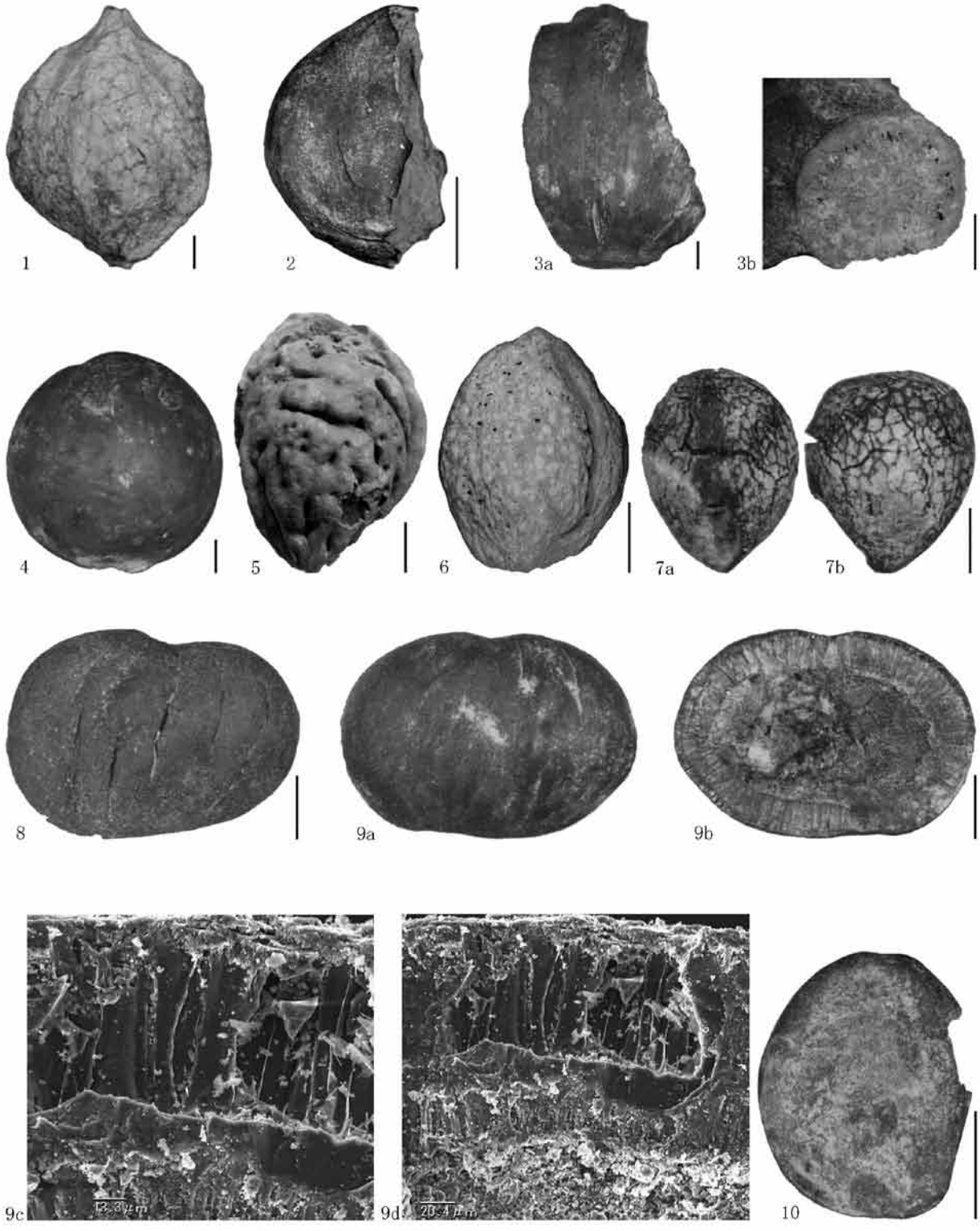
土坑の周辺から自然の営力で土坑内に堆積したと考えられる種実としては、クスノキとナス属、ホタルイ属がある。このうち、ホタルイ属は抽水植物であるため、土坑26や土坑80では土坑内もしくは周辺に水が溜まる環境があった可能性がある。しかし、これらの種実の産出数はわずかで、土坑内に偶発的に入ったと考えられる。

以上のことから、土坑内に堆積した植物では当時食用された植物や利用された植物の種実が主体となって堆積していたと考えられる。

引用文献

藤下典之(1984)出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法．渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文･自然科学―総括報告書」: 638-654，同朋舎出版.

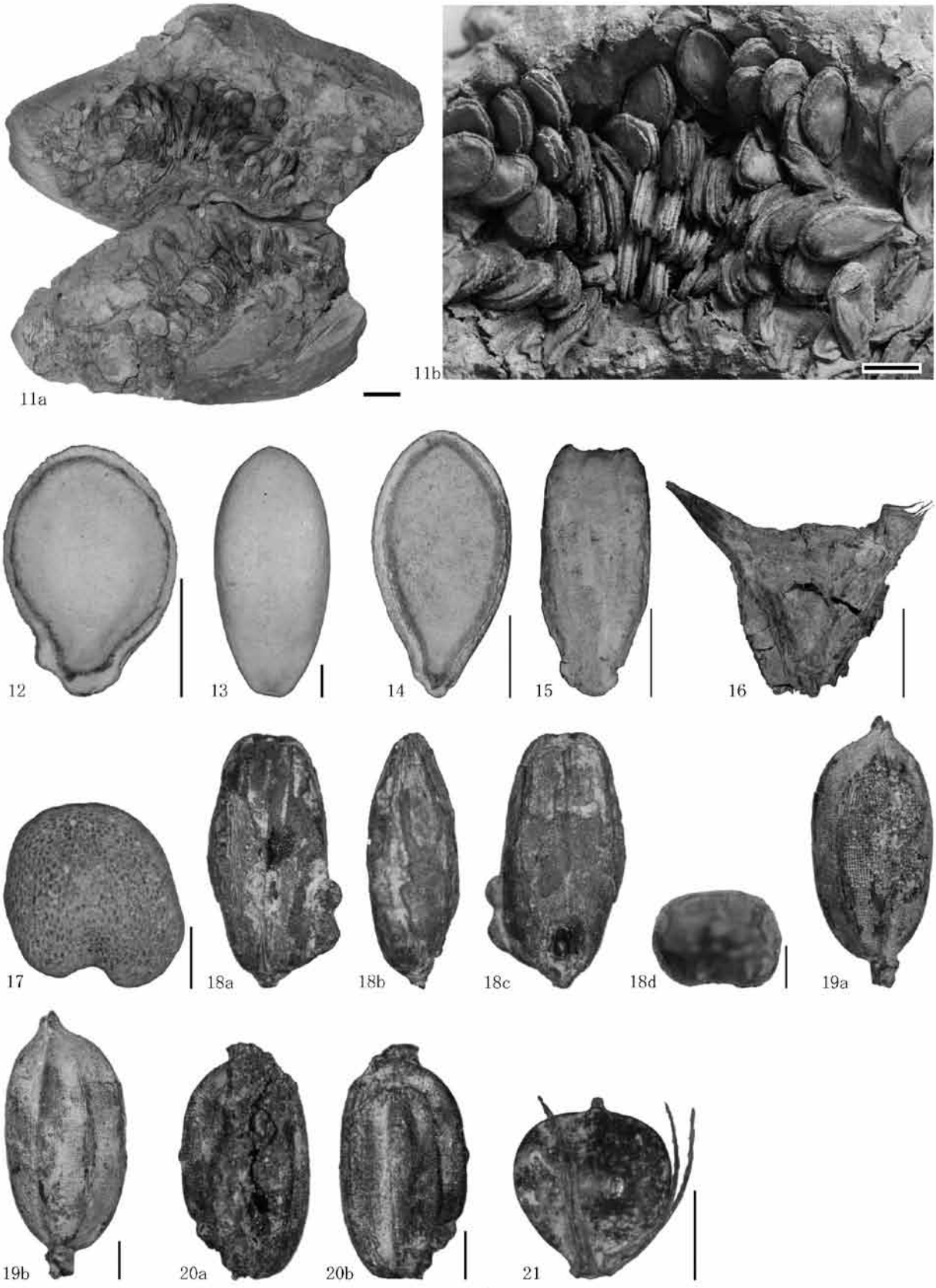
Jacomet, S. and collaborators Archaeobotany Lab. (2006) Identification of cereal remains from archaeological sites. 2nd edition, IPAS, Basel Univ.



スケール 1, 3, 4, 7-9b：1mm, 2, 5, 6, 10：5mm

写真６　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体（１）

1. ヤマモモ核（土坑 12、No. 2）、2. クリ果実（土坑 3、No. 4）、3. コナラ属果実（土坑 26、No. 3）、4. クスノキ核（土坑 3、No. 1）、5. モモ核（土坑 7、No. 5）、6. ウメ核（土坑 3、No. 1）、7. サンショウ炭化種子（土坑 12、No. 2）、8. ウルシ炭化内果皮（土坑 3、No. 1）、9a-b. ウルシ炭化内果皮（土坑 3、No. 1）、9c-d. ウルシ炭化内果皮断面走査電子顕微鏡写真（土坑 3、No. 1）、10. カキノキ属炭化種子（土坑 26、No. 3）



スケール 11a:10mm, 11b:5mm, 12, 14-16:5mm, 13, 17-21:1mm

写真７　矢加部町屋敷遺跡から出土した大型植物遺体（２）

11a. トウガン果実・種子（土坑 84、No. 6）、11b. 11a の拡大（土坑 84、No. 6）、12. トウガン種子（土坑 3、No. 1）、13. メロン仲間種子（土坑 3、No. 1）、14. カボチャ種子（土坑 3、No. 1）、15. ヒョウタン仲間種子（土坑 12、No. 2）、16. ヒシ属果実（土坑 3、No. 1）、17. ナス属種子（土坑 3、No. 1）、18. オオムギ炭化種子（土坑 3、No. 1）、19. イネ炭化籾（土坑 3、No. 1）、20. イネ炭化種子（土坑 3、No. 1）、21. ホタルイ属果実（土坑 26、No. 3）

矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定

中村賢太郎(パレオ・ラボ)

1．はじめに

福岡県柳川市矢加部に所在する矢加部町屋敷遺跡は、有明海沿岸に立地し、久留米柳川往還に面した町屋遺跡である。矢加部町屋敷遺跡の発掘調査では、17～20世紀に属する遺構から魚骨、獣骨、貝が良好な保存状態で出土した。ここでは矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体の同定結果を報告する。なお、現生標本の閲覧にあたっては、国立歴史民俗博物館の西本豊弘先生と早稲田大学の樋泉岳二先生にご協力をいただいた。

2．試料と方法

試料は、福岡県教育委員会が発掘調査現場での目視あるいは水洗により採取した動物遺体である。試料の多い土坑３などは、堆積物が２㎜目の篩で水洗され、試料が回収されている。

試料が採取された遺構は、１次地点の大溝２、土坑３、土坑19、２次地点の溝２、４次地点の埋甕２、茶褐色土落ち込み、大土坑２、大土坑５、土坑64、ピット83、土坑84、土坑88、土坑90、５次地点の大土坑１、ピット24である。各遺構の時期は、古い方から４次地点の土坑84が17世紀中葉～後葉、同土坑64が17世紀末～18世紀初頭、同大土坑５が18世紀初頭以前、同土坑90が18世紀初頭、同埋甕２と１次地点の土坑19が18世紀初頭～前葉、１次地点の大溝２が18世紀前葉～19世紀中葉、５次地点の大土坑１が18世紀前葉～中葉、４次地点の土坑88が18世紀中葉～後葉、１次地点の土坑３が19世紀初頭、４次地点の大土坑２が19世紀中葉、２次地点の溝２が19世紀後葉～20世紀前葉、４次地点の茶褐色土落ち込みと同ピット３および５次地点のピット24は時期不明である。

同定は肉眼で現生標本との比較により行った。試料は九州歴史資料館に保管されている。

3．結果

同定された動物遺体の一覧を表１に、個々の動物遺体の同定結果と観察所見は表２、３に示す。

(1)貝類

貝類では、オオタニシ、ツメタガイ、アカニシ、バイ、オニニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、ドブガイ属、アゲマキ、シジミ属、アサリが同定された。

貝類の多くは１次地点の大溝２北部から出土しており、大溝２北部の中層でフネガイ科、ドブガイ属、シジミ属、アサリ、上層でアカニシ、バイ、オニニシ、サルボウ、層不明ではマガキ、アゲマキが見られた。その他の遺構では、１次地点の土坑19でオオタニシ、２次地点の溝２でツメタガイが見られた。

(2)魚類

魚類では、サメ類、真骨類、ヒラ、スズキ属、シイラ、タイ科、マダイ、ボラ科、マグロ属、ヒラメ科が同定された。

１次地点の大溝２で、スズキ属左主鰓蓋骨、真骨類左鰓条骨が見られた。同土坑３で、ヒラ右主上顎骨、シイラ腹椎、タイ科犬歯、同左方骨、同左主鰓蓋骨、同腹椎、同鱗、ヒラメ科右前上顎骨、真骨類の各部位が見られた。

４次地点の埋甕２でマグロ属腹椎、同大土坑５でスズキ属右角骨、同ピット83でマダイ前頭骨、同土坑84でサメ類椎骨が見られた。

５次地点の大土坑１で、ボラ科左主鰓蓋骨、マグロ属尾椎、真骨類右鰓条骨が見られた。

(3)爬虫類

爬虫類では、イシガメ科とスッポンが同定された。

１次地点の大溝２でイシガメ科腹甲が見られた。同土坑３および４次地点の土坑64、同土坑90でスッポン腹甲、５次地点の大土坑でスッポン背甲が見られた。

(4)哺乳類

哺乳類では、哺乳綱、ウマが同定された。その他にウシの可能性のある大型哺乳類骨が見られた。

１次地点の大溝２で、ウシ？の左脛骨と長骨骨端破片、哺乳綱の各部位が見られた。

４次地点の大土坑２でウマ左基節骨、同土坑64でウマ左肩甲骨、同土坑88でウマ右中足骨が見られた。

５次地点のピット24でウマの上顎切歯５本が見られた。５本の歯種は左第１切歯、左第３切歯、右第１～３切歯である。

(5)鳥類

鳥類では、鳥綱、ニワトリ、アビ属が同定された。

１次地点の大溝２で、ニワトリの胸骨と右足根中足骨、アビ属左足根中足骨、鳥綱右足根中足骨が見られた。

４次地点の茶褐色土落ち込みでニワトリの右足根中足骨、同大土坑５でニワトリの左上腕骨、同土坑88で鳥綱の右肩甲骨が見られた。

４．考察

貝類では、淡水域に生息するオオタニシやドブガイ属、淡水域あるいは汽水域に生息するシジミ属、海の内湾に生息するツメタガイ、アカニシ、フネガイ科(ミミエガイ類)、サルボウ、マガキ、アゲマキ、アサリ、湾外に生息するバイ、オニニシなどが見られた。河川や湖沼から有明海にかけ

表66　矢加部町屋敷遺跡出土動物遺体種名表

- 軟体動物門　Mollusca
  - 腹足綱　Gastropoda
    - 原始紐舌目　Architaenioglossa
      - タニシ科　Viviparidae
        - タニシ属　*Cipangopaludina*
          - オオタニシ　*Cipangopaludina japonica*
    - 盤足目　Discopoda
      - タマガイ科　Naticidae
        - ツメタガイ属　Glossaulax
          - ツメタガイ　*Glossaulax didyma*
    - 新腹足目　Neogastropoda
      - アクキガイ科　Muricidae
        - *Rapana*属　*Rapana*
          - アカニシ　*Rapana venosa*
      - エゾバイ科　Buccinidae
        - バイ属　*Babylonia*
          - バイ　*Babylonia japonica*
        - テングニシ属　*Hemifusus*
          - オニニシ　*Hemifusus crassicaudus*
  - 二枚貝綱　Bivalvia
    - フネガイ目　Arcoida
      - フネガイ科　Arcidae
        - フネガイ科の一種　Arcidae gen. et sp. Indet.
        - サルボウ属　*Scapharca*
          - サルボウ　*Scapharca subcrenata*
    - ウグイスガイ目　Pterioida
      - イタボガキ科　Ostreidae
        - マガキ属　*Crassostrea*
          - マガキ　*Crassostrea gigas*
    - イシガイ目　Mytiloida
      - イシガイ科　Unionidae
        - ドブガイ属　*Anodonta*
          - ドブガイ属の一種　*Anodonta* sp.
    - マルスダレガイ目　Veneroida
      - ナタマメガイ科　Pharellidae
        - アゲマキ属　*Sinonovacula*
          - アゲマキ　*Sinonovacula constricta*
      - シジミ科　Corbiculidae
        - シジミ属　*Corbicula*
          - シジミ属の一種　*Corbicula* sp.
      - マルスダレガイ科　Veneridae
        - アサリ属　*Ruditapes*
          - アサリ　*Ruditapes philippinarum*
- 脊索動物門　Chordata
  - 軟骨魚綱　Chondrichthyes
    - サメ類　Selachii
      - サメ類の一種　Selachii ord., fam., gen. et sp. Indet.
  - 条鰭魚綱　Actinopterygii
    - 真骨類　Teleostei
      - 真骨類の一種　Teleostei ord., fam., gen. et sp. Indet.
      - ニシン目　Clupeiformes
        - ニシン科　Clupeidae
          - ヒラ属　*Llisha*
            - ヒラ　*Llisha elongata*
      - スズキ目　Perciformes
        - スズキ科　Percichthyidae
          - スズキ属　*Lateolabrax*
            - スズキ属の一種　*Lateolabrax* sp.
        - シイラ科　Coryphaenidae
          - シイラ属　*Coryphaena*
            - シイラ　*Coryphaena hippurus*
        - タイ科　Sparidae
          - タイ科の一種　Sparidae gen. et sp. Indet.
          - マダイ属　*Pagrus*
            - マダイ　*Pagrus major*
        - ボラ科　Mugilidae
          - ボラ科の一種　Mugilidae gen. et sp. Indet.
        - サバ科　Scombridae
          - マグロ属　*Thunnus*
            - マグロ属の一種　*Thunnus* sp.
      - カレイ目　Pleuronectiformes
        - ヒラメ科　Paralichthyidae
          - ヒラメ科の一種　Paralichthyidae gen. et sp. Indet.
  - 爬虫綱　Reptilia
    - カメ目　Testudines
      - イシガメ科　Geoemydidae
        - イシガメ科の一種　Geoemydidae gen. et sp. Indet.
      - スッポン科　Trionychidae
        - スッポン属　*Pelodiscus*
          - スッポン　*Pelodiscus sinensis*
  - 哺乳綱　Mammalia
    - 哺乳綱の一種　ord., fam., gen. et sp. Indet.
    - 鯨偶蹄目　Cetartiodactyla
      - ウシ科　Bovidae
        - ウシ属　*Bos*
          - ウシ?　*Bos taurus* ?
    - ウマ目　Perissodactyla
      - ウマ科　Equidae
        - ウマ属　*Equus*
          - ウマ　*Equus caballus*
  - 鳥綱　Aves
    - キジ目　Galliformes
      - キジ科　Phasianidae
        - ヤケイ属　*Gallus*
          - ニワトリ　*Gallus gallus domesticus*
    - アビ目　Gaviiformes
      - アビ科　Gaviidae
        - アビ属　*Gavia*
          - アビ属の一種　*Gavia* sp.

表67　矢加部町屋敷遺跡出土の魚類、爬虫類、哺乳類、鳥類

番号	調査次・遺構	分類群	部位	部分・状態	左右	数量	備考
1	1次大溝2北部上層	スズキ属	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
2	1次土坑3	タイ科	方骨	関節部	左	1	
3	1次土坑3	ヒラメ科	前上顎骨	中央部	右	1	
4	1次土坑3	真骨類	不明	破片	？	1	
5	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨？	完形	？	1	
6	5次大土坑1南部上層	ボラ科	主鰓蓋骨	ほぼ完形	左	1	
7	4次大土坑5	スズキ属	角骨	ほぼ完形	右	1	
8	4次ピット83	マダイ	前頭骨	破片	—	1	
9	1次土坑3	真骨類	擬鎖骨	破片	？	1	
10	1次土坑3	真骨類	不明	破片	？	1	
11	1次土坑3	タイ科	主鰓蓋骨	関節部	左	1	
12	5次大土坑1南部上層	マグロ属	尾椎	椎体	—	1	
13	1次土坑3	シイラ	腹椎	ほぼ完形	—	1	
14	4次埋甕2	マグロ属	腹椎	椎体	—	1	
15	1次大溝2北部上層	ニワトリ	胸骨	破片	—	1	
16	1次土坑3	真骨類	間鰓蓋骨	完形	？	1	
17	1次土坑3	タイ科	腹椎	ほぼ完形	—	1	
18	4次土坑84	サメ類	椎骨	完形	—	1	
19	1次土坑3	ヒラ	主上顎骨	ほぼ完形	右	1	
20	4次土坑88	鳥綱	肩甲骨	関節部	右	1	
21	1次土坑3	タイ科	犬歯	先端欠損	？	1	
22	1次土坑3	タイ科	鱗	ほぼ完形	？	14	
23	1次土坑3	真骨類	鰭棘	ほぼ完形	—	1	
24	1次土坑3	真骨類	不明	破片	？	1	
25	5次大土坑1中層	マグロ属	尾椎	椎体	—	1	
26	1次大溝2北部上層	哺乳綱	頭蓋骨	破片	？	1	
27	1次大溝2北部上層	真骨類	鰓条骨	完形	左	1	大型
28	5次大土坑1	真骨類	鰓条骨	完形	右	2	大型，切創
29	1次大溝2北部上層	アビ属	足根中足骨	完形	左	1	
30	1次大溝2北部上層	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
31	4次茶褐色土落ち込み	ニワトリ	足根中足骨	ほぼ完形	右	1	
32	1次大溝2北部上層	鳥綱	足根中足骨	骨幹	右	1	
33a	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	左	1	
33b	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	左	1	
33c	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第1切歯	右	1	
33d	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第2切歯	右	1	
33e	5次ピット24	ウマ	上顎切歯	第3切歯	右	1	
34	1次大溝2北部	哺乳綱	不明	破片	？	1	大型獣
35	4次大土坑5	ニワトリ	上腕骨	完形	左	1	
36	4次大土坑2	ウマ	基節骨	前後不明	左	1	
37	1次大溝2北部	哺乳綱	寛骨	恥骨	右	1	大型獣
38a	1次大溝2北部	ウシ？	脛骨	骨幹	左	1	
38b	1次大溝2北部	ウシ？	長骨	骨端	？	1	
39	4次土坑88	ウマ	中足骨	近位端～骨幹	右	1	
40	4次土坑64	ウマ	肩甲骨	関節部	左	1	
41	4次土坑64	スッポン	腹甲	中腹骨板破片	右	1	
42	1次土坑3	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	右	1	
43	4次土坑90	スッポン	腹甲	下腹骨板破片	左	1	
44	5次大土坑南部中層	スッポン	背甲	破片	—	1	
45	1次大溝2北部	イシガメ科	腹甲	破片	—	4	

ての広い範囲で採取された貝類が持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。ただし、ドブガイ属とシジミ属は、１次地点の大溝２から出土しており、溝に自然に生息していた可能性も考えられる。

表68　矢加部町屋敷遺跡出土の貝類

番号	調査次・遺構	分類群	左右	数量	備　　考
1a	１次大溝２北部	マガキ	左	1	1bと癒着
1b	１次大溝２北部	マガキ	右	1	1aと癒着
2	１次大溝２北部	アゲマキ	右	1	半欠
3	１次大溝２北部上層	オニニシ	—	1	ほぼ完形
4	１次大溝２北部上層	アカニシ	—	1	ほぼ完形
5	１次土坑19	オオタニシ	—	1	完形
6	１次大溝２北部上層	バイ	—	1	完形
7	２次溝２	ツメタガイ	—	1	完形
8	１次大溝２北部上層	サルボウ	右	1	完形
9	１次大溝２北部中層	フネガイ科	左	1	完形，放射肋32条，放射肋上に顆粒，ミミエガイ類
10	１次大溝２北部中層	ドブガイ属	右	1	完形，タガイorヌマガイ
11	１次大溝２北部中層	シジミ属	右	1	完形，マシジミorヤマトシジミ
12	１次大溝２北部中層	アサリ	左	1	完形

魚類では、汽水域から内湾に生息するヒラ、スズキ属、ボラ科、沿岸に生息するヒラメ科、沿岸～沖合のマダイなどタイ科、外洋を回遊するシイラ、マグロ属などが見られた。魚類も比較的広い範囲で採取されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

爬虫類のうち、イシガメ科は、人により利用されていた可能性の他に、１次地点の大溝２に自然に生息していた可能性がある。スッポンは複数の土坑で見られ、食用にされていたと考えられる。

哺乳類では、ウシの可能性のある大型哺乳類とウマが見られ、これらは家畜として利用されたと考えられる。

鳥類では、ニワトリが家畜として利用されたと考えられる。また、野鳥としてはアビ属が見られた。アビ属は狩猟されたものが持ち込まれ、食料として利用されたと考えられる。

参考文献

金子浩昌(2001)食料残滓とその他の動物遺体．江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究事典」:393-401，柏書房．
松井章(2008)動物考古学．312p，京都大学学術出版会．
西本豊弘・松井章編(1999)考古学と動物学．210p，同成社．

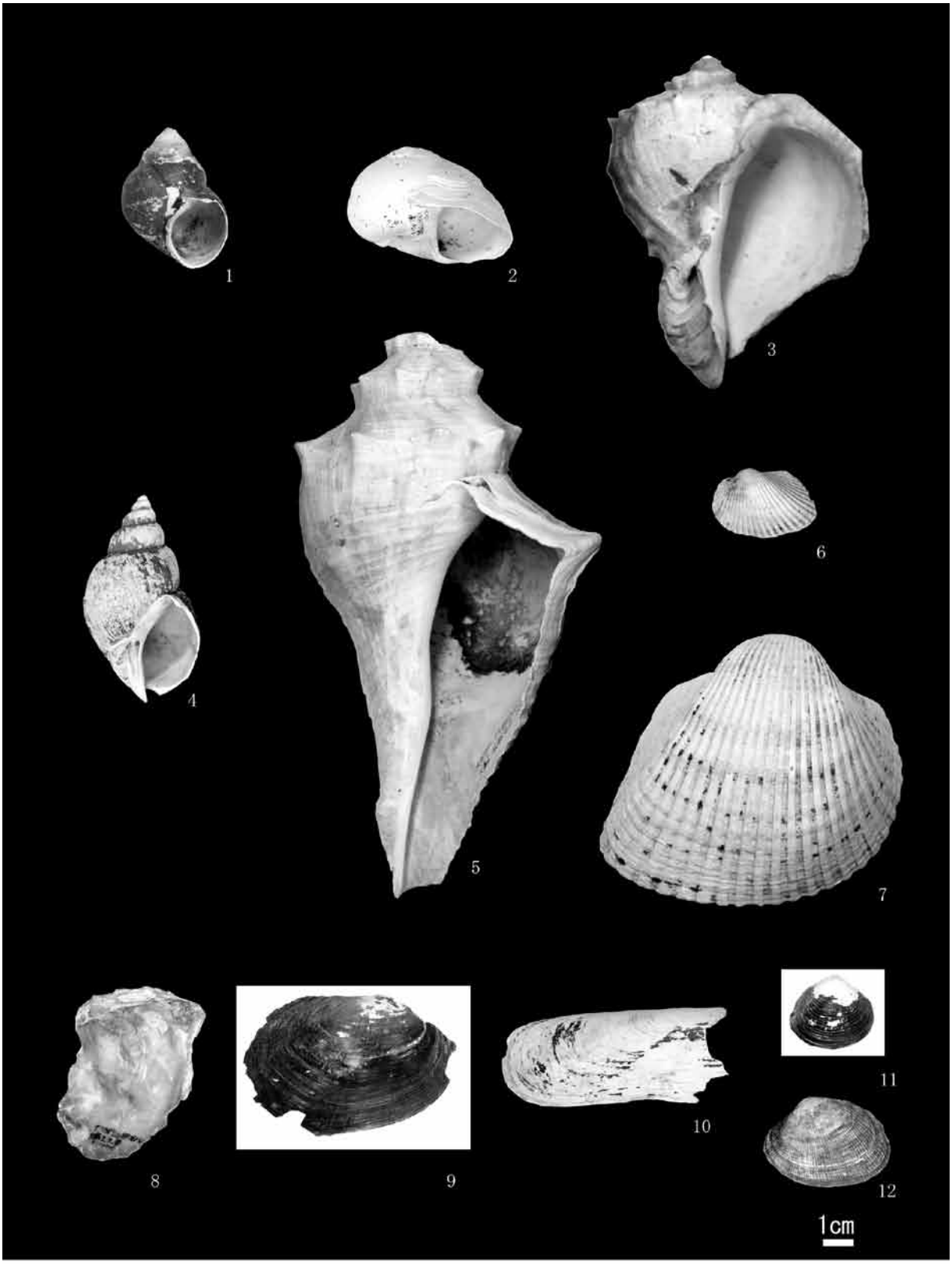


写真８　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体（１）

1. オオタニシ（土坑 19、No. 5）、2. ツメタガイ（溝 2、No. 7）、3. アカニシ（溝 2、No. 4）、
4. バイ（溝 2、No. 6）、5. オニニシ（溝 2、No. 3）、6. フネガイ科（溝 2、No. 9）、
7. サルボウ（溝 2、No. 8）、8. マガキ（溝 2、No. 1a）、9. ドブガイ属（溝 2、No. 10）、
10. アゲマキ（溝 2、No. 2）、11. シジミ属（溝 2、No. 11）、12. アサリ（溝 2、No. 12）

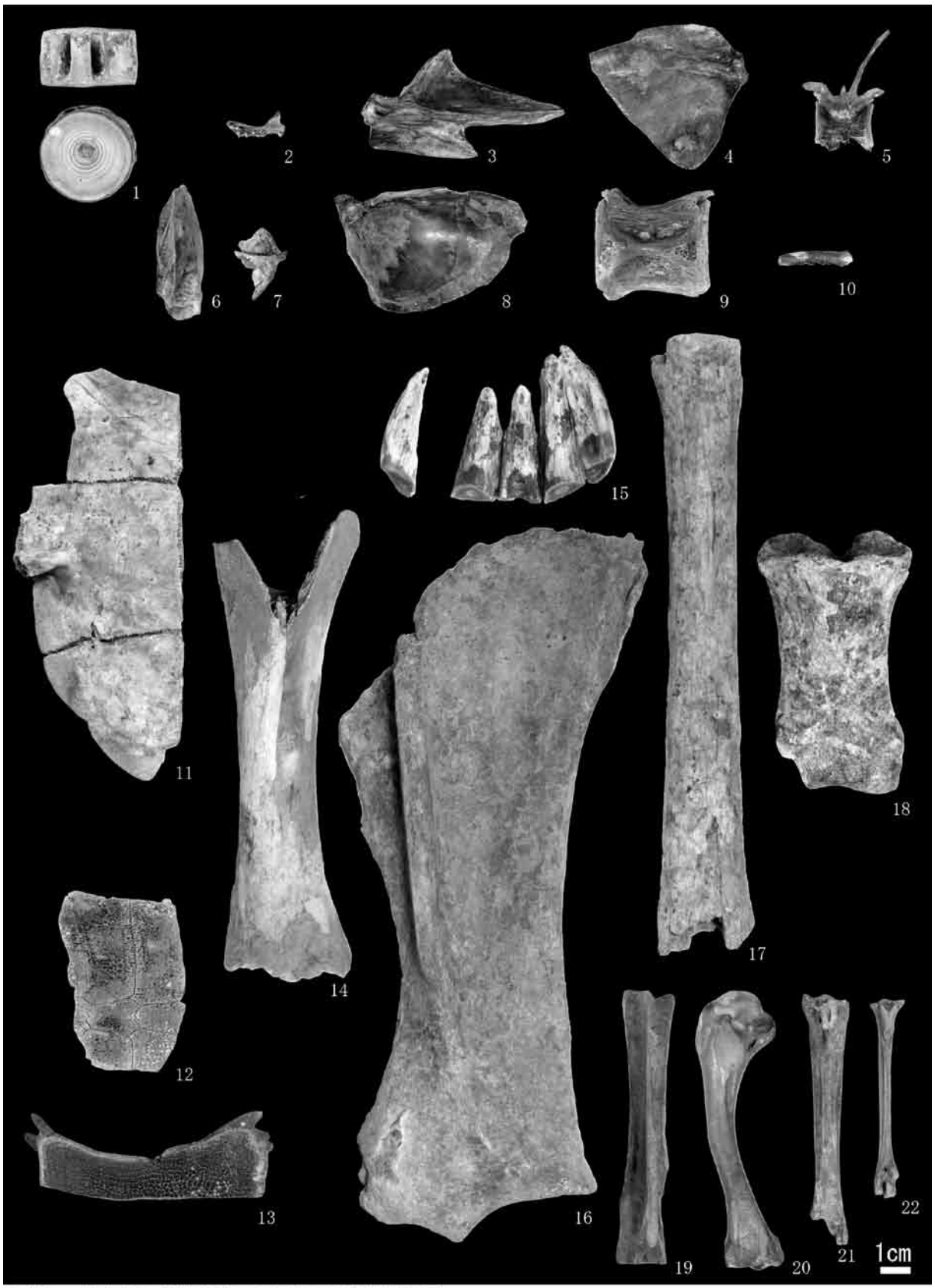


写真９　矢加部町屋敷遺跡から出土した動物遺体（２）

1. サメ類椎骨（土坑 84、No. 18）、2. ヒラ主上顎骨R（土坑 3、No. 19）、3. スズキ属角骨R（大土坑 5、No. 7）、4. スズキ属主鰓蓋骨L（大溝 2、No. 1）、
5. シイラ腹椎（土坑 3、No. 13）、6. マダイ前頭骨（ピット 83、No. 8）、7. タイ科主鰓蓋骨L（土坑 3、No. 11）、8. ボラ科主鰓蓋骨L（大土坑 1、No. 6）、
9. マグロ属尾椎（大土坑 1、No. 25）、10. ヒラメ科前上顎骨R（土坑 3、No. 3）、11. イシガメ科腹甲（大溝 2、No. 45）、12. スッポン背甲（大土坑、No. 44）、
13. スッポン腹甲（土坑 64、No. 41）、14. ウシ？脛骨L（大溝 2、No. 38a）、15. ウマ上顎切歯（ピット 24、No. 33）、16. ウマ肩甲骨L（土坑 64、No. 40）、
17. ウマ中足骨R（土坑 88、No. 39）、18. ウマ基節骨L（大土坑 2、No. 36）、19. ニワトリ胸骨（大溝 2、No. 15）、20. ニワトリ上腕骨L（大土坑 5、No. 35）、
21. ニワトリ足根中足骨R（大溝 2、No. 30）、22. アビ属足根中足骨L（大溝 2、No. 29）

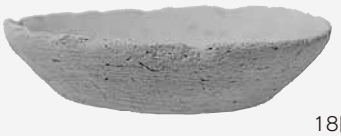
6図5

9図3

13図15

15図4

16図10


18図20

18図22

18図23

18図24

18図27

31図9

31図11

32図4

36図1

36図2

36図4

37図12

33図6-1･2

33図6-2上面

同上X線CT画像

37図2

37図7

5次調査出土土器・陶磁器

37図15

39図9

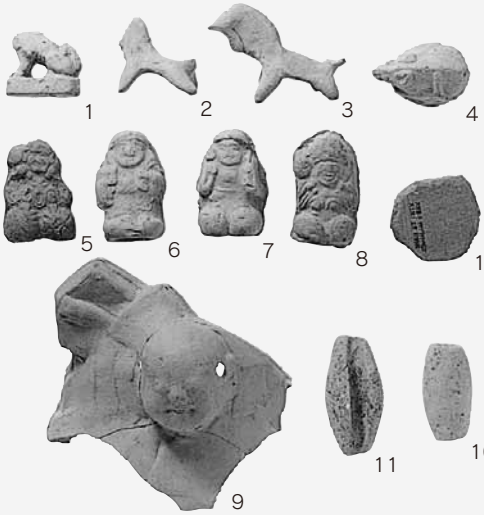
41図7

37図27

40図7

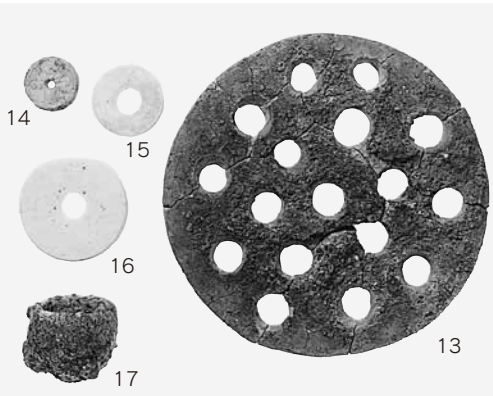
41図8

37図28



45図1～12

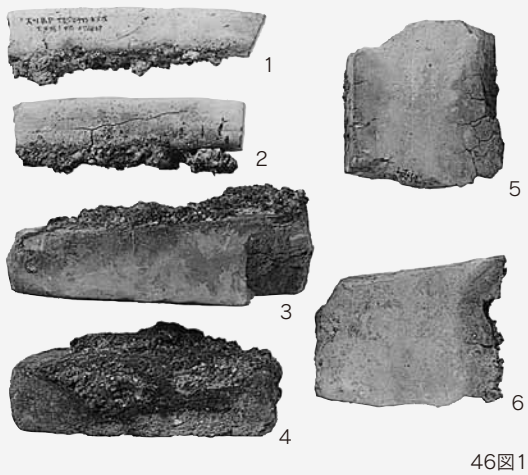
38図7



45図13～17

38図10

38図19

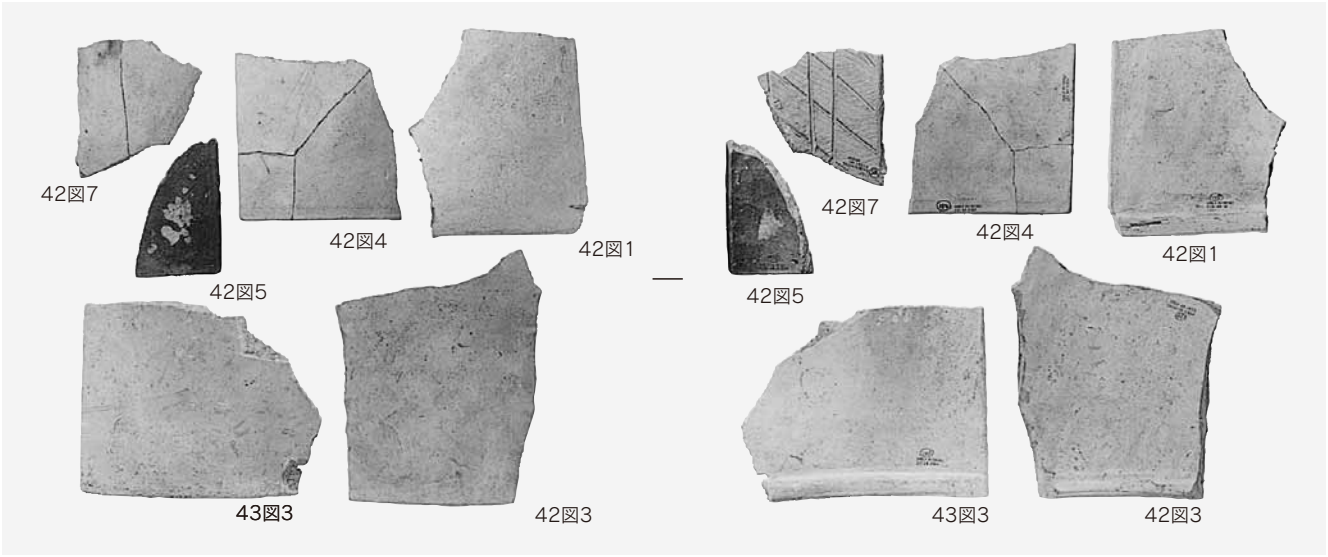


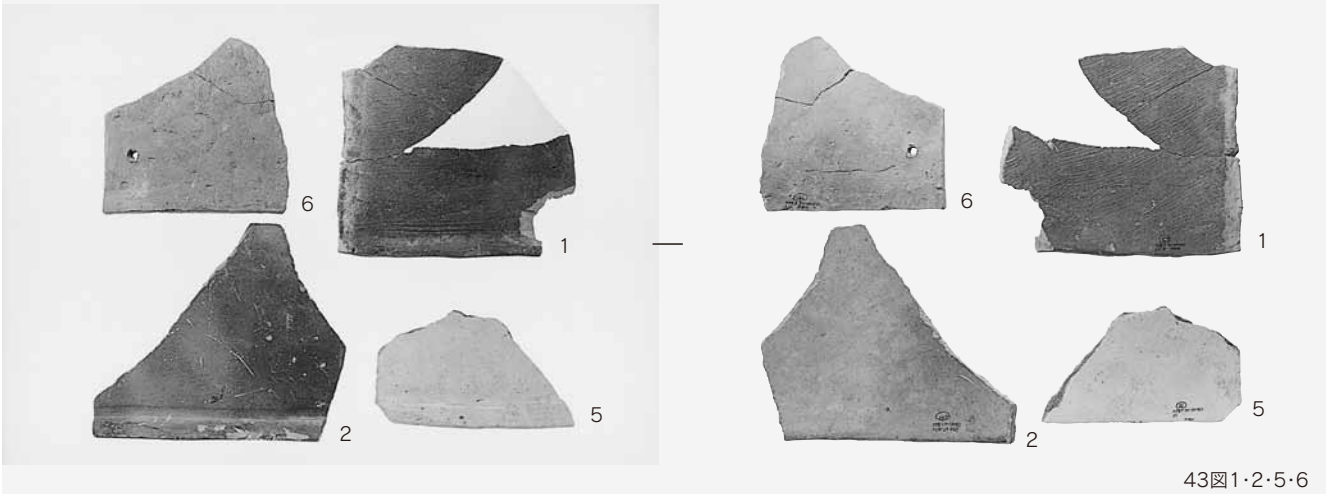
46図1～6

38図20

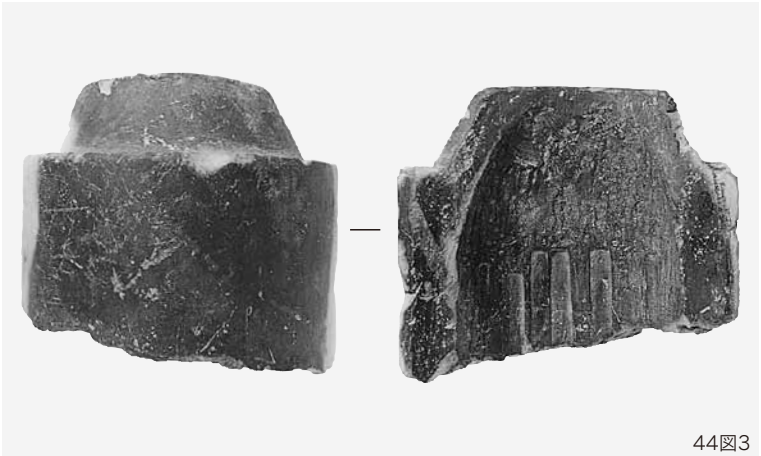
39図5

5次調査出土土器・陶磁器・土製品



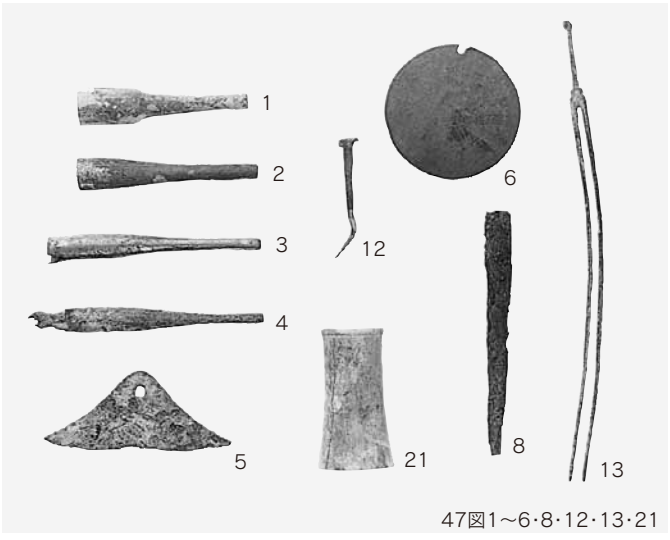


43図1·2·5·6

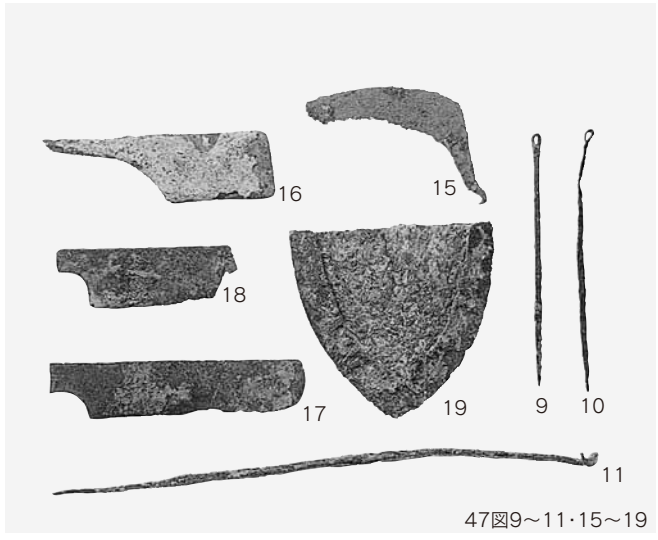


44図3

46図7～15



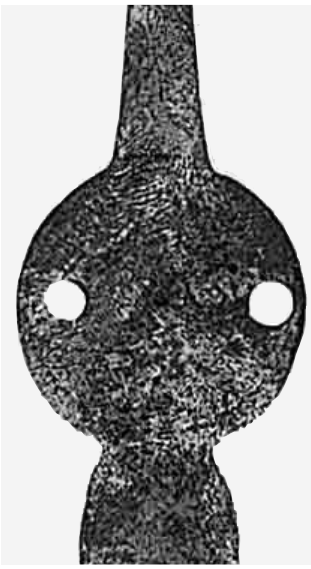
47図1～6·8·12·13·21



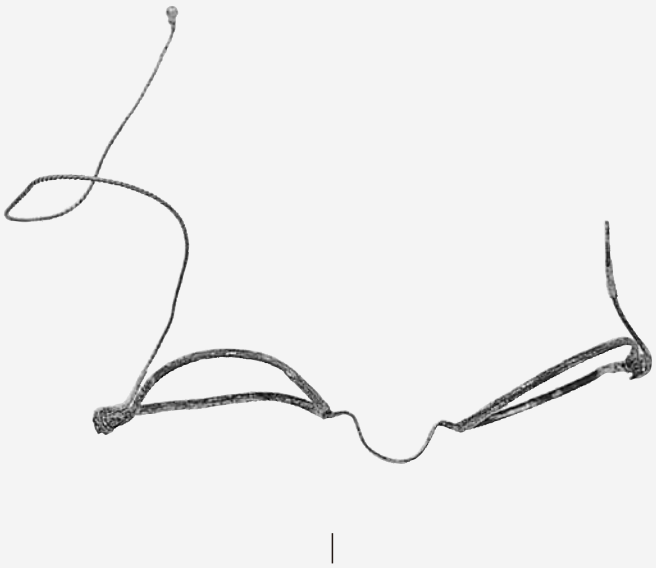
47図9～11·15～19

5次調査出土瓦・石製品

47図7



円板部拡大写真



47図20

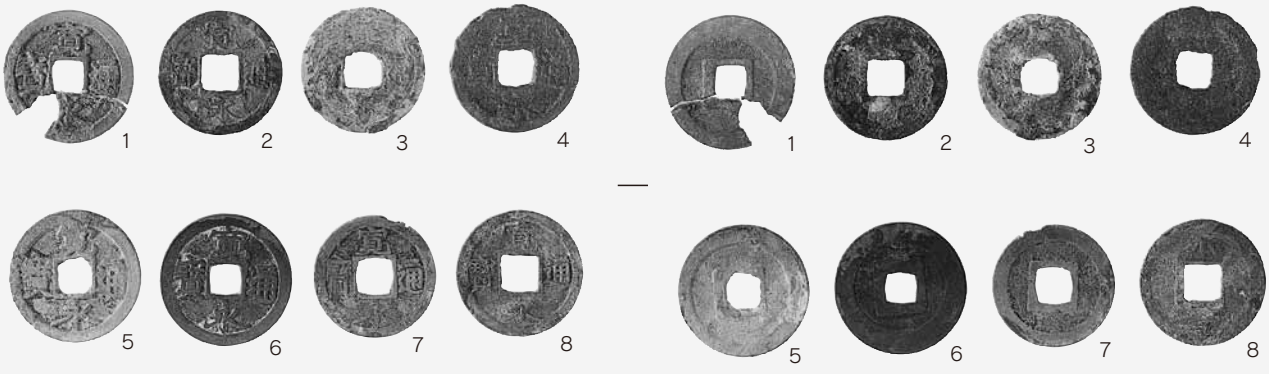


表　48図　　裏　48図

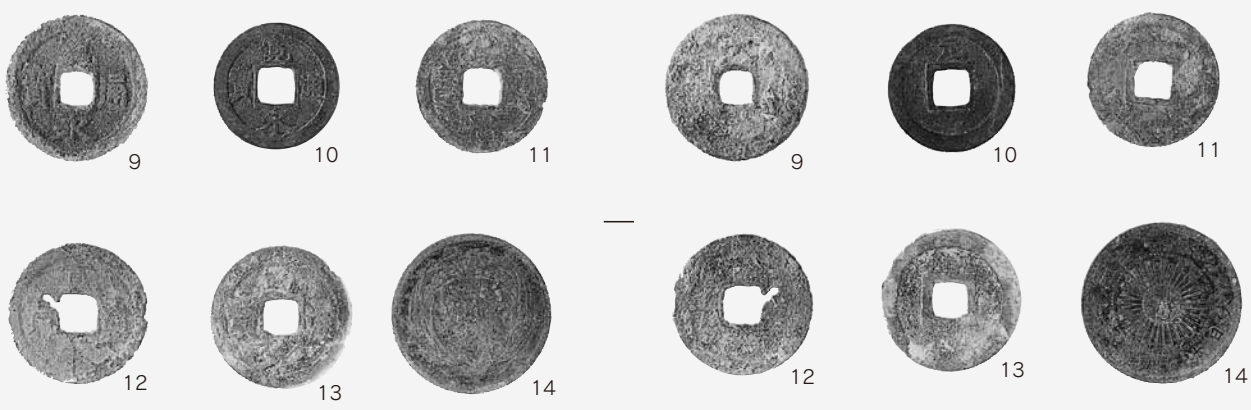
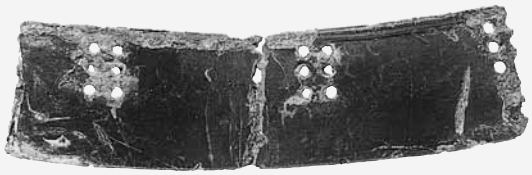
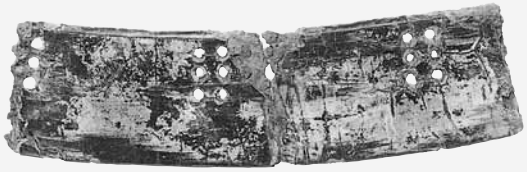


表　48図　　裏　48図

5次調査出土金属製品



47図14　表



47図14　裏

1

2

3

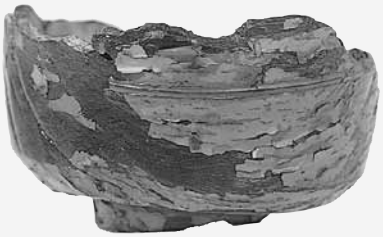
4

5

6

7

49図1

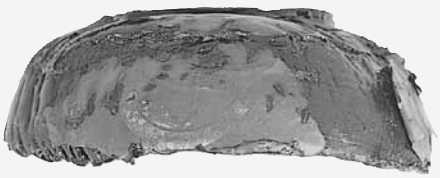


49図3

49図9

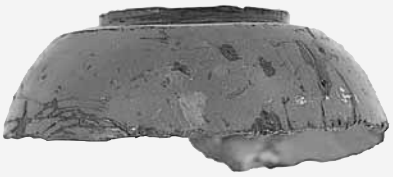
49図5

49図4



49図10

49図6



49図14

49図18

49図7

49図19

49図22

木簡1(52図1)　表

表　赤外線写真

木簡1(52図1)　裏

裏　赤外線写真

木簡2(52図2)　表

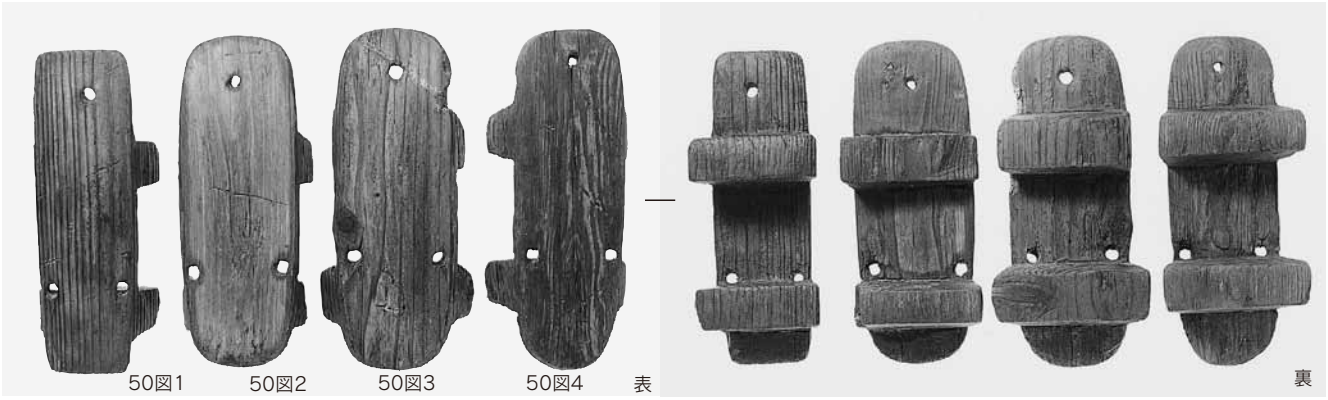
表　赤外線写真

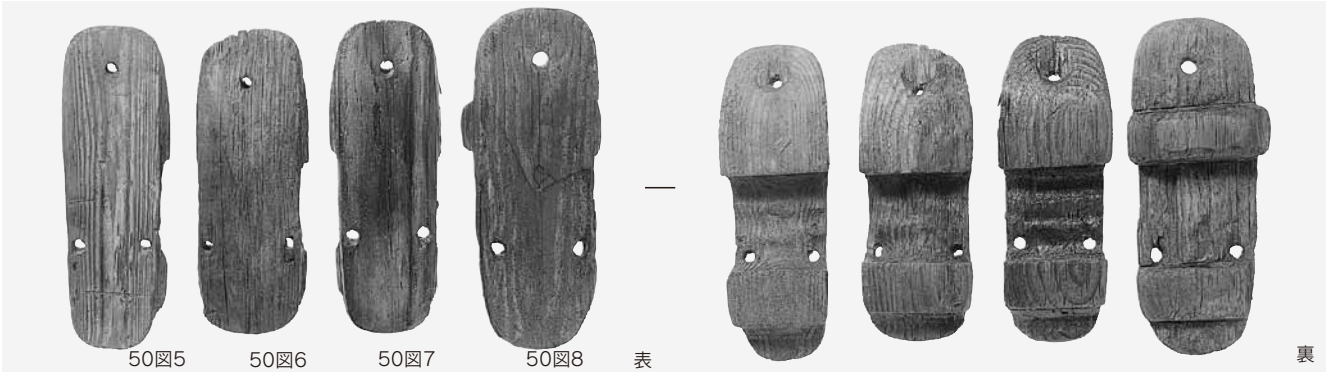
木簡2(52図2)　裏

裏　赤外線写真

1　木簡3

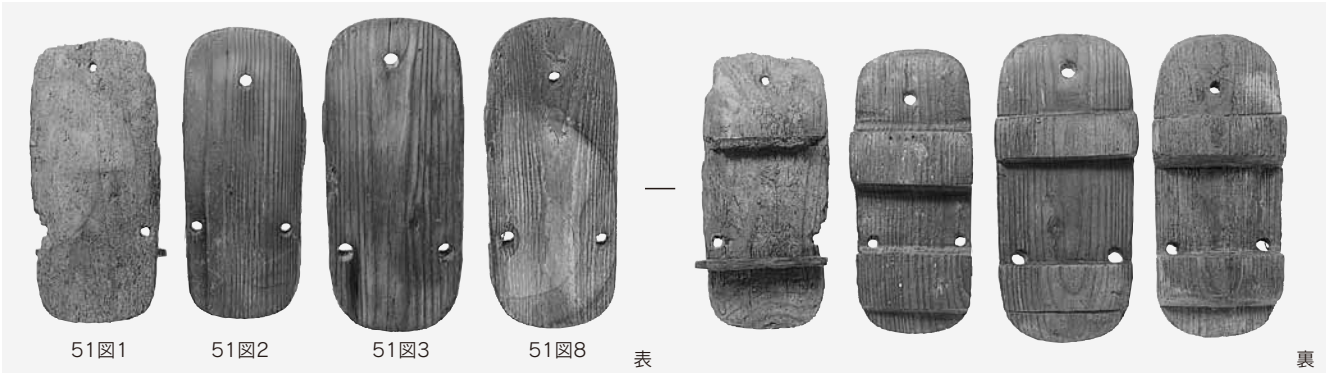
5次調査出土木製品1

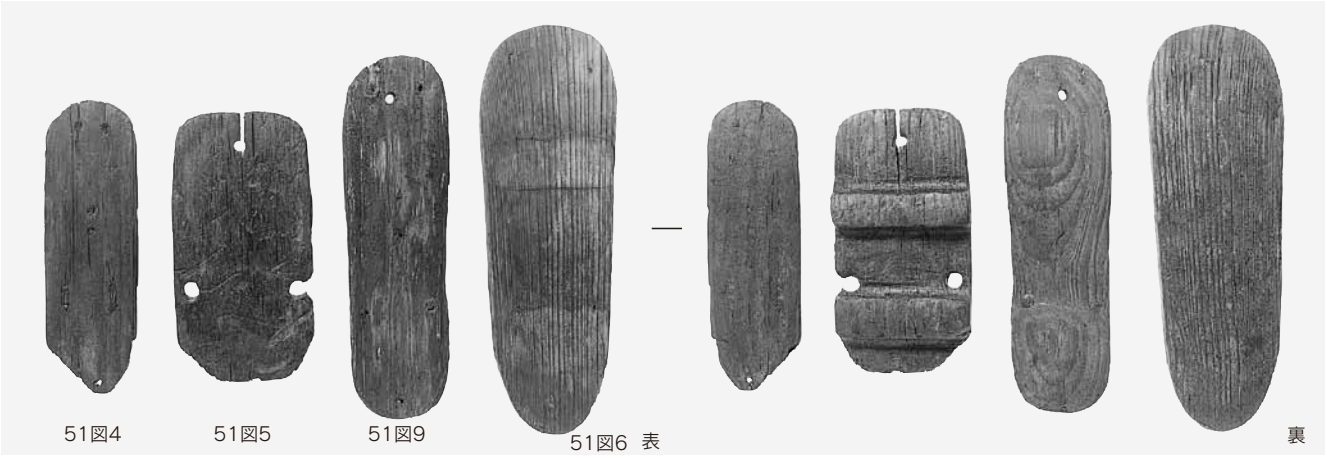

50図1　50図2　50図3　50図4　表　裏

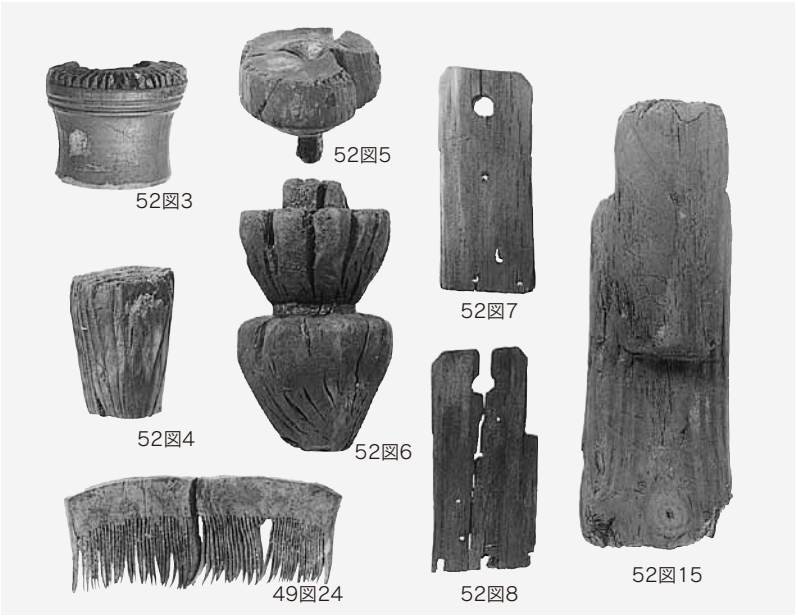

50図5　50図6　50図7　50図8　表　裏

50図4　50図10　50図11　50図12　表　裏

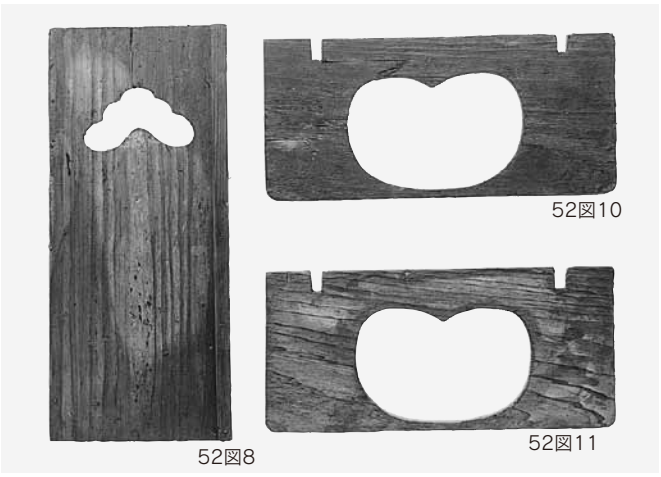
50図13　50図14　50図15　50図16　表　裏

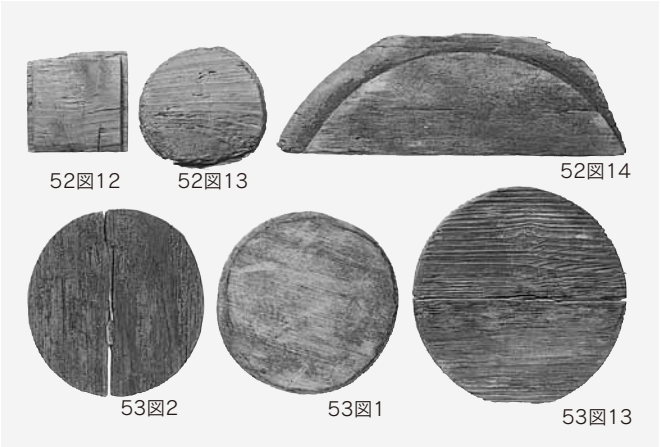

51図1　51図2　51図3　51図8　表　裏


51図4
51図5
51図9
51図6 表
裏


52図3
52図5
52図4
52図6
52図7
52図8
49図24
52図15

53図14


52図10
52図11
52図8


52図12
52図13
52図14
53図2
53図1
53図13

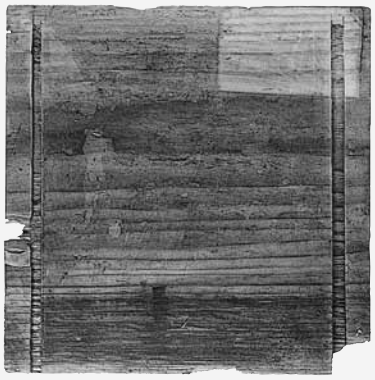
53図4
53図5
53図7
53図6

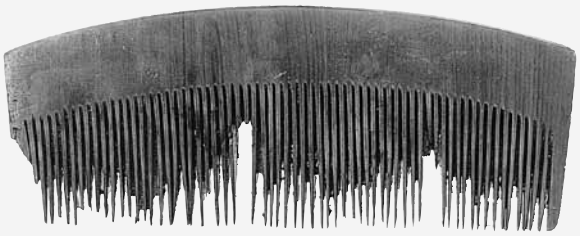
53図8

53図9

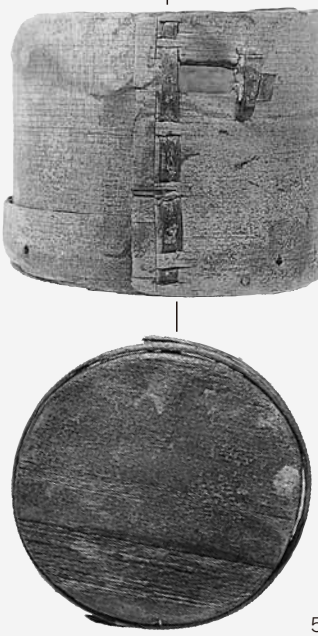
53図10

53図11 53図12 53図13

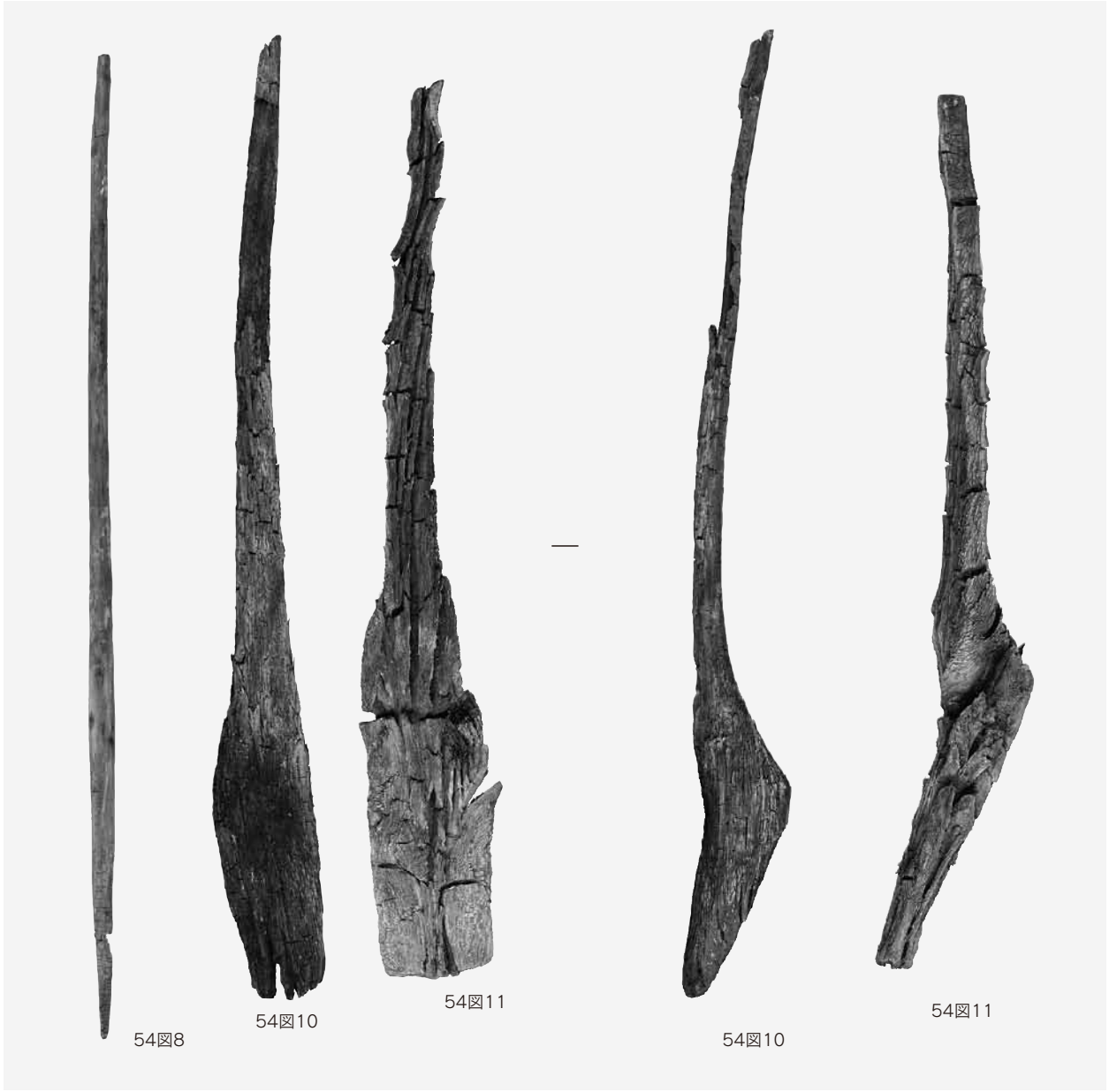

53図15


49図23

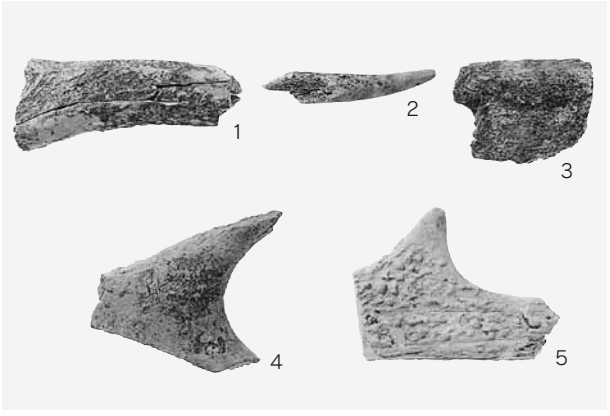
54図1


53図16

54図9
54図7
54図6
54図5
54図3
54図4
54図2


54図8
54図10
54図11
54図10
54図11

54図12


1
2
3
4
5

6

1．矢加部町屋敷遺跡遠景（西上空から）

2．1次調査区全景（上空から）

1．1号土坑（北東から）

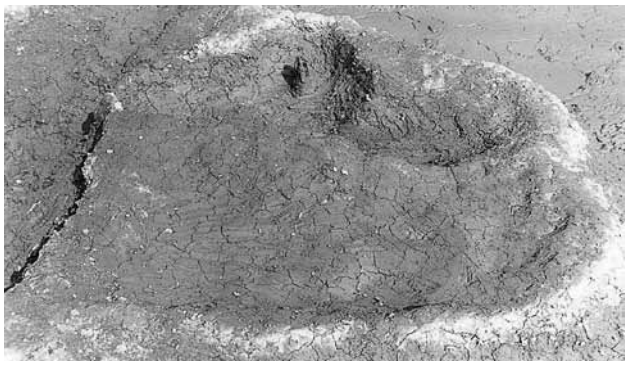
2．3号土坑（南東から）

3．4・33号土坑（北から）

4．4号土坑遺物出土状態（西から）

5．6号土坑（東から）

6．7号土坑（南東から）



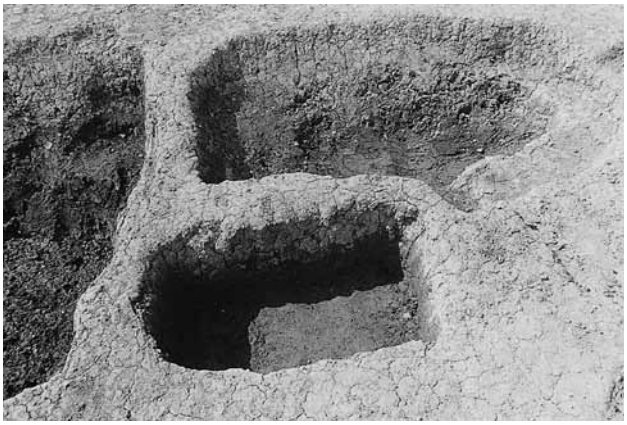
7．8号土坑（西から）

8．9号土坑（北東から）

9．11・22号土坑（北から）

10．12号土坑（北東から）

1．15・19・41号土坑（南から）

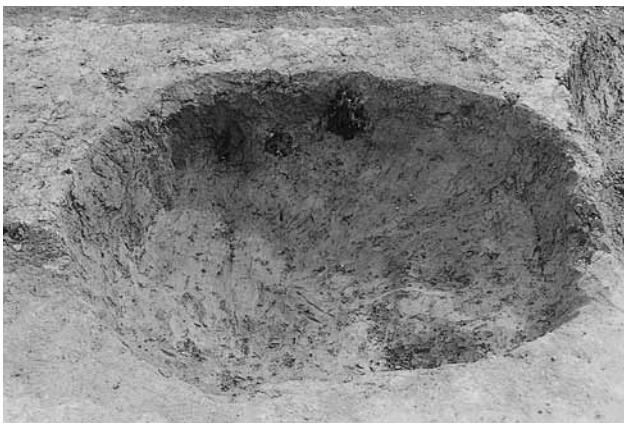


5．23・25号土坑（南東から）

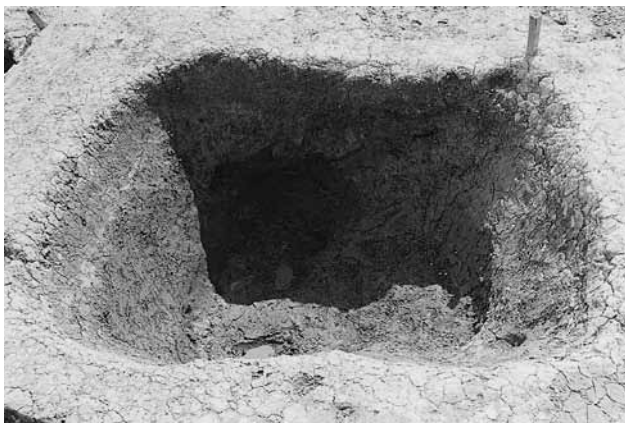
2．16号土坑（南西から）

6．23号土坑遺物出土状態（北西から）

3．16・17号土坑（北東から）

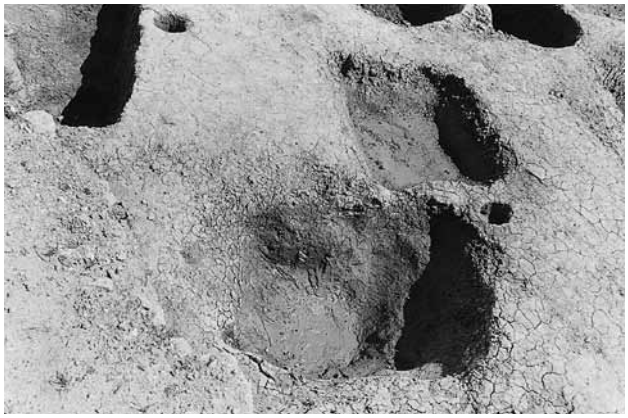


7．27号土坑（北から）



4．21号土坑（北東から）

8．28・35号土坑・１号井戸（西から）



1．30・39号土坑（北西から）

5．41号土坑（南西から）

2．31・36号土坑（西から）

6．37号土坑（南西から）

3．32号土坑（南西から）

7．２号廃棄土坑（南西から）

4．34号土坑（南から）

8．１号大土坑（北西から）

1．3号大土坑（北から）

3．2号大溝排水管（南西から）

2．4号大土坑（南から）

4．同上
（西から）

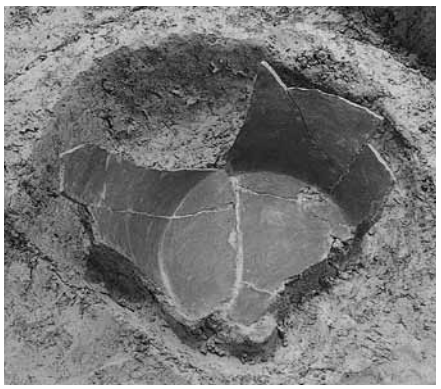
5．1・2号埋甕（南西から）

8．5号埋甕（北東から）

11．8号埋甕（南から）

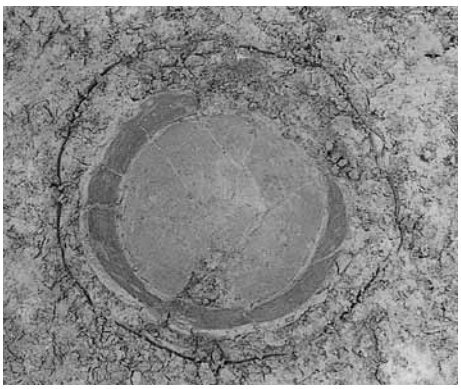
6．3号埋甕（南から）

9．6号埋甕（西から）



7．4号埋甕（西から）

10．7号埋甕（南から）



12．9号埋甕（北から）

69図4

71図4

73図4

73図15

76図13·14

76図17

76図18

81図2

81図4

81図11

81図12

82図10

83図7

83図22

83図12

83図19

85図11

95図14

95図20

96図1

96図4

96図6

96図10

1 次調査出土土器・陶磁器

96図16

96図21

106図3

106図5

106図7

106図9

107図7

107図8

107図9

107図10

107図11

107図15

114図9

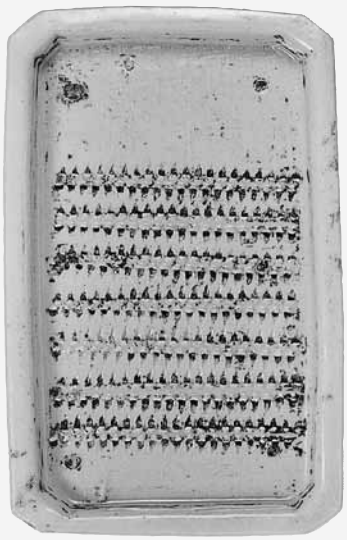
1

5

2

3

4


6

1次調査出土陶磁器

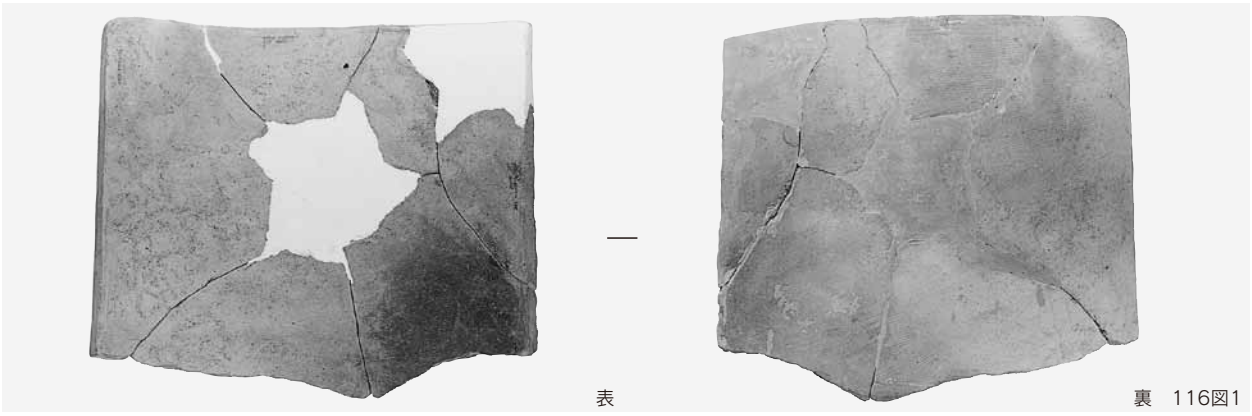


表　裏　116図1

表　裏　116図2

表　裏　117図1

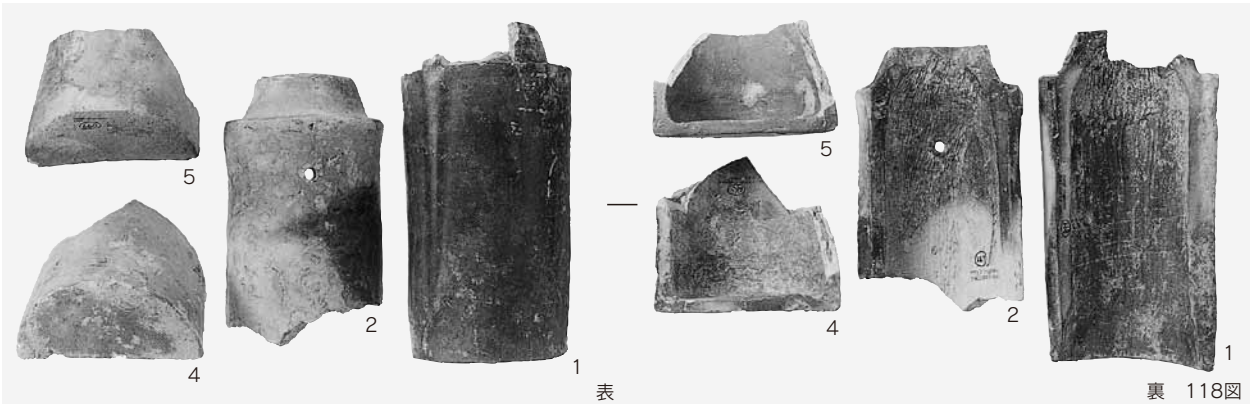
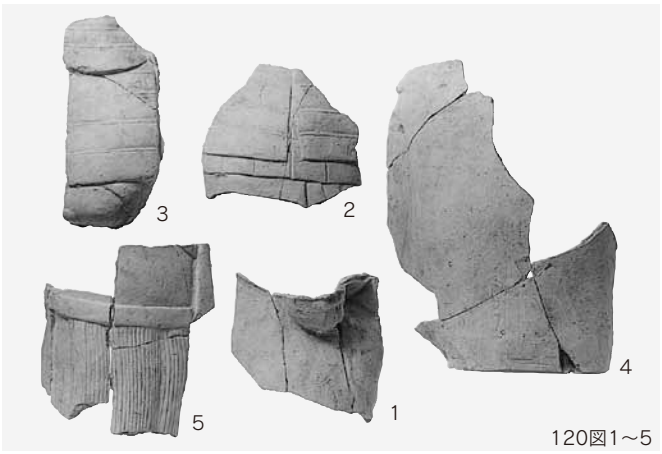


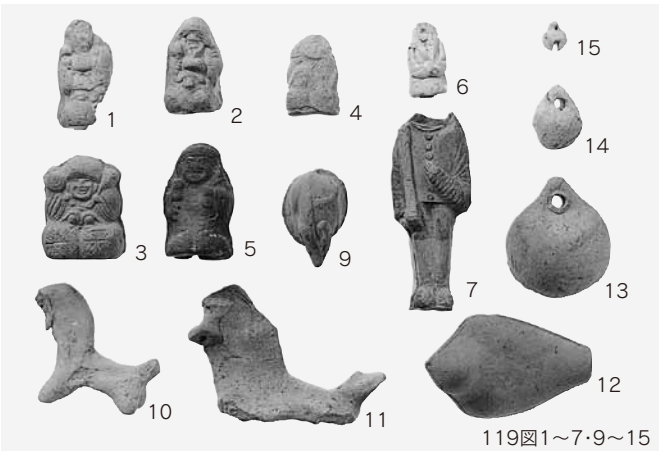
表　裏　118図

118図7　118図8

1次調査出土瓦



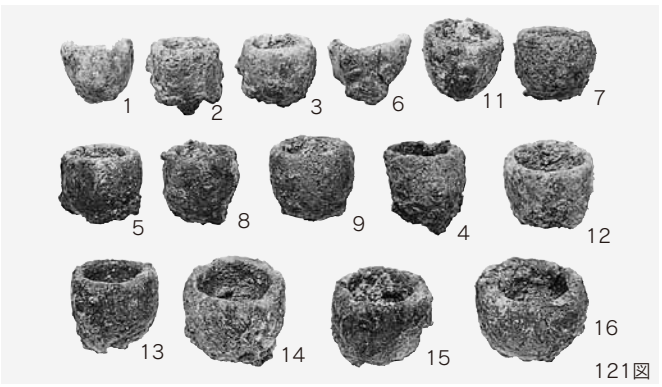
120図1～5



119図1～7·9～15

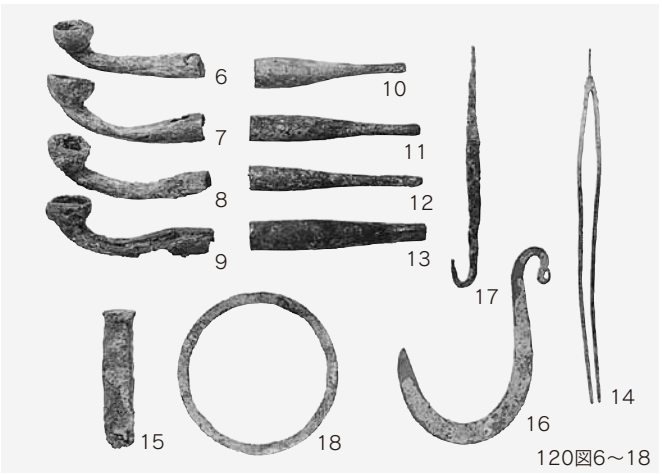
119図8

125図14

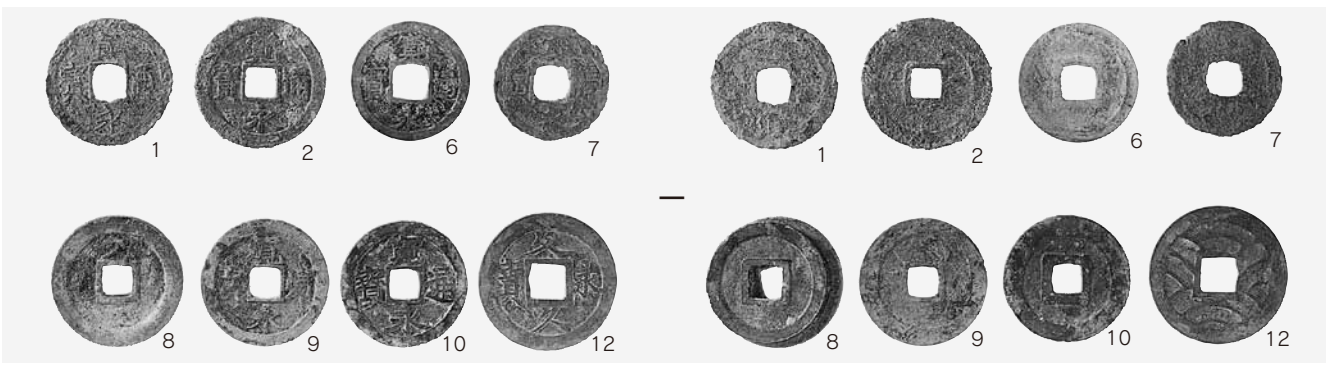


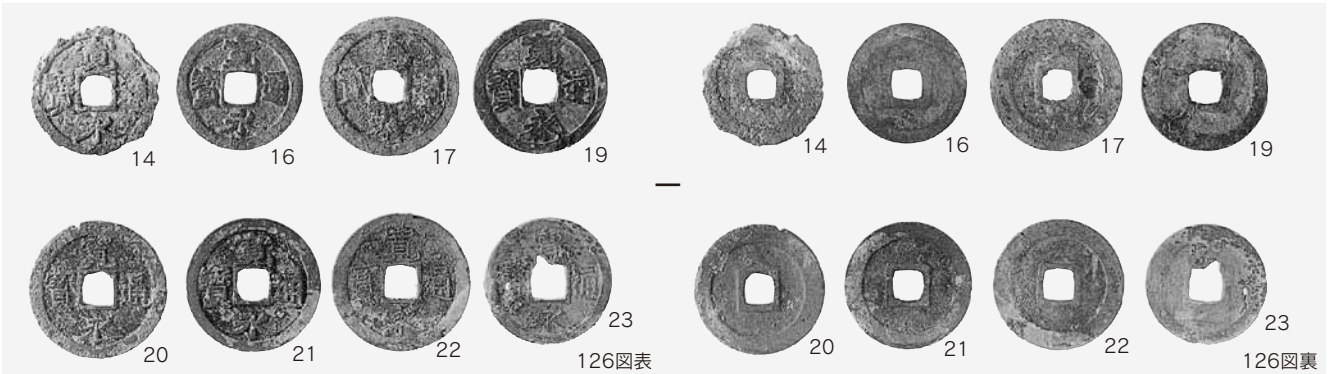
121図

125図15



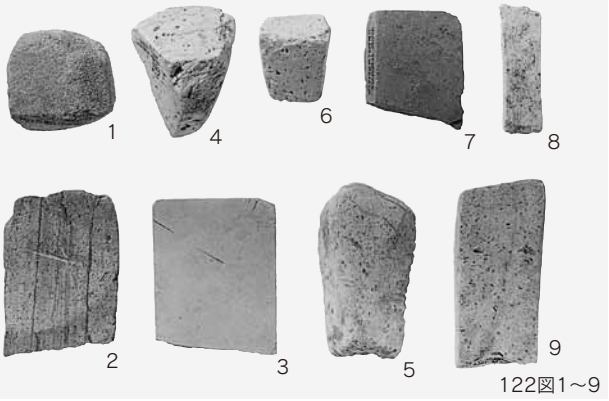
120図6～18



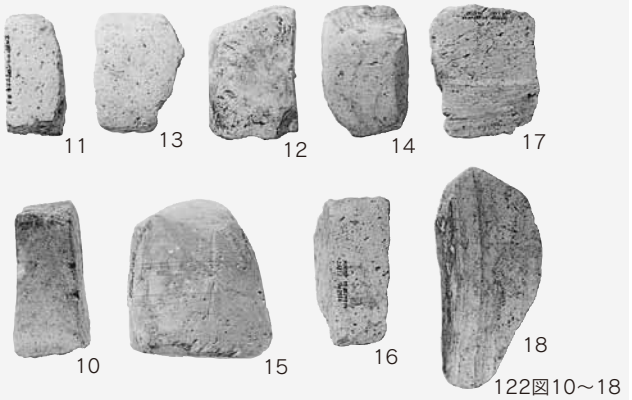


126図表 126図裏

1次調査出土土・金属・鹿角・貝製品

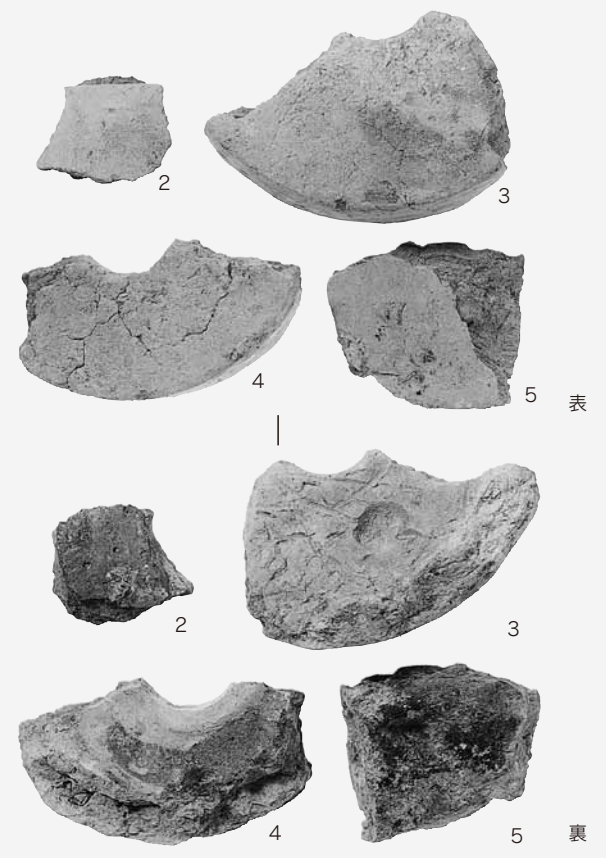


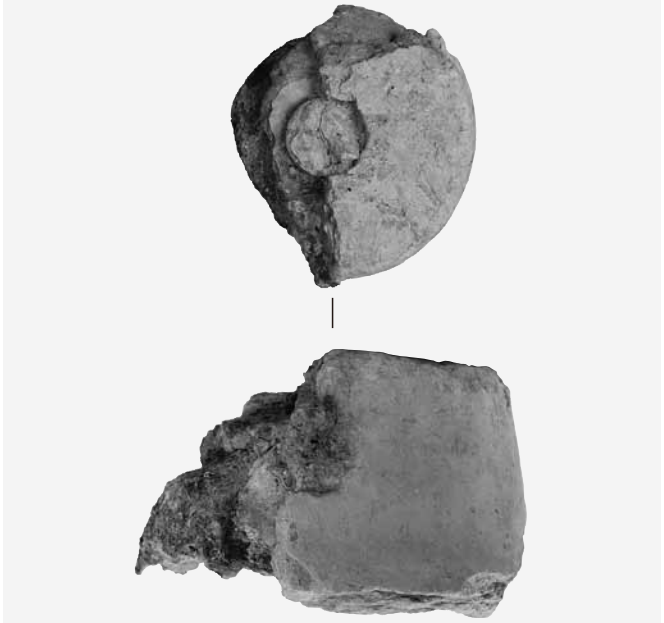
122図1～9

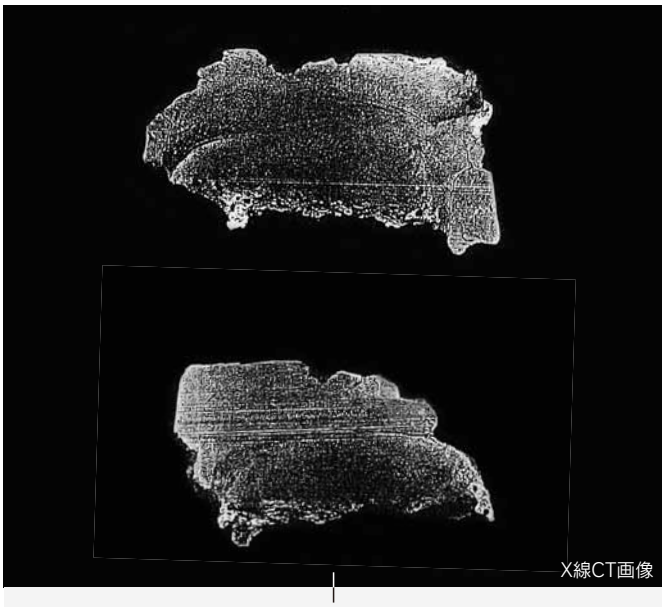


122図10～18

123図







1次調査出土石製品・鋳型

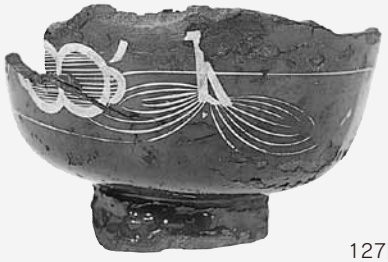
125図2～6

125図1･7～10

125図

127図1

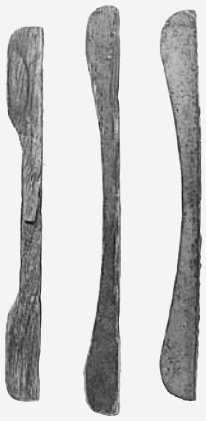
127図3

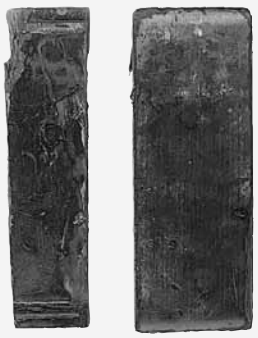

127図2

127図5

127図10

127図17


128図5 128図6 128図7


127図20 127図19

128図1～3

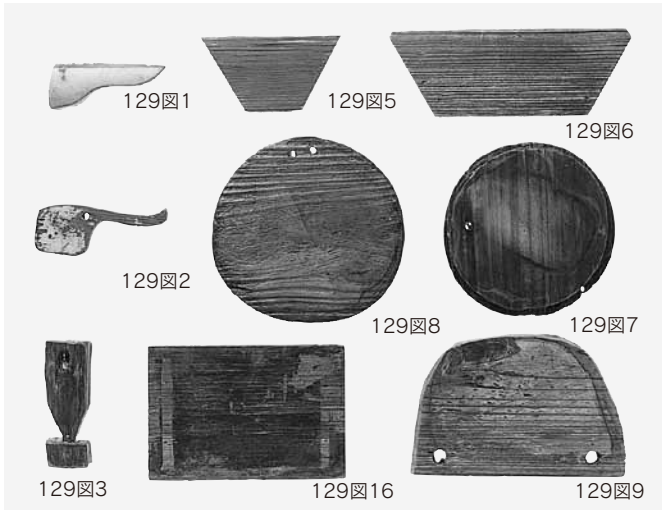
128図9

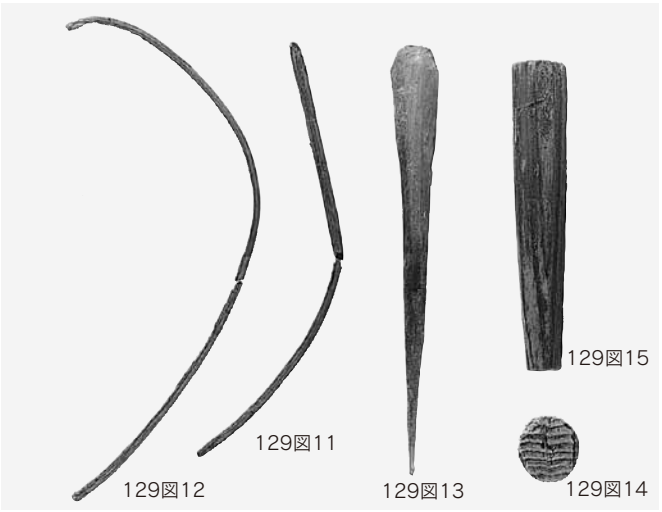
128図10

129図10

129図4

128図11


129図1
129図5
129図6
129図2
129図8
129図7
129図3
129図16
129図9


129図11
129図15
129図12
129図13
129図14

130図3
129図17
130図1
130図2
表
裏

130図4
130図5
表
130図5
130図4
裏

131図2
131図3
131図4
131図5
表
裏

131図6
131図7
131図8
131図9
表
裏

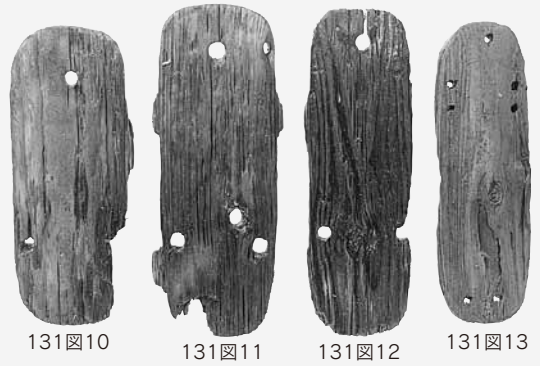

131図10　131図11　131図12　131図13

表　裏

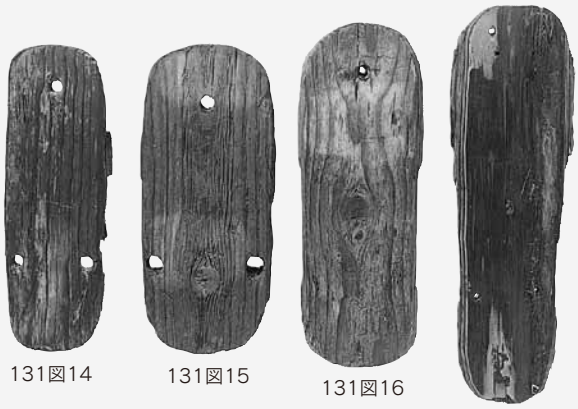

131図14　131図15　131図16　131図17

表　裏

131図18　131図19　132図1　132図2

表　裏

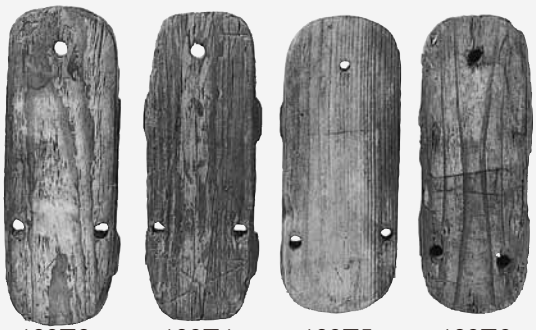

132図3　132図4　132図5　132図6

表　裏

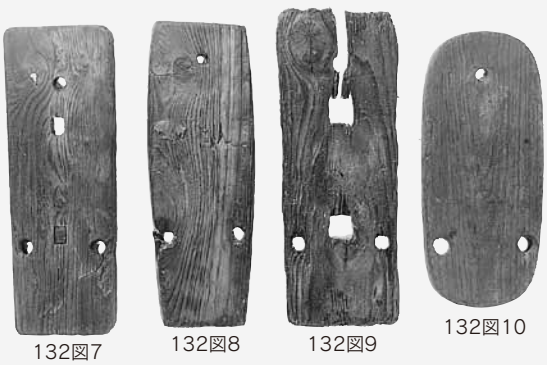

132図7　132図8　132図9　132図10

表　裏

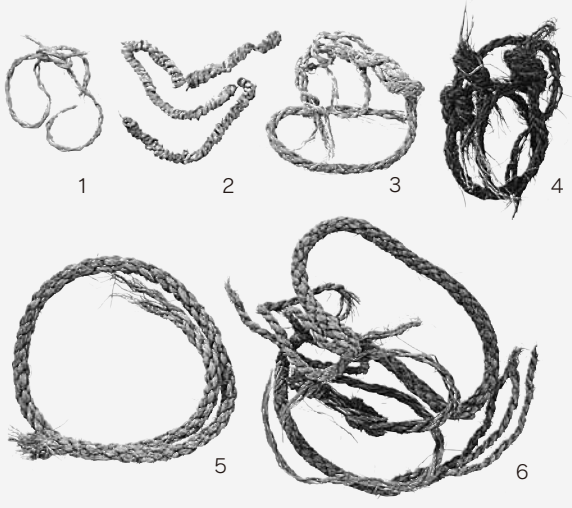
132図12　132図13　132図14　132図15

133図4　133図5

133図1

133図6

130図6



1次調査出土木製品3

蒲船津西ノ内遺跡

５．蒲船津西ノ内遺跡

本遺跡は柳川市の東部、福岡県柳川市三橋町大字蒲船津314－1～4・5A番地に所在する。調査面積は約900㎡である。発掘調査は、平成18(2006)年12月４日より重機による掘削から開始した。12月６日より作業員による掘削を開始した。平成19(2007)年１月15日、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行う。１月31日に埋め戻しを終了し、調査を完了した。

１）遺構（図版25）

遺跡は西鉄天神大牟田線の西側に展開する現在の集落の西端に位置する。遺跡の現況は水田であった。周辺には、低湿地の水はけの悪さを解消するため、この地域特有の掘割(クリーク)が縦横に掘られている。

遺構面は標高約2.0mである。工事用の客土および約30㎝の耕土の下に淡茶褐色土の遺構面が存在していた。遺構の埋土は暗茶灰色を中心とした土で、検出は比較的容易であった。しかし、低湿な遺構面であり、粘質な埋土の掘削には大きな労力を要した。

検出した遺構は、土坑２基、灰だまり１基、溝状遺構２条である。時期的には中世後期にほぼ限定される。

a）土坑

１号土坑（図版26、第149図）

調査区の北寄りに位置する。ほぼ円形の土坑である。東側半分を試掘トレンチによって削っているが、現存で長軸58㎝、短軸57㎝のほぼ円形を呈する。深さは約158㎝で、壁の立ち上がりは急である。埋土は暗茶灰色であった。形状から素掘りの井戸の可能性が高いと考えている。遺物は、土製鈴１点が出土しているのみである。

出土遺物(図版30、第151図)

１は土製の鈴である。全長4.2㎝、最大径3.2㎝である。手づくねでつくられており表面には指の圧痕が残る。上部の穿孔は焼成前に両側から行われている。鈴口の部分は鋭利な工具で開口されている。

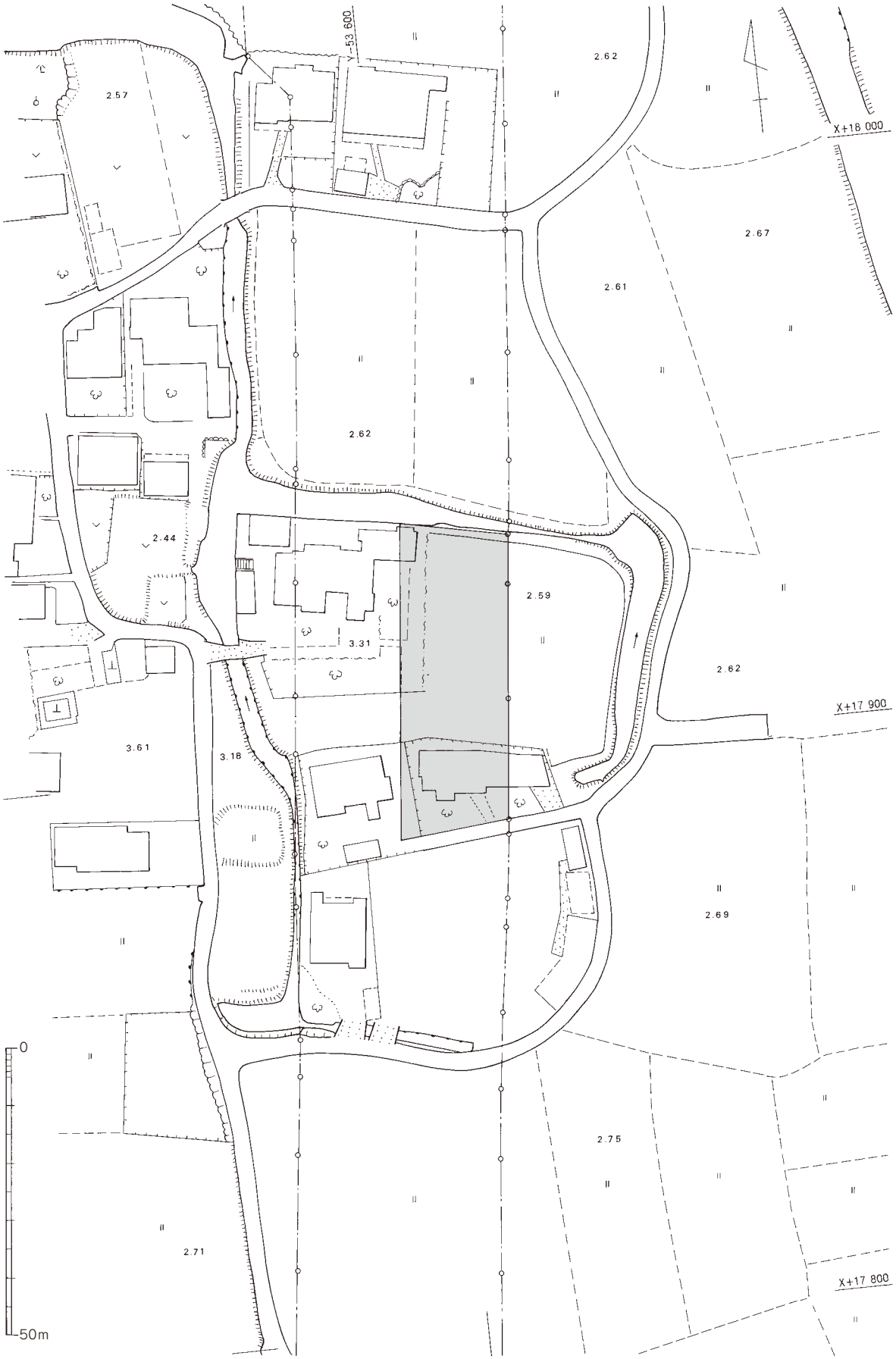
２号土坑（図版26、第149図）

調査区の中央やや東寄りに位置する。長軸65㎝、短軸58㎝のやや楕円形を呈する。深さは約26㎝で、壁の立ち上がりはやや急である。埋土は暗茶灰色であった。遺物は出土していない。

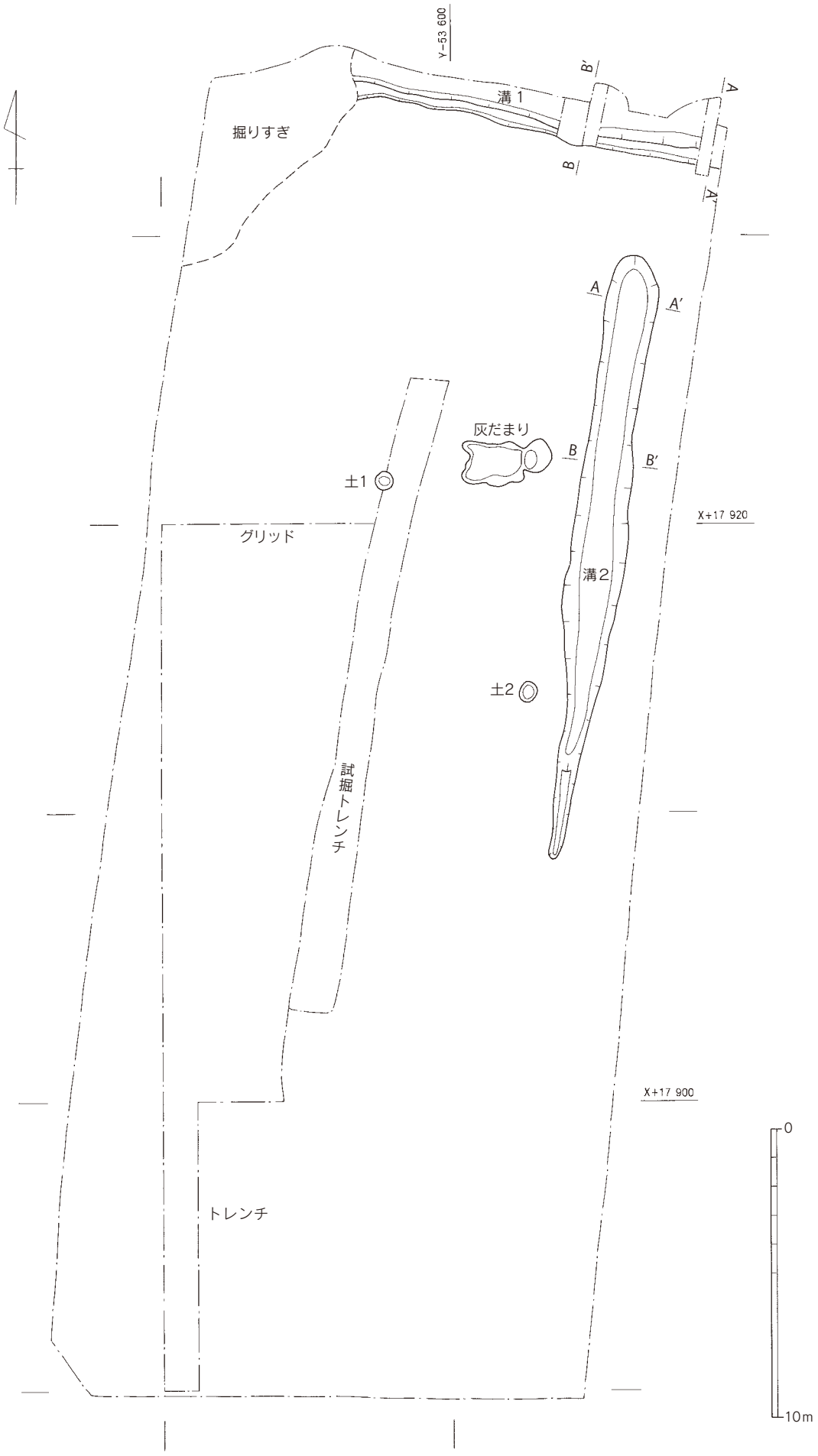
b）灰だまり

灰だまり（図版26、第149図）

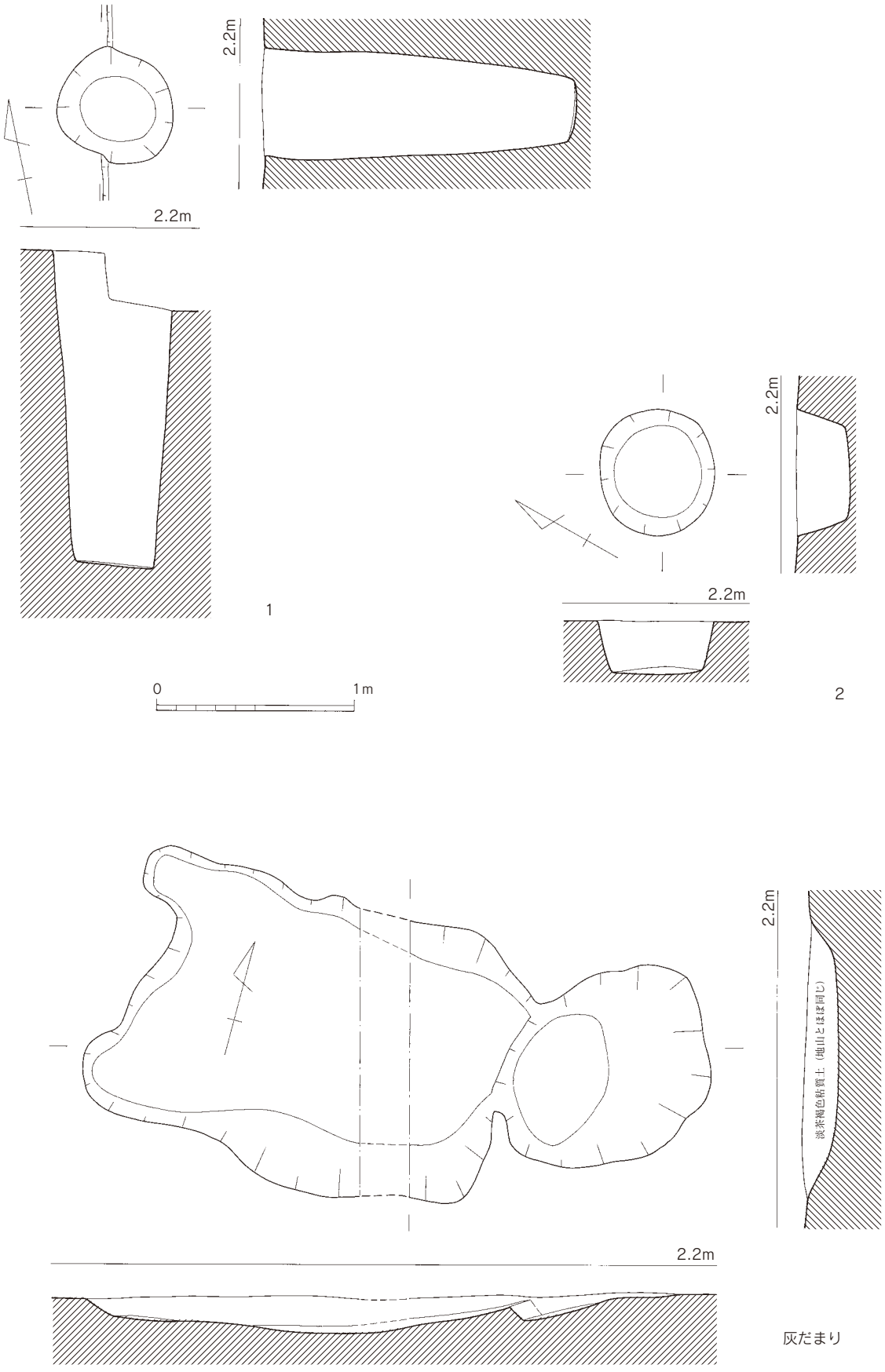
調査区の北寄りに位置する。長軸315㎝、短軸152㎝の不整形を呈する。深さは約17㎝で、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡茶褐色であり、地山の色と酷似する。底面および壁面には、暗灰色の灰が薄く堆積しており、灰の上にある埋土を剥ぐような状況で掘削を行った。人為的なものではなく、自然にできた凹凸のある地形に灰が堆積した可能性もある。遺物は出土していない。



第146図　蒲船津西ノ内遺跡調査区位置図(1/1,000)



第147図　蒲船津西ノ内遺跡遺構配置図(1/200)



第148図　1・2号土坑・灰だまり実測図(1/30)

c）溝状遺構

１号溝（図版27、第147・149図）

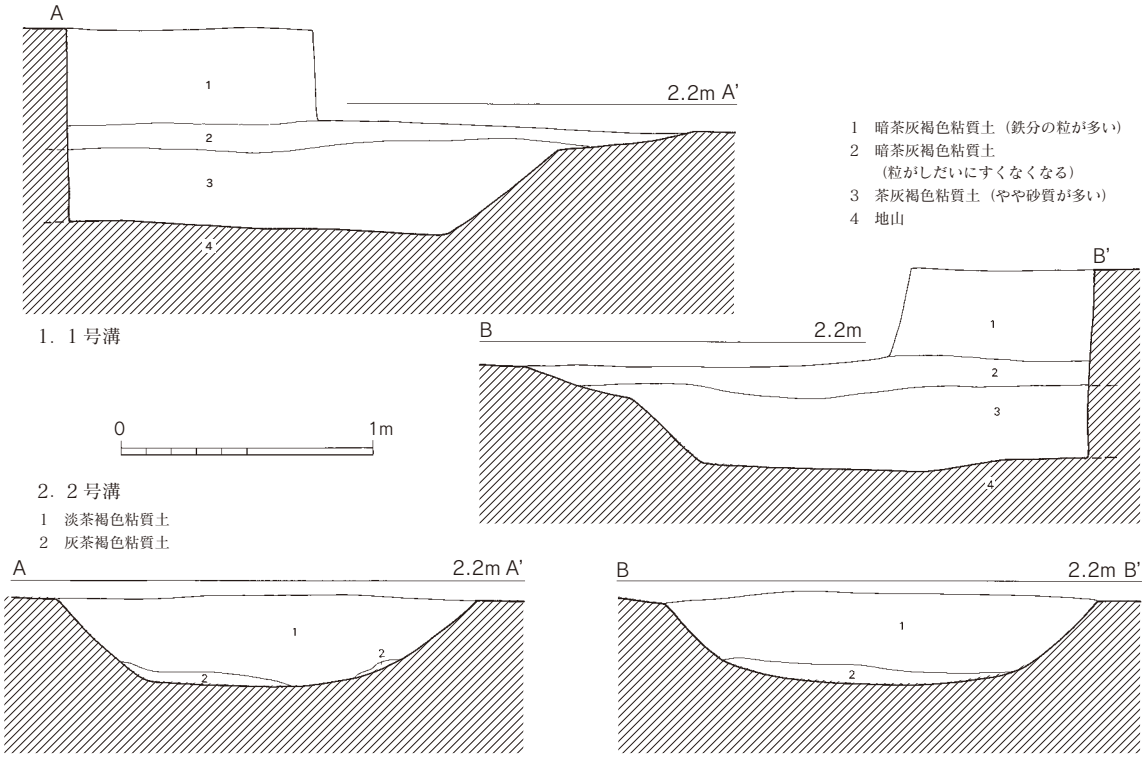
調査区の北端部に位置する。北側の立ち上がりは調査区外へ広がるため、溝の幅は不明である。深さは約40㎝である。東西方向に走る溝で、東側は調査区外へ延び、西側は重機による表土掘削時に掘りすぎてしまったため、失われた。埋土は暗茶灰褐色であった。遺物は出土していない。

２号溝状遺構（図版27・28、第147・149図）

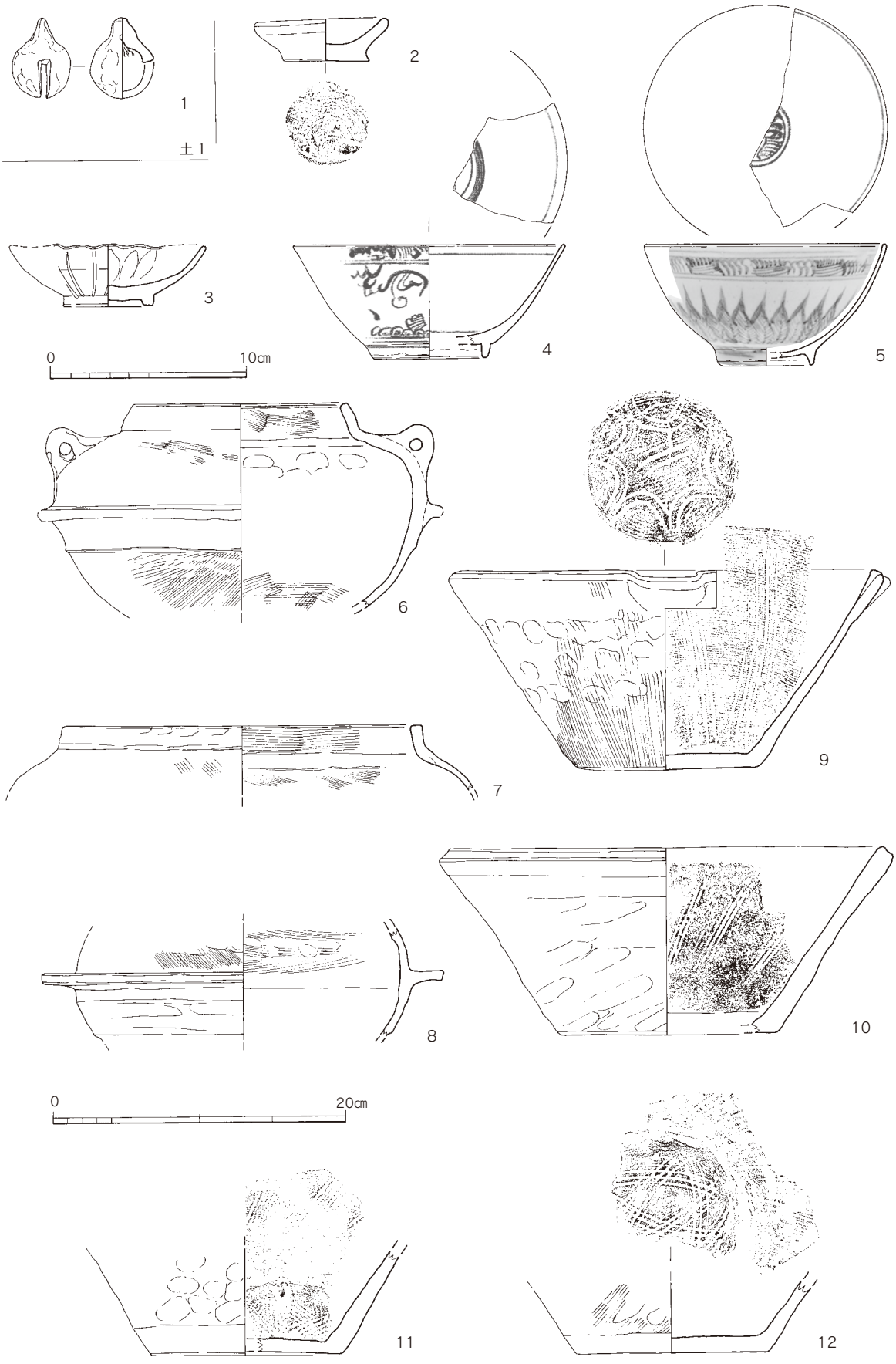
調査区の東寄りに位置する。南北方向に走る溝で、北側は端部が丸く終わる。幅は約160㎝、深さは約35㎝である。南側は次第に浅く、細くなり消えている。埋土は淡茶灰色であった。遺物は陶磁器、瓦質土器が出土している。

出土遺物（図版30、第150図）

２は土師皿である。器壁が厚く、底部も極めて厚い。内外面ともにナデ調整であり、底部は糸切りである。口径6.9㎝、底径4.2㎝、器高2.3㎝である。３は陶器の皿である。内外面を菊花状に型押ししている。釉色は黄灰色を呈する。口径10.2㎝、底径4.6㎝、器高3.1㎝である。４は青花である。いわゆる蓮子碗と呼ばれるもので、外面には雲状の文様と波状の文様が描かれる。見込みにも文様が描かれるが、図案は不明である。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径14.0㎝、底径6.0㎝、器高5.8㎝である。５も青花の蓮子碗である。外面には芭蕉文、内面には巻貝の文様であろうものが描かれている。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径12.4㎝、底径4.5㎝である。６は瓦質の茶釜である。口縁部がやや内傾し、肩の張る器形である。肩部の２箇所に環付が付く。胴部にはやや短めの羽が付く。内外面の調整は刷毛目である。肩部内面には圧痕が見られる。底部付近にはススが付着する。口径14.6㎝、胴部最大径28.0㎝である。７はやや大ぶりの釜の口縁部分である。わずかに



第149図　1・2号溝状遺構土層実測図（1/30）

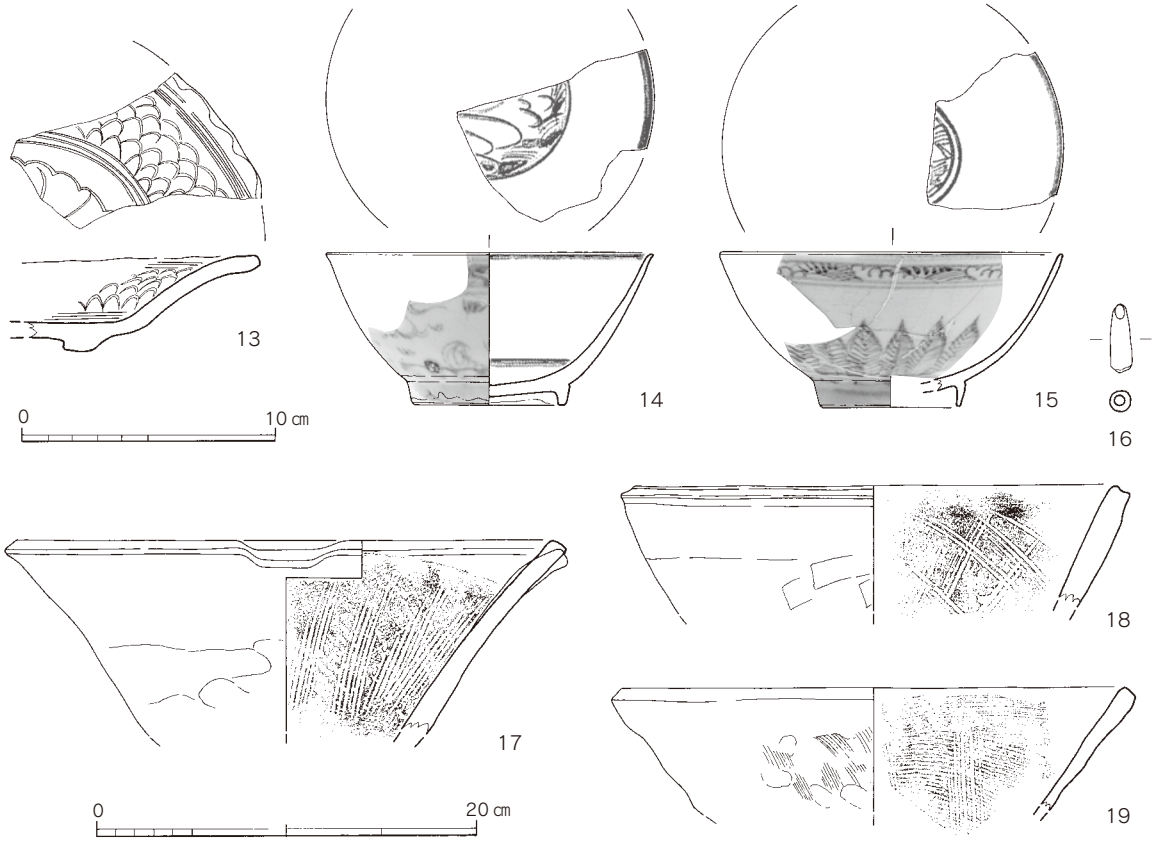


第150図　1号土坑・2号溝状遺構出土土器・陶磁器実測図(1～5は1/3、他は1/4)

内傾する口縁である。内外面の調整は刷毛目で、部分的に圧痕が残る。口径24.8㎝である。８は釜の胴部である。わずかに上を向いて羽が付けられる。内外面は刷毛目調整で、部分的にナデ調整である。内面には圧痕が残る。胴部最大径27.6㎝である。９～12は瓦質の擂鉢である。９はほぼ直線的に広がり、口縁部の一ヶ所に口を付ける。外面の調整は刷毛目で、内面は、刷毛目調整の後、擂目を施す。口径29.0㎝、底径12.4㎝、器高13.5㎝である。10の外面は強いナデ調整である。内面はナデの後、擂目を施す。内外面にススが付着する。口径30.8㎝、底径15.0㎝、器高12.8㎝である。11の外面は強いナデである。内面には擂目を施す。底径12.9㎝である。12の外面は刷毛目で、圧痕が残る。内面には擂目を施す。底径は13.1㎝である。

d）遺構面出土遺物（図版30、第151図）

13は青磁の皿である。腰折れで、口縁が大きく開く。口縁端部は削って輪花状に仕上げている。見込みは花文であろうか、内面には花弁を重ねたような文様が描かれる。釉薬は厚く施される。器高は3.8㎝である。畳付けおよび底面は露胎である。14は青花の蓮子碗である。外面には飛馬文と雲状の文様が描かれる。見込みには巻貝が描かれる。畳付け部分は露胎である。15世紀後半から16世紀前半であろう。口径13.0㎝、底径6.0㎝、器高6.0㎝である。15も蓮子碗である。外面には芭蕉文が描かれる。見込みの文様は不明である。畳付け部分は露胎である。口径13.5㎝、底径5.4㎝、器高6.2㎝である。16は素焼きの土錘である。直径0.9㎝である。表面の調整は不明である。17から19は瓦質の擂鉢である。17は口縁部に口を設けるものである。外面はナデ調整である。内面はナデ調整の後、擂目を施す。外面にはススが付着する。口径30.0㎝である。



第151図　遺構面出土土器・陶磁器実測図（13～16は1/6、他は1/4）

18の外面はナデ調整である。内面は格子状に擂目を施す。口径26.8㎝である。19の外面は刷毛目調整である。部分的に圧痕が残る。内面は刷毛目調整で擂目を施している。口径は27.5㎝である。

2）小結

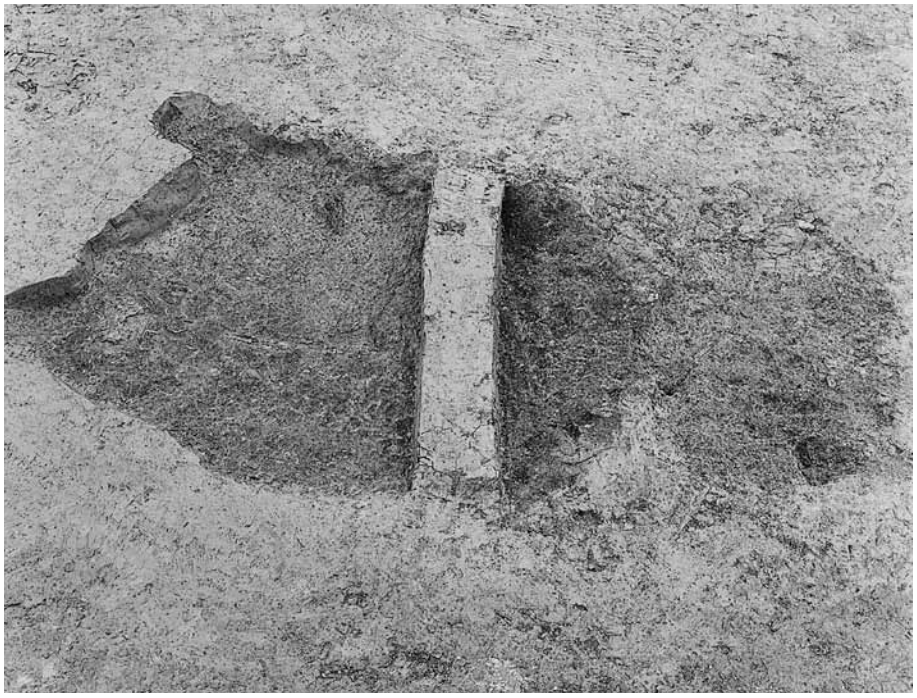
本調査区では、土坑２基、灰だまり１基、溝状遺構２条を検出した。遺構の希薄さから今回の調査区は遺跡の縁辺部と考えられる。現在の集落は調査区の西側に展開しており、遺跡の本体も、現集落の下に広がるものと考えられる。今後の調査に期待したい。

1．蒲船津西ノ内遺跡全景
（西から）

2．同上全景（北から）

1．1号土坑（東から）

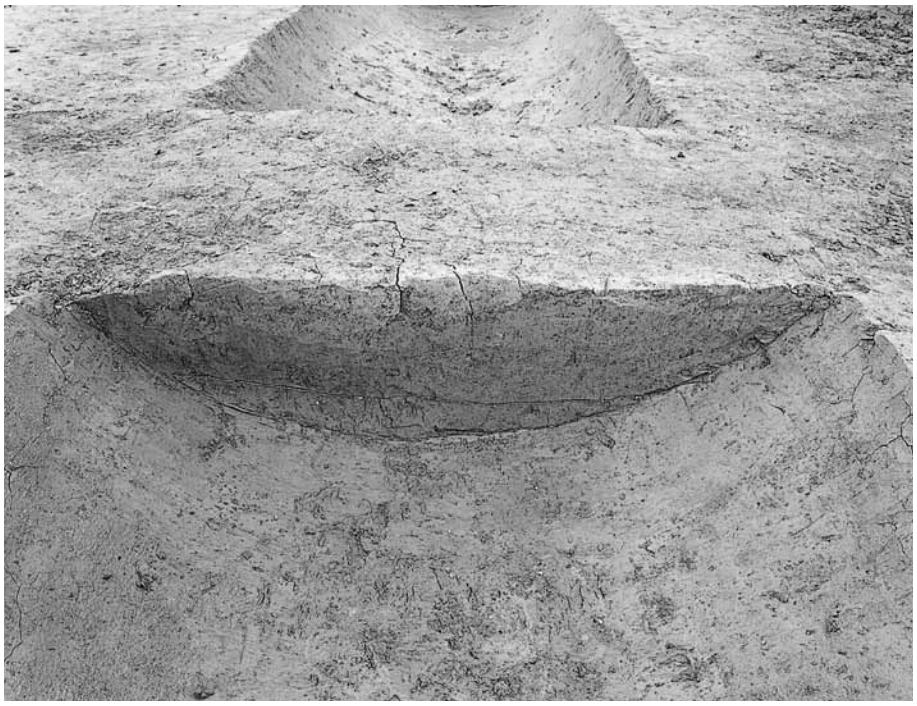
2．2号土坑（南から）



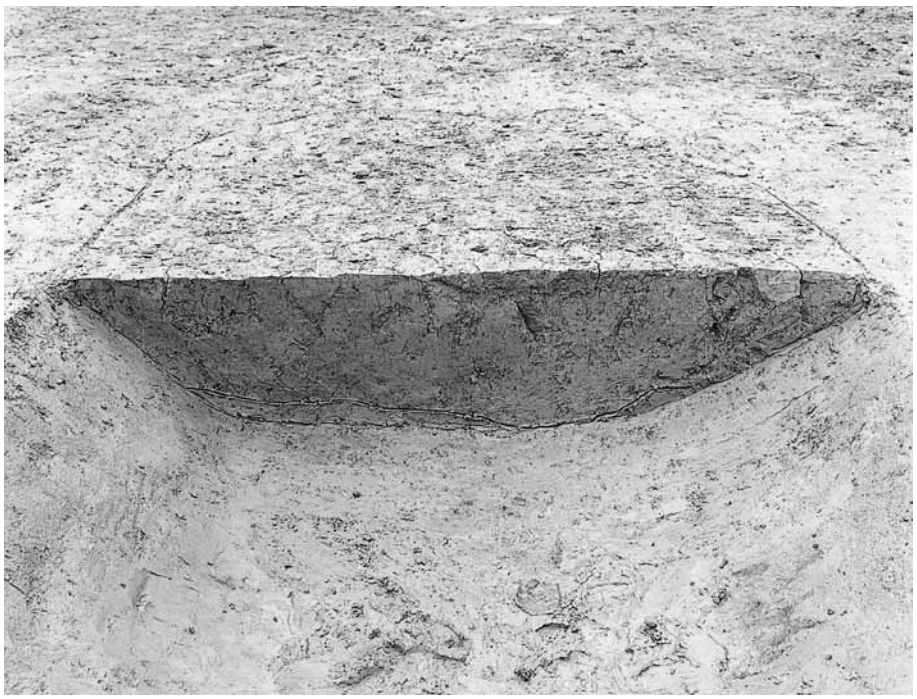
3．灰だまり（南から）

1．1号溝状遺構（東から）

2．1号溝状遺構（西から）



3．2号溝状遺構（南から）



1．2号溝状遺構（南から）

2．西壁土層（東から）

3．西壁土層（東から）

1．トレンチ（北東から）

2．トレンチ（南から）

3．全景（南東から）

150図1

150図6

150図1

150図9

150図2

151図14

150図4

151図15

150図5

151図16

1号土坑、2号溝状遺構、遺構面出土土器

蒲船津水町遺跡

6．蒲船津水町遺跡

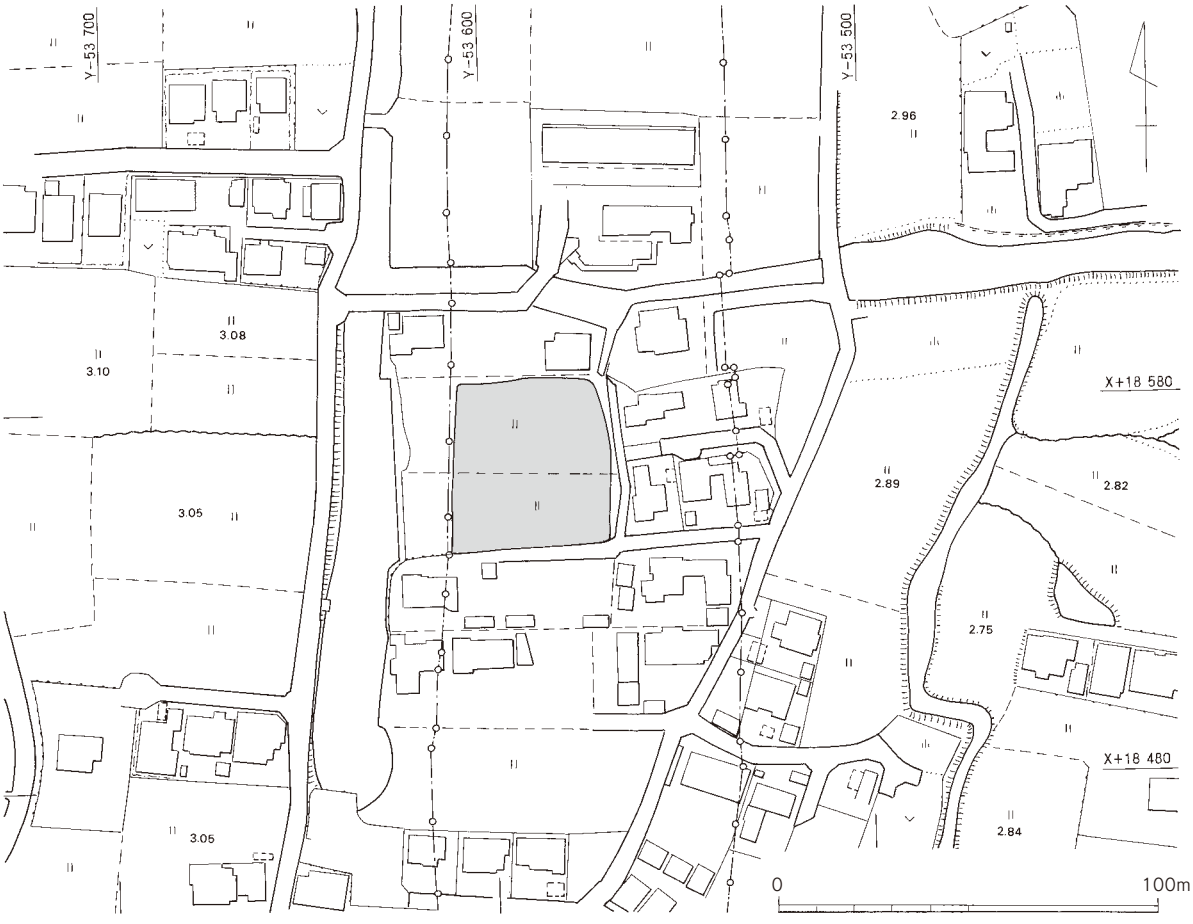
蒲船津水町遺跡は、柳川市三橋町大字蒲船津534-1、534-2、534-11～14に所在し、柳川市街地の東部に位置し、西鉄柳川駅の北東約500mにあたる。付近は沖端川の左岸の沖積地であるが、標高３m程度の低湿地、いわゆる「クリーク地帯」であり、現在でも多くの水路が縦横にはしる。地形の起伏はほとんど見られない。

発掘調査は、平成18年３月22、23日と19年５月10、11日に行った試掘調査の結果に基づいて、約1,800㎡の範囲に調査区を設定して実施した。平成19年５月11日から重機による表土除去作業を開始し、５月28日からは作業員による人力での作業に移行して、８月10日に東亜航空技研(株)による空中写真撮影、８月21日には現地での調査をすべて終了した。その後、重機による埋め戻し作業を行った。

1．遺構と遺物

調査地点周辺は、現在まで水田として利用されてきており、標高は極めて低い。周囲は現在ではコンクリート擁壁で囲まれてかつての姿は留めていないもののクリークが縦横に張り巡らされている。

調査の結果、遺構面は現在の地表面からわずかに10～20㎝程度の深さで検出し、標高2.6～



第152図　蒲船津水町遺跡周辺地形図(1/2,000)

2.8mの範囲である。

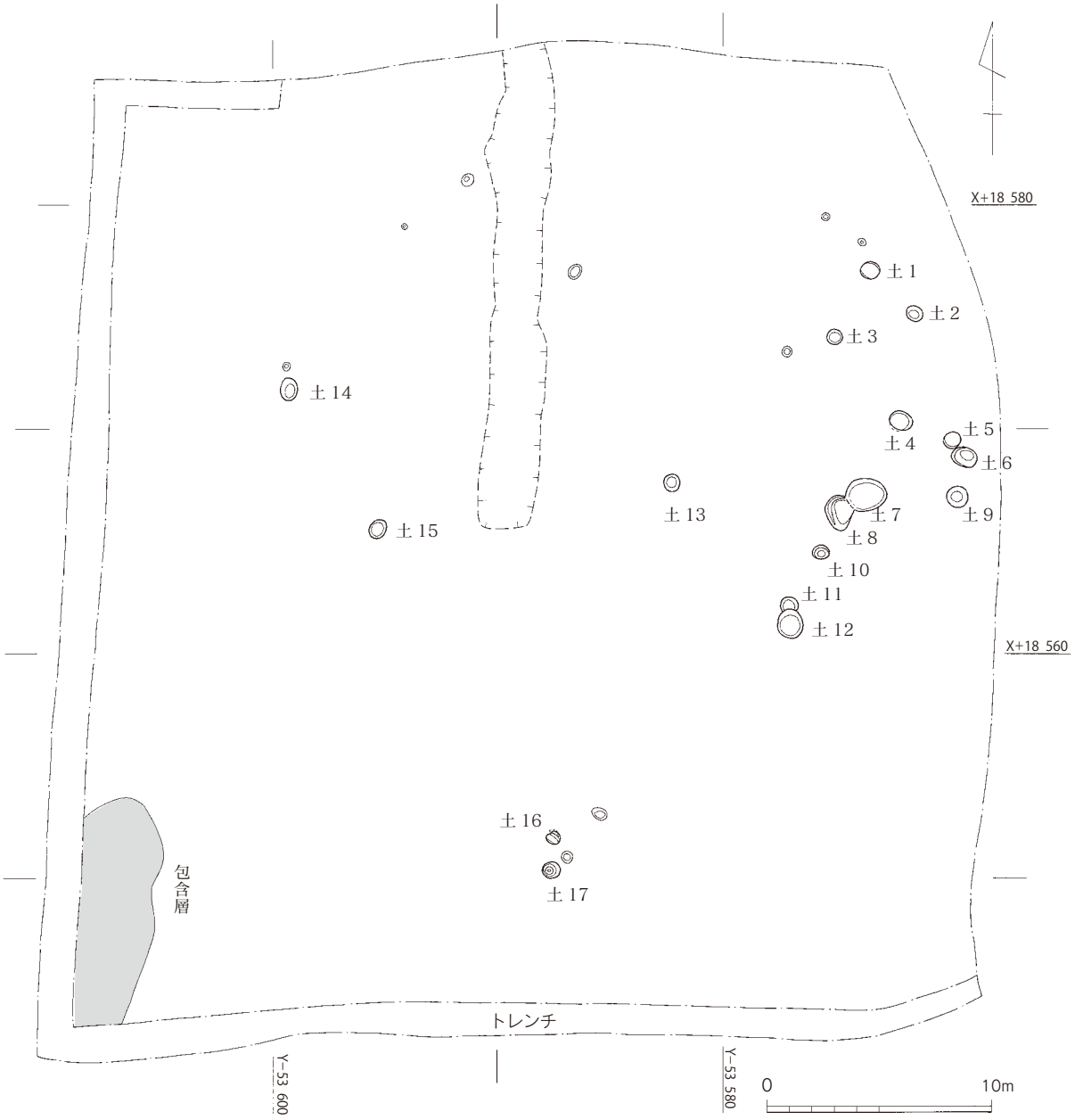
主な遺構は、井戸状の土坑17基と、調査区南西隅部で遺物包含層を検出した。

（1）土坑

今回の調査では17基の土坑を検出した。ほとんどの土坑が平面円形または楕円形で、深いものが多いのが特徴で、一見素掘りの井戸のようである。しかしながら、土坑は地山の黄灰色粘土層と下層の灰色粘土層までを掘り込んでいるに過ぎず、湧水層には到達していないため、井戸とは考えにくい。

1号土坑（図版32、第154図）

調査区北東隅に位置する。平面形は上縁部径80㎝の円形で、底面はレンズ状に中央部が深く



第153図　蒲船津水町遺跡遺構配置図（1/300）

て40㎝程。埋土は３層に分かれて同様にレンズ状に堆積しており、上層は黒灰色粘土・灰色粘土のブロックを含んだ黒色粘質土、中層は灰色粘土と暗灰色粘土の混合土、下層は暗灰色粘土と黒色粘質土の混合土である。

出土遺物（第155図１）

土師器甕。口縁部内面は横方向のハケメ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はヘラケズリ調整。

２号土坑（図版32、第154図）

調査区の北東隅部に位置する。平面形は75×65㎝の若干歪んだ楕円形で、深さ155㎝。底面は45×40㎝の同じく楕円形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物（図版40、第156図２～５）

５は須恵器皿で、約半分を欠失するが、復元径17.4㎝、器高1.7㎝。焼成は軟質である。底部外面中央部には墨書があり、「衆ヵ」。２～４は土師器甕。２は口縁部が強く外反する。胴部内面は横方のヘラ削り調整。３・４は「く」字に近く外反して端部が薄く比較的シャープな口縁部を持つ。胴部外面は縦方向のハケメ、４は内面が横方向のハケメ調整。いずれも破片であるが、復元可能な４では口径26.0㎝、胴部最大径23.1㎝。

３号土坑（図版32、第154図）

調査区北東部に位置する。径65㎝の平面円形で、深さ90㎝。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

出土遺物（図版40、第155図６～13）

６は須恵器皿で、器高1.9㎝。７は須恵器甕で、復元口径18.2㎝。内外面ヨコナデ調整であるが、頸部内面にはケズリの痕跡が残る。８～10は土師器坏。８は体部と底部の境に明瞭な稜を持ち、９はやや不明瞭、10は不明瞭で底部にヘラ切り痕が残り不安定である。９の復元口径は12.4㎝、器高3.1㎝。11･12は皿で、11は復元口径12.4㎝、器高1.6㎝、12は復元口径11.6㎝、器高2.0㎝。13は甕で、「く」字形に開く口縁部を持つ。

４号土坑（図版33、第154図）

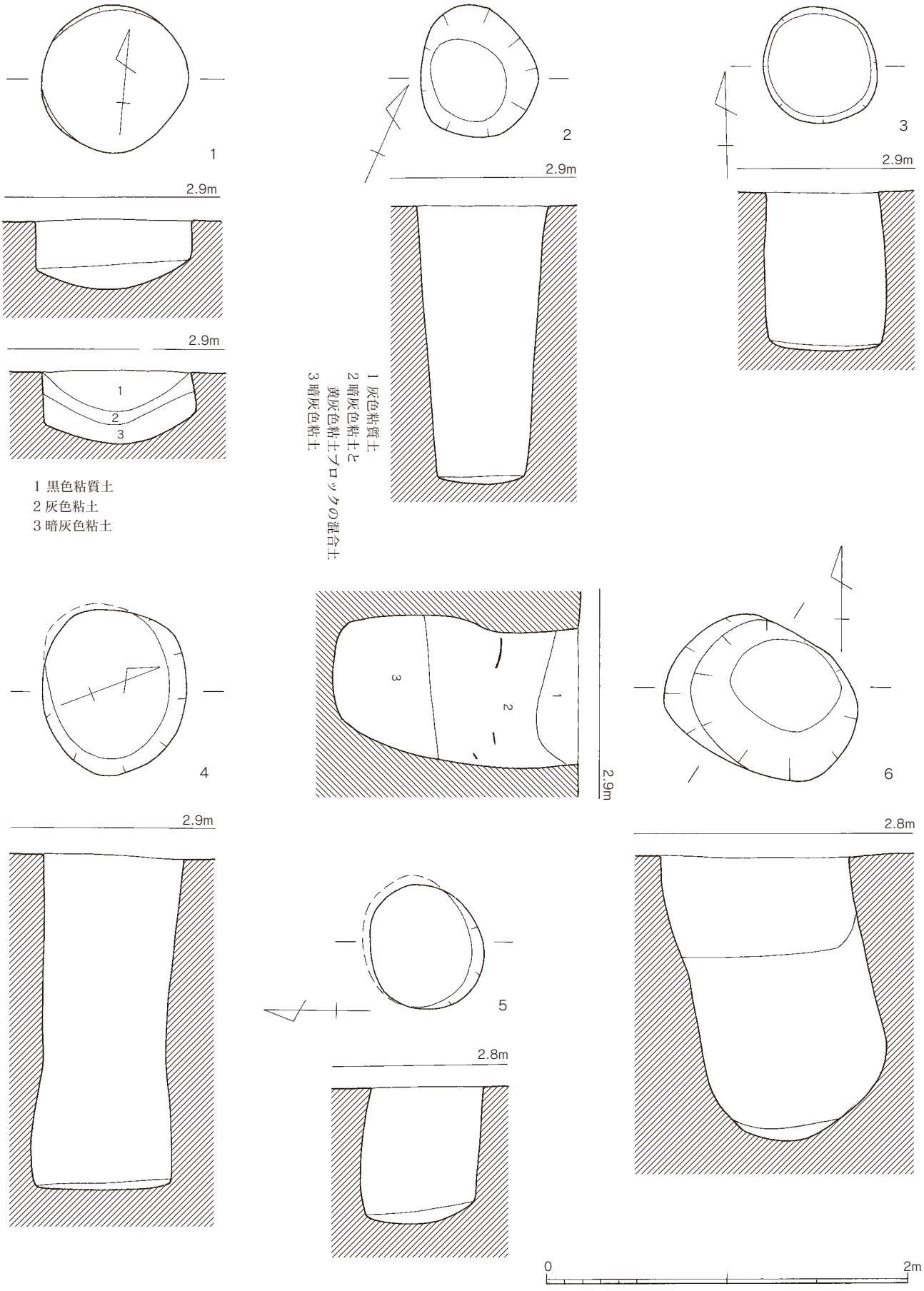
調査区東部に位置する。上縁部で95×80㎝、底面では90×65㎝の楕円形で、深さ185㎝。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、底から75㎝程の部分でわずかに段を持って細くなる。

出土遺物（図版40、第155図14～17）

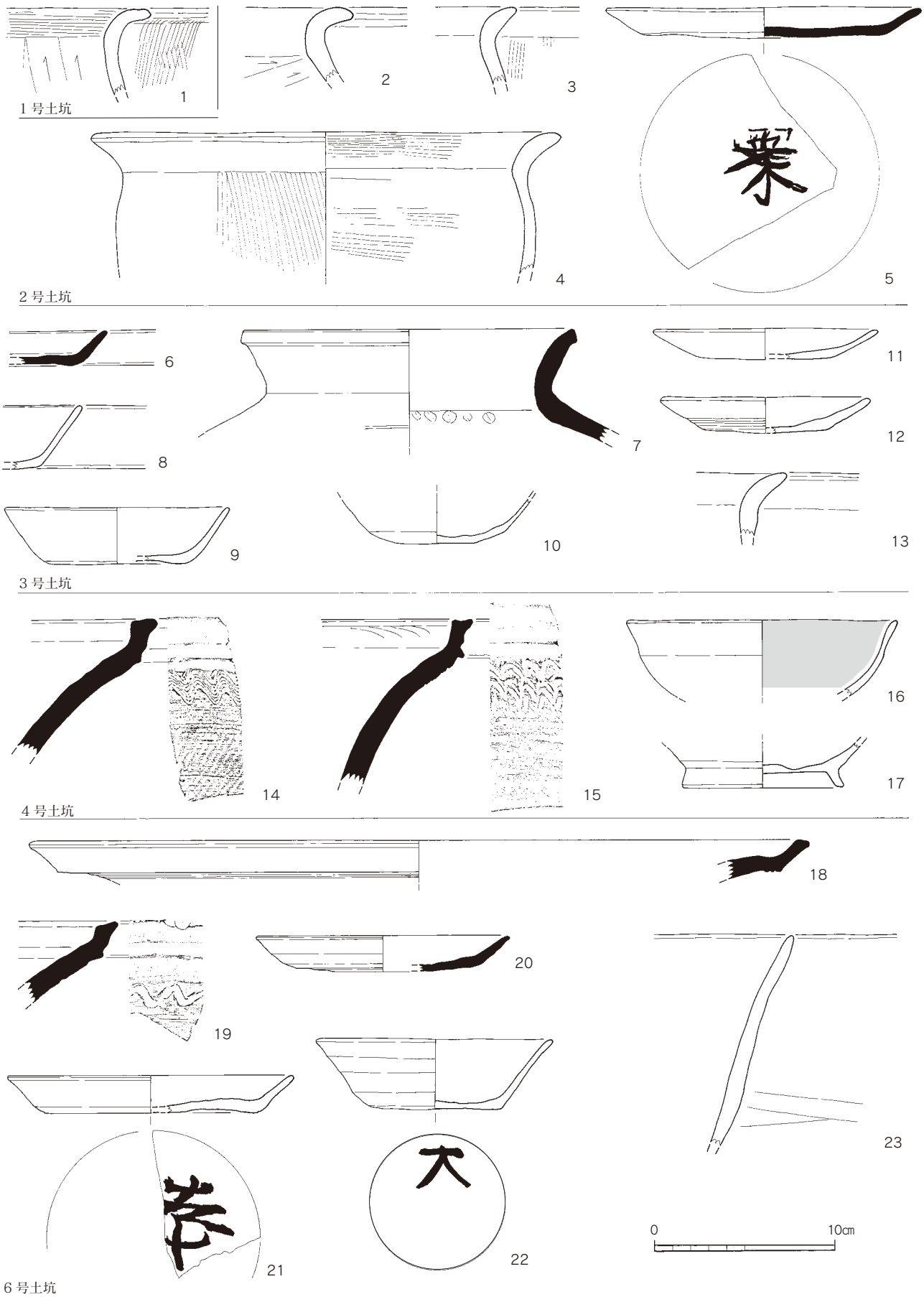
14・15は須恵器甕で、ほぼ同形のもの。頸部は外反して開き、口縁部は屈曲して上方に立ち上がり上端部は平らになる。口縁部と頸部の境の屈曲部には三角突帯をつくり出し、その下には14は単位７条の、15は単位２条２段の波状文を施文する。16は黒色土器椀で、内面のみを燻している。体部は丸く、口縁部をわずかに外反させる。復元口径15.0㎝。17は瓦器椀であろうが焼成が堅緻で須恵質である。高台は高く「ハ」字に開く。内外面ヨコナデ後に内底部はナデ調整を行うが粗い。

５号土坑（図版33、第154図）

調査区東部隅に位置する。70×65㎝の平面楕円形で、深さは75㎝。底はほぼ平らだが、中央部が若干深くなる。出土遺物はない。



第154図　1～6号土坑実測図(1/30)



第155図　1～4・6号土坑出土遺物実測図(1/3)

６号土坑（図版33・34、第154図）

調査区東部隅に位置し、５号土坑と近接する。平面形は105×80㎝の楕円形で、深さ155㎝。断面形はやや歪んだ袋状で、底も不整形である。埋土は上層から灰色粘質土、暗灰色粘土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰色粘土である。

出土遺物(図版40、第155図18～23)

18・19は須恵器甕。18は復元すると口径43.2㎝の大形のもので、頸部が大きく広がり、鋭利な稜を作って口縁部が立ち上がる。外面はカキメ調整で口縁部はその後ヨコナデ調整。19は口縁部と頸部の境を三角突帯状につくり出して屈曲する。頸部外面には１条の波状文を施文する。20は皿で、底部にやや丸みを持つ。復元口径14.0㎝、器高2.0㎝。21は土師器皿で、復元口径15.9㎝、器高2.0㎝。底部外面には墨書があり、「幸」と読める。22は坏で、口径13.1㎝、器高3.9㎝。底部外面に墨書があり、「大」であろう。23は鉢と考えられ、外面下位は回転ヘラケズリ調整を行っている。

７号土坑（図版34、第156図）

調査区東部に位置し、８号土坑の一部を切る。平面形は長軸長180㎝、短軸長140㎝の楕円形で、深さ45㎝。埋土は上層から黒色シルト質土、黒色土ブロックを含む黄灰色粘土、黒色土、黄灰色粘土ブロックを含む暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物(図版40、第157図１～４)

１は土師器椀。体部は底部との境に丸みを持ち、高台は低く畳付部が細く三角形状になる。２は坏で、底部と体部の境が明瞭である。３・４は瓦器椀で、高台は三角形で外に開く。

８号土坑（図版35、第156図）

調査区東部に位置し、遺構の北東部を７号土坑によって切られる。平面形は現状で155×115㎝程度の楕円形であるが、遺構の北西から西側の上面から約10㎝の部分には崩落の痕跡があることから、本来の規模は145×85㎝程度の楕円形で、深さは115㎝が残存する。また、底面はほぼ水平で、壁面との境には明確な角を持っており、今回調査した他の土坑と比較して整然とした印象を受ける。

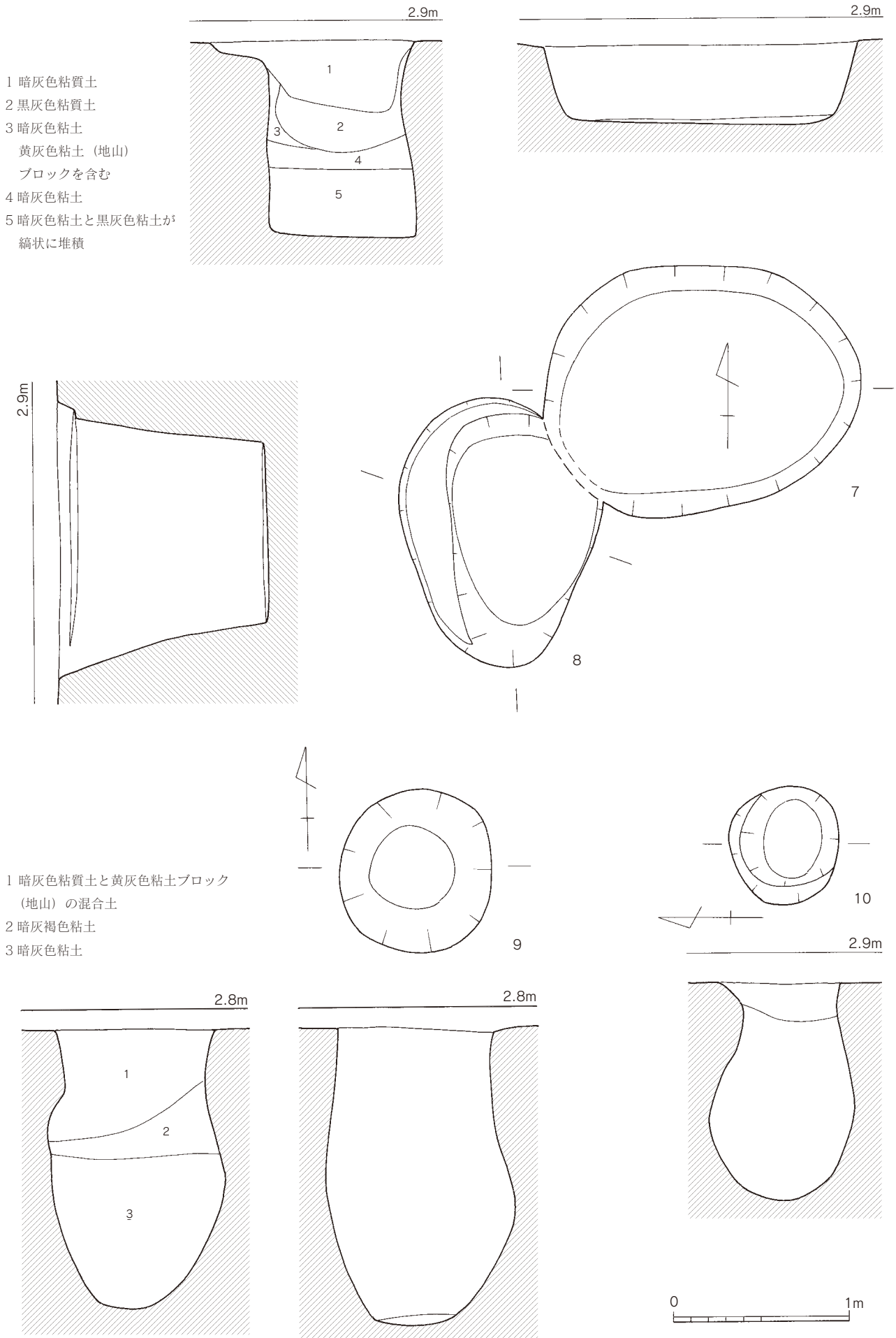
出土遺物(図版40、第157図５～12)

５は須恵器甕で、頸部は短く開き、口縁部の下が三角突帯状に張り出す。口径18.0㎝。６は土師器椀で、体部は直線的に開くが下位で若干屈曲する。高台は端部が丸く外に開く。復元口径16.0㎝、器高6.0㎝。７～10は坏で口径12.0～13.7㎝。体部が比較的直線的に開くもの(7･8･10)と、彎曲するもの(９)がある。７は口縁部が３箇所欠けているが完形に近い。８の底部外面には墨書があり、「春ヵ」。11は皿で、復元口径15.0㎝。体部外面に不明瞭ながら暗文状の工具痕が観察できる。12は甕で、復元口径・胴部最大径ともに29.0㎝。

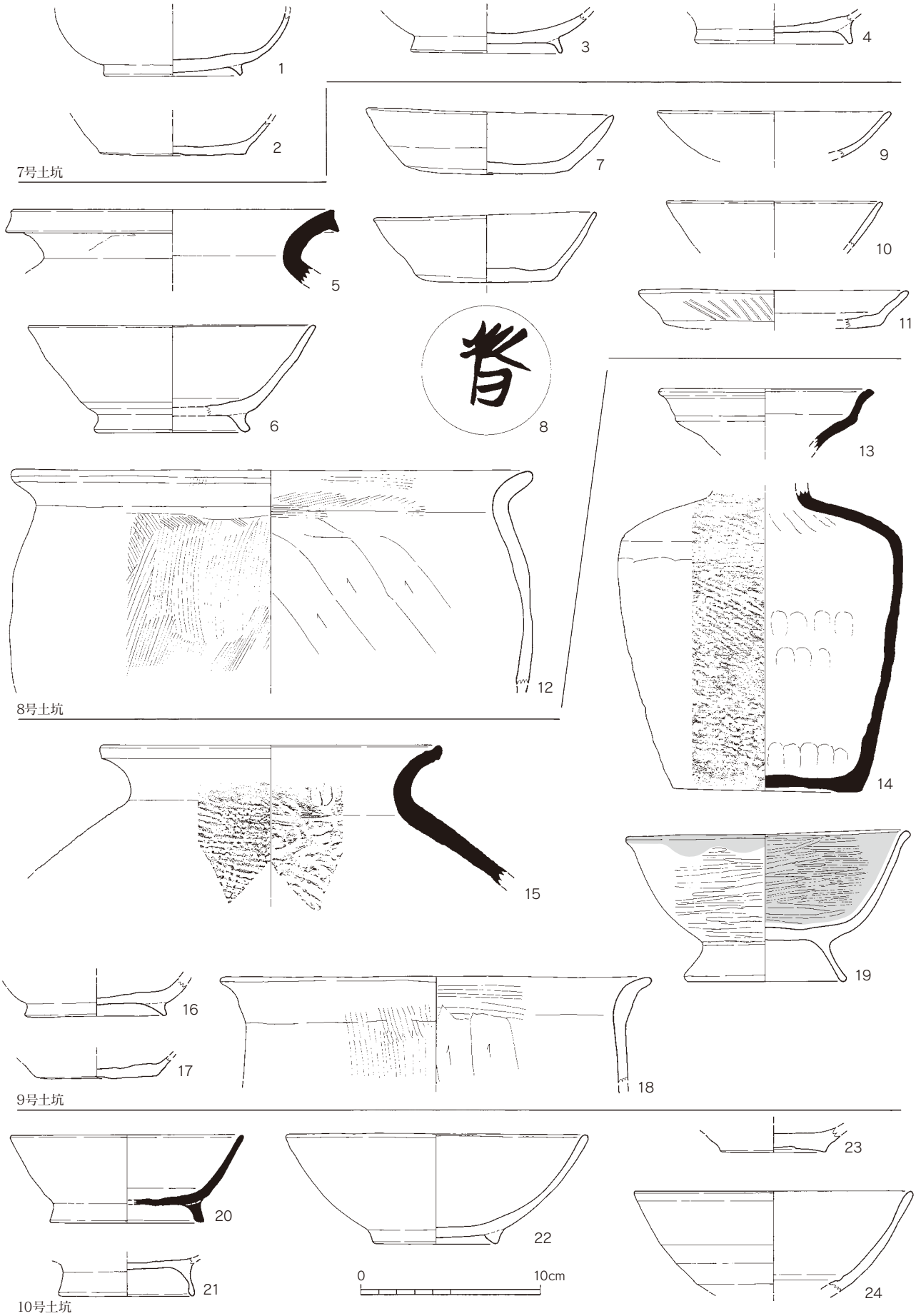
９号土坑（図版35・36、第156図）

調査区東隅部に位置する。平面形は95×85㎝程のほぼ円形で、深さ165㎝。断面形は中位で一旦105㎝程度まで広がり、底ですぼまるが平坦面をもたない袋状を呈する。埋土は上層から暗灰色粘質土と黄灰色粘土ブロックの混合土、暗灰褐色粘土、暗灰色粘土の順で堆積していた。

出土遺物(図版40、第156図13～19)



第156図　7～10号土坑実測図(1/30)



第157図　7～10号土坑出土遺物実測図(1/3)

13・14は須恵器壺で、同一個体の可能性が高い。口縁部は頸部との境で屈曲して外反する。体部は肩の強く張った器形で、外面にタタキ痕が残る。復元口径12.0㎝、最大径15.8㎝。15は甕で、口頸部は短く外反する。復元口径19.0㎝。16は土師器椀で、畳付部が細くなる。17は坏か。わずかに残存している体部は薄い。18は甕で、口縁端部は細くシャープである。復元口径24.0㎝。19は黒色土器椀で、口縁部の一部を欠くがほぼ完形。口縁部は短く外反し、高台は高く大きく開く。内面のみを燻し、ミガキも内面は丁寧であるが、外面は比較的粗く体部下位にはヘラケズリ痕が残る。口径15.8㎝、高台径9.0㎝、器高8.5㎝。

10号土坑（図版36、第156図）

調査区東部の７・８号土坑と11・12号土坑の中間に位置する。上縁部での平面形は65×60㎝の円形であるが、遺構の南から西にかけての部分に崩落の痕跡があるため、本来は径約55㎝程度の円形であろう。深さ125㎝で、断面形は９号土坑と同様に袋状で、中位で80㎝程に広がり底に平坦面をもたない。

出土遺物（図版40・41、第157図20～24）

20は須恵器椀。体部は直線的に広がり、高台は「ハ」字に広がる。復元口径13.0㎝、器高4.9㎝。21は黒色土器椀の底部と考えられ、胎土は精良である。高台は薄く高い。内面は磨滅しているが燻した痕跡が残る。22は瓦器椀で、体部は丸みを持ち、高台は断面三角形。復元口径16.8㎝、器高6.1㎝。23は越州窯系青磁椀の底部で、蛇ノ目高台である。復元底径5.9㎝。24は白磁椀で、体部下位に丸みを持ち上位は直線的に開き、また見込みに沈線をもつ。復元口径15.6㎝。

11号土坑（図版36、第158図）

調査区東部に位置し、遺構の南側1/3程を12号土坑によって切られる。上縁部で径80㎝程度の円形で、深さ140㎝。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、上面から20㎝程の部分で段をもって下位が狭くなっているのは上部の崩れによるものか。

出土遺物（図版41、第159図１・２）

１は須恵器鉄鉢形土器。口縁端部は上方に摘み上げ、最大径は口縁部直下にある。復元口径16.6㎝、体部最大径18.8㎝。２は黒色土器皿であろうか。完形で、体部は丸みをもって広がる。口径16.1㎝、器高3.0㎝。内外全面黒色を呈し、底部外面はヘラケズリ調整、それ以外の内外面は丁寧なヘラミガキ調整である。ヘラミガキ部分には通有の黒色土器には見られない光沢があり、漆等を塗布したものと考えられる。

12号土坑（図版37、第158図）

調査区東部に位置し、11号土坑を切る。平面形は130×110㎝程度の楕円形で、深さ185㎝。壁面は底からほぼ垂直に立ち上がり、中位で段をもって上方が若干広がる。崩落によるものか。埋土は上層から暗灰褐色粘質土、暗灰色粘土と黒色粘土の混合土、暗灰色粘土の順で堆積している。

出土遺物（図版41、第159図３～11）

３は須恵器坏か。体部は直線的に広がり、焼成はやや軟質。復元口径13.0㎝。４・５は土師器坏で、４は体部に丸みがあり、５は直線的である。６・７は皿で、体部はほぼ直線的に広がる。６は底部外面に板状圧痕が残り、復元口径15.6㎝、器高2.4㎝。８・９は黒色土器椀で、２点とも

内面のみを燻す。８は比較的小形品で、体部下位で内彎して立ち上がり、９は高台が「ハ」字に開く。10・11は甕の口縁部破片で、内面は口縁部にまで横方向のハケ目調整を行う。

13号土坑（図版37、第158図）

調査区中央東寄りに位置する。75×65㎝の円形に近い楕円形で、深さ55㎝。埋土は２層に分かれ、上層から黒色粘質土、黒灰色粘質土と黄灰色粘土の混合土の順になっている。

出土遺物(図版41、第159図12・13)

12は瓦器椀で、高台は逆台形状を呈する。13は白磁椀で、器壁は薄く、口縁部がわずかに屈曲して開く。復元口径15.4㎝。

14号土坑（図版38、第158図）

調査区北西に位置する。平面形は90×75㎝程度の楕円形で、底では60×35㎝程に狭くなり、深さは165㎝。埋土は上部の一部が黒色粘質土と黒灰色粘質土の混合土である以外は、灰色粘土ブロックを若干含む黒灰色粘土である。

出土遺物(図版41、第159図14・15)

14は滑石製石鍋。口縁部は内傾し､横長の方形把手をもつ。内面には楔形に工具痕が多く残る。外面には煤が付着しており、使用の痕跡が認められる。15は土錘で、上下端部の1/5程を欠く。長さ4.6㎝、最大径2.3㎝、重さは現状で18g。

15号土坑（図版38、第158図）

調査区中央西寄りに位置する。平面形は85×70㎝程度のやや歪んだ楕円形であるが、断面形は深さ105㎝で、底が水平で壁が垂直な整然とした形態をしている。埋土は４層に分かれてレンズ状に堆積しており、上層から黒灰色粘質土、黒色粘質土ブロックと灰色粘質土ブロックを含む暗灰色粘質土、黒色粘質土、灰色粘土と黒色粘質土の混合土の順になっている。

出土遺物(図版41、第159図16・17)

16は土師器椀で、体部から口縁部の半分程を欠失する。胎土は精良で、体部は下位で内彎し、口縁部は外反する。復元口径12.2㎝、器高4.7㎝。また、体部中央には縦2.0㎝程度、横2.5㎝の穿孔が認められる(図版41-17)。周囲の摩耗の状況から古く開いたものと考えられるが、意図的なものか不明なため図示はしていない。17は完形の土錘で、長さ3.6㎝、最大径1.5㎝、重さ６g。

16号土坑（図版39、第158図）

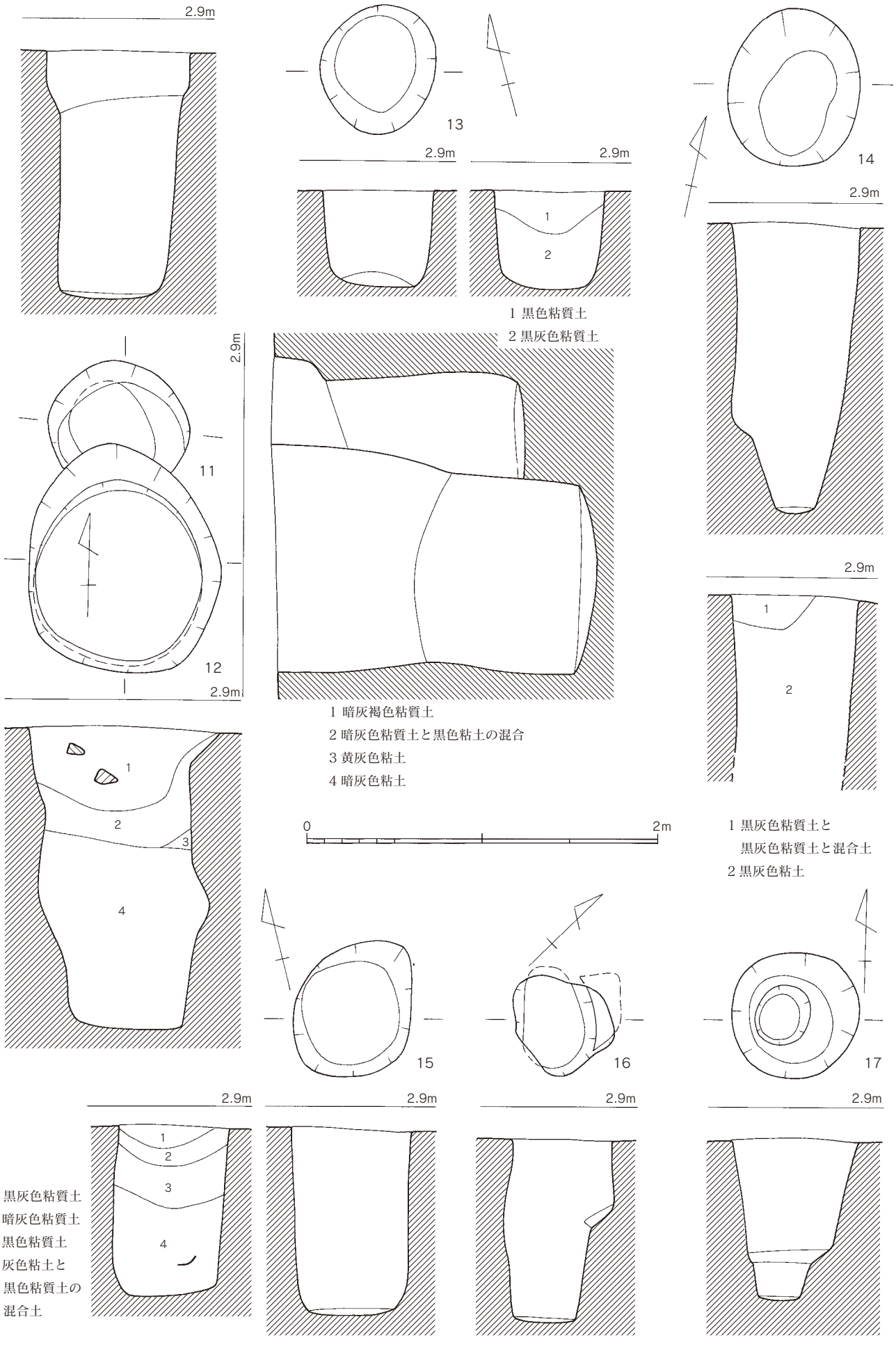
調査区南部に位置する。平面形は現状では60×55㎝の不正形であるが、土坑の北東側の上半部には崩れた痕跡があるため、本来は60×45㎝程度の楕円形であると考えられる。底は平坦で60×35㎝の同じく楕円形で壁は垂直に近く立ち上がる。

17号土坑（図版39、第158図）

調査区南部に位置し、16号土坑とは近接する。平面形は径70～75㎝の円形で、底をさらに35×30㎝の楕円形に掘り込む二段掘り状の形状を呈する。深さ90㎝で壁は斜めに立ち上がる。

出土遺物(図版41、第159図18)

土師器椀で、体部は丸みをもち、高台は高い。器面は風化しているが、内面にはヘラミガキの



第158図　11～17号土坑実測図(1/30)

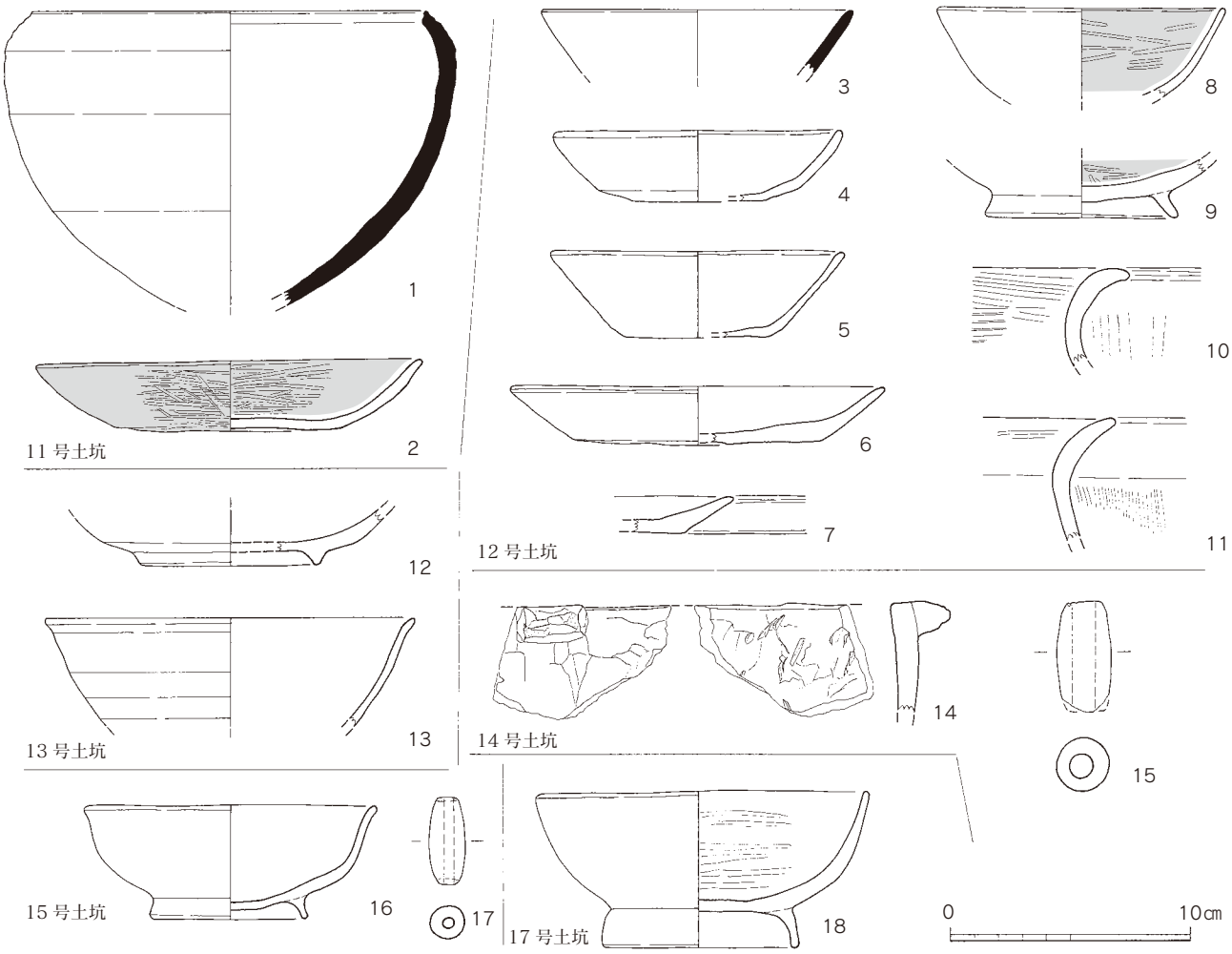
痕跡がわずかに残る。口径13.9㎝、器高6.5㎝。

（2）遺物包含層

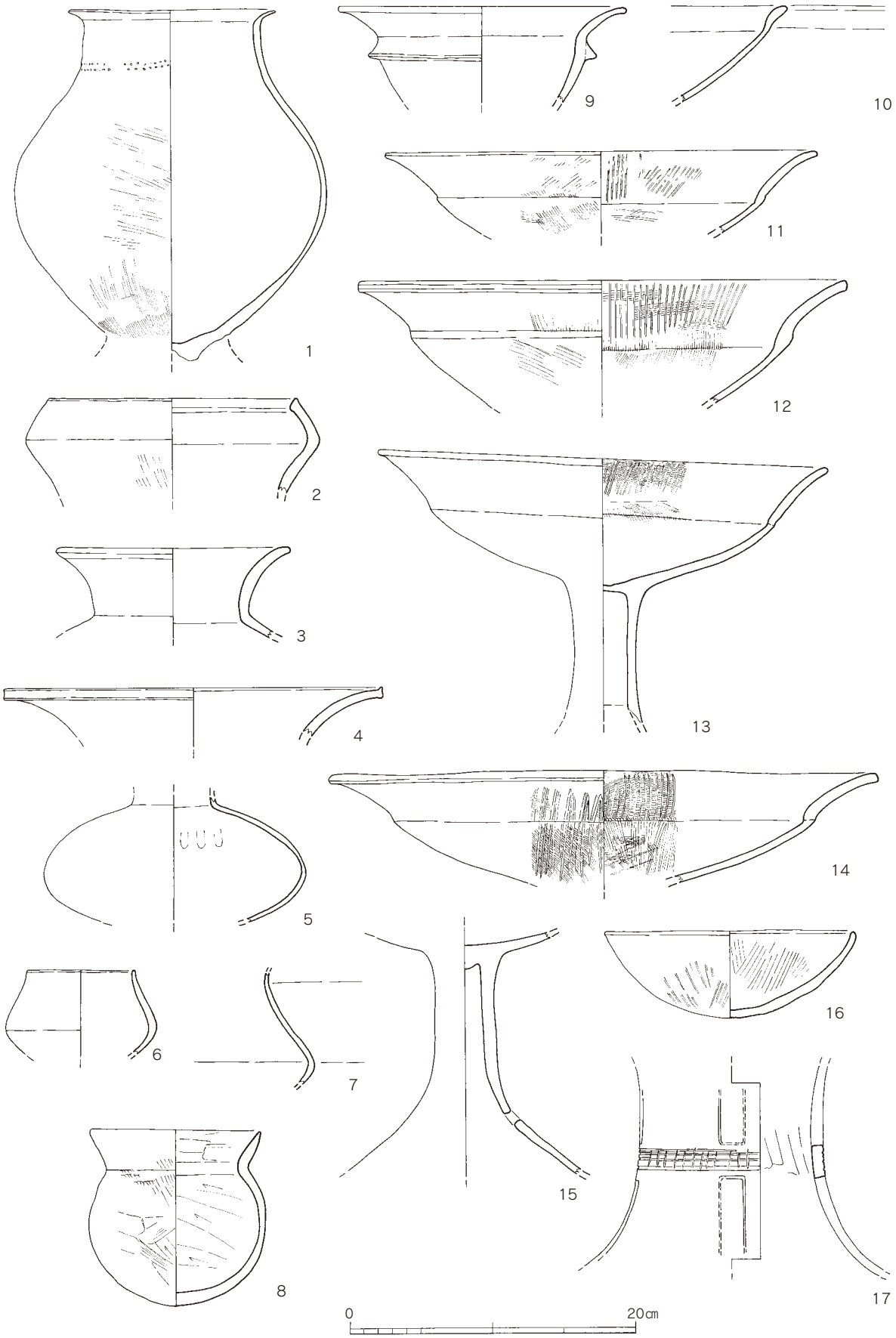
本遺跡は遺構面がきわめて低く、西側に近接するクリークの水位とほとんど差がないことから、雨季とも重なり調査期間中水には終始悩まされた。このため調査区の南側から西側の外周に沿って幅1.5m程の排水溝を手作業で掘削した。作業の途中、調査区の南西隅部から弥生時代後期の土器がまとまって出土したため、この周囲を精査したところ、10×3.5mの範囲で不正形の浅い落ち状の部分を検出し、弥生土器・土師器が出土した。この部分はさらに南西側の調査区外に延びるものと考えられるが、深さは10～15㎝程度とごく浅く、またその埋土は周囲の遺構面の地山である灰色粘土に対して区別の付きにくい黄灰色粘土で判然としない部分もあった。遺構とするのはもちろん、地形の落ちとするのも躊躇されるため、ここでは遺物包含層として報告する。

出土遺物(図版41、第160図)

１～７は弥生土器壺。１は中位に最大径がある球形の体部をもち、また体部と頸部の境は不明瞭でなだらかにすぼまるが、この位置に上下二段の列点文を施文する。口縁部は器壁がごく薄く、屈曲して短く開く。底部には剥離の痕跡が残り、この部分に裾広がりの脚部が付くものと考えられる。口径14.4㎝、体部最大径21.6㎝。２は外面に稜をもつ袋状口縁部分。３は口頸部が外反



第159図　11～15・17号土坑出土遺物実測図(1/3)



第160図　包含層出土土器実測図(1/4)

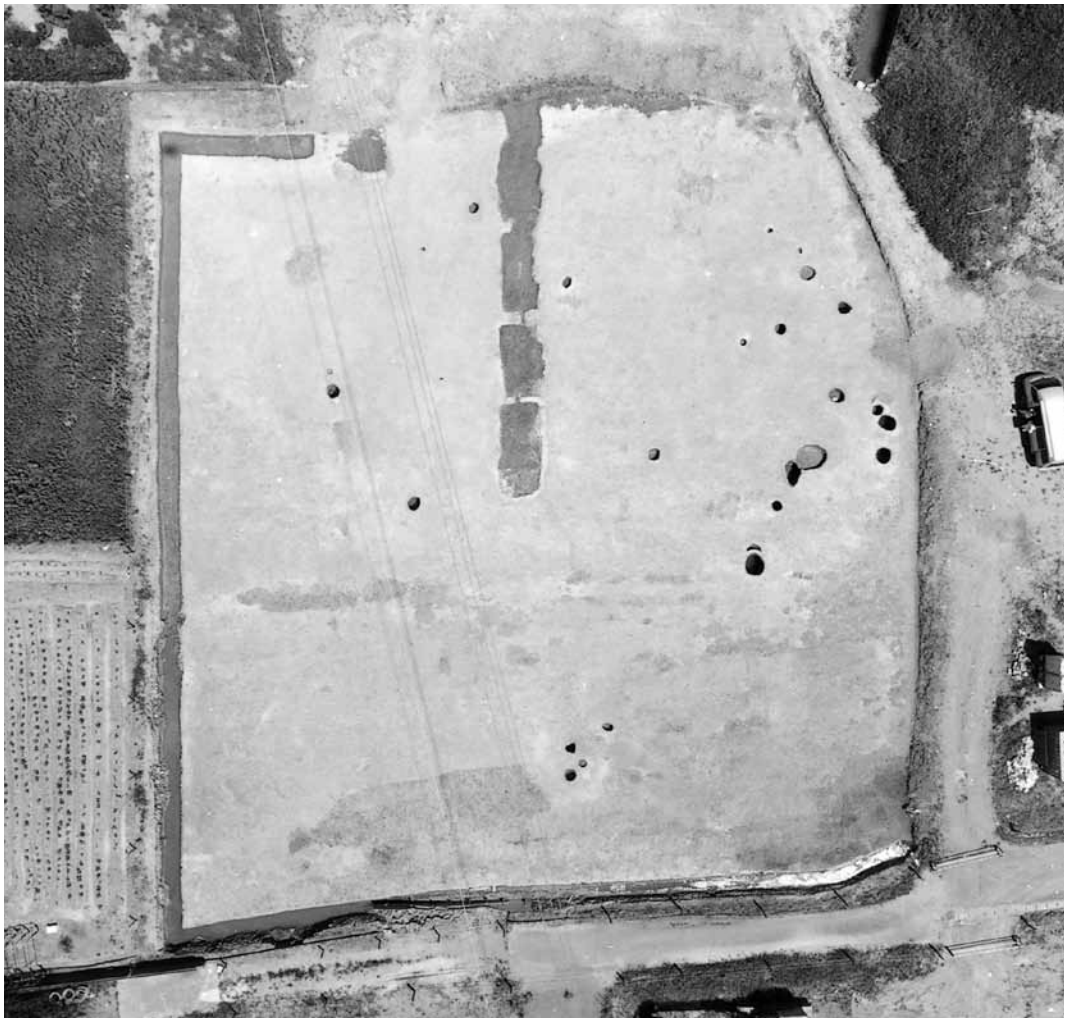
して開く広口壺で、口径16.4㎝。４は口頸部が大きく開き、口縁端部を上方に摘み上げる。復元口径26.3㎝。５は長頸壺の体部で扁球形である。器壁は薄く胎土は精良。復元最大径18.2㎝。６・7は小型の短頸壺で、体部最大径が下位にあり、この部分で屈曲して直線的にすぼまる。口縁部は６はわずかに上方に伸び上がり、７は短く外反する。ともに胎土は精良。８は土師器の小型丸底壺で、口縁部の一部を欠く以外はほぼ完形。球形の体部に直線的に広がる口縁部が付く。器面は全体的に風化による剥落が多いが、体部外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整。口径11.8㎝、体部最大径12.3㎝、器高12.3㎝。９～15は弥生土器高坏。９は外反する口縁部に半球形の坏部をもち､外面に１条の三角突帯が付く。復元口径20.0㎝。10は口縁部内面を肥厚させる。11～14は坏部中位で屈曲して、口縁部は外反して開く。全体的に器面は風化しているが、ハケメ調整の後放射状に暗文様のミガキ調整を行う。復元口径30.0～38.2㎝。15は脚部で、１箇所に穿孔が認められる。16は鉢で、素口縁の半球形を呈する。器面は不明瞭ながら、内外面ともハケメ調整と考えられるが､外面は砂粒が動くほど強く工具を当てている。口径17.3㎝､器高6.0㎝。17は器台で、上下２段の方形透かし孔が確認でき、その間には３～４条の沈線を廻らせ縦位のキザミを入れることによって格子目文をつくりだす。

小結

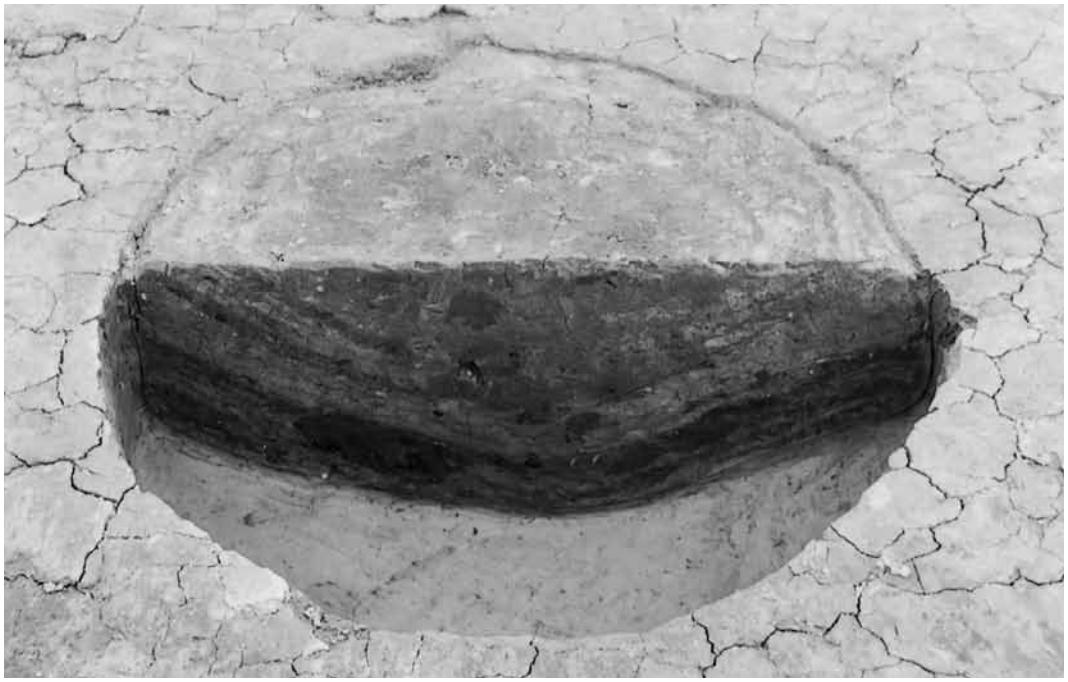
今回の調査で検出した主な遺構は、土坑17基である。出土した遺物は９世紀から12世紀頃のもので、ほぼ平安時代を通して掘削されたことを示している。土坑の平面形は円形あるいは楕円形で、深いものが多く、一見すると素掘りの井戸のようでもある。しかしながら、いずれの土坑も粘土層を掘り込んでいるに過ぎず、湧水層にまでは到達していない。したがって井戸とするのは困難と考えるが、土坑の周囲にはこれと関連する遺構も認められず、用途等は不明と言わざるを得ない。

出土遺物の中には墨書土器や、漆を塗布したと考えられる土器、輸入陶磁器などが含まれており、ここが重要な地点であることは間違いないものと考えられる。とはいえ、遺構の性格が不明である以上、今回の調査区だけで遺跡の性格を判断することは困難であろう。

1．蒲船津水町遺跡全景
（北上空から）



2．同上全景（上空から）



1．1号土坑（南から）

2．2号土坑（南から）

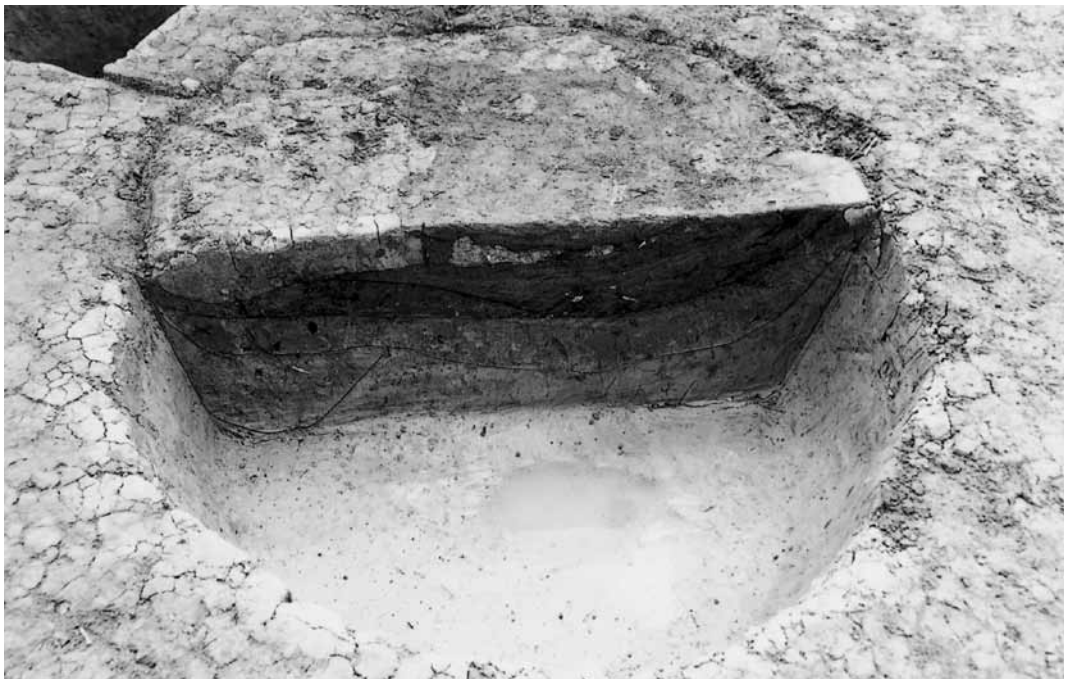
3．3号土坑（南から）

1．4号土坑（北から）

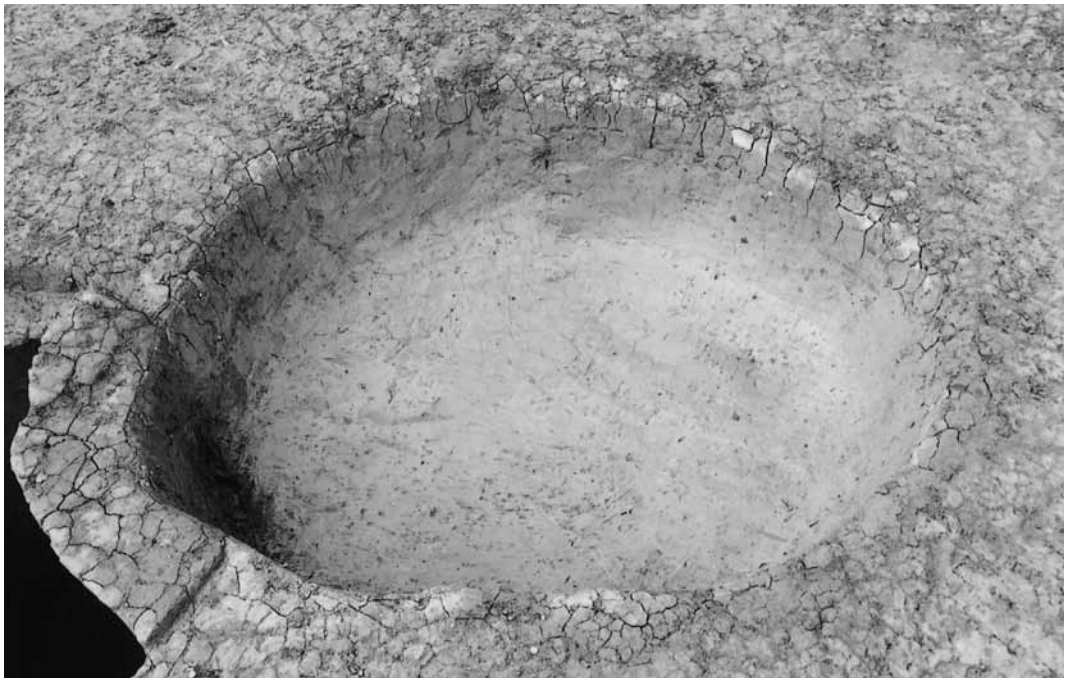
2．5号土坑（西から）

3．6号土坑土層
（北西から）

1．6号土坑（西から）

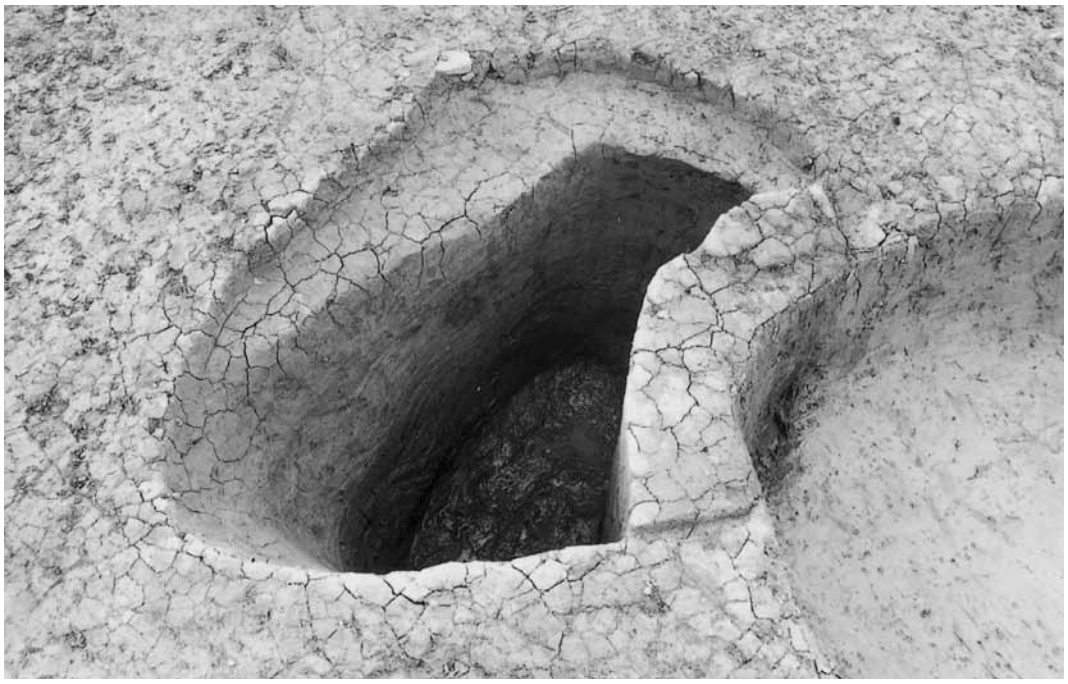


2．7号土坑土層
（東から）



3．7号土坑（南から）

1．8号土坑土層
（南から）



2．8号土坑（東から）

3．9号土坑土層
（南から）

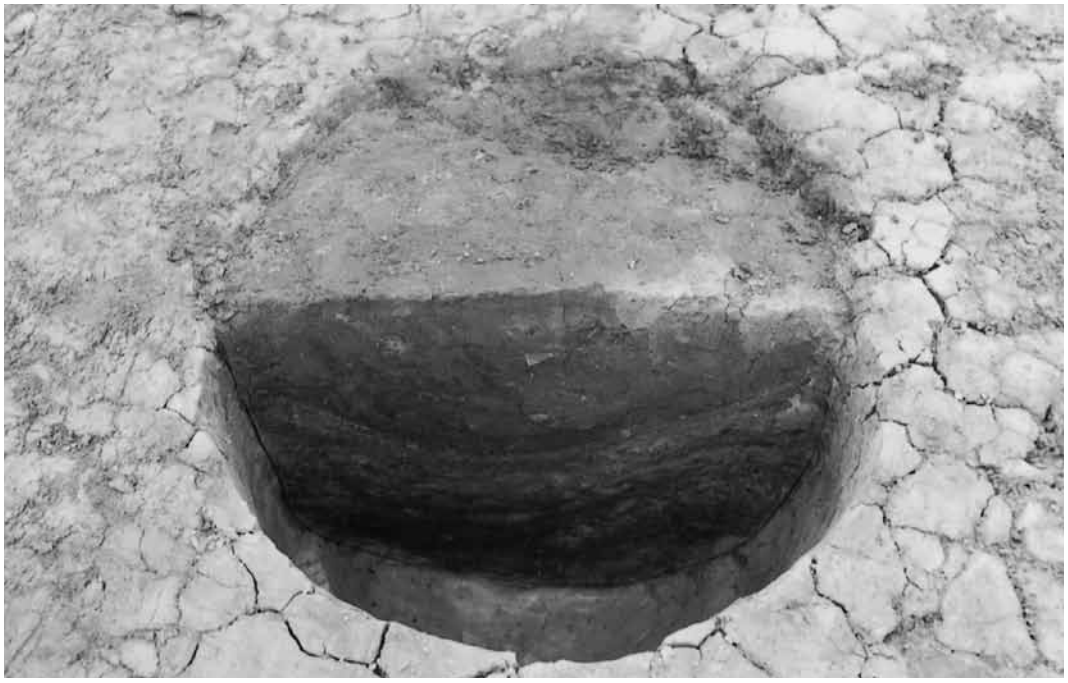
1．9号土坑（東から）

2．10号土坑（東から）

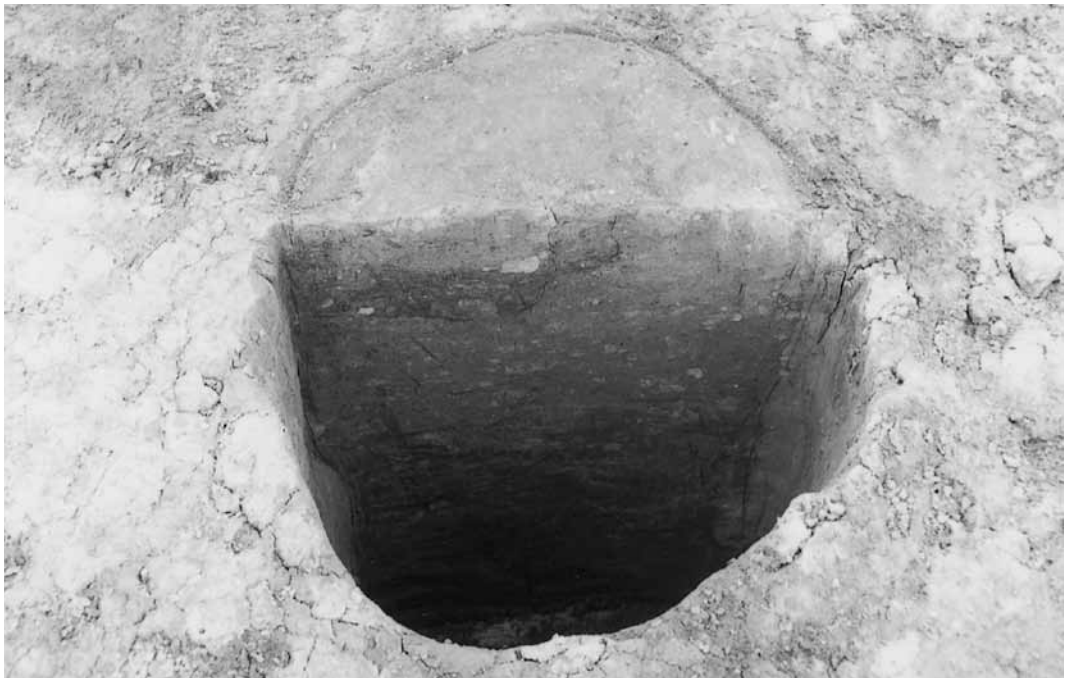
3．11号土坑（南から）

1．12号土坑土層
（南から）

2．12号土坑（東から）

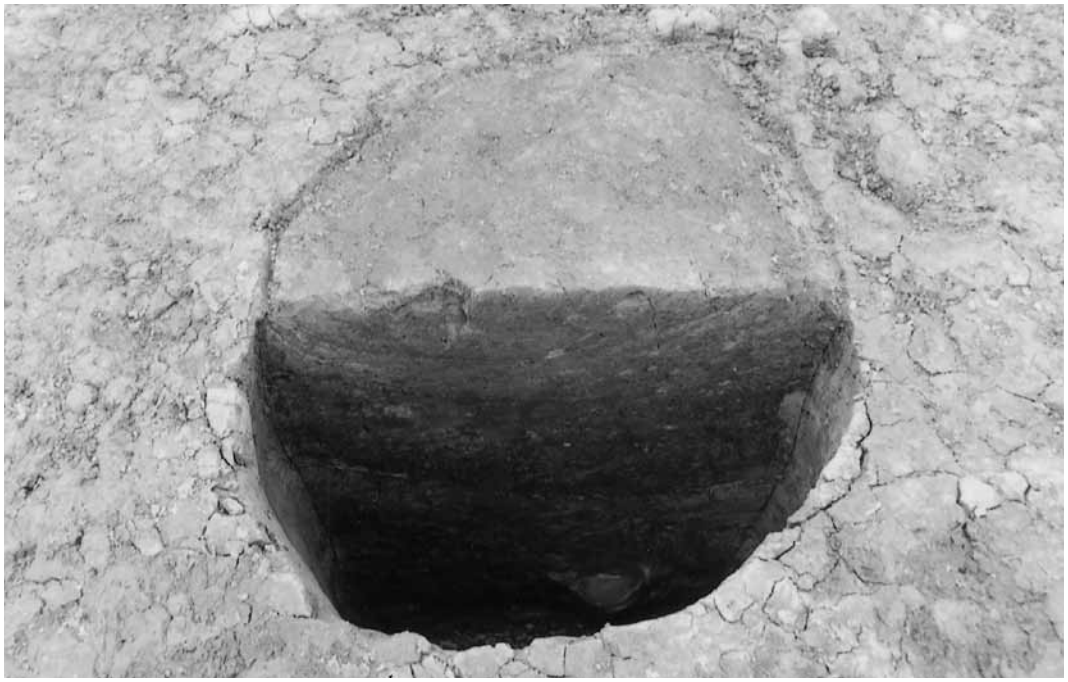


3．13号土坑土層
（南西から）



1．14号土坑土層
（南から）

2．14号土坑（南から）



3．15号土坑土層
（南から）

1．16号土坑（西から）

2．17号土坑（南から）

3．遺物包含層掘削状況
（北から）

155図5

157図7

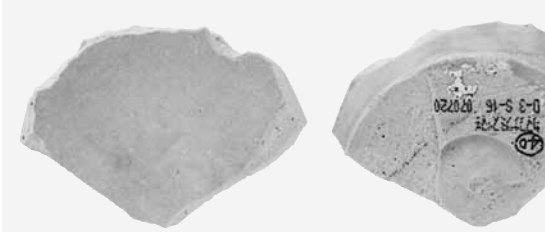
157図8

155図21

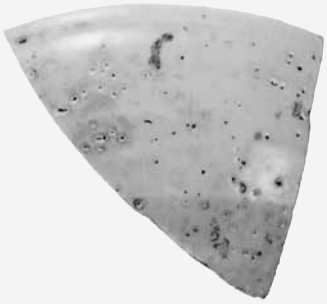
157図14

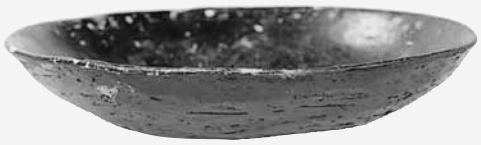
155図22

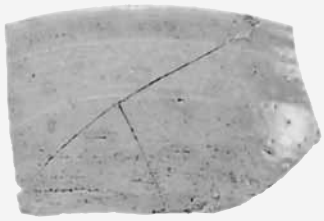
157図19


157図23

出土遺物 1


157図24


159図2


159図13

159図14

159図15

159図16

159図17

159図18

160図1

160図8

160図13

160図16

出土遺物２

報告書抄録

ふりがな	やかべまちやしきいせきよん・かまふなつにしのうちいせき・かまふなつみずまちいせき
書名	矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡
副書名	
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第12集
編著者名	秦　憲二・進村真之・小川泰樹
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　小郡市三沢5208－3
発行年月日	西暦2012年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
矢加部町屋敷 ５・１次調査	福岡県柳川市 大字矢加部字町屋敷	402079	140392	33° 10′ 46″	130° 24′ 47″	2004.6.15 ～ 2004.10.4	1,730㎡	国道バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢加部町屋敷 ５・１次調査	集落	江戸 明治 大正 昭和	土坑・廃棄土坑　39 大土坑　3 溝状遺構・大溝　10 埋甕　8 井戸　1	土師器　ガラス製品　キセル 瓦質土器　銅銭　るつぼ 陶磁器　木製品　土人形 瓦　下駄　鋳型 窯道具　建築材　砥石	木簡 近世・近代の鋳造関係遺物・鋳型

遺跡の概要

本遺跡は江戸時代の町屋跡の端部にあたり、17世紀中葉から現代にいたる遺構・遺物が見られ、連綿と集落が営まれていたことが分かった。町屋の中心部分は今次調査区の東側の久留米柳川街道沿いであり、その通りに面して並ぶ建物群の裏手にあたる。

18世紀中葉から飛躍的に遺物が増加し、多くの土器・陶磁器類が出土したが、なかでも鋳造関係の遺物が注目される。また、近世の筑後地方に見られる土師質の瓦や窯道具も多量に出土している。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
蒲船津西ノ内 遺跡	福岡県柳川市三橋町 蒲船津314－1～４・ ５A番地	402079	780048	33° 9′ 52″	130° 25′ 22″	2006.12.4 ～ 2007.1.31	800㎡	国道バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲船津西ノ内 遺跡	集落	中世	土坑　2 灰だまり状遺構　1	土師器　瓦質土器　土鈴 磁器　銅銭	

遺跡の概要

本遺跡は戦国時代の集落で、建物跡は発見されていないが井戸らしい土坑が検出された。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
蒲船津水町遺跡	福岡県柳川市三橋町 蒲船津534－2番地	402079		33° 10′ 2″	130° 25′ 24″	2007.5.10 ～ 2007.8.29	1,800㎡	国道バイパス

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲船津水町遺跡	集落	古墳 平安	不整形落ち込み　1 井戸状遺構　20	土師器　須恵器　滑石製石鍋 砥石　土錘	墨書土器

遺跡の概要

本遺跡では、古墳時代初頭の不整形な落ち込みと、平安時代の井戸状遺構が約20基あり、その埋土からは墨書土器が出土している。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 217104
登録年度 23	登録番号 0013

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第12集

矢加部町屋敷遺跡Ⅳ・蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡

平成24年(2012年) 3 月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印　刷　株式会社　三光
福岡市博多区山王1丁目14-4